昭和八年三月十五日印刷
昭和八年三月二十日發行

國譯一切經 瑜伽部 八

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番地

印刷者　渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所　大東出版社
東京市芝區芝公園七號地十番
振替東京一一九四七一番
電話芝(三二)二一一六番・三〇四〇番

製本所　兩角製本所

勤の因を斷ずべからず。又佛の法界は無始の時より來、無別無量にして、普く一切の爲に證得の因と作るも、諸の菩薩をして悲願の纒心にて佛果を勤求せしめ、一切の有情の利樂を作さんが爲の故に佛果を求めて勤功用を發さしむ。

論曰　阿毘達磨大乘經の中の攝大乘品を、我れ阿僧伽略釋し究竟す。

釋曰　我れ已に攝大乘を略釋し竟る。復頌を說いて曰く、

我れ無性已に
淨境の理教に於て
諸師に從ひて正しく聞き
專念に現前せんが故に
甚深廣大なる
願はくは一切の世間と(共に)

佛果を求むるの妙願を發し
悲慧を心に積み
如實に深く信解し
已に斯の釋を述造せり。
十義に於て勤めて福を生ず
具相の妙智を得んことを。[一六]

攝大乘論釋　終

【一六】具相とは三十二相を具する者即ち佛の意。

べけんと。咸言く、我等は未だ彼の意を得ず。世尊は涅槃す。誰か能く無倒に我等を開悟せしめんと。是の故に法に於て勤めて覺悟を求む。「自身に於て勤精進を發し、正說する者は得べきこと難きを知らしめんが故に」とは、謂はく世尊は將に般涅槃せんとするを知り、便ち自身に於て勤精進を發し。佛は是れ世間の正しき說法者なり。彼れ若し有ること無ければ、世間に依無しと。是の如く知り已つて勤精進を發す。「諸の有情を極めて速かに成熟せんが爲に、自ら精進して軛を捨てざらしめんが故に」とは、精進を修し、善軛を捨つることを離れんが爲に、乃至世尊の未だ滅度せざる來、我が諸の善根は定んで須らく成熟すべしとなり。是の六因に由りて佛の變化身は畢竟して住するに非ず。是の如く上に說く所の義を攝せんが爲の故に、伽他を說く。「所作に由る等」と。

論曰 諸佛の法身は無始の時より來、無別無量なり。應に得んが爲に更に功用を作すべからず。此の中に頌有り、

佛の得は無別無量にして因なり　有情若し勤功用を捨つれば
證得は恒時に因を成ぜず　是の如きの因を斷ずることは理に應ぜず。

釋曰 此の中に難有り。諸佛の法身は無始の時より來、無別、無量にして證得の因と作らば、佛果を求めんが爲に何ぞ功用を須ひん。復難言有り、諸佛の法身は無始の時より來、無別無量ならば、一佛は卽ち能く一切有情の諸の利樂の事を具足し成辨せん。應に得んが爲に更に功用を作すべからずと。此の難に、答へんが爲に「佛の得等」と說く。諸佛の證得は無始の時より來、無別無量なるも、若し是れ有情は佛果を求めんが爲に正勤の因を捨つれば、是の如き證得は恆に因を成ぜず。佛の證得に由りて諸の有情は佛果を求めんが爲に、正勤の因を捨つるに非らず。故に、此の難無し。若し正勤を離れて佛果を得ば、一切の有情は本より應に皆得べし。是の故に應に正

言ふ。

論曰 六因に由るが故に、諸佛世尊の現ずる所の化身は畢竟して住するに非ず。一には所作究竟し、有情を成熟し已つて解脫するが故に。二には涅槃を樂はざることを捨離せしめんが爲に、如來の常住の身を求めしめんが爲の故に。三には諸佛を輕毀することを捨離せしめんが爲に、甚深なる正法の教を悟らしめんが故に。四には佛に於て深く渇仰を生ぜしめんが爲に、數見る者の厭怠を生ずることを恐るゝが故に。五には自身に於て勤めて精進を發さしめん(が爲に)正說する者は得べきこと難きを知るが故に。六には諸の有情を極めて速かに成熟せんが爲に、自ら精進して軛を捨てざらしむるが故なり。此の中に二頌有り、

所作究竟して　涅槃を樂はざるを捨て
諸佛を輕毀するを離れ　深く渇仰を生じ
内に自ら正勤を發し　極めて速かに成熟せんが爲なるに由り
故に佛の化身を許すも　而も畢竟して住するに非ず。

釋曰 「涅槃を樂はざることを捨離せしめんが爲に、如來の常住の身を求めしめんが爲の故に」とは、此れ如來の涅槃に入る意を顯はす。如來の身は是れ無常なるを以ての故に、應に涅槃を樂ふべし。若し如來の常住の身を求むる時は便ち涅槃に背く。世尊は滅を現じて身の無常なることを顯はすは、畢竟常なる涅槃を樂はしめんが故なり。「諸佛を輕毀するを捨離せしめんが爲に、甚深なる正法の教を悟らしめんが故に」とは、若し諸佛は其の身常住なりと謂はば、便ち甚深の法教を悟解するに於て、方便を勤めずして、謂らく今悟らざるも後に定んで當に悟るべしと。若し數檢問するに諸の弟子衆は便ち輕毀を生じ、自ら已見を執して是の如きの言を作さん、我は此れに由るが故に定んで彼の問を免ると。若し(佛)世に住せざれば彼れ何の處に於てか當に輕毀を生ず、

作す。次に如來は畢竟して涅槃することは道理に應ぜざるを顯はす。謂はく一切の有情を利樂せんが爲に發願修行し、大菩提を證す。此の願此の行は、唯一切の有情を利樂せんと欲するのみ。事猶未だ訖らずして、卽便ち彼の畢竟涅槃に依りて般涅槃することは道理に應ぜず。行願の二種は應に果無かるべきが故なり。涅槃を現ずるは是れ變化身にして、自性身に非ず。

論曰 佛の受用身と及び變化身とは既に是れ無常なり。云何が經に「如來の身は常なり」と說くや。此の二の所依の法身は常なるが故に。又等流身及び變化身は、恒に受用して休廢すること無きを以ての故に。數々現化して永へに絕えざるが故なり。常に樂を受くる（といふ）が如く、常に食を施す（といふ）が如く、如來の身の常なることも應に知るべし亦爾なり。

釋曰 契經に如來の身は常なりと說ける有り。佛の受用身及び變化身は既に是れ無常なり。云何が如來は其の身常住なりや。謂はく此の二身は是れ無常なりと雖も、然も法身に依る。法身常なるが故に亦說いて常と爲す。身常なりと言ふは、或は體是れ常なるなり。或は常身に依るが故に身常なりと名く。此れ等流及び變化身は是れ異門には常なるも、自性常なるに非ざることを顯はす。又受用身は恒に受用して休廢無きを以ての故に、常に樂を受くるが如し。猶世間に「常に樂を受く」と言ふも、樂を受くること常に間斷無きに非ずと雖も、而も說いて、此れ常に樂を受くと言ふことを得るが如し。佛の受用身も當に知るべし。亦爾なり。常住に非ずと雖も而も或は常と言ふ。彼々の菩薩衆の中に於て大法樂を受け、休廢すること無きを以ての故なり。佛の變化身は數々化を現じて永へに斷絕せず。別の意にて常と言ふ。常に食を施すが如し。猶世間に常に食を施すと言ふも、食を施すこと能く常に無間なるに非ずと雖も、然も數々施し、心に期して絕えざるを、常に食を施すと名くるが如し。佛の變化身も當に知るべし。亦爾なり、生滅無きを說いて名けて常と爲すに非ず。化生する所に隨つて數々示現して永へに絕えざるが故に、密意にて常と

ること無し。又諸の菩薩は百拘胝の諸の贍部洲を捨て、但一處に於て等正覺を成じ、正法輪を轉ずることは道理に應ぜず。此の一切處は皆相ひ似るが故なり。此の道理に由りて、是れ變化身は自性身に非ず。若し餘の贍部洲に現じて等覺を成ずることを遠離し、唯獨り此の贍部洲の中に於てのみ眞に正覺を證し、變化身を以て遍く餘處に於て佛事を施作すと謂はば、何が故に覩史多天にて眞に等覺を證し、化身は此の諸の四大洲に來つて佛事を施作すと許さざるや。若し汝の意に、一贍部洲に等正覺を成じ、餘處に化を現ずとは理に應ぜざるに非らずと謂はば、若し唯覩史多天に住在して等正覺を成じ、一切の四洲の贍部洲内に化身を示現することは、何ぞ理に應ぜざらん。若し定んで一切の四洲に等正覺を現ずることを許さざれば、教無く理無きが故に說くべからず。贍部洲に佛の出世すること無きこと有るは、彼の契經と相違せざるが爲なり。契經に「處無く、容るる無し、前に非ず後に非らずして一世界に於て、二の如來の世に出現すること」と說けるが如し。若し一切の贍部洲の中に同時に多佛の世に出現することを許さば、彼と相違す。此の難を避けんが爲に、是の故に復言く「多くの化有りと雖も、而も彼の二の如來、世に出現すること無きに違はず等」と。彼の契經には、一の四大洲を說いて一世界と名く、千洲等には非ず。卽ち彼の經に二輪王の同時に出でざるが如しと說く。若し佛は多くの四大洲に同時に俱に出づることを許さざれば、亦多くの輪王有りて多くの四大洲に同時に俱に出づることを應に許すべからず。若し唯一の四大洲の中にのみ二輪王の同時に俱出すること無く、千洲等に非ずと許さば、亦應に佛も一の四洲の中に二並び出づること無く、千洲等には非ずと許すべし。復伽他を以て多くの化身を現じ、具相の覺を顯はす。「佛の微細なる化身等」とは、佛の化身は現じて母胎に入るが如く、是の如く舍利子等の多くの聲聞衆を[一五]化して、其の相各異るも、自らの母胎に入ること同時に平等なり。一切種の覺は是れ尊勝なることを顯發せんと欲するが爲の故に、佛は是の化を

【一五】化してとは變化して現するの意。

論曰　何に由りて變化身は卽ち自性身に非ざるや。八因に由るが故なり。謂はく諸の菩薩は久遠より來、不退定を得れば、覩史多及び人中に於て生ずることは道理に應ぜず。又諸の菩薩は久遠より來、常に宿住を憶せるに(而も)書・算數・印・工巧論の中、及び欲塵を受用する行の中に於て、正知すること能はざるは道理に應ぜず。又諸の菩薩は久遠より來、已に惡說善說の法教を知れば、外道の所に往くことは道理に應ぜず。又諸の菩薩は久遠より來、已に能く善く三乘の正道を知れば、邪の苦行を修することは道理に應ぜず。又諸の菩薩は百拘胝の諸の贍部洲を捨てて、但一處に於て等正覺を成じ正法輪を轉ずることは道理に應ぜず。若し等正覺を成ずるを示現することを離れて、唯化身を以て所餘の處に於て佛事を施作すれば、卽ち應に但覩史多天に於てのみ等正覺を成ずべし。何ぞ遍く一切贍部洲の中に同時に佛の出づることを施設せざるや。既に施設せず。教無く理無し。多くの化(身)有りと雖も、而も彼の二の如來世に出現すること無しとの言に違はず。一の四洲に世界を攝するに由るが故に、二輪王の同じく世に出でざるが如し。此の中に頌有り、

佛の微細なる化身は　　多く處胎平等なり
一切種の　　等覺を成ずることを顯はさんが爲に而も轉ず。

一切の有情を利樂せんと欲するが爲に、發願し修行して大菩提を證す。畢竟して涅槃するは道理に應ぜず。願行に果無く過失を成ずるが故なり。

釋曰　八因に由るが故に、變化身は卽ち自性身なることは、正理に應ぜざるを證す。謂はく諸の菩薩は久遠より來、不退の定を得て曾て退失すること無し。欲界覩史多天に生ずるすら尙理に應ぜず。況んや人中に生ずるをや。多劫を經て不退定を修して欲界の果を得るは正しき道理に應ずるに非ず。故に變化身は自性身に異るの道理成就す。又諸の菩薩は久遠より來、常に宿住を憶ひ、廣く說く、乃至邪の苦行を修することは道理に應ぜず。其の文了じ易ければ、煩しく重ねて釋す

を執す。若し正しく說かば、應に諸佛は定んで畢竟涅槃に入るに非ず、亦畢竟涅槃に入らざるに非ずと言ふべし。佛は一切の障を解脫するを得たるが故に、畢竟涅槃なり。應に作すべき所の事は竟るの期無きが故に、諸佛は畢竟涅槃に入らず。

論曰　何が故に受用身は卽ち自性身に非ざるや。六因に由るが故なり。一には色身見るべきが故に。二には無量の佛の衆衆の差別見るべきが故に。三には勝解に隨つて見るは、自性を不定に見るべきが故に。四には別々に見るは自性を變動して見るべきが故に。五には菩薩聲聞及び諸天等の種々の衆會に間雜して見るべきが故に。六には阿賴耶識と諸轉識の轉依は非理なること見るべきが故に。佛の受用身は卽ち自性身なることは道理に應ぜず。

釋曰　「色身見るべきが故に」とは、謂はく受用身は色の見るべき有るも、自性身には色の見るべき非ず。故に受用身は自性身に非ず。又受用身は無量の衆會に受用する色法の差別見るべきも、自性身には此の差別有るに非ず。故に受用身は自性身に非ず。又受用身は勝解に隨つて自性を見ること不定なり。契經に言へるが如し。「或は一類有り、受用佛と見。或は一類有り、是れを少年と見。或は一類有り、見て童子と爲す」と。是の如く廣く說く。自性身に此の不定有るに非ず、故に受用身は自性身に非ず。又受用身は自性變動の差別見るべし。一の能見の者は、先に一時に於て受用身の形相の別異なるを見、後に一時に於て復別異なるを見るも、自性身は其の體變動するに非ず。故に受用身は自性身に非ず。又受用身は菩薩、聲聞及び諸天等の種々の衆會に、常に間雜する所なるも。自性身は應に是の如き衆會に間雜すること有るべきに非ず。故に受用身は自性身に非ず。又轉依の道理に非ざるを見るが故にとは、謂はく阿賴耶識を轉じて自性身を得、諸の轉識を轉じて受用身を得。故に受用身は自性身に非ず。此の六種の正理に應ぜざるに由るが故に、受用身は自性身に非ず。

るなり。此の義に由るが故に、若くは聲聞乘、若くは獨覺乘は卽ち是れ大乘なるか故に一乘を成ず。「究竟の故に」とは、究竟の理に依るが故に一乘と說く。歸（入）の別無きに非ざるも、此れを過ぎて外に別の勝乘無きに由る。唯此の一乘のみ最も勝れりと爲すが故に佛は一乘と說く。

論曰　是の如く諸佛は同一の法身にして、而も佛に多有ることは、何に緣つて見るべきや。此の中に頌有り、

　一界の中に二無く　　同時に無量のもの圓かにす
　次第に轉ずるは理に非ず　　故に多佛有ることを成ず。

釋曰　「一界の中に二無し」とは、一世界の中に二佛有ること無し、是の故に當に唯一佛有るのみと言ふべし。「同時に無量のもの圓かにす」とは、無量の菩薩の修集する資糧は同時に圓滿し、多くの世界の中にて佛果を現成す。是の故に諸佛は當に多有りと言ふべし。或は有るが說いて言く、一世界の中に前後次第して、無量の菩薩は等正覺を成ず。多くの世界に同時に多佛あるに非ず、と。此の執を破せんが爲に、復「次第に轉ずるは理に非ざるが故に」と言ふ。因緣有れば、無量の菩薩の修集する資糧は、同時に圓滿し、展轉して相ひ待つて次第に成佛すること無し。是の故に諸佛は同時に多有り。

論曰　云何が應に法身の中に於て佛は畢竟して涅槃に入るに非ず、亦畢竟して涅槃に入らざるに非ざることを知るべきや。此の中に頌有り、

　一切の障を脫するが故に　　所作竟り無きが故に
　佛は畢竟して涅槃し　　畢竟して涅槃せず。

釋曰　有る大乘の人は謂へらく、佛は畢竟般涅槃せず、と。無餘依涅槃界に就いて說くなり。餘は復謂へらく、佛は畢竟涅槃すと。有餘依涅槃界に就いて說くなり。此の二の意趣は定んで非理

めんが故に一乘と說くなり。「及び所餘を任持す」とは、其の餘の不定種性の菩薩を任持せんと欲するが爲に、大乘の精進に於て退壞せんことを恐る、故に一乘と說いて任持して住せしめ、彼の菩薩をして聲聞乘に依りて般涅槃すること勿らしむ。「法等しきが故に」とは、法とは謂はく眞如なり。諸の聲聞等は乘差別すと雖も同じく眞如に趣く。趣く所の眞如には差別有ること無きが故に一乘と說く。「無我等しきが故に」とは、補特伽羅無我同じきが故なり。若し實に異り有らば、補特伽羅に此れは是れ聲聞此れは是れ菩薩と、乘の別有るべし。既に實に異る補特伽羅無きが故に一乘と說く。「解脫等しきが故に」とは、謂はく彼の三乘は煩惱障に於て解脫するに於ては異り無し。世尊の言へるが如し。「解脫と解脫と差別有ること無し」と。此の意趣に由るが故に一乘と說く。「性同じからざるが故に」とは、謂はく諸の聲聞の不定種性に差別有るが故なり。謂はく菩提に廻向する聲聞身の中に、聲聞種性と及び佛種性とを具有す、此の道理に由るが故に一乘と說く。「二の意樂を得るが故に」とは、謂はく二種の意樂を得、一は諸佛は一切の有情に於て自體を同じくする意樂を得て、彼は卽ち是れ我、我は卽ち是れ彼と言ふ。是の因緣に由りて此れ既に成佛すれば彼も亦成佛す。是の故に不一の意樂を得と名く。二は世尊法花會上にて、諸の聲聞舍利子等の與に佛の記別を授けて、攝せしめんが爲に是の如きの意樂を得、我等と佛とは平等にして無二なりと。又此の會上に諸の菩薩の彼の名と同じきもの有り、記別を授くることを得るが故に、佛の一言には二種の然を含む。謂はく諸の聲聞を攝して佛の自體と同じくする意樂を得しめ、及び諸の菩薩に記別を授くることを得るなり。此の道理に由るが故に一乘と說く。「此の故に」と言ふは、世尊の言へるが如し。「汝等苾芻よ、我往昔を憶ふに、無量百返して聲聞乘に依りて般涅槃せりと。云何が已に成佛して復聲聞に依りて而も般涅槃するや。是の故に此の中に別の意趣有り、謂はく聲聞種性を調伏せんが爲に、所化の有情に自ら其の身を化して彼の乘の類と同じく般涅槃を現ず

間の依別なるが故に、業の異るを許す」とは、依とは謂はく身體なり。彼れ差別するが故に、其の業に異り有り。彼の[一四]天授と彼の祠授との如く、依身別なるが故に、其の業各異る。諸佛は爾らず。法身別無きが故に業異るに非ず。「世間の事別なるが故に業の異るを許す」とは、事とは謂はく所作なり、所用の差別の事各別なるが故に、其の業に異り有り、彼の凡夫の營む農事の別、商賈の事の別の如く、是の如き一切なり。諸佛は爾らず、衆生を利するの事に差別無きが故に、業に異り有るに非ず。「世間の性別なるが故に業の異るを許す」とは、性とは謂はく意樂なり。彼の世間の利益の意樂、安樂の意業の如きは、境界差別するが故に業に異り有り。諸佛は爾らず。一切の有情を利益し安樂にする意樂別無きが故に業異るに非ず。「世間の行別なるが故に業の異るを許す。」行とは謂はく功用なり。小功用の能く小業を起し、若くは大功用は便ち大業を起すが如く、功用別なるが故に業異り有り。諸佛は爾らず。一切の所作は皆無功用なるが故に業異るに非ず。「此の別の力無きが故に導師には非ず」とは、此の因等の五の別の力無きが故に、世の導師は五業差別するに非ずとなり。

論曰　若し此の功德圓滿と相應すれば、諸佛の法身は聲聞獨覺乘と共にせず。何の意趣を以て、佛は一乘を說くや。此の中に二頌有り、

一類を引攝し、及び　所餘を任持せんが爲に
不定種性に由りて　諸佛は一乘と說く。
法と無我と解脫と　等しきが故にと性同じからざると
二の意樂を得ると、化と　究竟と（の故に）一乘と說ぐ。

釋曰　此の密意に依りて佛は一乘と說くことを、二頌にて顯示す。「一類を引攝せんが爲め」とは、不定種性の聲聞を了知し、彼を解脫に趣かせんとして方便引攝し、大乘に依りて般涅槃せし

【一四】天授は（Devadatta）の譯、祠授は（Yajñadatta）の譯にして印度に普通に用ひらるゝ人名なり。

業用は平等なり。此の中に頌有り、

　因と依と事と性と行と　別なるが故に業の異るを許す
　世間に[三]此の別の力　無きが故に導師には非ず。

釋曰　諸佛の法界は卽ち是れ法身なり。應に知るべし、恆時に能く五業を作す。「一切の有情の災横を救濟するを業と爲す」とは、因緣所生の病等の憂苦を說いて災横と名く。「暫くも見る時に於て便ち能く盲聾狂等の諸の災横を救濟す」とは、契經に言へるが如し、若し佛を見たてまつる時は盲者は眼を得、聾者は耳を得、狂者は念を得と。是の如き等なり。問ふ、如し法身は六根の境に非ずと說かば、云何が今盲の眼等を得て、能く法身を見るを法身の業と爲すと說くや。答ふ、法身を見るとは、昔の大願の引發の勢力に由りて、法身を成滿し、次第に變化身の用を發起す。此に由りて能く盲をして眼等を得しむるなり。昔の資糧の引發の勢力に由りて、法身を證得し、任運に用を起す。機關の輪の末を以て本に歸すが如し。法身を見ると言ふは、實には唯化を見るのみ。「惡趣を救濟するを業と爲す等」とは、不善處を拔きて善處に置くを方に救濟と名く。其の因若し無ければ、果も亦無きが故なり。「非方便を救濟するを業と爲す等」の言は、其の文顯了なり。「薩迦耶を救濟するを業と爲す等」とは、迦耶を身と名け、虛僞を薩と名く、其の身の虛僞なるを薩迦耶と名く。謂はく其の中に於て僞の身見轉ずるは、卽ち是れ三界有漏の諸法なり。彼に於て說いて出離の法を授くるが故に、名けて救濟と爲す。「乘を救濟するを業と爲す等」とは、不定種性の菩薩及び聲聞等をして大菩提を證せしめんが爲に、彼を大乘の正行に安立するなり。應に知るべし、諸佛は此の五業に於て悉く皆平等なり。此の義を顯はさんが爲に復頌說いて言はく、「因と依と事等、世間の因別なるが故に業の異るを許す」とは、謂はく天の因は人鬼等の因と別にして、各々差別す。故に業に異り有り。諸佛は爾らず、因に別無きが故に、業に異り有るに非ず。「世

【三】世親釋の論本には「力別なること」を作る。

じて[一〇]三慧の路に遊び、所趣の園に往く。諸の聲聞・獨覺・菩薩の乘ずる所の止觀に勝るが故に、名けて大と爲す。此の句は乘の圓滿を顯示す。「大なる念相、無願の解脫を所入の門と爲す」とは、三解脫門を趣入の處と爲す。門とは通なり。大の義は前の如し。此の句は門の圓滿を顯示す。「無量の功德衆の莊嚴する所、大寶華王の建立する所」とは、譬へば世間の寶の莊嚴具の如く、衆寶にて此の佛の淨土を莊嚴す。所依の大寶紅蓮花王は無量の功德衆にて莊嚴せらる。地輪等の風輪に依りて住するが如く、是の如く、淨土は無量の功德衆にて莊嚴せらるる大寶花王の建立する所なり。此の紅蓮花は衆花の中に於て最も殊勝と爲す、是の故に說いて大寶花王と名く。或は卽ち如來を說いて大王大法王と名くるが故たり。此の紅蓮花は是れ佛の依處なり、主に從つて名と爲す。「建立する所」とは、謂はく佛の淨土は此の花王に依りて長時に相續して間絕有ること無し。此の句は依持の圓滿を顯示す。「是の如き淸淨なる佛土を受用するに一向に淨妙なり」とは、不淨無きが故に。糞穢を離るるが故なり。「一向に安樂なり」とは、苦受及[一一]處中受有ること無きが故なり。「一向に無罪なり」とは、不善及び無記有ること無きが故なり。「一向に自在なり」とは、外緣を待たざるが故に、暫くも心に起れば衆事辦ずるが故なり。

論曰　復次に應に知るべし。是の如き諸佛の法界は、一切の時に於て能く五業を作す。一には一切の有情の災橫を救濟するを業と爲す。暫く見る時に於ても便ち能く盲聾狂等の諸の災橫を救濟するが故なり。二には惡趣を救濟するを業と爲す。諸の有情を拔いて不善處より出し善處に置くが故なり。三には非方便を救濟するを業と爲す。諸の外道をして[一二]非方便を捨てて解脫の行を求めしめ、如來の聖敎の中に置くが故なり。四には薩迦耶を救濟するを業と爲す、能く三界を超ゆる道を授與するが故なり。五には乘を救濟するを業と爲す、餘乘に趣かんと欲する菩薩と及び不定種性の諸の聲聞等とを拯拔し、安處して、大乘の行を修せしむるが故なり。此の五業に於て、應に知るべし諸佛の

【一〇】三慧とは前にいふ聞思修の三なり。

【一一】處中受とは中に處する受の義にして非苦非樂の捨受のこと。

【一二】非方便とは解脫の眞の方便にあらざる行法の意。

業の異熟果に非ざるが故なり。此の句は方所の圓滿を顯示す。「勝れたる出世間の善根の起す所」とは、謂はく出世間の善根を因と爲し、及び後得の勝れたる善根を因と爲して淨土は生起す。[八]自在等を淨土の因と爲すに非ず、此の句は因の圓滿を顯示す。「最極自在の淨識を相と爲す」とは、謂はく佛の淨土は最極自在の清淨なる心識を體相と爲すを以てなり。唯識のみ有るが故に、識を離れて外に別に實等有るに非ず。即ち淨き心識は是の如き似の衆寶等を變現するなり。此の句は果の圓滿を顯示す。「如來の都する所」とは、謂はく佛を主と爲す都にして此れ餘に非ざるなり。此の句は主の圓滿を顯示す。「諸の大菩薩衆の雲集する所」とは、唯已に大地に入れる菩薩のみ有りて、其の中に止住して如來を補翼し、聲聞等に非ざるなり。此の句は輔翼の圓滿を顯示す。「無量の天・龍・藥叉等」とは、謂はく諸の天等は其の中に止住して以つて眷屬と爲るなり。此れ[九]化にして實に非ず。莫呼洛伽とは、此れ大蟒を攝す。此の句は眷屬の圓滿を顯示す。「廣大の法味、喜樂に持せらる」とは、謂はく淨土の中には、大乘の法味、喜樂を食と爲すとなり。此の句は任持の圓滿を顯示す、食は能く諸の身命を任持するが故なり。「諸の衆生に一切の義利を作す」とは、此れ食を食し已つて諸の有情に諸の利樂の事を作すなり。此の句は事業の圓滿を顯示す。「一切の煩惱災横を獨除す」とは、謂はく淨土の中には諸の煩惱の作す所の災横無し。此の句は攝益の圓滿を顯示す。「衆魔を遠離す」とは、謂はく煩惱と蘊と死と天との魔の四種の怨敵を離る。此の句は無畏の圓滿を顯示す。「諸の莊嚴を過ぎたる如來の莊嚴の所依の處」とは、謂はく一切の菩薩の莊嚴を過ぎたる如來の莊嚴の所依の處なり。此の句は住處の圓滿を顯示す。諸の住處に於て最も勝れたりと爲すが故なり。「大なる念慧行を以て遊路と爲す」とは、思所成の慧を名けて大念と爲し、聞所成の慧を名けて大慧と爲し、修所成の慧を名けて大行と爲す。此の句は路の圓滿を顯示す。遊路とは即ち是れ道の異名なり。「大止妙觀を以て所乘と爲す」とは、奢摩他、毘鉢舍那に乘

【八】自在等とは自在天等の意。

【九】化にしてとは天龍等はいづれも化身にして實の天龍等には非ずとの意。

する所にして、廣大の法味、喜樂に持せられ、諸の衆生に一切の義利を作し、一切の煩惱災横を蠲除し衆魔を遠離し、諸の莊嚴を過ぎたる如來の莊嚴の所依の處にして、大なる念慧行を以て遊路と爲し、大止妙觀を以て所乘と爲し、大なる空・無相・無願の解脫を所入の門と爲し、無量の功德衆の莊嚴する所、大寶華王の建立する所の大宮殿の中に住す、是の如く清淨なる佛土は顯色の圓滿、形色の圓滿、分量の圓滿、方所の圓滿、因の圓滿、果の圓滿、主の圓滿、輔翼の圓滿、眷屬の圓滿、住持の圓滿、事業の圓滿、攝益の圓滿、無畏の圓滿、住處の圓滿、路の圓滿、乘の圓滿、門の圓滿、依持の圓滿を現示せり。

復次に是の如き淸淨なる佛土を受用するに、一向に淨妙なり、一向に安樂なり、一向に無罪なり、一向に自在なり。

釋曰　此れ諸佛の淸淨なる佛土に依りて、「薄伽梵は最勝に光曜せる七寶の莊嚴等に住す」と說く。「最勝に光曜せる七寶の莊嚴」と言ふは、謂はく佛の淨土の光曜は最勝にして、七の妙寶を用つて綺飾し莊嚴するなり。或は即ち七寶は最勝に光曜せるなり。七寶と言ふは、一に金、二に銀、三に瑠璃、四に牟娑洛寶、五に遏濕摩揭婆寶、此れ復何等なるや、所謂、帝靑、大靑等の寶なり。六に赤眞珠寶、謂ゆる赤蟲の出だす所を赤眞珠と名く、七に羯鷄怛諸迦寶なり。「大光明を放ちて普く一切無邊の世界を照す」とは、謂はく即ち最勝に光曜せる七寶は大光明を放ちて普く一切無邊の世界を照すとなり。其の體も亦無邊の世界に遍ず、此の上の二句は佛の淨土の顯色の圓滿を顯はす。「無量の方所を妙飾し間列す」とは、謂はく佛の淨土の無量の方所を妙飾し間列すとなり。慧を先と爲して安布し間飾するが如し。此の句は形色の圓滿を顯示す。「周圓際り無く、其の量測り難し」とは、謂はく佛の淨土は其の量と周圓とは際り無くして測り難しとなり、或は復其の量無邊際なるか故に周圓は測り難し。此の句は分量の圓滿を顯示す。「三界所行の處を超過す」とは、謂はく佛の淨土の方處は三界の行く處を超過す。三界の愛の所行に非さるが故に。諸の繫

なり」とは、最も淸淨なる眞如を自體と爲すが故に、改轉無きが故に、變異無きが故なり、「如來は最勝無罪なり」とは、謂はく諸の煩惱及び所知障の罪を永へに斷ずるが故なり。「如來は無功用なり」とは、謂はく天樂の如し。其の義了じ易し。「如來は大富樂を受く」とは、廣大淸淨なる佛土の、功德にて莊嚴せる大法樂を受用するが故なり。「如來は染汚を離る」とは、紅蓮花の如し。其の義了じ易し。「如來は能く大事を成ず」とは、謂はく等覺般涅槃等を現じて、有情の廣大なる義利を成辦し、堪能する所の如く彼をして成熟して解脫を得しむるが故なり。是の如く七種に修する所の念佛を、復二頌を以て其の義を略攝す。初の「圓滿」の言は一切を貫通す「自心に屬する圓滿」とは、此れ第一の一切の法に於て自在に轉ずる相を攝す。「常住を具ずる圓滿」とは、此れ第二の身常住の相を攝す。「淸淨を具する圓滿」とは、此れ第三の最勝無罪の相を攝す。「無功用の圓滿」とは、此れ第四の無功用の相を攝す。「能く有情に大法樂を施す圓滿とは」此れ第五の大法樂の相を攝す。「遍行して依止無き圓滿」とは、此れ第六の一切の世法の染む能はざる相を攝す。「平等に多生を利する圓滿」とは、此れ第七の能く大事を成ずる相を攝す。能く廣大の利樂の事を作すが故なり。「一切の佛を」とは、諸の如來は功德を圓滿すればなり。「智者」と言ふは、謂はく大菩薩なり。「應に一切の念を修すべし」とは、應に是の如き七種の隨念を修すべしとなり。憶持し明記して忘失せざらしむるは、是れ其の「念」の義なり。

論曰　復次に諸佛の淸淨なる佛土の相を云何が應に知るべきや。菩薩藏百千契經の序品の中に說けるが如し。謂はく薄伽梵は最勝の光曜せる七寶にて莊嚴せられて大光明を放ち。普く一切無邊の世界を照し、無量の方所を妙飾し間列して周圓際り無く、其の量測り難く、三界所行の處を超過し、勝れたる出世間の善根の起す所にして、最極自在の淨識を相と爲し、如來の都する所、諸の大菩薩衆の雲集する所、無量の天・龍・藥叉・健達縛・阿素洛・揭路荼・緊捺洛・莫呼洛伽・人・非人等の常に翼從

等を示現して一切の有情の未だ成熟せさる者は能く成熟せしめ、已に成熟する者は解脱せしむるが故なり。此の中に二頌有り、

圓滿は自心に屬すると　常住と淸淨を具すると
無功用と能く　有情に大法樂を施すと
遍行して依止無きと　平等に多生を利するとにして
一切の佛を智者は　應に一切の念を修すべし。

釋曰　此れ菩薩は諸佛の法身の功德を念ずるを修することを顯はす。「一切法に於て自在に轉ず」とは、謂はく諸の如來は一切法に於て串習に由るが故に自在に轉ずるを得。暫くも欲樂を起せば一切の功德は皆能く圓滿し現在前するが故なり。若し諸の如來は普く一切の無量無邊の諸の世界の中に於て神通無礙ならば、何の因緣の故に一切の有情は般涅槃せざるや。彼に障有り、及因無きに由るが故なり。前に總じて佛は一切法に於て自在に轉ずることを得るを明かし。今は別に佛は有情に於て自在を得ざることを顯示するが故に伽他を說く。「有情界に周遍するも、障を具し而も因を闕く」とは、謂はく煩惱・業・異熟の障を具するが故に「障を具す」と名く。猛利の煩惱、諸の無間業・愚癡・頑嚚、其の次第の如し。涅槃の因無く種性無きが故に名けて「因を闕ぐ」と爲す。「二種決定して轉ず」とは、謂はく重業を作す決定と、異熟を受くる決定となり、重業を作す決定とは、謂はく數串習して同類因と等流果と決定して相續せしむ。*未生怨の父王を害する等の如し。異熟を受くる決定とは、謂はく決定して感ずる異熟業を作せば、決定して當に諸の異熟果を受くべし。諸の釋種の決定して應に七毘盧宅迦王の爲に殺害せらるべきが如し。諸佛は上に說く所の有情に於ては皆自在に涅槃を得しむること無し。是の故に前に總じて如來は一切法に於て自在に轉ずることを得と說くと雖も、今別に自在を得ざることを說くことを須ゆ。「如來の身は常住

※　未生怨　阿闍世王(Ajātaśatru)の譯名、死せし阿闍世王の父王を幽死しめたる因緣を擧ぐ。

【七】　毘盧宅迦王(Virūḍhaka)又は毘流離王と稱す、舍衞國王にして加毘羅城の釋迦族を亡ぼしたる王なり。

煩惱は覺分を成じ　　生死は涅槃と爲り
大方便を具するが故に　　諸佛は不思議なり。

釋曰　此の頌は不可思議の甚深を顯示す。謂はく諸の煩惱は轉じて覺分を成じ、生死の苦惱を卽ち涅槃と爲る。是の如き因果は、世間の理の思議し得べきに非ず。

論曰　應に知るべし。是の如く說く所の甚深に十二種有り。謂はく生住業住の甚深、安立數業の甚深、現等覺の甚深。離欲の甚深、斷蘊の甚深、成熟の甚深、顯現の甚深、等覺と涅槃とを示現する甚深、住甚深、自體を示現する甚深、煩惱を斷ずる甚深、不可思議の甚深なり。

釋曰　此の十二種は皆覺了し難きが故に甚深と名く。一一の別相は前に已に說けるが如し。

論曰　若し諸の菩薩は佛の法身を念ずるには、幾種の念に由りて、應に此の念を修すべきや。略して菩薩の佛の法身を念ずることを說かは、七種の念に由りて應に此の念を修すべし。一には、諸佛は一切法に於て自在に轉ずることを得と、應に此の念を修すべし。一切の世界に於て無礙通を得るが故なり。此の中に頌有り、

有情界に周遍するも　　障を具し而も因を闕き
二種決定して轉ずれば　　諸佛には自在無し。

二には如來は其の身常住なりと、應に此の念を修すべし。眞如は無間に垢を解脫するが故なり。三には如來は最勝無罪なりと、應に此の念を修すべし。一切の煩惱及び所知の障を並びに離繫するが故なり。四には如來は功用有る事無しと、應に此の念を修すべし。功用を作さずして、一切の佛事は休息無きが故なり。五には如來は大富樂を受くと、應に此の念を修すべし。淸淨なる佛土は大富樂の故なり。六には如來は諸の染汚を離ると、應に此の念を修すべし。世間に生在するも一切の世法は染むる能はざるが故なり。七には如來は能く大事を成ずと、應に此の念を修すべし。等覺般涅槃

一切に於て身を現ずるも　　六根の所行に非ず。

釋曰　此の頌は自體の甚深を顯示す。自體と言ふは、即ち是れ如來の常住なる法界と及び所成の德とを總じて自體と名く。「佛は一切處に行ず」とは、謂はく後得智にて一切に遍行するなり。何に於て遍行するや。謂はく善・不善・無記・有漏・無漏・有爲・無爲等の差別の境界なり。「亦一處に行ぜず」とは、謂はく無分別智は分別無きが故に、一切の差別の境界に行ぜざるなり。「一切に於て身を現す」とは、謂はく變化身は一切處に於て受生を現するが故なり。「六根の所行に非ず」とは、謂はく[五]第一義の常住なる法身は、諸の生處・那落迦等の同分の有情の能く取る所に非ざるが故なり。

論曰

煩惱を伏するも滅せず　　毒の呪に害せらるが如し
惑を留め惑の盡くるに至りて　　佛の一切智を證す。

釋曰　此の頌は煩惱を斷ずる甚深を顯示す。「煩惱を伏するも滅せず」とは、謂はく菩薩の位の中には諸の煩惱を伏するも而も未だ永く斷ぜざるなり。「毒の呪に害せらるゝが如し」とは、譬へば衆毒は神驗ある呪の爲に損害せられ、體未だ滅せずと雖も而も患ひを爲さざるが如く、煩惱も亦爾り、念智力に由りて現行の纏を伏するも隨眠猶在り。何が故に煩惱の隨眠猶在りや。聲聞乘の速かに般涅槃するに同しからんことを恐るるが故なり。此の道理に由りて煩惱を[六]因と爲す。煩惱盡くるに至りて一切智を得。頌に言へる有るが如し。

念智力に制せられて　　煩惱は菩提を證す
毒の呪に持せられて　　過失は功德を成ずるが如し。

論曰

【五】世親釋を參照せば意義明瞭なるべし。

【六】受生の因となすの意。

論曰

或は等正覺を現じ　或は涅槃すること火の如し
此れ未だ曾て非有ならず　諸佛の身は常なるが故に。

釋曰　此の頌は等覺涅槃を示現する甚深を顯示す。「或は等正覺を現じ或は涅槃すること火の如し」とは、世間の火の、有る處には燒燃し、有る處には、息滅するが如く、諸佛も亦爾り。諸の善根の未だ成熟せざる者に於ては、等正覺を現じて其をして成熟し、速かに解脫を得しむ。諸の善根の已に成熟するを得て、已に解脫せる者に於ては、般涅槃を現ず。所爲無きが故なり。「此れ未だ曾て非有にあらず等」は其の義了じ易し。

論曰

佛は非聖法と　人趣及び惡趣と
非梵行の法との中に於て　最勝なる自體にして住す。

釋曰　此の頌は住の甚深を顯示す。「非聖法に於て最勝なる自體にして住す」とは、不善に於て最勝なる自體に由りに住するなり。「最勝なる住」とは、卽空、無願及び無相の住にして、不善法を緣じて安住するが故なり。「人趣及び惡趣に於て最勝なる自體にして住す」とは、謂はく人趣及び諸の惡趣に於て、最勝なる自體に由りて住するなり。最勝なる住とは、卽ち諸の靜慮、諸の等至の住にして、彼の趣を緣じて安住するに由るが故なり。「非梵行の法の中にて最勝なる自體にして住す」とは、謂はく非梵行の法の中に於て最勝なる自體に由りて住するなり。最勝なる住とは、卽ち四無量にして、名けて梵住と爲す、非梵行を緣じて安住するが故なり。

論曰

佛は一切處に行ずるも　亦一處に行ぜず

諸佛の事相ひ雜はるは　　猶大海の水の如し
我れ已に現に當に作すべし、と　　他を利するに是の思無し。

釋曰　此の頌は成熟の甚深を顯示す。「諸佛の事相ひ雜はる」とは、謂はく諸の如來の所作の有情を利益し安樂にする事業は展轉和同して一味を合成し、分別すべからざるなり。此の事は如何に等しきやと問へば、「猶大海水の如し」と答ふ。謂はく大海の衆流の歸する所の水は同一味にして分別すべからず。一切同じく魚等の饒益を作すが如し。「我已に現に當に作すべしと、他を利するに是の思無し」とは、功用心にて他を利する[四]三時の差別を思惟すること離れて而も能く任運に利他の事を起す。帝釋等の末尼、天樂の如く、思慮無しと雖も而も作用有り。

論曰

衆生の罪にて現ぜず　　月の破器に於けるが如し
諸の世間に遍滿するは　　法光の日の如くなるに由る

釋曰　此の頌は顯現の甚深を顯示す。若し如來の身は是れ常住ならば、一切時に於て何が故に現ぜざるやと問はば「衆生の罪にて現ぜず、月の破器に於けるが如し」と答ふ。破器の中に水は住することを得ざれば、月影の現ぜざるが如し。此れ月の過に非ず、是れ器の失なり。衆生の身中に奢摩他の淸潤なる定水無ければ、佛影現ぜず。これ如來の過に非ず、是れ衆生の失なり。水は等持の淸潤なる性に喩ふるが故なり。如來は是れ眞に妙善なる無漏法の影にして、感有れば斯に現じ、若し感無ければ猶生盲の覩見する能はざるが如しと說けるが如し。「諸の世間に遍滿するは法光の日の如くなるに由る」とは、謂はく諸佛の日は、契經等の正法言の光を放ちて遍く一切有情の世間を照し、緣有れば斯に見る、餘の見ざる者は是れ其の自らの過にして、如來の失に非ず。世間の日の流光は遍く照すも、目有る者は覩、盲者は見ざるが如し。

【四】三時の差別とは論本に言へる「已に、現に、當に」の過現未の三時をいふ。

の如來は是れ有にして非有なる、空性の所顯にして尊位を成ずるが故なり。

論曰

染に非ず、染を離るるに非ず　欲に由つて出離を得
欲は無欲なりと了知すれば　欲の法性に悟入す。

釋曰　此の頌は離欲の甚深を顯示す。云何が「染に非ず」や、貪の纒を斷ずるが故なり。「染を離るるに非ず」とは、速かに永へに貪の隨眠を斷ずるに非ざるが故なり。「欲に由り出離を得」とは、是の如き隨眠の貪を留るに由るが故に大菩提を得るなり。若し是の如き貪の隨眠を斷ずる者は、應に聲聞等の疾かに涅槃に入るに同じかるべきが故なり。「欲は無欲なりと了知すれば」とは、遍計所執の貪欲は無欲の性なることを了知するが故なり。「欲の法性に悟入す」とは、欲の法の眞如に悟入して證を作すとなり。

論曰

諸佛は諸蘊を過ぎて　諸蘊の中に安住す
彼と一にも異にも非ず。　捨てずして而も善く寂す。

釋曰　此の頌は斷蘊の甚深を顯示す。「諸佛は諸蘊を過ぐ」とは、謂はく諸の如來は一切の遍計所執の色等の諸聚を超過す。如實に遍計所執の不可得なるを觀見するが故なり。「諸蘊の中に安住す」とは、謂はく佛は法性蘊の中に安住すとなり。「彼と一にも異にも非ず」とは、謂はく法性蘊と彼の遍計所執の諸蘊とは異と說くべからず。遍計所執性は本より無なるが故に。一と說くべからず、遍計所執は雜染に順ふが故なり。法と法性とは一に非ず、異に非ざるなり。「捨てずして而も善く寂す」とは、謂はく法性の諸蘊を棄捨せず、卽ち是れ妙善にして永へに寂滅なるが故なり。

論曰

く四食に由りて阿羅漢等は自體安住す。四には唯示現依止住食、謂はく佛世尊は段等の四食を示現し受用するも、如來の食する時は、實には食を受けず。亦食を假らざるも自身安住す、然も世間に順じて食を受くることを示現し、食を假りて其の身安住することを示現す。第四食を受くることを現じて住するを得るが故に住の甚深と名く。

論曰

無異にして亦無量なり　　無數量なるも一業なり
不堅業と堅業とにして　　諸佛は三身を具す

釋曰　此の頌は安立と數と業との甚深を顯示す。「無異」とは、安立甚深を顯はす。無差別にして安立するを以ての故なり。「亦無量なり」とは、數の甚深を顯はす。此れ其を安立する數の無量なることを顯はす。「無數量なるも一業なり」とは、無量有りと雖も而も別業無きなり。何者か一業なる。變化と受用との業に差別無く、他を利することを成ずるが故なり。「不堅業と堅業」とは、自性身の業は是れ其れ堅住なり。餘の二身の業は是れ不堅住なり。是の如き一切を業の甚深と名く。

論曰

等覺を現ずるも有に非ず。　　一切の覺は無に非ず、
一一の念に無量にして　　有非有の所顯なり。

釋曰　此の頌は等覺を現ずる甚深を顯示す。「等覺を現ずるも有に非ず」とは、依他起の位の遍計所執性は有に非ざるが故なり。「一切の覺は無に非ず」とは、依他起の中の圓成實性は是れ眞に有なるが故なり。「一一の念に無量にして」とは、謂はく無量の殑伽沙數に過ぎたる諸の世界の中に、念々に、俱時に無量の佛有りて等覺を現ずるが故なり。「有と非有との所顯なり」とは、謂はく諸

巻の第十

果智分第十一の餘

論曰　復次に諸佛の法身は甚深なり。最も甚深なり。此の甚深の相は云何が見るべきや。此の中多頌有り、

釋曰　「諸佛の法身の甚深」とは、此の法身の自性の覺り難きを說く。世の聰明なる者の有する所の覺慧も尙解せざるが故なり。「最も甚深」とは、此の法身の差別の覺り難きを說く。諸の聲聞等の有する所の覺慧は行ずる能はざるが故なり。是の如き甚深は、十二頌を以て略して當に顯示すべし。

論曰

佛は無性を性と爲し　亦無住を住と爲す
[一]諸事無功用にして　第四の食を食と爲す。

釋曰　此の頌は生と住と業と住との甚深を顯はす。「佛は無生を生と爲す」とは、諸佛は無生にして而も生有ることを現ずるを、生の甚深と名く。「亦無住を住と爲す」とは、生死と涅槃とに住すること無きを住と爲す。此れ卽ち無住涅槃に安住するを、住の甚深と名く。「諸事無功用にして」とは、功用に由らずして一切の事を作す、猶世間の末尼、天樂の如きを、業の甚深と名く。「第四の食を食と爲す」とは、食に四種有り。一には不淸淨依止住食、謂はく[二]具縛の者は段等の食に由りて身を安住せしむ。二には淨不淨依止住食、謂はく若し色、無色界に生在すれば、觸と意思と識との食に由りて安住す。已に[三]欲を離るるが故に、段食有ること無し。預流向等は是れ有學なるが故に、亦淨不淨依止住食なり。彼は四食に由りて自體を安住す。三には一向淨依止住食、謂は

【一】此の一段の釋は世親釋に詳細を盡くす。

【二】具縛の者とは煩惱に繫縛せらるゝ欲界の有情をいふ。

【三】欲を離るとは欲界を出離せるものの意。

相應す。是の故に應に、諸佛の法身の無上の功徳を知るべし。此の中に二頌有り、

尊は成實の勝義にして　一切地より皆出で
諸の衆生の上に至り　諸の有情を解脱せしむ。
無盡無等の徳と　相應して世間
及び衆會に現じて見るべし　見るに非ざるは人天等なり。

釋曰　法身は此の功徳と相應す。復餘の六の功徳と相應す。此に義を略標して二頌に廣く釋す。「尊は成實の勝義なり」とは、謂はく佛の法身は成實の勝義にして、眞如の所顯なり。此れ即ち法身は自性の功徳と相應することを宣說す。力の差別を說くも相應に失無し。譬へば火は煖徳と相應すと說くが如し。「一切地より皆出づ」とは、是れ極喜等の一切の十地を皆出離するの義なり。此れ則ち成實の勝義の因なり。「諸の衆生の上に至る」とは、一切の智性は諸の有情に於て最も殊勝と爲す。此れ即ち成實の勝義の果なり。「諸の有情を解脱せしむ」とは、即ち是れ成實の勝義の業なり。「無盡無等の徳と相應す」とは、諸の功徳と相屬し相應す。無邊、不共、力、無畏等の無盡無等の徳と相應するが故なり。「世間及び衆會に現して見るべし」とは、謂はく變化身の世間に出現すると及び受用身の大衆會に處するとの二は皆見るべしとなり。「見るに非ざるは人天等なり」とは、謂はく佛の法身は人天等の能く見る所に非ざるなり。此れ世尊の三身の差別を說き、以て轉の義を顯はす。「轉」とは、謂はく體性の轉變する差別にして、三身の中に於て二身は見るべく、一は見るべきに非ざるなり。

の業は智を前導と爲し、智に隨つて轉ずるなり。「一切の二乘に於て最勝なる者」とは、此れ佛は一切の聲聞及び獨覺乘に於て、最も殊勝と爲すことを顯はす。十八の不共の功德と具さに相應するに由るが故なり。

論曰

三身に由りて　相を具する大菩提を得るに至り
一切處の他の疑を（斷ず）　[一七]最勝の者に歸禮す。

釋曰　此の頌は一切相の妙智の性を顯示す。一切の行相を皆正しく了知するを一切相の妙智と名く。此の妙智の體を一切相の妙智の性と名く、卽ち是れ一切所知の境界の、一切の行相の殊勝なる智體たり。「三身」と言ふは、謂はく自性等なり。此の三身に由りて、具相の無垢無礙の妙智の自性なる大菩提の果を得るに至る。「相を具す」と言ふは、一切相を具するなり。有るは無常等の十六種の行相を說いて一切相と名く。菩提は彼を以て先因と爲すが故なり。有餘復說く、卽ち此れ及び餘の一切の諸法は無自性にして、無生、無滅。本來寂靜。自性涅槃。無所得の相なるを一切相と名く。有餘復說く、此の中に於て治、所治の諸の品類の相を說くに非ず、然も一切の義利圓滿すること、如意珠の一切相を具するが如しと說くと。我今此の一切相を觀ずるに、卽ち是一切障を斷ずる品類なり。所以は何ん、永へに一切障の品類を斷ずるが故なり。謂ゆる一切の所知障品を斷じ、及び一切の習氣品を斷ずるが故なり。又此の「相を具する大菩提」とは、卽ち是れ一切の境の相を正しく知るなり。是の故に能く一切の他の疑を斷ず。「一切處」とは、一切の世間なり。「他の疑」とは、卽ち是れ有らゆる人天の一切の疑惑なり。此の他の疑に於て皆悉く能く斷ず。此れ能く一切の人天の疑惑を斷ずる作用に由りて一切相の妙智の殊勝なることを顯はす。

論曰　諸佛の法身は是の如き等の功德と相應す。復所餘の自性と因と果と業と相應と轉との功德と

【一七】最勝の者とは世親釋の論本其の他には「皆能く斷ずる者」とありて義通じ易し。此の論本は恐らく誤傳なるべし、本釋論には第三句の他の疑といふを第二句と關連して釋せり。

佛は衆生を哀愍して　　感に赴いて常に失すること無し。と

「所作常に虚無し」とは、謂はく佛の作す所は空しくして果無きことあらず。「忘失無し」とは、所作時に應じて常に忘失無きなり。

論曰

晝夜常に六返して　　一切の世間を觀じ
大悲と相應する　　利樂の意に歸禮す。

釋曰　此れ大悲を顯はす。利益安樂の意樂を體と爲す。此に「大」と言ふは、福智の資糧を圓滿に證するが故に、三苦を脫せしむるを行相と爲すが故に、三界の有情を所緣と爲すが故に、諸の有情に於て心平等なるが故に、決定して此れに勝さる者有ること無きが故なり。「晝夜に常に六返して一切の世間を觀ず」とは、此れ大悲の所作の業用を顯はす。謂はく佛世尊は晝夜分に於て各三時に一切の世間を觀じ、誰か善法を增し、誰か善法を減じ、誰か善根熟し、誰か根未だ熟せざる。誰か是れ勝れたる生を受くるに堪ふる法器なるか。誰か是れ定勝を受くるに堪ふる法器なるか。誰か是れ佛乘の器。誰か是れ餘乘の器と、是の如き等なり。

論曰

行に由り及び證に由り　　智に由り及び業に由りて
一切の二乘に於て　　最勝なる者に歸禮す。

釋曰　此れ十八の不共佛法を顯はす。「行に由る」と言ふは、此れ行く時の一切の事業を說く。卽ち是れ如來には誤失有ること無く、乃至擇ばずして捨つること有る無し。「及び證に由る」とは、卽ち是れ往時の六種の無退なり。謂はく欲無退乃至第六の解脫無退なり。「智に由る」と言ふは、謂はく三世に於て無著無礙の智見にして轉ずるなり。「及び業に由る」とは、卽ち是れ如來の身語意

遍く一切に行住し　圓智の事に非ざる無く
一切時に遍く　實義を知る者に歸禮す。

釋曰 此の頌は拔除習氣を顯示す。「遍く一切に行住す」とは、謂はく聚落に於て、或は城邑に於て乞食を爲すが故に、往返し樹下に經行する等、身の四威儀は寂然として住するなり。「圓智の事に非ざる無く」とは、謂はく聲聞等は煩惱を盡くすと雖も猶習氣有り、縛の作す所の[一二]掉擧等の事に隨ふ。彼の尊者[一三]大目揵連の如きは、五百生の中に常に獼猴と作る。彼の習氣の隨縛する所に由るが故なり。煩惱を離るると雖も、而も樂を聞く時は獼猴と作りて跳躑す。一獨覺有り。昔多生の中に曾て婬女と作る。今餘習の故に時に面を莊飾す。是の如きの類は一切智の應に作すべき所の事に非ず。世尊には皆無し。是れを如來の不共の功德と名く。「一切時に遍く實義を知る者」とは、外道[一四]掊刺拏等の如きに非ず。是れ眞實の一切智者に非ざればなり。故に如來は是れ其の實義の一切智者なりと說く。[一五]顚して結ぶは頌法なるが故に顚倒して說く。或は此の句義は[一六]前後各別にして、「一切時に遍く知る」とは、此れ佛は是れ一切智者なることを顯はし。實義の者とは、此れ佛は是れ實義有る者なることを顯はす。人の杖を有するを說いて杖者と爲すが如し。

論曰

諸の有情を利樂する　所作は時を過たず
所作常に虛無く　忘失無きに歸禮す。

釋曰 此の頌は無忘失の法を顯示す。「諸の有情を利樂する所作は時を過たず」とは、謂はく佛世尊は若し所化有りて、若し爾の時に於て應に所作有るべきならば、卽便ち彼の爲に卽ち爾の時に於て應に作すべき所を作して終いに時を失はず。頌に言へる有るが如し、

譬へば大海水の　奔潮するは必ず時に應ずるが如く

【一二】掉擧とは心を輕薄浮動ならしむること、六煩惱の心所の一なり。
【一三】大目揵連(Mahā-Maudgalyāyana)大採菽と譯す、十大弟子の一人にして神通第一と稱せらる。
【一四】掊刺拏、は富蘭那迦葉(Pūraṇakāśyapa)にして六師外道の一なり。
【一五】頌句の構造を釋す、實義を知る一切智者を頌文に遍知實義となすが故に顚倒して說くといふ。
【一六】前後各別とは又別釋を擧ぐ、卽ち前の遍知と後の實義とを各別として解する義なり。

能く智と及び斷と　出離と能障礙とを說きて
自他を利し餘の　外道の伏するに非ざるに歸禮す。

釋曰　此の頌は四無所畏を顯示す。「能く智を說く」とは、謂はく佛は誠言すらく、我は是れ眞實の正等覺者にして、即ち是れ遍く一切の法を知るなりと。「能く斷を說く」とは、謂はく佛は誠言(じやうごん)すらく、我は是れ眞實に諸漏を盡くす者にして、即ち是れ煩惱諸漏を永へに盡くすと。是の如き二種は自利に依りて說く。「能く出離を說く」とは、謂はく佛は誠言すらく、我れ弟子の爲に說く出離の法は眞實に出離すと。「能く能障礙を說く」とは、謂はく佛は誠言すらく、我れ弟子の爲に說く能障の法は眞實に能く礙ふと。是の如き二種は利他に依りて說く。是の如き四種を「自他を利す」と名く。「餘の外道の伏すに非ず」とは、怖畏を離るることを顯はし、無畏の義を釋す。餘の外道の能く降伏する所に非ず、是の故に無畏なり。

論曰

衆に處して能く說を伏し　二の雜染を遠離し
護無く忘失無く　衆を攝御するに歸禮す。

釋曰　此の頌は不護と念住とを顯示す。「衆に處して能く說を伏す」とは、謂はく大衆に處して能く他の說を伏するなり。身業等及び諸の威儀は皆醜惡にして藏護を須ゐ彼の譏嫌を恐るべきもの無し。是の故に衆に處して能く他の說を伏す。是の如きは三種の不護を明かす。「二の雜染を遠離す」とは、謂はく恭敬して聽き、(亦は)恭敬せずして聽く弟子衆の中にて、善く住念するが故に、愛恚を遠離す。是の如きは即ち三種の念住を明かす。此の無護と無忘失とに由るが故に、能く善く諸の弟子衆を攝御す。

論曰

用を顯說す。「方便」と言ふは、善趣の方便は、諸の善業を謂ひ、惡趣の方便は不善業を謂ふ。是の如き趣の方便を宣說する時、魔は其の中に於て誑惑して住し、言ふこと是の如くならず、是れと相違して不善業を說いて善趣の方便と爲し、諸の善業を說いて惡趣の方便と爲す。或は一切は皆因有ること無しと說き。或は一切は自在天等を以て其の因と爲すと說くも、處非處の力にて能く彼の說を摧く。詞を訓釋すれば、[一〇]處は所以に名く。容受する所有るなり。若し所以無く、容受する所無ければ、說いて非處と名く。謂はく處無く容るゝこと無きなり。諸の衆生の類は無因惡因にして當に有ること得べし。此れ復云何ん。此れ有るに由るが故に彼れ有り、此れ生ずるが故に彼生ず。謂ゆる無明は行に緣たり等にして、自在天等の次第に生ずることを得しむるに非ず。「歸依」と言ふは、所謂諸業なり。世間は皆自業に由ると說くが如く、業を依止と爲し、業を歸依と作す。此の業を說く時、魔は其の中に於て誑惑して住す。廣くは前に說けるが如し。第二の業と異熟との智力に由りて能く彼の說を摧いて罣礙する所無し。謂ゆる諸の有情の業の分別する所の高下勝劣は、無因(或は)自在天等に由らず。廣くは前に說けるが如し。言ふ所の「淨」とは、謂はく世間の淨及び出世の淨なり。暫時(又は)畢竟して諸の煩惱を伏し、永へに隨眠を害するは、諸の靜慮、等持、等至及び聖道に由るが故なり。此の淨を說く時、魔は其の中に於て誑惑して住す。廣くは前に說けるが如し。靜慮、等持、等至の智力に由りて能く彼の說を摧いて罣礙する所無し。「及び大乘の出離」とは、此れ餘力の作す所の業用を顯はす。謂はく大乘の究竟なる出離の佛の果德を說く時、魔は其の中に於て誑惑して住し、此の無上正等菩提は極めて得べきこと難しと言ひ、聲聞の究竟の出離を求めんことを宣んす。[一一]餘の七力に由りて能く彼の說を摧いて罣礙する所無し。

論曰

【一〇】處非處の訓釋なり、處は所以なり、卽ち理由又は道理の義、故に容受する所有りといふ、首肯し得るの意なり、非處は推して知るべし。

【一一】十力の中の後の七力をいふ。

て法身に歸禮す。「諸の衆生は尊を見て皆審かに善士なりと知る」とは、一切の世間は世尊の相と隨好とを具するを見るに由りて皆悉く審かに是れ大善士なりと知る。「諸の衆生」とは、通じて當時及び後時に於て化を受くるに堪ふる者を攝す。「暫く見て便ち深く信ず」とは、暫く世尊の相と隨好とを具するを見て、便ち深く淨信して、是れ世間を善く開導する者なりと知るなり。

論曰

攝受と任持と捨と　現化と及び變易と
等持と智と自在にして　隨つて證得するに歸禮す。

釋曰　此の頌は四の一切相清淨を顯示す。「攝受と任持と捨」とは、所依の清淨を顯はす。靜慮に依止して其の欲する所の如く、樂ひに隨つて長短を能く自身に於て攝受し、住持し、棄捨することと自在なり。「現化と及び變易」とは、所緣の清淨を顯はす。種々の未だ曾て生ぜざる色を化作するを名けて「現化」と爲し、種々の已に曾て生ぜる色を轉變して金銀等を成ずるを名けて「變易」と爲す。此の一切の變化の品類に於て皆自在を得。「等持自在」とは、心の清淨を顯はす。其の欲する所に隨つて三摩地門自在に轉じ、一一の刹那に其の意樂の如く能く諸定に入る。「智自在」とは、智の清淨を顯はす。其の欲する所の如く陀羅尼門を任持すること自在なり。「隨つて證得す」とは、隨順して上の四清淨を證得するなり。

論曰

方便と歸依と淨と　及び大乘の出離と
此に於て衆生を誑かす　魔を摧く者に歸禮す。

釋曰　此の頌は十力を顯はす。謂はく善趣惡趣の方便の諸業と。歸依と。世、出世の淨と。大乘の出離との四種の義の中に於て、魔は衆生を誑かす。此の中には、能く彼の魔を摧く十力の業

礙無きが故に。或は諸法の言詞を訓釋するに於て罣礙無きが故なり。若の諸法を分析する智の中に於ける無礙の覺慧ならば、辯說無礙と名く。能く諸法を辯析する智の中に於て罣礙無きが故なり。

論曰

彼の諸の有情の爲に　故らに現じて言と行と
住と來と及び出離とを知りて　善く敎ふる者に歸禮す。

釋曰　此の頌は六種の神通を顯示す。「彼の諸の有情の爲に」とは、此れは是れ總句にして、「善く敎ふる者」と言ふは、一一に皆有り。「善く」とは妙なり、「敎ふ」とは言なり。勝進せしめんが爲に微妙の言を說くを「善く敎ふる者」と名く。「故らに現して善く敎ふる者」とは、是れ如意通なり。應に化すべき所に隨つて故らに其の所に往き、大神變を現して善く彼を敎ふるが故なり。「言を知りて善く敎ふる者」とは、是れ天耳通なり。遠住の義有る言詞の一切の音聲を聽聞して、其の所應の如く爲に法を說くが故なり。「行を知りて善く敎ふる者」とは、是れ心差別通なり。心の勝劣を知りて善く彼に敎ふるが故なり。「往を知りて善く敎ふる者」とは、是れ宿住隨念智通なり。過去に了達して善く彼に敎ふるが故なり。「來を知りて善く敎ふる者」とは、是れ死生智通なり。未來に了達して善く彼を敎ふるが故なり。「出離を知りて善く敎ふる者」とは、是れ漏盡智通なり。。煩惱を斷ずることを知りて善く彼を敎をるが故なり。

論曰

諸の衆生は尊を見て　皆審かに善士なりと知り
暫く見て便ち深く信ずる　開導の者に歸禮す。

釋曰　此の頌は諸相と隨好とを顯示す。法身は是れ相好を現ずる所依なるが故なり。相好に就い

釋曰　此の頌は願智の聲聞等に勝ることを顯はす。五相に由るが故に。謂はく無功用の故に。無著の故に、無礙の故に。常に寂定なるが故に、一切の疑難を能く解釋するが故に。諸の聲聞等の得る所の願智は、其の所願に隨つて定に入り、唯能く此れを知りて其の餘を知らず。佛は卽ち爾らず。無功用智に由りて功用を作さず、末尼、天樂の如く、願に隨つて能く一切の境界を知る。無著の智に由りて所知の境に於て皆、滯り無きが故に、無礙の智に由りて煩惱障幷びに習氣を斷ずるが故に、常に寂定に由りて定障を斷ずるが故に。頌に言へる有るが如し、

那伽[九]は行くも寂定　　那伽は住するも寂定
那伽は坐するも寂定　　那伽は臥するも寂定なり。

此の所發の微妙の願智は、一切時に於て善く能く一切の問難を解釋す。

論曰

所依と能依との　　所說と、言と及び智との
能說とに於て無礙の慧にて　　常に善く說くに歸禮す。

釋曰　此の頌は四無礙解を顯示す。「所依」と言ふは、謂はく諸の敎法卽ち契經等なり。「能依」と言ふは、謂はく所詮の義なり。是の如き二種を皆「所說」と名く。所作の業なるが故なり。言智の二種は皆是れ能說なり。作者、作具等の起す所なるが故なり。「無礙の慧」とは、謂はく此の中に於て退轉無き智なり。「常に善く說く」とは、四種の無礙解を具するに由るが故に、常に能く善く說くなり。若し所依に於ける無礙の覺慧ならば、法無礙と名く。法の異門に於て罣礙無きが故に。若し能依に於ける無礙の覺慧ならば、義無礙と名く。一切法の自相共相に於て罣礙無きが故に。或は諸法の別義の意趣に於て罣礙無きが故なり。若し其の言に於ける無礙の覺慧ならば訓詞無礙と名く。諸の國土の各別の境界の種々の言詞に於て、自ら展轉する異想に隨つて隨說して罣

【九】那伽(Nāga)は普通には龍と譯す、此には大力有るものとして佛をいふ。

切の境に周ねし。「心解脫」とは、上の三德を具して心繫縛を離るるなり。

論曰

能く諸の有情の　　一切の惑を滅して餘す無く
煩惱を害し染有るも　　常に哀愍するに歸禮す

釋曰　此の頌は無諍を顯はす。世俗の智を性と爲す。聲聞の得る所の無諍の、將に城邑に入らんとして先づ審かに觀察し、若し一りの有情も當に我が身を緣して隨つて一種の煩惱諍を起さば卽便ち入らざるに同じからず。如來は觀見して、諸の有情は當に佛身を緣じて諸の煩惱を起すと雖も、若し彼れ佛の化を受くるに堪任する者ならば、卽便ち彼に往きて方便して調伏し。煩惱を滅せしむ。「能く諸の有情の一切の惑を滅して餘す無く」とは、聲聞の無諍定に住し、方便遠離して自身をして少しの有情の煩惱を生ずる緣と作らしめず、唯欲界の有事の煩惱を伏するのみにて、餘の煩惱に非ざる如きに非ず。諸佛は爾らず、方便して能く一切の有情の一切の煩惱を滅し餘すこと有ること無からしむ。「煩惱を害す」とは、唯煩惱を害して有情を害せず。「染有るも常に哀愍す」とは、若し諸の有情は煩惱染有るも、佛は常に哀愍して訶害せず。頌に言へる有るが如し。

鬼を呪する良醫の　　諸の鬼に魅せらるゝものを治するに
但鬼魅を訶害して　　鬼に魅せらるゝ者には非ざるが如く
是の如く大悲尊は　　煩惱に魅せらるゝものを治するに
但煩惱を訶害して　　有情を訶害せず。

論曰

無功用にして著無く　　無礙にして常に寂定
一切の問難に於て　　能く解釋するに歸禮す。

す。

論曰　諸の有情を憐愍し　和合と遠離と。
常に捨てざると利樂との　四の意樂を起すに歸禮す。

釋曰　今此の頌の中には四無量を顯はす。「諸の有情を憐愍す」とは、是れ總句なり。「和合の意樂を起す」とは、慈無量を顯はす。有情をして和合を樂はしめんと欲するが故に。「遠離の意樂を起す」とは、悲無量を顯はす。有情をして苦を遠離せしめんと欲するが故に。「常に捨てざる意樂を起す」とは、喜無量を顯はす。有情をして樂を捨てざらしめんと欲するが故に。「利樂の意樂を起す」とは、捨無量を顯はす。有情をして利益及び安樂を獲得せしめんと欲するが故なり。「捨」とは謂はく棄捨なり。有情をして樂受等の煩惱隨眠を捨てしめんと欲するも、有情を捨てず。又中に處して住するを說いて名けて捨と爲す。此の功德に緣りて諸佛の法身に歸依し敬禮す、故に「歸禮」と名く。餘の頌は此に准じて一切應に知るべし。

論曰
一切の障を解脫せる　牟尼は世間に勝れ
智は所知に周遍し　心解脫せるに歸禮す。

釋曰　「一切の障を解脫せる」とは、此の句は諸佛の解脫の聲聞等に勝ぐれたることを顯示す。「牟尼は世間に勝れ」とは、此の句は、諸佛の勝處は聲聞等に勝ぐれたるを顯示す。「智は所知に周遍す」とは、此の句は、諸佛の遍處は聲聞等に勝ぐれたるを顯示す。聲聞乘等の如く、唯八種の解脫、八種の勝處、十種の遍處有るのみに非ず。解脫を先と爲して勝處有り。勝處を先と爲して遍處有り。此の門に由るが故に、作意思惟して一切の障を解脫し、一切の世間に勝れ、智は一

如來には種々の想無し。阿羅漢の如きは、有餘の生死に於て一向に極めて厭逆する想を起し、無餘の涅槃に於て一向に極めて寂靜なる想を起すも。如來は彼の有餘の生死と、無餘の涅槃とに於て差別の想無く、最勝なる捨に住す。又諸の如來は[五]不定の心無し。阿羅漢の如きは、[六]斂むれば心方に定まるも、[七]出づれば卽不定なり。如來は彼の一切の分位に於て不定の心無し。又諸の如來には不擇の捨無し。阿羅漢の如きは、智慧を以て有情の諸の利樂の事を簡擇することをせずして便ち棄捨するも、如來には是の如き等類の擇ずして捨つること有る無し。又諸の如來には欲等の六種の退失有ること無し。阿羅漢の如きは、能く所知障を永へに淨むる中に於て、未だ得ざるに退くこと有り。謂ゆる志欲退。精進退。念退。定退。慧退。解脫退なり。是の如き六退は諸佛には皆無し。又諸の如來の身語意の業は、智を前導と爲し、智に隨つて轉ず。阿羅漢の如きは、或は一時に於て善の身業轉じ、或は一時に於て無記の業轉ず、語業、意業も當に知るべし。亦爾なり。如來の三業は智を前導とするが故に、智に隨つて轉ずるが故に、無記有ること無し。智等起するが故に智前導すと名け、智と倶に行ずるが故に、智に隨つて轉ずと名く。又諸の如來は三世の境に於て、若くは知り、若くは見るも無著無礙なり。阿羅漢の如きは、三世の事に於て暫起の心にて卽ち能く解するに非ざるが故に、知見に著有り。一切を悉く了知する能はざるが故に、知見に礙有るも、如來は彼の三世の事の中に於て、暫くも心を起す時は卽ち遍く一切の境界を解知す。是の故に知見に著無く礙無し。是の因緣に由りて此の[八]十八種を一一皆不共の佛法と名く。「一切相の妙智」とは、謂はく一切の蘊、界、處の中に於て、善く能く一切の行相を了知するなり。等とは餘の無量の功德の法身と相應するを等す。

論曰、此の中に多頌有り、

釋曰　此の法身の能依なる不共の諸の功德の中に於て、讃頌門を以て句々結び、道理を分別開示

【五】不定とは心の散亂するをいふ。
【六】斂むとは定に依つて心を收斂すること。
【七】出づとは出定するの意。
【八】前說の九項の中にて六種の退失無しと、身語意の三業の智を前導となすと及び三世の境に於て著礙無しとを開いて合して十八種となる。

身業は、淸淨に現行して不淸淨なること無し。現行の身業を他の知ることを慮り恐るれば藏護を須ゆべし。是の如きを名けて第一不護と爲す。身業を說けるが如く、語業、意業も亦是の如く說く。是れ三不護なり。「三念住」とは、謂はく諸の如來の正法を說く時、一類の弟子は恭敬して耳に屬し、教を奉ずる心に住し、精進修行し、法隨法行するも、如來は彼に於て悅無く喜無く、心踊躍せず。一類の弟子は恭敬を生ぜず、前の廣說に翻するも、如來は彼に於て恚恨を生ぜず、不忍を生ぜず、保任せざるに非ず。一類の弟子は亦は恭敬し亦は恭敬せず、乃至[四]廣說す。如來は彼に於て其の心二無し。謂ゆる喜悅せず亦恚恨せず、彼の一切に於て遍く妙捨に住す。「拔除習氣」とは、謂はく永へに拔除して煩惱無しと雖も、而も煩惱の相に似たる所作の、騰躍等の事有るなり。「無忘失法」とは、謂はく諸の有情を利益する事に於て、正念し正知して時分を過たざるなり。「大悲」と言ふは、謂はく有情を利樂する意樂に於て大義を當に說くべきなり。「十八の不共佛法」とは、謂はく不同の義は是れ不共の義なり。卽ち諸の如來は誤失有ること無し。阿羅漢の如きは諸漏を盡すと雖も、乞食の爲めの故に城邑に出遊し、或は一時に於ては、惡象、惡馬、惡牛、惡狗等と共に同じく遊止し、或は一時に於ては足叢刺を踐み、諸の惡蛇等と齊足して跳躑し。或は一時に於ては是の如きの舍に入り、諸の母邑と正理に依らずして語言を作し、或は林野に於ては好道を捨棄して惡路を行き。或は怨賊師子、猛獸及び他妻等と同じく共に遊止す。是の如きの類には諸の阿羅漢は誤失有る所なるも、諸佛は皆無し。又諸の如來には卒暴の音無し。阿羅漢の如きは、或は一時に於ては林野に遊行して道路を迷失し、或は空宅に入りて聲を揚げて叫喚し、大暴音を發す、或は不染の習氣の過失に因りて脣を聚め齒を露はして大笑を現す。是の如きの類は、諸の阿羅漢の卒暴の音聲なるも、諸佛には皆無し。又諸の如來には忘失の念無し。阿羅漢の如きは不染汚の久遠の所作、久遠の所說の諸の忘失の念有るも、諸佛には皆無し。又諸の

【四】廣說すとは前の二類の弟子に說く所を反覆することを略するなり。

は、此の功德は永へに煩惱及び所知の障を斷ずる身の中に起ることを顯はすが故なり。是の如く說く所の「最も淸淨」の言は、應に知るべし、一一の功德に遍在す。「四無量」とは、謂はく無量の有情を緣じて境と爲す慈悲喜捨なり。「解脫」と言ふは、謂はく八解脫なり。所謂、有色には諸色を觀ずる等なり。「勝處」と言ふは、謂はく八勝處なり。「遍處」と言ふは、謂はく十遍處なり。無諍と願智とには更に差別無し。「四無礙解」とは、謂はく法無礙解、義無礙解、訓詞無礙解、辯說無礙解なり。「六神通」とは、謂はく如意通を初と爲し、漏盡智を後と爲す。「三十二大士の相」とは、謂はく妙輪相印手足等なり。「八十二隨好」とは、謂はく鼻脩直等なり。「四の一切相淸淨」とは、謂はく所依淸淨、所緣淸淨、心淸淨、智淸淨なり。「十力」と言ふは、謂はく處と非處との智力、業と異熟との智力、靜慮、解脫、等持、等至の智力、根の勝劣の智力、種種の勝解の智力、種々の界の智力、遍趣行の智力、宿住隨念の智力、死生の智力、漏盡の智力なり。「四無畏」とは、謂はく佛世尊は自ら誠言を發すらく我は是れ眞實の正等覺者なり。若し是の如きの法に於て正等覺せずと難言するもの有るも、我れ彼の難に於て正に緣無きを見る、と。是れ第一の無畏なり。又誠言を發すらく、我は是れ眞實に諸漏を盡くす者なり。若し是の如く是の如きは諸漏未だ盡きずと難言するもの有るも、我れ彼の難に於て正に緣無きを見ると。是れ第二の無畏なり。又誠言を發すらく、我は弟子の爲に出離の道を說く。若し是の如き道を修しては正しく苦を出づるに非ずと難言するもの有るも、我れ彼の難に於て正に緣無きを見る、と。是れ第三無畏なり。又誠言を發すらく、我れ弟子の爲に法を障礙する染は必ず障と爲ると說く。若し彼の法を染むと雖も障と爲す能はずと、難言するもの有るも、我れ彼の難に於て正に緣無きを見る、と。是れ第四無畏なり。此の四の中に於て、皆應に廣說すべし。正に彼の難には緣有ること無きを見るが故に、大安隱を得、安隱を得るが故に都て畏るゝ所無し。「三不護」とは、謂はく諸の如來の有する所の

佛法を轉得す。

論曰　諸佛の法身は當に異有りと言ふべきや、當に異無しと言ふべきや。依止と、意樂と、業とに別無きが故に、當に異無しと言ふべし。無量の依身等覺を現ずるが故に、當に異有りと言ふべし。佛の法身を說くが如く、受用身も亦爾なり。意樂及び業に差別無きが故に、當に異無しと言ふべし。依止の無差別に由らざるが故に、無量の依止は差別して轉ずるが故に。應に知るべし、變化身も受用身の說の如し。

釋曰　諸佛の法身は依止と意樂と作業とに別無きが故に、異ること無し。諸佛の眞如に異有ること無きが故に依止に別無し。一切皆、一切の有情を利益し安樂に爲す意樂同じきが故に意樂に別無し。一切皆同じく他を利して勝れたる現等正覺・般涅槃等の種々の作業を爲すが故に、業に別無し。「無量の依身は等覺を現ずるが故に、當に異有りと言ふべし」とは、謂はく無量なる別々の依身に由りて菩提薩埵は成佛を現ずるが故に、異り有ること無きに非ず。前に廣く說けるが如し。法身を說けるが如く受用も亦爾り。此れ意樂及び業に別無きことを說くも、依止には差別有ること無しと說かず。「無量の依止は差別して轉ずるが故に」とは、謂はく一切の別の世界の中に於て、諸の佛國土、衆會、名號、身量、相好、法樂を受くる等、各同じからざるが故なり。佛の變化身も應に知るべし亦爾り。

論曰　應に知るべし、法身は幾くの德と相應する、謂はく最も淸淨なる四無量・解脫・勝處・遍處・無諍・願智・四無礙辯・六神通・三十二の大士相、八十の隨好、四の一切相淸淨・十力・四無畏・三不護・三念住・拔除習氣・無忘失法・大悲・十八の不共佛法、一切相の妙智等の功德と相應す。

釋曰　此の中、諸佛世尊と聲聞等と共に有する所の淸淨なる殊勝の功德を顯說す。「最も淸淨」と

ことを轉じて、一切有情の一切の災横過失を拔濟する智を得るが故なり。應に知るべし、法身は此に說く所の六種の佛法に由りて攝持せらる。

釋曰　自性の攝に就いて以て法身の自性を攝持することを顯はす。「淸淨に由る」とは、謂はく淸淨に由りて、佛法は法身の自性を攝持す。其の法身の體淸淨なるを以ての故なり。誰を淨とし、誰を轉じて淸淨を得るや。此の問に答へんが爲に、是の如きの言を說く、「阿賴耶識を轉じて法身を得るが故に」と。阿賴耶識は一切の雜染の種子を執持するに由り、對治起る時に、是の如き一切の染種を轉滅し、一切の無罪に隨順する圓滿なる功德を轉得す。譬へば世間の阿揭陀藥の、能く有毒を變じて無毒を成ぜしむるが如し。故に說いて「轉」と名く。「異熟に由る」とは、謂はく異熟に由りて、佛法は法身の自性を攝持す。「色根を轉ず」とは、謂はく眼等の有色の諸根を轉ずるなり。「異熟智を得」とは、謂はく轉捨する所是れ異熟なるが故に、假に轉得を說いて亦異熟と名く。昔得る所の異熟の諸根の如く、今得る善智を假に異熟と名く。「安住に由る」とは、謂はく安住に由りて佛法は法身の自性を攝持す。「欲行等を轉ず」とは、謂はく等とは勝解行を等取す。彼を轉ずるに由るが故に、一切の有情の諸の災患を息滅する智を證得す。「自在に由る」とは、謂はく自在に由りて、佛法は法身の自性を攝持す。「攝受の業」とは、謂はく諸の世間の商賈、營農、事王等の業なり。彼を轉ずるに由るが故に、無礙神通の自在を證得す。「言說に由る」とは、謂はく言說に由りて佛法は法身の自性を攝持す。世間の見等の言說を轉ずるに由りて見聞覺知の自在を證得す。此に由りて一切の有情の心を喜ばしむる妙智を逮得す。「拔濟に由る」とは、謂はく拔濟に由りて、佛法は法身の自性を攝持す。「災横等」とは、謂はく世間、國王、家等より生ずる所の憂苦の如きは、或は親友の力、或は財寶の力にて能く息除す。此れを轉ずるに由るが故に、一切の有情の災横過失を息除する妙智を證得す。是の如き六種の世法を轉捨して、是の如き六種の

は、謂はく契經等の法の所詮の義は皆圓滿することを得て、自の意樂に隨つて現在前するが故なり。「德の圓滿」とは、謂はく神通等の功德圓滿するなり。法味も亦無量なるを見るに由るが故に。義の圓滿も亦無量なるを見るが故に。德の圓滿も無量なるを見るが故に、大歡喜を生ずるなり。復有るが說きて言く、義とは、謂はく涅槃なり、德とは謂はく樂ひに隨つて起る所の功德なり。俱に圓滿するが故に並に大喜を生ず、と。「喜の最勝にして過失無きを得。諸佛は常に盡くる無きを見るが故なり」とは、謂はく諸の如來は自身の中に眞如一味にして、能無量等の生ずる所の大喜を見て涅槃に入ると雖も、亦常に盡くること無し。是の故に最勝にして過失有ること無し。三界を出づるが故に名けて「最勝」と爲す。煩惱所知の二障と幷びに習とは皆永へに斷ずるが故に「過失無し」と名く。「種々の受用身の依止に由る等」とは、謂はく法身を增上緣と爲すに由りて、彼れ轉ずることを得るが故に、說いて「依止」と名く。日光の日に依るが如き道理に非ず。變化身の與に所依止と爲るも、其の義亦爾り。「多くの爲め」と言ふは、勝解行地の菩薩を攝取するなり。劣信解の諸の聲聞等は、佛身を見ると雖も、成熟すべからざるを以てなり。初業の菩薩も、當に知るべし亦爾なり。已に大地に入れる諸の菩薩衆は、化身に由らずして方に成熟することを得。甚深廣大の法に通達するが故なり。

論曰 應に知るべし、法身は幾くの佛法に由りて攝持せらるゝや。略して六種に由る。一には淸淨に由る、謂はく阿賴耶識を轉じて法身を得るが故なり。二には異熟に由る、謂はく色根を轉じて異熟智を得るが故なり。三には安住に由る。謂はく欲行等の住を轉じて無量智の住を得るが故なり。四には自在に由る。謂はく種々の攝受の業の自在を轉じて、一切世界の無礙の神通智の自在を得るが故なり。五には言說に由る、謂はく一切の見聞・覺知・言說・戲論を轉じて、一切の有情の心をして喜ばしむる辯說智の自在を得るが故なり。六には拔濟に由る、謂はく一切の災橫。過失を拔濟する

止に由る。多く聲聞等を成熟せんが爲の故なり。

釋曰「幾種の處に由りて應に依止することを知るべきや」とは、此れ法身は幾種の法の與に所依止と爲るやを問ふなり。「略して三處に由る」とは、廣くは卽ち無量の功德の依止なり。今且らく略して但三處に由ると說く。「種々の佛住の依止に由る」とは、諸の如來の得る所の法身は、安住する所の種々の天住。聖住。梵住の與に所依止と爲るに由る。諸の天住の中には如來は多く第四靜慮に住す。諸の聖住の中には如來は多く空解脫門に住す。諸の梵住の中には多く其の悲に住す。是の如き種々の如來の所住は聲聞等に勝る。如來の證する所の涅槃は、聲聞等の得る所の涅槃に勝ることを顯はさんが爲の故に「諸佛は五性の喜を證得す等」と說く。「自界を證す」とは、自の法界を證するなり。此の修治に於て正しく證を作すが故に、名けて「等しく證す」と爲す。「喜を離る」と言ふは、謂はく諸の如來は自の法界を證して五喜に安住す。諸の聲聞等の證は、斬首の如く永へに滅する涅槃にして、是の如き最勝の歡喜を遠離するが故なり。「喜を求むる者は應に等しく證すべし」とは、謂はく諸の菩薩は五喜を勤求す、應に正しく求めて此の眞の法界を證すべし。何等をか五の求むる所の勝喜と爲すや。故に次に說いて言はく、「能の無量なると事の成ずるに由る等」と。因別なるに由るが故に爾所の喜は異る。「能」とは堪能を謂ふ。無量と言ふは謂はく無量の殑伽沙數を過ぐるなり。諸佛如來の所有の堪能は同じく法身に依り、一切和雜し平等にして異り無し。是の如き能の無量を見るに由るが故に、大歡喜を生ず。「及び」とは集の義なり。「事」とは作す所の一切の有情の諸の利樂の事なり。彼の能くする所に隨つて無倒に三乘等を安立す。「成ず」とは、謂はく成辦なり。無量の時を經て、此の所作の事は無礙に轉ずるが故なり。堪能を見るに由つて、應に作すべき所の事も亦無量なるが故に大歡喜を生ず。「法味」と言ふは、謂はく契經等の無上の法味にして、謂ゆる眞諦を證して得る所の理味なり。「義の圓滿」と

自在なり。「能く現化の自在を轉ず」とは、其の欲する所の如く能く現化するが故に。「變易の自在」とは、其の欲する所の如く地等を轉變して金等を成ずるが故に。「大衆を引攝する自在」とは、意の樂ふ所の如く天等の諸の大衆を引攝するが故に。「白法を引攝する自在」とは、意の樂ふ所の如く無漏の法をして現在前せしむるが故なり。阿賴耶識等の八事の識蘊を轉ずるに由りて、大圓鏡智等の四種の妙智を得。數の次第の如く或は所應に隨ひて當に知るべし。此の中、阿賴耶識を轉ずるが故に大圓鏡智を得、[三]所識の境は現在前せずと雖も、而も能く時處を忘れず限らず。一切の境に於て常に愚迷ならず。無分別の行能く起つて佛智の影像を受用す。染汚の末那を轉ずるが故に平等性智を得。初めに現觀する時、先に已に證得し、修道の位に於て轉復清淨なり。此に由りて無住涅槃に安住し、大慈大悲と恒に與に相應して、能く樂ふ所に隨つて佛の影像を現ず。意識を轉ずるが故に妙觀察智を得、一切の陀羅尼門、三摩地門を具足すること猶寶藏の如く、大會の中に於て能く一切の自在の作用を現じ、能く諸疑を斷じ能く法雨を雨ふらす。五識を轉ずるが故に成所作智を得、普く十方一切の世界に於て能く變化を現じ、覩史多天宮より沒し、乃至涅槃して、能く一切の有情を住持して利樂の事を現ずるが故なり。

論曰　復次に法身は幾種の處に由りて應に依止することを知るべきや。略して三處に由る。一には種々の佛住の依止に由る。此の中に二頌有り、

諸佛は五性の喜を證得す　皆等しく自界を證するに由るが故なり
喜を離るるは都て此れを證せざるに由る　故に喜を求むる者は應に等しく證すべし。
能の無量なると及び事の成ずると　法味と、義と德と倶に圓滿なるとに由り
喜の最勝にして過失無きを得　諸佛は常に盡くること無きを見るが故なり。

二には種々の受用身の依止に由る、但諸の菩薩を成熟せんが爲の故なり。三には種々の變化身の依

【三】所識の境とは阿賴耶識の所緣の對境の意。

と、平等と、觀察と、成所作との智の自在に由る、識蘊の依を轉ずるに由るが故なり。

衆を引攝すると、白法を引攝するとの自在に由る。行蘊の依を轉ずるに由るが故なり。五には圓鏡と、文身とを辯說する自在に由る、想蘊の依を轉ずるに由るが故なり。四には現化と、變易と、大なる無量廣大の樂住の自在に由る、受蘊の依を轉ずるに由るが故なり。三には一切の名身と、句身

釋曰　五蘊の依を轉ずるに由るが故に五の自在を得。諸の聲聞等は苦を怖畏するが故に、永へに諸蘊を斷ず。愚なる癡人は自ら身命を捨つるが如し。若し諸の菩薩は巧方便(ぎやうはうべん)を攝して、罪有る色等の諸蘊を轉滅し、罪無き色等の諸蘊を轉起す。智ある癡人の諸の良藥を求めて病有る身を轉じて病無き身を成ずるが如し。此の中、色蘊の依を轉ずるに由るが故に能く佛土を示現する自在を得。其の欲する所の如く金銀等の諸の佛土を現ずるが故なり。能く自身を示現する自在を得。心の思ふ所に隨つて皆能く示現し、其の種々の大集會の中に於て、諸の所化の有情の機宜に隨つて各別に現ずるが故なり。能く相好を示現する自在を得。愛樂する所に隨つて種々の妙へなる相好を示現するが故なり。能く無邊の音聲と、無見頂相との二種を示現する自在を得。佛の音聲の量は無邊なることを現ずるが故に。佛の頂相は能く見るもの無きを現ずるが故なり。受蘊の依を轉ずるに由るが故に。無罪なる無量廣大の樂住の自在を得るなり。應に知るべし、此の中、煩惱を離るゝが故に名けて「無罪」と爲す。衆多有るが故に名けて「無量」と爲す。一切の三界の樂を超過するが故に名けて「廣大」と爲す。想蘊の依を轉ずるに由るが故に、能く一切の名身、句身、文身を辯說する自在を得。能取の相は是れ想の自性なるを以て、是の如き資糧を攝するを因と爲すに由り、是の如き功能の差別を轉得す。此に由りて能く名身等の事に於て其の欲する所に隨つて自在に能く住す。行蘊の依を轉ずるに由るが故に、能く現化し、變易し、大衆を引攝し、白法を引攝する自在を得。謂はく行蘊の中には思を最も勝と爲す。此の思に由るが故に現化等に於て

るもの有ること無きが故に、諸の尋思の所行の處に非ざるが故なり。

釋曰 「思議」と言ふは、謂はく道理に依つて審諦思惟するなり。分別を起す智は尋思の攝する所、譬喩の顯はす所にして、諸佛は此の所行の處に非ざるが故に、思議すべからず。一切の尋思の地を超過するが故に、唯應に信解すべく、思議すべからず。

論曰 復次に云何が是の如き法身を最初に證得するや。謂はく總相の大乘の法境を縁ずる無分別智と及び後得智とを、五相にして善く修し、一切の地に於て、善く資糧を集め、金剛喩定にて、微細にして破し難き障を破滅するが故に、此の定の無間に一切の障を離る。故に轉依を得。

釋曰 信解も亦初得法身と名く、法行も亦爾り。彼に簡ばんが爲の故に現の證得を説く。但し證得と言ふも、生起する者に非ず、體是れ常なるが故なり。「總相を縁ず等」とは、其の義了じ易し。「五相にして善く修す」とは、謂はく無生、無滅、本來寂靜、自性涅槃、及び無自性を名けて五相と爲す。又[二]集總等の五相を善く修して五果を成辦す。謂はく念々の中に一切の麁重の依止を銷融し、種々の想を離れて法苑の樂を得、能く正しく周遍する無量、無分限の相を了知し、大法の光明は清淨分に順じて分別する所無き無相を現行し、法身をして圓滿し成辦せしめんが爲に能く正しく後々の勝因を攝受するなり。「微細にして破し難き障を破滅するが故に」とは、此の定を金剛に喩ふる因を顯示す。譬へば金剛の、其の性堅固にして能く破し難きを破するが如く、是の如く此の定は、諸の下類を超えて能く破し難き不染無知を破し、能く無上清淨の智道を發すが故に、金剛に譬ふ。「此の定の無間に一切の障を離るゝが故に轉依を得」とは、無分別及び後得智に由るが故に、轉依を證して佛の法身を得るなり。

論曰 復次に法身は幾くの自在に由りて自在を得るや。略して五種に由る、一には佛土と、自身と、相好と、無邊の音聲と、無見頂相との自在に由る。色蘊の依を轉ずるに由るが故なり。二には無罪

【二】 第七卷の論本に出づ。

して佛乘に置くべからず。更に第二佛有ること無きを以ての故なり。是れ則ち如來の作す所の佛事は應に圓滿せざるべし。是の故に定んで應に多佛有ることを許すべし。「初無きが故に」とは、謂はく諸の如來は前前に出世して猶生死に最初有ること無きが如し。集めたる資糧を離れて自然に成佛することは理に應ぜざるが故に、佛に逢事することを離れて、能く資糧を集むることは理に應ぜざるが故に。此に由りて決定して唯一佛のみに非ざるなり。又定んで多佛有りと應に執すべからず。無垢の所依には差別無きが故に。無漏の法界を無垢の依と名く。智の殊勝に由りて畢竟して客塵の垢を遣除するが故なり。此の無漏の眞法界の中に於て、定んで諸佛は異り有りと執すべからず。是の故に諸佛は一に非ず多に非ず。

論曰　四には常住を相と爲す、謂はく眞如清淨の相なるが故に。本願の引く所なるが故に、應に作すべき所の事は竟るの期無きが故なり。

釋曰　恒に變易無く相續して斷ずること無し、是の故に說いて「常住を相と爲す」と言ふ。三の因緣に由りて此の相を成立す。「眞如清淨の相なるが故に」とは、此れ眞如は性常にして變無きことを顯はし、成佛の果を說いて法身と爲すことを顯はす。性若し變易すれば卽ち眞如に非ず。是の故に常住なり。「本願の引く所なるが故に」とは、謂はく諸の如來は皆先に是の如きの大願を發起せり。我れ當に無量の有情を度脫して般涅槃せしむべし、と。諸の有情の類は未だ般涅槃せざれば、願の引く所の果は相續して絕えず。是の故に常住なり。此の願の引く所の相續を離るれば、常(住)の道理成ぜず、應に作すべき所の事は竟るの期無きが故に」とは、謂はく先の大願の應に作すべき所の事は、究竟の期無きなり。諸の有情の類は量無邊なるが故に、乃至有情相續して斷ぜず。(隨つて)佛の作す所の事は恒に斷ずること無きが故に、說いて名けて常と爲す。

論曰　五に不可思議を相と爲す。謂はく眞如清淨にして自の內證なるが故に、世間の喩の能く喩ふ

釋曰　「有無の二無きを相と爲す」とは、謂はく有相に非ざるは、一切法の遍計所執には皆有ること無きを以ての故に。亦無相に非ざるは、空所顯には自性有るを以ての故なり。「有爲、無爲の二無きを相と爲す」とは、業煩惱の所爲に非ざるを以ての故に、有爲の相に非ず。能く似の有爲法を示現するに於て大自在を得、數々似の有爲を示現するが故に、無爲の相に非ざるなり。「異性と一性と二無きを相と爲す」とは、佛の法身の體は是れ其れ一なるを以ての故に、異相に非ず。無量の依止は各別に證得するが故に、一相に非ず。倶と一と無なるが故に無二の相と名く。復二頌を以て是の如き義を攝し、其をして了じ易からしむ。謂はく「我執有らざるが故に等」と。若し是の處に於て其の我執有りて。自を計して我と爲し、外を執して他と爲さば、即ち其の中に於て自他此彼各異ると分別す。法身の中に於ては我執有ること無し、故に此彼の異り有りと分別すること無し。若し爾らば云何が多佛有りと說くや。前の能證に差別有るに隨ふが故に、異有ることを施設す。謂はく菩薩の能證の位の別に隨つて、異有ることを施設し、世間の名言に隨順するが故に、此れは是れ釋迦牟尼佛なり。此れは是れ勝觀佛なり等と說く。「種性異るが故に」とは、謂はく本の因性に差別有るが故に、唯一佛に非ざるなり。種性に二有り。一には本性住種性、謂はく無始より來、六處の殊勝は展轉相續して法爾に得る所なり。二には習所成種性、謂はく先より來、善友力等の數習の所成なり。本性住性に差別有るが故に、習所成性に其の多種有り。種性多きが故に、唯一佛を執して更に餘佛無しとするは道理に應ぜず。「虛に非ざるが故に」とは、多くの菩薩有り、前の種性に依りて各別に菩提の資糧を修集す。若し唯一佛のみならば、一のみ菩提を證して、餘は證する所無く、彼の集むる資糧は應に空しくして果無かるべし。（これ）道理に應ぜず。「圓滿なるが故に」とは、謂はく諸の如來は遍く分別の所に於て有情を化し、利益安樂の正事を成立す。謂ゆる三乘に於て應の如く安立す。若し唯一佛のみならば、是れ則ち有情を安立

樂つて忍を修せしが故に、諸の有情の心の樂ふ所に隨つて轉ぜしが故に、今地等、金等を獲得することとは、勝解に隨つて轉ずるなり。「願の自在」とは、謂はく願ふ所に隨つて一切の事成ずるなり。「精進波羅蜜多の圓滿するに由るが故に」とは、謂はく此の自在は是れ精進の果なり。昔因時に精進を修せしに由るが故に、諸の有情の諸の利樂の事に於て懈癈有ること無かりしが故に、今時に於て願ふ所自在なり。「神力の自在は五通の所攝なり」とは、謂はく意樂に隨つて種々なる最勝の神通を引發するなり。「靜慮波羅蜜多の圓滿するに由るが故に」とは、謂はく此の自在は是れ靜慮の果なり。昔因時に樂つて定を修せしに由るが故に、諸の有情の應に作すべき所の事に隨つて種々の靜慮、等至に證入せしが故に、今時に於て定所作の神通の自在を得。「智の自在」とは、謂はく所有の種々の言音に隨つて智現前するが故なり。「法の自在」とは、謂はく意樂に隨つて契經、應頌等を宣說するが故なり。「般若波羅蜜多の圓滿するに由るが故に」とは、謂はく此の自在は是れ般若の果なり。昔因時に樂つて慧を修せしに由るが故に、其の[一]類音に隨つて爲に正法を說きしが故に、今殊勝なる般若を證得し、言音に妙達して巧みに正法を說く。

論曰　三には無二を相と爲す、謂はく有無の二無きを相と爲す。一切の法には所有無きに由るが故に、空所顯の相は是れ實有なるが故に、有爲と無爲との二無きを相と爲す。業煩惱の爲す所に非ざるに由るが故に。自在に有爲の相を示現するが故に。異性と一性と二無きを相と爲す。一切の佛の所依は差別無きに由るが故に。無量に相續して等覺を現ずるが故なり。此の中に二頌有り、

我執有ならざるが故に　中に於て別の依無し
前の能證の別に隨ふ　故に異有ることを施設す、
種性の異なると虛に非ずと　圓滿なると初め無きが故にと
無垢の依には別無しとの　故に一に非ず多に非ず。

【一】類音とは所化の有情に類同せる言音の義。

中、壽の自在と、心の自在と、衆具の自在とは、施波羅蜜多の圓滿するに由るが故に。業の自在と生の自在とは、戒波羅蜜多の圓滿するに由るが故に。勝解の自在は忍波羅蜜多の圓滿するに由るが故に。願の自在は精進波羅蜜多の圓滿するに由るが故に。神力の自在は五通の所攝にして靜慮波羅蜜多の圓滿するに由るが故に。智の自在と法の自在とは般若波羅蜜多の圓滿するに由るが故なり。

釋曰 「白法の所成を相と爲す等」とは、謂はく諸の聲聞の得る所の轉依は、唯是れ煩惱を永く斷じて顯はるゝ所にして、白法の成ずる所を相と爲すこと有る無し。若し諸の菩薩の得る所の轉依ならば、六種の波羅蜜多を修習し極めて圓滿するが故に、白法の自性の十種の自在を以て其の相と爲す。此の時の中に於ては、一念も是れ無記の分なること有る無し、況んや染汚分をや。「此の中」已下に十の自在を釋す。「壽の自在」とは、謂はく欲する所に隨つて能く命を捨つるが故なり。「心の自在」とは、謂はく生死に於て染汚無きが故に、又意樂に隨つて能く正しく他の爲に衆具を引攝し、中に於て自在に其の心を運轉するを心自在と名く。「衆具の自在」とは、謂はく飲食等の諸の資生の具を、意の樂ふ所に隨つて能く積集するが故なり、衆具と資財とは其の義是れ一なり。「施波羅蜜多を圓滿するに由るが故に」とは、謂はく法施、無畏施、財施に由りて圓滿し、其の所應の如く此の果を得るが故なり。「業の自在」とは、謂はく諸業に於て大自在を得。唯善業のみを作して、惡無記に非ず、及び其の中に於て他を勸めて作さしむるが故なり。「生の自在」とは、謂はく一切の應に生ずべき處に於て、其の欲する所の如く受生を現ずるが故なり。「戒波羅蜜多を圓滿するに由るが故に」とは、謂はく二の自在は是れ尸羅の果なり。戒を具する者は唯善業を造るに由るが故に、又戒を具する者は所願皆成ずるが故なり。「勝解の自在」とは、謂はく地等に於て勝解を發起して金等を成ぜしむ。勝解する所の如く地等金等は勝解に隨つて轉ず。「忍波羅蜜多を圓滿するに由るが故に」とは、謂はく此の自在は是れ其の忍の果なり。昔因時の如きに

諸佛菩薩は展轉して妙色身等を受用し、及び經等の種々の法義を受け、自相及び共相を安立するが故なり。何者か所依なりや、復是れ誰か依なるや。謂はく前の無垢無罣礙等なり。此の妙智の增上力に由るが故に、能く不可思義の解脫に安住せしむ。已に大地に入る諸の大菩薩は、淸淨なる佛土に大乘の法樂の相を現ずる智を生ず。變化身の中、「法身に依る」とは、前に已に說けるが如し、謂はく果智の殊勝なる力に依るが由に、覩史多天宮より現沒し、乃至涅槃す。此れ卽ち能く餘の相續の中に人と同分の識相を生起せしむるなり。

論曰　此の中に一の嗢陀南頌を說く、

相と證得と自在と　依止と及び攝持と
差別と德と甚深と　念と業とにて諸佛を明かす。

釋曰　總義を略標するを嗢陀南と名く。相、證得等は是れ標する所の義なり。

論曰　諸佛の法身は何を以て相と爲すや。應に知るべし法身に略して五相有り、

釋曰　初の總標の相に復五種有り、下の轉依等は別して五相を釋す。

論曰　一には轉依を相と爲す、謂はく一切障の雜染分の依他起性を轉滅するが故に、一切の障を解脫することを轉得し、法に於て自在に轉じて、淸淨分の依他起性を現前するが故なり。

釋曰　「一切障の雜染分なる依他起性を轉滅するが故に」とは、謂はく雜染分の依他起性を轉じて、似の所取の相、及び能取の相をして永く生ぜざらしむるが故なり。「一切の障を解脫することを轉得し、法に於て自在に轉じて、淸淨分の依他起性を現前するが故に」とは、謂はく所取能取の無性の所顯なる離垢眞如の圓成實性を轉得し、及び一切法に於て自在にして轉ずることを得、極淸淨分に因る依他起性を現前するが故なり。

論曰　二には白法の所成を相と爲す。謂はく六波羅蜜多圓滿して十の自在を得るが故なり。此の

ず」と名け、即ち此の中に於て涅槃を證するが故に、「得ざるに非ず」と名く。

彼果智分第十一の一

論曰．是の如く已に彼の果斷の殊勝なることを說けり。彼の果智の殊勝なるは云何が見るべきや。謂はく三種の佛身に由りて應に彼の果智の殊勝なることを知るべし。一には自性身に由る、二には受用身に由る、三には變化身に由る。此の中、自性身とは、謂はく諸の如來の法身なり。一切法の自在に轉ずる所依止なるが故に。受用身とは、謂はく法身に依り、種々なる諸佛の衆會の所顯にして、清淨なる佛土にて、大乘の法樂を所受と爲すが故に。變化身とは、亦法身に依り、覩史多天宮より現沒して生を受け、欲を受け、城を踰えて出家し、外道の所に往きて諸の苦行を修し、大菩提を證し、大法輪を轉じ、大涅槃に入るが故なり。

釋曰　所斷を斷ずるに由りて、無垢無罣礙の智を獲得するが故に、斷の殊勝の無間に次いて果智の殊勝なることを說く。自性身の中、假の所立に非ざるが故に「自性」と名け。是の所依止なるが故に名けて「身」と爲す。法性卽ち身なるが故に「法身」と名け。或は是れ諸法の所依止の處なるが故に法身と名く。「一切法の自在に轉ずる所依止なり」と言ふは、謂はく一切法に於て自在に轉ずることを得るなり。亦所依止なるが故に、「一切法の自在に轉ずる所依止」と名く。或は持業釋に由る。受用身の中、「法身に依る」とは、彼れ有るに由るが故に而も此れ有ることを得るなり。「種々なる諸佛の集會の所顯にして」とは、謂はく有佛の土は諸の大菩薩衆の雲集する所なり。此に由りて了知するが故に「所顯」と名く。卽ち是れ西方の極樂土等なり。「清淨なる佛土にて大乘の法樂を所受と爲すが故に」とは、謂はく清淨なる佛國土の中に於て、種々なる大乘の法樂を受用して、義を領解するが故なり。或は清淨なる佛國土の中に於て、種々なる金銀等の寶を受用し、

應に知るべし顯と不顯とは　眞義と非眞義とにして
轉依するは卽ち解脱なり　欲するに隨つて自在に行ず、
生死と涅槃とに於て　若し平等智を起さば
爾の時此に由りて　生死卽ち涅槃なりと證す。
是に由りて生死に於て　捨つるに非ず捨てざるに非ず。
亦卽ち涅槃に於て　得るに非ず得ざるに非ず。

釋曰　轉依を顯はさんが爲に復多頌を說く。「諸の凡夫は眞を覆ふ等」とは、謂はく凡夫の如きは無明未を斷ぜず、眞義顯はれざるが故に說いて「覆ふ」と名く。無明の力の故に一切の虛妄は皆悉く顯現す。菩薩は爾らず、無明を斷ずるが故に、虛妄は皆所有無しと通達するが故に、「妄を捨つ」と名く。唯眞義のみ一向に顯現すること有るは、此の道理に由る。「應に知るべし、顯と不顯とは眞義と非眞義とにして」とは、謂はく圓成實の眞義は顯現し、遍計所執の非眞實の義は皆顯現せざるなり。「轉依」と言ふは、謂はく非眞の義は皆顯現せず。有らゆる眞義は皆悉く顯現するが故に轉依と名く。「卽ち解脱なり」とば、謂はく卽ち轉依を名けて解脱と爲す。「欲するに隨つて自在に行ず」とは、謂はく此の轉依解脱は自在にして、諸の世間に於て欲するに隨つて行ずることを得るなり。欲する所に隨つて所作自在なるに由るが故に「解脱」と名く。斬首の如く身命を捨離するに非ざるを、名けて解脱と爲す。「生死と涅槃とに於て若し平等の智を起さば等」とは、謂はく遍計所執の自性を名けて「生死」と爲す。此れ卽ち無性なり。無性なれば卽ち空なり。空なれば卽ち涅槃なり、圓成實性なり。「是に由りて生死に於て捨つるに非ず、捨てざるに非ず等」とは、謂はく卽ち生死は是れ涅槃なるが故に、說いて「捨つるに非ず」と名け。復生死の名想轉ずること無きが故に、「捨てざるに非ず」と名く。生死を離れて別に涅槃を得るに非ず、故に「得るに非

煩惱の熏習を損減し、所習の淨法の功能を增益す。又勝解の聞熏習に住するに由り、羞恥有るが故に、諸の煩惱をして少分に現行し、或は現行せざらしむ。「通達轉等」とは、謂はく已に菩薩の大地に證入するも、眞と非眞とに於て或は現じ(或は)現ぜず。無分別智は間有り、間無くして現行するが故なり。或時は眞現ず。謂はく觀に入る時なり。或は非眞現ず、謂はく觀を出つる時なり。非眞と眞とは此の二時に於て其の次第の如く現不現なりと說く。此の現と不現とあるは乃至六地までなり。「修習轉等」とは、所知障に由りて說いて有障と名く。此の轉依の位は乃至十地までにして、諸相現ぜず唯眞のみ顯現す。「果圓滿轉等」とは、一切の障に由りて說いて無障と名く。一切の障は永へに有ること無きを以ての故に。一切の相は皆顯現せざることを得。最も淸淨なる眞實顯現することを得。此の轉依に依りて、一切の相に於て大自在を得。諸相に於て自在を得るを以ての故に、其の樂ふ所に隨つて有情を利樂す。「下劣轉等」とは、其の言了じ易ければ煩しく重ねて釋すること無し。「廣大轉等」とは、謂はく雜染に於て斷ずるも而も捨てず。生死の中に於て無我に達するが故に。諸の雜染を斷ず。卽ち其の中に於て寂靜を見るが故に。而も棄捨せざるなり。「下劣轉に住すれば何の過失有りや等」とは、其の文解し易し。「廣大轉に住すれば何の功德有りや等」とは、一切の法に於て自在を得るが故に、一切の趣に於て一切の同分の身を示顯し、種々の調伏する方便善巧にて、所化の感(應)有る有情を安立して最勝なる生、及び三乘の中に置く。「最勝なる生」とは、謂はく諸の世間の安樂の生處なり。應に知るべし、此れは是れ法の功德を說けるを。

論曰　此の中に多頌有り、

諸の凡夫は眞を覆ひて　一向に虛妄を顯はし
諸の菩薩は妄を捨てて　一向に眞實を顯はす、

は是れ一切佛法にして、諸地の波羅蜜多の果なりと。所依等を云何が轉依し、何者が轉依なるや。謂はく卽ち此の依他起性に於て「對治起る時」とは、無分別智の起る時なり。「雜染分を轉捨す」とは、一切の所取能取の諸の迷亂の分を轉滅するなり。「淸淨分を轉得す」とは、彼の所取能取の性を捨するが故に、所取能取を遠離して自ら內に證する所の諸の戲論を絕したる最も淸淨なる分を轉得するなり。

論曰 又此の轉依に略して六種有り。一には損力益能轉、謂はく勝解力と聞熏習とに住するに由るが故に、及び羞恥有りて諸の煩惱をして少分現行し、(或は)現行せざらしむるに由るが故なり。二には通達轉、謂はく諸の菩薩は已に大地に入り、眞實、非眞實に於て顯現し顯現せずして現前に住するが故に。乃至六地までなり。三には修習轉、謂はく猶障有りて一切の相は顯現せず。眞實のみ顯現するが故に、乃至十地までなり。四には果圓滿轉、謂はく永へに障無く、一切の相顯現せずして、最も淸淨なる眞實のみ顯現し、一切の相に於て自在を得るが故に。五には下劣轉、謂はく聲聞等は唯能く補特伽羅の空無我性に通達するのみにて、一向に生死に背き、一向に生死を捨つるが故に。六には廣大轉、謂はく諸の菩薩は兼ねて法空無我性に通達して、卽ち生死に於て見て寂靜と爲す。雜染を斷ずと雖も而も捨てざるが故なり。若し諸の菩薩は下劣轉に住すれば何の過失有りや。一切の有情の利益安樂の事を顧みざるが故に、一切の菩薩の法に違越するが故に、下劣乘と解脫を同じくするが故に、是れを過失と爲す。若し諸の菩薩は廣大轉に住すれば何の功德有りや。生死の法の中にて自らの轉依を以て所依止と爲し、自在を得るが故に、一切趣に於て一切の有情の身を示現し、最勝なる生と及び三乘の中とに於て、種々の調伏する方便善巧にて化する所の諸の有情を安立するが故に。是れを功德と爲す。

釋曰 「損力益能轉等」とは、謂はく勝解力と及び聞熏習力とに由りて、異熟識の中に依附する

果斷分第十

論曰　是の如く已に增上慧の殊勝なることを說けり。彼の果の斷の殊勝なることは云何が見るべきや。斷とは、謂はく菩薩の無住涅槃にして、雜染を捨てゝ生死を捨てず、二の所依止の轉依を相と爲す。此の中、生死とは謂はく依他起性の雜染分なり。涅槃とは、謂はく依他起性の清淨分なり。二の所依止とは、謂はく二分に通ずる依他起性なり。轉依とは、謂はく卽ち依他起性の對治の起る時、雜染分を轉捨して清淨分を轉得するなり。

釋曰　無分別智の能治旣に生ずれば、一切の所治を決定して應に斷ずるが故に、彼の無間に斷の殊勝なることを說く。「無住涅槃」とは、世間、聲聞、獨覺の生死或は涅槃に安住するに同じからざるが故なり。「雜染を捨てゝ生死を捨てざるを以て」とは、彼[一]の勢力を害すること呪[二]せられたる蛇の如く、棄捨せずと雖も、而も染無きが故なり。「二の所依止の轉依を相と爲す」とは、或は依主釋。或は持業釋なり。此の轉依に住すれば無色界の如く、若くは自利と殊勝の慧と共に相應するに依るが故に、煩惱を容れず。若しくは利他と大悲と共に相應するに依るが故に、現に生死に處して棄捨せざるなり。此の中、何者が生死、涅槃、依止轉依なるや。皆應に細說すべし。「生死とは謂はく依他起性の雜染分なり」とは、謂はく心心法の煩惱に迷亂せられ、生死の過失相續して絕えざる遍計所執分なり。「涅槃とは謂はく依他起性の清淨分なり」とは、謂はく畢竟して遍計所執を轉ずる圓成實分なり。「二の所依止とは、謂はく二分に通ずる依他起性なり」とは、謂はく二の所依の依他起性なり。「轉依とは謂はく卽ち依他起性」とは、謂はく心心法の依他起性は、是れ諸の雜染の轉滅する所依なり。又是れ一切の佛法の所依なり。說いて言へる有るが如し。此れ

【一】彼のとは雜染を指す。
【二】呪術に依りて毒の力を失へる蛇の如しとなり。

ければ厭離を現前することを見るが故に」とは、謂はく諸の菩薩は、彼の有情を見るに、若し財位乏しければ、生死を厭ふ心便ち現在前して出離を求欲するも、若し富貴を得れば即ち憍逸を生ず。故に彼の有する所の財位を施さず。是の思惟を作さく、寧ろ彼を貧賤にして生死を厭離する心を常に現前せしめ、彼を富貴にして受樂放逸ならしめ、生死を厭はず善法を起さざること勿らんと。「彼の有情は若し財位を施せば即ち不善法の因を積集することを見るが爲の故に」とは、謂はく諸の菩薩は彼の有情を見るに、若し當に彼に滿足の財位を施せば、即便ち放逸にして種々の惡不善業を積集するが故に、彼の有する所の財位を施さず。頌に言へる有るが如し。

寧ろ財位に貧乏ならしめて　惡趣の諸の惡行を遠離せしめん
彼を富貴にして諸根を亂し　當來の衆苦の器を感ぜしむること勿らん、と。

「彼の有情は若し財位を施せば即便ち餘の無量の有情の損惱の因を作することを見るが故に」とは、謂はく諸の菩薩は彼の有情を見るに、若し富貴を得ば即便ち無量の有情を損惱するが故に、彼の有する所の財位を施さず。是の念を作して言はく、寧ろ彼の一身に貧賤の苦を受けしむるも、餘の多くの有情をして損惱せしむること勿らん、と。復伽他を以て是の如き義を攝す、故に「業と轉と現前とを見る等」と説く。其の文了じ易ければ、煩しく重ねて釋すること無し。

論曰 若し諸の菩薩は、是の如き增上の尸羅と、增上の質多と、增上の般若とを成就して、功德圓滿すれば、諸の財位に於て大自在を得るに、何が故に現に諸の有情は財位を匱乏ること有るを見るや。彼の有情は、諸の財位に於て重き業障有るを見るが故に、彼の有情は、若し財位を施せば善法を生ずることを障ふることを見るが故に。彼の有情は、若し財位乏しければ厭離現前することを見るが故に。彼の有情は、若し財位を施せば卽ち爲に不善法の因を積集することを見るが故に。彼の有情は、若し財位を施せば卽便ち餘の無量の有情を損惱する因を作すことを見るが故に。是の故に現に諸の有情は財位を匱乏すること有るを見るなり。此の中に頌有り、

業と障と現前と　積集と損惱とを見るが故に
現に諸の有情は　菩薩の施を感ぜざる有り。

釋曰 今當に顯說すべし、是の因緣に由りて菩薩に財位の自在有りと雖も、而も他に施さざることを。「彼の有情は諸の財位に於て重き業障有ることを見るが故に」とは、謂はく諸の菩薩は彼の有情を見るに、其の財位に於て重き業障有るが故に、施與せず。惠施を空しくして果有ること無からしむること勿し。設ひ復彼に施すも亦受くること能はず。何ぞ施を爲すことを用ゐん。頌に言へる有るが如し、

母の嬰兒を乳するが如く　一たびに月を經るも倦むこと無きも
嬰兒の喉若し閉づれば　乳せんことを母は欲すとも何をか爲さん、と。

「彼の有情は若し財位を施せば善法を生ずるを障ふることを見るが故に」とは、謂はく諸の菩薩は彼の有情を見るに、財位に於て重き業障無しと雖も、而も彼れ若し財位の圓滿を得れば、便ち多く放逸にして善法を起さず。寧ろ彼の現法は少時に貧賤なるも、彼の來生の多時に貧賤なること勿らしめんと、是の思惟を作すが故に、彼の有する所の財位を施さず。「彼の有情は若し財位乏し

釋曰　此の中に聲聞等の智と菩薩の智との五相の差別を顯示す。「無分別の差別」とは、謂はく聲聞等の智は四顚倒に就いて無分別と名け、諸の菩薩の智は一切の法、乃至菩提に於て皆無分別なり。「少分に非ざる差別」に復三種有り、一には眞如に通達すること少分に非ざる差別、謂はく聲聞等の眞觀に入る時は、唯能く補特伽羅空無我の理に通達するのみなるも、是の諸の菩薩の眞觀に入る時は、補特伽羅と及び一切法との空無我の理に具足して通達す。二には所知の境界の少分に非ざる差別、謂はく聲聞等は唯苦等の諦の中に於て智を生じ、即ち修習の所作已に辦ずと名くるも、是の諸の菩薩は普く一切の所知の境界に於て無倒の智を生じて、乃ち修習の所作已に辦ずと名く。三には所度の有情の少分に非ざる差別、謂はく聲聞等は唯自利を求めて無生智を盡し正勤に修行するのみなるも、是の諸の菩薩は普く一切の有情を濟度せんが爲に大菩提を求む。此の三種の少分に非ざる中に於て、聲聞と菩薩との智に差別有り。「無住の差別」とは、謂はく聲聞等は唯涅槃に住するのみなるも、是の諸の菩薩は悲と慧との增上の力を具足するが故に、無住涅槃を以て住處と爲す。「畢竟の差別」とは、聲聞等と諸の菩薩とは涅槃の中に於て大なる差別有ることとを顯はす。謂はく聲聞等は無餘依涅槃界の中に住し、身智の永へに盡くること燈焰の滅するが如くなるも。是の諸の菩薩は成佛を得る時、所證の法身は生死の際を窮めて斷盡有ること無く、無色界の相續して壞せざるが如し。此の差別に由りて智にも差別有り。「無上の差別」とは、謂はく聲聞乘の上に獨覺有り、獨覺乘の上に復大乘有り、其の菩薩乘は即ち是れ佛乘にして更に上有ること無し。此の五相に由りて、應に知るべし。聲聞と諸の菩薩との智に差別有り。復伽陀を以て是の如きの義を攝す。「五相」と言ふは、即ち、前に說く所の五相の差別なり。「世と出世との滿の中」とは、靜慮と無色とを、世間の滿と名け、聲聞乘等の所得の涅槃を出世の滿と名く。此れ皆彼より勝れたるが故に「高遠なり」と說く。

離するを非處と相應すと名く。「唯煩惱障を斷ずるのみにて喜足を生ずる處を遠離す」とは、謂はく聲聞等は修習力にて煩惱障を斷ずるを計して卽ち一切の所作已に辦ぜりと爲す。菩薩は是の如き處所を遠離す。能く諸の有情を利益し安樂にすることを障礙するを以ての故なり。頌に言へる有るが如し。

諸の惡趣に往くも　　極めて大菩提を障ふるに非ず
[一五]聲聞と　　及び獨覺の地に住するが如くに。

菩薩は是の如き處所を遠離す。是の故に說いて非處と相應すと名く。「有情の利益安樂を顧みず無餘依涅槃界に住する處を遠離す」とは、聲聞等の如きは有情の利益安樂を顧みず無餘依涅槃界の中に住し、火の薪を燒くが如く畢竟して寂滅す。菩薩は是の如き處所を遠離す。般若と大悲とを皆具足するが故に、能く正しく無住涅槃に安住す。此の處を捨つるに由り、是の故に說いて非處と相應すと名く、

論曰　聲聞等の智と菩薩の智とは何の差別有りや。五種の相に由りて應に差別を知るべし。一には無分別の差別に由る。謂はく蘊等の法に於て分別無きが故なり。二には少分に非ざる差別に由る、謂はく眞如に通達すると、一切種の所知の境界に入ると、普く一切の有情を度脫せんが爲なるとに於て、少分に非ざるが故なり。三には無住の差別に由る、謂はく無住涅槃を所住と爲すが故なり。四には畢竟の差別に由る、謂はく無餘依涅槃界の中にて斷盡すること無きが故なり。五には無上の差別に由る、謂はく此の上に於て餘乘の此より勝過するもの有ること無きが故なり。此の中に頌有り。

諸の大悲を體と爲し　　五相の勝智に由りて
世と出世との滿の中にて　　此を最も高遠なりと說く。

【一五】後の二句を初に置いて見れば意解し易し。

して能く所餘の波羅蜜多に於て修習ひ圓滿す」と說けるが如し。云何が名けて非處と相應し修習し圓滿すと爲すや。謂はく五種の處を遠離するに由るが故なり。一には外道の我執の處を遠離するが故に。二には未だ眞如を見ざる菩薩の分別する處を遠離するが故に。三には生死と涅槃との二邊の處を遠離するが故に。四には唯煩惱障を斷ずるのみにて喜足を生ずる處を遠離するが故に。五には有情の利益安樂を顧みず、無餘依涅槃界に住する處を遠離するが故なり。

釋曰「般若波羅蜜多と無分別智と差別有ること無し」とは、性相等しきが故に。謂はく諸の所有の無分別智は卽ち是れ般若波羅蜜多なるが故なり。彼の經の中に是の如き說を作す、「菩薩は般若波羅蜜多に安住し、非處と相應して能く所餘の波羅蜜多に於て修習し圓滿す」と。此の義云何ん。謂はく五種の處を遠離するに由るが故に。卽ち是れ外道の我執の處等の五處の差別を遠離するなり。此の中居るべきが故に名けて「處」と爲す。「外道の我執の處を遠離す」とは、謂はく諸の外道は我執に安住して是の念を作して言く、我れ能く了知す。此れは是れ我が慧なりと。菩薩は是の如き處所を遠離して、我と及び我所とを計執せずして般若を起す。菩薩は是の如き處所を遠離す、是の故に說いて「非處と相應す」と名く。「未だ眞如を見ざる菩薩の分別する處を遠離す」とは、謂はく未だ眞を見ざる諸の菩薩衆は其の般若波羅蜜多の無分別智に於て諸の分別を起し、此れは是れ般若波羅蜜多なりと。菩薩は是の如き處所を遠離す、是の故に說いて非處と相應すと名づく。頌に言へる有るが如し、

若し所見有れば　　汝彼の爲に縛せらる

若し所見無ければ　　便ち解脫を得。

「生死と涅槃との二邊の處を遠離す」とは、謂はく世間の如きは生死の邊に住す。我執有るが故に。聖弟子の如きは涅槃の邊に住す、煩惱を斷ずるが故に。菩薩は爾らず、是の故に說いて二邊を遠

義の性を成ずれば、無分別の智無し」とは、若し諸の境の義にして、義の性を成ずること實ならば、無分別の智は應に成ずるを得ざるべし。分別有るが故なり。「此れ若し無ければ佛果を證得することと理に應ぜず」とは、此の無分別の體若し無ければ、佛果を證得すること道理に應ぜず。是れ則ち應に本を害する過失を成ずべし。是の故に應に知るべし、所分別の義は定んで實を成ずるに非ず。又此の境の義は定んで實有に非ず。何を以ての故に。「自在を得る菩薩」とは、謂はく諸の菩薩は大自在を得るなり。「勝解力に由るが故に」とは、意解力に由るなり。「欲するが如く地等を成ず」とは、謂はく地等を變じて金等を成ぜしむるなり。「定を得る者も亦爾なり」とは、謂はく菩薩を除く餘の聲聞等の靜慮を得る者なり。「簡擇を成就する者」とは、謂はく慧の成滿せる者なり。「智有る者」と言ふは、謂はく成滿せる正智と相應するなり。是の故に菩薩を智有る者と名く。「定を得る者」とは、三摩地を得るなり。「一切の法を思惟し」とは、謂はく正しく一切の契經應頌等の法を思惟するなり。「義の如く皆顯現す」とは、謂はく種々の無我等の行を以て、契經等の法を思惟するが如く如く、是の如く、是の如く其の義顯現す。是の故に應に知るべし、即ち此の如理の作意の心は、其の所取と能取との相に似て現じ、一切の外義は都て所有無し。「無分別智行ずれば諸義皆現ぜず」とは、此の中、應に前說を續けて義の眞實に非ざる言を許すべし。諸の菩薩の無分別智現起して行する時、一切の境の義は皆顯現せざるに由り、是の故に應に知るべし、所有の境の義は皆實有に非ず。「當に知るべし義有ること無し、此に由りて亦識も無し」とは應に知るべし、境の義有ること無ければ、此に由りて能識も亦所有無し、と結勸す。所識無くして能識有るに非ざるは、正しき道理に應ず。前に廣く釋せる所知相の中に於て已に具さに是の如きの道理を辯析せり。

論曰 般若波羅蜜多と無分別智とは差別有ること無し。「菩薩は般若波羅蜜多に安住し、非處と相應

所縁は實に非ずと雖も　　而も境相は成就す、
若し義にして義の性を成ずれば　　無分別の智無し
此れ若し無ければ佛果を　　證得すること理に應ぜず、
自在を得たる菩薩は　　勝解の力に由るが故に
欲するが如く地等を成ず　　定を得る者も亦爾なり、
簡擇を成就する者と　　智有ると定を得る者とは
一切の法を思惟して　　義の如く皆顯現す。
無分別の智行ずれば　　諸義は皆現ぜず
當に知るべし義有ること無し　　此に由りて亦識も無し。

釋曰　「鬼と傍生と人と天等」とは、謂はく人等に於ては水有りと見る處に、餓鬼は是れ陸地高原と見。人の糞穢有りと見る所の處に於て、傍生は見て淨妙の飲食と爲し。人の見る所の不淨物の中に於て、餓鬼畜生は見て淸淨と爲し。人の見る所の淨妙の飲食に於て、諸天は見て臭穢不淨と爲す。相違の事は同一處に有るに非ず、故に遍計所執に義無きを知る。若し義有ること無ければ、云何が無境にして識現行することを得るや。何が故に詰問するや。汝經部師は過去未來の境界は有に非ずといふ。云何が中に於て智有りて轉ずることを得るや。又夢中に於て夢像は實に無し、云何が智起るや。隘室の中に偃臥して、一處に夢智の所縁なる眞實の山河の象等有るべきに非ず。又未だ曾て自ら其の首を斷つことを經ず[一四]。云何が夢に見るや。宿住の事を通憶することを得ざるに非ず。又鏡等の三摩地の中に於て行ずる所の二影は眞實に有に非ざれば、云何が了然として心に當つて顯現するや。故に知る自ら心の影像を縁ずることを。「而も境の相成就す」とは、總じて過去未來等の境を結び、實有に非ずと雖も、而も自心に於て境相を成就す、となり。「若し義にして

【一四】經ずとは經驗せずとの意。

に出りて、一切の名言の道を出過するが故に、一切の世智の境を超度するが故なり。戲論の名は是れ世俗の聲なるに由り、世俗智の攝なり。此れを遠離するが故に無戲論の無分別智と名く。

論曰　後得の無分別智に五種有り、謂はく通達と隨念と安立と和合と如意との思擇の差別の故に。

釋曰　此の後得智の所作別なるが故に、其の五種有り、謂はく通達等なり、思擇の聲は一一に皆有り、「通達の思擇」とは、眞に於て決定し、眞に於て現觀するが故に、通達と名く。後得智に由りて是の如き所得の通達を思擇す。謂はく即ち中に於て自ら内に此の事は是の如しと審察す。是の故に說いて通達の思擇と名く。「隨念の思擇」とは、謂はく後時に於て通達を隨念し、我れ曾て此の事に通達せりと念言す。是の故に說いて隨念の思擇と名く。「安立の思擇」とは、謂はく[一]此れより出でて通達する所の如く、他の爲に宣說す。是の故に說いて安立の思擇と名く。「和合の思擇」とは、謂はく總相の觀にて一切の法を緣じ、此の觀に由るが故に進趣して轉依す。或は轉依し已つて重ねて此の觀を起す。是の故に說いて和合の思擇と名く。「如意の思擇」とは、謂はく智現前して思惟する所に隨つて一切に意の如く地等をして變じて金等を成ぜしむるが如し。是の故に說いて如意の思擇と名く。此の[二]思擇の聲は意に其の智を說く。前には一切の法は本性無分別なり、所分別無きが故にと說けり。云何が所分別の義は實に所有無しと知ることを得るや。彼れに所有無きことを成立せんと欲するが爲の故に、多頌を說く、

論曰[三]

鬼と傍生と人の天と　各其の所應に隨ひて
事を等しくして心異るが故に　義は眞實に非ずと許すべし。
過去の事等と　夢像と二影との中に於て

【一】此より出づとは定を出づること。

【二】思擇といふ語の趣意は智なりとの義。

【三】世親釋の玄奘譯の論本には論曰の次に「復多頌有り、是の如き無分別智を成立す」の句有り。

經の中に、一切の法性は無分別なりと說く。若し一切の法は本來自性無分別ならば、何ぞ一切の有情の類は本より已來、功用を作さずして自然に解脫せざるや。無分別智は彼に有ること無きが故なり。彼の有情は一切法の無分別の性に於て、現證の眞智を本來未だ生ぜざるに由る。諸の菩薩等は、一切法の無分別の性に於て、[九]種性を因と爲して證智已に生ず。此の道理に由りて諸の菩薩等は能く解脫を得るも、餘の有情には非ず。次に當に加行智等に各三種五種の差別有ることを顯示すべし。

論曰　此の中、加行の無分別智に三種有り、謂はく因緣と引發と數習とより生ずる差別の故に。

釋曰　此の加行智の生起する差別は三種の力に由る。一は因緣力、二には引發力、三には數習力なり。因緣力とは、謂はく種性力なり。或は有る種性は强緣に會遇すれば速かに加行を起す。是の如く加行は種性を因と爲して生起するを得。種性と言ふは、謂はく無始より來、六處殊勝にして能く佛果を得る法爾の功能なり。引發力とは、謂はく前生の中の已習を因と爲して、加行を發起するなり。數習力とは、謂はく現在の生に數々修習し[一〇]士用力に由りて加行を發起するなり。

論曰　根本の無分別智にも亦三種有り、謂はく喜足と、無顚倒と無戲論との無分別の差別の故に。

釋曰　喜足の無分別とは、謂はく下劣の義に於て喜足を生じ、後の勝進に於て悕求せざるが故に無分別と名く。世間の聞思の兩智を得て、少分の義に於て或は已に信解し、或は已に決了して便ち喜足を生ずるが如し。或は已に世間の修慧を得て、第一有を證して麁煩惱の息むるを、中に於て執して究竟の解脫と爲して便ち喜足を生ずるが如し。是の如き等の類を皆喜足の無分別智と名く。無顚倒の無分別智とは、謂はく聖弟子等。彼れ修慧に由りて苦等の諦に於て無常等の四の無倒行を起し、常等の顚倒分別を起さゞるを、無顚倒の無分別智と名く。無戲論の無分別とは、謂はく諸の菩薩は無常等に於て亦分別せず、乃至菩提も亦戲論を離る。一切の法は分別無しとの理

【九】種性とは本具の佛性のこと、後に釋論に委解あり。

【一〇】士用力とは現に作す所の人の精進努力をいふ。

や。自體も亦爾り、智（となすや）非智と爲すや。若し爾らば何の失ぞ。若し分別の依他起性を緣ずとせば、云何が無分別智を成ずるを得ん。若し餘境を緣ずとせば、餘境は定んで無し。當に何を所緣となすべきや。若し是れ其の智ならば、應に所知有るべし。若し是れ非智ならば、云何が無分別智と名けん。是の如きの一切の過失を離れんが爲の故に、頌を說きて言はく、

論曰　此に非ず餘に非ず　　智に非ずして而も是れ智なり
境と異り有ること無ければ　　智は無分別を成ず。

釋曰　無分別智は分別の依他起性を緣ぜず、無分別なるが故に。分別を緣じて、無分別を成ずるに非ず、亦餘を緣じて以て境界と爲さず。卽ち此の分別の法性を緣ずるを境界と爲すを以ての故なり。法と法性とは若しくは一、若しくは異にして〔八〕倶に說くべからず。是の故に此の智は定んで說くべからず。分別の境を緣ずるも分別の境に非ず。自體も亦爾り、決定して是れ智なりと說言すべからず。加行の智及び後得の如きは、分別無きが故なり。亦決定して非智なりとも說くべからず。加行の智を以て先因と爲すが故なり。「境と異り有ること無ければ、智は無分別を成ず」とは、此れは是れ能知、此れは是れ所知と分別すべからず。能取、所取の分別無きが故なり。此の智と境とは差別の相無し、譬へば虛空と虛空の中に有する所の光明との如し。是の故に此の智は無分別を成ず。餘の契經の中に、一切の法性は無分別なりと說けるを、今當に解釋すべし。

論曰　應に知るべし一切の法は　　本性無分別なり
所分別無きが故に　　無分別の智無し。

釋曰　「所分別無きが故に」とは、所分別の遍計所執の義は永へに無なるに由るが故なり。餘の契

〔八〕倶に說くべからずとは一なりとも異なりとも說くを得ずとあり。

論曰

人の正しく目を閉づるが如きは　是れ無分別智にして
即ち彼れ復目を開く　後得智も亦爾なり。
應に知るべし、虚空の如くなるは　是れ無分別智にして
中に於て色像を現ず　後得智も亦爾なり。

釋曰　此の二頌に由りて根本と後得との差別を顯示す。[七]目を閉づると目を開くと、虚空と色像とは、倶に二智は是れ無分別なると、是れ有分別なると、是れ其の平等なると、是れ不平等なるとを顯はす。其の加行の智は、未だ證する所有らざるが故に略して說かず。又加行の智は是れ本智の因なり。其の後得智は是れ本智の果なり、是の故に且らく無分別智の所作を成ずる事を辨ず。無分別智を修成する佛果は既に無分別智なり。云何が能く有情を利する事を作さん。

論曰

末尼と天の樂との如く、　思ふこと無くして自の事を成ず
種々の佛事を成ずるに　常に思ひを離るる事も亦爾なり。

釋曰　今此の頌の中に彼の末尼と天の樂との兩喩を引いて所得の無分別智を成立す。無分別智は功用を作さずと雖も、種々の事を成ずることは如意珠、及び天の樂の如し。是れ我當に光を放つべし、我當に聲を出すべしと念ずること無しと雖も、並びに思無きが故なり、然も彼の有情を生ずる福業と意業との勢力に由りて、擊奏を待たずして種々の光を放ち、種々の聲を出す。諸佛菩薩の無分別智も、當に知るべし亦爾なり。分別を離れ功用を作さずと雖も、而も能く彼の所化の有情の福力と意樂とに隨つて種々の利樂の事を現作して轉ず。次に當に無分別智の有する所の甚深を顯示すべし。無分別智の境界云何ん。分別の依他起性を緣ずと爲すや。餘境を緣ずと爲す

【七】世親釋を參照せば意義明了なるべし。

次第に三智に譬ふ。　　應に知るべし加行等なり。

釋曰　三智の行相の差別を顯はさんが爲に、是の如きの喩を說く。「瘂の義を受けんことを求むるが如く」とは、譬へば瘂人の境界を受けんことを求むるも、而も未だ受くること能はず、亦說くこと能はざるが如し。是の如く加行の無分別智は眞如を證せんことを求むるも、而も未だ證すること能はず、寂として言說無きこと、當に知るべし亦爾なり。「瘂の正しく義を受くるが如し」とは、譬へば瘂人の正しく境界を受くるも、言說する所無きが如く、根本の無分別智は正しく眞如を證して、諸の戲論を離るゝこと、當に知るべし亦爾なり。「非瘂の義を受くるが如し」とは、瘂に非らざる人の諸の境界を受け、亦言說を起すが如く、是の如く後得の無分別智は眞如現證の境界を反照して能く言教を起すこと、當に知るべし亦爾なり。此の道理に由りて、「愚の如し」の頌を釋せよ。「五の義を受けんことを求むるが如し」とは、譬へば、五識の境界を受けんことを求めて、求むる所有りと雖も而も分別無きが如く、是の如く加行の無分別智も、當に知るべし亦爾なり。五の正しく義を受くるが如し」とは、譬へば五識の正しく境界を受くるも諸の分別を離れたるが如く、是の如く根本の無分別智も、當に知るべし亦爾なり。「末那の義を受くるが如し」とは、譬へば意識の能く境界を受け亦能く分別するが如く、是の如く後得の無分別智も、當に知るべし亦爾なり。「未だ論を解せざると論を求むると法と義とを受くるとの如し」とは、未だ論を解せず、論を誦せんことを求めて而も未だ誦すること能はざるが如し。是の如く加行の無分別智も、當に知るべし亦爾なり。論を温習し文字を領受するが如く、是の如く根本の無分別智も、當に知るべし亦爾なり。已に聽習して法と義とに通達するが如く、是の如く後得の無分別智も、當に知るべし亦爾なり。是の如き等の衆多の譬喩に由りて、數の次第の如く加行等の三智の差別に喩ふ。次に根本と後得との二智の譬喩の差別を顯はさん。

得るなり。

論曰
虛空の如く染無し　是れ無分別智にして
一切の障を解脫し　得と成辦とに相應す。

釋曰「一切の障を解脫す」とは、煩惱及び所知の障を解脫するなり。「得と成辦とに相應す」とは、謂はく初地に在りては得と相應し、乃至佛地には成辦と相應するなり。

論曰
虛空の如く染無し　是れ無分別智にして
常に世間に行くも　世法に染せらるるに非す。

釋曰「常に世間に行くも、世法に染せらるゝに非ず」とは、此れ一切の生處に遍く生じて、利等の世間の八法に染まざることを顯はす、紅蓮華の出世間の攝なるが如し。是の如き[六]三頌は三智の得る所の勝利を顯示せり。加行と根本と後得との三種の無分別智は何の差別有りや。

論曰
瘂の義を受けんことを求むるが如く　瘂の正しく義を受けたるが如く
非瘂の義を受けたるが如し　三智の譬是の如し。
愚の義を受けんことを求むるが如く、愚の正しく義を受けたるが如く
非愚の義を受けたるが如し、三智の譬是の如し。
五の義を受けんことを求むるが如く、五の正しく義を受けたるが如く、
末那の義を受けたるが如し、三智の譬是の如し。
未だ論を解せざると　論を求むると法と義とを受くるとの如し。

【六】前來無染の三頌を指す。

釋曰 前々の生の中の無分別智は、後々の生處に展轉して增勝す。是れ等流果なり。無分別智の出離云何ん。

論曰

諸の菩薩の出離して　　得と成辦と相應するは
是れ無分別智にして　　應に知るべし、十地に於てす。

釋曰 初の極喜地は見道に入る時に一切地の無分別の理を見る、初め出離を得、後に修道の中に方に諸地を得て成辦と相應す。無分別智は誰をか究竟と爲す。

論曰

諸の菩薩の究竟は　　清淨の三身を得
是れ無分別智にして　　最上の自在を得るなり。

釋曰 「清淨の三身」とは、謂はく初地の中に三身を得と雖も未だ清淨ならず。第十地に至りて乃ち清淨なるを得るを、方に究竟と名く。故に爾の時に淨き三身を得と說く。「最上の自在を得」とは、謂はく爾の時に於て無分別智は但清淨の三身を獲得するのみに非ず、亦最上の十種の自在を得。故に究竟と名く。無分別智は何の如く、何により、何に由りて無染なりや。

論曰

虛空の如く染無し　　是れ無分別智にして
種々の極重の惡と　　唯信じ勝解するとに由る。

釋曰 初に何の如く無染を得るやと問ふ者には、虛空の如く無染なりと答ふ。次に何より無染を得るやと問ふ者には、種々の極重の惡と答ふ。後に何に由りて無染を得るやと問ふ者には、唯信じ勝解するに由ると答ふ。謂はく唯信に由り慧の勝解に由りて以て因と爲すが故に、而も無染を

智は誰を助伴と爲すや。若し唯一有るのみならば應に能くする所無かるべし。

論曰

諸の菩薩の助伴を　說いて二種の道と爲す
是れ無分別智の　五の到彼岸の性なり。

釋曰「二種の道」とは、一には資糧道、二には依止道なり。五の到彼岸を自性と爲すを以てなり。此の中、前の四波羅蜜多は是れ資糧道にして、第五の靜慮波羅蜜多は是れ依止道なり。若し定心に在らば前に說ける四種の波羅蜜多の諸善資助して便ち能く無分別智を生長す。此の智を慧波羅蜜多と名く。乃至未だ佛果を得ざる已來、無分別智は當に何れの處に於て異熟果を感ずべきや。

論曰

諸の菩薩の異熟は　佛の二會の中に於てす
是れ無分別智の　加行と證得とに由る。

釋曰「二會の中」とは、謂はく諸佛の變化と、受用との二身の會の中に於てとなり。「加行と證得とに由る」とは、謂はく能く異熟果を感ずる義を顯はす。此れ異熟の因に非ず。能く彼を對治するが故なり。卽ち增上果を假に異熟と名くるのみ、此に由りて資け熏じて餘の有漏の業をして異熟を感ぜしむるが故に此の名を立つ。若し加行の無分別を修する時は、諸佛の現ずる所の變現身の衆會の中に生在す。若し無分別智を證得する時は、便ち諸佛の現ずる所の受用身の衆會の中に生ず。無分別智は誰をか等流と爲す。

論曰

諸の菩薩の等流は　後後の生の中に於て
是れ無分別智にして　自體轉(うた)た增勝す。

詮に非らず、不同なるが故に　　一切は不可言なり。

釋曰　若し實に所分別の義有ること無ければ、何の所分別の故に是の言を説くや。「相應は自性の義なり。所分別は餘に非ず等」とは、謂はく諸の文字は展轉し相應して宣唱絶えず。遍計の心等は此の假立を緣じて遍計の義を成じて所分別と爲す。別に實義の、所分別と爲るもの無きが故に「餘に非ず」と言ふ。若し文字の相續し宣唱すること無ければ分別無きが故なり。云何が諸法は皆不可言なるや。此の理を顯はさんが爲の故に是の言を説く、「彼の能詮を離れて智は所詮に於て轉ずるに非ず等」と。若し實に義の言説すべき者有れば、能詮の名を離るゝも、彼に於て應に言に似たる智の起ること有るべし。(然も)未だ能詮の名言を解了せざれば、所詮の義に於て此の智の起ること有るに非ず。故に不可言なり。或は謂はく、外の義は定んで實に有りと雖も、要ず能詮を待つて所詮の智起る、と。此を遮せんが爲の故に是の如きの言を説く「詮に非らず不同なるが故に」と、謂はく相ひ異るが故に實の能詮に非ざるなり。能詮の名と所詮の義とは別相を取るを以ての故に其の相各異る。云何んぞ定んで實の詮表を成ずることを得ん。「一切は不可言なり」とは、此の道理に由りて有らゆる一切の能詮と所詮とは皆不可言なり。無分別智は何の任持する所ぞ、

論曰

諸の菩薩の任持は　是れ無分別智にして

後に得る所の諸行を　進趣し増長せんが爲なり。

釋曰　「後に得る所の諸行」とは、謂はく無分別後得の智の中に得る所の、種々の菩薩の諸行なり。此の行は皆智を以て所依と爲す。「進趣し増長せんが爲なり」とは、謂はく菩薩の諸行を増長せしめんが爲なり。此れ任持して要ず用ゆる所有るを説く。顚倒無きが故に能く諸行を持す。無分別

一頌に智の所緣を說く、

論曰

諸の菩薩の所緣は　不可言の法性なり
是れ無分別智にして　無我性の眞如なり。

釋曰 「不可言の法性」とは、謂はく可言の法の無自性なる性にして、是れ可言の遍計所執の自性を離れたる性の義なり。「無我性の眞如なり」とは、此の義を成ぜんが爲に、其をして明了ならしむ。卽ち是れ一切の補特伽羅と諸法との無性の所顯の眞如にして、增益損減の二邊を解脫するは無分別智の所緣の境界なり。所緣の法有れば定んで行相有るが故に、次の一頌に、智の行相を顯はす。

論曰

諸の菩薩の行相は　復所緣の中に於ては
是れ無分別智にして　彼の所知は無相なり。

釋曰 所緣の中に於て相ひ似て行ずるが故に「行相」と名く。無分別智は眞如の境に於て相似して行ずればなり。「彼の所知は無相なり」とは、謂はく、此の智の眞如の境に於て作す所の行相を說く。此の意に說いて言はく、無分別智は眞如の境を緣じて、一切相と作意の行相とを離るゝを以て行相と爲すとなり。次に二頌を說くは、上の所緣及び智の行相に於て疑難を釋通す。

論曰

相應は自性の義なり　所分別は餘に非ず
字展轉して相應する　是を相應の義と言ふ、
彼の能詮を離れて　智は所詮に於て轉ずるに非ず、

四句に由りて正しく自性を說く。「眞を異計せず」とは、謂はく眞義に於て異りて計度せざるを以て自性と爲す。自性と自體とは義に差別無し。環釧は金を自體と爲すと說くが如し。次に後の一頌は智の所依を說く、

論曰

諸の菩薩の所依は　非心にして而も是れ心なり、
是れ無分別智にして　思義の種類に非ず。

釋曰　智は是れ心法なるが故に、應に心に依るべし。心に依止して而も分別無きことは道理に應ぜず。心の聲は卽ち是れ思量の相なるが故なり。若し非心に依れば、譬へば衆色の如く、應に智を成ずべからず。是の如き雙結の過失を說かんが爲の故に、半頌を說く。「思義の種類に非ず」とは、謂はく無分別智の所依は心に非ず、思義に非ざるが故に。亦非心を所依止と爲すにも非ず、心の種類なるが故に。心を以て因と爲し、數習する勢力は此の位を引得す。心の種類と名くるは、此れ卽ち智の所依の心は、一切の思量分別を出過することを顯示す。次に一頌有り、智の因緣を顯はす。

論曰

諸の菩薩の因緣は　有言の聞熏習と
是れ無分別智にして　及び如理の作意となり。

釋曰　[五]因緣と能作の因緣とは義一なり。「有言の聞熏習」とは、謂はく他の大乘に於て言音有るが故に「有言」と名く。「聞」とは、謂はく聽聞するは、卽ち彼にして餘に非ず、此の所引の功能の差別に由るを說いて「熏習」と名く。「及び如理なる作意」とは、謂はく此を因と爲して生ずる所の意言の如理なる作意なり。理に順して淸淨なるが故に如理と名く。智には必ず境有るが故に、次の

【五】此に因緣とは無分別智の能作の因緣の義なり。

應に知るべし。是を無分別智と名く。

釋曰　智の自性に依りて五相を離るゝことを說くは、[二]遮詮門に由りて智の體相を說く。[三]表詮門には說く可からざるを以ての故に、[四]分別門を遣りて、無分別智の其の相を了ずべし。若し此の智に異れば應に分別有るべし。何等をか分別となす、謂はく後に廣く說く無作意等なり。若し無作意是れ無分別智ならば、熟眠醉等には作意する所無し、應に無分別智を成ずべし。然も許すべからず。功用を離れて應に顚倒無きを得べきに由るが故なり。若し尋伺の地を過ぎたるが是れ無分別智ならば、第二靜慮已上の諸地の一切の異生及び聲聞等は、應に無分別智を成ずべし。然も彼に無分別智有ること無し。若し想受の滅が是れ無分別智ならば、此の智の體相成立すべきこと難し。無想等の中には心を離れて諸の心法有ること無きが故なり。意識の滅に由りて彼の無心を說くことは、前に已に說けるが如し。若し其れ色是れ無分別智なりとの如きは、應に無分別智を成ずることを得ざるべし。譬へば大種と所造の色の如くなるが故なり。若し眞義に於ける異相の計度が是れ無分別智ならば、此の智の無分別性を成ぜず。眞義に於て異相に計度して、此れは是れ眞なり、是れ無分別なりと言ふを以て、分別有るが故なり。

論曰　所說の如き無分別智を成立する相の中に於て、復多頌を說く、

釋曰　前に說く所に依りて、無分別智は略して相を成立し、廣く多頌を說いて次第に別に顯はす自性を顯はさんが爲の故に、初頌を說く、

論曰

諸の菩薩の自性は　五種の相を遠離す
是れ無分別智にして　眞を異計せず。

釋曰　此の頌の中に於ては、前の三句に由りて五種の相を遮し、方便して無分別智を顯示す。第

【二】遮詮門とは否定的に說明すること。
【三】表詮門とは肯定的に說明すること。
【四】分別門とは思量言說に依つて分別し說明すること。

四種の作業は聲聞等の如し。

增上慧學分第九

論曰　是の如く已に增上心の殊勝なるを說けり。增上慧の殊勝なることは云何が見るべきや。謂はく無分別智の、若くは自性、若くは所依、若しくは因緣、若しくは所緣、若しくは行相、若しくは任持、若しくは助伴、若しくは異熟、若しくは等流、若しくは出離、若しくは至究竟、若しくは加行と無分別と後得との勝利、若しくは差別、若しくは無分別と後得との譬喩　若しくは無功用の作事。若しくは甚深となり。應に知るべし、無分別智を增上慧の殊勝と名く。

釋曰　心旣に定に在りて能く如實に知るが故に、等持の無間[一]に增上慧學を說く。爾らずと爲すや。其の明を攝取するを卽ち名けて學と爲す。慧と學とは應に異り有ること無かるべし。若し是の如くならば同處に依りて釋す。謂はく增上の慧は卽ち是れ其の學なり。若し爾らば此の中には應に依の義無かるべし。謂はく餘慧に依りて學を起す。是の故に說いて增上慧學と名く。前の二學は、戒に依つて學し、定に依つて學するが如く、此の中に於ては慧に依つて學するに非らず。慧は卽ち學なるが故なり。應に是くの如く說くべし、(卽ち)其の加行の慧は根本(慧)に依つて學し、其の根本慧は後得に依つて學す。其の後得の慧は二の無間に依つて起り修學す。何等をか名けて增上慧學と爲すや。謂はく無分別智なり。今此の中に於て、自性を最初とし、甚深を最後として、此の智を廣く釋す。

論曰　此の中、無分別智は五種の相を離るゝを以て自性と爲す。一には無作意を離るゝが故に、二には有尋有伺の地を過ぎたるを離るゝが故に、三には想受の滅したる寂靜を離るゝが故に、四には色の自性を離るるが故に、五には眞義に於ける異の計度を離るゝが故に、此の五相を離るゝを、

【一】等持の無間とは前に定を說き、續いて慧を說くが故に無間にといふ。

諸佛の法なり。廣く說く、乃至又無汚の法は是れ諸佛の法なりと。此の中の密意を今當に顯示すべし。「其の法身は是れ常住なるを以て」とは、法身は卽ち是れ轉依を相と爲し、一切の障を離れたる常住の眞如にして變易無きが故なり。或は垢穢無く罣礙有ること無き無上の妙智なり。無色界の如きは異熟に非ず。是れ無漏なるが故に、此れも亦常住の法身の所攝なり。差別無きが故に。業煩惱の能く爲す所に非ざるが故なり。「八萬四千の諸の有情の行と及び彼の對治とは皆得べし」とは、八萬四千の法蘊は能く有貪・有瞋・有癡・[三]等分の有情の行を治するが故なり。四種に各二萬一千有り。「又無染の法は是れ諸佛の法なり」とは、善淨の眞如は一切の障垢の染むること能はざるが故なり。餘義は了じ易し。重ねて釋することを須ひず。佛は是の如き祕密の言詞を說く、復何の果有りや。謂はく說者をして安立すべきこと易からしむ、義を總括するが故に。他の爲に說き易し、卽ち此の因の故に。能く聞者をして受持すべきこと易からしむ、資糧を滿じ易く。教を受持するが故に。法性に達し易し、資糧滿ずるが故に。佛を得、淨を證す、大我を得るが故に。法と僧とも亦爾なり。並びに最勝なるが故に、此に由りて現法樂住を證得す。彼を覺知するが故に、智者の前に於て論義決擇し聰敏の數に入る。斯の十利の爲に祕密の言を說く。聲聞乘の中にも亦父母を殺害する等の密意の言詞を說く。十利も亦爾り。

論曰　又能く引發して到彼岸を修し、有情を成熟し、佛國土を淨むるは。諸佛の法なるが故に、應に知るべし、亦是れ菩薩の等持の作業の差別なり。

釋曰　菩薩の得る所の諸の三摩地に、復四種の作業の差別有り、謂はく此の定に依りて能く一切の波羅蜜多を修し、一切の諸の有情の類を成熟す。神通等の方便を發して引いて正法に入らしむるが故に、能く佛土を淨め欲するに隨つて能く金等の寶を成ずるが故に、能く正しく力無畏等の一切の佛語を修集す。是の如き所說の等持を離れては、能く到彼岸を修集する等を辦ずるに非ず。

【三】等分とは三毒等分に有るもの。

の言に答ふるなり。此の貝戍尼は顯には離間語に目け、密には常勝空を詮はす。「貝」は勝の義を表はし、「戍」は空の義を表はし、「尼」は常の義を表はす。今は密義を取れば問と答と相應す。顯には則ち爾らず。波魯師等の文詞を訓釋する道理も亦爾なり。此の波魯師は、顯には麁惡語に目け、密には彼岸に住することを詮はす。今は密義を取る。是の故に說いて言く、「若くは善く所知の彼岸に安住す」と。「所知の彼岸」とは、是れ一切智なり。佛は其の中に於て能く善く安住するを波魯師と名く。「若くは正しく法の品類の差別を說く」とは、綺間語を釋す。其の義了じ易し。「若くは數々自ら無上の靜慮を證得せんと欲する有り」とは、上の文詞を訓釋する道理の如く。諸佛の身中に有する所の靜慮を說いて「無上」と爲す。「若くは其の心に於て能く正しく一切の煩惱を惛害す」とは、已に滅し已に斷ずるは是れ惛害の義なり。「若くは一切處に遍行する邪性を皆如實に見る」とは、謂はく一切の虛妄分別は邪亂を性と爲すことを見るなり。

論曰　甚深の佛法とは、云何が名けて甚深の佛法と爲すや。此の中、應に釋すべし、謂はく常住の法は是れ諸佛の法なり。其の法身は是れ常住なるを以ての故に。又斷滅の法は是れ諸佛の法なり、一切の障は永へに斷滅するを以ての故に。又生起の法は是れ諸佛の法なり。變化身を現じて生起するを以ての故に。又有所得の法は是れ諸佛の法なり、八萬四千の諸の有情の行と及び彼の對治とは皆得べきが故に。又有貪の法は是れ諸佛の法なり、自ら誓つて有貪の有情を攝受して己の體と爲すが故に。又有瞋の法は是れ諸佛の法なり、又有癡の法は是れ諸佛の法なり、又有異生の法は是れ諸佛の法なることも、應に知るべし亦爾なり。又無染の法は是れ諸佛の法なり。成滿せる眞如は一切の障垢も染むること能はざるが故に。又無汚の法は是れ諸佛の法なり、世間に生在するも諸の世間の法は汚すこと能はざるが故に。是の故に說いて甚深の佛法と名く。

釋曰　甚深の佛法と、契經に說く所は其の義云何ん。謂はく餘經に說く、若くは常住の法は是れ

是れ邪なることを了知して正行を修す。云何が能く妄語するや、若しくは妄の中に於て能く說いて妄と爲す。云何が貝戍尼なるや、若しくは能く常に最勝の空住に居る。云何が波魯師なるや、若しくは善く所知の彼岸に安住す。云何が綺間語なるや、若しくは正しく法の品類の差別を說く。云何が能く貪欲なるや、若くは數々自ら無上の靜慮を證得せんと欲すること有り。云何が能く瞋恚なるや、若しくは其の心に於て能く正しく一切の煩惱を憎害す。云何が能く邪見なるや、若くしは一切の處に遍行する邪性を皆如實に見る。

釋曰　經の中に「苾芻よ我れは是れ能く殺す等」と說けるが如きは、此中に彼の說く所の意趣を顯はす。「若くは衆生の生死流轉を斷ず」とは、斷は是れ殺の義にして問と相應す。「與ふる者有ること無きに自然に攝取す」とは、是れ他の求むること無きに自ら攝益するの義なり。「若くは諸の欲に於て是れ邪なることを了知して而も正行を修す」とは、謂はく若くは境界の欲、若くは分別の欲は唯是れ邪亂なるを如實に知るなり。頌に言へる有るが如し、

佛說きたまはく貪恚癡は　皆分別より起る
淨、不淨の顚倒は　此れも亦緣生と爲す、
淨、不淨の顚倒を　緣と爲して有なる者は
彼の自性は皆無なり　故に欲は眞實に非らず、と。

「若くは妄の中に於て能く說いて妄と爲す」とは、妄を說いて妄と爲すが故に妄語と名くるなり。頌に言へる有るが如し、

一切の虛妄の法を　世尊は如實に說きたまふ
虛妄の法の中に於て　諸行は最も虛妄なり、と。

「若くは能く常に最勝の空住に居る」とは、世の文詞を訓釋する道理に依つて上に問ふ所の貝戍尼

こと無し」とは、此れ既に遮言にして、是れ樂はさるの義なり。來り求むる施、當に施すべき我が施、先に施せる我が施に於て、此等の一切に皆欲樂無く、唯安住涅槃に攀緣して惠施を行ぜんことを樂ふ。「若くは諸の菩薩は如來を信ぜずして而も布施を行ず」とは、謂はく法性を證して自ら了り、自ら信じて惠施を行ず、唯他を信ずるのみに非ず。「若くは諸の菩薩は惠施の中に於て自ら策勵せず」とは、謂はく能く任運に常に施を行ずるが故に、自ら策することを須ひず、而も能く他を策つて勸めて施さしむるが故なり。「若くは諸の菩薩は暫時有り、少しく施す所有ること無し」とは、是れ一切時に一切を施す義なり。「若くは諸の菩薩は惠施の中に於て婆洛の想を離る」とは、此の婆洛の言は顯には堅實に目け、密には流散を詮はす、今は密義を取りて流散の想を離るるなり。卽ち三摩地は是れ心定に住して而も施を行ずる義なり。「若くは諸の菩薩は殟波陀慳なり」とは、殟波陀の言は、顯には生起に目け、密には拔足を詮はす。今は密義を取りて慳足を拔除して而も惠施を行ずるなり。「若くは諸の菩薩は究竟に住せず」とは、一向に寂に趣く聲聞の究竟の無餘涅槃に安住するに同じからず。「若くは諸の菩薩は惠施の中に於て自在に轉ぜず」とは、謂はく慳等の、施の所治の障をして自在に轉ぜざらしむ。「若くは諸の菩薩は無盡に住せず」とは、謂はく圓滿にして盡くること無き增上究竟の佛果を得るも而も安住せざるなり。何となれば化を起して他を饒益せんが爲に常に惠施を行ずればなり。「布施に於けるが如く戒に於ても、乃至當に知るべし亦爾なり」とは、類として餘の五に通ずればなり。「謂はく經に言へるが如し」とは、云何が菩薩は能く尸羅を具するや。若くは諸の菩薩は少戒をも護らず、謂はく自他平等の性を見るが故に、他の淨戒を護るは卽ち是れ自己の尸羅を具足するなり、と。

論曰　云何が能く殺生するや。若しくは衆生の生死流轉を斷ず。云何が與へざるを取るや。若しくは諸の有情は與ふる者有ること無きに自然に攝取す。云何が欲邪行なるや、若しくは諸の欲に於て

【三】以下は論本に指示せる經說を擧ぐ。

を已に斷じ、已に脱して、而も恒に現前して一切の有情を利する事を起作し、盡未來際に常に休息することと無く、此の行を欣修することは、甚だ難しと爲すが故なり。

論曰　復次に隨覺難行の中、佛の何等の祕密の言詞に於て、彼の諸の菩薩は能く隨って覺了するや。謂はく經に言へるが如し。

釋曰　第八の難行は其の義未だ了ぜず。故に重ねて釋することを須ゆ。

論曰　云何が菩薩は能く惠施を行ずるや。若くは諸の菩薩は少しも施す所無く、然も十方無量の世界に於て廣く惠施を行す。云何が菩薩は樂ふて惠施を行ずるや。若くは諸の菩薩は一切施に於て都て欲樂すること無し。云何が菩薩は惠施の中に於て深く信解を生ずるや。若しくは諸の菩薩は如來を信ぜずして而も布施を行ず。云何が菩薩は施に於て策勵するや、若しくは諸の菩薩は惠施の中に於て自ら策勵せず。云何が菩薩は施に於て耽樂するや。若くは諸の菩薩は暫時有り、少しく施す所有ること無し。云何が菩薩は其の施廣大なりや。若しくは諸の菩薩は惠施の中に於て娑洛の想を離る。云何が菩薩は其の施清淨なるや。若しくは諸の菩薩は殟波陀慳なり。云何が菩薩は其の施究竟なりや、若しくは諸の菩薩は究竟に住せず。云何が菩薩は其の施自在なるや、若しくは諸の菩薩は惠施の中に於て自在に轉ぜず。云何が菩薩は其の施無盡なるや、若しくは諸の菩薩は無盡に住せず。布施に於けるが如く、戒を初と爲し、慧を後と爲し、其の所應に隨つて當に知るべし、亦爾なり。

釋曰　「若くは諸の菩薩少しも施す所無し等」とは、謂はく諸の菩薩は一切の有情を攝して己の體と爲す、自他平等の性に通達するが故に、彼れ施を行ずる時は卽ち菩薩に施すが故に、少しも施すこと無きを能く施を行ずと名く。又一切の有する所の財物を以て一切に施す。是の故に說いて「少しく施す所無し」と名く。又所施の物と、施す者と、受くる者とは、皆不可得にして三輪清淨なり。是の故に說いて「少しも施す所無し」と名く。「若くは諸の菩薩は一切施に於て都て欲樂する

るに於て信解を生ずるが故に。七には通達難行、具さに能く補特伽羅と法との無我に通達するが故に。八には隨覺難行、諸の如來の說く所の甚深なる祕密の言辭に於て能く隨つて覺するが故に。九には不離不染難行、生死を捨てず而も染まざるが故に。十には加行難行、能く諸佛の安住を修して一切の障礙を解脫し、生死の際を窮め。功用を作さずして、常に一切有情の一切の義利の行を起すが故なり。

釋曰　說の如く菩薩は諸の難行を修す。一切の難行は十種の所顯なり。「自誓難行、無上菩提の願を誓受す」とは、自らの樂を顧みず。一切の有情を饒益することを誓受するは、甚だ難しと爲すが故なり。「不退難行、生死の衆苦も退くる能はず」とは、久しく生死に處して風寒等の苦も退くる能はざる所なるは、甚だ難しと爲すが故なり。「不背難行、一切の有情は邪行を行ずと雖も而も棄てず」とは、父母等の邪惡の行を行ずるに於て、或は用ゆる所無きに戲れに眼睛を求め、双足にて踐蹋するも、其の過を觀ずして、而も饒益を作すことは、甚だ難しと爲すが故なり。「現前難行、怨ある有情の所にも現じて一切の饒益の事を作す」とは、重怨有りと雖も而も現じて饒益することは、甚だ難しと爲すが故なり。「不染難行、世間に生在するも世法の爲に染汚せられず」とは、常に世間の利等の八法に處するも染むること能はざる所なるは、甚だ難しと爲すが故なり。「勝解難行等」とは、微妙なる義の殊勝なる神力に於て未だ了ること能はずと雖も、而も深く信解することは、甚だ難しと爲すが故なり。「通達難行等」とは、現觀に通達して等しく一義を覺し、能く具さに遍計所執の補特伽羅と、一切の法性とは皆所有無しと通達することは、甚だ難しと爲すが故なり。「隨覺難行等」とは、佛の說く所の祕密の言詞に於て、隨つて聞きたる義を捨てて、聞かざる義を覺ることは、甚だ難しと爲すが故なり。「不離不染難行等」とは、生死を捨てずして彼の過に染まざることは、甚だ難しと爲すが故なり。「加行難行等」とは、一切の煩惱及び所知障

論曰　堪能の差別とは、謂はく靜慮の樂に住し、其の欲する所に隨ひて生を受くるが故なり。

釋曰　此の靜慮に由りて其の性調順にして堪能する所有り。諸の有情を饒益せんと欲する處に隨ひ、靜慮を退かずして而も往いて生を受く。聲聞乘の中には是の如きの事無し。(これ)殊勝なる所以なり。

論曰　引發の差別とは、謂はく能く一切世界の無礙の神通を引發するが故なり。

釋曰　此の定の力に由りて種種なる一切世界の無礙の神通を引發するなり。

論曰　作業の差別とは、謂はく能く振動し、熾燃し、遍滿し、顯示し、轉變し、往來し、卷舒し、一切の色像を皆身中に入れ、往く所は類を同じくし、或は顯はれ、或は隱れ、所作自在にして、他の神通を伏し、辯と念と樂とを施し、大光明を放つ。是の如きの大神通を引發するが故なり。

釋曰　此の定の力に由りて種々の神通の所作を引發するなり。「顯はれ」とは顯現するを謂ひ、「隱れ」とは、隱藏するを謂ふ。「所作自在にして」とは、謂はく魔王を變じて佛身と作す等なり。「他の神通を伏す」とは、謂はく能く他の神通力を映奪するなり。辯才無き者には施すに辯才を以てし、念と樂と無き者には施すに念と樂とを以てす。他方に遠く住するものを召さんが爲に、菩薩は大光明を放つ。「是の如きの大神通を引發す」とは、前に說く所の種々の神通を引くなり。是の如き等の類は聲聞等には無し。是故に殊勝なり。

論曰　又能く諸の難行を攝する十難行を引發するが故なり。十難行とは、一には自誓難行、無上菩提の願を誓受するが故に。二には不退難行、生死の衆苦も退くること能はざるが故に。三には不背難行、一切の有情、邪行を行ずと雖も而も棄てざるが故に。四には現前難行、怨ある有情の所にも現じて一切の饒益の事を作すが故に。五には不染難行、世間に生在するも世法の爲に染汚せられざるが故に。六には勝解難行、大乘の中に於て未だ了る能はずと雖も、然も一切の廣大にして甚深な

卷の第八

增上心學分第八

論曰 是の如く已に增上戒の殊勝なることを説けり。增上心の殊勝なることを云何が見るべきや。略して六種の差別に由る。應に知るべし、一には所緣の差別に由るが故に、二には種々の差別に由るが故に、三には對治の差別に由るが故に、四には堪能の差別に由るが故に、五には引發の差別に由るが故に、六には作業の差別に由るが故なり。

釋曰 增上戒の聲聞と異るが如く、其の增上心も亦應に異有り。故に此の問を爲す。六種の差別は略して此の問に答ふ。後に別に釋するが如し。

論曰 所緣の差別とは、謂はく大乘の法を所緣と爲すが故なり。

釋曰 「大乘の法」とは、菩薩藏の中に有する所の甚深廣大なる敎等にして、聲聞等の定の能く緣する所に非ず。是の故に殊勝なり。

論曰 種々の差別とは、謂はく[一]大乘光明・集福定王・賢守・健行等の三摩地は種々無量なるが故なり。

釋曰 菩薩の得る所の諸の三摩地の差別は無量なり。此の中略して上首と爲る者を説き、餘の一切を等す。聲聞乘等は尙名すら聞かず、何に況んや能く得んや。

論曰 對治の差別とは、謂はく一切法の總相を緣ずる智は、楔を以て楔を出すの道理にて、阿賴耶識の中の一切の障の麁重を遣るが故なり。

釋曰 無分別智の緣ずる所の眞如は、是れ一切法の共相の所顯なり。故に此の智を説いて「總相を緣ず」と名く。定は能く此の能對治の智を發すを亦「對治」と名く。聖道は微妙なるが故に細楔の如し。所治の種子は其の性麁重なるが故に麁楔の如し。

【一】大乘光明等の釋義は眞諦譯の世親釋に出づ、參照。

の學ぶ所の尸羅と名く」と。

論曰　此の略して四種の殊勝を說くに由りて、應に知るべし、菩薩の尸羅と律儀とを最も殊勝と爲す。是の如き差別は菩薩の學處なり。應に知るべし、復無量の差別有り。毗奈耶瞿沙方廣契經の中に說けるが如し。

釋曰　今此の中に於ては略して四種の殊勝の相を說くも、毗奈耶瞿沙經の中に於ては廣說して、復無量の殊勝有り。此の經は卽ち是れ菩薩藏の攝なり。故に方廣と名く。

には是の如きの事無し。是の故に殊勝なり。

論曰　甚深の殊勝とは、謂はく諸の菩薩は是の品類の方便善巧に由りて、殺生等の十種の作業を行ずるも而も罪有ること無く、無量の福を生じて速かに無上正等菩提を證す。又諸の菩薩は變化の身語の兩業を現行す、應に知るべし、亦是れ甚深なる尸羅なり。此の因縁に由りて、或は國王と作りて種々の有情を惱ます事を示行し、有情を毗奈耶の中に安立す。又種々の諸の本生の事を現じて諸の餘の有情を逼惱することを示行し、眞實には諸の餘の有情を攝受す。(此れ)先に他の心をして深く淨信を生ぜしめ、後に轉じて成熟せしむるなり。是を菩薩の學する所の尸羅の甚深の殊勝と名く。

釋曰　「是の品類の方便善巧に由る」とは、謂はく諸の菩薩の悲願と相應する後得の妙智なり。「殺生等の十種の作業を行ずるも而も罪有ること無し等」とは、謂はく善法を愛樂し、不善を憎惡し、諸の邪性を見るを、說いて[三]後の三と名く。此に依止するが故に、殺等の七を行ずるも而も罪有ること無く、無量の福を生じて速かに菩提を證す。或は前の七を行ずるも後の三を起さざるなり。大數を十と言ふ。或は已に伏除するも、彼の力を試みんが爲の故に心に暫く起るも、苦を招くこと能はざるが故に罪有ること無し。能く道を助くるが故に無量の福を生ず。「變化の身語の兩業を現行す」とは、謂はく化身に依りて兩業を發起すとなり。或は實身を依とし、[四]化心に由りて身語の二業を發す。意業には形無ければ變化すべからず。或は現じて貪瞋等の事有りと雖も、有情を化するに於て大なる義利無し。是の故に說かず。「有情を毗奈耶の中に安立す」とは、謂はく國王と作りて諸の法律を制し、逼惱を示行して其の中に住せしむ。或は一切の善は能く衆惡を滅し、或は大涅槃の生死を滅除するを毗奈耶と名く。「又種々の諸の本生の事を現ずる」とは、謂はく諸の菩薩の諸の本生の事は化心の現ずる所なり。或は久しく成佛するも復諸の本生の事を行ずることを示現し、有情を饒益し菩薩をして學ばしむ。故に後に說いて言く「是れを菩薩

【三】　十不善業の中の後の三なり。

【四】　實の身に依止して心のみ變化するが故に化心といふ。

不犯なる有り。菩薩には犯なるも、聲聞は不犯なる有り。菩薩は身語心の戒を具有するも、聲聞は唯身語の二戒有るのみ。是の故に菩薩は心にも亦犯有れど、諸の聲聞には非ず。要を以て之を言はば、一切の、有情を饒益する無罪なる身語意の業は、菩薩は一切を皆應に現行すべく、皆應に修學すべし。是の如きを應に知るべし、說いて名けて共不共の殊勝と爲す。

釋曰 殺、盜、婬等と貪等との生ずる所を名けて[一]性罪と爲す。生草を斷ずる等、貪等にて生ずるに非らざるを說いて[二]遮罪と名く。菩薩は中に於て利益有りて而も罪無しと觀ずる者は一切應に修すべし。聲聞は爾らず。又諸の菩薩は心にも亦犯有り諸の聲聞には非ず。謂はく唯內に欲、恚、害、等の諸の惡尋思を起すのみにて、身語の二業を發起することを爲さざるなり。「一切の、有情を饒益する無罪なる身語意の業」とは、謂はく能く有情を利益し安樂にし、自他の貪等の煩惱を發ざるは、是の如き一切を菩薩は應に修すべし。

論曰 廣大の殊勝とは、復四種の廣大に由るが故に、一には種々無量の學處の廣大なるに由るが故に。二には無量の福德を攝受すること廣大なるに由るが故に。三には一切の有情の利益安樂の意樂を攝受すること廣大なるに由るが故に。四には無上正等菩提を建立すること廣大なるに由るが故なり。

釋曰 「種々無量の學處の廣大」とは、謂はく諸の菩薩の學する所の尸羅は、種々の品類に無量に差別せるは廣大なる所以なり。「無量の福德を攝受すること廣大」とは、謂はく此の尸羅は能く無量の福德の資糧を攝することは廣大なる所以なり。「一切の有情の利益安樂の意樂を攝受すること廣大」とは、謂はく此の尸羅は諸の有情を攝して、此世、他世（若くは）世、出世間に惡を捨てて善を攝し。若くは因に、若くは果に饒益する意樂は廣大なる所以なり。「無上正等菩提を建立すること廣大」とは、謂はく此の尸羅は大菩提を建つることは廣大なる所以なり。諸の聲聞等

【一】初は十不善業、次に貪瞋痴等の根本煩惱。
【二】生草を拔き樹木を截り地を掘るといふ如きは其れ自體罪惡にあらざるも時處に依りて之を禁止したるは之を遮罪と名く。

薩地の正受菩薩律儀の中に說けるが如し。復次に應に知るべし、略して四種の殊勝に由るが故に此れ殊勝なり。一には差別の殊勝に由る。二には共不共の學處の殊勝に由る、三には廣大の殊勝に由る、四には甚深の殊勝に由る。

釋曰　增上の戒に依りて學ぶが故に增上戒學と名く。「菩薩地の正受菩薩律儀の中に說けるが如し」とは、謂はく彼の尸羅波羅蜜多品の中に廣く說けるが如しとなり。「復次に應に知るべし。略して四種の殊勝に由るが故に」とは、此の殊勝等は後に廣く釋するが如し。

論曰　差別の殊勝とは、謂はく菩薩の戒に三品の別有り、一には律儀戒、二には攝善戒、三には饒益有情戒なり。此の中、律儀戒は、應に知るべし、二戒を建立する義の故なり。攝善法戒は、應に知るべし、一切の佛法を修集することを建立する義の故なり。饒益有情戒は、應に知るべし、一切の有情を成就することを建立する義の故なり。

釋曰　「差別の殊勝」とは、謂はく諸の菩薩は三種の戒を具す、卽ち律儀戒。攝善法戒。饒益有情戒なり。聲聞乘等は唯一種の律儀尸羅有るのみ。是の故に菩薩は彼に望むれば殊勝なり。「律儀戒」とは、謂はく正受して一切の品類の惡不善の法を遠離するなり。「攝善法戒」とは、謂はく力、無畏等の一切の佛法を正しく修集するなり。「饒益有情戒」とは、謂はく自らの樂を顧みず。堪能する所に隨つて三乘に入らしめ、生死の苦を捨てて涅槃の樂を證せしむるなり。「律儀戒は應に知るべし二戒を建立する義の故に」とは、是れ二戒の因なるが故なり。謂はく若し身語意を防守する者は、便ち能く無倒に一切の清淨なる佛法を修集し。亦能く一切の有情を成熟して三乘に入らしむ。餘は則ち爾らず。

論曰　共不共の學處の殊勝とは、謂はく諸の菩薩は一切の性罪は現行せざるが故に聲聞と共に相似す。遮罪は現行すること有るが故に彼と不共なり。此の學處に於て、聲聞には犯なるも、菩薩には

菩薩の初修の　　　無數の三大劫と名く。

釋曰「五の補特伽羅行り、三無數大劫を經」とは、應に知るべし、唯一の補特伽羅なるも、位の差別の故に五種を建立す。謂はく後に説く所の勝解行等なり。「勝解行」とは、未だ眞如を證せざるも、但勝解に依りて諸行を勤修するなり。此れ第一の無數大劫を經て修行圓滿す。「清淨增上の意樂行」とは、謂はく清淨なる增上の意樂を得て、諸行を勤修するなり。此れ六地に在るを有相行と名け、第七地に在るを無相行と名く。是の如き二種の補特伽羅は第二の無數大劫を經て修行圓滿す。(これより)已上、乃至第十地の中には、即ち此の轉を無功用行と名け、第三の無數大劫を經て修行圓滿す。第八地の中にては無功用行は猶ほ未だ成滿せず。第九第十の地の中にて此の行、方に成滿することを得。此れ唯是れ一の補特伽羅の異位と相應する差別に五を成ずるなり。預流等の如く無始より來生死流轉するを、齊つて何ぞ三無數劫を最初の修行と言ふべけんや。此の問に答へんが爲の故に伽他を説く。「清淨と增上との力」とは、謂はく善根力を清淨力と名く。此れ即ち善根力有る者を説く。若くは大願力を增上力と名く。此の意は、大願力有る者を説くなり。善根力有るが故に能く所治を降伏し、大願力有るが故に常に善知識に値ふ。「堅固心にして昇進す」とは、惡友に遇ふと雖も方便して破壞し、終いに大菩提心を棄捨せず。現世と當來とに修する所の善法は運々に增長して終いに退減無し。是の如く若し時に善根力と及び大願力とを具すれば、大菩提心は堅固にして退かず、修する所の善法は念々に增進して喜足を生ぜず。(然も)[八]舊に順じて齊つて是れを名けて最初に修行する三無數劫と爲すのみ。

增上戒學分第七

論曰　是の如く已に因果の修の差別を説けり。此の中、增上戒の殊勝なるは云何が見るべきや。菩

【八】舊に順してとは古來の説に順じての意なるべし。

に生ずべしと。是の如き等の願は無量無邊なるが故に、「種々」と言ふ。「謂はく思擇と修習との二力に由る」とは、此の力の中に於て且らく二種を說く。其の餘の諸力も亦中に攝在す。「謂はく前の六波羅蜜多に由りて妙智を成立し、法樂を受用し、有情を成熟す」とは、施等の六に由りて此の智を成立し、復此の智に由りて六種を成立す、謂ゆる數相等の種々の品類は、是れを則ち名けて「法樂を受用す」と爲す。此の妙智に由りて能く正しく此の施、此の戒、此の忍、進等を了知す。聞く所の法の如く一切の有情の類を饒益す。是れを則ち名けて「有情を饒益す」と爲す。又此の四種の波羅蜜多、乃至後得智の攝なり」とは、謂はく此に說く所の方便等の四は、是れ無分別後得智の攝なり。若し十種の波羅蜜多を立つれば、第六の般若は唯是れ根本無分別智なり。若し六種の波羅蜜多を立つれば、第六の般若は無分別智と及び後得智との二智の所攝なり。後得智の中の四到彼岸も亦第六の般若の攝に在るが故に。「是の如き法門は是れ波羅蜜多藏の所攝なり」とは、一切の大乘敎の法は皆波羅蜜多藏と名く。是の如き十地の法門は是れ彼の藏の所攝なり。一一の地は皆是れ一切の到彼岸藏の所攝なるに由るが故なり。此を以て一切の地の中に具さに一切の波羅蜜多を修することを證知す。

〔修時章　第五〕

論曰　復次に凡そ幾時を經て諸地を修行し圓滿することを得べきや。五の補特伽羅有り、三無數の大劫を經。謂はく勝解行の補特伽羅は、初の無數大劫を經て、修行圓滿す。清淨增上の意樂行の補特伽羅と及び有相行、無相行の補特伽羅とは、前の六地と及び第七地に於て第二の無數大劫を經て修行圓滿す。即ち此の無功用行の補特伽羅は此れより已上第十地に至り、第三の無數大劫を經て修行圓滿す。此の中に頌有り。

清淨と增上との力にて　　堅固心にして昇進するを

殊勝なる業縁を引攝するが故に。三には力波羅蜜多なり。謂はく思擇と修習との二力に由りて、前の六種の波羅蜜多をして無間に現行せしむるが故に。四には智波羅蜜多なり、謂はく前の六波羅蜜多に由りて、妙智を成立し、法樂を受用して有情を成熟するが故に。又此の四種の波羅蜜多は、應に知るべし。般若波羅蜜多の無分別智と後得智との攝なり。又一切地の中に於て、一切の波羅蜜多を修習せざるには非ず。是の如きの法門は是れ波羅蜜多藏の所攝なり。

釋曰　「增勝に由るが故に、十地の中に別に修する十種の波羅蜜多を說く」とは、謂はく決定して修の差別の義を說く、爾らずと爲すや。一一の地の中に具さに十種の波羅蜜多を修す。是の故に應に但決定して此の地に此の波羅蜜多を修すと說くべからず。增勝の言に由りて此の過失無し。此の中には但增勝の修の義を說くのみ、餘を修することを遮せず。契經に說けるが如し、初地は布施波羅蜜多を最も增勝と爲す。其の餘の一切の波羅蜜多は修習せざるには非ず、力に隨ひ分に隨ふ」と乃至廣說せり。「前の六地に於て修する所の六種の波羅蜜多は先に已に說けるが如し」とは、謂はく極喜等の前の六地の中にて、布施等の六到彼岸を修す。「後の四地の中に修する所の四」とは、謂はく遠行等の後の四地の中にて、方便等の四到彼岸を修す。「方便善巧」とは、謂はく生死を捨てずして而も涅槃を求むるは、是れを則ち說いて方便善巧と名く。若し前の六波羅蜜多の集むる所の善根を以て、諸の有情と共にすれば、諸の有情を饒益せんと欲するが爲なるが。故に有情を捨てず。當に知るべし、卽ち是れ生死を捨てさるなり。若し此を以て善く無上正等菩提を迴求すれは、無上なる佛の菩提を證せんが爲なるが故に、當に知るべし卽ち是れ涅槃を希求するなり。「謂はく種々の微妙なる大願を發して當來の波羅蜜多の殊勝なる業縁を引攝す」とは、未來世の到彼岸の緣を求め、亦諸の有情を饒益せんが爲の故に、及び佛果涅槃を速かに證せんが爲に、是の願を作して言はく、若し是の處に到彼岸の緣行いば、願はくば我れ未來にも當に彼

と言ふは、卽ち是れ增勝なり。熾盛修なりと雖も、或は少しの得る所に便ち喜足を生じ、且つ此を修すれば餘は何ぞ爲すを用ゐんと謂ふ、故に最後に「無喜足修」を說く。但無相及び無功用に熾盛にして修するのみに非ず、何者が最上の佛果を證すと爲さんと、應に勤めて修習すべし。「一切の麁重の依止を銷融す」とは、阿賴耶識を麁重の依止と爲す。彼の聚を損壞するが故に「銷融す」と名く。大良藥の諸の病塊を消すが如し。「種々の相を離れて法苑の樂を得」とは、我を離れ法佛等の相の想を離るるなり。「苑」とは、謂はく中に於て以て遊翫す可きなり。「法」とは謂はく法界なり。法は卽ち是れ苑なるが故に「法苑」と名く。此に於ける喜悅を法苑の樂と名け、此を證するが故に法苑の樂を得と名く。王宮外の上妙なる苑園は其の中に遊戲して勝れたる喜樂を受くるが如く、法界も亦爾なり。「能く正しく周遍せる無量にして分限の相無き大法の光明を了知し」とは、謂はく正しく十方無邊の分量無き相に通達する顯照の行なるが故に、「法の光明」と名く。善く文字を誦習する光明の如し。「淸淨分に順じ分別する所無き無相を現行し」とは、當來の佛果を「淸淨分」と名く、此れ能く彼を引くが故に名けて「順ず」と爲す。「分別する所無き無相を現行す」とは、佛や輪王の鮮白の蓋等の如し。「爲に法身をして圓滿し成辦せしめ、能く正に後々の勝因を攝受す」とは、謂はく第十地を說いて「圓滿」と名く、若しくは佛地に在るを成辦と名く。此を感ずる因の最も爲殊勝なるを說いて「勝因」と名く。前前の諸因の招集する所なるが故に、說いて「後々」と名く。是の如きの五修は其の數量に隨つて五種の果を得るなり。

論曰　增勝に由るが故に、十地の中に別に修する十種の波羅蜜多を說く。前の六地に於て修する所の六種の波羅蜜多は、先に已に說けるが如し。後の四地の中に修する所の四とは、一には方便善巧波羅蜜多なり、謂はく前の六波羅蜜多の集むる所の善根を以て、諸の有情と共に廻して無上正等菩提を求むるが故に。二には願波羅蜜多なり。謂はく種々の微妙なる大願を發して、當來の波羅蜜多の

遍く能く一切の地に通達す」とは、若し初地に於て正しく通達する時は、速かに能く後の一切の地に通達す。此の種類なるが故なり。頌に言へる有るが如し、竹の初節を破れば、餘節は速かに能く破るが如く、初地の眞智を得れば、諸地は疾く當に成ずべし、と。「四には成滿を得、謂はく諸地を修して究竟に到る」とは、謂はく地地の中の果分成滿し、或は最後を滿するなり。

〔修相章　第四〕

論曰　此の諸地を修することは、云何が見るべきや。謂はく諸の菩薩は地地の中に於て奢摩他、毘鉢舍那を修するに[七]五(種の)相の修に由る。何等をか五と爲すや。謂はく集總修。無相修。無功用修。熾盛修。無喜足修なり。是の如き五修は諸の菩薩をして五果を成辦せしむ。謂はく念々の中に一切の麁重の依止を消融し、種種の想を離れ、法苑の樂を得、能く正しく周遍せる無量にして分限の相無き大法の光明を了知し、淸淨分に順じて分別する所無く無相現行し、法身をして圓滿し成辦せしめんが爲に、。能く正しく種々の勝因を攝受す。

釋曰　「地々の中に於て」とは、謂はく諸地は一に非るが故に重言を作す。「奢摩他」とは、謂はく能く諸の散動を對治する定なり。「毘鉢舍那」とは、謂はく能く諸の顚倒を對治する慧なり。地地の中に於て此の二種を修することは皆五相に由りて數々に修習す。五相とは卽ち、是れ集總修等なり。「集總修」とは、謂はく一切を集め總して一聚と爲し、簡要して修習す。餘の骨鎖等の事の境界の觀も、亦一切を集め、總じて一聚と爲し、要略して修習す。彼に簡ばんが爲の故に「無相修」を說く。衆相を離れたる眞の法界の中に於て、事の差別を遣りて修習するが故なり。無相修には或は功用有りと雖も、此の修には功力を藉らず、任運にして轉ずることを顯はさんが爲の故に、次に復「無功用修」を說く。功用を作すことを離れて任運に轉ずるが故なり。無功用にして任運に修すと雖も、或は勝、或は劣の二種不定なるが故に、復第四に「熾盛修」を說く。熾盛

【七】種の字は世親釋論本に依つて補ふ。

義と詞と辯となり。法の無礙自在に由りて一切の法句を了知し。義の無礙自在に由りて一切の義理に通達し。詞の無礙自在に由りて一切の言詞を分別し。辯の無礙に由りて遍く十方に於て其の宜しき所に隨つて自在に辯說す。此の地の中に於ては、最初に、先に未だ曾て得ざる無礙辯の智を證得するが故に善慧と名く。「法雲」と言ふは、總じて一切法を緣ずる智を得るに由り、總じて一切の契經等の法の眞如を離れざるを緣ず。此の一切法と共相なる境智は譬ば大雲の如く、陀羅尼門、三摩地門は猶淨水の如く、智能く彼を藏し、雲の水を含むが如く、能く彼の勝れたる功能を生ずること有るが故に。又大雲の虛空を覆隱するが如く、是の如く一切の法を總して緣ずる智は、空の如き廣大無邊なる[六]惑智の二障を覆隱す。覆隱と言ふは隔の義、斷の義なり。又大雲の淸冷なる水を澍いで虛空に充滿するが如く。是の如く一切の法を總じて緣ずる智は無量の殊勝なる功德を出生して、所證の所依の法身に充滿す。

〔得相章　第三〕

論曰　此の諸地を得ることを云何が見るべきや。四種の相に由る。一には勝解を得、謂はく諸地に深く信解することを得るが故に。二には正行を得。謂はく諸地と相應する十種の正法の行を得るが故に。三には通達を得、謂はく初地に於て法界に達する時、遍く能く一切の地に通達するが故に。四には成滿を得、謂はく諸地を修して究竟に到るが故なり。

釋曰　諸地を得るに依りて是の如き言を說く。「四種の相に由る。一には勝解を得、謂はく諸地に深く信解するを得」とは、地の敎法に於て決定して印可し眞實なること是の如くなればなり。「二には正行を得、謂はく諸地と相應する十種の正法行を得」とは、敎法に於て十種の法行を得るなり。謂はく諸地と相應する敎法に於て書寫し、供養し、轉施し、聽聞し、披讀し、受持し、開示し、諷誦し、思惟し、修習するなり。「三には通達を得、謂はく初地に於て法界に達する時、

【六】惑智の二障とは煩惱障と所知障となり。

と無き等持等至の依止する所なるに由る」とは、謂はく此の地の中には希有の定を證し、能く智光を發して諸法を照了するが故に發光と名く。得已つて失はざるを「退轉すること無し」と名け。[五]諸の靜慮の定を說いて「等持」と名け。諸の無色定を說いて「等至」と名く。或は「等持」とは心一境の相にして「等至」と言ふは正受現前するなり。「大法光明の依止する所」とは、謂はく此の地の中には定と相應して退轉すること無きが故に、諸の大乘の契經等の法に於て智光明を得るなり。此の地は是れ彼の所依の因なるが故に名けて「發光」と爲す。「焰慧」と言ふは、謂はく此の地の中には慧焰有るが故に名けて焰慧と爲す。此れ卽ち一切の菩提分法を皆名けて焰と爲す、諸障を燒くが故なり。此の菩提分の多く安住する時は、諸の煩惱をして皆灰燼を成ぜしむればなり。「極難勝」とは、最も勝つべきこと難きなり。謂はく眞諦の智は是れ無分別なり。世間の書印工論等の智は是れ有分別なり。眞俗(二)諦の智は更互に相違して引發すべきこと難し、共をして相應せしめ、此を能く和合して相違せざらしむるが故に極難勝なり。「現前」と言ふは、最勝なる般若到彼岸に住して現在前するが故なり。謂はく此の地の中には緣起を證して住し、緣起の智力にて無分別ならしめ、最勝なる般若到彼岸に住して自在に現前し、一切法の染無く淨無きを知るなり。「遠行」と言ふは、功用の行の最後の邊に至るが故なり。謂はく此の地の中には諸の功用の行は最も究竟と爲す。一切の法相は動ずる能はずと雖も、而も無相に於て猶功用有り。「不動」と言ふは、謂はく一切の相及び一切の行は皆悉く彼の心を動ずること能はざるが故なり。第七地の中に一切の相は動ずる能はざる所なりと雖も、現行せざるが故に然も自在任運にして轉ぜず。加行有るが故なり。第八地の中には任運にして轉ず。加行を作さず。無功用なるが故なり。是れを七と八との二地の差別と名く。「善慧」と言ふは、謂はく最勝なる四無礙辨を得るなり。無礙辨の智は諸智の中に於て最も殊勝と爲し、智卽ち是れ慧なるが故に「善慧」と名く。四無礙とは法と

【五】諸の靜慮とは色界四禪天のこと。

論曰　復次に何が故に初地を說いて極喜と名くるや。此に由りて最初に、能く自他の義利を成辦する勝れたる[二]功能を得るが故なり。何が故に二地を說いて離垢と名くるや。極めて犯戒の垢を遠離するに由るが故なり。何が故に三地を說いて發光と名くるや、退轉すること無き等持、等至の依止する所なるに由るが故に、大法光明の依止する所なるが故なり。何が故に四地を說いて焰慧と名くるや。諸の菩提分法は一切の障を焚滅するに由るが故なり。何が故に五地を極難勝と名くるや。眞諦の智と世間の智とは更互に相違す、此の合し難きを合して相應せしむるに由るが故なり。何が故に六地を說いて現前と名くるや。緣起の智を所依止と爲し、能く般若波羅蜜多をして現在前せしむるに由るが故なり。何が故に七地を說いて遠行と名くるや。功用の行の最後の邊に至るが故なり。何が故に八地を說いて不動と名くるや。一切の相と有功用の行とは動ずること能はざるに由るが故なり。何が故に九地を說いて善慧と名くるや。最勝無礙の智を得るに由るが故なり。何が故に十地を說いて法雲と名くるや。總じて一切の法を緣ずる智を得。一切の陀羅尼門、三摩地門を含藏すること、譬へば大雲の如く、能く空の如き廣大なる障をも覆ふに由るが故なり。又法身に於て能く圓滿するが故なり。

釋曰　[三]聲の轉ずる因に依るが故に是の說を作す。「此に由り最初に能く自他の義利を成辦する勝れたる功能を得るが故に」とは、謂はく菩薩の現觀に入る時の如きは、能く自他の義利を成辦する最勝の功能を得て、極歡喜を生ず。聲聞等の現觀に入る時は唯自利を成辦する功能を得るのみにして、是の如き喜を生ずるに非ざるが故に、彼を說いて極喜地と名けず。若し初地の中に相應せざる者は自後の諸地にも亦相應せず。此を先と爲すが故なり。「極めて犯戒の垢を遠離するに由る」とは、謂はく此の地の中には[四]性戒を成ずるが故に、一切の毀戒の穢垢を遠離す。「退轉するこ

【二】功能は本論本には功德となすも他の諸譯に準じて功能となせり。

【三】聲の轉ずる云云とは十地の名稱の依つて起る因を明かさんが爲に名を訓釋すとの意なり。

【四】性戒とは殺生、偸盜等の如き自性惡を離るゝを性戒といふ。

の相に隨つて現前せしめんと欲すれば、其の勝解の如く卽ち能く現前するを相の自在と名く。希求する所に隨つて金等の寶土を其の勝解の如く則ち能く現前せしむるをこの自在と名く。前の諸地の中にも亦此の無差別に住するを得と雖も、然も功用を作して後乃ち成ずることを得るなり。此の地の中に於ては、能く無功用にして欲するに隨つて卽ち成ずるが故に、自在と名く。此の義を了知すれば第八地に入る。「第九地の中には智の自在依止の義に由る」とは、謂はく此の地の中にては無礙辯の所依止を得るが故なり。智波羅蜜多を分に證得し、一切の法に於て其の言に隨はずして善く能く諸の意趣の義を了知し、如實に一切の有情を成熟して勝れたる法樂を受く。此の義を了知すれば九地に入ることを得。「第十地の中には業の自在等の依止の義に由る」とは、謂はく欲する所に隨つて身語意の業用の自在を得るなり。五神通に依り自の作業に隨つて皆能く成辦し、文義を持する諸の陀羅尼の自在力を得るが故に、能く一切の佛の宣說する所の文義を持して忘るること無し。三摩地の自在力を得るが故に、諸の等至に於て能く持し能く斷ず。其の欲する所に隨つて虛空藏等の諸の三摩地、三摩鉢底は而も能く現前す。第十地の中に證する所の法界は、是れ此の如き等の自在の所依なり。此の義を了知すれば十地に入ることを得。「是の如き無明は聲聞等に於ては染汚に非ず」とは、斷ずる所に非ざるが故なり。斷ずる所に非ずとは彼の能治の地に入ることを爲さざるが故に。其の涅槃に於て障と爲らざるが故なり。「諸の菩薩に於ては是れ染汚なり」とは、是れ斷ずる所なるが故に、是れ斷ずる所なりとは、正に彼の能治の地に入るが爲の故に。菩薩の求むる所の一切種智は、是の如き無明も能く障と爲すが故なり。初地に入る時、已に一切の法界に通達することを得。何が故に復後々の差別を立つるや。諸住の現行を顯示せんと欲するが爲の故に、後々の諸地の差別を立つ。謂はく其の所得の法界の如き勝れたる住に安住する品別を現行せんが爲なり、性證得するのみにて、便ち喜足を生じ坦然にして住するに非ず。

の別有り。「十相を以て」とは、謂はく遍行等なり。「所知の法界」とは、謂はく十相に由りて顯はさるゝ法界なり。「十の無明の所治の障の住する有り」とは、謂はく十相に於て十の無明、十の所治の障有りて、障と爲つて住するなり。此の障を斷ぜんが爲に、十相の智を修す。十相の智に由りて十地の法無我の智に入ることを得。分位を「地」と名く。「謂はく初地の中には遍行の義に由る」とは、即ち初地の中には一切の法は空にして少法として有ること無く、而も是れ空に非ざるが故に「遍行」と名く。此の義を了知して初地に入ることを得。「第二地の中には最勝の義に由る」とは、謂はく此の空理は一切法の中にて最も殊勝と爲す。離欲を最も殊勝と爲すと說くが如し。此の義を了知すれば二地に入ることを得。「第三地の中には勝流の義に由る」とは、謂はく此の所流の教法は最勝なるが故に、身命を捨てゝ此の善說を求むるも以て難しと爲さず。此の義を了知すれば三地に入ることを得。「第四地の中には無攝受の義に由る」とは、謂はく契經等の法愛を斷ずるが故に、我所を計せず、此れ自に非ず他に非ざる所攝なりと觀ず。此の義を了知すれば四地に入ることを得。「第五地の中には相續無差別の義に由る」とは、謂はく此れ色等の如く相續して差別するに非ざることを了知す。此の義を了知すれば五地に入ることを得。「第六地の中には雜染と淸淨と無き義に由る」とは、謂はく自性本より雜染無く、亦淸淨も無しと知る。雜染を先と爲し後に淨むべきが故に、此の義を了知すれば六地に入ることを得。「第七地の中には種々の法の無差別の義に由る」とは、契經等の種々の法は別なるが如きも、此れ是の如くならず。此の義を了知すれば七地に入ることを得。「第八地の中には不增不減の義に由る」とは、謂はく法の外に用無きは增さざる所以なり、諸法の壞せざるは減ぜざる所以なり。或は染法滅ずる時此れ減有ること無く、淨法增す時此れ增有ること無し。「相自在依止の義、土自在依止の義」とは、謂はく即ち此の第八地の中に於て證する所の法界は是れ二の自在の所依止の處なればなり。求むる所

きの諸地を安立して十と爲すことは云何が見るべきや。十種の無明の所治の障を對治せんと欲するが爲の故なり。所以は何ん。十相の所知の法界に於て、十の無明の所治の障の住する有るを以てなり。云何が十相の所知の法界なりや。謂はく初地の中には遍行の義に由る。第二地の中には最勝の義に由る、第三地の中には勝流の義に由る、第四地の中には無攝受の義に由る。第五地の中には相續無差別の義に由る、第六地の中には雜染と清淨と無き義に由る、第七地の中には種々の法の無差別の義に由る、第八地の中には不增不減の義と、相自在依止の義と、土自在依止の義とに由る。第九地の中には智の自在依止の義に由る、第十地の中には業の自在依止の義と陀羅尼門、三摩地門の自在依止の義とに由る。此の中に三頌有り、

遍行と最勝との義と　及び勝流の義と
是の如き無攝の義と　相續無別の義と、
雜染と淨と無き義と　種々無別の義と
不增不減の義と　四の自在依の義と、
法界の中に十の　不染汚の無明有り
此の所治の障を治す　故に十地を安立す。

復次に、應に知るべし、是の如き無明は聲聞等に於ては染汚に非ず。諸の菩薩に於て是れ染汚なり。

釋曰　所知の相に入る因果に攝する所の波羅蜜多は、其の應に善く修習すべき所に隨ひて已に能く[一]見修の應に斷ずべき所を除くことを顯示せんと欲するが爲の故に、因果の修位の差別を辨ず。「菩薩は十地に由る」とは、謂はく諸の菩薩は此の地の中に於て現觀を修習して過を離れ、貪を離れ、菩提分を修し、諸の諦を觀察し、緣起を觀察し、無相の中に於て若くは有功用、若くは無功用にして、勝れたる辯才を得、眞の灌頂を逮、所知と惱惱との障等を除滅す。故に此の修位に十地

【一】見修とは見道及び修道に於てとの意なり。

す。是の如きの意趣なり」とは、謂はく一一に於て加行を修する中に、即ち一切有り。更互に相ひ助くるなり。謂はく施を修する時、禁防し、忍受し、策勵し、專心して、能く善く業の果を了知して相屬す。是の如く施の中に卽ち餘の轉ずる有り。若し戒を修する時は、慳悋、忿恚、懈怠、散動、邪見を遠離す。是の如く戒の中に卽ち餘の轉ずる有り。所餘の波羅蜜多を修習することも亦是の如く說く。頌に言へる有るが如し、

施の時に貪無く、犯戒無く、　嫉無く、恚無く、慈心を起す
諸の來り求むる者に便ち施與して　惓むること無く亂るる無く、異見無し。

復有る頌に言はく、

施性の中に　現に六波羅蜜多有り
財施、無畏施、　法施の所攝なるが故に。と

論曰　此の中一嗢拕南頌有り、

數と相と及び次第と　訓辭と修と差別と
攝と所治と功德と　互に決擇するとを應に知るべし。

釋曰　總じて前文を攝す。義は上に釋するが如し。

彼修差別分第六

〔對治章第一〕

論曰　是の如く已に彼に入る因果を說けり。彼を修する差別は云何が見るべきや。菩提の十地に由る。何等をか十と爲すや。一には極喜地。二には離垢地。三には發光地。四には焰慧地。五には極難勝地。六には現前地。七には遠行地。八には不動地。九には善慧地。十には法雲地なり。是の如

得る所の勝利なり。「勝れたる生にして罪無く、乃至是れを勝利と名く」（といふまでを）[一五]一切の處に於て應に遍く配屬すべし。「大生の攝なるが故に」とは、是れ戒波羅蜜多の得る所の勝利なり。勝れたる善趣の攝なるが故に「大生」と名く。「大朋大屬の所攝なるが故に」とは、是れ忍波羅蜜多の得る所の勝利なり。「朋」とは親族を謂ひ、屬とは奴婢を謂ふ。「廣大なる事業の加行成就の所攝なるが故に」とは、是れ精進波羅蜜多の得る所の勝利なり。「廣大なる事業」とは、輪王等を謂ふ。中に於て策勵するを名けて「加行」と爲す。所作皆辨ずるが故に「成就」と名く。此の所攝に由りて罣礙する所無し。「諸の惱害無く性塵垢薄き所攝なるが故に」とは、是れ靜慮波羅蜜多の得る所の勝利なり。靜慮に由るが故に此の威力を感ず。「善く一切の工論明處を知る所攝なるが故に」とは、是れ慧波羅蜜多の得る所の勝利なり。「勝れたる生にして罪無し」とは、世間を同じくすと雖も最勝の生を得となり。世間の勝れたる生の如く罪有るにあらず。既に罪有ること無き時、又無邊に無間に相續して、乃し菩提に至るまで、世間の如く唯自ら利益するのみに非ず、常に能く現じて一切有情の一切の義利を作す。

〔互影章　第十一〕

論曰　是の如き六種の波羅蜜多の互に相ひ決擇することを云何が見るべきや。世尊は、此の一切の六種の波羅蜜多に於て、或は有る處所には施の聲を以て說き、或は有る處所には戒の聲を以て說き、或は有る處所には忍の聲を以て說き、或は有る處所には勤の聲を以て說き、或は有る處所には定の聲を以て說き、或は有る處所には慧の聲を以て說く。是の如き所說に何の意趣有りや。謂はく一切の波羅蜜多の加行を修する中に於て、皆一切の波羅蜜多有りて、互に相ひ助成す。是の如きの意趣なり。

釋曰　「謂はく一切の波羅蜜多の加行を修する中に於て、皆一切の波羅蜜多有りて互に相ひ助成

【一五】一切の處に於てとは此に說く六句に遍く此の末後の句を配屬して見るべしとの意なり。

施等と彼の施等とは更互に相ひ攝するなり。「是れ隨順なるが故に」とは、是れ信等に隨順する善法施等の善心を攝す。彼の修する所なるが故に、施等の中に於て彼れ隨つて轉ずるが故に。信等とは卽ち是れ[一三]諸の善大地及び念住等は菩提分法なり。「是れ等流なるが故に」とは、是れ等流を攝す。謂はく無諍等及び十力等なり。是れ到彼岸の等流の果なるが故なり。頌に言へる有るが如し、

[一四]地及び到彼岸は　　諸の佛法の所依なり
轉依、法身等の　　諸の功德を果と爲す。と

〔對治章　第九〕

論曰　是の如き所治に諸の雜染を攝することを云何が見るべきや。是れ此の相なるが故に、是れ此の因なるが故に、是れ此の果なるか故なり。

釋曰　是の如き所治の慳悋、犯戒、忿恚、懈怠、散動、惡慧は、云何が能く一切の雜染を攝するや。「是れ此の相なるが故に」とは、謂はく慳等の差別を攝す。自性は他性を離るるが故なり。「是れ此の因なるが故に」とは、謂はく不信等、邪見を後と爲す。慳等の因なるが故なり。

〔功德章　第十〕

論曰　是の如き六種の波羅蜜多の得る所の勝利は云何が見るべきや。謂はく諸の菩薩は生死に流轉するも、富貴の攝なるが故に、大生の攝なるが故に、大朋大屬の所攝なるが故に、廣大なる事業の加行、成就の所攝なるが故に、諸の惱害無く、性塵垢薄き所攝なるが故に、善く一切の工論明處を知る所攝なるが故に、勝れたる生にして罪無く、乃至妙菩提の座に安坐して常に能く現じて一切の有情の一切の義利を作す。是を勝利と名く。

釋曰　今當に波羅蜜多の勝利功德を顯說すべし。「富貴の攝なるが故に」とは、是れ施波羅蜜多の

【一三】此の句は藏經本には「是諸善、大施、及念住云云」とあるも、演祕の引用に依れば「是諸善大地、及念住云云」とあり、本文の施は恐くは地の誤字なるべし、善大地とは大地法善の心所をいふ。
【一四】地は菩薩の十地、到彼岸は六度の行。

謂はく最初の時に自ら「我當に是の如き事を作すべし」と勵む、卽ち是れ契經に[三]說く所の初の「勢有り」の句を解釋す。「加行精進」とは、謂はく加行する時、意樂する所の如く勤めて加行を修す。卽ち是れ契經(かいきやう)に說く所の次の「勤有り」の句を解釋す。「怯弱(こにやく)無く、退轉無く喜足無き精進」とは、謂はく意樂に隨つて作す所の善事は、乃至、妙菩提座に安坐するまで終いに放捨せず、自ら疲れたる苦に於て心に退屈せざるを「怯弱無し」と名け、他の逼惱に於て心移動せざるを「退轉無し」と名け、乃至菩提にいたるまで、其の中間に於て進んで善品を修し、嘗て懈廢無きを「喜足無し」と名く。是の如き三句は數の如く契經に說く所の「勇有り、堅、猛にして諸の善法に於て軛を捨てず」との句を解釋す。「安住靜慮」とは現に法樂に住することを得んが爲に、慢と見と愛とを離れて淸淨なることを得るが故なり。「引發靜慮」とは能く六神通等の殊勝なる功德を引發せんが爲なり。「所作の事を成する靜慮」とは諸の有情の類を饒益(ねうやく)せんと欲するが爲に、能く飢儉疲疫の諸の怖畏等の苦惱の事を止息するを以ての故なり。「無分別加行の慧」とは謂はく眞觀の前の勝方便の智なり。「無分別の慧」とは謂はく眞觀の智なり。「無分別後得の慧」とは謂はく現觀の邊の諸の世俗の智にして、能く種々の說法等の事を起すなり。

〔攝章　第八〕

論曰　是の如き相攝を云何が見るべきや。此れ能く一切の善法を攝するに由る。是れ其の相なるが故に、是れ隨順なるが故に、是れ等流なるが故なり。

釋曰　「此れ能く一切の善法を攝するに由る」とは、此の答は理に非ず、問の如くならざるが故に。前に總じて問ふて「是の如き相攝を云何が見るべきや」と言へば、此の過失無し。此れ能く一切の善法を攝すと說くは其の義は已に說けり、彼も亦此の一切の善法を攝すとは、謂はく施等、信等の諸の念住等、力等を後と爲す。「是れ其の相なるが故に」とは、是れ體相を攝す。謂はく此の

【三】本釋には契經の句を後に出し此の處には之を擧げずして配釋せるも、世親釋には經說を擧げて「勢有り、勤有り、勇有り、堅猛にして、善軛を捨てず」といふ。

〔差別章第七〕

論曰　此の諸の波羅蜜多の差別は云何が見るべきや。應に知るべし、一一に各三品有り。施の三品とは、一には法施、二には財施、三には無畏施なり。戒の三品とは、一には律儀戒、二には攝善法戒、三には饒益有情戒なり。忍の三品とは、一には怨害に耐ふる忍、二には苦を安受する忍、三には法を諦察する忍なり。精進の三品とは、一には被甲精進、二には加行精進、三には怯弱(こにやく)無く退轉無く喜足無き精進なり。靜慮の三品とは、一には安住靜慮、二には引發靜慮、三には所作の事を成ずる靜慮なり。慧の三品とは、一には無分別加行の慧、二には無分別の慧、三には無分別後得の慧なり。

釋曰　此の一一の波羅蜜多に各三品有るに由りて、差別を顯示す。「法施」と言ふは、謂はく「染心無く如實に契經(かいきやう)等の法を宣說するなり。「財施」と言ふは、謂はく染心無く、資生の具を捨つるなり。「無畏施」とは、謂はく損害を止め驚怖を濟拔するなり。又法施とは他の諸の善根を資益せんと欲するが爲なり。財施とは他身を資益せんと欲するが爲なり。無畏施とは、他心を資益せんと欲するが爲なり。「律儀戒」とは、謂はく不善を能く遠離する法に於て防護し受持するなり。能く諸の惡不善の身語等の業を防護するに由るが故に律儀と名く。此れは卽ち是れ戒にして、此れ能く後の二尸羅を建立す。自ら防護するに由りて能く佛を供養する等の善根を修し、及び能く諸の有情を饒益するが故なり。「攝善法戒」は能く力無畏等の一切の佛法を證得せしむ。「饒益有情戒」は能く有情を助けて如法に所作し、平等に無罪の作業を分布し、有情を成熟す。「怨害に耐ふる忍」とは、是れ諸の有情を成熟し轉ずる因なり。「苦を安受する忍」とは、是れ成佛の因なる、寒熱飢渴の種々の苦事を皆能く忍受して退轉すること無きが故に。「法を諦察する忍」とは、是れ前の二忍の所依止の處なり。甚深にして廣大なる法を堪忍するが故に。「被甲精進」とは、

行す。此れ即ち是の修を彼が爲に修するが故に、亦名けて修と爲す。「又」[八]の聲は前の作意の修に差別の義有ることを說かんと欲するなり。謂ゆる「六種の意樂に攝する所を修し、乃至、意樂は猶厭くこと無し等」とは、其の言了じ易し。少處を少しく說かん。「厭足無し」とは、疲倦無きを謂ふ。「爾所の時を經る一一の刹那」とは、或は有るが說いて曰く、爾所の時を經るを一刹那と爲すと。謂はく三無數劫の量を經るを一刹那と爲す。是の如き刹那を積集して、乃至大菩提を得るなり。「爾所の時を經る一一の刹那」とは、其の義了じ易し。「中に熾火を滿たす」とは、勝處の乏少なるを顯はす。「常に一切の資生の衆具に乏し」とは、苦を對治する資生の衆具無きことを顯はす。諸苦を治して攝受せんが爲の故なり。「四威儀に於て」とは、志の廣大なるを顯はす。勝處及び資生の具に乏しと雖も、而も一切の四威儀の中に於て、戒等の到彼岸を修行する心は常に現前するが故なり。「長時の意樂」とは、謂はく久時に於て間息無きが故なり。「荷恩の意樂」とは、謂はく深く諸の來り求むる者は是れ善友なりと信解するが故なり。此れ即ち彼の諸の來り求むる者を信じて、己の愛すべき妙果なる異熟[九]を施す。是の故に荷恩なり。「大志の意樂」とは、謂はく此の意樂は大志と相應し、諸の有情を利益せんと欲するが爲の故に、己の善根を廻して、一切に施與す。是の如き意樂を最も殊勝と爲す。是の故に說いて大志の意樂と名く。「純善の意樂」は、其の義是れ一なるに、別名を立つるは、若し施等を以て廻して三有の財位の圓滿せんことを求むれば、是の如きの意樂は[一〇]苦具を悕求して、罪有るに似たるが故に純善と名けず。若し施等を以て諸の有情と共に廻して佛果を求むれば、是の如きの意樂は苦具を求めず。都て罪無きが故に說いて純善と名く。此の六種の意樂に攝する所の三種の作意を修することは、其の言了じ易ければ煩しく重ねて釋することも無し。「諸の惡業障も亦當に消滅すべし」とは、謂はく[一一]果無からしむるが故に、或は惡趣を治するが故なり。

【八】又の聲とは論本に又作意の修とは云云といふ、又の字を標す。

【九】異熟とは肉身をいふ、即ち菩薩は己が眼耳手足、一切の身分をも施與することを顯はす。

【一〇】苦具とは三有に生を受けて財位の資具に苦惱を增すが故なり。

【一一】果無かなしむとは善業にも其の果報無からしむとなり。

る所の隨喜の意樂を修す。又諸の菩薩は、深心に欣樂して一切有情の六種の意樂に攝する所の六種の到彼岸を修し、亦自身も此の六種の到彼岸の修と恒に相ひ離れず。乃至、妙菩提の座に安坐せんことを願ふ。是の如くして菩薩は此の六種の意樂に攝する所の欣樂の作意を修す。若し此の菩薩の六種の意樂に攝する所の作意の修を聞き已つて、但當に能く一念の信心を起すもの有るも尚當に無量の福聚を發生し、諸の惡業障も亦當に消滅すべし。何に況んや菩薩をや。

釋曰　「修」とは、數〻習するを謂ふ。現起の修等の差別に五有り。「現起加行の修」とは、謂はく施等に於て顚倒無く轉ずるなり。頌に言へる有るが如し、

施者は殊勝にして　信等[七]を具足し
恭敬して時に應じ　自ら手(を下)して施等(をな)す。

又頌に言へるが如し、

利他の加行は有情に於て　有力と若くは無力とを簡ばず
一切時に於て一切に施し　力の能ふ所に隨つて廣く饒益す。

「勝解の修」とは、謂はく信と欲とに由りて勝解を生ず。佛の聖教に於て深く印順するが故に、樂欲を生ずるが故なり。頌に言へる有るが如し、

利業に於て無功用なりと雖も　而も佛の教に於て勝解を生じ
信と及び欲と共に相應する　意樂に由りて常に修して懈廢無し。

「作意の修」とは、謂はく愛重と隨喜と欣樂との作意に攝する所の修習なり。前に已に說けるが如し。「方便善巧の修」とは、謂はく無分別智に攝受する修習なり。亦前に說けるが如し。「所作の事を成ずる修」とは、謂はく諸の如來の彼岸に到る法は極めて圓滿なりと雖も、他を饒益せんとの本願力の爲の故に、功用を作さざるも、彼の所に隨ひて能く施等の應に作すべき所の事を現

【七】信等とは善の心所をいふ。

所作の事を成ずる修なり。此の中、四修は前に已に說けるが如し。「所作の事を成ずる修」とは、謂はく諸の如來は任運に佛事して休息有ること無く、其の圓滿なる波羅蜜多に於て復更に六到彼岸を修習するなり。又「作意の修」とは、謂はく六種の意樂に攝する所の愛重、隨喜、欣樂の作意を修するなり。（六種の意樂とは）一には廣大の意樂、二には長時の意樂、三には歡喜の意樂、四には荷恩の意樂、五には大志の意樂、六には純善の意樂なり。若し諸の菩薩は、乃至若干の無數大劫に、無上正等菩提を現證し、爾所の時を經る一一の刹那に假使頓に一切の身命を捨て、及び殑伽河沙に等しき世界を以て七寶を盛滿して如來に奉施し、乃至妙菩提の座に安坐するも、是の如き菩薩の布施の意樂は猶厭足無し。爾所の時を經る一一の刹那に、假使三千大千世界に中に熾火を滿じ、四威儀に於て常に一切の資生の衆具に乏しきも、戒、忍、精進、靜慮、般若の心は恒に現行し、乃至妙菩提の座に安坐す。是の如く菩薩の有する所の戒、忍、精進、靜慮、般若の意樂は猶厭足すること無し。是れを菩薩の廣大の意樂と名く。又諸の菩薩は卽ち此の中に於て厭くこと無き意樂にして、乃至妙菩提座に安坐して常に間息無し。是を菩薩の長時の意樂と名く。又諸の菩薩は其の六種の波羅蜜多を以て有情を饒益し、此の所作に由りて深く歡喜を生じ、益を蒙る有情の及ぶこと能はざる所なり。是れを菩薩の歡喜の意樂と名く。又諸の菩薩は其の六種の波羅蜜多を以て有情を饒益し、彼れは己に於て大恩德有りと見るも、自身は彼れに於て恩有りと見ず。是れ菩薩の荷恩の意樂と名く。又諸の菩薩は卽ち是の如き六の到彼岸の集むる所の善根を以て、深心に一切の有情に迴施し、可愛の勝果たる異熟を得しむ。是れを菩薩の大志の意樂と名く。又諸の菩薩は復是の如き六の到彼岸の集むる所の善根を以て、諸の有情と共に迴して無上正等菩提を求む。是れを菩薩の純善の意樂と名く。是の如く菩薩は此の六種の意樂に攝する所の愛重の作意を修す。又諸の菩薩は、餘の菩薩の六種の意樂の修習し相應する無量の善根に於て深心に隨喜す。是の如くして菩薩は、此の六種の意樂に攝す

釋曰　「隨順して後の波羅蜜多を生ずるが故に」とは、謂はく財位に於て貪著せざれば已に能く尸羅を守る。尸羅を具へ已れば便ち能く忍受す。能く忍受し已れば、乖違に堪耐するが故に精進を發す。精進を發し已れば心に便ち定を得。心に定を得已れば能く如實に知る。故に此の六種は是くの如く次第す。

〔**立名章　第五**〕

論曰　復次に此の諸の波羅蜜多は名言を訓釋するに云何が見るべきや。諸の世間と聲聞と獨覺との施等の善根に於て、最も殊勝と爲し能く彼岸に到る。是の故に通じて波羅蜜多と稱す。又能く慳悋と貧窮とを破裂し、及び能く廣大の財位と、福德の資糧とを引得するが故に名けて施と爲す。又能く惡戒と惡趣とを息滅し、及び能く善趣と等持とを取得するが故に名けて戒と爲す。又能く忿怒と怨讎とを滅盡し、及び能く善く自他の安隱に住するが故に名けて忍と爲す。又能く有らゆる懈怠と惡と不善との法を遠離し、及び能く無量の善法を出生し其をして增長せしむるが故に精進と名く。又能く有らゆる散動を消除し、及び能く內心の安住を引得するが故に靜慮と名く。又能く一切の見趣と諸の邪惡の慧とを除遣し、及び能く眞實に品別に法を知るが故名けて慧と爲す。

釋曰　總名を釋すれば、諸の世間と聲聞と獨覺との施等の善根に於て最も爲殊勝にして能く彼岸に到る、是の故に通じて波羅蜜多と名く。彼岸に到る、是れを最勝の義と名く。別名を釋すれば、謂はく因時に於ては、能く慳悋を破し、亦能く廣(大)の福德の資糧を引き、及び果時に於ては、能く貧窮を裂りて大財位を得るが故に、名けて施と爲す。餘の別名を釋すること其の文了じ易し。

〔**修習章　第六**〕

論曰　云何が應に是の如き波羅蜜多を修習することを知るべきや。應に知るべし、此の修に略して五種有り。一には現起加行の修、二には勝解の修、三には作意の修、四には方便善巧の修、五には

は處の最勝に由る。謂はく一切の有情を利益し安樂にする事を依處と爲すが故に。四には方便善巧の最勝に由る。謂はく無分別智に攝受せらるゝが故に。五には迴向の最勝に由る、謂はく無上正等菩提に迴向するが故に、六には清淨の最勝に由る、謂はく煩惱と所知との二障は無障にして集起する所なるが故に、若し施は是れ波羅蜜多なりや。設くは波羅蜜多は是れ施なりや。施にして波羅蜜多に非ざる有り。應に四句を作るべし。其の施に於けるが如く、是の如く餘の波羅蜜多に於ても亦四句を作ること應の如く當に知るべし。

釋曰　所立の相に依りて是くの如きの言を說く、「謂はく六種の最勝に由るが故に等」と。六種の最勝は其の言了じ易し。別に釋することを須ひず。「具足して現行するが故に」とは、內外の事に於て一切の種類を皆能く捨つるが故なり。「無分別智の攝受する所なるが故に」とは、謂はく三輪清淨にして、施者と受者と施物との分別を皆遠離するが故なり。餘の文は了じ易し。「是れ施にして波羅蜜多に非ざる有り」とは、謂はく六種の最勝を離れて而も布施を修するなり。「是れ波羅蜜多にして施に非ざる有り」とは、謂はく六種の最勝の集むる所の戒等なり。「亦は施亦は波羅蜜多なる有り」とは、謂はく六種の最勝の集むる所の布施なり。「施にも非ず波羅蜜多に非ざる有り」とは、謂はく六種の最勝を離れて而も戒等を修するなり。施の中に於て是の四句を作るが如く。是の如く餘の戒等の五の中に於ても、其の所應の如く皆善く安立す。故に頌に言へる有り。

麟角は　　　六波羅蜜多有ること無きに喩ふ
唯我が最勝の尊のみ　　　上品にして彼岸に到る。

〔次第章　第四〕

論曰　何の因緣の故に、是くの如く六種の波羅蜜多を此の次第に說くや。謂はく前の波羅蜜多は隨順して後の波羅蜜多を生ずるが故なり。

を立つ、乃至失壞の因を對治せんと欲するが爲の故に定を慧との波羅蜜多を立つ」と。「失壞の因とは、謂はく諸の散動及び邪惡の慧なり」、とは顚倒して執取する諸の鄙惡の智を邪惡の慧と名く。諸の外道の如きは是れ失壞の因なり。餘句は文の如く分明にして了じ易し。「諸佛の法の所依處を證す」とは、第二の六數を建立する因緣なり。是れ一切の佛法の因なるを以ての故に、波羅蜜多は唯六數のみ有りて增さず減ぜず。其の義云何。謂はく前の四波羅蜜多は是れ不散動の因なり、能く所治をして散動無からしむるが故に。靜慮波羅蜜は不散動を成就す。不散動をして圓滿なることを得しむるが故に。此の靜慮波羅蜜多に依りて如實に等しく諸法の眞義を覺る。能く所緣に於て正しく遍知するが故なり。「諸佛の法」とは、謂はく十力等なり。「證す」とは、謂はく成辨するなり。
「隨順して諸の有情を成熟す」とは、第三の六數を成立する因緣なり。施波羅蜜多に由りて諸の有情に於て能く正しく攝受す。戒波羅蜜多に由りて諸の有情に於て能く毀害せず。惱みを生ぜざるが故なり。忍波羅蜜多に由りて毀害に遭ふと雖も而も能く忍受す。能く忍受するが故に能く他を饒益す。反報せざるが故なり。精進波羅蜜多に由りて彼の所作を助け、靜慮波羅蜜多に由りて心未だ定まらざる者には其れをして定を得せしめ、慧波羅蜜多に由りて心已に定まる者には解脫を得しむ。「開悟する時」とは、謂はく彼を敎授して境界に於て悟入することを得しむる時なり。「彼れ成熟することを得」とは、彼れ境界に於て已に成熟することを得るなり。「成熟」と言ふは、謂はく所治の障の消融し潰散して癰の已に熟するが如し。或は能對治成滿して用ゆべきこと、食の已に熟せるが如し。

〔相章第三〕

論曰 此の六種の相は云何が見るべきや。六種の最勝なるに由るが故に、一には所依の最勝に由る。謂はく菩提心を所依と爲すが故に。二には事の最勝に由る、謂はく具足して現行するが故に。三に

諸の佛法の所依處を證するが故に。隨順して諸の有情を成熟するが故なり。發趣せざる因を對治せんと欲するが爲の故に、施と戒との波羅蜜多を立つ。發趣せざる因とは、謂はく財位に著すると及び室家に著するとなり。對治せんと欲するが爲に已に發趣すと雖も、復退還する因の故に、忍と進との波羅蜜多を立つ。退還する因とは、謂はく生死に處して有情の違犯より生ずる所の衆苦と、及び長時に於ける善品の加行より生ずる所の疲怠となり。對治せんと欲するが爲に、已に發趣し復退還せずと雖も、而も失壞の因の故に定と慧との波羅蜜多を立つ。失壞の因とは、謂はく諸の散動と及び邪惡の慧となり。是の如く所治の障を對治することを成立するが故に、唯六の數を立つ。又前の四波羅蜜多は是れ不散動の因なり。次の一波羅蜜多は不散動を成就す。此の不散動を依止と爲すが故に、如實に等しく諸法の眞義を覺りて、便ち能く一切の佛法を證得するなり。是の如く諸佛の法の所依處を證するが故に、唯六の數を立つ。施波羅蜜多に由るが故に、諸の有情に於て能く正に攝受す。戒波羅蜜多に由るが故に、諸の有情に於て能く毀害せず。忍波羅蜜多に由るが故に、毀害に遭ふと雖も而も能く忍受す。精進波羅蜜多に由るが故に、能く助けて彼の應に作すべき所を經營し、即ち是くの如き攝利の因緣に由りて、諸の有情をして成熟する事に於て堪任する所有らしむ。此れより已後、心未だ定まらざる者には、其をして定を得しめ、心已に定まる者には、解脱を得しめ、開悟する時に於て、彼れ成熟することを得。是くの如く隨順して一切の有情を成熟す。唯六數を立つることは應に是の如く知るべし。

釋曰　次に當に最後の頌*の中の數相等の義を開示すべし。先づ數を立つるに依りて、是の如きの言を説く、「所知の障を對治することを成立する等」と。謂はく三因緣にて、波羅蜜多の數は唯六有りて多からず、少からざるなり。先づ當に「所治の障を對治することを成立するが故に」（と云ふを）開示すべし。（即ち）「發趣せざる因を對治せんと欲するが爲の故に、施と戒との波羅蜜多

【※】最後の頌とは本章の終に在る偈を指す、三六七頁參照。

に、所緣の故に。作意の故に。對治の故に。自體の故に。瑞相の故に。勝利の故に、其の次第の如く諸句の伽他は應に顯示せることを知るべし。

釋曰　此の中には淸淨なる增上の意樂の有する所の資糧、堪忍、所緣、作意、對治、自體、瑞相、勝利を顯說す。「已に白法を圓滿す」とは、謂はく先に勝解行地に於て善く資糧を備へて白法圓滿す。是れ資糧を謂ふ。「及び利疾の忍を得」とは、謂はく[六]軟と中とを簡びて唯上品を取り、法忍を諦察す。此の忍の轉ずる時卽ち是れ堪忍なり。「菩薩は自乘の甚深廣大の敎に於て」とは、謂はく大乘の深廣なる聖教を緣ず。其の義微細なるを名けて「甚深」と爲す。卽ち法無我の殊勝なり。威德と相應するを名けて「廣大」と爲す。卽ち是れ虛空藏等の諸の三摩地なり。是れ所緣を謂ふ。「等しく唯分別のみなりと覺りて」とは、一切の法は唯分別のみ有りと覺る。是れ作意を謂ふ。「無分別智を得」とは、卽ち是れ對治なり。「悕求と勝解と淨なり、故に、意樂淸淨なり」とは、卽ち是れ自體なり。此の意樂は信及び欲を以て自體と爲すに由るが故に。「前及び此の法流は皆諸佛を見ることを得」とは、卽ち是れ瑞相なり。「前」とは、謂はく意樂淸淨位の前なり。「此」とは、謂はく此の三摩地の中に於てなり。「法流」とは、卽ち三摩地に在ることを說く。定中に處して諸佛を見るが故なり。「菩提の近きを了知す。得難きこと無きを以ての故に」とは、謂はく佛を見るに因りて菩提の近づけるを知る。此の義を釋して「得難きこと無き(を以ての)故に」と言ふ。卽ち是れ勝利なり。此の位の中に於て、菩提の近を見るは、此の能得の勝れたる方便を得るが故なり。得ること難しと爲さゞるは、修集の資糧の勢力成熟して堪能有るが故なり。是の如く三頌は總じて淸淨なる增上の意樂の八相の差別を釋す。

〔成立六數章　第二〕

論曰　何の因緣の故に波羅蜜多は唯六數のみ有りや。所知の障を對治することを成立するが故に。

【六】忍に三位ある中、前二を簡び去つて唯上品の忍のみを取るの意。

す」とは、即ち是れ般若波羅蜜多なり。此の六種の波羅蜜多に由りて唯識に入ることを得。既に入ることを得已つて、淸淨なる增上の意樂の攝する所の殊勝なる果分の六種の波羅蜜多を證得す。是の故に設ひ波羅蜜多を現起する加行を離るゝも、恒常に無間に六種の波羅蜜多を修習して速かに圓滿することを得。爾らずと爲すや。若し尸羅波羅蜜多に於て加行を起さゞれば應に是れ犯戒なるべし。此の義然らず。勉勵加行を起さゞるが故に、若し尸羅に於て加行を起さずとせば應に此の失有るべし。[二]勉勵加行を發起せずして而も此の失有るには非らず。聖教に於て勝解を得る等に由りて任運に加行すればなり。是の故に失無し。此の中「聖教に於て勝解を得」とは、謂はく波羅蜜多と相應する聖教に於て、極めて甚深なりと雖も而も能く信解するなり。「愛重の作意」とは、已に得たる波羅蜜多に於て受くる功德味なり。「隨喜の作意」とは、謂はく十方一切の世界の[三]他の相續の中の波羅蜜多に於て、或は各別の自の相續の中の波羅蜜多に於て、深心に慶喜するなり。「欣樂の作意」とは、[四]謂はく未來に於て我れ此れと與に恒に相離れず、及び轉ずること殊勝ならんと願ふなり。

論曰　此の中に三頌有り、

已に白法を圓滿し　及び利疾の忍を得て
菩薩は自乘の　甚深廣大の教に於て、
等しく唯分別のみなりと覺りて　無分別智を得
希求と勝解と淨なり　故に意樂淸淨なり。
前及び此の法流に　皆諸佛を見ることを得
菩提の近きを了知す　得難きこと無きを以ての故に。

此の三頌に由りて總じて淸淨なる增上意樂を顯はす。[五]八種の相有り。謂はく資糧の故に。堪忍の故

【二】勉勵加行とは意志の努力を用ひて加行すること、即ち次の任運の加行に對す。
【三】他の相續とは他の有情のこと。
【四】此の釋は世親釋參照。
【五】八種は世親釋には對治の故にを除いて七種と爲せり、參照。

巻の第七

彼入因果分第五

〔因果位章　第一〕

論曰　是くの如く已に入所知の相を説けり。彼に入る因果を云何が見るべきや。謂はく施と戒と忍と精進と靜慮と般若との六種の波羅蜜多に由る。云何が六波羅蜜多に由りて唯識に入ることを得るや。復云何が六波羅蜜多は彼に入る果を成ずるや。謂はく此の菩薩は財位に著せず、尸羅を犯かさず、苦に於て動ずること無く。修に於て懈ること無く、是の如き等の散動の因の中に於て、現行せざる時は、心一境を專にし、便ち能く理の如く諸法を簡擇して唯識に入ることを得。菩薩は六波羅蜜多に依りて唯識に入り已つて、六種の清淨なる増上意樂に攝する所の波羅蜜多を證得す。是の故に此に於て設ひ六種の波羅蜜多を現起する加行を離るるも、聖教に於て勝解を得るに由るが故に、及び[一]愛重と隨喜と欣樂との諸の作意に由るが故に、恒常に無間に相應し方便して、六種の波羅蜜多を修習して速かに圓滿することを得るなり。

釋曰　「唯識に入る因」とは、謂ゆる加行時の世間の六種の波羅蜜多なり。今當に顯示すべし。「謂はく此の菩薩は財位に著せず」とは、貪求する所無きが故に著せずと名く。貪著は即ち是れ捨の對治する所にして、此れ即ち是れ施波羅蜜多に對治せらるゝ障なり。後の五も亦爾り。「尸羅を犯さず」とは、毀犯は是れ戒波羅蜜多に對治せらるゝ障なり。「苦に於て動ずること無し」とは、忿動は是れ忍波羅蜜多の對治する所の障なり。「修に於て懈ること無し」とは、懈は是れ精進波羅蜜多に對治せらるゝ障なり。「心一境を專にす」とは、謂はく靜慮波羅蜜に對治せらるゝ障なり。散動の因の中に於て遠離して轉ぜず、心を持して定らしむ。「便ち能く理の如く諸法を簡擇

【一】愛重とは敬愛尊重の義。

或は總じて法を緣ずるを名けて根本と爲す、謂ゆる一切の經は皆十地を以つて根本と爲すが故なり。法は彼れに依りて轉ずるが故に「法界」と名づく。卽ち諸法空なり。「念趣は唯分別のみなることを了知す」とは、謂はく後得智は法界に依りて轉じ、念趣は唯是れ分別のみなりと了知するなり。分別を離れて外に所念の法無し。謂ゆる彼の所念の契經等の法と、及び應に念ずべき所の波羅蜜多並に彼の果等(は無し)。遍計所執性は皆無なるが故なり。「勇猛にして疾く德海の岸に歸す」とは、謂はく諸の菩薩は先に漸次に修習する現觀の無分別智と後得智とに由るが故に、速かに能く一切の功德の圓滿せる佛果を證獲す。謂ゆる如來地に超度する無邊の因位の功德を、「德海の岸」と名く。頌に言へる有るが如し、

　三菩提を證する時　　頓に圓滿の果を成じ
　無邊の德海を度りて　　無等等の位に至る。

「疾く」とは速かなり。無量劫を經て乃ち佛果を成ずれば、時既に長久なり、云何が「疾く」と言ふや。此の義然らず。時劫長遠なるは唯分別の故なり。頌に言へる有るが如し、

　夢に處して年を經たりと謂ふも　　寤むれば乃ち須臾の頃なり
　故に時は無量なりと雖も　　一刹那に攝在す。

又佛の精進は極めて熾然なるが故に、多劫を經と雖も而も少時なりと謂ふ。頌に言へる有るが如し、

　愚なるものは修すること少時なりと雖も　　怠る心にて已に久しと疑ふ、
　佛は無量劫に於て　　勤勇するも須臾なりと謂ふ。

「勇猛」と言ふは卽ち智慧の力なり。無分別と後得との智を成ずるが故に、怯憚する所無し。故に勇猛と名く。此の頌は第一義の最勝にして尊高なる究竟道の位に至ることを顯示す。

の位の加行を顯示す。「便ち能く眞の法界を現證し、是の故に二相を悉く蠲除す」とは、先に義は所有無しと了達して唯心に住するに由るが故に、能く所取と能取との二相を除き、二(相)無き眞實の法界を現證す。善く決定する智は此れに依りて生ずるが故なり。此の前の半頌と及び後の第三(頌)は見道位を顯はす。現證する所の如きは次に當に顯示すべし。「體は心を離れて別の物無きを知り、此に由りて卽ち心は有に非らざることを會す」とは、謂はく心を離れて別に一切の所緣の境界無きを知る。彼無きに由るが故に能緣の心性も亦成ずるを得ず。「智者は二は皆無なりと了達し」とは、勝慧と相應するが故に智者と名け。二の無なる性に於て能く決定して知るが故に遍計所執に了達すと名く。所緣と能緣とは本來無性なるを「二は皆無なり」と名く。「等しく二の無なる眞の法界に住す」とは、平等に安住するが故に「等しく住す」と名く。所取と能取とを悉く皆遠離するが故に「二の無なる」と言ふ。是くの如く現證せる法界は虛(妄)に非ざるを「眞の法界」と名く。「慧者は無分別智の力にて」とは、謂はく諸の菩薩の無分別智の所有の功能なり。「周遍して平等なるに常に順行す」とは、謂はく內外を總ぶるが故に「周遍」と名け、所取の無なるが如く、能取も亦爾るが故に「平等」と名く。契經等の法は其の性平等なりと隨順し觀察すること譬へば虛空の如くなるが故に「順行」と名く。時恒なるが故に「常」といふ。「滅」とは、除くなり、「依」とは、謂はく一切の雜染法の因なり。悟入すべきこと難きを榛梗に譬ふ諸の雜染の法を名けて「過失」と爲し。習氣積集するが故に名けて「聚」と爲す。「大良藥の衆毒を銷すが如し」とは、其の義了じ易し。能く諸の過失に入ることを[三九]除遠するが故に阿揭陀の如し。此の第四頌は修道を顯示す。「佛の說きたまふ妙法は善く成立し」とは、謂はく牟尼尊の說く所の正法は極めて善く成立すとなり。「慧を幷に根と法界との中に安ず」とは、謂はく其の慧を安じて佛の說く所の善く成立する法と、幷に其の根本と眞の法界との中に置くとなり。「根」とは、謂はく此れ是の覺の因なるが故なり。

【三九】除遠すとは過失を除き又は之を遠くるの意。

福德と智慧との二の資糧を　菩薩は善く備へて邊際無し
法に於て思量して善く決し已る　故に義趣は唯言の類のみなりと了る。
若し諸義は唯是れ言のみなりと知れば　卽ち彼に似て唯心なりとの理に住し
便ち能く眞の法界を現證す　是の故に二相を悉く蠲除す。
體は心を離れて別の物無きを知り　此に由りて卽ち心は有に非ざることを會す
智者は二は皆無なりと了達し　等しく二の無なる眞の法界に住す。
慧者は無分別智の力にて　周遍して平等なるに常に順行し
依の榛梗の(如き)過失の聚を滅するは　大良藥の衆毒を消すが如し。
佛の說きたまふ妙法は善く成立して　慧を并に根と法界との中に安じ
念趣は唯分別のみなることを了知し　勇猛にして疾く德海の岸に歸す。

釋曰　「福德と智慧との二の資糧を、菩薩善く備へて邊際無し」とは、謂はく施等の三波羅蜜多を福の資糧と名け、第六の般若波羅蜜多を智の資糧と名く。精進は[三七]俱に修するが故に二種に通ず。靜慮も亦爾り。若し[三八]無量を緣ずれば福の資糧に屬す、其の餘は智(資糧)に屬す。福智積集するが故に「資糧」と名く。「善く備ふ」と言ふは、是れ圓滿の義なり。無數の時の差別を經て圓滿するを「邊際無し」と名く。「法に於て思量して善く決し已る」とは、謂はく一切の契經等の法に於て、定後の智に由りて善く決定して猶豫無きを得るが故なり。「義趣は唯言の類のみなりと了る」とは、是の故に能く一切の義趣は唯意言の分別を用つて因と爲すことを了るなり。「若し諸義は唯是れ言のみなりと知れば、卽ち彼に似て唯心なりとの理に住し」とは、謂はく若し一切の義相は唯是れ意言のみなりと了知すれば、卽ち能く安心して似義の相の種々に變現する唯心の理の中に住して、決定を得るが故なり。此の第二頌の初半は、菩薩の順決擇分の位に在ることを顯示し、初頌は此

【三七】俱に修すとは福智の二に俱に精進する義あるが故なり。
【三八】無量を緣ずれば、とは定の所緣が慈悲喜捨の四無量なる時はとの意なり。

別有るのみ、唯假立有るのみと觀ず、卽ち是れ依他起の自性に悟入す。第二頌の中、卽ち是れ圓成實の自性に悟入するなり。此の中には、但、遍計所執を遣るのみ、各別の心境は分別を伏除するも其の事無きにあらず。若し爾らざれば繫縛と解脫とは倶に應に成ずべからず。淨と不淨とは皆有ること無きが故なり。

論曰 復教授の二頌有り、分別瑜伽論に說けるが如し。

菩薩は定位に於て　影は唯是れ心のみと觀じ
義の想を既に滅除し　審かに唯自想のみと觀ず。
是の如くして內心に住すれば　所取は有に非ざるを知り
次に能取も亦無し(と知り)　後に無所得に觸る。

釋曰 誰が能く是の如く尋思して果を得るや。是の如き教授は當に復誰が爲にすべきや。此の問に答へんが爲に二頌を說く。「菩薩は定位に於て影は唯是れ心のみと觀ず」とは、謂はく有らゆる法に似、義に似たる[三六]定の所行の影は唯是れ內心のみなりと觀ずるなり。經に言へるが如く。我れ說く、識の所緣は唯識の所現なりとの故に。「菩薩」と言ふは卽ち能觀を說く。「定位に於て」とは心一境に住するなり。「義の想を既に滅除す」とは、謂はく彼の影は其の義の想を遣るに由る。「審かに唯自想のみと觀ず」とは、謂はく是くの如き法に似、義に似たる相は唯我が定心の變現する所なりと觀察するなり。「是くの如く內心に住すれば」とは、是の心は爾の時に於て卽ち自の心に住すとの義なり。「所取は有に非ざるを知り、次に能取も亦無し」とは、謂はく先に已に所取は是れ無なりと了り。所取の性既に所有無きが如く、所取の性の上の能取の性も亦成ずることを得ざるなり。「後に無所得に觸る」とは、謂はく此れより後に二性の所得無き眞如を證すとなり。

論曰 復別に五の現觀の伽他有り。大乘經莊嚴論に說けるが如し。

【三六】定の所行とは定中所現の影像。

する等の如きに非ず。「果の差別」とは、菩薩の現觀は力無畏等の無量の功德衆の莊嚴する所にして、能く無功用にして、一切の有情を利する事を起作し、法身を證得して以つて勝果となすも、餘は無漏の轉生を用つて果と爲す。

論曰　此の中に二頌有り、

名と事と互に客と爲る　其の性を應に尋思すべし
二に於ても亦當に推すべし　唯量と及び唯假なるのみと、
實智は無義にして　唯分別の三有るのみと觀ず
彼無きが故に此れ無し　是れ卽ち三性に入る。

釋曰　二の伽他を以つて尋思及び尋思の果を總攝して解了し易からしむ。「名と事と互に客と爲る其性を應に尋思すべし」とは、謂はく名は事に於て客と爲り、事の名に於けるも亦爾り。一類の如きに非らず、謂ゆる聲と義と相ひ稱つて生じ、互に相ひ繫屬するなり。「二に於ても亦當に推すべし、[三五]唯量と及び唯假なるのみと」とは、謂はく自性と及び差別との中に於ても、亦當に唯分別有るのみ、唯假立有るのみなりと推尋すべしとなり。其の事云何ん。謂はく此の二種は唯分別有るのみ、唯假立する差別の言說有るのみにして都て眞實の自性と差別と無しとなり。「實智」と言ふは、謂はく尋思より生ずる所の四種の如實の遍智なり。「無義なりと觀ず」とは、謂はく其の義は本來有ること無しと觀ずるなり。「唯分別の三有るのみ」とは唯三種の分別、謂ゆる名の分別と、自性假立の分別と、差別假立の分別有るのみと觀見するなり。「彼無きが故に此無し」とは、謂はく義無きが故に此の三種の分別も亦無しと觀ずるなり。「是れ卽ち三性に入る」とは、上に說く所の如く、卽ち是れ三種の自性に悟入すとなり。謂はく初頌の前半は名と事と更互に客となることを觀ず、卽ち是れ遍計所執の自性に悟入す。初頌の後半は彼の二種の自性と差別とは、唯分

【三五】唯量は量は此には思量分別の義にして、心識の主觀作用をいふ。

有情を成熟する加行は休息すること無きが故に。九には生の差別に由る。如來の家に生るゝが故に。十には生を受くる差別に由る、常に諸佛の大集會の中に於て生を攝受するが故に。十一には果の差別に由る。十力、無畏、不共の佛法の無量の功德の果を成滿するが故に。

釋曰　聲聞と菩薩との現觀の差別に略して十種或は十一種有り。「所緣の差別」の中、菩薩の現觀は大乘の法を以て聞慧等の三種の所緣となし、聲聞の現觀は聲聞乘の法を其の所緣となす。「資持の差別」の中、「福の資糧」とは、施・戒・忍の三種の加行を謂ひ、「智の資糧」とは、精進・靜慮及び聞慧等を謂ふ。資糧と言ふは無量劫を經て運集する所なるが故なり。「通達の差別」の中、聲聞の現觀は唯能く補特伽羅空無我の理に通達するのみなれども、菩薩の現觀は倶に能く補特伽羅と法との空無我に通達す。「涅槃の差別」の中、菩薩の現觀は悲と慧との方便資糧を攝受して、生死と涅槃とに住著する所無きを以つて涅槃となすも、聲聞の現觀は唯無爲に住するを、以つて涅槃となす。「地の差別」の中、菩薩の現觀は十地に依りて出離を得るも、聲聞乘の中には是の如き諸地の建立有ること無し。「清淨の差別」の中、菩薩の現觀は永へに煩惱並に諸の習氣を斷じ、及び能く衆寶にて佛土を清淨にするも、聲聞の現觀は煩惱を斷ずと雖も未だ習氣を除かず、全く衆寶にて佛土を淨むること能はず。習氣と言ふは煩惱無しと雖も然も其の所作は煩惱の有るに似たるなり。「自他平等心の差別」の中、菩薩の現觀は自他の平等なる法性を證得して、有情を成熟する加行絕ゆること無きも、聲聞の現觀は自他を分別し、唯自利を修して他を利することを修せず。「生の差別」の中、菩薩の現觀は如來の家なる法界の中に於て生れ、是れ佛の眞子にして輪王の家に生るゝ、[三四]有相の子の如く。聲聞の下賤無智なる婢の子に同じきが如きに非ず。「受生の差別」の中、菩薩の現觀は常に諸佛の大集會の中に於て、蓮花臺上に結跏趺坐し、乃至成佛にいたるまで恒に化生を受く。言ふ所の「諸佛の大集會」とは、謂はく無漏界の諸佛の國土にして、聲聞の母胎に處

【三四】有相の子とは後に轉輪王となる相を有せる王子の意。

是の故に此れを說いて諦の順忍の所依止の定と名く。「順」とは、謂はく所取無なるに依りて能取をして無ならしむるに親近するなり。應に知るべし、「是の如き諸の三摩地は是れ現觀の邊なり」とは、當に知るべし、卽ち是れ[三三]彼の轉の義に近しとなり。

論曰　是の如くして菩薩は已に地に入り已に見道を得、已に唯識に入り、修道の中に於て云何が修行するや。所說の如く安立する十地の一切の經を攝して皆現前する中に於て、總法を緣ずる出世の後得の止觀の智に由るが故に、無量百千俱胝那庾多劫を經て數修習するが故に、而も轉依を得て、三種の佛身を證得せんと欲するが爲に、精勤し修行す。

釋曰　「所說の如く安立する十地に於て」とは、謂はく彼彼の戲論言說に隨ふ自相共相の十種の地の中となり「總法を緣ずるに由る」とは、相雜して緣ずるが故に、別法を緣ずる事無くして而も正智を修するなり。若し爾らざれば、無分別智の集むる所の資糧は應に有ることを得べからず。「出世」とは、是れ無分別智なり。「後得」とは、卽ち是れ淸淨なる世間を能く安立する智なり。此の後得の故に淸淨なり、有相の境なるが故に世間なり。「而も轉依を得」とは、謂はく多劫を經て無分別の後得智を修するが故に、而も轉依を得。謂ゆる心心法相續して淸淨なり。「三種の佛身を證得せんと欲するが爲に精勤し修行す」とは、後に當に廣說すべし。

論曰　聲聞の現觀と菩薩の現觀とには何の差別有りや。謂はく菩薩の現觀と聲聞との異は十一種の差別に由る。應に知るべし、一には所緣の差別に由る。大乘の法を以て所緣と爲すが故に。二には資持の差別に由る。大なる福と智との二種の資糧を以つて資持と爲すが故に。三には通達の差別に由る。能く補特伽羅と法との無我に通達するを以ての故に。四には涅槃の差別に由る、無住の大涅槃を攝受するが故に。五には地の差別に由る。十地に依りて出離するが故に。六と七とは淸淨の差別に由る。煩惱と習とを斷じて、土を淨むるが故に。八には自他に於て平等心を得る差別に由る、

[三三]　彼の轉とは後に說く所の轉依をいふ。

此の後得智も亦分別無し。染汚無きが故なり。

論曰　此の唯識性に悟入する時に於て四種の三摩地有り。是れ四種の順決擇分の依止なり。云何が應に知るべきや。應に知るべし四尋思に由る。下品の無義の忍の中に於て、明得三摩地有り、是れ煖の順決擇分の依止なり。上品の無義の忍の中に於て明増三摩地有り、是れ頂の順決擇分の依止なり。復四種の如實遍智に由りて已に唯識に入り、無義の中に於て已に決定を得、眞義の一分に入る三摩地有り。是れ諦に順忍の依止なり。此より無間に唯識の想を伏する無間三摩地有り、是れ世第一法の依止なり。應に知るべし、是の如き諸の三摩地は是れ現觀の邊なり。

釋曰　一切處に於て現觀に入る時は、皆四種の順決擇分有り、是れ前相なるが故に。現觀已に顯はるるが故に、重ねて釋せず。「四尋思に由る」とは、謂はく前に說けるが如く、名と義との自性と差別とを推求して假立するを體と爲す。「下品の無義の忍の中に於て」とは、謂はく下品の覺慧と愛樂とに於て諸義は所有無き中なり。「明」とは謂はく能く義有ること無しと照す智なり。所求の果を遂ぐるが故に名けて「得」と爲す。此の定は創めて無義の智明を得、故に明得三摩地の名を得。譬へば最初に火等を求め得るが如し。「煖」とは、卽ち是れ煖品の善根なり。譬へば火を鑽るに煖を前相と爲すが如し、此れも亦是の如く眞智の前相なり。「依止」と言ふは、謂はく是れ因の義なり、「決擇」と言ふは、卽ち是れ現觀なり。此の[三]分は卽ち是れ法無我の忍なり。此の善根を引くを說いて名けて「順」と爲す。最も其の上に居るが故に名けて「頂」と爲す。「復四種の如實の遍智に由る」とは、謂はく先に說けるが如く、名事等の得可からざる中に於て、已に決定を得、是の如く轉ずる時唯識に悟入し、似の名等は現に決定して都て義有ること無きを了知す。「眞義の一分に入る三摩地」とは、唯能く所取の無なるに通達するが故に一分に入ると名く。此の中に於て義の無なるに了達するも、未だ彼の能取の行相の唯識を伏して無ならしむること能はざるに由る。

【三】此の分とは順決擇分を指す。

一切法は皆眞如を性と爲すが故に、眞如を緣ずるは、卽ち是れ一切の法性を解了するなり。若し爾らざれば多時を經と雖も、無分別智も亦應に生ぜざるべし。「出世」と言ふは、是れ無漏の故に、無分別の故なり。「止觀の智の故に」とは、[二九]三摩呬多の顚倒無き智に由るが故なり。「種々の相識」とは、謂はく諸法の因性果性を安立する[三〇]有上・無上等にして、卽ち是れ所取能取の分の義なり。「及び相阿賴耶識の諸相の種子を斷ぜんが爲に」とは、阿賴耶識の中の似の色等の相の諸法の種子と及び能熏の相とを斷ぜんが爲なり。此れ卽ち種子の因果を斷ずることを說く。「能く法身に觸る種子を長ぜんが爲に」とは、一切の大乘の多聞の熏習を增長せんと欲するが爲なり。此れ先に得たる法身の爲なるに由るが故なり。「所依を轉ぜんが爲に」とは、眞如に通達するなり。諸の心心法は垢を離れて生ずるが故に、或は復眞如は善く淸淨なるが故なり。「一切の佛法を證得せんと欲するが爲に」とは、力・無畏等の諸佛の法を生起せんと欲するが爲の故なり。「一切智智を證得せんと欲するが爲に」とは、無垢にして無礙なる諸佛の智を證得せんと欲するが爲の故なり。「又後得智」とは、後得智の有する所の作用を顯はす。「一切の阿賴耶識の所生に於て」とは、此れ所生を擧げて其の因を取らんが爲なり。「一切の了別の相の中」とは、此れ其の果を顯はす。卽ち是れ能取所取の分の中なり。「幻等の性の如く無倒にして轉ずることを見る」とは、如實に依他起性を觀見するに、幻事等の如く迷亂無きが故なり。「譬へば幻師の所幻の事に於けるが如し」とは、草木等の[三一]幻惑の因の中に於て、顚倒有ること無く如實に見るが故に。象馬等の幻惑の相の中に於ても亦顚倒無く如實に見るが故なり。是の如く菩薩の眞實を見る者は、如實に所取能取の自性有ること無きを現見し、圓成實は已に起り、後得に於て能く語言を發し、世俗の淨智にて、因果の時と及び說法の時とを知りて常に顚倒無し。其の聽聞者には顚倒有りと雖も、而も聞熏習の熏相續するが故に、次第に漸々に顚倒無きを得。彼れ應に作すべき所を成辨するに由るが故に、

【二九】三摩呬多(Samāhita)は等引と譯す、禪定の名なり。
【三〇】有上無上等は後の十地の斷惑階位の所を見よ。
【三一】幻惑とは幻術に依りて知覺を迷惑せしむること。

波羅蜜多にて佛の法界を證するを、「中に於て生ず」と名け、眞の佛子と名く。此の般若波羅蜜多に由りて佛の法界に於て、能く正しく證を作し、自の相續を樹ゑて自在に現前するが故に名けて生と爲す。頌に言へる有るが如し、

一切の雄猛にして　　利他を樂ふ者は

生母、養母の　　生ずる所、育する所なるがごとし。[二六]

「一切の有情と平等なる心性を得」とは、遍く一切等しく無我なりと見るが故なり。說きて「一切の諸法は皆[二七]如來藏なり」と言へる有るが如し。是の如き等なり。「一切の菩薩と平等なる心性を得」とは、彼の意樂と平等なる性を得るが故なり。「一切佛と平等なる心性を得」とは、彼の法身と平等なる性を得るが故なり。「此れを卽ち名けて菩薩の見道と爲す」とは、先に未だ見ざる勝れたる法界を見るが故に、譬へば聲聞獨覺の[二八]見道の如し。

論曰　復次に何の義の爲の故に唯識性に入るや。總法を緣ずる出世の止觀の智に由るが故に。此の後得の種々の相識の智に由るが故に。及び相の阿賴耶識の諸相の種子を斷ぜんが爲に、能く法身に觸る種子を長ぜんが爲に、所依を轉ぜんが爲に、一切の佛法を證得せんと欲するが爲に、一切智智を證得せんと欲するが爲に、唯識性に入るなり。又後得智は一切の阿賴耶識の生ずる所の一切の了別と相との中に於て、幻等の性の如く、倒に轉ずること無きを見るなり。是の故に菩薩は、譬へば幻師の所幻の事に於けるが如く、諸相の中及び因果を說くに於て常に顚倒無し。

釋曰　「復次に何の義の爲の故に等」とは、唯識に入る所須を問ふ。次に應に答へて一切の智智を證得せんと欲するが爲なりと言ふべきに、而も先づ方便して說く所の如きは、次第の言を開示せんと欲するが爲の故に、是の如き所化の類を饒益し堪受せんと欲するが爲の故なり。「總法を緣ずるに由り」とは、一切法の總相の顯す所の眞如を緣して境と爲す。謂はく大乘敎の中に說く所の

[二六]　生母の生ずる所、養母の育する所と前の句に對す。

[二七]　如來藏とは如來の性を包藏するの意なり。

[二八]　見道とは初めて無漏智を起して眞理を見照する時をいふ。

但(たゞ)悟入すとのみ名け、今此の中に於ては作者も作用も息滅し究竟すれば「已に悟入す」と名く。

論曰　此の中に頌有り、

法と補特伽羅と　　法と義と略と廣と性と
不淨と淨と究竟とは　　名の所行の差別なり。

釋曰　前に說く所の如き、一切義の無分別の名に住することとは、今伽他を以て此の名の自境の差別を顯示す。初の「法の名」とは、謂はく色受等なり。「補特伽羅(ふさがら)の名」とは、謂はく[一九]天授等と、[二〇]隨信行等の佛敎の中の名なり。後の「法の名」とは、謂はく契經、應頌等なり。「義の名」とは、謂はく[二一]此の詮ずる所の、父母(ぶも)を殺害し、國を誅し及び隨行等なり。「略の名」とは、謂はく、一切法は皆無我なり等なり。「廣の名」とは、謂はく色、無我等なり。「性の名」とは、謂はく[二二]阿等の諸字なり、是れ詞句の因なるが故に。「不淨の名」とは、謂はく諸の異生なり。諸の煩惱の垢の染むる所と爲るが故に。「淨の名」とは、謂はく諸の賢聖なり。垢を永く斷ずるが故に。「究竟の名」とは、謂はく總ての所緣なり。[二三]卽ち般若波羅蜜多及び十地等なり。總略の義を以て所緣と爲すが故に。

論曰　是の如く菩薩は唯識性に悟入するが故に、所知の相に悟入す。此に悟入するが故に、極喜地に入り、善く法界に達し、如來の家に生じ、一切の有情と平等なる心性を得、一切の菩薩と平等なる心性を得、一切の佛と平等なる心性を得、此を卽ち名けて菩薩の見道と爲す。

釋曰　「善く法界に達す」とは、此の法界に於て深く證を作すが故なり。「如來の家に生ず」とは、謂はく佛の法界を如來の家と名け。此に於て證會するが故に名けて「生ず」と爲す。此の所緣に於て勝智生ずるが故に、先の所依を轉じて餘依を生ずるが故に、佛種を紹繼して斷絕せざらしむ。[二四]餘の續生の餘の[二五]衆同分は所生能生相續して斷ぜず、所生の家に託するが如く、是の如く般若

【一九】天授とは提婆達(Deva-datta)多の譯にして、一般に用ひらるゝ人名として例示す太郎等といふが如し。
【二〇】隨信行等とは隨信行、隨法行等の修行の階位に於ける名稱なり。
【二一】此のとは前の法の名を指す。
【二二】阿等とは梵語の字母をいふ、此に性とは因の義なり、すべての詞句は此の字母より成るが故に、次に詞句の因なりといふ。
【二三】世親釋を參照せよ。
【二四】餘の續生とは余の有情の意、此には有情の轉生相續を例として菩薩の轉依を明かす。
【二五】衆同分とは各種の有情の共通なる素質をいふ。

を滅除すれば、爾の時菩薩は已に義想を遣りて、一切の似義は生ずることを得べきこと無きが。故に似の唯識も亦生ずることを得ず。是の因緣に由りて、一切の義の無分別の名に住し、法界の中に於て便ち現見と相應して住することを得。爾の時菩薩の平等平等なる所緣能緣の無分別智は已に生起するを得。此に由りて菩薩は已に圓成實性に悟入すと名く。

釋曰 「意言の似義の相に悟入するが故に遍計所執性に悟入す」とは、謂はく意言の義に似たる相現ずるも、遍計所執には實の義有ること無きを了知するなり。此に由るが故に遍計所執の自性に悟入すと名く。「唯識に悟入するが故に依他起性に悟入す」とは、謂はく唯識にして無なることを明かに解するが故に、無義の中に於て似義の相現ずと了知す。此れに由り依他起性に悟入す。圓成實性に悟入することを顯はさんが爲の故に、復說いて「已に義の想を遣る」と言ふ。即ち是れ已に能く義の想の義を除くなり。「一切の似義は生ずることを得べき無し」とは、即ち是れ都て能似の義有ること無くして義を生起す。「故に似の唯識も亦生ずることを得ず」とは、所取無きが故に能取も亦無し。即ち是れ唯識の成ずる所の義も亦轉ぜざる義なり。「一切の義の無分別の名に住す」とは、謂はく一切の法は是れ契經等なり、名の依行する處を「一切の義」と名く。[一七] 名に十種有り、前九種の名には分別する所有り。其の[一八]第十の名は一切の義に於て分別する所無し。是の如き一切の義に於て無分別なる名に安住するなり。一切は唯其の名のみ有りと說くが如く、即ち是の如きの名は能く一切の者を起す。此の中、名に似て顯現する識等を假に說いて名と爲す。「法界の中に於て便ち現見と相應して住することを得」とは、謂はく法界に於て內證と相應して勝解を起すなり。「平等平等」とは、謂はく所緣は都て所有無きが如く、是の如く能緣も亦所有無し。是の故に所緣と能緣の二種は平等平等なり。「此に由りて菩薩は已に圓成實性に悟入すと名く」とは、遍計所執の自性に悟入するも、依他起性は是れ有餘なるが故に猶作者有りて作用未だ息まざれば、

【一七】名に十種有りとは次の頌文に之を列擧す。
【一八】第十の名は即ち究竟の名なり。

有りと言說するや。此の難を遮せんが爲の故に、次に說いて「相見の二性と」言ふ。實の義無しと雖も、識は內外の二義に似て顯現す。無始よりの言說の熏習力の故なり。識は義に似て轉じ了別の用に似るを說いて名けて見と爲す、故に相違せず。唯似相似見に悟入すと爲す。識と別なる種類は爾らずと爲すや。此の問に答へんが爲の故に「及び種々の相に悟入す」と說く。謂はく唯一の識の所取能取の性の差別なるが故に、一時の間に於て分つて二種と爲す。又[二六]一識に於て三相に似て現ず、所取と能取と及び自證分とを名けて三相と爲す。是の如き三相は一識の義分にして一に非ず異に非ず。餘處に辨ずるが如し。一識の上に於て多相の現ずる有り、故に種々と名く。名等の六相は義有ること無し等は前の三種を釋す。前問の如何が悟入するやに答へんが爲の故に、復說いて「闇中の繩は顯現して蛇に似るが如し」と言ふ。此の譬喩に由りて三種の自性を成立し通達す。譬へば繩の上の蛇の如きは眞實に非ず。有ること無きを以ての故に。是の如きは似名似義の意言なり。依他起の上の名等の六種の遍計所執も亦眞實に非ず、有ること無きを以ての故に。又此の中に於て、繩覺に依りて蛇覺を捨つるが如く、是の如く唯識の顯現する依他起の覺に依止して六義の遍計執の覺を捨つ。色等の細分の覺に依りて繩覺を除遣するが如く、是の如く圓成實の覺に依止して、依他起の迷亂の覺を遣る。頌に言へる有るが如し、

　繩に於て蛇なりと謂へる智は　　繩を見れば義無きことを了ず
　彼の分を證見する時は　　蛇の如しとの智は亂なることを知る。

「實に非ざる六相の義を伏除する時」とは、是れ義有るに非ず。六種の非實の義は非有を相と爲すが故なり。

論曰　是の如く菩薩は意言の似の義相に悟入するが故に、遍計所執性に悟入す。唯識に悟入するが故に依他起性に悟入す、云何が圓成實性に悟入するや。若し已に意言の聞法熏習の種類の唯識の想

【二六】此には種々の相といふを釋して相分、見分、自證分の三分說を立つるも世親釋には無し。

性と差別とには義相無きが故に、同じく得可からず」とは、四種は遍計執にして義には皆得可からざるに了達す。應に知るべし。此の中四種の方便を說いて尋思と名け、四種の果智を說いて四種の如實遍智と名く。謂はく名は唯是れ假立にして實には得可からずと推求するを、說いて尋思と名け、若し卽ち此に於て果智を生ずる時は、決定して假有にして實には無しと了知するを、如實智と名く。是の如く事の自性と差別とに於て、假有にして實には無なることを、推求し決定して說くことも亦應に爾るべし。

論曰　此の唯識性の中に悟入するに於て、何の所に悟入するや。如何が悟入するや。唯識性と、相見の二性と及び種々の性とに入る。若くは名、若くは義の、自性差別と、假の自性差別の義と、是の如き六種の義は皆無きが故に、所取能取の性現前するが故に、一時に現して種々の相と義とに似て生起するが故なり。闇中の繩は顯現して蛇に似るが如し。譬へば繩の上の蛇は眞實に非ざるが如し。有ること無きを以ての故なり。若し已に彼の義無きことを了知すれば、蛇覺滅すと雖も、繩覺は猶在り。若し微細なる品類を以て分析すれば此れ又虛妄なり、色香味觸を其の相と爲すが故に。此の覺を依と爲せば繩覺も當に滅すべし。是の如く彼の文に似、義に似たる六相の意言に於て、實に非ざる六相の義を伏除する時、唯識性の覺も、猶蛇覺の如く亦當に除遣すべし。圓成實の自性の覺に由るが故なり。

釋曰　此の唯識性の中に悟入するに於て、所入と及び入る譬喩を顯はさんと欲するが故に、此の問を爲す。若し義有ること無ければ、此の唯識性の中に悟入するに於て、何を所入と爲すや。此の意言ひ難し。此の唯識性は卽ち是れ其の義なり。云何が義無し(といふや)。此の難を遮せんが爲の故に、先に說いて「唯識性に入る」と言ふ。謂はく此の識の義も亦義無き性なり。唯外の義のみ是れ所有無きに非ず。若し義無き性ならば、云何が十二處の敎有ることを得ん。云何が世間に義

からざるが故なり。諸の菩薩は是の如く如實に唯識に入らんが爲に勤修し加行するを以て、卽ち文に似、義に似たる意言に於て、文と名とは唯是れ意言のみなりと推求し、此の文と名とに依る義も亦唯意言のみなることを推求し。名と義との自性と差別とは唯是れ假立なること推求す。若し時に唯意言のみ有ることを證得すれば、爾の時若くは名、若くは義の、自性と、差別とは皆是れ假立なることを證知す。自性と差別とには義の相無きが故に、同じく得可からず。四尋思に由り又び四種の如實の遍知に由りて、此の文に似、義に似たる意言に於て、便ち能く唯識のみ有る性に悟入す。

釋曰　「四の尋思に由り、及び四種の如實遍智に由る」とは、先に說けるが如き、能く[一二]悟入する具に依りて、如實なる所作の方便を發起す。加行の時に於て[一三]推求の行見の假有實無なる方便の因相を說いて「尋思」と名く。假有にして實には無なることを了知して得る所の決定せる行智の方便の果相を如實智と名く。此の中「名」とは、謂はく色受等にして、亦[一四]名の因、[一五]名の果の句等の尋思を攝す。此の名は唯意言の性なるのみ、唯假にして實に非ず。意言を離れざるを名の尋思と名く。義の尋思とは、名身等の詮表する所の如く、蘊界處等を得るなり。此の性を推求するに唯假にして實に非ず。種類と種類との相應に差別の得可きもの有るが如く、是の如く所詮と能詮と相應すること理に應ぜざるが故なり。「此の文名に依る義を推求するも亦唯意言のみなり」とは、名に依りて表はす所の外事は唯意言の性なりと尋思し、此の義は外相に似て轉ずるも、實には唯內に在るのみと思惟するなり。「名と義との自性と差別とは唯是れ假立なりと推求す」とは、名と義との二種の自性は唯假立の相なりと尋思するなり。謂はく色受等の名義の自性は實には所有無きも假に自性を立つ。譬へば假に補特伽羅を立つるが如し。名と義との二種の差別も亦假立の相なりと尋思す。謂はく無常等の名と義との差別は唯假立なるが故なり。「若くは名、若くは義の自性と差別とは皆是れ假立なり」とは、四種は虛妄に顯現し、依他起に攝することを證知す。「自

【一二】悟入する具とは依りて以て悟入する具となるは前に說く所の聞熏習の言說なり。
【一三】推求の行見とは推求する能觀の行相見解といふ意、名義を推求するに識の上に現はるゝは假りの相にして心外に實に無なりとの見なり。
【一四】名の因とは字母及び聲をいふ。
【一五】名の果とは字音に依りて成れる名稱又は句等なり。

る所無きに由りて、分別を斷ずるが故に。此の中に頌有り、

現前に自然に住し　　安立する一切の相を
智者は分別せざれば　　最上の菩提を得。

釋曰　今當に四處を斷除することを顯示すべし。「作意を斷ずるが故に」とは、二乘の分別の作意を斷除するなり。「以て能く永く異慧と疑とを斷ずるが故に」とは、謂はく大乘の甚深廣大なるに於て、異慧の顚倒と及び疑とを起さざるなり。「法執を斷ずるが故に」とは、謂はく所聞所思の法の中に於て、能く永く我我所の執を斷除するなり。謂はく我れ能く聞き、我れ能く思覺し、我が聽く所の文、我が思ふ所の義と、是の如き執著は一切皆無し。其の勝義に於て、現觀を證するが故なり。「分別を斷ずるが故に」とは、謂はく現前に於て任運に轉ずる[八]色等は現に住し及び功用を作すと、(及び)諸の骨鎖等の淨定の安立する一切の所緣の諸の境界の相とは、作意分別を悉く能く永く斷ず。乃至、一切の諸佛菩薩の波羅蜜多には、是の如き等の相と執著分別とを悉く能く永く離る。其の頌の義顯はる、重ねて釋することを須ひず。

論曰　何に由つて、云何にして悟入することを得るや。

釋曰　此の中、雙べて作具と所作とを問ふ。作者有るに由りて所作の業に入る。應に知るべし、定んで能入の具有り。自ら現觀する相は是れ所作の事なり。決定して應に是の如き是の如き所作の方便有るべし。是の故に今當に[九]二を倶に解釋すべし。

論曰　聞熏習の種類に由る如理なる作意に攝する所の法に似義に似たる有見の意言なり。

釋曰　此の中、先に[一〇]能入の具を辨ず。種類の聲は卽ち[一一]言說を因とす。是を因の義と爲す。

論曰　四の尋思に由る。謂はく名と義と自性と差別とにて假立せる尋思に由り。及び四種の如實遍智に由る。謂はく名と事と自性と差別とにて假立せる如實の遍智に由る。是の如きは皆同じく得べ

【八】色等の諸法は現前に住して知覺の對境となり、之を緣ずる六識は作意の功用をなすとの意。

【九】二をとは前の二問を指す。

【一〇】能入の具とは如何にして入るやを辨ずとの意なり。

【一一】言說とは所聞の言說なり。

はず」と謂ふを「心の怯弱」と名く。彼を勸進して、應に已に於て功能無しと謂ふべからざらしむ。故に退屈無し。頌に言へる有るが如し、

　無量の十方の諸の有情は　念念に已に善逝の果を證せり、
　彼れ既に丈夫ならば我れも亦爾り　應に自ら輕んじて而も退屈すべからず。

「諸の淨心の意樂にて能く施等を修行す」とは、謂はく不善及び無記の心にて、施等を行ずるに非ず、唯是れ善心のみなるが故に「淨心」と名く。世間の不善、無記の散亂心の中に有る如きも、亦施等を行ず、諸有及び財位を希願するが故なり。菩薩は爾らず、唯無上正等菩提を求む。「意樂」と言ふは、謂はく能く無礙に施等の因を修するなり。先に已に說けるが如し。「此の勝者は已に得たり、故に能く施等を修す」とは、謂はく諸の菩薩を名けて「勝者」と爲す。先に已に此の殊勝なる意樂を得たれば、此の施等の波羅蜜多に由りて任運にして轉ず。說の如く而も修するが故に、「已に得たり」と名く。此の決定に由りて、所對治を捨つ。所治を捨つるが故に、功用に由らずして其の施等に於て任運にして轉ずるなり。等とは戒乃至慧波羅蜜多を等取す。「善者も死時に於て」とは、謂はく世間の善に由りて善を成ずる者も、命終る時に於てとなり。「樂ひに隨つて自ら滿することを得」とは、謂はく[七]世間の愛樂する所に隨つて自ら果を圓滿するを得。是れ乃至有頂に生ずることを得る義なり。「勝善は永へに斷ずるに由る」とは、卽ち是れ彼の永へに障を斷ずる善にて善を成ずるに由るとの義なり。「圓滿すること云何が無がらん」とは、是れ所樂に隨つて佛果を圓滿すること云何が義無からんやとなり。

論曰　聲聞と獨覺との作意を離るるに由りて、作意を斷ずるが故に、大乘の諸疑に於て疑を離るるに由りて、以て能く永く異慧と疑とを斷ずるが故に、所聞所思の法の中の我、我所の執を離るるに由りて、法執を斷ずるが故に。現前に現住し、安立する一切の相の中に於て作意する所無く、分別す

【七】世間の有漏の善を修して得る果報は人中の勝果より乃至上は上界有頂天に生ずることを得との義なり。

釋曰　「無量の諸の世界等」とは、此の言は初の練磨心を顯示す。他の例を引いて已に心をして增盛にして退屈有ること無からしむ。「此の意樂に由りて」とは、第二の其の心を練磨することを顯示す。「我已に是の如き意樂を獲得す」とは、此の意樂は、諸の弊縛を離るることを顯はす。謂はく此の意樂は慳悋を遠離し、欲尋を遠離し、恚尋を遠離し、懈怠を遠離し、惛沈と及び睡眠とを遠離し、無明を遠離す。我れ此に由るが故に少しく功力を用ゐて、施等の波羅蜜多を修習すれば當に圓滿するを得べし」とは、謂はく已に殊勝なる意樂を獲得せり。便ち能く任運に施等を修行して速かに圓滿ならしむ。「若し有るが成就す等」とは、第三の其の心を練磨するを顯示す。「諸の有障の善」とは、謂はく有るは諸の世間の善を成就するも未だ能く永く所治障を斷ぜざるが故に、說いて有障と名く。「我に妙善有り等」とは、謂はく我れ能く永へに所對治の障を斷じ、無障の善に由りて、而も其の善を成ぜり。云何か當來に圓滿なる佛果を證得せざらんや。「心を練磨す」とは、謂はく心を策擧して、其をして猛利ならしめ、退屈を對治するなり。

論曰　此の中に頌有り、

人趣の諸の有情は　處も數も皆無量にして
念念に等覺を證す　故に應に退屈すべからず、
諸の淨心の意樂にて　能く施等を修行す
此の勝者は已に得たり　故に能く施等を修す、
善者は死する時に於て　樂ひに隨つて自ら滿ずることを得
勝善は永へに斷ずるに由り　圓滿すること云何が無からん。

釋曰　復伽他を以て是の如き義を攝す。「人趣の諸の有情等」とは、其の心怯弱なるを名けて、「退屈す」と爲す。彼に應に心に退屈を生ずべからずと勸む。「我れは無上正等菩提を證覺すること能

て等」とは、謂はく大乘の法相より生ずる所の決定せる行相の似法似義の意言に於て、能く此の境界に入るとなり。能く入るとは是れ用にして、所入の境界は是れ業、是れ持なり。此の意言に於て、或は有るは能く入りて勝解行地に在り、一切法の唯識性の中に於て但聽聞するに隨つて勝解を生ずるが故に。或は有るは能く入りて見道の中に在り、理の如く此の意言に通達するが故に。此の中、「理の如く通達す」とは、謂はく彼の非法非義に通達するなり。所取に非ず、能取に非ざるが故に。或は有るは能く入りて修道の中に在り、此に由りて煩惱と所知との障を對治することを修習するが故に。或は有るは能く入りて究竟道の中に在り、最極清淨にして、諸障を離るるが故に。是の如き四種は是れ能入の位なり。

論曰　何に由りて能く入るや。善根力に任持せらるるに由るが故なり。謂ゆる三種の相にて心を練磨するが故に、四處を斷ずるが故に、法義の境を緣じて、止觀し、恒常に慇重に加行して放逸無きが故なり。

釋曰　「何に由りて能く入るや」とは、此れ入る因を問ふ。謂はく何の因に由りて、此に於て能く入るや、と。「善根力に任持せらるるに由るが故に等」とは、謂はく善根力有りと雖も而も心或は退屈するが故に、「三種の相にて心を練磨するが故に等」と說く。

論曰　無量の諸の世界の無量の人有情は、刹那刹那に無上正等菩提を證覺す。是を第一の其の心を練磨すと爲す。此の意樂に由りて、能く施等の波羅蜜多を行じ、我已に是の如きの意樂を獲得せり、我れ此に由るが故に少しく功力を用ゐて施等の波羅蜜多を修習すれば、當に圓滿するを得べしと。是を第二の其の心を練磨すと爲す。若し諸の有障の善を成就するもの有らば、命終る時に於て卽便ち可愛の一切を自體に圓滿して生ず、我に妙善と障礙無き善と有り、云何ぞ爾の時に一切の圓滿を獲得すべからさらんやと。是を第三の其の心を練磨すと名く。

「[三]法に似る」と言ふは、謂はく契經等にして十地等の如し。「義に似る」と言ふは、謂はく[四]彼の所詮の無我の性等なり。彼の行相に似て生起するが故に、說いて「法に似、義に似て生ず」と爲す。「所取の事に似たる」とは、彼の所取の如く顯現するが故なり。「有見」と言ふは、謂はく[五]耳識と俱なり。「意言」と言ふは謂はく意識なり。或は見分と俱なる所取能取の性なり、此れ卽ち所取能取の所依の自性を安立す。前に已に說けるが如し。

論曰 此の中誰か能く應に知るべき所の相に悟入するや。大乘の多聞熏習相續して、已に無量の諸佛の世に出現するに逢事することを得、已に一向に決定せる勝解を得て、已に善く諸の善根を積集するが故に。善く福智の資糧を備へたる菩薩なり。

釋曰 用と及び[六]用具とは皆作者を待つ。故に入者を問ふ。「誰か能く悟入するや」と。此の問に答へて「大乘の多聞熏習相續して等」と言ふ、謂はく大乘の法に依りて多聞熏習を起して相續す。「已に無量の諸佛の世に出現するに逢事することを得」とは、此の相續に由るが故に、現前に諸佛の世に出現するに逢事することを得るなり。「已に一向に決定せる勝解を得」とは、佛に逢事するに由りて、大乘の法に於て深く信解を生じ、諸の惡友も引いて猶豫せしむるに非ず。此の大乘の多聞等の三因緣に由るが故に、能く善く無量の善根を積集す。是を則ち名けて「善く福智の資糧を備へたる菩薩」と爲す。

論曰 何の處にか能く入る。謂はく卽ち彼の有見の似法似義の意言に於て、大乘の法相の等しく生起する所の勝解行地・見道・修道・究竟道の中なり。一切法に於て唯、識性のみ有ることを聞くに隨つて勝解するが故に、理の如く通達するが故に、一切の障を治するが故に、一切の障を離るるが故に。

釋曰 「何の處にか能く入る」とは、所入の境と及び能入の位とを問ふ。「謂はく卽ち彼の有見に於

【三】法に似るの法は契經等の聖教のこと例せば十地經の如しの意なり。

【四】彼のとは契經等の敎法を指す。

【五】耳識と俱なりとは、今は聖教を聽く事を所依となすが故に耳識といふ。

【六】此に用具とは思修の二慧をいふ、此の用具に似法似義を現し又能く所知の法義に入る作用あり、故に名けて用と爲す、此の用と用具とは必ず能持の作用を待つが故に作者といふ。

卷の第六

入所知相分第四

論曰　是の如く已に所知の相を說けり。所知相に入ることを云何が應に見るべきや。多聞熏習の所依にして阿賴耶識の所攝には非ず。阿賴耶識の種子を成ずるが如く、如理なる作意の所攝にして、法に似、義に似て生じ、所取の事に似たる有見の意言なり。

釋曰　菩薩は是の如き業を修習し已りて、現觀の應に知るべき所の相に入るが如きを今當に顯說すべし。「多聞熏習の所依」とは、謂はく大乘に於て多聞を起し、法義を聞き已つて心心法に熏じ相續する所依なり。其の少聞の者は、此の現觀に入るを得べきこと無きが故なり。薄伽梵は尊者羅怙羅[一]に教授する經に是の如きの言を說くが如し。唯願くは世尊よ、我に現觀を敎へたまへ。世尊告げて曰く、汝已に正法藏を受持せりや。羅怙羅言く。不なり、世尊よ。世尊告げて曰く。汝今且らく應に法藏を受持すべし、と。是の如き等なり。「阿賴耶識の所攝に非ず」とは、謂はく此の所依は最も清淨なる法界より流るるが故に。[二]彼れを對治するが故に、彼の性の攝に非ず。彼れと相違するが故なり。「阿賴耶識の種子を成ずるが如く」とは、阿賴耶識は能く一切の雜染法の因と爲るが如く、此の所依性は能く一切の淸淨法の因と爲るとなり。唯因としての性同じきが故に喩と爲すことを得るのみ、一切の種には非ず。頌に言へる有るが如し、

常に放逸なる　　生盲の自の
樂を觀ぜざる者を　　利益せんと欲するが爲に
諸佛は降靈して世間に現じ　　彼の爲に微妙の法を宣說す、
譬へば無價の末尼寶の如く　　能く衆毒を除くこと不思議なり。

【一】　羅怙羅（Rahula）は釋尊の實子にして出家して十大弟子の一人となる。

【二】　彼れとは皆阿賴耶識を指す。

論曰（頌に）說けるが如し、

　最初の句に由るが故に　　　　　句の別は德の種類なり

　最初の句に由るが故に　　　　　句の別は義の差別なり。

釋曰　此の伽他の中、其の義解し易し。勞して重ねて釋すること無し。

此の中、業の聲　是れ相の別名なり。無量清淨等の三句は、前の「恒に四梵住を修治す」等の三句を釋す。慈悲喜捨の四種の無量を四梵住と名く。此に由りて所有の內德を表知す。淸淨なることを成滿するが故に〔六四〕相の聲を得。五通に遊戲するを、名けて威力と爲し、漏盡智通は是れ解脫の智なれば「大威力」と名く。或は菩薩の增上の神通を取りて大威力と名く。是の如きを亦成滿の相と名く。「證得の功德」とは、謂はく已に證得して現前に自在なり。此れ卽ち「智に依趣することと」を解釋するが故に。各別に內に證するを智に依趣すと名く。唯義に於てのみならず、識に於て依趣せず。寂靜に非ざるが故なり。「正行に住し（若しくは）正行に住せざるとに於て等」とは、是れ「彼れを安立する業」の四句の差別の解釋する所なり。此に由りて利益安樂を增上する意樂を安立す。「此れ」とは卽ち是れ業なり。是の故に說いて「彼れを安立する業」と名く。「衆を御する功德」とは、謂はく持戒と犯戒との有情に於て驅擯し攝受す。俱に其をして不善處を出でて善處に安立せしめんと欲するを「棄捨せず」と名く。「言決定するが故に」とは、謂はく「決定して疑無く教授し教誡する」なり。言威肅なるが故に、言若し定まらざれば卽ち威肅ならず。「諦實を重んずるが故に」とは、謂はく財法の二を攝して合して一種と成し、財法を積集して異の分別無く、平等に分布すること先に許す所の如く、是の如く施與す。現に無き所を除く。頌に言へる有るが如し、

財供養は能く　　衆生をして壽命を盡くさしめ
法供養は能く　　天の寂靜を究竟せしむ。

「大菩提心を恒に首と爲すが故に」とは、是れ「雜染の心無し」の解釋する所なり。菩提心の攝受する所なるに由るが故なり。凡そ所作有るも終いに他の供事等を貪り求めず、唯無上の菩提を證得せんことを求むるのみ。

〔六四〕相の聲を得とは前に成滿の業を釋して成滿の相となせるに應じて、此には相の名を得る所以を明かす。

由るが故に法器を成ぜしめ、愛語に由るが故に法の勝解を得しめ、利行に由るが故に法を勝解するに依りて正行を發起せしめ、同事に由るが故に起す所の行をして轉じて淸淨を得、轉じて復微妙ならしむ。此に由りて攝方便の自性を具す。「持戒と破戒とに於て善友として無二なるが故に、乃至善友に親近するが故に」とは、是れ「加行を成滿する業」の六句の差別の解釋する所なり。此の加行に由りて能く成滿せしむ。是の故に說いて加行を成滿すと名く。此れは卽ち是れ業なり。「善士に親近す等」の六句に由りて經に說く所の八句を釋す。作意の功德と助伴の功德とは、各二を釋するが故に、善の尸羅有るが故に持戒と名け、惡の尸羅有るが故に破戒と名く。此の二種の能く法を說く者に於て、法を聞かんが爲の故に、法を恭敬するが故に、善友の想を起して差別有ること無し。是の故に說いて「善友として無二なり」と言ふ。是の因緣に由りて破戒の者に於ても應に一向に善友に非ずと謂ふべからず。頌に言へる有るが如し、

若し[六一]戒足羸劣なりと雖も　而も能く辯說して多人を利するもの有らば
佛大師の如く應に供養すべし　彼れ善說を愛するが故に相ひ似たり。

「殷重の心を以て正法を聽聞す」とは、謂はく所說の如き廣義等の中に、十六行に由りて應に法を聽聞すべし。「殷重の心を以て阿練若に住す」とは、聚落を遠離すること[六二]倶盧舍を過ぐるを阿練若と名く。中に於て居止するを說いて名けて住と爲す。[六三]應の如くにして住し、慢緩有ること無きを殷重の心と名く。「世の雜事に於て愛樂せず」とは、世間の歌笑舞等の種々の雜事を愛せず、卽ち是れ欲等と相應する不正の尋思を遠離するなり。「作意の功德」とは、聲聞獨覺乘を愛することを捨するが故に。大乘の功德の愛と相應するが故なり。「助伴の功德」とは、惡友を遠くるが故に、善友に近くが故なり。「恒に四梵住を修治するが故に、常に五神通に遊戲するが故に、智に依趣するが故に」とは、是れ「成滿する業」の解釋する所なり。謂はく成滿の相を成滿の業と名く。

【六一】戒足とは戒は實踐躬行なるが故に足に喩へて戒足といふ、相似たりとは佛と相似たりの意。

【六二】倶盧舍(Krośa)。は里程を示すものにして牛又は鼓の聲を聞き得る最大距離なり、或は五百弓なりといふ。

【六三】應の如くとは法と相應しての意。

「一切の威儀の中に於て、恒に菩提心を修治するが故に」とは、是れ「無間に作意する業」の解釋する所なり。普く一切の所作の事の中に於て、無間に菩提心を修治するが故に。所行の淸淨なることは契經の中に說けるが如し、

若し坐を見る時は　是の如き心を發さん。
願くは諸の衆生と　菩提の座に坐せんと。

是の如き等の頌なり。「異熟を悕はずして施を行ずるが故に、乃至、四攝事の攝方便に由るが故に」とは、是れ「勝進行の業」の七句の差別の辨釋する所なり。卽ち六波羅蜜多及び四攝事は所說の如き所治の過等を離れ、[六〇]極喜等の後々の地の中に於て轉じて增勝を得、趣向して成滿す。因を名けて業と爲す。是れ所作なるが故なり。此の中、四種の波羅蜜多は易きが故に釋せず、差別有る者のみ、今當に略釋すべし。「無色界を捨てて靜慮を修するが故に」とは、菩薩は無色界の中に生ぜず、彼に於て能く有情を利樂する事を作すことを見ざるが故なり。又無色の等至に數〻入らず、彼の處を見ず、多くの功德の所依有るが故なり。捨つるとは是れ離るるの義なり。「方便と相應して般若を修す」とは、大悲と相應して妙慧を修習し、能く有情の諸の利樂の事を作す。此れ若し無ければ諸の有情の利益安樂に於て此の事應に無かるべし。專ら此の事を爲して佛果を求むるが故なり。頌に言へる有るが如し、

雙べて慧と悲とを修習し　能く他の利樂を作す
利他行の正道は　一向に菩提に趣く。

「四攝事」とは、布施と愛語と利行と同事となり。布施に由るが故に能く他を攝受し、愛語に由るが故に方便し開辨して爲に法相を說き、利行に由るが故に其の所應に隨つて彼を勸めて善を修せしめ、同事に由るが故に、最後の時に於て彼をして同じく不共の功德を得しむ。或は布施に

【六〇】極喜等とは極喜地は十地の初地なれば其の以後の諸地を指す。

業と名く。「厭倦の意無きが故に」とは、是れ「退轉無き業」の解釋する所なり。所化の有情の諸の邪惡行も退轉すること能はず。利益安樂を增上する意樂と相應する業なるが故に。「義を聞いて厭くこと無きが故に」とは、是れ「攝方便の業」の解釋する所なり。聞くとは、謂はく聞く所の契經等の法にして、汎く聞く所に非ず。義とは、謂はく卽ち彼の所詮の義なり。此の義を聞くに於て常に厭足すること無し。此れは是れ能く有情を攝し成熟する巧方便の性なり。是の故に說いて攝方便の業と名く。義を聞いて足ること無く堪能する所の如きは、[五八]正しき道理に應じて化導するが故なり。「自ら作れる罪に於て深く過を見るが故に、他の作れる罪に於て瞋らずして誨ゆるが故に」とは、是れ「所治を厭惡する業」の解釋する所なり。此の中、「所治」とは、謂はく貪瞋等なり。遠離せしめんと欲するが故に「厭惡」と名く。若し自の罪に於て深く過失を見れば、速疾に厭離して方に能く他の應に作すべからざる所を制す。[五九]言威肅なるが故なり。餘は能く制するに非ず。契經に言へるが如し。

若し自ら邪行に住すれば　便ち他の譏論を受けん
是の人は終いに　他の過失を制止すること能はず。

世俗にも亦言く

若し自ら愆過を犯して　時を經るも觀察せず
理の如く遠離せざれば　慢して其の德を取らず。

若し瞋忿を懷いて他の犯す所を誨ゆれば、利益に非ず、方便に非ざるを以ての故に、言威肅ならず、他轉じて違背し、諸の邪行を起す。頌に言へるが如し、

憐愍すること一子の如く　他の犯す所を誨擧すれば
決定して受持して　後に復當に犯さざらしむべし。

【五八】正しき道理云云とは此の種のものには方便を用ひずとも正しき道理にて化導することを得るの意。

【五九】言威肅なりとは是の如き人の敎誨の言語には權威あり謹肅なるが故に、能く他の惡を制し改悛せしむる力ありとの意。

諸有は自ら量に稱ひ　求むる所の處を勤求し
彼れは劬勞に逮ばざるも　而も能く到る所に到る。

是の如き等の頌は應當に廣說すべし。「慢を摧伏するが故に」とは、是れ「他の請を待たず自然に加行する業」の解釋する所なり。他請はずと雖も、自然に彼れに往いて、爲に正法を說く。「堅牢なる勝れたる意業の故に」とは、是れ「動壞せざる業」の解釋する所なり。生死の衆苦も發心する所を動壞すること能はざるが故なり。「假の憐愍に非ざるが故に、親非親に於て平等の心なるが故に、永く善友と作りて、乃至涅槃を後邊と爲すが故に」とは、是れ「染を求むること無き業」の三種の差別の解釋する所なり。若し染繫有らば、愛染の因に由りて假に憐愍を作して暫時攝受す。若し染繫無ければ假の憐愍に非ず。一切の時に於て恒に捨離せず。若し愛染に依りて而も憐愍を作せば、親非親に於て愛有り恚有りて、心平等ならず。若し染心無ければ則ち二品に於て平等にして轉ず。若し愛染有りて而も憐愍を作せば、但命終に至るまで憐愍隨つて轉ずるのみ。若し愛染無くして憐愍を生ずれば、生生の中に於て憐愍の心は恒常に隨轉す。是の故に菩薩は乃し涅槃に至るまで永く善友と作る。「量に應じて語り、笑を含んで先づ言ふが故に」とは、此れは是れ二種の利益安樂を增上する意樂にして。「相ひ稱ふ語身業」の解釋する所なり。「無限の大悲の故に」とは、是れ「平等なる業」の解釋する所なり。若し唯苦に於てのみ而も大悲を起せば、樂に非ず、捨に非ず、平等に非ざる業なり。一分のみに轉ずるが故に。菩薩の大悲は、樂に於ても、苦に於ても非苦樂に於ても、所攝の有情の皆生死の衆苦に隨逐せらるゝを平等に憐愍して差別有ること無し。是の故に此れを說いて平等なる業と名く。「受くる所の事に於て退弱無きが故に」とは、是れ「下劣無き業」の解釋する所なり。專ら一切の有情を拔濟せんが爲に、猶重擔するが如し。此の重擔を見て、心に怯懼すること無く、勤苦を捨てず、擔ふが如く辦ず。是の故に說いて下劣無き

に六句の差別有り、應に知るべし、謂はく善士に親近するが故に、正法を聽聞するが故に、阿練若に住するが故に、惡の尋思を離るるが故に、作意の功德の故に、此に復二句の差別有り、應に知るべし、助伴の功德の故に、此に復二句の差別有り、應に知るべし。十五には成滿する業、此れに三句の差別有り、應に知るべし、謂はく無量清淨なるが故に、大威力を得るが故に、證得する功德の故に。十六には彼れを安立する業、此に四句の差別有り、應に知るべし、謂はく衆を御する功德の故に、決定して疑無く敎授し敎誡するが故に、財法を一に攝するが故に、雜染の心無きが故に。是の如き諸句は、應に知るべし、皆是れ初句の差別なり。

釋曰 三十二法は十六業の分別に由りて顯示す。彼の業を說くが故なり。「利益と安樂とを增上する意樂の故に」とは、或は利益有るも而も安樂に非ず、貪ること盛なる者の强いて梵行を修するが如し。或は安樂有るも而も利益に非ず、樂欲の者は受用すること種々なるも有罪の境界なるが如し。或は利益亦は是れ安樂なる有り、薄塵の者の樂つて梵行を修するが如し。此の中、菩薩は是の如きの心を作す、云何が皆一切の有情をして當に無上なる利益安樂を得しむべきやと。「意樂」と言ふは、欲と及び勝解とを以て自性と爲す。此の意樂勝れたるが故に增上の意樂と名く。「一切智々に入らしむるが故に」とは、是れ「展轉して加行する業」の解釋する所なり。譬へば一燈を轉じて千燈を然すが如し。此の業に由るが故に、利益安樂を增上する意樂は則ち顯現することを得。是の如く後の一切の句の中に於て、利益安樂を增上する意樂は皆應に配釋すべし。「自ら我れ今何の假智なるかを知るが故に」とは、是れ「顚倒無き業」の解釋する所なり。或は利益を增上する意樂にして而も是れ顚倒なる有り。故に須らく自ら我れ今何の假なるかを知るべし。此の智に由るが故に無倒の業を說く。謂はく我れ唯是の如き聞慧有り、敎證を了知して自ら堪能有り、所應に隨つて無倒の加行を起す。頌に言へる有るが如し、

に、自ら作れる罪に於て深く過を見るが故に、他の作れる罪に於て瞋らずして誨ゆるが故に、一切の威儀の中に於て恒に菩提心を修治するが故に、異熟を悕はずして施を行ずるが故に、一切の有趣に依らずして戒を受持するが故に、諸の有情に於て恚礙有ること無くして忍を行ずるが故に、一切の善法を攝受せんと欲するが爲に勤めて精進するが故に、無色界を捨てて靜慮を修するが故に、方便と相應して般若を修するが故に、四攝事の攝方便に由るが故に、持戒破戒に於て善友として無二なるが故に、慇重の心を以て正法を聽聞するが故に、慇重の心を以て阿練若に住するが故に、世の雜事に於て愛樂せざるが故に、下劣乘に於て曾て欣樂せざるが故に、大乘の中に於て深く功德を見るが故に、惡友を遠離するが故に、善友に親近するが故に、恒に四梵住を修治するが故に、常に五神通に遊戲するが故に、智に依趣するが故に、正行に住し(若しくは)正行に住せざる諸の有情の類に於て棄捨せざるが故に、言決定するが故に、諦實を重んずるが故に、大菩提心を恒に首と爲すが故に、是の如きの諸句は、應に知るべし、皆是れ初句の差別にして謂ゆる一切の有情に於て利益安樂を增上する意樂を起すなり。此の利益安樂を增上する意樂の句に、十六の業の差別有り。應に知るべし。此の中十六の業とは、一には展轉して加行する業、二には顚倒無き業、三には他の請を待たずして自然に加行する業、四には動壞せざる業、五には染を求むること無き業、此れに三句の差別有り、應に知るべし、謂はく染繫無きが故に、恩非恩に於て愛恚無きが故に、生生の中に於て恒に隨轉するが故に。六には相ひ稱ふ語と身との業、此に二句の差別有り、應に知るべし。七には樂に於ても苦に於ても無二の中に於ても平等なる業、八には下劣無き業、九には退轉すること無き業、十には攝方便の業、十一に所治を厭惡する業、此れに二句の差別有り、應に知るべし。十二には無間に作意する業。十三には勝進行の業、此に七句の差別有り、應に知るべし、謂はく六波羅蜜多の正しき加行なるが故に、及び四攝事の正しき加行なるが故なり。十四には加行を成滿する業、此れ

巧方便の智を顯はさんと欲するが爲の故に、次に說いて言く、「一切の行に於て大覺を成就す」と。卽ち是の如き所化の有情の、有能と無能とに依りて善巧差別す。故に次に說いて言く「諸法に於て智に疑惑有ること無し」と。卽ち所化の有情の邪と正と及倶行との中に於て、應現する所の相は分別す可からず。此の事を現はさんが爲の故に、次に說いて言く、「凡そ現ずる所の身は分別す可からず」と。不定種性の聲聞と菩薩とを引發し任持せんが故に大乘を讃す。此の事を顯はさんが爲の故に次に說いて言く「一切の菩薩の等しく求むる所の智なり」と。所化の諸の有情の類は大師の所に於て一切智を疑ひ、一切智に非ずとなすを遮せんが爲の故に、次に說いて言く「佛の無二を得て勝れたる彼岸に住す」と。一切の佛は平等を得たりとの言を聞き、卽ち謂へらく一切は應に同一の性なるべし、と。此の疑を遮せんが爲の故に、次に說いて言く、相ひ間雜せさる如來の解脫の妙智を究竟す」と。一に非ず異に非ず、其の相如何。此の問に答へんが爲の故に次に說いて言く、「中邊無き佛地の平等を證す」と。常無常等は一切皆是れ二邊の相に攝す。云何が相無きや。此の難を避けんが爲の故に次に說いて言く「法界を極む」と。謂はく最も清淨にして諸の戲論を離る。是の法界の相は是の如き種類にして、衆生を利する事は幾くの時を經ると爲すや。故に次に說いて言く「虛空性を盡し、未來際を窮む」と。

論曰 復次に「義處に由る」とは、若し諸の菩薩は三十二法を成就すれば乃ち菩薩と名くと說けるが如し。謂はく一切の有情に於て利益安樂を增上する意樂を起すが故なり。一切智智に入らしむるが故に、自ら我今何の假智なるかを知るが故に、慢を摧伏するが故に、堅牢なる勝れたる意樂の故に、假の憐愍に非ざるが故に、親と非親とに於て平等の心なるが故に、永く善友と作りて乃至涅槃を後邊と爲すが故に、量に應じて語るが故に、笑を含んで先づ言ふが故に、無限の大悲の故に、受くる所の事に於て退弱すること無きが故に、厭倦の意無きが故に、義を聞いて厭くこと無きが故

此(五六)の功德に莊嚴せらるるに由りて最も淸淨なる覺なり。薄伽梵は諸の聲聞、獨覺、菩薩の覺に異りて最勝なることを顯はさんが故なり。云何にして此の最勝の覺を得るや。故に次に說いて「二現行せず」と言ふ。諸の聲聞等は所知の境に於て二の現行有り、謂ゆる正智と不染無智となり。佛には此れ無きが故に智德圓滿す。如來の斷德の圓滿を顯はさんが爲の故に、次に說いて「無相の法に趣く」と言ふ。生死涅槃の相に住せざるが故なり。何の方便を以て此の涅槃を得るや。故に次に說いて「佛の住に住す」と言ふ。薄伽梵は空(五七)と大悲とに於て善く安住するに由るが故に、生死に住せず、涅槃に住せず。是の如き佛の住は餘と共と爲すや不共と爲すや。故に次に說いて言く「一切の佛の平等性を逮得す」と。諸佛の一切の行相は展轉し和雜して住するが故なり。是の如く已に自利圓滿を說けり。次に當に廣く利他圓滿を說くべし。已に一切の化する所の障礙を對治するを得たることを顯はさんが爲の故に、次に說いて言く「無障の處に到る」と。諸魔等有り、能く法を退轉し、能く有情の作す所の義利を轉ず。今此の中に於ては是の事有ること無し。故に次に說いて言く「轉ず可からざる法なり」と。諸の作す所の有情を利益し安樂にする事の中に於て、高下有りて能く拘礙を爲すこと無し。故に次に說いて言く「所行礙ふる無し」と。此の方便に依りて能く有情の諸の饒益の事を作す。故に次に說いて言く「其の安立する所思議すべからず」と。是の如きの加行は諸佛世尊には性平等なりと爲す。各〻差別を爲すは爾らず。何となれば、「三世平等の法性に遊び」三世の諸佛は有情を利するの事皆相ひ似たるが故なり。是の如く作す所の有情を利する事は、一一の諸の世界の中に於て次第に作すと爲すや。爾らず、何となれば、「其の身は一切の世界に流布し」頓に一切の諸の世界の中に於て、現して成佛するが故なり。能く彼々の處に生起する所の疑を斷ずることを顯はさんが爲の故に、次に說いて言く、「一切法に於て智に疑滯無し」と。所化の有情は種性別なるが故に、其の所應の如く方便して化導す。此の

【五六】以下更に別釋す、世親釋には無し。

【五七】空とは般若の智をいふ。

こと」を開示す。謂はく衆生の勝解の差別を觀じ、金銀等の種々の佛土を現じて、相ひ間雜せず。世尊の勝解の現在前する時は衆の樂ふ所に隨ひて、悉く皆顯現して、了知せざること無し。是の故に說いて如來の解脫の妙智を究竟すと名く。此の中、勝解を說いて解脫と爲す。「三種の佛身の方處に分限無き功德」とは、即ち是れ「中邊無き佛地の平等を證すること」を開示す。謂はく世界に中無く邊無きが如く、佛地も亦爾なり。功德の方處に分限有ること無し。或は復世界の方處に邊無く、諸佛の三身は即ち其の中に於て世界の量に稱ひ、平等に遍滿して、法身等しきを以て即ち住す。是の如く諸の世界の中にて餘處に非ざるが故に、或は法身は等しく佛地の中に於て平等に遍滿し、中無く、邊無く、分限有ること無し。此の法身は等しく一切處に遍く、諸の衆生の爲に現して饒益を作す。然も自性には中無く邊無きに非ず。「生死の際を窮め常に現じて一切の有情を利益し安樂にする功德」とは、即ち是れ「法界を極むること」を開示す。謂はく此の法界は最も淸淨なるが故に、能く等流の契經等の法を起し、此の法界を極め當來世の一切の有情に於て、其の所應の如く常に能く現して利益安樂を作す。「無盡の功德」とは即ち是れ「虛空性を盡すこと」を開示す。謂はく彼の虛空は障無きを性と爲す。[五四] 有對の物に於て障へられざるを業と爲す。性とは界なり。自相を持するが故に。諸の[五五]間穴の明闇を性と爲して窮盡するに非ず。是の如きは虛空の自性なり。彼の虛空の邊無く、際無く、盡無く、滅無く、生無く、滅無く、變易有ること無く、一切時に於て現前して一切の質礙を容受するが如く、法身も亦爾なり。常に現前して一切の有情の利樂を作すを相と爲す。一切の界を盡くして遍く衆生の諸の饒益の事を作して休息有ること無し。等とは究竟の功德を等取す。即ち是れ「未來際を窮むること」を開示す。謂はく此の功德は未來際を窮め、常に間斷無く、未來の無際の際を窮めて、佛の功德の永く窮盡すること無きを顯はす、所化の有情盡くること無きが故なり。

【五四】有對の物とは質礙性のものにして空間の一部を塡充する物をいふ。
【五五】間穴とは物の間隙や洞穴の中の空間をいふ。

身は一切世界に流布すること」を開示す。謂はく化する所に隨ひて遍く諸の世界に兩身を示現し、彼れを利樂するが故なり。「疑を斷ずる功德」とは、卽ち是れ「一切の法に於て智に疑滯無きこと」を開示す。一切の境に於て善く決定するが故なり。諸法に於て自ら決定せずして、能く他の疑を決するもの非ず。決定を離れて能く疑を斷ずるもの非らざるが故なり。「種々の行に入らしむる功德」とは、卽ち是れ「一切の行に於て大覺を成就すること」を開示す。「當來の法の妙智を生ずる功德」とは、卽ち是れ「諸法の智に於て疑惑有ること無き」を開示す。謂はく聖聲聞は此れ全く少分の善根も無しと言つて棄捨する者にも、佛薄伽梵は彼の後時に善法の當に生ずべきを知る。彼れ餘生の微少なる善根の種子の隨逐する所なるを現に證知するが故なり。「其の勝解の如く示現する功德」とは、卽ち是れ「凡そ現ずる所の身は分別す可からざること」を開示す。謂はく有情の種々なる勝解に隨ひて、金色等を現ずるなり。此の身を現ずと雖も而も分別無きこと、末尼珠及び簫笛等の如し。廣く說くことは彼の如來の密經の如し。「無量の所依にて有情を調伏する加行の功德」とは、卽ち是れ「一切の菩薩の等しく求むる所の智」を開示す。謂はく無量なる菩薩の所依に由りて、諸の有情を調伏せんと欲するが爲の故なり。加行を發起し、佛を增上力とし、聞法を先と爲して、妙智を獲得し、異類の菩薩に攝受し付囑し、展轉相續して無間に而も轉ず。此に由りて一切の菩薩の等しく求むる所の智を證得す。「平等の法身と波羅蜜多の成滿する功德」とは、卽ち是れ「佛の無二を得て勝れたる彼岸に住すること」を開示す。謂はく無二の故に名けて平等と爲す。平等なる法身に依りて波羅蜜多の果位を成滿するが故なり。或は平等とは、減することも無く增すことも無く、法身の中に於て波羅蜜多は一切成滿す。其の中、或は增し或は減すること有る無し。彼の菩薩地の中に於て、波羅蜜多の增有り減有るが如きに非ず。「其の勝解に隨ひて差別の佛土を示現する功德」とは、卽ち是れ「相ひ間雜せざる如來の解脫の妙智を究竟する

とに差別無き功德」とは、卽ち是れ「一切の佛の平等性を逮得すること」を開示す。所依に差別無しとは、一切皆淸淨智に依るが故なり。意樂に差別無しとは、一切皆一切の有情を利益し安樂にする勝れたる意樂有るが故なり。作業に差別無しとは、一切皆受用、變化の他を利する事を作すが故。聲聞等の如く唯所依有るのみに非ざるが故なり。「一切の障を對治することを修する功德」とは、卽ち是れ「無障の處に到ること」を開示す。謂はく已に一切の煩惱及び所知障を對治する聖道を串習し、一切種智は定んで自在の性にして、已に永く一切の習氣を離れたる所依の趣處に到る。「一切の外道を降伏する功德」とは、卽ち是れ「轉ずべからざる法」を開示す。謂はく敎證の二法は皆他の爲に能く動轉せられず、餘法の此れに勝過するもの有ること無きが故なり。「世間に生在して世法の爲に礙へられざる功德」とは、卽ち是れ「所行礙ふる無き」を開示す。謂はく若し中に於て常に遊履する所を說いて所行と名く。世間に行ずと雖も、而も其の中に於て利衰等の愛恚の世法の能く拘礙する所に非ず。頌に言へる有るが如し、

諸佛は常に世間に遊び、　一切の有情の類を利益し
[五二]八法の熱風、邪分別も　能く傾動せず拘礙せず。

「正法を安立する功德」とは、卽ち是れ「其の安立する所思議すべからざる」を開示す。謂はく契經等の十二分敎を安立する所と名く。彼々の自相共相を安立するが故なり。是の如き安立は諸の愚夫の覺の所行に非ざるが故に、出世間なるが故に、不可思議なり。此の安立する所不可思議なるは、卽ち是れ功德なること前に配屬するが如し。「授記する功德」とは、卽ち是れ「三世平等の法性に遊ぶこと」を開示す。謂はく三世の平等の法性に於て、能く遍く遊涉し、以て三世の平等性の中に於て、能く隨つて解了し、過去に未來に[五三]曾て當に轉ずべき事を、皆現在の如く而も授記するが故なり。「一切の世界に於て受用と變化との身を示現する功德」とは、此れ卽ち「其の

【五二】八法は世親釋に註せり、參照。

【五三】曾ては過去に、當には未來に照應す。

限無き功德、生死の際を窮め常に現じて一切の有情を利益し安樂にする功德、無盡の功德等なり。

釋曰　「最も清淨なる覺」とは、此れは是れ初句にして、所餘の句に由りて、其の義を開顯するなり。是の如きを乃ち善く法性を説くと名く。謂はく多くの德を以て一德を辯説す。「謂はく所知に於て一向に障無く轉ずる功德」とは、此れ即ち[四七]「二の現行せざる」ことを開示す。謂はく佛の一向に障礙無き智なり。一切の事の品類の差別に於て、著無く礙無きが故に、聲聞等の智の如く、有る處には障有り、有る處には障無きの二種、或は二處に現行するに非ず。此の中には是の如く説く所の二種の現行有ること無し。是の故に説いて「二現行せず」と名く。此に由るが故に「最も清淨なる覺」と名く。大功能有る[四八]智斷滿ずるが故なり。後の諸句の中、皆應に是の如く互に相ひ配屬すべし。「有無に於て二相無き眞如の最も清淨なるに能く入る功德」とは、此れ即ち「無相の法に趣くこと」を開示す。謂はく此の眞如には圓成實相有るも、遍計所執相無し。此の道理に由りて二相無しと名く。無相有ること無きは是れ實有なるが故なり。有相有ること無きは所執無きが故なり。「最勝清淨なるに能く入る功德」とは、謂はく即ち眞如は最勝清淨にして、一切法の中に最も第一なるが故に、一切の客塵の垢を遠離するが故に。此の眞如に於て自ら既に能く入り、亦他をして入らしむ。是の故に説いて最勝清淨なるに能く入る功德と爲す。此に由りて前の如く應に(當に)配屬すべし。自ら既に清淨にして、亦他をして淨ならしむるが故なり。「無功用にして佛事し休息せずして住する功德」とは、此れ即ち「佛の住に住する」ことを開示す。謂はく諸の佛事に於て功用を作さず、有情等の中にて能く間斷無く、其の所應に隨ひて、恒に正に聖と、天と、梵との住に安住し、聲聞の如く、要ず功用を作して、方に能く有情を利する事を成辦するに非ず、外道の住する所有りと雖も而も殊勝に非ざるが如きに非ず。天住は即ち是れ[四九]四種の靜慮、梵住は即ち是れ[五〇]悲等の無量、聖住は即ち是れ[五一]空、無相等なり。「法身の中に於て所依と意樂と作事

【四七】二の現行とは煩惱障、所知障の二障の現行をいふ。

【四八】智斷滿ずとは眞智を以て一切の惑障を斷盡すること圓滿すとの意。

【四九】色界四禪天なり。

【五〇】慈悲喜捨の四無量心なり。

【五一】空、無相、無作の三三昧なり。

釋曰　是の如く說者の意趣を觀ぜずして諸義を釋し已れり。今當に說者の意趣に隨順して說の語義を釋すべし。「或は德處に由り或は義處に由る」とは、謂はく德の意趣に由り、義の意趣に由るなり。已に在ることを得て已に圓滿し饒益するが故に名けて「德」と爲し。未だ在ることを得ざるも、已に隨順し趣求するが故に名けて「義」と爲す。

論曰　「德處に由る」とは、謂はく佛の功德を說いて最も清淨なる覺とし、二現行せず、無相の法に趣き、佛の住に住し、一切の佛の平等性を逮得し、無障の處に到り、轉ずべからざる法にして、所行礙ふる無く、其の安立する所、思議すべからず、三世平等の法性に遊び、其の身は一切の世界に流布し、一切法に於て智に凝滯無く、一切の行に於て大覺を成就し、諸法の智に於て疑惑有ること無し、凡そ現ずる所の身は分別すべからず、一切の菩薩の等しく求むる所の智なり。佛の無二を得て、勝れたる彼岸に住し、相ひ間雜せざる如來の解脫妙智を究竟し、中邊無き佛地の平等を證し、法界を極め、虛空性を盡くし、未來際を窮むと（いふ）。最も清淨なる覺とは、應に知るべし、此の句を所餘の句に由りて分別し顯示するなり。是の如くして乃ち法性を善說することを成ず。最も清淨なる覺」とは、謂はく佛世尊の最も清淨なる覺なり。應に知るべし、是れ佛の二十一種の功德の所攝なり。謂はく所知に於て一向に障り無く轉ずる功德、有無に於て二相無き眞如の最勝清淨なるに能く入る功德、無功用にして佛事し休息せずして住する功德、法身の中の所依と意樂と作業とに於て差別無き功德、一切の障を對治することを修する功德、一切の外道を降伏する功德、世間に生在するも世法の爲に礙へられざる功德、正法を安立する功德、授記する功德、一切の世界に於て受用と變化との身を示現する功德、疑を斷ずる功德、種々の行に入らしむる功德、當來に法の妙智を生ずる功德、其の勝解の如く示現する功德、無量の所依にて有情を調伏する加行の功德、平等の法身の波羅蜜多を成滿する功德、其の勝解に隨つて差別の佛土を示現する功德、三種の佛身の方處に分

見るとは、同時なるに由る。謂はく依他起の自性の中に於て遍計所執無きが故に、圓成實有るが故に。此の轉ずる時に於て、若し彼れを得れば卽ち此れを得ず。若し此を得れば卽ち彼を得ず。(頌に)說けるが如し、

依他に所執無く　　成實は中に於て有り
故に得と及び不得と　　其の中に二は平等なり。

釋曰　「相有り見有る識を自性と爲す」とは、此れ先に說けるが如し。相識の自性とは、謂はく色識等及び眼識等なり。見識の自性とは、謂はく根識の識等なり。「又彼は依處を以て相と爲す」とは、謂はく依他起相は是れ二の自性の所依處なるが故なり。「遍計所執を相と爲す」とは、卽ち是れ遍計所執の自性なり。「法性を相と爲す」とは、謂はく卽ち此の淨分に於て安立するなり。此の義を顯はさんが爲に、半頌を說いて言く、「有相有見に從ひ、應に彼の三相を知るべし」と。「未だ見ざると、已に眞を見るとは同時なり」とは、謂はく若し爾の時未だ眞を見ざる者は、依他起の自性の中に於て圓成實は無く、遍計所執は有りと見る。卽ち此の時に於て、已に眞を見る者は遍計所執は無く、圓成實は有りと見るなり。何の處に誰か無なるや、「依他には所執無く」とは、依他起の中に於て遍計所執無きが故なり。中に於て何か有なるや。「成實は中に於て有り」とは、依他起の中に於て圓成實有るが故なり。此の中、妄見の愚夫は顚倒の見に由りて、非有を有と見、有を非有と見るも、眞見の聖者は倒見無きに由りて有を見て有と爲し、無を見て無と爲す。此の義を顯はさんが爲に、下の半頌に言く、

故に得と及び不得と　　其の中二は平等なり。

論曰　語義を說くとは、謂はく先に初句を說きて、後に餘句を以て分別し顯示するなり。或は德處に由り、或は義處に由る。

されて」とは、有情を化せんが爲に精進劬勞して疲倦する所なるが故なり。頌に言へる有るが如し、

　生死に處して久しく惱むは、　但大悲に由りて是の如きのみ等と。

「最上の菩提を得」とは、是れ諸佛の三菩提の義を得るなり。

[四六]**論曰**　若し大乘法の釋を造らんと欲するもの有らば、略して三相に由りて應に其の釋を造るべし。一には緣起を說くことに由り、二には緣によりて生ずる所の法相を說くことに由り、三には語義を說くことに由るべし。

釋曰　諸の釋を造る者を開曉せんと欲するが爲に、道理を解釋するが故に、「略して三相に由る等」の言を說く。

論曰　此の中、緣起を說くとは(頌)に說けるが如し、

　言熏習より生ずる所の　　諸法は此れ彼に依る
　異熟と轉識とは　　更互(たがひ)に緣と爲りて生ず。

釋曰　是の如き緣起と及び緣生の法とは、所知依の處に已に其の相を辨ぜり。已に三種の緣起の相を解せるが故に、今此の中に於ては復略して阿賴耶識と其の轉識とは互に因果と爲ることを顯示す。故に、伽他の中に「言熏習の生ずる所等」の言を說く。

論曰　復次に、彼の轉識の相法は、相有り見有る識を自性と爲す。又彼は依處を以て相と爲し、遍計所執を相と爲し、法性を相と爲す。此に由りて三自性の相を顯示す。頌に說けるが如し、

　有相有見に從ひ　　應に彼の三相を知るべし。

復次に云何が應に彼の相を釋すべきや。謂はく遍計所執の相は依他起相の中に於て實に所有無し。圓成實相は中に於て實に有り。此の二種の非有と有と、非得と得と、未だ(眞を)見ざると已に眞を

【四六】大正藏經に論曰を切曰となせり、これ先の切と論の誤植に本づくものなるべし。

相ひ似たるに由るが故に、「我昔曾て彼の時に於て等」と說く。[四〇]意緣の五に相ひ似たる性有るが如きにより、是の如きの言を作す、彼は卽ち是れ我なりと。然も昔時の[四一]毘鉢尸佛は卽ち今の世尊釋迦牟尼なるに非ず。「別時意趣」とは、謂はく懈怠して法に於て精勤して學ぶこと能はざる者を觀ずるが故に、是の言を說く、「若し多寶如來の名を誦する者は、便ち決定を得ん」と。唯發願するのみに由りて便ち極樂世界に往生することを得。此の意は先時の善根を長養すればなり。[四二]世間に、但一錢に由りて而も千を得と說くが如し。「別義意趣」とは、謂はく[四三]證相大乘の法義と教相大乘の法義と甚だ差別有り。此の意趣に由りて是の如きの言を作す、「若し已に爾所の殑伽沙等の佛に逢事すれば、大乘の法に於て方に能く義を解せん」と。極めて懸遠なるが故に、大乘の法に於て聖者の自ら內に證する所を簡び取り言に隨つて解了する所の義を簡び去る。「補特伽羅の意樂の意趣」とは、先には慳貪の爲に布施を讚歎し、後には施を樂ふ爲に布施を毀呰す。先には戒を犯す爲に尸羅を讚歎し、後には戒を持する爲に尸羅を毀呰す。勝品の善を修せしめんと欲するが爲の故なり。「一分修」とは、謂はく世間の修なり。「入らしむる秘密」とは、謂はく有る處には補特伽羅及び一切法の自性と差別とを說くは世俗諦の理に悟入せしめんが爲なり。聲聞乘の中に、化生の諸の有情等有りと說くが如き、大乘の中に、[四四]斷を怖るる諸の有情を化せんが爲の故に、心常なり等と說くが如し。「相秘密」とは、[四五]所知の相に悟入せしめんが爲の故なり。「對治秘密」とは、謂はく所治の貪等を對治せんが爲に、諸行を八萬四千に差別す。「轉變秘密」とは、謂はく字義に於て轉變する差別なり。「不堅を覺るを堅と爲す」とは、剛强流散なるを說いて名けて堅と爲す。此の堅に非ざるが故に說いて不堅と名く。卽ち是れ調柔にして散亂無き定なり。卽ち此の中に於て堅固の慧を起して彼れを覺るを堅と爲す。「善く顚倒に住し」とは、謂はく四顚倒に於て善く能く安住し、是の顚倒を知り決定して動ずること無きなり。「極煩惱に惱ま

【四〇】意緣とは意趣と因緣の義か、或は意趣の誤傳なるが、更に檢討を要す。

【四一】毘鉢尸佛(Vipaśyin)は論本の勝觀正等覺者の梵名なり。

【四二】此の解釋は世親釋に明了なり、參照。

【四三】證相大乘と教相大乘とは大乘に證入すると大乘の教義を解するとの相違なり、此の段も世親釋は更に理解し易し、參照。

【四四】斷を怖るゝとは空無の斷見に陷る恐れあるもの。

【四五】所知の相とは阿賴耶識の三性をいふ。

し、此の中、後々の諸句は前々の句に依りて解釋することを得。是の如く四種の方便と勝行と隨順すれば、能く菩薩の現觀に入る。譬へば聲聞の[三八]無常等の行の如し。

〔四意四祕章　第四〕

論曰　復四種の意趣と四種の祕密と有り、一切の佛の言なり、應に隨つて決了すべし。四の意趣とは、一に平等意趣、謂はく說いて言ふが如し、我昔曾て彼の時に於て彼の分は即ち勝觀正等覺者と名くと。二には別時意趣。謂はく說いて言ふが如し、若し多寶如來の名を誦する者は、便ち無上正等菩提に於て已に決定することを得と。又說いて言ふが如し、唯發願するのみに由りて、便ち極樂世界に往生することを得と。三には別義意趣。謂はく說いて言ふが如し、若し已に爾所の殑伽沙等の佛に逢事すれば、大乘の法に於て方に能く義を解せんと。四には補特伽羅の意樂の意趣。謂はく一の補特伽羅の爲に先に布施を讚し、後には還つて毀呰するが如し。布施に於けるが如く、是の如く尸羅及び一分修も、當に知るべし亦爾なり。是の如きを名けて四種の意趣と爲す。四の祕密とは、一には入らしむる祕密、謂はく聲聞乘の中、或は大乘の中にて世俗諦の理に依りて補特伽羅有り、及び諸法の自性の差別有りと說く。二には相の祕密、謂はく是の處に於て諸法の相を說いて三自性を顯はす。三には對治の祕密、謂はく是の處に於て行對治は八萬四千なることを說く。四には轉變の祕密、謂はく是の處に於て其の別義なるを以て諸言、諸字は即ち別義を顯はす。頌に言へる有るが如し、

　不堅を覺るを堅と爲し　善く顚倒に住し
　極煩惱に惱まされて　最上の菩提を得。

釋曰　遠く他を觀じて攝受を作さんと欲するを、名けて「意趣」と爲し、近く他を觀じて悟入せしめんと欲するを、說いて「祕密」と名く。「平等意趣」とは、謂はく、[三九]一切の佛は、資糧等互に

【三八】無常等の如しとは小乘の四念處觀を以て例示す。

【三九】大正藏經には一論となすは一切の誤植なるべし。

說く。[三〇]長行の結句は易すく知る可きが故なり。顯現する所の如く性有るに非ざるが故に「法に非ず」而も顯現するが故に「非法に非ず」此の非法と、非々法とに由るが故に「無二の義」を說く。是の如く應に釋すべし。「一分に依りて開顯すれば、或は有、或は非有なり」とは、顯現する所の如く、是の如く有ならざるも而も顯現する有り、故に「二分に依りて說いて言へば有に非ず亦非有に非ず」。無二の性なるが故に、前の如く應に知るべし。「顯現するが如く有に非ず」とは、我性と法性との所取能取は、是の如き等の體は皆性有ること無し。[三一]量の所證に非らざるが故に說いて無と爲す。「是の如き顯現に由りて」とは、薩迦耶見の如きは實には我我所無きも、但無始の時より來、戲論の熏習の轉變の力に由るが故に、有に似て顯現す、此れ亦是の如くなるが故に說いて有と爲す。[三二]靜慮門に由りて無二の聲轉ず。異類の如きには非ず。若し爾らば[三三]離繫の論に同じからずと爲すや。豈相ひ似ること有らんや。彼れは邪見に依り、此れは正見に依る。彼れは[三四]非と一と互に相違する性を執し、但一切の所見に違ふことを欲せざるが故に無二を說く。此の佛法の中の依他起性は二性の中に於て定んで一に屬せざるが故に無二なりと說く。是の故に彼れと此れとは其の理極めて遠し。「自然と自體とに無にして」とは、衆緣に依るが故に自然に無しと名け、前に生ぜし刹那は已に[三五]故にして新に非ざるを自體無しと名く。「自性堅住せず」とは、一刹那の後に性滅壞するが故なり。此の無自性の理は[三六]聲聞に共す。「執取するが如く有ならざるが故に自性無しと許す」とは、此れは是れ[三七]不共の無自性の理なり。有るが顚倒して我等有りと執するが如く、是の如く愚夫の執する所の諸法は都て所有無きが故に、大乘の中には一切の法は皆無自性なりと許す。「無性に由るが故に成ず」とは、無自性に由りて無生滅等の道理成立すとなり。「後々の所依止となる」とは、無自性に由るが故に生有ること無く、生無きに由るが故に、即滅有ること無く、生滅無きが故に本來寂靜なり。本より寂靜なるが故に自性涅槃なり。應に知るべ

【三〇】長行の結句とは前の散文の結句にして、即ち三自性に由りて云云といふを指す、これ頌文を擧ぐる所以を顯はす。

【三一】量の所證云云とは現量比量の如き方法に由りて證明し能はざる所なればとの意なるべし。

【三二】靜慮門に依りて云云とは有に非ず、非有に非ず無二なりといふは、是れ禪定三昧の境智にして、其の他の事よりは得られずとの意なり。

【三三】離繫の論とは尼乾子外道の論なり。

【三四】非と一とは非一と一、即ち異と同となり。

【三五】故にして新に非ずとは故は舊故の義。

【三六】聲聞に共すとは生滅無常に由る無自性は小乘の聲聞の說と共通すとの意。

【三七】不共の無自性とは今說く所の所執に由る無自性は大乘特有の說なりとの意。

等の差別は一切の諸佛の密意の語言にして、三自性に由りて應に隨つて決了すべきこと、前に說ける常無常等の門の如くなるべし。此の中に多くの頌有り、

法は實には有ならざるが如く　現じて一種に非ざるが如く
法に非ず非法に非ず　故に無二の義を說く。
一分に依りて開顯すれば　或は有り或は非有なり
二分に依りて說いて言へば　有に非ず非有に非ず。
顯現するが如く有なるに非ず　是の故に說いて無と爲す
是の如く顯現するに由りて　是の故に說いて有と爲す。
自然と自體とに無にして　自性堅住せず
執取するが如く有ならざるが故に　自性無しと許す。
無性に由るが故に成じ　後後の所依止となり
生も滅も無く本より寂として　自性般涅槃なり。

釋曰　「世尊は有る處に一切法は常なりと說く等」とは、謂はく依他起の法性眞如は體是れ常住なり、遍計所執の自性分の邊には體是れ無常なり。[二九] 此れ常に無なるが故に。此の性常に無なるが故に無常と名け、有に非らずして生滅するが故に無常と名く。二分の所依を說いて常に非ず亦無常に非ずと爲す。是れ無二の性なり。「樂」とは、卽ち是れ圓成實の分にして、「苦」とは、卽ち是れ遍計所執の分、「無二」とは是れ依他起の分なり。是の如く淨と不淨と、空と不空と、我と無我と、寂靜と不寂靜と、有自性と無自性と、生と不生と、滅と不滅と、本來寂靜と本來寂靜に非ずと、自性涅槃と自性涅槃に非ずと、生死と涅槃と、無二等は、其の所應の如く皆三性に依りて以て差別を釋す。有情をして受持し易からしめんが爲の故に、復「法は實には有ならざるが如し等」と

【二九】此れとは遍計所執をいひ、次の此の性とは所執自體をいふ。

し、所有の眞實なる圓成實の自性は顯現せず。此の識若し無分別智の火の爲に燒かるる時は、此の識の中に於て所有の眞實なる圓成實の自性は顯現し、所有の虛妄なる遍計所執の自性は顯現せず。是の故に此の虛妄の分別識なる依他起の自性には、彼の二分有ること、金土の藏の中に有する所の地界の如し。

釋曰　金土の藏の中の三法は三自性に喩ふるを得可し。「地界」とは、堅鞕を用つて性と爲し、「藏」とは、卽ち是れ金と土の[二六]種子なり。「金土」とは、是れ[二七]顯色形色なり。其の次第の如く[二八]大種の所造を、三法の體と爲す。「土の顯現する時は虛妄にして顯現す」とは、彼の性に非ざるが故に。「金の顯現する時は眞實にして顯現す」とは、是れ彼の性の故なり。「是の故に地界は是れ彼の二分なり」とは、是れ彼の土と金との二種の分なるが故なり。地界は則ち依他起性に喩へ、土は遍計所執の自性に喩へ、金は則ち圓成實性に喩ふ。「識も亦是の如し」とは、法を以て喩に合す。唯識の性は是れ依他起にして、遍計所執と及び圓成實とは是れ此の性分なるに由る。無分別智の火に燒かるる時は、眞實と虛妄との二種の性分は其の次第の如く、一は則ち顯現し、一は顯現せず。

論曰　世尊は有る處には一切法は常なりと說き、有る處には一切法は無常なりと說き、有る處には一切法は常に非ず、無常に非ず、と說けり。何の密意に依つて是の如きの說を作すや。謂はく依他起の自性は圓成實性の分に由れば是れ常なり。遍計所執性の分に由れば是れ無常なり。彼の二分に由れば、常に非ず、無常に非ず。此の密意に依りて是の如き說を作す。常と無常と無二との如く、是の如く苦と樂と無二と、淨と不淨と無二と、空と不空と無二と、我と無我と無二と、寂靜と不寂靜と無二と、有自性と無自性と無二と、生と不生と無二と、滅と不滅と無二と、本來寂靜と本來寂靜に非ずと無二と、自性涅槃と自性涅槃に非ずと無二と、生死と涅槃と無二とも亦爾なり。是の如き

[二六]　種子とは此には金土の所依の因なるをいふ、常にいふ唯識學派の種子にはあらず。

[二七]　顯色形色とは靑黃等の色相の見るべきものを顯色といひ、長短等の形相の見るべきものを形色といふ。

[二八]　大種の所造とは堅濕煖動を性質となす地水火風を四大種といふ、萬有を構成する要素なれば大種の所造といへり。

正しく解了す。

論曰　世尊は何の密意に依つて梵問經の中に於て如來は生死を得ず、涅槃を得ず、と說きしや。依他起の自性の中に於ては、遍計所執の自性と及び圓成實の自性とに依りて生死と涅槃とに差別無しとの密意なり。何を以ての故に、即ち此の依他起の自性は遍計所執分に由り生死を成じ、圓成實分に由りて涅槃を成ずるが故なり。

釋曰　「世尊は何の密意に依つて、乃至差別無しとの密意なり」とは、若くは問ひ若くは答ふる兩段の本文にして其の義了じ易ければ重ねて釋することを須ひず。「何を以ての故」の下は、上の生死涅槃差別無しとの密意を釋す。若し遍計を遣りて永へに無ならば、復餘に生死を得ず。此れを得ざる時、便ち寂滅涅槃を觀見することを得。然るに此の中、一に[二三]偏しては無差別の性を成ぜざることを說くは、愚夫と[二四]定性のものとの差別、顚倒の執著を遣らんが爲なり。亦即ち依他起の義は二の自性に依つて[二五]決定せざることを顯示せんが故なり。

論曰　阿毘達磨大乘經の中に薄伽梵說けり、法に三種有り、一には雜染分、二には清淨分、三には彼の二分なりと。何の密意に依りて是の如き說を作せるや。依他起の自性の中に於て、遍計所執の自性は是れ雜染分にして、圓成實の自性は是れ清淨分なり。即ち依他起は是れ彼の二分なり。此の密意に依りて是の如き說を作す。此の義の中に於て何の喩を以て顯はすや。金土の藏を以て喩と爲して顯示す。譬へば世間の金土の藏の中に三法の得べきが如し。一には地界、二には土、三には金なり。地界の中に於て、土は實に有なるに非ざるも而も現に得べく、金は是れ實に有なるも而も得べからず。火にて燒錬する時は土相は現ぜずして金相顯現す。又此の地界は土の顯現する時は虛妄にして顯現し、金の顯現する時は眞實にして顯現す。是の故に地界は是れ彼の二分なり。識も亦是の如し、無分別智の火の未だ燒かざる時は、此の識の中に於て所有の虛妄なる遍計所執の自性顯現

引地は水月の喩、無顚倒は變化の喩なり、倘世親釋に異解あり、參照。

【二三】一に偏してとは生死と涅槃と孰れか一方に偏しては無差別の義は成立せずとの意。

【二四】定性のものとは一向に生死を畏れて之を脫せんことを求むる定性二乘を指す。

【二五】決定せずとは遍計、圓成のいづれかの一方なりと決定する能はずとの意。

も[一三]水覺有るが如く、外の器世間も亦復是の如し。又夢中に睡眠の起す所の心心法の聚は、極めて味略を成じ、[一四]女等の種々の境義無しと雖も、愛非愛の境界の受用有るが如し。覺時も亦爾なり。又影像は鏡等の中に於て、還つて本質を見、而も謂へらく我れ今別に影像を見ると、而も此の影像は實に所有無きが如し。非等引地の善惡の思業は本質を緣と爲して影像の果を生ずるも亦復是の如し。又光影は、[一五]影を弄する者の、其の光を映蔽するに由りて、種々の影を起すが如し。定等の地の中に種々の諸識は實の義無きに於て差別して轉ず。又谷響は、實には聲有ること無きも、而も聽者をして多種の言說の境界を聞くに似せしむるが如く、種々の言說の語業も亦爾なり。又水月は水の潤滑澄淸の性に由るが故に、月有ること無しと雖も而も月は取る可きが如く、實義の境を緣じて熏修する所の[一六]潤淸を性と爲す諸の三摩地と相應する意も亦復是の如し。所緣の實義の境界無しと雖も而か有に似て轉ず。此れと影像と何の差別有りや。定と不定との地にて差別有り。有るは說く、面等は衆緣和合して、水鏡等の中に面等の影生じ、分明に取る可し。衆の彩力にて頗胝迦等に種々の色の生ずるが如し、爾らずと爲すや。所取の差別するは水鏡を離るるも月面等の影は分明に得可きが如く、頗胝迦等の所現の衆色は則ち是の如くならず。故に[一七]同喩に非ず。又[一八]我等は水等有りと許すに非ず。[一九]種々の實義の有法成ぜず、故に[二〇]比量に非ず。又變化は此の變化に依りて說いて變化と名く。實には有ること無しと雖も而も能化の者には顚倒有ること無く、所化の事に於て勤めて功用を作すが如し。菩薩も亦爾なり。遍計所執の有情は無しと雖も、依他起の諸の有情の類に於て哀愍に由るが故に、而も彼々の諸の生ずる所の處に往いて自體を攝受す。應に知るべし、[二一]此の中には、唯爾所の虛妄の疑事、謂ゆる內と外と、受用の差別と、身業と語業と三種の意業と有り、非等引地、若くは等引地、若くは無顚倒なり。此の[二二]八事に於て諸佛世尊は八種の喩を說く。諸の有智の者は是の所說を聞いて定と不定との二地の義の中に於て能く

【一三】水覺とは水なりとの知覺の意。
【一四】女等とは夢中所現の境をいふ。
【一五】影を弄する者とは光を利用して種々の影坊師を作る者。
【一六】潤淸は諸本皆潤漬となすも前に說く潤滑澄淸の略なれば潤淸なるべし。
【一七】同喩とは因明の宗、因、喩三支の論式の第三支喩に於て宗の義を順證して肯定的なるを同喩といふ、之に反して宗の義を逆證して否定的なるを異喩と名く。
【一八】我等とは我執法執の我法を指す、水等とは今の喩なる水月影像等なり。
【一九】種々の實義とは譬喩に依つて論證せらるべき實義の意、卽ち我等なり有法とは前に已に註せり。
【二〇】比量とは廣義には正しき因明論式に依る推理論證をいひ、狹義には論理にいふ比論に相當す。
【二一】此の中とは此の喩の中なり。
【二二】此の八事を八喩に配するに內とは幻事の喩、外とは陽焰の喩、受用の差別は夢境の喩、身業は光影の喩、語業は谷響の喩、三種の意業の中、初の非等引地は影像の喩、等

如を證得する清淨なる道の義なり。「菩提」と言ふは、永く煩惱及び所知障を斷じ、垢無く礙無き智を自性と爲す。彼れに隨順するが故に說いて名けて分と爲す。卽ち[一]念住等の三十七品と、及び十種の波羅蜜多となり。波羅蜜多は後に當に廣說すべし。等とは一切の聖道を等取す。「此れを生ずる境の清淨」とは、此れ卽ち此の前の菩提分等を說く所の聖道なり。餘文と二頌とは其の義了じ易ければ重ねて釋することを須ひず。

論曰 復次に何の緣にて經の所說の如く、依他起の自性に於て幻等の喩を說くや。依他起の自性に於て、他の虛妄の疑を除かんが爲の故なり。他のもの復云何が依他起の自性に於て虛妄の疑有りや。他のもの此に於て是の如き疑有るに由る。云何が實に義有ること無きに而も所行の境界を成ずるやと。此の疑を除かんが爲に幻事の喩を說く。云何が義無きに心心法轉ずるやと。此の疑を除かんが爲に陽炎の喩を說く。云何が義無きに愛非愛の受用の差別有りやと。此の疑を除かんが爲に所夢の喩を說く。云何が義無きに淨不淨の業と愛非愛の果と差別して生ずるやと。此の疑を除かんが爲に影像の喩を說く。云何が義無きに種々の識轉ずるやと。此の疑を除かんが爲に光影の喩を說く。云何が義無きに種々の戲論言說は而も轉ずるや、と。此の疑を除かんが爲に谷響の喩を說く。云何が義無きに而かも實に諸の三摩地所行の境を取り轉ずること有りやと。此の疑を除かんが爲に水月の喩を說く。云何が義無きに諸の菩薩は無顚倒の心にて有情の諸の利樂の事を辦ぜんが爲の故に受生を思ふこと有りやと。此の疑を除かんが爲に變化の喩を說く。

釋曰 「虛妄の疑」とは、虛妄の義に於て起す所の諸疑なり。云何が義無きに遍く計度する時、分明に顯現して所行の境に似るや。此の疑を遮せんが爲に幻事の喩を說く。如實には象無きも而も幻[二]象の所緣の境界有り、依他起性も亦復是の如し、色等の所緣の六處無しと雖も、遍く計度する時、所緣の六處有るに似て、顯現す。又陽焰の飄動する時に於ては、實に水有ること無きも而

【一】四念住、四正斷等。

【二】象は像の義。

一には自性清淨、謂はく眞如・空・實際・無相・勝義・法界なり。二には離垢清淨、謂はく即ち此れ一切の障垢を離れたるなり。三には此れを得る道の清淨、謂はく一切の菩提分法、波羅蜜多等なり。四には此れを生ずる境の清淨、謂はく諸の大乘妙正の法教なり。此の法教は清淨なる縁に由るが故に、遍計所執の自性に非ず、最淨の法界より等流せる性なるが故に、依他起の自性に非ず。是の如きの四法に一切の清淨法を總攝し盡す。此の中に二頌有り、

幻等は生を說き　無と說くは計所執なり
若くは四の清淨を說いて　是を圓成實と謂ふ
自性と離垢と　清淨の道と所緣とにして
一切の清淨なる法は　皆四相の所攝なり。

釋曰　大乘教の中に、[九]方便して三種の自性を說かんと欲す。故に先づ問を爲す。「應に知るべし異門に所有無しと說けり」とは、遍計所執は、即ち是れ異門なりと說く。所有無しと說くは、畢竟して無なるが故なり。「依他起性は、幻、焰等の如し」との義の差別は次後に當に說くべし。「自性清淨」とは、謂はく此の自性は異生位の中にも亦是れ清淨なり。「謂はく眞如」とは、性に變無きが故に。是れ一切法に平等なる共相なり。即ち此に由るが故に聖教の中には一切の有情に如來藏有りと說く。「空」とは、謂はく依他起の上に於て遍計所執は永へに顯るる所無き眞實の理性なり。「實際」と言ふは、眞なるが故に實と名け、究竟なるを際と名く。際の聲は即ち是れ邊際の言なるが故に、弓の邊際といふが如し。「無相」と言ふは、永く一切の色等の相を離るるが故なり。「勝義」と言ふは、即ち是れ勝智の證する所の義なるが故なり。「法界」と言ふは、謂はく是れ一切の淨法の因なるが故なり。此の法界の聲は是れ法界の因の言にして、[一〇]金界等の如し。「離垢清淨」は其の文了じ易ければ、重ねて釋することを須ひず。「此れを得る道の清淨」とは、是れ能く離垢眞

【九】異門の說は即ち善巧方便の施設なればなり。

【一〇】法界の界は因の義にして淨法の起る因なれば法界といふ、猶金の生ずる處を金界といふが如しとなり。

とは同一相ならず。「名決定せざるに由りて雜體なること相違するが故に」とは、多くの物類に於て、其の欲する所に隨ひて一名、又は一種の名を建立す。處に隨ひ時に隨ひて、別に諸義に目く。若し名と義と同一相ならば、義は應に相ひ雜はるべし。既に此の事無きが故に、名の如く而も其の義有らず。伽他の中に於て初の一伽他は、何を以て略して上に說く所の義を攝す。[六]受持し易きが故なり。後の一伽他は遍計所執と及び圓成實に就て、疑難を釋通す。

論曰　復次に何の故に顯現する所の如きは實には所有無きに、而も依他起の自性は[七]一切に一切は都て所有無きに非ずや。此れ若し無ければ圓成實の自性も亦所有無し、此れ若し無ければ則ち一切も皆無し。若し依他起及び圓成實の自性有ること無ければ、應に染淨有ること無き過失を成ずべし。既に現に雜染と清淨とを得べし。是の故に應に一切は皆無なるべからず。此の中に頌有り、

若し依他起無ければ　圓成實も亦無く
一切種若し無ければ　恒時に染淨無けん。

釋曰　「一切都て所有無きに非ずや」とは、一切種の顯現する所依たる所緣の根本は都て所有無きに非ずやとなり。又一切とは、謂はく一切時なり。「圓成實の自性も亦所有無し」とは、若し雜染無ければ清淨も亦無し。問ふ、[八]二性若無ければ圓成實性は最も應に成就すべし。何の故に無しと言ふや。答ふ、自性清淨なる圓成實性は爾る可きも、離垢清淨の圓成實性は爾らざるなり。頌文は了じ易ければ重ねて釋することを須ひず。

論曰　諸佛世尊は大乘の中に於て方廣教を說けり。彼の教の中に言く、云何が應に遍計所執の自性を知るべきや。應に知るべし、異門にて所有無しと說けり。云何が應に依他起の自性を知るべきや。應に知るべし、譬へば幻・燄・夢像・光影・谷響・水月・變化の如しと。云何が應に圓成實の自性を知るべきや。應に知るべし、四の清淨法なりと、宣說せるを。何等をか名けて四の清淨法と爲すや。

【六】記憶して受持するの便なる爲に頌となせりとの意なり。

【七】一切一切とは次の釋文に從へば一切時に一切のものはといふ意なるべし、

【八】染淨の二性を離れて初めて眞に圓成實性は成就し顯現すべし、而も今染淨相對して圓成實を說くが故に此の問を起せり。

卷の第五

所知相分第三の二

〔分別章　第三の餘〕

論曰　復次に云何が依他起の自性の如く、遍計所執の自性は顯現するも、而も體に稱ふに非ざることを知るを得るや。名の前に覺無きに由りて、稱體なること相違するが故に、名に衆多有るに由りて多體なること相違するが故に、名は決定せざるに由りて、雜體なること相違するが故なり。此の中に二頌有り、

名の前に覺無きと　多名と不決定とに由りて
稱體と多體と　雜體との相違を成ずるが故に、
法は無にして而も得べく　無染にして而も淨有り
應に知るべし幻等の如く　亦復虚空に似たり。

釋曰　依他起の如く、遍計所執分は顯現して得べしと雖も、而も彼の體に稱ふに非ず。此の義を顯はさんが爲の故に、「名の前に覺無きに由る等」と説く。[一]若し依他起と遍計所執と同一相ならば、其の名を取ることを離れて遍計所執に於て應に其の[二]覺を生ずべし。自の領受する所を説く可からざるが如し、[三]現量に得る所の依他起の中には、名を待たずして而も其の覺を生ぜん。既に此の事無し。故に依他起と遍計所執とは其の體相ひ稱ふことは理と相違す。「名に衆多有るに由りて、多體なること相違するが故に」とは、意解の力に由りて依他起の中に義を計度するに、一義の中に於て衆多の名を立つ、[四]尼犍茶の如く、一物を書して多名を立て、[五]一の牛の上に於て種々の名を立つ。一物に於て多くの自性有りて、而も相違せざるに非らざるが故に、依他起と遍計所執

【一】世親釋には瓶を見るの喩を擧げて釋せり、參照。
【二】覺とは物の眞相を覺知すること。
【三】現量とは現實に外物を直覺すること。
【四】尼犍茶又は尼乾陀(nig=rantha)離繫と譯す、苦行外道なり。
【五】一の牛云云とは世親釋に瞿の九義を擧ぐ、參照。

異門に由りて依他起を成ずれば、卽ち此に由りて遍計所執と及び圓成實とを成ぜず。若し異門に由りて遍計所執を成ずれば、卽ち此に由りて依他起と及び圓成實とを成ぜず。若し異門に由りて圓成實を成ずれば、卽ち此に由りて依他起と及び遍計所執とを成ぜず。

釋曰　此の義は前の如し。重ねて釋することを須ひず。

に、舍利子よ、此れ但名のみ有り、之を謂ひて色と爲す。此の自性は生無く、滅無く、染無く、淨無し。假に客名を立てて、別別に法に於て、分別を起す。假に客名を立てて、隨つて言說を起す。言說するが如く如く、是の如く是の如く執著を生起す。是の如く一切の菩薩は見ず、見ざるに由るが故に、執著を生ぜず。說の如く、色に於て、乃至識に於ても、當に知るべし、亦爾なりと。此の中「無相散動」を對治せんが爲の故に、彼の經に說いて「實に菩薩有り等」と言ふ。謂はく實有の空を菩薩の體と爲す。「有相散動」を對治せんが爲の故に、卽ち彼の經に「菩薩有るを見ず等」と言ふ。謂はく遍計所執の自性は永へに有ること無きが故なり。「增益散動」を對治せんが爲の故に卽ち彼の經に「色の自性は空なり等」と言ふ、謂はく卽ち遍計所執の自性は永へに有ること無きが故なり。「損減散動」を對治せんが爲の故に、卽ち彼の經に「空に由らざるが故に等」と言ふ。謂はく彼の法性は是れ實有なるが故なり。「一性散動」を對治せんが爲の故に。卽ち彼の經に「色は空にして色に非ず等」と言ふ。淨不淨の境性は各別なるが故なり。「異性散動」を對治せんが爲の故に、卽ち彼の經に「色は空を離れず等」と言ふ、謂はく遍計所執の色の自性には所有無し、卽ち是れ空なるが故なり。「自性散動」を對治せんが爲の故に、卽ち彼の經に「此れ但名のみ有り、之を謂ひて色と爲す等」と言へり。「差別散動」を對治せんが爲の故に、卽ち彼の經に「生も無く、滅も無し等」と言ふ。「名の如く義を取る散動」を對治せんが爲の故に、卽ち彼の經に「假に客名を立てて別別に法に於て分別を起す等」と言ふ。「義の如く名を取る散動」を對治ぜんが爲の故に、卽ち彼の經に「假に客名を立てて隨つて言說を起し、言說するが如く如く、是の如く是の如く執著を生起す」と言ふ。「是の如く一切の菩薩は見ず、見ざるに由るが故に執著を生ぜず。」とは、此の意を說いて言はく、名に於ても義に於ても如實に了知して、妄執著無しと。

論曰　若し異門に由れば依他起の自性に三の自性有り、云何が三の自性は無差別を成ぜざる。若し

落迦等及び欲界等は身に依る變異なり、識も亦變異すること、應の如く當に知るべし。[六〇]無色界の中にも亦受等の所作の變異有りて諸識分別す。「他引分別」とは、謂はく善惡の友と親近して起る所と及び正と非正との法を聽聞するとを因と爲して分別す。即ち是れ外道の[六一]迦比羅等、及び正法中の[六二]諸の騒揭多の有らゆる分別にして、不如理と如理との分別と名く。是の如きの二種は其の所應に隨ひて、能く邪見と正見とに相應する二種の分別を生ず。薩迦耶見を因と爲して起る所の六十二見と相應する分別なり。即ち[六三]梵網經の中の前際後際中際の分別なり。謂はく我れ過去に曾て有りと爲すやと。是の如き等の分別を「執著分別」と名く。「見趣」と言ふは是れ品類の義なり。「散動分別」とは、散亂擾動の故に散動と名く。此れ即ち分別なり。是の故に說いて散動分別と名く。此れ即ち無分別智を擾亂す。何を以ての故に、此に由りて般若波羅蜜多を擾亂するが故なり。無分別智は即ち是れ般若波羅蜜多なり。「謂はく諸の菩薩の十種の分別なり」とは、謂はく諸の菩薩は能く語言を發して、他を引いて眞理に稱はざる十種の分別を轉ず。何を以ての故に、眞理を證會して若し正に現前すれば不可說なるが故なり。

論曰　一には無相散動、二には有相散動、三には增益散動、四には損減散動、五には一性散動、六には異性散動、七には自性散動、八には差別散動、九には名の如く義を取る散動、十には義の如く名を取る散動なり。此の十種の散動を對治せんが爲に、一切の般若波羅蜜多の中に無分別智を說く。是の如く所治、能治は、應に知るべし、具さに般若波羅蜜多の義を攝す。

釋曰　一切の般若波羅蜜多の中に於て、具さに是の如き十種の散動の對治を說けり。且らく說きて言へるが如し、世尊よ、云何が菩薩は應に般若波羅蜜多を行ずべきや。舍利子よ、是の菩薩は實に菩薩有りて菩薩有るを見ず。何を以ての故に、色の自性は空にして空に由らざるが故なり。色は空にして色に非ず、色は空を離れず、色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり。何を以ての故

【六〇】無色界には前に說く色等は無しと雖も心識ありて受等の作用あるが故に變異有り。

【六一】迦比羅（Kapila）。黃頭又は金頭等と譯し、數論學派の開祖の名なり、此には外道の代表として擧ぐ。

【六二】騒揭多或は修伽陀（Sugata）。善逝と譯し、佛の十號の一なり。

【六三】阿含部の中の梵網六十二見經にして、前中後に分って六十二見を說けり。

薩の十種の分別なり。

釋曰　「根本分別」とは、謂はく阿賴耶識なり。是れ餘の分別の根本にして、[五〇]自性も亦是れ分別なるが故に根本分別と名く。「緣相分別」とは、謂はく色等に是の如きの緣相有りと分別するなり。「顯相分別」とは、謂はく眼識等幷に所依の識なり、彼の所緣に似たる相を顯現するが故に。「緣相變異分別」とは、謂はく色等の影識の變異に似て起る所の分別なり。「老等の變異」とは、謂はく色等の識の老等の相に似て起る諸の變異なり。何を以ての故に、外内の色等には皆老等の轉變の相有るが故なり。等とは病死の變異を等取す。「樂受等の變異」とは、[五一]樂受に由るが故の身相變異す。樂とは面目端嚴と說くが如し。等とは苦及び不苦不樂の受を等取す。「貪等の變異」とは、謂はく貪等に由る身相の變異なり。等とは瞋癡忿等を等取す。[五二]忿等の惡形の色等と說くが如し。「逼害、時節の代謝等の變異」とは、謂はく[五三]殺縛等は身相等をして變異を生起せしむ。[五四]時節の代謝も亦内外の身、樹色等をして形相を改變せしむ。寒等に逼切せらるゝ時身等變異すと說くが如し。「㮈落迦等の諸趣の變異」とは、等とは卽ち一切の惡趣を等取す。彼の處の色等の變異は、[五五]共に了ず。「及び欲界等の諸界の變異」とは、色界を等取す。[五六]無色界の中には色等に似たる影像の識無きが故に。諸天の中及び靜慮の中に於ても亦有情及び[五七]器の色等の種々の變異有り。末尼珠の如きは威神力の故に、種々の淨妙なる光色を變異す。「顯相變異分別」とは、謂はく眼等の所依の根に由るが故に、色等に似たる影像を顯現せしむる眼識等の識は種種に變異す。卽ち此の中に於て[五八]諸の分別を起す、卽ち前に說ける如く、老等の變異は其の所應に隨つて變異を起すなり。何を以ての故に、眼等の根に利鈍有りて識明昧なりと說くが如き故なり。[五九]無表色の所依の變異するが如く彼れも亦變異す。樂受等の變異に由るも亦爾なり。樂と說くが如きは心安定するが故に、苦と說くが如きは心散動するが故なり。貪等の逼害、時節の代謝の變異も亦爾なり。捺

【五〇】自性云云とは阿賴耶識自體も亦分別性なりとの意。
【五一】樂受と此に說くは身相の變異に就いて言ふが故に面目端嚴にして美貌を有すと說如きをいふの意なり。
【五二】忿等云云とは忿怒の相は憎惡すべき形相なれば之をくが例示す。
【五三】殺され或は縛せらるゝ時の身相の變異をいふ。
【五四】四季の推移に依る變異なり。
【五五】共に了すとは何人も解了せりの意。
【五六】無色界云云とは之を除外するの意を顯はす。
【五七】器とは器世間にして山河大地等なり。
【五八】諸の分別を起すとは此の中に前說の如く差別分類せらるゝの意、此に分別とは分類し差別するの義、前は身相の變異を說き、此には心識の變異を說く。
【五九】無表色。强盛なる善惡の身口二業に依りて肉體組織の中に一種の物質的素質を形成するを無表色といふ、一種の色法なれども普通の色法の如く表示すべき形體なきが故に無表色と名く、小乘の所說にして、唯識學派の所謂種子に相當す、此には小乘の說を例として心識の變異を示す。

釋曰「名言を善くす」とは、謂はく自の意趣は語の前に在りて行じ、領解具足するが故に、有覺と名く。此れと相違するを説いて無覺と名く。

論曰　是の如くして遍計に復五種有り。一には名に依つて義の自性を遍計す、謂はく是の如き名に是の如き義有りと。二には義に依りて名の自性を遍計す、謂はく是の如き義に是の如き名有りと。三には名に依りて名の自性を遍計す、謂はく遍く未了の義の名を計度するなり。四には義に依りて義の自性を遍計す、謂はく遍く未了の名の義を計度するなり。五には二に依り二の自性を遍計す、謂はく遍く此の名、此の義は是の如き體性なりと計度するなり。

釋曰「名に依りて名の自性を遍計す」とは、謂はく生れて椰子洲に在る人の、[四七]牛の聲を説くを聞いて其の義を了ぜず、數々是の如き牛の聲を分別するが如し。「義に依りて義の自性を遍計す」とは、謂はく曾て未だ習はざる[四八]想と有想と、更互に相應して、欻ち牛身を見て、數々是の如き牛の義を分別す。「二に依り二の自性を遍計す」とは、謂はく[四九]假立の能詮と所詮とに依つて二種を分別するなり。

論曰　復次に一切の分別を總説するに略して十種有り。一には根本分別、謂はく阿賴耶識なり。二には緣相分別、謂はく色等の識なり、三には顯相分別、謂はく眼識等并に所依の識なり、四には緣相變異分別、謂はく老等の變異、樂受等の變異、貪等の變異、逼害時節の代謝等の變異、㮈落迦等の諸趣の變異、及び欲界等の諸界の變異なり。五には顯相變異分別、謂はく卽ち前に説く所の變異の如き有らゆる變異なり。六には他引分別、謂はく非正法の類を聞き及び正法の類を聞いて分別するなり。七には不如理分別、謂はく諸の外道は非正法の類を聞いて分別するなり。八には如理分別、謂はく正法の中にて正法の類を聞いて分別するなり。九には執著分別。謂はく不如理なる作意の類なり。薩迦耶見を本と爲し、六十二見趣と相應する分別なり。十には散動分別。謂はく諸の菩

【四七】牛の聲とは牛なる名稱の意。

【四八】想と有想とは喩へば牛なる表象は概念としての想なり、此の想を有する者は牛なる實體なり。

【四九】假立の能詮と所詮とは能詮は名辭なり、所詮は名辭に依りて表はされたる意義なり、故に名と義に當る、假立の名と義とに依りて名と義との二種の自性を分別すとの意なり。

遍計所執の所依止なるに由るが故に、又依他起は是れ我、色等と意識の遍計に遍計せらるゝが故なり。此の意趣に由りて假に依他起を說いて遍計所執と爲す。「所遍計の如く畢竟して是の如く有ならざるが故に」とは、依他起に於て顯現する所の如きは畢竟して無なるが故なり。是の如くして卽ち三種の自性は全く異を成ぜずと說く。亦異ならざるに非ず、[四三]觀待別なるが故に。若し時に熏習せる種子の生ずる所の義邊を觀待すれば依他起を成ず。卽ち此に由れば餘の二性を成ぜず。若し時に遍計の所緣を觀待すれば遍計執を成ず。卽ち此に由れば餘の二相を成ぜず。若し時に遍計所執の畢竟無なる邊を觀待すれば圓成實を成ず。卽ち此に由れば餘の二性を成ぜず。

論曰　此の三自性に各幾種有りや。謂はく依他起に略して二種有り、一には他の熏習する種子に依つて生起するが故に、二には他の雜染と清淨との性は成ぜざるに依るが故に。此の二種の依他の別に由るが故に依他起と名く。遍計所執にも亦二種有り、一には自性の遍計執の故に、二には差別の遍計執の故に、此れに由るが故に遍計所執と名く。圓成實性にも亦二種有り、一には自性圓成實の故に、二には清淨圓成實の故に。此に由るが故に圓成實性を成ず。

釋曰　「他の熏習せる種子に依りて生起するが故に」とは、因緣に託するに由りて生ずることを得るが故に、依他起と名く。他の雜染に依りて、清淨の性は成ぜざるが故に」とは、分別の時は雜染の性を成じ、無分別の時は清淨の性を成ずるに由り、[四四]二分に依るが故に依他起と名く。「自性の遍計」とは、謂はく總じて眼等の[四五]有法の事體を執取するなり。「差別の遍計」とは、謂はく別して常・無常等の[四六]義の別なる法を執取する義なり。「自性圓成實」とは、謂はく有垢眞如なり。「清淨圓成實」とは、謂はく離垢眞如なり。

論曰　復次に遍計に四種有り、一には自性遍計、二には差別遍計、三には有覺遍計、四には無覺遍計なり。有覺とは名言を善くするを謂ひ、無覺とは名言を善くせざるを謂ふ。

【四三】觀待とは待望する觀點の意。

【四四】世親釋に二分に由るが故に一性は成せずと釋せり今も其の意に解すべし。

【四五】有法とは諸法の體事をいひ、法とは法自體の有する義理をいふ、諸法の自體と其の屬性となり、或は之を自性、差別ともいふ。

【四六】義の別なる法とは義とは意義にして種々差別せるが故に義の別といふ、これ卽ち法なり。

著す」とは、五の品類に由りて推求し行じ轉じて諸の執著を起す。相貌を取り已つて執著を起すが故に、是れ相貌に於て堅く執著するの義なり。見に由りて推求し、義に於て決定し、執著を起し已つて他の爲に說かんと欲す。「尋に由り語を起す」とは、契經に說けるが如し。尋に由り伺に由りて語言を說くと。尋伺無くして能く語言を說くに非ず。「見聞等の四種の言說に由りて、言說を起す」とは、見聞覺知の四種の言說に由りて言說を起すとなり。蛇に似たる繩等の相貌を緣ずるが如く、盤曲等の種々の相貌を取りて、自ら執著し已つて、他をして覺悟せしめんが爲に、是の如きの言を說く、我已に蛇を見る、我已に蛇を見る、と。此れも亦是の如し、他は是れを聞き已りて復更に增益して、謂へらく實に有りと爲す。

論曰　復次に此の三自性は異ると爲すや、異らずと爲すや。應に異るに非ず、異らざるに非ずと言ふべし。謂はく依他起の自性は、異門に由るが故に依他起を成じ、即ち此の自性は異門に由るが故に遍計所執を成じ、即ち此の自性は異門に由るが故に圓成實を成ず。何の異門に由つて此の依他起は依他起を成ずるや。他の熏習の種子に依つて起るが故なり。何の異門に由りて即ち此の自性は遍計所執を成ずるや。是れ遍計の所緣の相なるに由るが故に、又是れ遍計に遍計せらるが故なり。何の異門に由つて即ち此の自性は圓成實を成ずるや。所遍計の如く畢竟して是の如く有ならざるが故なり。

釋曰　「異るに非ず」とは、謂はく依他起性と遍計所執とは有と非有との故に。有を有に望めて異ると言ふを得べし。非有の兎角等の無に望むるに非ず。「異らざるに非ず」とは、有と非有とは一を成ぜざるが故なり。依他起性と圓成實とも亦復是の如し、性不淸淨なると性淸淨なるとの故に。今復異門の意趣に依止すれば、此の三の自性は、或は一性を成じ、或は異性を成ず。「是れ遍計の所緣の相なるに由るが故に、又是れ遍計に遍計せらる事が故に」とは、依他起は是れ我、色等の

に云何が遍計し、能く遍く計度するや。何の境界を縁じ、何の相貌を取り、何に由つて執著し、何に由りて語を起し、何に由つて言說し、何の所を增益するや。謂はく名を縁じて境と爲し、依他起の自性の中に於て彼の相貌を取り、見に由りて執著し、尋に由りて語を起し、見聞等の四種の言說に由つて言說を起し、無義の中に於て增益して有と爲す。此の遍計に由りて能く遍く計度す。

釋曰「復次に能遍計有り等」とは、遍計所執を分別せんと欲するが爲の故に、此の言を說く。「當に知るべし、意識は是れ能遍計なり、分別有るが故に」とは、[三七]顯示と[三八]隨念との分別有りて[三九]雜糅する所なるに由るが故なり。「自の名言熏習を用つて種子と爲す」とは、無始よりの生死の有する所の意識の、戲論と名言とにて熏習せる種子を此の生ずる因と爲す。「及び一切の識の名言熏習を用つて種子と爲す」とは、謂はく無邊の[四〇]色等の影識の名言にて熏習せる種子を用つて因と爲す、[四一]彼れに似て生ずるが故なり。是の故に一切の無邊の行相は分別して轉ず。「又依他起の自性を所遍計と名く」とは、謂はく此の一分の眼等の諸相は、是れ所計の業なり。「又若し此の相に由りて、依他起の自性をして所遍計を成ぜしむれば、此の中、是れを遍計所執の自性と名く」とは、謂はく此の品類の縁相に由りて是れを遍計所執の自性と名く。「是れ此の如きの義なり」とは、是れ此の如き品類の縁相の義となり。「復次に云何が遍計し、能く遍く計度するや」とは、問を作して生起し、遍計所執の自性の差別を宣說せんと欲するが爲なり。「名を縁じて境と爲す」とは、謂はく色受等、[四二]天與等の名は義に於て相應し、諸の遍計を起し、異なる行相を說いて識と爲す。其の名無きに非ず。名有りて能く其の義に於て諸の分別を起す。「依他起の自性の中に於て彼の相貌を取る」とは、是れ自相を執するの義なり。能取の相に由りて說いて名けて想と爲す。其の所想の如く、是の言說を作す。或は依他起の自性の中に於て眼等の相を取る。「見に由りて執

【三七】顯示とは計度分別のこと、即ち意識の作用にて不現前の事を種々構計度量して分別すること。
【三八】隨念分別とは過去の事を追想し記憶に由りて種々に分別すること。
【三九】雜糅する所とは相應倶起するの義、異本には雜染に作る。
【四〇】色等の影識とは色等の外境の影像を現する識即ち識の相分をいふ。
【四一】彼とは色等の外境を指す、此の一分とは他の見分に對して相分を指すが故なり。
【四二】天與とは天授の錯誤にあらざるが、天授は第十卷に註解せり。

熏習の種子に由りて實には體無しと雖も、而も義有るに似て相貌顯現すとなり。是の故に義と名く。幻像等の如く、有に似て顯現す。「顯現す」と言ふは、是れ明了に義無きも而も有るに似て明了に現前するが故に、顯現と名く。卽ち此の似義を彼の自性と爲す。自性の如く受くればなり。「無量の行相」とは、種々の我法の境界の影像なり。「意識の遍計」とは、謂はく卽ち意識を說いて遍計と名く。「顚倒して生ずる相」とは、謂はく是れ亂識の所取と能取となり。義の相の生ずる因なるが故に。「遍計所執と名く」とは、謂はく、卽ち遍計所執の義の相を名けて遍計所執の自性と爲す。「自相は實には無にして唯遍計の所執のみ得べき有り」とは、謂はく實には我及び法無き中に於て、唯遍計所執の影像の相貌のみ得べき有りとなり。此に由るが故に遍計所執と名く。

論曰 若しは圓成實の自性は、是れ遍計所執の永く相有ること無きならば、云何が圓成實を成じ、何の因緣の故に圓成實と名くるや。變異無き性に由るが故に圓成實と名く。又淸淨なる所緣の性に由るが故に、一切の善法の最勝の性なるが故に、最勝の義に由りて圓成實と名く。

釋曰 「變異無き性に由るが故に圓成實と名く等」とは、應に知るべし、此の性は常に變無きが故に、又淸淨なる所緣の性なるに由るが故に、一切の善法の(中の)最勝の性なるが故に、圓滿し成就せる眞實を性と爲す。

論曰 復次に能遍計有り、所遍計有りて、遍計所執の自性乃ち成ず。此の中何者が能遍計、何者が所遍計、何者が遍計所執の自性なりや。當に知るべし、意識は是れ能遍計なり、分別有るが故に、所以は何ん、此の意識は自の名言熏習を用つて種子と爲し、及び一切の識の名言熏習を用つて種子と爲すに由る。是の故に意識の無邊の行相分別して轉じ、普く一切に於て分別計度するが故に、遍計と名く。又依他起の自性を所遍計と名く。又若し此の相に由りて依他起の自性をして所遍計を成ぜしむれば、此の中是を遍計所執の自性と名く。此の相に由るとは是れ此の如き義なり。復次

ずるに非ず。義若し是れ實に有ならば、無分別智生して應に顯現せざるべからず。此の智は如實に境義を緣ずるが故なり。此の無間に說く所の道理と及び前に說く所の三種の因緣とに由りて、諸義皆無きの道理成就す。

〔分別章　第三の初〕

論曰　若し依他起の自性は實には唯識のみ有りて、似義の顯現する所依止ならば、云何が依他起を成じ、何の因緣の故に依他起と名くるや。自の熏習せる種子より生ずる所にして、他の緣に依つて起るが故に依他起と名く。生ずる刹那の後に功能有ること無く、自然に住するが故に依他起と名く。

釋曰　「云何が依他起を成ずるや」とは、辨する所の法を問ふ。「何の因緣の故に依他起と名くるや」とは、釋する所の詞を問ひ、辨せざる品を辨するなり。此の[三五]雙關に由りて能く義を了るが故に。[三六]餘の二の自性の兩問も亦爾なり。此の諸問に依りて兩兩酬益す。「自の熏習せる種子より等」とは、謂はく遍計所執の名言熏習の種より生ずるなり。自の種子により他に生ぜらるるが故に、依他起と名く。此れ彼の體は他に依つて生ずることを說く。「生ずる刹那の後に功能有ること無く、自然に住す」とは、此れ彼の體は他に依つて住することを說く。此の二因に由りて依他起と名く。

論曰　若し遍計所執の自性は依他起に依りて、實には所有無く義に似て顯現するならば、云何が遍計所執を成じ、何の因緣の故に遍計所執と名くるや。無量なる行相は、意識の遍計し顚倒して生ずる相なるが故に、遍計所執と名く、自相は實に無なるも唯遍計の所執のみ得べき有り、是の故に說いて遍計所執と名く。

釋曰　「依他起に依りて」とは、謂はく唯識の依他起性に依るなり。「實には所有無く、義に似て顯現す」とは、謂はく實には體無く、但其の義に似たる相貌のみ顯現すとなり。若し體實に無ければ云何が義と名けん。此の難を避けんが爲に、是の故に說いて「似義顯現す」と言ふ。謂はく名言

【三五】雙關とは前の二問をいふ。
【三六】餘の二の自性とは遍計と圓成との二性を指す、

ば、一切は皆內心より變現して衆事皆成ず。頌に言へる有るが如し、

一りの端嚴の婬女の身に於て　　出家と欲に耽るものと及び餓狗とは
臭屍とし、昌艶とし美なる飲食とす、　　三種の分別各同じからず。

「所緣無き識を現に得べき智等」とは、過去・未來皆實に有るに非ず。此れ經部と共に許して成就す。夢の境は實に無なることを一切(の人)共に了ず。諸の三摩地の所行の影像は已に有に非ず、亦憶持にも非ずと說けり。[三〇]水・鏡等の中の面等の影像は都て所有無きこと、前に已に說けるが如し。此の中には、境無くして而も識成ずることを得。「應に功用を離るゝも、顚倒すること無かるべき智」とは、本文に顯はるると雖も而も少しく助說せん。若し[三一]所得の義の如く卽ち眞實に有らしめんと欲する有らば、應に功を用ひずして自然に解脫せん。一切の有情は皆實を見るが故なり。「心の自在を得」とは、心の調順を得て、所作有るに堪ふるなり。「靜慮を得たる者」とは、謂はく諸の聲聞及び獨覺等なり。若くは已に淸淨なる靜慮心にて[三二]一境性を證得せるなり。靜思慮を樂ふを靜慮者と名く。「勝解力に隨つて諸義顯現す」とは、謂はく增上の意解の勢力に隨ひて、願樂する所の如く、地等を變じて水等を成ぜしめんと欲すれば皆悉く顯現すなり。「奢摩他を得たる者」とは、謂はく已に奢摩他定を證得し相續を滋潤し心をして寂靜ならしむるなり。言ふ所の「修」とは、空境と相應し、或は四聖諦の所緣と相應するなり。止觀雙べ運ぶが故に相應と名け、此れと相應するが故に名けて修と爲す。「法觀」とは、謂はく此れ後得の、契經等の正法を觀する妙慧なり。[三三]「纔に作意する時に諸義顯現す」とは、謂はく契經等の正法の敎の中にて、[三四]隨つて一種の無常等の義に於て、刹那に速滅する等の性を作意し思惟するが如く如く、是の如く是の如く、一品類に非ざる境界顯現す。「無分別智現在前する時に、一切の諸義は皆顯現せず」とは、無分別智は後に當に廣く釋すべし。義若し實に有ならば、此の智は應に無かるべし。分別有つて無分別成

【三〇】水中及び鏡面に映ずる影像。

【三一】所得の義の如し云云とは常人の見聞する所の如く其のまゝ眞實に存在するものならば、人は皆眞智を有するものなれば、別に修行せずとも自然に解脫せりといはざるを得ずとなり。

【三二】一境性とは三昧の境地をいふ。

【三三】纔に作意すとは作意すると同時に又は其の瞬間との意。

【三四】隨つて一種云云とは種々の敎の中にて任意に一を取り、例せば無常に於て速滅の性を觀念する時、其の瞬間に多數の種類の法が同時に顯現すとの意。

に悟入せんと。一には相違識相の智を成就す、餓鬼、傍生及び諸天人の如く、同じく一事に於て彼の所識に差別有るを見るが故に。二には所縁無き識を現に得べき智を成就す、過去、未來(及び)夢影の縁中に所得有るが如き故に。三には應に功用を離るゝも顚倒すること無かるべき智を成就す、有義の中の能く義を縁ずる識の如く、應に顚倒すること無く、功用に由らずして智の眞實なるべきが故に。四には三種の勝智の隨轉する妙智を成就す、何等をか三と爲す、一には心の自在を得、一切の菩薩にして靜慮を得たる者は、勝解力に隨つて諸義顯現す。二には奢摩他を得て法觀を修する者は、纔かに作意する時に諸義顯現す。三には已に無分別智を得たる者は、無分別智現在前する時に一切の諸義は皆顯現せず。此の所說の三種の勝智の隨轉する妙智と、及び前の所說の三種の因緣とに由り、諸義の無義なる道理成就す。

釋曰　復境の義有ること無きを成立せんが爲の故に、餘教と及び餘の道理とを引いて、「諸の菩薩は四法を成ずれば」等と謂ふ。「相違識相の智」とは、更に相ひ違反するが故に相違と名け。相違する者の識を「相違識」と名く。此を生ずる識の因を說いて名けて「相」と爲す。此の相は唯內心の變のみにして外の義成ぜず。故に義有ること無しと了知するを說いて名けて「智」と爲す。「餓鬼・傍生及び諸の天人の如し等」とは、謂はく餓鬼の自業の變異に於ける增上力の故に、見る所の江河は皆悉く膿血等の充滿する處なり。魚等の傍生は卽ち舍宅(又は)遊從する道路と見。天は種々の寶にて莊嚴せる地と見。人は是の處に淸冷なる水有り、波浪湍洄すと見る。若し虛空無邊處定に入らば、卽ち是の處に於て唯虛空を見るのみ。一物實に有らば、互に相違を爲して、一品類に非らざる智の生ずる因性なるは道理に應ぜず。云何が此の一江河の中に於て、已に膿血屎尿充滿し、刀杖を持する人兩岸に防守する有りや。復種々の香潔の舍宅、淸淨なる街衢の衆寶にて嚴れる地、淸冷なる美水の波浪の湍洄、虛空定の境有りや。若し外物は、都て實性無しと許さ

はく此の五根の所行の境界を、唯是の意識は、一一各別に能く領受すとの義なり。「意は彼の依と爲る」とは、此の增上に由りて、彼れ生起するが故なり。

論曰 又所說の如く、十二處の中には、六識身を說いて皆意處と名く。

釋曰 復第三の聖教を引いて證す。「六識身を說いて皆意處と名く」とは、謂ゆる意識の事なることを宣說するが故なり。

論曰 若し處に阿賴耶識の識を安立して義識と爲せば、應に知るべし、此の中餘の一切の識は是れ其の相識なり。若くは意識の識及び所依止は是れ其の見識なり。彼の相識に由る。是れ此の見識の生ずる緣相なるが故に。似義現ずる時能く見識の生ずる依止事と作る。是の如きを名けて諸識を安立して唯識の性を成ずと爲す。

釋曰 「若し處に阿賴耶識の識を安立して義識と爲せば」とは、義は是れ因の義なり。即ち是れ阿賴耶識を安立して以て因識と爲すとなり。「餘の一切の識」とは、謂はく身等の識なり。「是れ其の相識なり」とは、是れ所緣の相なり、是れ所行なるが故に。「若くは意識の識と及び所依止」とは、謂はく第六識と及び所依止とにして、無間の過去の意と及び染汚の意となり。此の二は能く雜染を生起する所依の性と作るが故なり。「是れ其の見識なり」とは、能く分別するが故なり。「彼の相識は、是れ此の見識の生ずる緣相なるに由るが故に」とは、謂はく阿賴耶識の所變の異相は、是れ二の見識の生ずる緣相なるが故なり。「似義現ずる時」とは、謂はく意の見識の義に似て現ずる時なり。「能く見識の生ずる依止の事と作る」とは、謂はく眼等の識は能く見識の與に生ずる依事と作るなり。

論曰 諸義は現前に分明に顯現せるに、而も是れ有るに非ずとは。云何が知るべきや。世尊の言へるが如し、若し諸の菩薩は、四法を成就すれば能く隨つて一切唯識のみにして都て義有ること無き

識の如し。夫れ能依は、皆所依に順ず、染汚の意を雜染の依と爲すが如く、意識の俱に轉ずるも亦雜染を成ずと。此の難を解かんが爲に、「一切の所依に於て轉ず等」と說く。「一切の所依」とは、謂はく眼等なり。「所依轉ずる時」とは、生起する時なり。「種々の相に似たる二の影像轉ず」とは、謂はく似の種々の所取、能取の二の影像轉ずるなり。此を釋せんが爲の故に、次に復說いて言はく「謂はく唯義等」と。唯一の意識にして、一分は義に似たる影像顯現し、第二は義に於て分別して生ず。是の故に無分別の過有ること無し。「又一切處にも亦所觸の影像に似て轉ず」とは、謂はく定の中に於ては、輕重等の觸を領納し分別して、而も散亂に非ず。[二八]彼に隨順するが故なり。「有色界の中」とは、無色界には非ずとなり。何を以ての故に、卽ち此の意識は身に依止するが故なり。「餘の色根の身に依止するが如く」とは、餘の眼等の有色の諸根の如く身に依止するが故に、卽ち此の身に於て能く損益を作す。意識も亦爾なり。有色界の中には身に依止するが故に卽ち此の身に於て領納し分別して能く損益を作す。

論曰　此の中に頌有り、

若くは遠行し獨行し　無身にして窟に寢ね
此の調し難きの心を調するを　我れ眞の梵志なりと說く。

釋曰　一意識を說く菩提薩埵は敎を引いて證言す。「若くは遠行す等」とは、一切の所識の境に遊歷するが故に、名けて遠行と爲す。此の義を證せんが爲に復「獨行」と說く。[二九]第二無きが故なり。「無身にして」と言ふは形質無きが故に。「窟に寐ね」とは、內に居在するが故に。「此を調す」と言ふは、是の如きの心に於て自在を作すが故なり。「調し難きの心」とは、性𢤱悷の故なり。

論曰　又經に言へるが如し、是の如き五根の所行の境界を意は各能く受け、意は彼の依と爲る。

釋曰　復第二の聖敎を引いて證と爲す。「是の如き五根の所行の境界を意は各能く受け」とは、謂

[二八] 彼にとは定を指す。
[二九] 他の意識なしの義。

切の義を取る、增上の勢力有り。眼識を初と爲し法識を後と爲して安立する所の相は、是れ其の相分なり。卽ち此の意識の、義邊を了別するを說いて見分と名く。此の意識は遍く分別するに由るが故に、一切の識に似て生起するが故なり。是の故に意識を說いて相と名け、見と名け、亦種種と名く。伽陀の中に於て、諸の瑜伽師は能く唯識と二性と種々とに入りて、外の境界を遣る。竟いに能取の心を伏離せんが爲なり。所緣無きが故に、能緣の識も亦有るを得ず。了別無きが故に了者も亦無し。了別無くして而かも了者有るに非ず。境界の相勿ければ分別の事も無し。亦有境能分別の心とも名く。若し出世の心ならば、分別の能取所取を離ると雖も、然も內證の聖智の所依有り、能緣と所緣とは平等の性にして在り。

論曰　又此の中に於て一類の師有りて說く、一の意識のみ、彼々の依轉じて、彼々の名を得、意思業を身語業と名くるが如し、と。

釋曰　「又此の中に於て一類の師有りて說く、一の意識のみ等」とは、此れ諸師の所見の差別を顯はす。謂はく一類の菩提薩埵有り、唯一の意識性のみ有らしめんと欲して、彼々の眼等に依りて生ずる時、彼々の名を得、謂ゆる眼識乃至意識なり。此の中、別に餘識の種類無し。此れ何等の如く意思業の如くなるや。一の意思は、身の處所に在りて、身を發動すれば則ち身業と名け、語の處所に在りて語を發動すれば、則ち語業と名け、意と相應すれば名けて意業と爲すが如く、意識も亦爾なりと。

論曰　又一切の所依に於て轉ずる時、種々なる相に似て二の影像轉ず、謂はく唯義の影像と及び分別の影像となり。又一切處にも亦所觸の影像に似て轉ず。有色界の中には卽ち此の意識は身に依止するが故に、餘の色根の身に依止するが如し。

釋曰　或は謂はく、若し爾らば是の如き意識は應に分別無かるべし。所依鈍なるが故に、眼等の

論曰　復次に云何が是の如き諸識を安立して唯識性を成ずるや。略して三相に由る。一には唯識に由る、義有ること無きが故に。二には二性に由る、有相、有見の二の識の別なるが故に。三には種々に由る、種々なる行相にして生起するが故なり。所以は何ん、此の一切の識は義有ること無きが故に唯識を成ずるを得。相と見と有るが故に二種を成ずるを得。若し眼等の識ならば色等の識を以て相と爲し眼識の識を以て見と爲し、乃至身識の識を以て見と爲す。若し意識ならば一切の、眼を最初と爲し法を最後と爲す諸識を以て相と爲し、意識の識を以て見と爲す。此の意識に分別有るに由るが故に、一切の識に似て生起するが故に。此の中に頌有り、

唯識と二と種々とに　觀者の意は能く入り
唯心に悟入するに由りて　彼れをも亦能く伏離す。

釋曰　「復次に云何が是の如き諸識を安立して等」とは、謂はく前の理に依り、更に別の理を以て種々に徴問す。「唯識に由る」とは、是れ義無しとの義なり。故に次に説いて「義有ること無きが故に」と言ふ。説く所の「唯」の言は專ら義を遣らんが爲なり。[二七]無義の理は少分を已に説けり、少分を當に説くべし。「二性に由る」とは、謂はく相と及び見となり。一の識の中に於て相有り、見有り、二分倶に轉じて、相見二分は不卽不離なり。始め眼識より乃至身識まで、類に隨つて各別に變じて、色等の種々の相識と爲るを說いて相分と名け、眼等の諸識が境界を了別し能く義邊を見るを說いて見分と名く。又所取の分を相と名け、能取の分を見と名く。是を二性と名く。「種種に由る」とは、種々なる行相にして生起するが故なり。一識の中に於て、一分は變異して所取の相に似、一分は變異して能取の見に似、此の二分は各に種々なる差別の行相有りて、倶時にして起る。若し一の識は一時に種々に相應する有りと許さざるもの有らば、一時に種々の境を覺すること無けん。「若し意識ならば一切の眼を最初と爲す等」とは、謂はく彼の意識は能く一時に一

【二七】無義の理とは唯識無境の道理の意。

に、諸法の生ずるを得るは、力を須ゆるに非ずや。「爾らざれば」とは、問に隨つて答を興す言なるが故なり。彼は須ゆる所を問ひて因種を問はず。彼は別に諸色有りと執せざるに由り、但何を須ゆるやを問ふのみ。阿賴耶識は諸色を變作す、唯識を作るのみにあらず、[二三]故に此の答を作す。亂相は似色を變ずる識と爲すと許し、亂體は非色を變ずる識と爲すと許す。[二四]順に結ぶは頌の法なるが故に文隔越するも、其の義は相屬す。若し似色を變ずる所の因識無ければ、非色の果識は應に有ることを得べからず。若し境無ければ[二五]境を有するものも亦無きを以てなり。

〔差別章第二〕

論曰　何の故に、身、身者、受者の識と所受識と能受識とは一切の身の中に於て倶有し和合して轉ずるや。能く圓滿して生ずる受用の所顯なるが故なり。

釋曰　「何の故に身等」とは、前の如く問を爲す。「能く圓滿し等」とは、前の如く答ふ。此の五識は一切の身中に具足せざること無きに由る。受用の所顯にして、若し一支を闕かば卽ち圓滿ならず。

論曰　何の故に說の如く世等の諸識は差別して轉ずるや。無始の時より來、生死流轉して斷絕すること無きが故に、諸の有情界は無數量なるが故に、諸の器世界は無數量なるが故に、諸の所作の事は展轉して言說すること無數量なるが故に、各別に攝取し受用する差別も無數量なるが故に、諸の愛非愛の業果の異熟の受用する差別も無數量なるが故に、受くる所の死生の種々の差別も無數量なるが故なり。

釋曰　「何の故に說の如く世等の識等」とは、前の如く問を爲す。等とは數・處・言說・自他の差別・善趣惡趣及び死生の六の變現識を等取す。「無始の時より來、乃至受くる所の死生の差別も無數量なるが故に」とは、[二六]數の次第の如く、世等の識を、須らく說くべき果を顯はす。

【二三】以上は頌文を擧ぐる問意を叙し、次に之を答へて頌文を釋す。

【二四】順に結ぶ云云とは頌文の作法を說く、初句の前と後との對辭は第二句及び第三句に至つて之を結ぶ、故に文は隔たるも義は連屬すとの意なり。

【二五】境を有するも云云とは似色の境なければ之を有する顚倒の心も亦無しとの意。

【二六】以上の理由に依りて是の如き數多の識を說かざるべからざる結果を顯はすの意。

釋曰　教とは卽ち十地と解深密經となり。理は卽ち經の中に說く所の道理なり。謂はく三摩地所行の影像と及び夢等の喩とは皆前に說けるが如し。

論曰　若し此の諸識も亦體是れ識ならば、何の故に乃ち色性に似て顯現するや。一類にして堅住し、相續して轉じ、顚倒等の諸の雜染の法の與に依處と爲るが故なり。若し爾らざれば非義の中に於て義を起す顚倒は應に有ることを得ざるべし。此れ若し無ければ、煩惱所知の二障の雜染も應に有ることを得ざるべし。此れ若し無ければ諸の淸淨の法も亦應に有ること無かるべし。是の故に諸識は應に是の如く轉ずべし。此の中に頌有り、

亂相と及び亂體とを　應に許して色識と
及び非色識と爲すべし　若し無ければ餘も亦無し。

釋曰　「若し此の諸識も亦體是れ識なり等」とは、此れ色識の、一類にして堅住し、相續して轉ずる因を問ふ。「一類」と言ふは、是れ相似の義なり。前後一類にして變異有ること無く、亦間斷無きが故に「堅住」と名く。卽ち此れを說いて「相續して轉ず」と名く。「顚倒等の諸の雜染の法の與に依處と爲るが故なり」とは、「等」とは卽ち煩惱と業と生との諸の雜染の法を等取す。眼等の諸識は顚倒等の諸の雜染の法の與に所依の處と作る。所依の處とは卽ち是れ因の義なり。「故なり」とは[二]須ゆるなり。彼の問意を觀じて而して此の答を作す。謂はく無義の中に顯現して、眼等の諸識に似て一類にして堅住し相續して轉ず。此に由りて、彼の顚倒等の法を起す。「若し爾らざれば」とは、若し是の如く轉ぜざれば、「非義の中に於て義を起す顚倒は、應に有ることを得ざるべし」。若し顚倒無ければ、「煩惱所知の二障の雜染も應に有ることを得ざるべし。」因緣無きが故なり。若し雜染無ければ淸淨も亦無し。要ず雜染を息めて淸淨を顯はすが故なり。「是の故に諸識は應に是の如く轉ずべし」とは、眼等の諸識は應に是の如く轉ずべしとなり。[三]因ならざる力の爲

【二】須ゆるなりとは故の字を釋して其を必須となすの意なり。

【三】因ならざる力云云とは論本に非義の中に義を起すは顚倒の因なりとなすに應じて難詰するなり。

はく心心法の種々の憶念、分別等の縁の功能の大なるが故に、是の如く生ずる時に、異れる三摩地等の所行の影像有ること無しと雖も、而も別に影像の顯現して有るに似たり。「卽ち此の敎に由りて理も亦顯現す」とは、謂はく此の敎の中に亦卽ち兼ねて比量の道理を顯はす。所以は何ん、「定心の中に於て等」とは、序述の敎の中に別の理義有り。謂はく靑瘀等は心を離れず、樂欲する所に隨つて顯現するが故なり。譬へば夢中に見る所の靑瘀等の如し。「又是の如き靑瘀等の中に於ては憶持識に非ず等」とは、彼の異計を恐るゝが故に此の說を作す。謂はく若し人有り是の如きの計を作さん、彼れ先に淡泊路等に於て骨鎖等を見て、今猶憶持するに由り、三摩地所行の影像と爲ると。此の計を遮せんが爲の故に言はく「又是の如き靑瘀等の中に於ては憶持識の見るに非ず。所緣の境は現前に住するが故なり」。若し此の所緣にして、卽ち是れ昔日の憶持する所ならば、昔の見る所の如く方處決定せん。昔受くる所の如く應に是の如く憶すべし。然るに是の如くならず。修の成ずる所の智は是れ眞の現量にして、所見の境界は分明に現前す。憶持識には是の如きの事有るに非ず。若し爾らば聞思の成ずる所の兩慧と相應する識は本事を憶持す。彼の二の所行は應に識を離るべし。此れも亦然らず。彼の聞等の二の憶持識に由りて、過去を緣ずるが故なり。過去は無なるが故に所緣の影像は並びに唯是れ識のみ。譬へば昔の自己の少年を憶するが如し。是の故に此の識の現に憶持する所は並びに唯識のみ有り。[一〇]所念空なるが故なり。觀行者の所想に現前する不淨なる骨鎖、女人の影像の如し。「此の比量に由る等」は語義分明にして重ねて釋することを須ひず。

論曰　是の如く已に種々の諸識は夢等の喩の如しと說けり。卽ち此の中に於て眼識等の識は唯識なることを成ずべし。眼等の諸識には既に是れ色有り、亦唯識のみ有ることを云何が見るべきや。此れ亦前の如く敎と及び理とに由る。

【一〇】所念とは憶念する所の者、これすべて過去なれば空なりといふ。

種の所緣なり、彼れは愛の所執と爲らざるに由るが故に、所治に非ざるが故に、迷亂に非ざるが故に、三界の攝に非ざるも亦識を離れざるが故に、說くを待たず。若し爾らば應に是の如き[一八]二界を說くべし。無色界の中には、經部は唯心心法のみ有りとなすが故に。此の難は然らず。識の所取の義は皆義無きが故に、但色の無なるのみに非ざるを、說いて唯識と名く。何者か亦無なるや。餘の虛空等の識の所取の義なり。經部の諸師は無色界の諸の心心法は是れ無色の相にして、體無く實無しと許すも、[一九]所取の境義の顯現する所依を、恐らくは彼れ執して心心法に非ずと爲さん。故に三界は皆唯心のみ有りと說く。解深密經に明かす所の意趣は、十地に釋するが如し。

「經」とは、謂はく敎法なり。「三摩地」とは、是れ能く心をして一境に住せしむる性にして、心法を體と爲す。此の所緣の境を說いて所行と名く。本の境を「質」と名け、彼に似て現ずる者を說いて「影像」と名く。「我れ識の所緣は唯識の所現なりと說くが故なり」とは、我れ、外に在る識所緣の境は唯是れ內識の顯現する所なりと說くとなり。卽ち是れ所緣の境は識を自性と爲す義なり。此の意を說いて、識の所緣の境は唯是れ識の上に現はるゝ影像にして別に體有ること無しと言ふ。「云何が此の心還つて此の心を取るや」とは、此れ自に於て作用する相違を顯はす。「慈氏よ、少法として能く少法を取るもの有ること無し」とは、此れ前の難を釋す。作用無きが故に、謂はく一切の法は作用も作者も皆成ぜざるが故なり。「是の如く生ずる時」とは、緣起の諸法の威力の大なるが故に。卽ち一體の上に二影の生ずる有り、更互に相ひ望めて不卽不離なり。諸の心心法は緣起の力に由りて、其の性法爾として是の如く而も生ず。「質を緣と爲して還つて本質を見るが如し等」とは、譬へば自面等の質に依止して、鏡等の中に於て還つて本質を見るが如し。迷亂に由るが故に謂らく、我れ影を見ると。鏡等の緣の威力の大なるに由るが故に、異れる影無しと雖も、而も別に影像の顯現する有るに似たり。此の心も亦爾なり。「是の如く生ずる時等」とは、謂

【一八】二界を說くべし、とは欲色二界のみ唯心と說くべしとなり。

【一九】色法に非ざる餘の法も無色界にて識の所取となるが故なり。

て別に所見の影像有りて顯現すと謂ふが如し。此の心も亦爾なり、是の如く生ずる時、相ひ似て異れる所見の影現ずと。卽ち此の教に由りて理も亦顯現す。所以は何ん、定心の中に於て、觀見する所に隨つて諸の青瘀等の所知の影像には、一切別の青瘀等の事無く、但自心を見るのみ。此の道理に由りて、菩薩は其の一切の識の中に於て應に比知すべし。皆唯識のみ有りて境界有ること無しと。又是の如き青瘀等の中に於ては憶持識に非ず、所緣の境は現前に住することを見るが故なり。聞思より成る所の二の憶持識も亦過去を所緣と爲すを以ての故に、所現の影像は唯識を成ずるを得。此の比量に由りて菩薩は未だ眞智の覺を得ずと雖も、唯識の中に於て應に比知すべし。

釋曰　[一二]「教及び理に由る」とは、至教量に由り及び比量に由りて、未だ唯識の眞智を證得せずと雖も、應に唯識のみにして無境なることを比知す可し。「十地經」とは、彼の經の中に於て菩薩の十種の地の義を宣說せり。此れ卽ち十地の行相の[一三]名、句、文身を安立し、識の變現する所を聚集して體と爲す。謂はく彼の聖者の[一四]金剛藏の識の變ずる所の影像を增上緣と爲し、聞者の身中の識上に影現して彼の法門に似る。是の如くして展轉して今に傳來するを、說いて名けて教と爲す。「唯心のみ有り」とは、心識は是れ一なり、[一五]唯の聲は所取の境の義を遣らんが爲なり。彼れ無きに由るが故に能取も亦無し。心法を遮せず、彼れと心とは相ひ離れざるに由るが故なり。若し心所有の法無ければ、心は未だ曾て轉ぜずと說くが如し。若し爾らば[一六]滅定は何が故に唯心のみたるや。是れ[一七]彼の宗の過なり。我が大乘宗にては、若し處として心有れば必定亦心相應の法有り。若し處として心相應の法有ること無ければ、心も亦定んで無し。「是の如く三界は皆唯心のみ有り」。此の言は三界は唯識なることを顯示す。「三界」と言ふは、欲等の愛結と相應して三界に墮在するを謂ふ。此の「唯識」の言は、唯諸の心心法のみ有りて、三界なる横計の所緣有ること無きを成立す。此の言は眞如の所緣、依他の所緣を遣らず。謂はく（これ）道諦の攝にして、根本と後得の二

【一二】次の一段は初に唯識の教理に依りて聖教の成立及び由來を釋し次に論本の解釋に入る。
【一三】名句文身とは名身、句身、文身にして名集つて句をなし、句集つて文をなす、音聲、言語、文章にして、卽ち聖教の能詮の所依たるものなり。
【一四】金剛藏菩薩は十地經の說者。
【一五】唯心といふ唯の字を置くは客觀の外境を遮せんが爲の限定辭なりとの意。
【一六】滅盡定には唯心のみ有りと立つる經部よりの難を釋す。
【一七】彼の宗とは唯識の理を知らざる小乘を指す。

論曰　又此の諸識は皆唯識のみ有りて都て義無きが故に。此の中何を以て喩と爲して顯示するや。應に知るべし、夢等を喩と爲して顯示す。謂はく夢中に都て其の義無く、獨り唯識のみ有るが如し。種種の色聲香味觸、舍、林、地、山など義に似て影現すと雖も而も此の中に於ては都て義有ること無し。此の喩の顯はすに由りて、應に隨って了知すべし。一切の時と處とに皆唯識のみ有りと。此等の言に由りて、應に知るべし。復〔一〇〕幻誑、鹿愛、翳眩等の喩有り。若し覺時に於ても一切の時處に皆夢等の如く唯識のみ有らば、夢より覺めて、便ち夢中には皆唯識のみ有りと覺るが如く、覺時にも何故に是の如く轉ぜざるや。眞智の覺する時も亦是の如く轉す。夢中に在りては此の覺轉ぜざるも、夢より覺る時は此の覺乃ち轉ずるが如く、是の如く未だ眞智の覺を得ざる時は、此の覺轉ぜず、眞智の覺を得れば此の覺乃ち轉ず。

釋曰　一切は唯識のみにして都て義有ること無きを、夢等の喩を擧げて以て顯示するは、〔一一〕共に成立するが故なり。「夢中の如し」等は其の文了じ易し。勞して重ねて釋する無し。

論曰　其の未だ眞智の覺を得ざる者有らば、唯識の中に於て云何が比知せんや。敎及び理に由つて應に比知す可し。此の中、敎とは十地經に薄伽梵の說けるが如く、是の如き三界は皆唯心のみ有りと。又薄伽梵は解深密經にも亦是の如く說けり、謂はく彼の經の中に、慈氏菩薩、世尊に問うて言く、諸の三摩地の所行の影像は、彼れと此の心と當に異有りと言ふべきや、當に異無しと言ふべきやと。佛、慈氏に告げたまはく、當に異無しと言ふべし。何を以ての故に、彼の影像は唯是れ識のみなるに由るが故に、我れ識の所緣は唯識の所現なりと說くが故なりと。世尊よ、若し三摩地所行の影像は卽ち此の心と異有ること無ければ、云何が此の心は還つて此の心を取るや。慈氏よ、少法として能く少法を取るもの有ること無し。然れば卽ち此の心の是の如く生ずる時には、卽ち是の如きの影像の顯現する有り。質を緣と爲して還つて本質を見て、而かも我れ今影像を見ると謂ひ、及び質を離れ

〔一〇〕幻誑とは幻術に依りて誑惑せらるゝをいふ。

〔一一〕共に成立すとは此等の譬は立敵共に異義なく承認することなればなり、

種は、卽ち是れ應に知るべきと、應に斷ずべきと、應に證すべきとの三法を宣說す。大般若波羅蜜多經の中にも亦說けるが如し、佛慈氏に告ぐ、若し彼彼の行相の事の中に於て、遍計して色と爲し、受と爲し、想と爲し、行と爲し、識と爲し、乃至一切の佛法の依止と爲し、名想にて施設し言說にて遍計し、以て、諸色の自性、乃至一切の佛法の自性と爲さば、是を遍計所執の色、乃至遍計所執の一切の佛法と名く。若し復彼の行相の事の中に於て、唯分別法性のみ有りと安立し、分別を緣と爲して諸の戲論を起し、名想を假立し言說を施設して、之を色と爲すと謂ひ、乃至一切の佛法と爲すと謂はゞ、是を分別の色、乃至、分別の一切の佛法と名く。若くは諸の如來世に出現するも、若くは世に出でざるも、法性は安立し法界は安立す、彼の遍計所執の色に由るが故に、此の分別の色は、常常時に於て、恒恒時に於て、是れ眞如の性、無自性の性、法無我の性、實際の性なり、是を法性の色と名く。乃至彼の遍計所執の一切の佛法に由るが故に、此の分別の一切の佛法は、常常時に於て、恒恒時に於て、[七]乃至、是を法性の一切の佛法と名く。廣く說くこと經の如し。

論曰 此の中、身と身者と受者との識は、應に知るべし、卽ち是れ眼等の六の內界なり。彼の所受の識は應に知るべし卽ち是れ色等の六外界なり。彼の能受の識は應に知るべし、卽ち是れ眼等の六識界なり。其の餘の諸識は應に知るべし是れ此の諸識の差別なり。

釋曰 「此の諸識」とは、前に說けるが如く身等を初と爲し、能受を後と爲すを謂ふ。「差別」と言ふは、是れ此の諸識の差別の性の故なり。謂はく卽ち此の有爲の識の中に於て、皆已行と現行と當行との差別の性有るが故に、之に依りて[八]世の影現の識を建立す。此の諸識に於て皆[九]一等の差別の性有るが故に、之に依りて數の影現の識を建立す。所受の識に於て上下等の差別の性有るが故に、之に依りて處の影現の識を建立す。餘類は應に知るべし。

【七】乃至とは前の是れ眞如の性云云といふを略したるなり。

【八】世とは過去、現在、未來の三世のこと。

【九】一等とは一二三等といふ數量のこと。

れぱなり。「此の如き諸識は皆是れ虚妄分別の攝する所にして」とは、前に說ける所の如き身等の諸識は所取能取の虚妄の分別にて安立するを性と爲す。「唯識のみを性と爲す」とは、邪分別に由りて二分顯現するも、實には唯是れ識のみなり。善等の法の中には邪執無しと雖も、緣起の力の故に二分顯現すれば、亦、唯是れ識のみなり。「是れ所有無く、眞實に非ざる義の顯現する所依なり」とは、所取の色等を所有無しと名け、能取の識等を眞實に非ずと名く。此の二[五]は皆是れ遍計所執にして、並びに名けて義と爲す。虚妄の分別に攝せらるゝ諸識は、是れ此の二種の顯現する因緣なるが故に「所依」と名く。「是の如きを名けて依他起相と爲す」とは、上に辨ずる所の、阿賴耶識を種子と爲す等の如きを、皆說いて名けて依他起相と爲す。「謂はく義無く、唯識のみ有る中に於て、義に似て顯現す」とは、實には所取及び能取の義無く、唯虚妄の分別に攝せらるゝ種種の識のみ有る中にて、遍計所執は義に似て顯現すとなり。「謂はく即ち彼の依他起相に於て、義に似たる相は永へに有ること無きに由る性なり」とは、謂はく緣起の心と及び心法とに於て、現ずる所の影の中、横計の相は永へに顯はるゝこと無き眞如實性なるに由る。此を即ち名けて圓成實相と爲す。又一切の法は因緣より生じ、唯識を性と爲すを當に知るべし、皆依他起相と名く。顚倒して横計し義に似て顯現するを、當に知るべし皆遍計所執相と名く。依他起の上の遍計所執は永へに顯はるゝこと無き眞如實性を當に知るべし皆圓成實相と名く。譬へば鹿愛[六]の、自の相續の力にて水に似たる所取、能取を安立して邪に遍計する性の如きを、當に知るべし、名けて依他起相と爲す。横計は實に有りて、水事顯現するを、當に知るべし、名けて遍計所執相と爲す。即ち是の如き鹿愛の事の中に於て、横計の水相は畢竟無性なるを、當に知るべし是を圓成實相と名く。又遍計所執相は即ち是れ遍計所執の自性なり。依他起相は即ち是れ依他起の自性なり、亦分別の自性とも名く。圓成實相は即ち是れ圓成實の自性なり。亦法性の自性とも名く。是の如き三

【五】二種とは所取と能取となり。

【六】鹿愛とは又鹿渴ともいふ、渴せる鹿は陽燄を見て水と誤想し之を逐ふといふ喩。

者との識と彼の所受識と彼の能受識と、世識と、數識と、處識と、言說識とは、此れ名言熏習の種子に由る。若し自他差別識ならば此れ我見熏習の種子に由る。若し善趣惡趣の死生識ならば、此れ有支熏習の種子に由る。此の諸識に由りて一切の界趣の雜染に攝せらるる依他起相の虛妄の分別は皆顯現することを得。此の如く諸識は皆是れ虛妄なる分別の攝ずる所にして、唯識のみを性と爲す。是れ所有無く眞實に非ざる義の顯現する所依なり。是の如きを名けて依他起相と爲す。此の中何者か遍計所執相なりや。謂はく義無くして唯識のみ有る中に於て、義に似て顯現するなり。此の中、何者か圓成實相なりや、謂はく卽ち彼の依他起相に於て義に似たる相永へに有ること無きに由る性なり。

釋曰　「謂はく身と身者と受者との識」とは、後に當に說くが如く。眼等の六內界を性と爲す。其の所應の如く、眼等の五識の所依たる意界を身者識と名け、第六意識の所依たる意界を受者識と名く。「彼の所受識」とは、後に當に說くが如く、是れ色等の六外界なり。「彼の能受識」とは、後に當に說くが如く是れ六識界なり。「世識」とは、謂はく[三]三時に似て影現ずるなり。「數識」とは、謂はく一等の算數に似て影現ずるなり。「處識」とは、謂はく聚落園等に似て影現ずるなり。「言說識」とは、謂はく見聞覺知の言說に似て影現ずるなり。「自他差別識」とは、謂はく身等の識の、我と我所との執は相續して、不斷に我と我所とを執し、[四]他と他所等と差別有るが故なり。「善趣惡趣の死生識」とは、謂はく天人及び榛落迦・傍生・餓鬼の死生に似て影現ずるなり。「此の中、若し身・身者等、乃至言說識ならば、此れ名言熏習の種子に由る」とは、謂はく彼の身等は皆名言熏習の種子に由りて、識の變現する所にして、別事無きが故なり。「若し自他差別識ならば、此れ我見熏習の種子に由る」とは、謂はく染汚の意の我見熏習を因と爲して變現すればなり。「若し善趣惡趣の死生識ならば、此れ有支熏習の種子に由る」とは、謂はく有支熏習を因と爲すに由りて變現す

【三】三時とは過去、現在、未來なり。

【四】他と他所とは我と我所に對し自他の別を立て、自の所有と他の所有の別をなすをいふ。

卷の第四

所知相分第三の一

〔相章第一〕

論曰　已に所知の依を說けり。所知の相は復云何が應に見るべきや。此れに略して三種有り、一には依他起相、二には遍計所執相、三には圓成實相なり。

釋曰　「已に所知依を說けり」とは、謂はく復當に說かざるべしとなり。[一]「此れ」とは、此の所知の相なり。「略して三種有り」とは、謂はく一切の法は、要ず應に知るべき所と、應に斷ずべき所と、應に證すべき所との差別有るが故なり。「依他起相」とは、謂はく、業と煩惱と所取と能取と遍計の隨念との他に依りて起ることを得るが故なり。[二]是の如きの相は、何の所表にて知るや。謂はく依他起相なり。「遍計所執相」とは、謂はく永く相無し。永く相無き者は是れ遍計所執なり、所取能取の補特伽羅と及び法との有性の所相なるが故に。云何が非有を所相と爲すべきや。謂はく卽ち是の如く而も分別するが故なり。薄伽梵は是の如きの言を說くに由る、乃至實有を實有と知らず、乃至非有を非有と知らさず。是の如く實有を實有爲りと知り、若くは實有に非ざるを實有に非ずと知ると。「圓成實相」とは、謂はく卽ち彼の遍計所執の所取と能取とに於て或は我、或は法の無性の性なり。彼を用つて量と爲して、境の性を了す、彼に於て遍く知り方に能く了別すれば、遍計所執は決定して有るに非ず、相違有るの性なるが故に、境爲るの性に非ざるが故に。

論曰　此の中何者が依他起相なりや。謂はく阿賴耶識を種子と爲す虛妄の分別に攝する所の諸識なり。此れ復云何ん。謂はく身と身者と受者との識と、彼の所受の識と、彼の能受の識と、世識と、數識と、處識と、言說識と、自他差別識と、善趣惡趣の死生識となり。此の中、若し身と身者と受

[一] 復當に說かざるべしとは已に說き竟れば更に復之を說かずとの意なり。

[二] 遍計の隨念とは邪妄の隨念分別なり、論には念を合となすも誤りなるべし。

く、唯應に能く實に見る緣相と作るべし。餘文は了し易し。重ねて釋することを須ひず。

論曰 何の因緣の故に、善不善の法は能く異熟を感ずるや。其の異熟の果は無覆無記なればなり。異熟果は無覆無記なるに由りて、善・不善と互に相違せず。善と不善とは互に相違するが故に、若し異熟果にして善不善の性ならば、雜染と還滅とは應に成ずるを得ざるべし。是の故に異熟識は唯無覆無記なるのみ。

釋曰 是の如く已に阿賴耶識の有らゆる句義・異門・訓詞・體・相・決擇及び差別とを釋せり。復此れ能く正行に順ずることを顯はさんと欲するが故に問答を起して、「何の因緣等」といふ。「無覆無記」とは、是れ無染無記の義なり。異熟果等に由りて無記の因緣を辨ず。「無覆無記は善不善と互に相違せず」とは、是れ共依なるが故に、[七〇]無間業等(又は)、世間の離欲等を作すも、[七一]皆同じく有するが故に。是の故に異熟識は善不善に非ず。此の[七二]二の因と果とは相違すること勿し。

【七〇】無間業とは地獄に墮すべき重惡業なり、離欲は善業なり。

【七一】善惡の二種の因を同じく阿賴耶識に所有すとの意なり。

【七二】二の因とは善不善の二類の種子なり、果とは異熟果としての無記の阿賴耶識なり。

ことは應に成ずるを得ざるべし。復譬喩の相有り。謂はく此の阿賴耶識は幻焔夢翳を譬喩と爲すが故に。此れ若し無ければ不實なる遍計の種子に由るが故に、顚倒する緣相は應に成ずるを得ざるべし。復具足の相と不具足の相と有り。謂はく諸の具縛の者を具足の相と名け、世間の欲を離るる者を損減の相と名け、有學の聲聞及び諸の菩薩を一分永拔の相と名け、阿羅漢、獨覺及び諸の如來を煩惱障を全く永く拔く相及び煩惱所知障を全く永く拔く相と名く。其の所應の如し。此れ若し無ければ是の如く次第に雜染還滅することは應に成ずるを得ざるべし。

釋曰「麁重の相」とは、惡の故に麁と名け、此を得れば沈沒するが故に「麁重」と名く。即ち是れ煩惱及び隨煩惱の所有の種子なり。此れ若し無ければ、有らゆる麁重にして堪能無き性は應に有ることを得べからず。「輕安の相」とは、[69]說と相違して、輕く而も安隱なる如き堪能有るの性は、是れ輕安の相なり。「有受盡の相とは、謂はく已に異熟果を成熟せる等」とは、善惡の種子既に成熟し已つて、重ねて熟す可らず、受用盡くるが故なり。猶種子の既に芽を生じ已つて重ねて生ず可からざるが如し。「無受盡の相とは謂はく名言熏習の種子なり」とは、即ち彼の種子は緣に隨つて增長し、能く名言、戲論を起す因なるが故なり。「此れ若し無ければ」とは、若し二相の阿賴耶識無ければとなり。「已に作り已に作れる」とは、謂はく已に作れる善と、及び已に作れる惡となり。「與果を受け盡くす」とは、是れ已に與果して受用を壞する義なり。此れ若の有受盡相無きを破するなり。「又新に名言熏習の生起することは應に成ずるを得ざるべし」とは、謂はく都て本有ること無ければ今有る世間の名言無し、一切の名言は皆本舊の名言種子に因る。此れ若の無受盡相無きを破す。「譬喩相」とは、謂はく幻等の能譬喩の事に由りて所喩の相を顯はす。幻事等は是れ能く生起するも實には因を見ざるが如し。阿賴耶識も亦復是の如し。「此れ若し無ければ」とは、謂はく若し喩に所喩の相有ること無ければ、阿賴耶識には應に不實なる顚倒の緣相無かるべ

【六九】前の說と相違しての意。

名く。〔六五〕業に於て多く魯叱の緣を說くが故なり。「皆成立することを得」とは、謂はく所見に隨つて種々の金銀草木等の別は皆成立することを得となり。「斷じ難く遍く知り難きを」とは、謂はく應に斷ずべき所の故に名けて斷と爲し、應に遍く知るべき所の故に遍く知ると名く。〔六六〕斷と遍知とは極大の勤苦なり。事猶辦ぜざるが故に說いて「難し」と爲す。「結」とは、結の斷ず可きこと難きが如き故なり。所以は何ん、共有なるを以ての故に。是れ〔六七〕共因の義なり。「心異る」と言ふは、種々の勝解各同じからざるが故なり。「外相大なるに由るが故に」とは、是れ器世間は大いに安布するの義なり。「淨なる者」と言ふは、已に轉依せるものを謂ふ。「滅せずと雖も」とは、謂はく卽ち此に於て、其の餘の有情は分別を持するが故に〔六八〕全く滅すべからず。「又淸淨なる佛土は佛の淸淨なりと見るに由る」とは、謂はく彼に於て未だ色等の分別を斷ぜざる異生の見る所の淤泥・沙石・瓦礫・高下・不平・株杌・毒刺・不淨なる糞土、諸の穢土の中に、已に色等の分別を斷ぜる如來は、金銀等の衆寶より成る所の淸淨なる佛土と見、穢磧に處すること淨き園林を見るが如し。「此れ若し無ければ」とは、謂はく若し此の共・不共の相の阿賴耶識無ければとなり。「諸の器世間と有情世間との生起する差別は、應に成ずるを得ざるべし」とは、淨穢の差別と、苦樂の差別とは皆應に成ずべからずとなり。

論曰 復麁重の相と及び輕安の相と有り。麁重の相とは、謂はく煩惱、隨煩惱の種子なり。輕安の相とは謂はく有漏の善法の種子なり。此れ若し無ければ、所感の異熟に堪能する所無きと、堪能する所有るとの所依の差別は應に成ずるを得ざるべし。復有受盡の相と、無受盡の相と有り。有受盡の相とは謂はく已に異熟果を成熟せる善不善の種子なり。無受盡の相とは謂はく名言熏習の種子なり。無始の時より來、種々の戲論より流轉せる種子なるが故に。此れ若し無ければ已に作り、已に作れる善惡の二業の與果を受け盡くすこと應に成ずるを得ざるべし。又新に名言熏習の生起する

【六五】業格に於ては の意なるべし。

【六六】一切の惑障を斷じ一切の法を遍知するけ極大の勤苦修行を要すとの意。

【六七】共因とは他の有情と共同して有する因なりとの義。

【六八】此の器世間を變現せる業因は自己のみならず他の有情と共同なるが故に自己の業因は滅するも他の有情の業因に持せらるゝが故に、其の一分は滅するも全分を滅することは能はずとの意なり。

復別頌有り。前に引く所に對して種々の勝解と種々の所見とを皆成立することを得。

　諸の瑜伽師は一物に於て、　種々の勝解各同じからず
　種々の所見も皆成ずることを得　故に知る所取は唯、識有るのみと、

此れ若し無ければ、諸の器世間と、有情世間との生起する差別は應に成ずることを得ざるべし。

釋曰　相貌の差別は多種にして同じからず。謂はく共相等種々に差別す。此の中、「共相とは、器世間の種子を謂ふ」とは、是れ器世間の影現する識の因なり。又共相とは、所謂[六〇]自業に相似せる異熟の增上の力なるが故に。[六一]一切の能く受用すること有る可き者には、皆相似の影の現ずる識生ずること有り。「又不共相とは各別の內處の種子を謂ふ」とは、我執の所緣の故に各別と名け、內身の中の眼等の諸處に在るが故に內處と名く。卽ち是れ各別の內處の因の義なるが故に種子と名く。「共相は卽ち是れ無受生の種子なり」とは、是れ能く苦樂等無きものを生起し、損無く益無き所依の因なり。器世間には苦樂等の損益の事有るに非ざるが故なり。「又不共相は卽ち是れ有受生の種子なり」とは、是れ能く苦樂の受等を生起する所依の因なるが故なり。「對治の生ずる時」とは、謂はく道諦の生ずる時なり。「唯不共相のみ對治せられて滅し」とは、各別の內處の諸の種子のみ滅す。相違するを以ての故なり。「共相は他の分別の爲に持せられて、但清淨となることを見るのみ」とは、此の共相は是れ器世間なるに由るが故なり。修行者は復內處の分別は永く滅すと雖も、而も[六二]他の相續の分別に持せられ、但彼に於て清淨なりと證見す可きのみ。彼の清淨なることは淨き虛空の如く、水の爛す所に非ず、地の依る所に非ず、火の燒く所に非ず、風の吹く所に非ずと觀ずるなり。云何が[六三]義有るに於て、而も清淨なりと見ることを得んと。他の難を容るゝことを恐るゝが故に次に說言す。[六四]「瑜伽師は一物等に於て種々に勝解するが如し」とは、謂はく種々の金銀草等に隨つて差別して勝解す。「種々の所見」とは、唯見られたる事を說いて所見と

【六〇】自業に相似せる異熟云云とは自業と相似せる同種類の業を有する他の有情に對しては自業は增上緣となりて力を與ふるが故なり。

【六一】一切の能く受用云云とは山河大地等すべて他の有情と共同に受用すべき者の意。

【六二】他の相續云云とは他の有情の業に持せられて山河等ありと雖も、但之を雜穢と見ずして清淨と見るとなり。

【六三】義有る云云とは設ひ清淨と見るも實には雜穢の山河大地あり、如何が之を清淨と見るやと難責するなり。

【六四】瑜伽師とは瑜伽(ヨーガ)卽ち觀行を修する者の意。

釋曰　三種は當に釋すべし。且らく四種を釋するが故に「此の中、引發等」の言を說く。「引發の差別とは、新に熏習を起すを謂ふ」とは、謂はく最初の名言の生起する所の熏習、是を引發の差別と名く。此の熏習の引發に由りて生ずるが故なり。「此れ若し無ければ行が識に緣と爲り、取が有に緣と爲ることは應に成ずるを得ず」とは、謂はく卽ち此の阿賴耶識は諸の煩惱隨眠の力を待つが故なり。生じて現前に住するを說いて名けて有と爲す。「異熟の差別とは、謂はく行と有とを緣と爲して諸趣の中に於て異熟差別す」とは、謂はく彼の引く所の異熟の差別なり。「此れ若し無ければ則ち種子無し。後有の諸法の生ずること應に成ぜざるべし」とは、謂はく若し根を離るれば卽ち枝等無し。「緣相の差別とは謂はく卽ち意中の我執の緣相なり」とは、謂はく卽ち此れ阿賴耶識は染汚の意の中の薩迦耶見の勢力の起す所の、緣じて我を執する時我執の緣相なり。「此れ若し無ければ染汚の意の中の我執の所緣は應に成ずることを得ざるべし」とは、若し此の緣相としての阿賴耶識の差別無ければ、意中の我執の所緣は成ぜず。

論曰　此の中相貌の差別とは、謂はく卽ち此の識に共相有り不共相有り、無受生の種子の相、有受生の種子の相等なり。共相とは器世間の種子を謂ひ。不共相とは各別の內處の種子を謂ふ。共相は卽ち是れ無受生の種子、不共相とは卽ち是れ有受生の種子なり。對治の生ずる時は唯不共相のみ對治せられて滅し、共相は他の分別の爲に持せられ、但清淨となることを見るのみ。瑜伽師は一物の中に於て種々の勝解と、種々の所見とを皆成立することを得るが如し。此の中二頌あり。

斷じ難く遍く知り難きを　應に知るべし共結と名く
瑜伽者の心異り　外相の大なるに由るが故に
淨は滅せずと雖も　而も中に於て淨なることを見る
又淸淨なる佛土は　佛の淸淨なりと見るに由る。

が故に轉依は理に應ぜず」とは、若し彼れ無種と說き、或は無體の彼れ有ること無きに非ずと說くべきもの有るを以て、說いて無種無體なりと言ふを得べければ、出世の心の正に現前する時に彼の得可き有るに非ず。云何が彼れ種子無し(と說き)或は體斷滅すと說くべけんや。

〔差別章　第十七〕

論曰　復次に此の阿賴耶識の差別云何ん。略して說かば應に知るべし、或は三種、或は四種なり。此の中三種とは謂はく三種の熏習の差別の故なり。一には名言熏習の差別、二には我見熏習の差別、三には有支熏習の差別なり。四種とは、一には引發の差別、二には異熟の差別、三には緣相の差別、四には相貌の差別なり。

釋曰　「此の阿賴耶識の差別は云何ん」とは、謂はく已に阿賴耶識の相を信解し、義を成就せり。復差別を問ひて「或は三種或は四種なり等」と答ふ。「名言熏習の差別」とは、謂はく我と法と用との名言多きが故に。人天等の我、眼色等の法、去來等の用の熏習する差別有り。此に由りて我と法と用との影顯現し、諸識の生起する功能差別す。「我見熏習の差別」とは、謂はく四煩惱に染汚せらる〻意は、薩迦耶見の力の故に、阿賴耶識の中に於て、能く我を執する熏習の差別有り。「有支熏習差別」とは、謂はく福・非福・不動行の增上の力の故に、天等の諸趣の中に於て、無明等乃至老死の熏習の差別有り。

論曰　此の中、引發の差別とは、新に熏習を起すを謂ふ。此れ若し無ければ行が識に緣と爲り、取が有に緣と爲ることは應に成ずることを得ざるべし。此の中異熟の差別とは、謂はく行と有とを緣と爲して、諸種の中に於て異熟差別す。此れ若し無ければ則ち種子無し。後有の諸法の生ずること應に成ぜざるべし。此の中緣相の差別とは、謂はく卽ち意中の我執の緣相なり。此れ若し無ければ染汚の意の中の我執の所緣は應に成ずることを得ざるべし。

く應に知るべし。

論曰　此の中三頌あり、

菩薩は淨心に於て　　五識を遠離して
餘無し。心の轉依をば　　云何が汝當に作すべきや
若し對治は轉依ならば　　斷に非ざるが故に成ぜず
果と因と差別無し　　永へに斷ずるに於て過を成ず、
種無く或は體無きを　　若し許して轉依と爲さば
彼の二の無は無きが故に　　轉依は理に應ぜず。

釋曰　復次に若し阿賴耶識有るを信ぜざれば、轉識に住する轉依の如きは成ぜざることを、結[五九]句の頌なる三頌を以て難を徵す。所謂、「菩薩は淨心に於て等」なり、「淨心に於て」とは、謂はく善識に於てなり。「五識を遠離して」とは、謂はく意識に於てなり。「餘無し」と言ふは、惡・無記を除いて、餘の有漏の善の意識無きが故なり。謂はく無漏の中には餘の有漏を離るるが故に餘無しと說く。卽ち能治の中には所治の隨眠有るに非ず。「心の轉依」とは、心が轉依するなり。「云何が汝當に作すべきや」とは、若し阿賴耶識有るを信ぜざれば、汝當に云何が此の轉依を作すべきや。若し對治は卽ち是れ轉依なりと許さば、彼れ斷に非ざるが故に理成ずることを得ず。能對治は卽ち是れ永斷に非ず。何者か因を斷ずるや。謂はく永く斷ぜらるる者は、是れ能治の果にして、是れ轉依の體なるに由る。若し能治は卽ち是れ永斷なりと許さば、果と因とは應に差別無かるべし。能治の因は卽ち斷の果なりと立つるが故に。「種無く或は體無きを若し許して轉依と爲さば」とは、彼の別なるを許すことを顯はす。是の故に言ふ、或は多くの雜染の種積集して心に在り、或は彼の種無きを許して轉依と爲し、或は種の體無きを許して轉依と爲すと。「彼の二の無は無き

【五九】此の一段の結句の意。

何を用つて復阿頼耶識は是れ諸法の因なりと許せん、と。此の執を遮せんが爲の故に次に說いて言く。「此れ成ずることを得ず、前に已に說けるが如し」と。二念倶有せず等と說けるが如し。復何の過有りや。謂はく無色より沒して色界に生ずる時に、前の色の種子は能く今の色を生ずることは、理成ずるを得ず。久しく斷滅せるが故なり。無想より沒して心想生ずる時、及び滅定等より出でて心生ずる時に、前の心の種子は能く後の心を生ずることは皆理に應ぜず。久しく斷滅せるが故なり。又若し其の倶生倶滅して攝受する種子と相應する道理を離れて、但し唯前刹那の心有りて、能く種子と爲り、無間の後の刹那の心を引生すと執すれば、卽ち阿羅漢の後心成ぜず。應に有餘依無き妙涅槃界に入ることを得べからず。最後心は能く種子の、等無間緣と爲つて餘心を生ずるに由るが故に。是の如きは卽ち應に無餘依の妙涅槃界無かるべし。是の故に色心の前後に相ひ生ずることは、但應に等無間緣及び增上緣有ることを容すべし。因緣有ること無し。

論曰　是の如く若し一切種子の異熟の果識を離れては雜染と淸淨とは皆成ずることを得ず。是の故に、前に說く所の相の如き阿頼耶識は決定して是れ有ることを成就す。

釋曰　是の如く、若し一切の種子の異熟の果識を離れては、前に說く所の如く種々の過失の隨逐する所にして、[五七]欲樂無しと雖も自事重きが故に、然らば必ず應に阿頼耶識は決定して是れ有ることを許すべし。是の如きを名けて反詰の道理と爲す。此の中亦順成の道理有り。相を覆ふて顯示するは、方便の因なるが故に、虛誑無き正論の總相を以て、大乘は眞に是れ佛語なることを成立せん。謂はく大乘敎は眞に是れ佛語なり。一切は補特伽羅無我の性に違はざるが故なり。阿頼耶識は能詮の敎にして所詮の義に稱ふ、佛の所說なるが故なり。刹那に速かに滅す等の言を說けるが如く、佛の餘に言へるが如し。又諸大乘は定んで是れ殊勝なり。[五八]法と有法と相違せざるが故に。甚深なる緣起等の敎を說けるが如し。餘は廣く決擇し、難を釋し難を立つることは理の如

【五七】好む所にあらずと雖も自の過失を責められてはの意なり。

【五八】法と有法とは因明の用語にして、宗の主と賓とをいふ。例せば諸行は無常なりといふに於て諸行は有法、無常は法なり、故に法と有法と相違せざれば眞義を說くものといふべし。此の故に殊勝なりといふ。

執を破すること已に前に說けるが如し、謂はく彼れ卽ち應に唯此等を滅すべし、是の故に[五三]此の中の意識に受無しとは、道理に應ぜず。又此の中に於て何の因緣有りや。若し尋伺の語行滅すれば、語は則ち轉ぜず、想受等の意行滅するも而も意は猶轉ず。身行滅するも其の身は猶住するが如し。故に意行滅するも意も亦應に住すべしと例言すべからず。薄伽梵は、身行を離れて外に餘因有りて、身をして安住せしむと說けるに由る。所謂、飮食・命根・識等なり。是の故に入息出息無しと雖も身は猶住す可し。想受等を離れては、曾て未だ別の意行有ることを說くを見ず。是の故に此の中想受等を離れて、意有ることを安立するは道理に應ぜず。故に此の定の中の識は意識に非ず。又此の中の識は亦不善に非ず。定は是れ善なるが故に。無想定の中にすら尙一切の不善有ることを許さず。況んや解脫に趣き次第に定の中間の行を超越する滅盡定の內に不善有るを得んや。[五四]又[五五]今の時に於て工巧等の事有ることを得べき無きが故に、[五六]三無記は此の中に皆無し。若し此の中に異熟識有ることを許せば、則ち是れ阿賴耶識を成立す。又若し有るが說く。別に一種有り、非異熟行轉ずるを第五無記と名くと。是の如く執する所は唯名想のみ有り。前に說けるが如き過は皆離るること能はず。

論曰 若し復有るが執すらく、色心の無間に是れ諸法の種子を生ずと。此れ成ずることを得ず。前に已に說けるが如し。又無色や無想天より沒し、滅定等より出づるは道理に應ぜず。又阿羅漢の後心成ぜず。唯等無間緣有ることを容すべきのみ。

釋曰 「若し復有るが執すらく」とは、謂はく經部師は是の如き執を作す。「色心の無間に生ず」とは、謂はく諸の色心は前後次第に相續して生ずとなり。「是れ諸法の種子なり」とは、是れ諸の有爲の能生の因性なり。謂はく彼れ執して言く、前刹那の色より、後刹那の色は無間にして生ず。前刹那の心より、後刹那の心と及び相應の法とは無間にして生ず。此の中に因果の道理は成就す。

【五〇】勝義とは涅槃をいふ、今は有爲の善なれば勝義にあらずとなり。

【五一】此の異計は觸ありといふも觸の本義は根境識の三の和合に在り、今定中の觸は觸に依りて苦樂等の受を生ずる力を有せずと立つるなり。

【五二】和合觸は必ず受を生ぜんも一切の觸か皆和合觸として受を生ずるに非ずとの意なり。

【五三】此の定は唯受想を滅するが爲なり、而も此の心に受なしとは道理に應せずとの意、

【五四】以下は定心は無記なりといふを論ず。

【五五】今の時とは滅盡定に入る時なり。

【五六】三無記とは工巧、威儀、變化の三無記をいふ、世親釋參照。

彼の能依を拔くことは理に應ぜざるが故なり。「譬喩有るが故に」とは、謂はく無想定有り是れ此の中の譬喩なり。[四〇]彼を拔除するが如きは理に應ぜざるが故に、[四一]此れも應に倶に滅すべし。或は[四二]大種所造の譬喩有り、彼れ更互に相ひ離れざるが如き故に。又[四三]善等は遍行の大地に非らざれば、是れ定んで異るが故に、一切心に於て遍有に非ざる可し。[四四]想受の二法は是れ大地なるが故に、決定して遍行の類の中に安住す。是の故に識有りて此の二有らざることは道理に應ぜず。斯の意を顯はさんが爲の故に、復說いて「[四五]非遍行の如く此れ有ならざるが故に」と言ふ。

論曰　又此の定の中には、意識に由るが故に、執して心有りとすれば、此の心は是れ善不善無記皆成ずることを得ざるが故に、理に應ぜず。

釋曰　又此の定の中に、身を離れざる識は決して意識に非ず。善・不善及び無記性皆成ぜざるを以ての故なり。謂はく若し意識とすれば決定して或は善、或は是れ不善、或は復無記なるべし。然るに此の意識は且らく是れ善に非ずとせんか、應に善根と相應するの過有るべきが故に。前に已に說けるが如し。云何ぞ善心ならば無貪等を離れんや。此等は云何が應に觸を離るべき。此れ復云何が應に遍行の受等の心法を離るべき。或は復有るが執すらく、[四六]加行の善心の引發する所の故に、定心は是れ善なり、[四七]善根と相應する力に由らざるが故にと。此れと[四八]彼の論の相應の力に由りて、心は善を成ずることを得とは、相違を安立す。又此の中に於て何の定有りて其の加行の心を緣ずるや。無貪等と相應するに由るが故に善ならば、此の定に於ける等流果の心に非ず又此の心は是れ[四九]自性善なるに非ず、自性善ならば唯善根等を其數に入るるを以ての故なり。又此の善心は[五〇]勝義の善に非ず、唯解脫のみ有りて是を決定するが故なり。或は有るが復謂はく、[五一]若し能く和合するを和合觸と名く、[五二]一切の觸は皆能く和合するに非ず。今此の中の觸は能く受を生ずるに於て堪能する所無し。定の加行の時彼の受等に於て已に厭患するが故にと。此の邪

【四〇】彼のとは能依止を指す。

【四一】此れとは所依止を指す。

【四二】大種所造の譬とは地水火風の四大種と其の所造の色法との如く能造の大種を離れて所造の色法なく互に相離れざるをいふ。

【四三】善等云云とは前に擧げたる善の心所は一切の心識に遍行するものにあらざれば遍行の大地にあらずといふ。

【四四】想・受等の遍行の大地と異るなり。

【四五】これ非遍行の心所法を例として遍行の心所法も同じく能依の法なれば有ること無しとの意なり。

【四六】加行の善心云云とは定中の善心は此の定の加行の時の善心に引發せられたる等起の善なりと轉計す。

【四七】善根と相應する力とは相應善のこと。

【四八】彼の論とは此の執は經部の說なれば其の所立の義と相違すと破す。

【四九】自性善とは他の力に依らずして心自體が善性なるをいふ、故に此の心が自性善ならば等流果なりと云ふを得んも、而も自性善にあらずと破す、若し自性善ならば無貪等の善根は當然其の數に入るべく、然らば前に破するが如き過失を成ぜんとなり。

に、譬喩有るが故に、非遍行の如きは、此に有らざるが故に。

釋曰 「又若くは有るが執すらく意識を以ての故に滅定に心有りと、此の心成ぜず」とは、謂はく此の定の中の身を離れざるの識は決して意識に非ず。「定應に成ずべからざるが故に」とは、是れ想と受と倶に滅せざるの義なり。彼の意識と諸の大地[三三]とは決して相離れざるに由り、想と受との二種倶に滅せざるが故に、定應に成ずべからず。又此の中の識は決して意識に非ず。所緣と行相とは得べからざるが故に。一切の意識は所緣と行相とを得べきを離れず。此の(定の)中には(所緣と行相と)無きが故に[三四]彼れ有ることを成ぜず。又此の中の識は決して意識に非ず。應に善根の現行する過有るべきが故に。此の定の心は決して不善に非ず、亦無記に非ざるに由り、何者か唯善なる。謂はく此の[三五]善心は無貪等を離るれば決して有ることを得ず。相應するが故に、善は是れ[三六]彼の宗なるが故に、善根既に有り。想受の二種何ぞ現行せざる。又無貪等は決して觸を離れず、故に觸得可し。定の生ずる所の觸は[三七]輕安を相と爲す。[三八]捨受を順樂するが故に應に受有るべし。觸と倶に生じて受想等有るは、聖の說く所なるが故に、應に滅定無かるべし。或は謂はく此の中想受を厭患すること。癰箭等の如くなるが故に、滅定を生ず、此の定の中に於ては唯想受のみを滅す、と。此の計を遮せんが爲の故に復說いて「三摩地に於て功能有る等」と言ふ。三摩地の中に能く厭患する所は、唯此の滅のみに非ず、何を以ての故に、無想定の中に、前方便の三摩地の力に由りて、應に唯想のみを滅する過失有るべきが故なり。若し厭患する所唯此の滅のみならば、無想定は前に唯想のみを厭患し、無想定の中には應に唯想のみを滅すべし。然も汝許さず。又[三九]所依止の滅を離るる如きは、決定して能依止の滅有ること無きが故に、此の中に於て心も亦應に滅すべし。是の如く滅定の心若し滅せざれば、應に思信等の善根現行すべし。彼若し滅すれば心も定んで應に滅すべし。是の故に應に唯能依を滅するのみなるべからず。既に所依有りて

【三三】大地とは大地法の心所にして受、想、思等をいふ、これ一切の心識に遍く起る心所なるが故に大地と名く。

【三四】定心中に想受あるべからず、之を滅せんが爲めの滅盡定なれば、定成せずといふ。

【三五】善心と云へば無貪無瞋等の善根を離れて有るべからずの意。

【三六】善は必ず善根と相應し、善根の宗本とする所なればなり。

【三七】輕安とは定中に身心の輕快を感ずること。

【三八】捨受とは定中には苦樂の感受なく、非苦非樂の中和の感受あり、之を捨受いふ。

【三九】所依止の心を滅せざれば能依止の心所も滅することなしとの意。然らば想受等の能依止を滅すとすれば此の定の所依止の心も亦滅すべしとなり、次には滅と不滅とに就て兩難を立てゝ責む。

れざることを成ずべし。此を治せんが爲に滅定は生ずるに非ざるが故なり。

釋曰　是の如く已に雜染と清淨との成ぜざる道理を説き、決定して阿賴耶識有ることを證せり。復滅定の成ぜざる因緣を引いて[三二]前力を顯發せんが故に、「又滅定に入る等」の言を説く。佛と獨覺と、若くは阿羅漢、若くは不還果、及び不退位の諸の菩薩等を除き、餘は入ること能はず。滅定と死との差別を顯はさんが爲の故に、此の識は身を離れずと説く。「識」と言ふは阿賴耶識を離れず。何を以ての故に、滅定は此を對治する能はざるが故なり。此を治せんが爲に滅定を生ずるに非ず、所緣と行相とは了知し難きが故に。不明了の識を對治せんが爲に、而も滅定に入るに非ず、不寂靜の性は了知し難きが故に。是の故に滅定は阿賴耶識を對治する能はず。若し對治無ければ此れ則ち滅せず、轉識を治せんが爲の故に此の定生ず。所緣と行相と不寂靜の性とは了知し易きが故なり。是の故に此の定は唯轉識を滅するのみにて、中に於て阿賴耶識を滅せず。

論曰　又定を出でて此の識復生ずるに非ず。異熟識は既に間斷し已つて、結の相續を離るれば重ねて生ずること無きに由るが故なり。

釋曰　有るが執すらく、定中の諸識は滅すと雖も、而も出定の時に識還つて生ずるが故に、身を離れずと言ふと。此の義を遮せんが爲の故に、「又定を出でて……非ず等」の言を説く。此の文了じ易し、重ねて釋することを須ひず。

論曰　又若くは有るが執すらく、意識あるを以ての故に滅定に心有り、と。此の心成ぜず。定應に成ずべからざるが故に、所緣と行相とは得べからざるが故に、應に善根と相應する過有るべきが故に、不善と無記とは理に應ぜざるが故に、應に想受の現行する過有るべきが故に、觸有るべきが故に、三摩地に於て功能有るが故に、應に唯想のみを滅する過失有るべきが故に、應に其の思信等の善根の現行する過有るべきが故に、彼の能依を拔いて所依を離れしむることは理に應ぜざるが故、

【三二】前力とは前に説きし論證の力を更に増大せんとなり。

惡業を朽壞し對治す」と言ふ。無始の時より來、作す所の惡業を、此の聞熏習は彼の功能を損す是の故に說いて「朽壞し對治す」と名く。「法身の攝」とは、是れ彼の因なるが故なり。「解脫身の攝」も亦是の如く說く。此の中、法身と解脫身と差別有るは、謂はく解脫身は唯永へに煩惱障の縛のみを遠離す。村邑の人の、枷鎖等の有ゆる禁繫を離れて、衆苦を息除するも而も殊勝にして增上なる自在の富樂と相應すること無きが如し。其の法身とは、一切の煩惱所知の二種の障の縛と幷に諸の習氣とを解脫し。力無畏等の無量の希なる奇妙の功德衆に莊嚴せられ、一切の富樂の自在の所依として、第一最勝の自在を證得し、樂ひに隨つて行ず。譬へば王子の先に灌頂を蒙るが如く、少しく愆犯有りて囹圄に閉在するも、纔かに解脫を得れば卽ち第一最勝なる自在の富樂と相應す。「卽ち所依を轉ず」とは、仙藥を服するが如く、所依の身を轉ず。命終りて生を受くること無しと雖も、而も[三一]劣を捨てて勝を得る有り。「種子無くして轉ず」とは、應に知るべし、異熟果の識には唯一切の雜染の種子無し。是の故に一切種を斷ずと說く。「永へに斷ず」とは、一切の種子の品類を斷ずるが故なり。

論曰 復次に云何が猶水と乳との如く、非阿賴耶識と阿賴耶識と同處に倶に轉じて、而も阿賴耶識の一切種は盡きて、非阿賴耶識の一切種は增すや。譬へば水と鵝の飲む所の乳とに於ける如し。又世間の欲を離るることを得る時に、非等引地の熏習は漸く減じ、其の等引地の熏習は漸く增して轉依を得るが如し。

釋曰 「譬へば水と鵝の飲む所の乳とに於けるが如し。又世間の欲を離れ、轉依するが如し等」とは、其の文了じ易し、勞して重ねて釋せず。

〔順道理章　第十六〕

論曰 又滅定に入るも識は身を離れずとは、聖の所說なるが故なり。此の中、異熟識は應に身を離

【三一】命終つて勝處に轉生せずとも現身に向上して勝れたる境界となるの意。

論曰　又此の正聞熏習の種子の下中上品は、應に知るべし、亦是れ法身の種子にして阿賴耶識と相違し、阿賴耶識の所攝に非ず。是れ出世間の最淨なる法界より等流せる性なるが故に、是れ世間なりと雖も而も是れ出世の心の種子の性なり。又出世の心の未だ生ぜざる時なりと雖も、已に能く諸の煩惱の纏を對治し、已に能く諸の險惡の趣を對治し、已に一切の有らゆる惡業を朽壞對治と作る。又能く一切の諸佛菩薩に隨順し逢事す。是れ世間なりと雖も、應に知るべし、初修業の菩薩の得る所も亦法身の攝なり。聲聞獨覺の得る所は唯解脫身のみの攝なり。又此の熏習は阿賴耶識に非ず。是れ法身と解脫身との攝なればなり。熏習の下中上品の次第に漸く增すが如く、是の如く是の如く異熟の果識は次第に漸く減ず。即ち所依を轉ずるなり。既に一切種の所依を轉じ已れば、即ち異熟の果識及び一切の種子は種子無くして轉じ、一切の種は永へに斷ず。

釋曰　「此の正聞、乃至、應に知るべし亦是れ法身の種子なり」とは、是れ略して自下の廣釋を標擧す。「阿賴耶識と相違し阿賴耶識の所攝に非ず」とは、彼の自性に非ざるか故なり。「是れ世間なりと雖も」とは有漏に似たるが故なり。「而も是れ出世心の種子の性なり」とは、是れ無漏心の資糧の性なるが故なり。此の中、證相を說いて法身と名け、世間に生ずるに依りて是れを世間と名く。阿賴耶識の中に相ひ雜はつて倶に轉ずるが故なり。此の熏習の勝能を顯はさんと欲するが故に、「出世の心の未だ生ぜざる時なりと雖も等」と說く。「已に能く諸の煩惱の纏を對治す」とは、此れ[三〇]同類因として展轉し、相續して、刹那の勢力能く對治を爲す。火の焚燒するが如し。「已に能く諸の險惡の趣を對治す」とは、頌に言へる有るが如し、

諸有は世間を成す　上品の正見の者は
千生を經歷すと雖も　而も惡趣に墮せず。

彼の先に作す所の惡行の勢力は、或は惡趣に墮するが故に、次に說いて「已に作せる一切の有ゆる

【三〇】同類因とは善惡自類の法が因となりて自類の果を生ずるをいふ、此には前の善心が因となりて展轉して煩惱を斷ずるをいふ。

如き種子は阿頼耶識に非ず、是れ未だ曾て得ざるが故なり。

論曰 此の聞熏習は是れ阿頼耶識の自性なりと爲すや。阿頼耶識の自性に非ずと爲すや。若し是れ阿頼耶識の自性ならば、云何んが是れ彼の對治の種子となるや。若し阿頼耶識の自性に非ずとせば、此の聞熏習の種子の所依は云何が見るべきや、乃し諸佛の菩提を證得するに至るまで、此の聞熏習は隨つて一種の所依の轉ずる處に在り、異熟識の中に寄在して彼と和合して倶に轉ず。猶水乳の如し。然も阿頼耶識に非ず。是れ彼の對治の種子の性なるが故に。

釋曰 「此の聞熏習、乃至所依は云何が見る可きや」とは、翻覆して徴し、別の所依を難責す。「乃し諸佛の菩提を證得するに至る」とは、謂はく乃し無垢無礙の智の所依の趣を得るに至るまでなり。「此の聞熏習」とは、無倒に經等の教法を聽聞して引く所の熏習なり。「隨つて一種の所依の轉ずる處に在り」とは、謂はく[二八]一種の相續の轉ずる處に隨つて、異熟識の中に寄在す。「彼と和合して倶に轉ずること猶水乳の如し」とは、此の聞熏習は彼の識に非ずと雖も、而も識の中に寄り、識と倶に轉ず。「然も阿頼耶識に非ず」とは、謂はく此の聞熏習は是れ出世心の種子なり、阿頼耶識の自性に非ず、亦彼の種子に非ず、但倶に轉じて、相離れざる性に就いて、是れ唯識なりと許す。「是れ彼の對治の種子の性なるが故に」とは、是れ阿頼耶識の對治なる、無分別智の因性なるが故なり。義は種々の物の和雜する庫藏の如く、種々の毒の雜はる所の仙藥の如く、衆病有るものの服する[二九]阿伽陀の如し。穢毒と多時に倶に轉ずと雖も、然も此の良藥は彼の毒の自性に非ず。亦毒の種子に非ず、此の聞熏習の種子も亦爾り。

論曰 此の中、下品の熏習に依りて中品の熏習を成じ、中品の熏習に依りて上品の熏習を成ず。聞思修に依りて多分に修作して相應することを得るが故に、

釋曰 下中上品の熏習等の言、分明にして了じ易し。重ねて釋するを須ひず。

【二八】一種の相續云云とは六趣四生何れとも其の生を得たる中に於てとの意。

【二九】阿伽陀(agada)は普去又は無病等と譯す、靈藥なり。

に熏ぜられず、彼の種子と爲ることは道理に應ぜず。是の故に出世の清淨は、若し一切種子の異熟の果識を離れては亦成ずることを得ず。此の中、聞熏習は彼の種子を攝受すること相應せざるが故なり。

釋曰　今更に六轉識に於ては、出世の清淨も亦成ずることを得ざるを辯ぜんと欲するが故に、「云何が出世等」の言を說く。文旨了じ易し。勞して重ねて釋すること無し。「彼の種子を攝受すること、相應せざるが故なり」とは、前に說く所の如く、出世の清淨の種子を攝受することは理に應ぜざるが故にとなり。

論曰　復次に云何が一切種子の異熟の果識は雜染の因と爲り、復出世の能く彼を對治する淨心の種子と爲るや。又出世の心は昔より未だ曾て習せざるが故に、彼の熏習は決定して應に無かるべし。既に熏習無し、何の種より生ずるや。是の故に應に答ふべし、最も清淨なる法界より等流せる正聞熏習の種子の生ずる所なりと。

釋曰　「復次に云何が乃至淨心の種子」とは、此れ畢竟して道理有ること無きを顯はす。未だ曾て毒は甘露と爲ること有るを見ず。阿賴耶識は猶毒藥の如し、云何が能く出世の甘露たる清淨の心を生ずるや。「又出世の心、乃至何の種より生ずるや」とは、此れ淨心は唯未だ曾て得ざるに、云何が無因にして率爾に生ずることを得るやを顯はすなり。「最も清淨なるより、乃至種子の生ずる所なり」とは、此れ淨心には別の種子有りて、決定して阿賴耶識の種子より生ぜざることを顯はす。云何が別種なる、謂はく最も清淨なる法界より等流せる正聞熏習なり。「最も清淨なる法界」とは、諸佛の法界は永く一切の客塵の障を離るるが故に。「等流」と言ふは、謂はく法界より起る所の教法なり。無倒に是の如き教法を聽聞するが故に「正聞」と名く。此の正聞に依りて起る所の熏習を是を熏習と名く。即ち此の熏習は能く出世無漏の心を生ずるを名けて「種子」と爲す。是の

釋曰　是の如く已に三種の雜染は諸の轉識に於ては理成ずることを得ざるを辯じ、今更に世間の清淨も亦成ずることを得ざるを辯ぜんと欲するが故に「未だ欲纒の貪を離れざる」等と說く。[二七]欲と色との二纒の加行の善心は倶に生じ倶に滅するの義有ること無きが故に、所熏と能熏となるは道理に應ぜず。又欲纒の心は無記に非ざるが故に亦所熏に非ず、繫がるゝ地は別なるが故に彼の因緣に非ず。無始の生死に(於て)餘生の得る所の色纒の善心は、今の色纒の善心の種子に非ず、過去の多生に(於て)欲纒の多心に間隔せらるゝが故なり。經部の諸師は過去に體無し(といふ)、現に體有ること無し、能く色纒の善心の種子と爲ることは道理に應ぜず。「是の故に成就す等」とは、上に微責せる道理の功能を結び、決定して阿賴耶識有りて彼の因緣と爲り、今欲纒の加行の善心に於ては增上緣と爲ることを證す。不共の因なるが故に、威力勝るゝが故に、其の次第の如し。「是の如く一切の離欲地の中、應の如く當に知るべし」とは、一切の上地の、各別なる離欲の加行の善心は皆所應に隨ひて邪を破し正を立つること上に准じて當に知るべしとなり。

〔**出世間淨章　第十五**〕

論曰　云何が出世の清淨成ぜざるや。謂はく世尊は說けり。他の言音と及び內に各別に理の如く作意するとに依り、此を因と爲すに由りて正見生ずることを得と。此の他の言音と理の如く作意すとは、耳識に熏ずと爲すや、意識に熏ずと爲すや、兩ながら倶に熏ずと爲すや。若し彼の法に於て理の如く思惟せんに、爾の時耳識は且らく起ることを得ず。意識も亦種々の散動する餘識の爲に間てらる。若し如理なる作意と相應して生ずる時は、此の聞所熏の意識と彼の熏習とは久しく滅して過去し、定んで體有ること無し。云何が復種子と爲りて能く後時に如理なる作意と相應する心を生ぜんや。又此の如理なる作意と相應するは是れ世間の心なり。彼の正見と相應するは是れ出世の心なり。曾て未だ時として倶に生じ倶に滅すること有らず。是の故に此の心は彼の所熏には非ず。既

【二七】欲界と色界と繫地別なりとの意。

在前す、爾の時は二趣倶に應に滅離すべし。謂はく第一有と無所有處との二趣を滅離するなり。爾の時有情は應に死滅を成ずべし。二趣の所依は倶に有ること無きが故なり。無漏法は是れ趣の所攝には非ず、是れ[二五]繫せざるが故に、趣を對治するが故なり。「亦涅槃を所依趣と爲すにも非ず」とは、有餘依涅槃界に住するが故に、又一切趣を永に滅離するが故に、涅槃を名けて非趣の趣と爲す。是の如きは都て自體無き異熟を出世識の所依と爲す可し。

論曰　又將に沒せんとする時、善を造ると惡を造るとにより、或は下より、或は上より所依漸く冷ゆ。若し阿賴耶識有ることを信ぜざれば皆成ずることを得ず。是の故に若し一切種子の異熟識を離るれば、此の生の雜染も亦成ずるを得ず。

釋曰　「將に沒せんとする時」とは、謂はく將に死せんとする時なり。若し善を造る者は、卽ち其の身の下分に於て漸く冷え、若し惡を造る者は此れと相違す。若し阿賴耶識有るを信ぜざれば、此れ成就せず。所以は何ん、爾の時[二六]意識は處に無と有と無きも阿賴耶識は處に無と有と有り。依處住を以て方處の相を變似して顯見するが故なり。

〔世間淨章　第十四〕

論曰　云何が世間の清淨成ぜざるや。謂はく未だ欲纒の貪を離れず、未だ色纒の心を得ざる者は、卽ち欲纒の善心を以て欲纒の貪を離れんが爲の故に加行を勤修す。此の欲纒の加行心と色纒の心とは倶に生滅せざるが故に、彼の所熏に非ず。彼の種子と爲ることは道理に應ぜず。又色纒の心は過去の多生に餘心に間隔せられ、應に今の定心の種子と爲るべからず。唯有ること無きが故に。是の故に色纒の定心を成就する一切の種子の異熟果識は展轉傳來して今の因縁と爲り、加行の善心を增上縁と爲す。是の如く一切の離欲地の中にても應の如く當に知るべし。是の如く世間の清淨は若し一切の種子の異熟識を離れては理成ずることを得ず。

【二五】繫せざるが故に云云は生を此の地に繫ぎ留むる能はず却つて之を對治するものなりとの意。

【二六】意識は身中に無き處と有る處有ることなきも、阿賴耶識は身中に無き處と有る處ありとの意。

熏習有り。

論曰　復次に無色界に生ぜんに、若し一切の種子の異熟識を離るれば、染汚と善との心は應に種子無かるべし。染汚と善との心は應に依持無かるべし。

釋曰　「無色界に生ずれば」とは、謂はく彼の界に於て已に生を受くるを得るなり。「染汚と善との心」とは、謂はく能愛味と及び等至の心なり。「應に種子無かるべし」とは、是れ種子識無きの義なり。「應に依持無かるべし」とは、是れ異熟識無きの義なり。爾の時一切の心及び心法は皆應に有ること無かるべし。是の故に應に一切の種子及び異熟識は決定して是れ有なりと許すべし。因及び依持は定んで應に有るべきが故に。

論曰　又卽ち彼に於て若し出世の心正に現在前すれば、餘の世間の心は皆滅盡するが故に。爾の時に便ち應に彼の趣を滅離すべし。

釋曰　「又卽ち彼に於て」とは、無色界に於てなり。「若し出世の心」とは、謂はく無漏心なり。「正しく現在前す」とは、無漏を生ずるを謂ふ。「餘の世間心」とは、是れ無漏の餘なり。「皆滅盡す」とは、一切永く滅するなり。「爾の時便ち應に彼の趣を滅離すべし」とは、彼の趣の攝する所の異熟無きが故に。功用に由らず、自然に應に無餘涅槃を得べし。能治現前すれば一切の所治は皆永く斷ずるが故なり。

論曰　若し非想非非想處無所有處に生じて、出世間の心現在前する時は、卽ち應に二趣を悉く皆滅離すべし。此の出世の識は非想非非想處を以て所依の趣と爲さず。亦應に無所有處を以て所依の趣と爲すべからず。亦涅槃を所依の趣と爲すにも非ず。

釋曰　「若し非想非非想處に生じ等」とは、謂はく第一有に生じ、彼の地の諸の煩惱を斷ぜんと欲する時、[二四]想微劣なるが故に自地に道無し、無所有處は地明利なるが故に彼の無漏心を起して現

【二四】　想微劣云云とは非想非非想處とは心識の作用微劣なれば此の地にては對治道無し、故に前の無所有處の明利なる心識に依つて無漏心を起すとの意なり。

と欲すれば理成ず可らず。

論曰　若し異熟識を離るれば、已に生ぜる有情の識食は成ぜず。何を以ての故に、六識の中に隨つて一識を取るも、三界の中に於て已に生ぜる有情は、能く食事を作すこと得べからざるを以ての故なり。

釋曰　「已に生ぜる有情の識食成ぜず」とは、諸の[二〇]轉識は是れ善等の性なるを以て、恒に諸有を長養するの義無きが故に、又二定及び無想天に於ては皆有ること無きが故に、作す所の食事は三界に遍からず。入定等の諸の心心法を名けて食と爲すべきに非ず。經に說かざるが故に、已に滅無なるが故に。心心法の滅するも亦是れ食に非ず。段食等は數已に決定せるが故に。

論曰　若し此れより沒して等引地に於て正に生を受くる時、非等引の染汚の意識に由りて結生相續す。此の非等引の染汚の心は彼の地の攝する所なり。異熟識を離れて、餘の種子の體は定んで得べからず。

釋曰　是の如く已に欲界の中に於て、若し阿賴耶識を離るれば結生相續することを成ぜざるを辯ぜり。色無色に於ても亦成ずることを得ざるを今當に顯示すべし。「若し此れより沒し、等引地に於て正しく生を受くる時」とは、是れ欲界に死して上に生ずる時の義なり。「非等引地の染汚の意識に由る」とは、謂はく彼の地の定味を貪ぼる等の煩惱と相應するなり。「異熟識を離れて餘の種子の體は定んで得可からず」とは、欲纏に沒する心には彼の種子の體有るに非ず、[二一]生滅倶らざるが故なり。定地に生ずる心を彼の種子の體と爲すに非ず、卽ち一心に於ける[二二]種と有種との性は相應ぜざるが故なり。餘生の中に、先に獲得せる所の色纏等の心を種子の體と爲すにも非ず、彼の熏習を持する餘識無きが故なり。[二三]色相續するを種子の體と爲すに非ず、因緣無きが故なり。是の故に定んで阿賴耶識に依り、中に於て、恒に無始の時より來（このかた）、彼の地の攝する所の此の心の

【二〇】轉識有ることなしとの意なり。

【二一】欲界に沒する時の心に定地の染心あるべからず、散心と定心とは同時に倶に生滅せざるが故なり。

【二二】種とは因にして、有種とは其の果なり、生ずる刹那に因果倶有なること理に相應せずとなり。

【二三】色相續云云とは過去の熏習の色根の中に依るを今時の種子と爲すといふを破す。

除くなり。「亦得可からず」とは、謂はく餘の轉識は皆色根を執受することを得る能はずとなり。何を以ての故に、其の餘の諸識は各々依を別にするが故なり。此れ則ち眼等の六根は一法として能く遍く執受すること有る無きを顯示す。且らく眼識は唯眼に依るが如く、是の如く所餘の耳等の諸識は耳等に依る。若し是れ此の所依ならば唯此れ能執受なり。若し此の所依に非ざれば此れ執受する能はず。「堅住せざるが故に」とは、此れ數々間斷して彼れ獨り生起するが故に、無想等に於ては間斷有るが故に、爾の時に眼等に能執無きが故に、應に[一七]覺受無かるべし。有るが說く身根を能執受と爲す、體に遍するに由るが故にと。此の義然らず。身根も亦是れ執受せらるるが故に、設ひ此の身根は是れ能執受なるも、更に餘の此れを執受するもの有ること無きが故に、亦成ずるを得ず。又佛は應に身根を捨離すれば爾の時に死と名くと言ふべし。應に說いて壽と暖と及び識とを言ふべからず。若し身を捨離する時には是の如き等なり。是の故に身根を能執受と爲すことは道理に應ぜず。

論曰　若し異熟識を離るれば、識と名色と更互に相ひ依り、譬へば蘆束の相ひ依りて轉ずるが如きは、此れも亦成ぜず。

釋曰　世尊の言へるが如し、識は名色に緣たり、と。此の中、名とは[一八]非色の四蘊なり、色とは即ち是れ羯羅藍の性なり。此の二は皆識を用つて因と爲し識に緣たり。復此れに依りて、刹那に轉々し相續して轉ず。識は阿賴耶識を離れず、所以は何ん、擧ぐる所の名の言は已に轉識を攝す。復識の言を擧ぐるは更に何の所攝なりや。又經に[一九]識に齊りて退還すと說くが如し。識とは即ち是れ阿賴耶識の自體なり。依と爲りて無間に轉ずるが故に、是の故に此の名色を緣と爲すと說く。又經に說けるが如し、阿難陀よ、或は男、或は女にして、識若し斷じ壞滅する者は、名色は增長し廣大することを得るや不や。不なり、世尊よ、と。是の如き等は、此れ若し阿賴耶識を離れん

【一七】覺受とは知覺又は感覺の義。

【一八】受想行識の四蘊なり。

【一九】識に齊りて退還すとは十二因緣を逆に觀ずる時、識支までに齊りて退還して行、無明までには及ばぬこと。

す。謂はく[8]共に決定せり。若し是れ意識ならば[9]一切處に非ず。[10]一切種に非ず、[11]一切時に非ずして、染汚に依ることは猶後時に有する所の意識の如し。是の如く結生相續する時の識は一切處と一切の種類と一切の時分とに於て、皆染汚に依る、即ち中有に攝する後心を依と爲す。此の所依の心は生有を境と爲し、一切處と一切の種類と一切の時分とに於て是れ染汚なるが故に、能依の識は是れ意識に非ず。[12]意識の法を越ゆるに由るが故なり。或は有るが說いて言く、四煩惱と恒に相應する心を染汚依と名く。已に相續する心は應に染汚を成ずべしと。此れ已に成立して無記の異熟性と爲すことを許すが故に。異熟の性は時として間斷無きに由り、此れに由りて亦是れ意識の性なることを遮す。「意識の所緣得可からざるが故に」とは、此の義は[13]重ねて意識を遮する因を增せり。若し是れ意識ならば決定して自の所緣の境を得べし。謂はく了知すべし。中有の位の最後の意識の、已に相續せる心の如きは所緣の境界は了知すべからず、故に意識に非ず。應に彼の滅定に住する心を以て此の妨難を爲すべからず。彼は是れ意識性なることを許さざるが故なり。是の如く此の中には但所緣を說いて得可からずと爲すは了知し難きが故なり、全く有ること無きに非ず。爾の時に於て[14]法有ること無きに非ざるを以てなり。是れ其の[15]有なりと雖も而かも知る可からざるなり。「設ひ和合識は即ち是れ意識なりとも」より、乃至「但是れ異熟識なり、是れ一切種子識なり」とは、雙關して徵責し、正を立てて邪を破し、本義を結歸するなり。其の文了じ易ければ、廣く釋することを須ひず。

論曰　復次に結生相續し已つて、若し異熟識を離るれば色根を執受することも亦得べからず。其の餘の諸識は各別の依なるが故に、堅住せざるが故に、是の諸の色根は應に識を離るべからず。

釋曰　「結生相續し已つて」とは、已に自體を得たるを謂ひ、「若し異熟識を離るれば」とは、阿賴耶識を離るるを謂ふ。「執受」と言ふは、能く攝持するを謂ひ、「色根」と言ふは、謂はく[16]意根を

に用ひらるゝが故に法自相相違因となる。

【八】共に決定せりとは理由として擧げらる因は立敵共に許すべきなり。而して今の染汚に依る等といふ因は共に決定せりとの意。

【九】一切處とは三界の一切處。

【一〇】一切種とは胎生、卵生等受生の種類。

【一一】一切時とは過去、現在、未來の一切時なり。

【一二】意識の法を越ゆとは反對の主張に依れば意識の性なりといふも、其れ以上に出でたる者なりとの意なり。

【一三】重ねて云云とは前に已に二の因を擧げ、更に又一因を擧げて愈其の理由を强固にして意識なりといふ說を否定する主張を確實にすとの意なり。

【一四】法とは所緣の法の意。

【一五】有なりとは所緣の法有りとの意。

【一六】意根を除く餘の眼等の五根をいふ。

は、謂はく死生の二有の中間の中有の轉ずる心に依るなり。「染汚を起す」とは、[一]愛恚と倶に顚倒有るが故なり。「意識」と言ふは、餘の識は爾の時久しく已に沒するが故なり。連持して生ずるが故に名けて「相續」と爲す。攝受して生ずるが故に名けて「結生」と爲す。「此の染汚の意識」とは、生有に緣たるが故なり。「中有の中に於て滅す」とは、此れ若し滅せざれば生有無きが故なり。「母胎の中に於て識と羯羅藍と更に相ひ和合す」とは、謂はく此れ滅する時母胎の中に於て異熟識有り、其の赤白と安危を同一にし、相ひ和雜して羯羅藍を成ぜしむ。世尊の、阿難陀に說けるが如し、識若し母胎に入らざれば、應に羯羅藍と和合し羯羅藍の體性を成ずべからず、と。「若し卽ち意識」とは、謂はく此れ若し阿賴耶識に非ざればとなり。「旣に和合し已つて」とは、謂はく受生し已るなり。「此の識に依止して」とは、異熟識に依るなり。「意識の轉ずること有り」とは、別の轉識有り、謂はく[二]信等貪等と相應し、樂苦の受と倶に分別する意識にして、後々の位に轉ずるなり。「若し爾らば卽ち應に二の意識有りて、母胎の中に於て同時にして轉ずべし」とは、謂はく異熟の體たる有情の本事は、今時の加行を待たずして而かも轉ずるならは、無記の意識と、及び了知すべき所緣と行相と、樂苦の受等とに相應する意識との是の二の意識は、應に一身の中に一時に而かも轉ずべし。然も應に許すべからず。經と相違するが故に、是の如く頌に言く、

[三]處無く容るゝ無し　前に非ず後に非ずして
同身に同類の　二識並びに生ずることは。

又應に[四]此の二は是れ一なりと許すべからず、自性別なるが故なり。又異熟識は應に間斷すべからず、結相續し已つて後應に餘處に更に結生すべきが故なり。又異熟の體は唯恒に相續して更に異趣無し。[五]「又卽ち彼と和合する識は、是れ意識の性なること道理に應ぜず。染汚に依るが故に時として斷ずること無きが故に」とは、[六]宗門を立つるに由り彼の[七]法の自相と相違することを顯は

【一】男女は互に父母の處に對して異性を愛し同性を恚る顚倒心ありとなり。
【二】信等貪等とは信等の善の心所と貪等の不善の心所を擧ぐ。
【三】處無くとは身を受くる處無しの意、容るゝ無しとは道理を容る餘地なしの意。
【四】此の二の識は體同義別なれば前の經に違はずと轉計するを遮して自性別なるが故にといふ。眼等の五識の如く自性各別なりの義。
【五】此の一段の解釋は特に因明の論法に依つて聞難微責せるが故に解し難し、若し委曲を盡くさんとする者は成唯論演秘第三末に詳解したれば之を參照せよ。
【六】宗門を立つとは因明の論式に由る主題を立すること、此には「初の和合識は意識の性にあらざるべしと」立つるなり。
【七】法の自相と相違すとは因明に所謂法自相相違因にして、彼の法とは前に述べたる宗の後陳(賓辭)を法といふ、之と相違する理由を立つることにして、今の理由は其の第一として擧げられたる「染汚に依るが故に」といふ、此の因は今の宗と相違したる主張、卽ち「意識の性なり」といふ

卷の第三

所知依分第二の三

〔生染章　第十三〕

論曰　云何が生の雜染成ぜずと爲すや。結相續の時相應せざるが故なり。

釋曰　今、若し阿賴耶識無ければ生の雜染の體も亦成ずるを得ざることを顯示せんが爲の故に、「結相續の時相應せざるが故に」と說く。

論曰　若し此の非等引地に於て沒し已つて生ずる時、中有の位の意に染汚の意識を起すに依りて、結生相續すること有らば、此の染汚の意識は中有の中に於て滅し、母胎の中に於て識と羯羅藍と更に相ひ和合せん。若し卽ち意識と彼と和合すとすれば、旣に和合し已つて、此の識に依止して、母胎の中に於て、意識の轉ずること有らん。若し爾らば卽ち應に二の意識有りて母胎の中に於て同時にして轉ずべし。又卽ち彼と和合する識は是れ意識の性なること道理に應ぜず。染汚に依るが故に、時として斷ずること無きが故に、意識の所緣得べからざるが故に。設ひ和合識は卽ち是れ意識なりとするも、此の和合の意識を卽ち是れ一切種子識と爲すや。此の識に依止して生ずる所の餘の意識を、卽ち是れ一切種子識と爲すや。若し此の和合識是れ一切種子識ならば、卽ち是れ阿賴耶識なり。汝異名を以て、立てて意識と爲すのみ。若し能依止の識是れ一切種子識ならば、是れ則ち所依の因識は一切種子識に非ずして、能依の果識は是れ一切種子識なること道理に應ぜず。是の故に、此の和合識は是れ意識に非ず、但是れ異熟識なり。是れ一切種子識なることを成就す。

釋曰　「非等引地」とは、謂はく欲界なり。「沒す」とは卽ち是れ死なり。「中有の位の意に依る」と

論曰　云何が業の雜染成ぜずと爲すや。行は識に緣と爲ることは相應せざる故に。此れ若し無ければ取の有に緣と爲ることも亦相應せず。

釋曰「行は識に緣と爲ることは相應せざるが故に」とは、此れ轉識に於て業の雜染成ぜざることを說く。謂はく行を緣と爲して貪等と倶生する眼等の諸識を識支と爲すと許せば此れ理に應ぜず。識は名色に緣たることは聖言有るが故なり。所以は何ん、眼等の諸識は刹那に速かに壞し、久しく已に謝滅せるを名色に緣と爲すは道理に應ぜず。若し此の失を畏れて續生する識を識支と爲すと許せば、此れ亦然らず。續生の時に於て、福と非福と及び不動との行は久しく已に滅せるが故なり。久しく滅せるより此れ復應に生ずべきに非らず。又續生の心は無記性に非ず、愛恚と倶なるが故に。旣に無記に非ざれば行を以て緣と爲すことは道理に應ぜず。若し轉識と行と相應すと說けば、此れに由りて阿賴耶識を緣と爲して、能く熏習を持するを說いて識支と名くれば應に正しき道理に應ず。「此れ若し無ければ取は有に緣と爲ること有も亦相應せず」とは、謂はく熏習位の諸業の種子の、異熟して現前に轉ずるを名けて有と爲す。或は復轉じて生果の功能を得るが故に說いて有と名く。行の熏ずる所の識若し成就せざれば、何の處にか彼の業の種子を安立し、而かも生ずと言ふを得ん。果現前して轉ずるを名けて有と爲す。是の故に若し阿賴耶識を離れては此の業の雜染も亦成ずるを得ず。

り。若し爾らば何が故に、卽ち彼れを說かざるや。彼れ定んで是れ染汚ならざるを以ての故なり。

[八三]又此れと彼と差別無きが故に、彼れを說き、此れを說くも、竟いに何の異りか有らん。

論曰　復次に煩惱を對治する識若し已に生じ、一切世間の餘識已に滅すれば、爾の時若し阿賴耶識を離れては、所餘の煩惱及び隨煩惱の種子は此の對治の識の中に在ることは道理に應ぜず。此の對治の識は自性解脫なるが故に、餘の煩惱及び隨煩惱と倶に生滅せざるが故に。復後時に於て世間の識生ずるに、爾の時若し阿賴耶識を離れては、彼の諸の熏習及び所依止は久しく已に過去して現に體無きが故に、應に種子無くして而も更に生ずるを得べけんや。是の故に若し阿賴耶識を離れては煩惱の雜染は皆成ずるを得ず。

釋曰　「煩惱を對治する識若し已に生ずれば等」とは、謂はく最初の[八四]預流の果向の見斷の如し、煩惱の對治道の生ずるときは、一切世間の餘識は已に滅す。爾の時若し阿賴耶識無ければ、[八五]修斷の煩惱に有する所の隨眠は何の所に依住するや。對治の識は彼の種子を帶ぶるに非ざるは正しき道理に應す。「此の對治の識は自性解脫するに由るが故に」とは、卽ち是れ自性極めて淸淨なりとの義なり。「餘の煩惱及び隨煩惱と倶に生滅せざるが故に」とは、能治と所治とは互に相違するが故に。猶明闇の如し。此れ則ち彼の種子の相と相應せざるを顯示す。「復後時に於て」とは、謂はく見道の後の修道位の中なり。「久しく已に過去して現に體無きが故に」とは、此の破は過去に實の義無しと立つるなり。毘婆沙師の煩惱、[八六]得等は、經部の諸師皆已に破し訖れり、故に重ねて破せず。然も經部師の熏習の所依には並びに體有ること無し、過失の隨ふ所なるか故に理に應ぜず。「是の故に若し阿賴耶識を離れては煩惱の雜染は皆成ずるを得ず」とは、上の所論を結びて道理を決擇す。

【八三】此と彼とは初生の識と上地の没心となり。

【八四】預流向及預流果の意にして無漏智初めて起り見道にて煩惱を斷する時なり。

【八五】修斷とは見道以後修道に於て隨眠を斷ずること。

【八六】得とは善惡の業及び聖道を身に結びつくる力といふ、これ有部の立つる不相應行の一なり。

も此の熏習は貪の中に住せず」と言ふは、「然も」の聲は是れ次第の義なり。然も且らくも此の熏習は貪の中に住することを得ず。貪は識に依るを以ての故に、貪は識に繫屬するも識は貪に依らず、能依の貪は所依の熏を受くるに非ず、とは正道理に應ず、是れ能熏なるが故なり。「堅住せざるが故に」とは、正しく貪欲は是れ所熏性なることを遮す。「亦所餘の識の中に住することを得ず」とは、謂はく耳等の識の中に住するを得ずとなり。「所依の別なるか故に」とは所依とは謂はく耳等なり、彼れ別なるが故に識別なり、眼根に依る識にして云何んが能く耳等に依る識に熏ぜん。又不倶なるか故に、倶有ならざれば所熏と及び能熏との性有ることを得るに非ず。此れ則ち熏習無き相を顯示す。「又復自體の中に住するを得ず」とは、謂はく卽ち眼識は還つて眼識に熏ずるに非ず、能熏と所熏とを作すは、[八一]作業相ひ雜はるの過あるが故なり。「又復此の識は識の熏ずる所に非ず」とは、是れ此の眼識は耳等の識の熏習する所に非ざるの義なり。所依別なるが故に、前に已に說けるが如し。唯是の如く理趣を立つ可き有るのみ。彼の一切種は皆理に應ぜず。「應の如く當に知るべし」とは、所餘の轉識の[八二]立破の道理は、其の所應に隨つて一切當に知るべしとなり。

論曰 復次に無想等の上の諸地より沒して此の間に來り生ぜんに、爾の時に煩惱及び隨煩惱に染せらるる初識あり、此の識の生ずる時は應に種子無かるべし。所依止及び彼の熏習は並びに已に過去して現に體無きに由るが故に。

釋曰 無想等の上の諸地より沒して此の間に來り生ず」とは、上界より沒し來りて欲界に生ずるなり。「爾の時に煩惱及び隨煩惱」とは、謂はく貪瞋等なり。「染せらるる初識」とは、謂はく續生する時の生に初識有り、爾の時、自地の一切の煩惱に染汚せらるるが故なり。經部師は欲纒に已に煩惱を斷じ及び心過去せるには非ず。是れ得べき有り、彼れより今復現行すと(いふ)。彼の沒する心を此の所依と爲すに非ざるは正しき道理に應ず。彼の沒する心も亦成ぜざるに由るが故な

【八一】能熏と所熏とが其の體同一にして同時ならば其の作業は混雜すべしとなり。

【八二】立破とは因明の用語にして正義を立て邪義を破すること、卽ち正義を論究すること。

すれば餘識の間つる所となる、是の如きは熏習も熏習の所依も皆得べからず。此れより先に滅して餘識に間てられ、現に體有ること無ければ、眼識と彼の貪等と倶に生ずることは道理に應ぜず。彼れ過去して現に體無きを以ての故に、過去して現に體無き業より異熟果の生ずる如きは道理に應ぜず。又此の眼識は貪等と倶に生ずとも、所有の熏習も亦成就せず。然も此の熏習は貪の中に住せず。彼の貪欲は是れ能依なるに由るが故に、堅住せざるが故に。亦所餘の識の中にも住することを得ず。彼の諸識とは所依別なるを以ての故に、又決定して倶に生滅すること無きが故に。亦復自體の中に住することを得ず。彼の自體は決定して倶に生滅すること有ること無きに由るが故に。是の故に眼識は貪等の煩惱及び隨煩惱に熏習せらるゝことは道理に應ぜず。又復此の識は識の所熏にも非ず。眼識に說くが如く、所餘の轉識も亦復是の如し。應の如く當に知るべし。

釋曰　且らく轉識に依つて先づ煩惱の雜染成ぜざることを辯ず。故に說いて「若し眼識等と立つれば」と言ふ。卽ち此の眼識とは謂はく卽ち貪等の熏ずる所の眼識なり。「餘識に間てらる」とは、耳等の識に間てらるるなり。是の如き熏習も及び所依の識も已に謝滅するが故に皆得べからず。「眼識と彼の貪等と倶生す」とは、後時の眼識は貪瞋癡と相ひ雜はつて倶起すとなり。(これ)因無きに由るが故に道理に應ぜず。彼の過去の眼識は體無きを以て、因と爲すこと能はず。「過去して現に體無き業より異熟果の生ずる如きは、道理に應ぜず」とは、經部師は過去無體にして、其の異熟果は是れ現の熏習の引發する所となし、[八〇]毘婆沙師は過去の業より異熟果生ずとなすが如き、此れ應に許すべからず。所以は何ん、過去は無なるが故に、此の譬喩に由りて貪等の心の生ずることは道理に應ぜず。是の如く已に、且らく貪等と倶生する眼識は貪等の所熏なりと許すと說くも、餘識間起すれば、後時の眼識の貪等と倶生することは道理に應ぜず。今當に更に辯ずべし、卽ち此の貪等と倶生する眼識の所有の熏習も亦成ずることを得ず、故に「又此の眼識」等と說く。「然

【八〇】毘婆沙師とは說一切有部のこと。

するに非ず。唯心心法のみ四を具すること、應に知るべし。

論曰　是の如く已に阿賴耶識の異門及び相を安立せり。復云何が是の如き異門と及び是の如きの相とは、決定して唯阿賴耶識のみに在りて轉識に非ざることを知るや。若し是の如く阿賴耶識を安立することを遠離すれば、雜染と清淨とは皆成ずることを得ざるに由る。謂はく煩惱の雜染も、若しくは業の雜染も若しくは生の雜染も皆成ぜざるが故に、世間の清淨も、出世の清淨も亦成ぜざるが故に。

釋曰　已に自他の聖教を引いて阿賴耶識を成立せり。當に正理に依りて鄭重に成立すべきが故に、是の如き略問略答を起す。聖教と正理とには各能有るが故なり。頌に言へる有るが如し、

　聖教と及び正理とには　　各別に功能有り

　信慧を生ぜんが爲には　　一として成ぜざること無きが故に。

若し此の阿賴耶識を離れ、餘處に於て是の如き異門及び相を安立せんと欲すれば、雜染と清淨とは皆有ることを得ざるを以ての故に、定んで阿賴耶識有ることを知る。「雜染」と言ふは、是れ渾、是れ濁、是れ不淨の義なり。「清淨」と言ふは、是れ鮮、是れ潔、是れ掃除の義なり。雜染に三有り、一には煩惱の所作、二には業の所作、三には生の所作なり。清淨に二有り、一には世間の清淨、有漏道は暫時[七八]現の煩惱を損伏するを以ての故に。二には出世間の清淨、無漏道は畢竟して彼の[七九]隨眠をも斷滅するを以ての故に。

〔煩惱染章　第十一〕

論曰　云何が煩惱の雜染成ぜざるや。諸の煩惱及び隨煩惱の熏習の作す所の彼の種子の體は、六識身に於ては理に應ぜざるを以ての故なり。所以は何ん、若し眼識が貪等の煩惱及び隨煩惱と倶に生じ倶に滅し、此れ彼の熏に由りて種を成じ、餘には非ずと立つれば、卽ち此の眼識、若し已に謝滅

【七八】　現の煩惱とは現行の煩惱。

【七九】　隨眠とは煩惱の潜勢力となる習氣をいふ。

後法の中に於て彼が生ずるを得んが爲に、彼の種子を攝植するが故に。「現法の中に於て彼の種子を長養す」とは、謂はく阿賴耶識に依止して善と不善と無記との轉識轉ずる時の如く、是の如く、是の如く一依止に於て同じく生じ同じく滅して阿賴耶識に熏習す。此の因縁に由りて、後々の轉識の、善と不善と無記との性轉じ、更に增長して轉じ、更に熾盛にして轉じ、更に明了にして轉ず。「後法の中に於て彼が生ずるを得んが爲に彼の種子を攝植す」とは、謂はく彼の熏習の種類は能く當來の異熟の無記の阿賴耶識を引攝す。是の如く彼の種子と爲るが故に、彼の所依と爲るが故に、種子を長養するが故に、種子を攝植するが故に、應に知るべし、阿賴耶識と諸の轉識とは互に縁性と爲ると建立す。

〔四縁章　第十〕

論曰　若し第一の縁起の中に於て是の如く二識互に因縁と爲らば、第二の縁起の中に於て復是れ何の縁ぞや。是れ增上縁なり。是の如き六識は幾くの縁より生ずる所なりや。增上と所縁と等無間縁となり。是の如き三種の縁起、謂はく窮生死と愛非愛趣と及び能受用とは四縁を具有す。

釋曰　「若し第一の縁起の中に於て」とは、謂はく分別自性縁起の中に於てなり。「是の如く二識互に因縁と爲る」とは、次前に說くが如し。「第二の縁起の中に於て」とは、謂はく分別愛非愛縁起の中に於てなり。「是れ增上縁なり」とは、最勝なるを以ての故に、無明等の增上の力に由るが故に、其の行等をして善惡趣に於て異熟果を感ぜしむ。「是の如く六識は三縁より生ず」とは、此の中、眼識は眼を增上縁と爲し、色を所縁縁と爲し、無間滅の識を等無間縁と爲す。眼識は三縁より生ずと說くが如く、是の如く耳等の一一の轉識も、各々別々の三縁より生ずる所なり。生の義は平等に前の眼識の如し。分別自性は唯因縁より生ず。其の餘の三縁は正しく有るに非ざるが故なり。「是の如き三種の縁起、謂はく窮生死等は四縁を具有す」とは、此れ所應に隨ひて各四を具

一には則ち緣識と名く　　第二には受者と名く
此の中能く受用すると　　分別すと推すとは心法なり。

釋曰　諸趣とは謂はく天等の趣なり。「能く受用する者」とは卽ち六轉識を受用と爲すが故に、緣より生じて、所緣の境界を分別す可きが故なり。此の義を顯はさんが爲の故に、中邊分別論の頌を引いて、[七五]至敎量と爲す。「此の中」と言ふは、此の諸識の中なり。「能く受用す」とは[七六]受蘊を謂ひ、能く「分別す」とは想蘊を謂ひ、能く「推す」とは、[七七]行蘊を謂ふ、思は能く心を推し、彼彼に於て轉ずること最勝なるが故なり。是の如く三蘊を說くは皆能く心を助け、境界を受用するが故に心法と名く。

論曰　是の如く二識は更互に緣と爲る。阿毘達磨大乘經の中に說ける伽他の如し。曰く

諸法は識に於て藏せられ　　識は法に於ても亦爾なり
更互に果性と爲り　　亦常に因性と爲る。

釋曰　此の中、阿賴耶識と諸轉識と更互に緣と爲ることを顯はさんが爲に阿笈摩を引き、其をして堅固ならしめんが故に。「諸法は識に於て藏す等」と說く。又瑜伽師地論の攝決擇分の中に說けるが如し、阿賴耶識と諸の轉識とは二の緣性と作る。一には彼の種子と爲るが故に、二には彼の所依と爲るが故にと。種子と爲るとは、謂はく有らゆる善、不善、無記の轉識の轉ずる時、一切皆阿賴耶識を用つて種子と爲すが故なり。所依と爲るとは、謂はく阿賴耶識は色根を執受するに由る。五種の識身は之に依りて轉じて執受無きに非ず。又阿賴耶識有るに由るが故に末那有ることを得。此の末那を依止と爲すに由るが故に意識轉ずることを得。譬へば眼等の五根に依止するが如し。五識身の轉ずるには五根無きに非ず。意識も亦爾り、意根無きに非ず。復次に諸の轉識と阿賴耶識とは二の緣生と作る。一には現法の中に於て能く彼の種子を長養するが故に、二には

【七五】至敎量とは聖敎量のこと、至極の敎を證據となすの意。
【七六】受蘊とは苦樂等の感受をいふ。
【七七】行蘊は意思作用なり、決斷して行爲する義を顯はして次に能く心を推す云云といふ。

習有り、或は熏習無し。[七一]其の炭と牛糞と毛等より其の次第に隨つて彼の苣蕂と、靑蓮華の根と及び蒲等とを生ずるに、苣蕂等と彼の炭等とは俱に生じ俱に滅して、互に相ひ熏習して彼れより生ずるに非らざるが如く、是の如く外種は或は熏習無し。苣蕂等と華鬘等と俱生俱滅して熏習に由るが故に香氣等を生ずるが如く、是の如く外種は或は熏習有り。是の如く分別するに外種は不定なり。是の故に「或は」と說けり。內の種子は卽ち是れ阿賴耶識の中の一切法の熏習なり。是の如き種子は應に知るべし、定んで熏習に由るが故に有り。何を以ての故に、若し所持の聞等の熏習無ければ多聞等の果は有ることを見ざるが故なり。又外の種子は若し稻穀等ならば、或は種うると雖も而かも復失壞すること有り。若し稊稗等ならば、或は種ゑずして而かも復生ずるを得ること有り。云何が內種は外種の如くに非ざるや。[七二]作と不作とにて失と得との過失あり、故に次に答へて言く、「故に相違を成ず」と。[七三]內の種子と外の種子とは同法にあらざるを以ての故に、名けて相違と曰ふ。若し外の種子と內の種子と差別有らば、云何が前文に說く所の阿賴耶識は是れ一切法の眞實の種子なりといふに違はざるや。此の難を避けんが爲の故に、「外種は內を緣と爲す等」と說く。稻穀等の外法の種子は、皆是れ衆生の感じ受用する業の熏習する種子に由りて、阿賴耶の力に依りて變現する所なり。是の故に外種は內を離れて別に無し。頌に言へる有るが如し。

[七四]天、地、風、虛空、　陂池、方、大海は
　皆內の所作に由る　分別のみ外に在らず。

是の如き等の類に無量の頌有り。

論曰　復次に其の餘の轉識は普く一切の自體の諸趣に於て、應に知るべし、說いて能く受用する者と名く。中邊分別論の中に說ける偈他の如し、曰く、

【七一】炭、牛糞云云とは泰抄に依るに炭牛糞に多年孔中に在れば藕根を變成し、能く靑蓮華を生ずと釋せり、又牛毛能く蒲を生ずといふに二釋を擧ぐ、且らく一說を出さば、牛の脊背上の毛吹いて孔中に入れば多年にして能く蒲を生ずといふ。

【七二】種子を種ゑて其の果を失ふものあり、種ゑずして而も得るものありとの意。

【七三】內の種子は作不作と得失とは必ず相應するが故に、外種とは同法にあらずといふ。

【七四】天地等は心外の諸現象を任意に列擧せるもの、中に於て方とは方角なり。

爲る。生因は且らく爾りとして云何んが引因なる。此の問に答へんが爲の故に、「枯喪するは能引に由る」の言を說く。若し二の種子は唯生因と作りて引因に非ざれば、倉等に收置する麥等の種子は、應に久時に相似し相續すべからず。喪後の屍骸は青瘀等の如く、分位に隨轉することも亦應に有るべからず。何者か[六八]纔かに死すれば卽ち應に滅壞すべき。云何が「任運にして後滅するが如し」といふを譬へん。譬へば箭を射るに弦を放つ行力を能生の因と爲し、箭をして弦を離るゝも卽ち墮落せざらしむ。弓を彎く行力を箭の引因と爲し、箭をして前行して、遠く至る所有らしむるが如し。唯弦を放つのみにて、行力の能生に非らざれば應に卽ち墮つべきが故に。亦[六九]動勢にも非ず。展轉して相ひ推して應に墮ちざらしむべし。故に旣に弦を離れて行くこと遠く至る所有り。故に知る、此の中に二の行力有り。能生と能引となり。頌に「任運にして後滅するが故に」と有るは彼れ直に理を以て引因を增益し、譬喩を說くに非ず。所以は何ん、油炷都て盡きて外緣を待たざれば、燈焰は任運にして後漸く方に滅す、初に卽ち滅するに非ず。此の道理により決定して應に能引の功力有り、今に於て未だ內法の諸行を盡さゞるべし。亦應に是の如き有種の勢力は展轉して能く引いて斷絕せざらしむべし。

論曰　內種は外種の如きに非ざることを顯はさんが爲に復二頌を說く、

外には或は熏習無し　　內種には非ず。應に知るべし
聞等の熏習無くして　　果の生ずることは道理に非ず
作と不作とにて失と得との　　過あるが故に相違を成ず
外種は內を緣と爲し　　彼の熏習を依とするに由る。

釋曰　[七〇]是の如く已に外內の種子は其の性、麁同なるを辯ぜり。不同を顯はさんが爲に、復「外には或は熏習無し等」と說く。「或は」とは分別の決定せざるの義なり。謂はく外の種子には、或は熏

【六八】纔かに死すればとは死の當處にとの意。

【六九】動勢にも非ずとは箭自體が動勢を有するに非ずの意なり。

【七〇】此の頌釋は世親釋に無し。

受くべし、常住に非ざるが故に。能熏と相應して倶に生滅するが故なり。「是を熏習の相と爲す」とは、是れ彼の法なるが故に所熏を能相と爲し、熏習を所相と爲す。又諸の轉識は定んで所熏に非ず、彼の六識は定んで[59]相應すること無きを以てなり。何を以ての故に、三は差別して互に相違するを以ての故に。若し六轉識が定んで倶有なれば應に所依と所緣と作意との三種は各別なるべからず。各別なるを以ての故に、六種の轉識は定んで倶生せず、倶生せざるが故に、定んで相應すること無し、相應すること無きか故に、何ぞ所熏と能熏との性有らん。若し前念が後念に熏じて熏習を成ずと言はゞ、此の義然らず。其の二念は倶有ならざるを以ての故に、此れ亦二刹那に由ることを顯示す、倶有ならざるが故に定んで相應すること無し、相應すること無きが故に所熏と能熏との性有ること無し。[60]若し種類の句義に依止して、六種の轉識は、或は[61]二刹那に同一の識類なり、或は[62]刹那の類に差別有ること無し。[63]異品に由るが故に。或は卽ち彼の識、或け彼の刹那に相ひ熏習すること有りて[64]一切に非ずと言はゞ、此れ理に應ぜず。種類を餘に例すれば過失を成ずるが故に、阿羅漢の心も識類を出でず、彼れも亦應に是れ不善に熏ぜらるべし、一類の法なるが故に。或は類を餘に例すれば過失を成ずとは、是れ餘の類に例すれば過失有りとの義なり。此の義云何ん、謂はく眼等の根は淸淨の色性にして、皆根の種類の隨逐する所なり。意根も亦應に造色の性を成ずべし、根の義等しきが故に。[65]且らく爾所の熏習の異計有り。或は六識展轉して相熏ずと說き、或は前念が後念に熏ずと說き、或は識の刹那の種類に熏ずと說く。是の如きの一切は皆理に應ぜず。是の故に唯阿賴耶識のみ是れ所熏習にして餘識には非ずと說くは是れを善說と爲す。[66]是の如く外内の二種の種子は倶に生因と爲り、及び引因と爲る。若し外の種子を親しく芽に望むれば能生の因と爲り、[67]轉じて葉等に望むれば能引の因と爲る。阿賴耶識は是れ内の種子なり、親しく名色に望むれば能生の因と爲り、轉じて六處乃至老死に望むれば能引の因と

【五九】相應せずとは前の種子の諸條件と相應せずの意。

【六〇】若し以下に轉計を擧げて之を破す。

【六一】二刹那は前後二刹那の識の一同の識類なることをいふ。

【六二】刹那の類とは同一刹那に於ける一類をいふ。

【六三】異品に由るとは前後の識別なるを以て能熏所熏異るの意。

【六四】一切に非ずとは前後の識のみ相熏習す、一切の識が熏習すといふに非ずの意なり。

【六五】以下熏習の異說を列擧して評釋す。

【六六】次に生因と引因とを明かす。

【六七】轉じては異本には傳へてに作る、轉傳の意なり。次の「轉じて」も亦然り。

べし、此れ恒に隨轉して刹那に轉々す。多時を經るも恒に隨轉するが故なり。所以は何ん、其の根の枝等を損益するゝ同じきが故なり。若し恒に隨轉するも少分の樂を許して種子と爲すに非ず。何の因緣の故に、一切に從つて一切のもの倶生せざるや。此の難を避けんが爲の故に「決定」と說く。恒に隨轉すと雖も諸の種子の功能定まるを以ての故に、一切に從つて一切のもの倶生せず。爾りと雖も、何が故に一切時に常に能く果を生ぜざるや。此の失を避けんが爲に「衆緣を待つ」と言ふ。一切時に衆緣に會遇するに非ざるが故に、過失無し。今此の種子は是れ誰れが種子なるや。此の問に答へて言く、「唯能く自果を引く」と。言ふ所の唯とは、若し此の時に於て能く自果を生ずれば卽ち爾の時に於て說いて種子と名く。[五五]種と有種とは並びに始無きが故なり。此の唯の言に由りて相續等を種子の體と爲すことを遮す。所說の種子の法の如く相應せざるが故に、要ず所熏と能熏と相應するを待つて、種と有種とは其の性方に立つ。所熏を辯ぜんが爲の故に「堅」等を說く。若し法相續し隨轉し堅住すれば、苣勝等の如く乃ち所熏と爲る。不堅住には非ず、猶[五六]聲等の如し。唯堅住のみに非ず、復「無記」性にして方に是れ所熏なり。[五七]平等の香の如きは乃ち熏習を受く。極香の物には非ず、沈麝等の如し。極臭の物にも非ず、蒜薤等の如し。「可熏」と言ふは、若し物の熏ず可きと或は能く熏を受くるとは、分々に展轉して更に相ひ和糅するを、乃ち可熏と名く。金石等は能く熏習を受くるに非ず、分々に相ひ和糅すべからざるが故なり。唯可熏のみに非ず、要ず復彼の「能熏と相應する」を、乃ち所熏と名く。別異に住するに非ずして、同時同處に不卽不離なるを名けて相應と曰ふ。斯の衆德を具するを所熏と名く可し、此れに異るに非ず。[五八]「非ず」の聲は一切の轉識は是れ所熏の性なるを遮せんが爲なり。上の所說の如き義と相違するが故に。阿賴耶識は其の體堅住にして、乃至治の生ずるまで相續して隨轉し、未だ曾て斷ぜざるが故に、性は唯無記にして善惡に非ざるが故に、性は應に熏ず可く或は能く熏を

【五五】種とは種子。有種とは種子を有するもの卽ち阿賴耶識なり。

【五六】聲・風・及び轉識等は堅住にあらざるなり。

【五七】平等の香とは香と臭と平等の意にして何れとも强き嗅氣なきものをいふ。

【五八】前の頌文に「所熏は此に異るに非ず」といへる語を指す。

刹那滅と、俱有と　恒に隨つて轉ずると應に知るべし
決定と、衆緣を待つと、　唯能く自果を引くとなり。
堅と、無記と、可熏と　能熏と相應すと
所熏は此に異るに非ず　是を熏習の相と爲す。
六識には相應すること無し　三は差別相違し
二念俱有せず　餘に類例すれば失を成ず。
此の外內の種子の　能く生引することを應に知るべし
枯喪するは能引に由り　任運に後に滅するが[五二]故なり

釋曰　前に已に一切の種子を總說せり。是の如き種子の差別を顯はさんが爲に、復五頌を說く。謂はく「內外等」とは、稻穀麥等を外の種子と名け、阿賴耶識を內の種子と名く。「明了ならず」とは是れ無記の故に。「二種」と言ふは、謂はく外と及び內となり。或は果と因となり。此れ俱に唯識にして因性を持するに由り、雜染と淸淨との二法轉ずるが故なり。本頌有り[五三]「二に於て」と言ふは、彼の因に於てと果に於てとに應ず。麥等の外種を執りて說いて「世俗」と名く、阿賴耶識の變現する所なるが故に。「勝義」と言ふは、阿賴耶識は是れ實の種子にして、是れ一切種子の實の因緣性なるが故に、及び彼の體爲るが故なり。此の二の種子は[五四]六種の差別法にて差別するが故に。「刹那滅」とは、生じ已れば無間に卽ち滅壞するが故に。常住にして種子を成ずるを得ること有る無し、一切時に於て差別無きが故なり。刹那に滅すと雖も然も已滅するに非ず。何者か「俱有」なる。已に滅して果を生ずることは理に應ぜざるが故に。死雞の鳴くが如し。是の故に應に種子と果と俱時にして住すと許すべし。此れ果と相違せざるを以ての故に、蓮華の根の如し。復俱有なりと雖も、然も一二三の刹那に住するに非ず、猶、電光の如し。何となれば、應に知る

【五二】　本釋論には「滅するが如しとあるも」論本及び本釋論の原文に依りて「故に」と改む。

【五三】　前の頌に二種とありて已に解釋し、更に此に「二に於て」と他の譯文の句を擧げて之を釋す。

【五四】　六種の差別法とは阿賴耶識の種子を規定する六條件にして次に說く六義をいふ。

て言はく、象は犂柄の如しと、或は杵の如しと說き、或は箕の如しと說き、或は臼の如しと說き、或は箒の如しと說き、或は有るは說いて象は石山の如しと言ふ。若し此の二の緣起を解了せざれば、無明の生盲も亦復是の如く、或は自性を因と爲すと計執する有り、或は宿作を因と爲すと計執する有り、或は自在を因と爲すと計執する有り、或は實我を因と爲すと計執する有り、或は無因無緣なりと計執する有り、或は我を作者と爲し我を受者と爲すと計執する有り、阿賴耶識の自性と因性と及び果性等は象の自性を了ぜざる所の如し。

釋曰 二種の緣起の義に於て愚なるに由り、譬へば生盲の如し。「或は宿作を因と爲すと計執する有り」とは[四八]士用を損減するが故に邪執を成ず。

論曰 又若し略して說かば、阿賴耶識は異熟識の一切の種子を用つて其の自性と爲し、能く三界の一切の自體と一切の趣等とを攝す。

釋曰 本生を顯はし、自性を了別せんが爲の故に「又若し略して等」と言ふ。謂はく生生の中に善不善の諸業の熏習に由りて、所取と能取とを分別して執著す。種子の生ずる所の有情の本事は異熟を性と爲し、阿賴耶識と及び雜染の諸法の種子と並其の自相と爲す。「能く三界を攝す」とは、能く欲と色と及び無色との[四九]纏を攝す。「一切の自體」とは、能く一切の有情の相續を攝す。「一切の趣等」とは、能く天趣等を攝す。「能く攝す」と言ふは、常に相續する相なり。何を以ての故に。色の如く轉識は有る處有る時には相續し(または間斷するも阿賴耶識は則ち是の如くならず。乃し[五〇]治生に至るまで恒に一切を持して諸位に遍きが故なり。

論曰 此の中に五頌あり、

外と內とは不なり明了なり　[五一]二種は唯世俗なり
勝義なり諸の種子は　當に知るべし六種有り、

【四八】士用とは人の作用、即ち意志を無視するの意。

【四九】纏は異本に纒に作る、界の義なり。

【五〇】治生とは對治道の生ずるまでとの意。

【五一】二種は論本には「二に於て」となせり。

別自性緣起、二には分別愛非愛緣起なり。此の中、阿賴耶識に依止して諸法の生起する、是を分別自性緣起と名く。能く種々の自性を分別するを以て緣性と爲すが故なり。復十二支緣起有り、是を分別愛非愛緣起と名く。善趣と惡趣とに於いて能く愛非愛の種々の自體を分別するを以て緣性と爲すが故なり。

釋曰　「是の如き緣起は大乘の中に於て極細なり」とは、謂はく諸の世間は了知し難きが故なり。「甚深」とは、謂はく聲聞等は底を窮め難きが故なり。「緣起」とは、謂はく卽ち是れ因は因有りて起るの義なり。應に因の後に於て[四七]訖垤の緣を逭くことを念ずべきが故に。「分別自性」とは、謂はく分別に於て勢力有るが故に、或は分別に於て須ゆる所有るが故に、說いて分別と名く。卽ち阿賴耶識は能分別の自性なり。能く一切の有生の雜染法の性を分析して差別せしむるを以ての故に。「分別愛非愛」とは、謂はく無明等の十二支分なり。能く善趣と惡趣と、若しくは欣樂す可きと、欣樂す可からざるとを分析する種々なる自體の差別して生ずる中に於て最勝の緣と爲る。阿賴耶識より諸行等の生ずる時、無明等の勢力に由りて、福、非福、不動等をして差別有らしむるが故なり。

論曰　阿賴耶識の中に於て、若し第一の緣起に愚ならば、或は自性を因と爲すと分別するもの有り、或は宿作を因と爲すと分別するもの有り、或は自在變化を因と爲すと分別するもの有り、或は實我を因と爲すと分別するもの有り、或は無因無緣なりと分別するもの有り。若し第二の緣起に愚ならば、復我を作者と爲し、我を受者と爲すと分別するもの有り、譬へば衆多の生盲の士夫は未だ曾て象を見ざるに、復有るが象を以て說いて之を示すが如し。彼の諸の生盲は象の鼻に觸るゝもの有り、其の牙に觸るゝもの有り、其の耳に觸るゝもの有り、其の足に觸るゝもの有り、其の尾に觸るゝもの有り、脊膂に觸るるもの有り。諸の有に問うて言はく、象は何の相を爲すやと。或は有るは說い

【四七】訖埵(Kṛt)とは字緣にして已竟の義を示す根本後接字なり。

いて因緣と爲せば卽ち異門の說なり。阿賴耶識の[四二]同類と[四三]遍行と[四四]異熟との三因は若し熏習を任持する因性を離るれば相應せざるが故なり。熏習は若し阿賴耶識を離るれば有るべき無きが故に。[四五]相應因とは心と心法と更互に相ひ待して、受用の境界に自らの功能有ること、猶商侶の功能を離るゝに非ざるが如し。阿賴耶識は能く種に依りて[四六]俱有因の義を起す、卽ち阿賴耶と諸轉識となり。若し是の如き俱有因の攝を離るれば、內外の種子たる阿賴耶識は所餘の因緣にては定んで得べからざればなり。

〔因果別不別章　第八〕

論曰　云何が熏習には異無く雜無くして、而も能く彼の異有り雜有る諸法の與に因と爲るや。衆の纈具と纈に纈らるゝ衣の如し。之を纈ぶ時に當りては、復未だ異雜にして非一なる品類の染色、絞絡せ有らずと雖も、染器に入れて後、爾の時には衣の上に便ち異雜にして非一なる品類の得べきものる文像の顯現する有り。阿賴耶識も亦復是の如し。異雜なる能熏の熏習する所なり。熏習の時に於ては復未だ異雜の得べきもの有らずと雖も、果の生じ染器の現前し已つて後、便ち異雜の無量なる品類の諸法の顯現する有り。

釋曰　「云何が熏習には異無きに」等とは、理に就いて難を爲し、理に依りて通じて言ふ。「衆の纈具と纈に纈らるる如し等」とは、纈具は卽ち是れ淡澁の差別なり。衣を纈る時に當つては異無く雜無し。文像の得べく、果の生ずるは卽ち染器なるが故に、果生を染器と名く。緣に攝受せらるるが故に名けて「入る」と爲す。阿賴耶識は染めらるゝ衣の如く、衆像を染むるが如きは諸法顯現するなり。

〔緣起章　第九〕

論曰　是の如き緣起は大乘の中に於て極細甚深なり。又若し略して說かば二の緣起有り。一には分

【四二】同類因とは善が善の因となるが如く同類の法の爲に因となるをいふ。
【四三】遍行因とは同類因の中特に煩惱に就て邪見、無明等の如く一切の惑に遍通して因となるものをいふ。
【四四】異熟因とは因と果と其の類を異にせるものをいふ。
【四五】相應因とは心王と心所とは相應して互に因となるをいふ。
【四六】俱有因とは前の蘆束の喩の如く二法以上のもの互に相依資して同時に因となるものをいふ。

等を行ずる者の、貪等の熏習の如し等」とは、此れ餘部の共に成ずる熏習を擧げ自宗の義に喩ふるなり。

〔不一不異章　第六〕

論曰、復次に阿賴耶識の中の諸の雜染品の法の種子は別異にして住すと爲すや。別異無しと爲すや。彼の種子は別の實物有るに非ず。此の中に於て住するも亦異らざるに非ず。然も阿賴耶識は是の如くして生じ、能く彼を生ずる功能差別有るを一切種子識と名く。

釋曰　一切法の種子は是れ阿賴耶識の功能の差別なり。法の作用と諸法の體と一に非ず異に非ざるが如し。此も亦復爾り。

〔更互爲因果章　第七〕

論曰　復次に阿賴耶識と彼の雜染の諸法とは同時に更互に因と爲ることを云何が見るべきや。譬へば明燈の焔と炷とは生ずると燒くと同時にして更互なるが如し。又蘆束の互に相ひ依持して同時に倒れざるが如し。應に觀るべし、此の中の更互に因と爲る道理も亦爾なり。阿賴耶識は雜染の諸法の因と爲るが如く雜染の諸法も亦阿賴耶識の因と爲る。唯是の如きに就いてのみ因緣を安立す。所餘の因緣は得べからざるが故に。

釋曰　譬へば明燈の一時の間に於て燈炷と燈焔とは焔を生ずると炷を燒くと互に因果と爲るが如く、阿賴耶識と諸の轉識とは一時の間に於て互に因果と爲る、其の性も亦爾り。是の如く蘆束も更互に依持し住して倒れざらしむ。若し爾の時に於て此れ能く彼れを持して住して倒れざらしむれば、卽ち爾の時に於て彼れ能く此れを持して、住して倒れざらしむ。「唯是の如きに就て因緣を安立す」とは、謂はく前説の種子を攝持して相應するに就ていふ。餘には非ず。「所餘の因緣は得べからざるが故に」とは、謂はく所餘の法は種子を攝持して相應せざるが故なり。[四二]若し五因を說

【四二】五因とは四大種を能造の因となして諸法を生ずるに生因、依因等五因を立つ、但し此には次に擧ぐる五因を指す。

言熏習と所生の　諸法とは此れ彼れにより
異熟と轉識と　更互に緣と爲つて生ず。

〔熏習章第五〕

論曰　復次に何等をか名けて熏習と爲すや。熏習は能詮なり、何をか所詮と爲すや。謂はく彼の法と倶に生じ倶に滅するに依りて此の中に能く彼れを生ずる因性有り。是を所詮と謂ふ。苣藤の中に華の熏習有るが如し。苣藤と華と倶に生じ倶に滅す。是の諸の苣藤は能く彼の香を生ずる因を帶びて生ず。又所立の貪等を行ずる者の、貪等の熏習は彼の貪等と倶に生じ倶に滅するに依りて、此の心は彼の生ずる因を帶びて生じ、或は多聞の者の、多聞熏習は、聞く作意と倶に生じ倶に滅するに依りて、此の心は彼の記する因を帶びて生ず。此の熏習は能く攝持するに由るが故に、持法者と名くるが如く。阿賴耶識の熏習の道理も、當に知るべし亦爾なり。

釋曰　「復次に何等をか名けて熏習と爲す等」とは、熏習の自相を決了せんと欲するが爲なり。[三七]鄭重に徵責するは了知し難きが故なり。「謂はく彼の法と倶に生じ倶に滅するに依りて、此の中に能く彼れを生ずる因性有り」とは、謂はく此の所熏と彼の能熏と同時に生滅す。彼れに因りて此れ有り、隨順して能く能熏の種類たる果法の習氣を生ず。[三八]「倶に」と言ふは異時の生滅に簡ばんが爲なり、常住と別たんが爲なり。此れ熏習の相は、[三九]餘の計に異ることを顯はす。「依りて」とは因なり。因に於て是の如き[四〇]字緣を建立するは、雲に依りて雨有り等と言ふが如し。其の因性を擧ぐるは此の中に能く隨順して果を生ずる因の體有ることを顯はさんが爲なり。「苣藤の中に花の熏習有るが如し等」とは、他の共に成ずるを擧げて自宗の義に喩ふ。自ら見る所の苣藤と花とは倶に心の變ずるに由るが故に、彼の苣藤と諸の香花と倶生倶滅するが如し。是を因と爲すに由り、隨順して能く後々の無間に花の香氣を帶びたる苣藤の刹那を生ず、此れも亦是の如し。「又所立の貪

[三七] 熏習の道理は難解なるが故に論本には親切に問答徵責して說けりとの義。
[三八] 次の二句は後に說く熏習の條件に照して考ふべし。
[三九] 餘の計とは他の種々異說を指す。
[四〇] 字緣は梵語の格を示す後接字にして「依りて」の意義を釋す。

彼の生ずる因と爲る。能く種子を攝持して相應するに由る。此の中、阿賴耶識の因相を安立すとは、謂はく即ち是の如きの一切の種子たる阿賴耶識は、一切時に於て彼の雜染の品類の諸法の現前する與に因と爲る。此の中、阿賴耶識の果相を安立すとは、謂はく即ち彼の雜染品の法の無始の時より來、有する所の熏習に依りて阿賴耶識は相續して生ずるなり。

釋曰　是の如く已に異門を安立すること說けり。次に相を安立す。唯其の名に由るのみにては、未だ此の識の自相を了別すること能はざるが故なり。次に須らく自の相應の相を說くべし。「略して三有り」とは、此の識の自の相應の相を分析するに、二種の因果の異りを爲すを以ての故に。識の自相に依りて是の如き言を說く、「謂はく一切の雜染品の法の所有の熏習に依りて」とは、即ち貪瞋等を名けて一切の雜染品の法と爲す。彼の能熏と倶に生滅するが故に種子を成ずることを得。即ち此の功能は彼の當に生ずべきに望むれば能く生因と作る。「能く種子を攝持して相應するに由る」とは[三一]第五處に於て第三轉を說く。是れ能く種子を攝持して相應する義の故に。此の中「種子を攝持して相應す」とは、謂はく生法有り倶に生し倶に滅するが故に熏習を成ず。是の如く熏習して種子を攝持することは正しき道理に應ず。[三二]此と相應するが故に能く彼を生ず。[三三]最勝等は所說の如く種子を攝持して相應すること有るに非ず、亦等無間緣等に非ず。彼れ能く攝受すと雖も最勝の因に非ず。種子を攝持して相應せざるが故なり。最勝の因とは謂ゆる種子阿賴耶識なり。能く此を攝持するが故に、能く[三四]彼が與に而かも生因と作る。唯攝受するのみに非ず要ず熏習の功能を攝持するに由りて、方に因と爲るが故なり。因相は即ち是れ[三五]增盛の作用にして、熏習の功能は能く同性と爲り、現前して能く雜染の法を生ずるが故なり。果相は即ち是れ轉識の攝なるに由り、貪等の現行せる雜染の諸法なり。熏習の持する所なるを名けて果相ど爲す。阿賴耶識は[三六]因果不定なり。故に當に說いて言ふべし。

【三一】第五處云云とは「由る」の意義を釋す、梵語八轉聲の語格、第五の所從聲の處に第三の作具聲に依つて說くとの意。
【三二】此と云云とは因と果と相應するの義。
【三三】最勝等とは前に說ける數論の自性を指す。
【三四】彼とは現行の諸法。
【三五】增盛の作用とは善又は惡をいふ。
【三六】因果不定とは因とも果とも一方に決定する能はずとの義。

所有るは、此れ則ち是れ其の阿頼耶の力なり。意識に於て此の我愛有るは正しき道理に應ずるに非ず。惡趣の中に於ては彼の苦受と恒に相應するが故なり。此の道理に由り、餘趣の中に於ける彼の希願に於ても亦相應せず。第四靜慮已上に生じ、貪と倶なる樂に於て、恒に厭逆有りと雖も、然も内の我愛は隨縛して離れず。是の如きの我愛は[二四]他に依りて轉ず。阿頼耶に依りて、意識には非ず。阿頼耶は乃至對治道の未だ生ぜざる來、變易無く轉ずるを以てなり。意識は爾らず、無想定と[二五]無想と滅定とに於ては間斷有るが故なり。意識有るに非ずして而かも受有ること無し、[二六]倶に有を成ずるが故なり。此の正法の中に於て無我を信解する者は、恒に[二七]分別の我見を厭逆すと雖も、然も[二八]倶生の我見有りて隨縛す。此れ何れの處に於てなりや。謂はく彼は但阿頼耶識に於てなり。[二九]卒爾に聲を聞けば、便ち內我を執して驚畏を生ずるが故なり。何に緣つて卽ち諸蘊に於て我愛有るを許さざるや。若し彼に於て我愛有らば、此れ則ち是れ其の阿頼耶識なるを以てなり。所緣の行相を分別すべきに由りて、四無色蘊は無想天と二の無心定とに於ては相續せざるが故に。若し爾らば阿羅漢は身見を厭逆すと雖も亦應に有るを得べきや。是の如き我愛を斷ずるが故に有ること無し。阿羅漢は一切の我見を皆已に永く斷ずるを以ての故に、此の失無し。是の故に說いて言く、阿羅漢は已に阿頼耶識に於て[三〇]轉じて、更に此の我愛無しと。是の故に阿頼耶識を安立して阿頼耶識と名くること決定して成就し、諸の過失無く、諸の勝德有り。是の故に說いて言く「最勝を成就す」と。

〔相章第四〕

論曰 是の如く已に阿頼耶識を安立する異門を說けり。此の相を安立することを云何が見るべきや。此の相を安立するに略して三種有り、一には自相を安立し、二には因相を安立し、三には果相を安立す。此の中、阿頼耶識の自相を安立すとは、謂はく一切の雜染品の法の所有の熏習に依りて

【二四】他に依りて轉ずといふ他は阿頼耶識には非ずとの意。
【二五】無想とは無想天の果報を指す。
【二六】意識あって受の作用あり、受有りて意識ありといふ如く倶有依の關係なればなり。
【二七】分別の我見とは生後に得たる後天的の我執をいふ。
【二八】倶生の我見とは生るゝと倶に有する生得の我見をいふ。卽ち本能的の我執なり。
【二九】突然に聲を聞いて驚くは内我の執ある證なり。
【三〇】轉じてとは轉依しての意。

と欲するが爲の故に、復問ふて言く。「云何が最勝なるや」と。「若し五取蘊を立てて阿賴耶と名くれば、惡趣の中の一向の苦處に生ず」とは㮈落迦、傍生、餓鬼に生ずるを惡趣に生ずと名く。唯苦のみ有るが故に、苦に似て現するが故に、一向の苦處と名く。彼には曾て少しの樂も有ること無きに由るが故に最も厭逆すべし。一切時に於て多苦有るが故に、衆生は一向に愛樂を起さず。不愛の義にして而も執藏有るに非ず。執藏の義と相應せざるが故に。中に於て執藏することは道理に應ぜず。「彼れ常に速かに捨離せんことを求むるを以て」とは、是れ苦蘊に於て恒に傷歎するの義にして、云何が當に我をして苦蘊無からしむべきと、速かに離るることを求めて、而も復執藏するは正しき道理に應ずるに非ず。相違するを以ての故なり。[一五]第四靜慮及び上の無色には、貪と倶なる樂受は恒に有る所無く常に厭逆有り。[一六]是れ厭の因なるが故に、[一七]惡逆すべきが故なり。[一八]「彼を具する」と言ふは、第四靜慮已上の有情は彼を具する種類なり。是の故に彼の處は中に於て執藏することも亦理に應ぜず。[一九]有ること無きを以ての故なり。此の正法の中に於て無我を信解する者は常に極めて薩迦耶見を厭逆す。是れ應に斷ずべきが故に、無我を見る者は[二〇]彼れ有ること無きが故に、但信解を取りて恒に斷せんことを求むるが故に、中に於て執藏することも亦理に應ぜず。是の如く已に他の執の過失を顯はせり。復當に自宗の勝徳を顯示すべし。「阿賴耶識は內我の性に攝す」とは、衆生妄執して內我の體と爲す。然りと雖も[二一]兩聲は重ねて他說の妄計を遮止せんが爲なり。[二二]㮈落迦等を「惡趣の一向に苦なる處に生ず」と名く。苦蘊に於て常に遠離せんことを求むと雖も、然も彼れ恒に阿賴耶識に於て我愛の羂索隨縛して離れず。曾て中に於て[二三]無有愛を起さず、捨受と相應するは厭逆すべきに非ざるに由るが故に。所以は何ん、彼れ云何が當に我が諸の苦蘊をして、都て所有無からしむべきかと希願すと雖も、然も自我に於て未だ嘗て我見を離れんことを求めず。對治未だ有らざるが故に、異趣には更に無きが故なり。若し諸蘊に於て願樂する

【一五】色界の第四天以上無色界にはとの意。

【一六】貪と倶なる樂欲を厭離せんとするが修定の因なりとなり。

【一七】惡逆とは憎惡し反逆するの意。

【一八】彼を具すとは貪樂を具するの意。

【一九】有ること無しとは是の如き道理有ること無しの意なり。

【二〇】彼れとは薩迦耶見をさす。

【二一】兩聲とは內我を指すか。

【二二】㮈落迦（naraka）は地獄のこと。

【二三】無有愛とは無愛にあらず有愛にあらざる無記の狀態をいふものなるべし、蓋し次に捨受云云といふが故に。

向に苦なる處に生じて、苦蘊を離るることを求むと雖も、然も彼恒に阿賴耶識に於て我愛隨縛して、未だ嘗て離るゝことを求めず。第四靜慮已上に生じて、貪と倶なる樂に於て恒に厭逆有りと雖も、然も彼れ恒に阿賴耶識に於て我愛隨縛す。此の正法に於て無我を信解する者は我見を厭逆すと雖も、然も彼れ恒に〔一〇〕阿賴耶識に於て我愛隨縛す。是の故に阿賴耶識を安立して阿賴耶と名くるは最勝を成就す。

釋曰　「復一類有り、謂はく心意識は義一にして文異る」とは、此れ邪執を顯はす。謂はく所説の如き心意識の名は皆同一の義なりと。「是の義成ぜず」とは是れ非理の義なり。「意と識との兩義の差別得べし」とは、〔一一〕兩聲は兩義にして能詮、所詮自ら相ひ異るが故なり。謂はく六識身の無間の過去を説いて名けて意と爲す。境界を了別するを説いて名けて識と爲す。意と識とに名と義との差別有るが如く、是の如く心の義も亦應に異り有るべし。「復一類有り、謂はく薄伽梵の説く所等」とは、此れ餘師の阿賴耶を愛す等に於て、異義の執を起すことを顯はす。「五取蘊を阿賴耶と名く」と言ふは、謂はく諸の衆生は攝して我と爲すが故なり。「貪と倶なる樂受を阿賴耶と名く」と言ふは、謂はく貪と受と倶に行するを總じて阿賴耶と名くとなり。此の受は是れ貪の增す所の〔一二〕隨眠なるが故に。〔一三〕或は復各別に阿賴耶と名く、著處異るが故に。「薩迦耶見を阿賴耶と名く」と言ふは、此れ彼を取して我性と爲すに由るが故なり。「此等の諸師は教及び證に由りて阿賴耶識に愚なるが故に此の執を作す」とは、謂はく彼の諸師は惡教を有するが故に、惡證を有するが故に、阿賴耶識に愚なり。或は彼の諸師は親教無きが故に、自解無きが故に、阿賴耶識に愚なり。「聲聞乘に隨ふも安立する道理は亦相應せず」とは、彼の自宗に隨ふも亦理に應ぜずとなり。勝論等の立つる所の〔一四〕實等の如く、彼れ勝れ爲るに非ず。過失有るが故に。「是の如く安立すれば則ち最勝と爲す」とは、過失無きが故に、勝德有るが故なり。彼の計執する過失を顯はさん

〔一〇〕世親釋論本には「然も藏識に於て我愛隨縛す」とあり。

〔一一〕兩聲とは意と識の二名には各其の名に應ずる意義あり、故に能詮の名字と所詮の義理とは自ら異ることとなり。

〔一二〕隨眠とは煩惱の潜勢力なり。

〔一三〕或は復云云とは異解を示す、著する處異るが故に樂受と貪とは各別に阿賴耶と名くべしとの意。

〔一四〕實等とは勝論所立の實德等の六句。即ち外道の説を擧げて小乘に類比して之を破す。

因なるが故なり。六識は不死不生なり。と說くが如きは或は〔七〕有分に由り、或は反緣に由りて死し、異熟の意識界に由りて生ず。是の如き等を能く引發する者は唯是れ意識なるが故に是の言を作す。五識は法に於て了知する所無く、唯引發せらる。意界も亦爾り、唯等しく尋求し、見は唯照矚し、等しく貫徹する者は決定智を得、安立は是れ能く語を起して分別す。六識は唯能く隨つて〔八〕威儀を起すも、善不善業の道を受くること能はず、定に入ること能はず、定を出づること能はず。勢用は一切皆能く起作す。能く引發するに由りて睡より覺め、勢用に由るが故に所夢の事を觀ず。是の如き等なり。〔九〕分別說部も亦此の識を說いて有分識と名く。是の如き等の諸部の聖敎を定量と爲すに由るが故に、阿賴耶識は大王路の如し。

論曰　復一類有り、謂はく心意識は義一にして文異ると。是の義は成ぜず。意と識との兩義の差別得べし。當に知るべし、心の義も亦應に異り有るべし。復一類有り、謂はく薄伽梵の說く所の、衆生は阿賴耶を愛し乃至廣說す、此の中、五取蘊を說いて阿賴耶と名くと。有餘復謂はく貪と俱なる樂受を阿賴耶と名くと。有餘復謂はく薩迦耶見を阿賴耶と名くと。此等の諸師は敎及び證に由り阿賴耶識に愚なるが故に此の執を作せり。是の如く阿賴耶の名を安立するは聲聞乘に隨ふも安立する道理は亦相應せず。若し愚ならざる者は阿賴耶識を取りて彼の說を安立す。阿賴耶の名を是の如く安立すれば則ち最勝と爲す。云何が最勝なる。若し五取蘊を阿賴耶と名くれば、惡趣の中の一向に苦なる處に生ずることは最も厭逆すべし。衆生は一向に愛樂を起さず、中に於て執藏することは道理に應ぜず。彼は常に速かに捨離せんことを求むるを以ての故なり。若し貪と俱なる樂受を阿賴耶と名くれば、第四靜慮以上には有ること無し。彼を具する有情は常に厭逆有り。中に於て執藏することも亦理に應ぜず。若し薩迦耶見を阿賴耶と名くれば、此の正法の中に於て無我を信解する者は恒に厭逆有り。中に於て執藏することも亦理に應ぜず。阿賴耶識は內我の性に攝す。惡趣の一

〔六〕此の一段には上座部の所謂九心輪を說く、即ち一に有分、二に能引發、三に見、四に等尋求、五に等貫徹、六に安立、七に勢用、八に反緣、九に有分なり、これ初め更生の時より識の作用の展轉增進する狀態を示すものなり、詳しき解釋は成唯識樞要下本を參照せよ。

〔七〕或は有分に由り云云とは有分は死と生とに通じ、反緣心は唯死を得、離欲の聖者の死は唯有分心のみ、未離欲の者の死は反緣心に由る。

〔八〕威儀とは起居動作のこと。

〔九〕分別說部とは了義燈には大衆部の一分派なる說假部なりといへり。

如く決定を求むるが故なり。此れ則ち其の思所成の智を說く。「法と隨法とを行ず」とは、所證を法と名け、道を隨法と名く、彼に隨順するが故なり。又出世の道を法と名け、世間の道を隨法と名く。「行ず」とは、彼を行して自心に相續し、彼を[一]樹增するが故に、彼をして現前して自在を得しむるが故なり。此れ則ち其の修所成の智を說く。「如來出現四德經の中、此の異門密意に由りて已に阿賴耶識を顯はす」とは、謂はく此の經の中に、如來世に出現するに其の四種の稱讃すべき德有ることを宣說せり。「大衆部の阿笈摩に於て等」とは、重ねて此の識は、彼の部の中に於て大王路の如くなることを成ず。「根本識」とは、餘識の因なるが故なり。譬へば樹根は是れ莖等の因なるが如し。「化地部等」とは、彼の部の中に於て三種の蘊有り、一には一念頃蘊、謂はく一刹那に生滅有るの法なり。二には一期生蘊、謂はく乃し死に至るまで恒に隨轉する法なり。三には窮生死蘊、謂はく乃し金剛喩定を得るに至るまで、恒に隨轉する法なり。此れ若し彼の阿賴耶識を除けば餘は應に有るべからず。但異名により阿賴耶識を說くのみ。[二]名の如く諸蘊は決定して生死を窮むること有る無きが故なり。彼れ[三]云何と問ひ、此れ「有處有時に[四]見る等」と答ふ、有處とは界に於て、有時とは分に於てなり。無色界に於ては諸色間斷す。無想天及び二定の分に於ては諸心間斷す。阿賴耶識の中に於ける色心の種子は、乃至對治道、未だ生せさる來、時有りて間斷すと應に計度すべからず。と謂ふには非ず。應に有るべき所に隨ひて正義有るが故に。傍義を計度して正義を違越するは道理に應ぜず。

論曰　是の如く所知依は阿賴耶識を性と爲し、阿陀那識を性と爲し、心を性と爲し、阿賴耶を性と爲し、根本識を性と爲し、窮生死蘊を性と爲す等と說く。此の異門に由りて阿賴耶識は大王路を成ず。

釋曰　「等」とは謂はく聖者上座部の中、[五]有分の聲を以て亦此の識を說く。阿賴耶識は是れ有の

【一】樹增とは樹木の生長するが如く增長するの義なるべし。

【二】名の如くとは窮生死蘊といふの名に相應せる諸蘊なしの意。

【三】色心は有時有處に斷ずることあり云何ぞ窮生死なるやと問ふ。

【四】見る等とは或る處、或る時には間斷することを見るの意。

【五】有分とは有は三有、分は因の義なり、其の體恒に斷せずして三界に周遍し、三有の因となる識を有分識と名く。

卷の第二

所知依分第二の二

論曰 復次に聲聞乘の中にも、亦異門の密意を以て已に阿賴耶識を說けり。彼の增壹阿笈摩に說くが如し。世間の衆生は阿賴耶を愛し、阿賴耶を樂ひ、阿賴耶を欣び、阿賴耶を憙ぶ、と。是の如きの阿賴耶を斷ぜんが爲の故に、正法を說く時恭敬して耳に攝す。求解の心に住して法と隨法とを行す。如來出世して是の如き甚奇にして希有なる正法は世間に出現せり。聲聞乘の如來出現四德經の中に於て此の異門の密意に由りて已に阿賴耶識を顯せり。大衆部の阿笈摩の中に於ても亦異門の密意を以て此を說いて根本識と名く、樹の根に依るが如し。化地部の中にも亦異門の密意を以て此を說いて窮生死蘊と名く、有る處、有る時には色心の斷ずることを見るも、阿賴耶識の中の彼の種には斷有るに非ず。

釋曰 「聲聞乘の中に亦異門密意を以て、已に阿賴耶識を說く」とは、此れ餘部の共に成立する所を擧げて、阿賴耶識を顯はす。大王路の如くなるが故なり。先に總序として、「彼の增壹阿笈摩に說くが如し」とは、是れ一切有部の中の說を說く。「阿賴耶を愛す」とは、此の句は總說して阿賴耶識を貪著す。「阿賴耶を樂ふ」とは、現在世の阿賴耶識を樂ふ。「阿賴耶を欣ふ」とは、過去世の已生の阿賴耶識を欣ぶ。「阿賴耶を憙ぶ」とは、未來世の當生の阿賴耶識を憙ぶなり。此の性は彼に於て極めて希願するが故に、樂と欣と憙とに由る、是の故に總じて「阿賴耶を愛す」と名く。

「是の如き阿賴耶を斷ぜんが爲の故に」とは、永へに彼を害せんが爲となり。「正法を說く時」とは、正しき敎法を說くなり。「恭敬す」とは、樂ふて聞かんと欲するが故なり。「耳に攝す」とは、所聞の義の願を立てて聽くが故なり。此れ則ち其の聞所成の智を說く。「求解の心に住す」とは、

是の如く應に一切智は　　　　能く一切を作し、一切を知ると許すべし。

是の故に此の阿賴耶識に於て知ると知らざるとは一切智智を證し易きと、證し難きとなり。定んで此の宗に依れば是の如きの說を作す、一切法の無我を知る者に非ざれば、一切智と名くるも、彼は一切智なりと雖も一切種智には非ざるなり、と。

は定んで一切の境に於て智處轉ず」とは、菩薩に種姓の勢力有ることを顯はす。功能と悕願の處相と具さに相應するに由るが故に、一切の智性は所期の處と異ると爲せば、此れ他の義利を作すこと能はざるなり。所以は何ん、一切智に非ざれば、堪能有りて隨順して他の意樂と、隨眠と、界と、根の勝劣と、有能と無能と、時分の差別とを知りて、具さに一切の他の義利を作すこと無し。是の如き等の事は菩薩の所求なり、是の故に爲に阿賴耶識を說く。「若し、此の智を離るれば等」とは、若し阿賴耶識の智を離るれば永へに斷ずること能はず。義に於て遍計して彼れ斷ぜざるが故に無分別智は則ち有ることを得ず。遍計所執の義有りと執するが故なり。此の因緣に由りて一切智智を證得し易からず。所以は何ん、能く一切所知の共相を證するは是れ分別智にして遍計の義の自相を知る分別は、展轉不同にして無邊なるを以ての故に、決定して能く具さに一切を證すること無し。若し此れ唯阿賴耶識の能生の習氣の轉變の力の故に、義、有情、我は顯現して轉ずと知らば、爾の時所取の義無しと覺知す、是の如く亦能く能取無きを知り。此に由りて無分別智を證得す。次に後得智は[六五]串習する所の如く法性に通達す。一切法の共相の所顯なるに由り眞如一味にして一切法を知る。一刹那に於ても亦證得し易し。[六六]一切の境智は無邊に非ざるが故なり。然も復說いて三無數劫を經るを要すと言ふは、此れ廣大の資糧積集して方に能く廣大にして殊勝なる一切の種相、微妙の果智を證得することを顯はす。是の如く說く所の妙智の資糧は、能く法無我の境を證することを離れず。故に頌を說いて言く、

一切の所知の境に於て　所執の法の分別を斷ぜざるに非ず
而して能く一切智を證得す　是の故に法無我を宣說す。

善く是の如き理教に通達せざるが故に、頌に言へる有り、

彼れ相續して堪能有るに由り　當に知るべし火の一切を食するが如し

【六一】前は眞諦門の解釋にして或は以下は俗諦門の解釋なり。

【六二】共相とは共通の相の義にして無常等の如き諸法に共通なる義をいふ。

【六三】阿賴耶識を說かざるも過失なしの意。

【六四】無常等とは小乘は四諦を無常等と觀ず、其の苦諦の中に阿賴耶識は攝せらるゝが故に別に說かずといふ、これ共相に依つて阿賴耶を知るとなす、了燈灯第四末に解あり參照。

【六五】串習する云云とは無分別智にて數ゝ修習する力が後得智となりて現はるゝが故なり。

【六六】此の句は前の遍計の異執分別の展轉して無邊なるに對す。

釋曰　「種々の法に由る」とは、謂はく種々の品類の轉識に攝する所の諸法に由るなり。「熏習する種子」とは、謂はく所熏の成ずる功能の差別なり。「積集する所」とは、謂はく雜種の類其の中に積集するなり。「故に」とは卽ち是れ門の義、依の義なり。此れ則ち心の聲の轉ずる因を顯示ず。

論曰　復次に何が故に聲聞乘の中には、此の心を阿賴耶識と名け阿陀那識と名くと說かざるや。此れ深細なる境の所攝なるに由るが故なり、所以は何ん、諸の聲聞は一切の境に於て智處轉ぜざるに由る。是の故に彼に於ては此の說を離ると雖も、然も智成ずることを得て、解脫を成就するが故に。爲に說かず。若し諸の菩薩ならば定んで一切の境に於て智處轉ず、是の故に爲に說く。若し此の智を離るれば、一切の智智を證得し易からず。

釋曰　「此れ深細なる境の所攝なるに由るが故に」とは、此れ阿賴耶識も亦是れ深細にして亦所知の境なることを顯はす。深細に由るが故に、諸の聲聞に於ては爲に宣說せず。彼は是れ麁淺の所知の境に攝して應に化すべき所なるが故に。深細の境智は彼に於て恩無し。「諸の聲聞は一切の境に於て智處轉ぜざるに由る」とは、此れ則ち彼には功能と悕願の處相と有ること無きを顯はす。「是の故に彼に於ては此の說を離ると雖も等」とは、謂はく聲聞に於ては爲に阿賴耶識を說くを離ると雖も、但麁淺の色等の境界、苦集等の性、無常等の行に由りて、正しく觀察する時は、便ち能く永へに一切の煩惱を斷ず。彼は此の義の爲に世尊の所に依りて梵行を勤修す。麁淺と言ふは謂はく諸の色法の體相麁なるが故に。[五五]受等の諸法を緣ずる所の行相は、分別すべきこと易く、[五六]行相麁なるが故なり。此れと相違して其の[五七]所應の如く阿賴耶識を說いて深細と名く。[五八]我れ一法をも未だ達せず、未だ遍知せざる等を說かずと說くが如きは、此れ密意の說なり。煩惱を斷ぜずとは、別相の聲を以て[五九]總相の處を說く、[六〇]諸の煩惱を各別に斷ずること有るに非ず。[六一]或は[六二]共相の[六三]無常等の行を取るが故に爲に說かず。[六四]阿賴耶識も亦過失無し。「若し諸の菩薩

字は意と識の別の名に過ぎずとなすことも不可なり、其の理由は心の名に依つて詮表せらるゝ義を異にするが故なりとなり。

【五四】　心體といふ體の字の顯はす意趣は所詮の義を取る、故に意と識とに異る所詮なかるべからず。

【五五】　受等とは受、想、思等の心所をいふ。

【五六】　行相とは心識の作用する相狀の義。

【五七】　所應の如くとは前義は深、後義は細に應ず。

【五八】　此の經說は一切の法に已に達し已に遍知せる者は一切の煩惱を斷じて阿羅漢となる、而も小乘は阿賴耶識を知らずとすれば遍知にあらず何ぞ此の言あるや、との外難を遮ぜんが爲に之を密意の說として眞俗二門より解釋せり。

【五九】　總相とは普遍の相、卽ち生空眞如をいふ、處とは義なり別相とは特殊の相の義。

【六〇】　諸の煩惱云云各別に色等の諸法を緣ずる別相の智を斷ずるに非ずとの意。

亦我執有りて常に隨逐する所となり、自ら謂へらく、「我れ能く施等を修行す」と。[五〇]無明を離れて我執隨逐するに非ず、依止を離れて而かも無明有るに非ず。[五一]是れ心法なるが故に、此の所依止は染汚の意を離れては定んで有る所無し。即ち善心は是れ無明の依に非ず。正しき道理に應ずること說の如し。

　是の如く染汚の意は　　是れ識の所依にして
　此れ未だ滅せざれば識縛は　　終いに解脫を得ず。

「二有ること無し」とは、謂はく不共無明と及び五同法となり。「三の相違を成ず」とは、謂はく訓釋詞と、二定の差別と、無想天の生に我執の隨逐すとなり。是の如き三種は皆相違を成ず。前に已に略して不共無明を擧げ、今廣釋せんが爲の故に說く、「眞義の心當に生ずべきに」等とは、謂はく能く眞實の義を見ることを障礙す、彼れ若し現に有れば此れ生ぜざるが故なり。「一切分に俱行す」とは、是れ善・不善・無記の位の中に常に隨轉するの義なり。

論曰　心體は第三に、若し阿賴耶識を離れては別に得べき無し。是の故に阿賴耶識を成就して以て心の體と爲す。此を種子と爲すに由りて意及び識轉ず。

釋曰　「心體は第三に若し阿賴耶識を離るれば別に得べき無し」とは、謂はく意の聲は染汚の意を說き、無間滅の意識の聲は則ち六種の轉識を說くが如く、是の如く心の聲は彼の二種を離れて體の得べき無し。體有ること無くして而かも[五二]能詮有るに非ず。亦[五三]異門の意と識との二聲に非ず。所詮異るが故に。此の中、[五四]體の聲は意所詮を取る。「是の故に阿賴耶識を成就す等」とは、阿賴耶識は是れ心の聲の所詮を顯はすことは道理決定せり。

論曰　何の因緣の故に亦說いて心と名くるや。種々の法に由りて、熏習する種子の積集する所なるが故なり。

【四二】礙とは瘂攣を起して一時意識不明となるをいふ。
【四三】我執の所依云云とは前の轉計を破す。
【四四】色法の熏を受く云云とは前に我執の習氣ありといふを破し、無想天は無意識にして肉體に習氣相續すといふは、即ち色法(肉體)に熏習を受くることゝなりて熏習の理に應ぜずとなり。
【四五】堪能無きが故にとは色法には受熏の能力なしとの意。
【四六】經部師云云とは經部は色心互熏說を立つるが故に之を破す。
【四七】色には等無間緣なしとの意。
【四八】すべての心識作用即ち心王心所には必ず因緣、等無間緣、所緣緣、增上緣の四緣を具するが故にとなり。
【四九】若し別に云云とは染汚の意を立てゝ我執の所依となす義を成立す。
【五〇】無明を離れ云云とは前說の善位に我執あることより推して染汚の意を成立す。
【五一】是れ心法なるが故にとは我執あるは無明あればなり、無明あるには其の所依の心法なかるべからずとの意。
【五二】能詮云云とは心といふ能詮の名字なき筈なりとなり。
【五三】異門の云云とは心の名

とは、前に說く所の如く、意の名を訓釋するに思量性に依る。若し染汚の意有りと立てざれば、此れ何の所依なりや。六識は已に謝して應に意を成ずべからず。[三三]體滅して無なるが故なり。「又無想定と滅盡定との差別有ること無し、過失を成ず」とは、若し定に染汚の意有りと立つる有れば、此れ有ると此れ無きと、凡に在りて相續すと、聖に在りて相續すとは、[三四]其の次第の如く二定の差別の道理成就す。若し爾らざれば想受の滅等と倶なる有識の行は應に差別無かるべし。第四靜慮に在ると、[三五]第一有地に在るとの差別なるが故にと說くべからず。[三六]出離と[三七]靜住と欲との差別なるが故に。二定差別す。二の自相差別無きに由るが故に、心及び心法倶に滅せば何ぞ異らん。今此に決擇す。經部師に對するに少しく相近きが故に、[三八]彼の部の立つる所の、不相應行は實物有るに非ず、何ぞ二定實に差別有るを得んや。又無想天の一期の生の中、我執の轉ずること無しとせば、應に過失を成ずべし。無想と言ふは謂はく若し無想天の中に生在し、心心法滅し、初めて生を續くる時彼れ暫く起る有り、此れより已後相續して隨轉す。若し彼に染汚の意有るを許さざれば、一期の生の中に應に我執無かるべし。曾て煩惱を具する者有るを見ざれば、一期の生の中に都て我執無けん。又[三九]諸の聖賢は同じく訶厭するが故なり。[四〇]生ずる刹那に意識を現起するに非ず。[四一]我執の所依は勢引と爲るが故に、我執有りて未だ永斷せざるに名くるが故に、[四二]獨等の有るが如く應に正しき道理なるべし。[四三]我執の所依は倶に謝滅するが故に、勢引も亦餘の所依無きが故に、道理に應ぜず。我執の習氣身に在りて相續すとなすも亦理に應ぜず。[四四]色法の熏を受くることは理に應ぜざるが故に、[四五]堪能無きが故に。又[四六]經部師は唯色を名けて心法と爲すと說かず。等無間緣は[四七]此に無き所なるが故に。[四八]心及び心法は四緣定まるが故に。[四九]若し別に常に倶に起る心有りと說かば、我執の所依は此に過失無し。又一切時に我執の隨逐することは道理に應ぜず。謂はく若し染汚の意有りと說かざれば、一切時に於て義符順せず。施等の善位にも

擇隨念の分別なし。

【三三】六識の體は已に滅して無ければ所依たることを得ずとの意。

【三四】其の次第の如く云云とは定中に染汚の意有るは無想定にして、これ無きは滅盡定なり、從つて前者は凡夫に相續し、後者は聖者に相續す。二定の差別知るべし。

【三五】第一有地とは無色界の第四天。

【三六】出離とは定の加行として出離と止息とを二定の別となす。

【三七】靜住は色無色界にして無想定、欲は欲界にして滅盡定。

【三八】經部は不相應行は假法となすが故なり、而して二定は不相應行に屬す。

【三九】無想天に生して解脫せりとなすことは諸の賢聖の訶責し嫌厭する所なればこれ未だ眞の解脫にあらず。從て我執あるべしとなり。

【四〇】生ずる刹那云云とは轉計して謂はく無想天に生ずる刹那に我執の本となる意識現起すと。此の轉計を破す。

【四一】我執の所依云云とは又轉計して謂はく、我執の所依は一の勢力として後を引くものなれば未だ永斷せずとも一時の間歇あるべしと。

明の名は成ぜざるが故に。若し意識は彼の煩惱に由りて染汚を成ずと立つれば、卽ち應に畢竟して染汚性を成ずべく、諸の施等の心は應に善を成ぜざるべし、彼の煩惱の相は恒に相應するが故に。若し復有るが說く、善心と倶に轉じて彼の煩惱有りと。是れ卽ち一向に彼と相應す、[19]餘有ることを得ず。此の染の意識の對治を引生することは道理に應ぜず。若し有るが說いて言はく、染汚の意と倶に別の善心有り、能く對治を引き、能治生ずるが故に、所治卽ち滅すとせば、應に正しき道理なるべし、と。[20]若し爾らば立つる所の不共無明も亦成就せず。身見等の所餘の煩惱と恒に相應するが故に。[21]汝の難は不平なり。我れは彼れ餘の煩惱と相應せざるが故に名けて不共と爲すと說くに非ず。然も彼の惑は餘處に無き所なるが故に不共と名くと說く。譬へば[22]十八不共佛法の如し、前說の餘の煩惱と相應すれば[23]名成ぜずとは、他の立つる所を觀て彼の過を顯はすが故なり。「又五同法も亦有ることを得ず、過失を成ず」とは、此れ唯[24]六二の緣より六識轉ずと立つる義を破す。眼等の五識は彼の意識と同法の性有り、謂はく[25]二緣によりて生起することを得。彼の染汚の意若し有ること無ければ、此れと相違す。謂ゆる倶生の增上緣の依は別に有ること無きが故なり。又眼等の識は各二緣を具す、皆是れ識性なり。是の如き識性は並に眼等と倶に轉ずる別の依有り、唯增上緣のみにして因緣等に非ず。[26]此れを能喩と爲す、意識も亦爾り、應に是の如き差別の所依有るべし。阿賴耶識は是れ意識と倶生する所依なりと雖も、然かも應に立てて此の別依と爲すべからず。是れ[27]共依の故に、[28]因緣性の故に。經部の立つる所の、色を意識の倶生の別依と爲すは、此れ成就せず、道理に應ぜず。[29]思擇と隨念との分別に就て應に一切時に無分別なるべきを以ての故なり。此の道理に由りて[30]餘部の立つる所の[31]胸中の色物を意識の別依となすも亦成就せず。所說の如き過は恒に隨逐するが故なり。譬へば[32]色根に依止する諸識の如し。是の如き難通は應に廣く決擇すべし。「又訓釋詞も亦有ることを得ず、過失を成ず」

【一九】餘有ることを得ずとは相應せざる場合は絕對に無かるべしとの意。
【二〇】若し以下の難答は世親釋になし。
【二一】以下前難に答ふ。
【二二】佛の十八不共法を以て例示す。
【二三】名成ぜずとは不共無明の名は成立せずとの意。
【二四】六二の緣云云とは經に六識は根境の二緣より生ずと說くを擧ぐ。
【二五】二緣とは倶有依と增上緣となり。
【二六】前五識は各自の根を別の倶有依として生起することを喩となし、第六意識も亦別の所依あるべきことを示す。
【二七】共依の故にとは阿賴耶識は獨り意識の所依たるのみならず、五識の所依なれば之を共依となす。
【二八】因緣性の故にとはこれ四緣の中の因緣にして阿賴耶識のみは諸法の親しき因緣なりとの意なり。
【二九】思擇分別とは計度分別のこと。
【三〇】餘部とは上座部を指す。
【三一】胸中の色物とは心臟の中の物質、卽ち肉體としての心臟をいふ。
【三二】色根に依止する識とは眼等の五識をいふ、此には思

善・不善・無記の心の中なり。若し爾らざれば唯不善心のみ彼と相應するが故に。我我所の煩惱現行することと有るは、善無記には非ず。是の故に若し倶有現行を立てゝ、相應現行に非ざれば此の過失無し。此の中に頌に曰く、

若し不共無明と　及び五同法と
訓詞と二定の別と　無ければ皆過失を成ず、
無想の生は應に　我執の轉ずること無ければ過を成ずべし
我執は恒に隨逐して　一切種に有ること無からん
染の意を離れては　二有ること無く、三は相違を成ず。
此れ無ければ一切處に　我執は應に有るべからず
眞義の心の當に生ずべきに　常に能く障礙と爲り
一切分に倶行するを　不共無明と謂ふ。

此の意は染汚の故に有覆無記性なり。四煩惱と常に共に相應す。色無色の二纏の煩惱の如く、是れ其の有覆無記性の攝なり。色無色の[一六]纏は奢摩他の攝藏する所と爲るが故に、此の意は一切時に微細に隨逐するが故に。

釋曰　正理を引いて染汚の意を成ぜんが爲の故に、復略して[一七]直說と伽他とを擧ぐ。「謂はく此れ若し無ければ不共無明有ることを得ず等」と。若し染汚の意有ることを說かざれば、則ち不共無明有ることを得ず。不共無明とは當に其の相を說くべし、謂はく能く眞智の生ずることを障礙する愚なり。此れ五識に於て有りと說くべき無し。是の處には能對治有ること無きが故なり。若し處として[一八]能治有れば、此の處には所治有り。五識の中には彼の能治有るに非ず。此に於ては見道生起せざるが故なり。亦染汚の意識の中に有るに非ず。餘の煩惱と共に相應する時は、不共無

【一六】纏とは異本に廛に作る、市廛に人の集まるが如く有情の集る所の義にして界と同意なり。
【一七】直說とは此には偈頌に對して[illegible]行の意なり。
【一八】能治は能く無明煩惱を對治する智慧。

煩惱と恒に共に相應す。一は薩迦耶見、二は我慢、三は我愛、四は無明なり。此は即ち是れ識の雜染の所依なり。識は復彼の第一を依とするに由りて生じ、第二にて雜染なり。境を了別する義の故に。等無間の義の故に、思量の義の故に、意に二種を成ず。

釋曰「此を亦心と名く」とは、復餘教の安立する異名を引いて此をして堅固ならしむ。「第二に染汚の意」とは、四煩惱の薩迦耶見等に染汚せらるるに由るが故なり。此の中、薩迦耶見とは、謂はく堅く我我所に執著する性なり。此の勢力に由りて我慢を起し。我々所を恃みて自ら高く擧ぐ。此の二有るが故に便ち我貪を起すを說いて我愛と名く。此の三は皆無明を用つて因と爲す。無明と言ふは、即ち是れ無智なり。明の所治なるが故に。此は即ち是れ識の雜染の所依なり、定不定の善等の位の中に於て、皆相違せずして恒に現行するが故に。其は何等の如きぞ、謂はく善心の時も亦我を執するが故なり。「第一を依とするに由りて生ず」とは、等無間滅の意に由るが故に。「第二に由りて雜染なり」とは、四煩惱と相應する意に由るが故に、我等を計するを以て能く雜染を作す。「境を了別する義の故に」とは、是れ能く境を取り、境に似て義を現ずるなり。此れ識の名を釋す。「無等間の義の故に、思量の義の故に意に二種を成ず」とは、此れ意の名を釋す。若し訓釋を離れては、[一五]聲義の道理を終いに他をして解了を得しむること能はず。

論曰 復次に云何か染汚の意有ることを知るを得るや。謂はく、此れ若し無ければ不共無明は則ち有ることを得ず、過失を成ずるが故に。又五同法も亦有ることを得ず、過失を成ずるが故に。所以は何ん、五識身は必ず眼等の倶有依有るを以ての故なり。又無想定と滅盡定との差別有ること無し、過失を成ずるが故に。謂はく無想定は染意の所顯にして滅盡定には非ず。若し爾らされば此の二種の定は應に差別無かるべし。又無想天の一期の生の中には應に染汚無かるべし、過失を成ずるが故に。中に於て若しくは我執我慢無からん。又一切時に我執の現行することは現に得べきが故に。謂はく

【一五】聲義云云とはすべて與へられたる名稱の道理の意。

と言ふは、世の聰叡の者の有する所の覺慧も底を窮め難きが故なり。「甚細」と言ふは、諸の聲聞等の了知し難きが故なり。是の故に諸の聲聞等の爲には此の識を開示せず、彼は微細なる一切智智を求めざるが故なり。「一切の種子は瀑流の如し」とは、剎那に展轉し相續して斷ぜざること水の瀑流の如し。「我れ凡愚に於て開演せず」とは、我見を懷く者には爲に開示せず、恐らくは彼れ分別し計執して我と爲さん。何ぞ彼の類の分別計執する[一〇]窮生死際を容るるや。[一一]行相一類にして改易無きが故なり。

論曰　何の緣にて此の識を亦復說いて阿陀那識と名くるや。一切の有色の根を執受するが故に、一切の自體の取る所依なるが故なり。所以は何ん、有色の諸根は此の執受に由りて失壞すること有る無く、壽を盡すまで隨つて轉ず。又相續して正しく結生する時に於て彼の生を取るが故に、自體を執受す。是の故に此の識も亦復說いて阿陀那識と名く。

釋曰　「一切の有色の根を執受するが故に」等とは、[一二]聲の轉ずる因を顯はす。能く一切の眼等の有色の諸根を執受するを以て安危を共同にして壽を盡すまで隨轉す。是の故に說いて[一三]阿陀那識と名く。若し爾らざれば應に死身の如く卽ち失壞すべし。「一切の自體の取の所依なるが故に」等とは、謂はく是れ一切の、若くは一、若くは多の有らゆる自體の取の所依の性なり。若しくは色等の根の[一四]未と已との生起、若くは無色界の自體の生起を名けて相續と爲す。彼を攝受するが故に「正しく結生す」と名く、彼の生を受くるが故に、精血合するが故なり。阿賴耶識無くしては一期の自體を執受すること有るに非ず。譬へば室宅院の光明を攝するが如し。是れ一期の自體の習氣の熏ずる所なるが故なり。

論曰　此を亦心と名く。世尊の、心意識の三と說くが如し。此の中、意に二種有り、第一は與に等無間緣の所依止の性と作る、無間滅の識は能く意識の生ずる與に依止と作る。第二は染汚の意、四

【一〇】窮生死際とは生死の際を窮めて一貫せる實我の見をいふ、此の句は我執を起すことを恐るゝは何故なりやと問ふ。

【一一】行相一類云云とは阿賴耶識は轉變改易すること無く一類相續して固定せる常一の我と見ゆるが故なりとなり。

【一二】聲の轉ずる因とは阿陀那識といふ名稱の起る理由を顯はすこと。

【一三】阿陀那（ādāna）識は執又は執持識と譯す。

【一四】未だ生起せざると、已に生起せるものとの意。

阿賴耶識の諸法を攝藏するも亦復是の如し。彼の義を簡ばんが爲に、是の故に復「一切種子識」と言ふ。一切の種子と俱生俱滅するが故に、阿賴耶識と諸の轉識とは互に緣と爲るが故に、展轉して攝藏す。是の故に說いて阿賴耶識と名く。最勝は卽ち顯了の性なりといふが如きに非ず。[八]自を顯はして劣に簡ぶるが故に、復說いて「勝者に我れ開示す」と言ふ。卽ち大菩薩は堪能有るが故に名けて勝者と爲す。彼が爲に開示して、餘の劣なる者には非ず。

論曰　是の如く且らく阿笈摩を引いて證せり。復何の緣の故に此の識を說いて阿賴耶識と名くるや。一切の有生の雜染品の法は此に於て攝藏して果性と爲るが故に。又卽ち此の識は彼に於て攝藏して因性と爲るが故に。是の故に說いて阿賴耶識と名く。或は諸の有情は此の識を攝藏して自我と爲すが故に。是の故に說いて阿賴耶識と名く。

釋曰　「一切の有生」とは、謂はく諸の有爲なり。「雜染品の法」とは、清淨の法を簡ぶ。清淨に非らざる法は是れ雜染の性なり。一切の雜染の庫藏は所治にして、種子の體性の攝藏する所なり。能く彼れを治するが故に[九]互に相違するに非ずして、因果の性と爲る。是れ正しき道理にして、然も所依と爲ることを得。若し處として所治有れば亦能治有るが故なり。「此に於て攝藏す」とは能く習氣を持することを顯はす。唯習氣のみを阿賴耶識と名くるに非ず。要ず能く習氣を持すること彼が如くなるに由りて意識と說く。「或は諸の有情は此の識を攝藏して自我と爲す」とは、是れ執取の義なり。

論曰　復次に此の識を亦阿陀那識と名く。此の中の阿笈摩は解深密經に說けるが如し、

阿陀那識は甚だ深細にして　一切の種子は瀑流の如し
我れ凡愚に於て開演せず　恐らくは彼れ分別して執して我と爲さん。

釋曰　復餘教の說く所の異名を引いて阿賴耶識を開示し建立して、極めて顯了ならしむ。「甚深」

性に萬有を生ずる因を藏するが如きに非ずといふ意なり。

【八】自を顯はし云云とは自派の主張する阿賴耶識の勝れたることを顯はして數論の所立の如き劣れる者に簡別せんが故にとの意なり。

【九】清淨の法は能く雜染の法を對治するが故に、染と淨とは相順して相違せず、因となり果となる、此の故に淨の法も此の識を所依と爲すの意なり。

〔衆名章　第三〕

論曰　此の中、最初に且らく所知依は卽ち阿賴耶識なることを說く。世尊は何れの處にか阿賴耶識を說いて阿賴耶識と名けしや。謂はく、薄伽梵は阿毘達磨大乘經の伽他の中に於て說けり。

無始の時より來、界たり　　一切法は等しく依る
此に由りて諸趣有り　　及び涅槃を證得す。

釋曰　此れ阿笈摩を引き、阿賴耶識を所知依と名くることを證す。「無始の時」とは初際無きが故なり。「界」とは因にして卽ち種子なり。是れ誰が因種なりや。謂はく一切の法なり。[一] 此れ唯雜染のみ、是れ清淨に非ざるが故に。後に當に言ふべし、多聞熏習の所依は阿賴耶識の所攝に非ず。阿賴耶識の種子を成ずるが如く、如理なる作意の所攝にして似法似義の起す所等、と。彼の「一切法の等しく所依にして」とは、能く任持するが故に、因性に非ざるが故なり。[二] 能く任持するの義とは是れ所依の義にして因性の義に非ず。所依と能依との性は各異るが故なり。若し爾らざれば、[三] 界の聲にて已に了れり。依の言を假ること無けん。「此に由りて諸趣有り及び涅槃を證得す」とは、[四] 決擇處の如く當に廣く分別すべし。謂はく [五] 雜染等と那落迦等とを生ず。若し阿賴耶識を離るれば皆 [六] 有等と、生等とを得ず。雜染畢竟して止息するを名けて涅槃と爲す。若し阿賴耶識を離るれば應に證得すべからず。

論曰　卽ち此の中に於て復頌を說いて言く、

諸法を攝藏する　　一切の種子識なるに由る
故に阿賴耶と名く　　勝者に我れ開示す。

釋曰　復聖言の說く所を引いて阿賴耶識を阿賴耶と名くることを證す。能く「諸法を攝藏す」とは、謂はく是れ所熏、是れ習氣の義なり。[七] 大等の顯了の法性を最勝の中に藏するが如きに非ず。

【一】此に一切の法といふは唯雜染のみを取る、淸淨の法は更後に說く、多聞熏習云云とは後の說を引證して淨法を且らく除外す。

【二】所依を任持と釋するは染淨二法を任持するが故なり、若し之を因性と倂すれば雜染のみとなるが故に此の釋あり。

【三】界の聲にて云云とは頌文の第一句の界の語にて其の意已に盡くされ、更に第二句の「等しく依」たりとの說明を要せざるべしとなり。

【四】決擇處とは瑜伽の決擇分を指す。

【五】惑障と果報とを擧ぐ。

【六】有とは十二因緣の中の有にして愛取等惑業の因を擧げ、生とは生老死の果報を擧ぐ。

【七】大等云云とは數論學派の說を破す、此の學派にては神我と自性又は冥性の二原理より萬有開展の相狀を說き所謂廿五諦の緣起說を立つ、中に於て根本の物質的原理なる自性は三德の力に依りて大我慢等の廿三諦となる、其の大等は緣起の現相なるが故に顯了の法性といへり、又自性は大等を生ずる勢用あるより之を勝性とも名く、此にいふ最勝とは萬有能生の因たる自性に名く、卽ち此には數論の自

色・非色と爲すや。不なり、世尊よ。慈氏よ、此の門に由るが故に應に是の如く知るべし。諸の遍計所執性は決定して非有なり。諸の依他起性は唯名想の施設せる言說有るのみ。諸の圓成實は空無我性にして是れ眞實の有なり。我れ此に依るが故に密意に說いて言く、彼に二數無しと。謂はく是れ色等に是の如きの二邊の過失を解脫するなり。三自性に於て善巧を得已つて、唯識性に由つて應に善く所知の相に通達すべし。入るとは卽ち是れ通達して證を作す。或は此に由るが故に能く順つて通達す。次いで後に卽ち唯識性に順ふに於て、通達して修する所の六種波羅蜜多に體入す。勝義に由るが故に應に更に清淨の意樂を證得すべし。應に更に欲と及び勝解とを攝受するを名けて意樂と爲す。此の二は爾の時に數を增すこと無しと雖も、證淨の攝なるが故に而かも清淨と說く。次いで後に卽ち彼れ十地の中に於て三學に於て勤めて修學するに由るが故に、三無數劫に數修習するが故に、應に圓滿せしむべし。次いで後に彼の果として、煩惱所知の二障を永、斷ずると、及び無垢にして罣礙有ること無き一切智智とを應に更に證得すべし。是の如く辨ずる所の次第の方便と及び須ゆる所の因とは、是れ能く大菩提の性に順ずることを顯はす。卽ち是の如き所說の次第に由り、唯十處有るのみにて增さず減ぜず。是の如く已に主と隨との二論を釋せり。是の故に當に知るべし、聲聞乘の道は卽ち佛乘の道なりとは道理に應ぜざることを。若し爾らば其の果は應に差別無かるべし。又一切の聲聞乘の中に於て曾て未だ[五六]處有らざるも、諸の菩薩の爲には廣く佛道を說けり。又亦佛と聲聞と差別有ること無きを許さず。[五七]師資の建立は應に有ること無かるべきが故なり。此に由りて二道の差別有りと說く。[五八]是の故に此を說いて大乘を攝し盡くすと名く。其の所有の大乘の綱要は[五九]別に說くこと無きが故なり。

所知依分第二の一

【五六】處有らずとは佛道を說ける處なしの意。
【五七】佛と聲聞と同一なりと許されざるは師と資卽ち佛と聲聞との二道が別に建立施設せられたるが故に明かなりとの意。
【五八】本論の題名を釋す。
【五九】これ以上に別に說くべきもの無しとの意。

菩薩の所學に於て應に圓滿せしむべし。既に圓滿し已つて彼の果の涅槃と及び無上正等菩提とを應に現に等しく證すべきが故に十處を說くに是の如く次第す。又此の說の中にて一切の大乘は皆究竟することを得。

釋曰　此に由り大菩提に趣くことを辯ぜんが爲の故に、復次第の方便と及び須ゆる所の因とを開示す。謂はく諸の菩薩は要ず先に因に於て善巧を得已つて方に緣起に於て應に善巧を得べし。此の因によりて彼の果有ることを知ればなり。復彼の果は要ず此の因によることを知る、是の故に此の因の言教を離れて能く[五一]彼れを了知するに非ず。因とは卽ち是れ阿賴耶識なり。此を說くに由るが故に、便ち[五二]無因と[五三]不平等の因とを捨つ。次いで後に緣所生の諸法に於て應に其の相を了ずべし。[五四]增益と損減との邊を遠離するが故に。無にして因無きに於て强いて立てて有と爲す故に增益と名け、有にして因無きに於て强いて撥して無と爲す、故に損減と名く。是の如き增益と及び損減とを倶に說いて邊と爲す。是れ墜墮の義なり。此の二轉ずる時は中道を失壞す。善く數眞實觀を習するに由るが故に、此の二邊に於て遠離して善巧なり。[五五]遍計所執に於ては唯增益のみ有つて損減無し、都て有ること無きが故なり。要ず有に於て方に損減を起すを以て依他起に於ては增益有ること無し。體有なるを以ての故なり。要ず非有に於て方に增益有りて亦損減無し、唯妄有なるが故なり。圓成實に於ては增益有ること無し、是れ實有なるが故に、唯損減のみ有るは、卽ち此に由るが故なり。或は復此に於て「善く能く增益と損減との二邊の過を遠離す」とは、謂はく依他起性に於てなり。增益するも實に無なるは遍計所執性なり、損減するも實に有なるは圓成實性なり。又大般若波羅蜜多經の中に說くが如し。慈氏よ汝の意に於て云何ん。諸の遍計所執の中、實有に非ざる性を色・非色と爲すや。不なり、世尊よ。諸の依他起の中、唯名想の施設せる言說のみ有る性を色・非色と爲すや、不なり。世尊よ。諸の圓成實の中、彼の空無我の性を

【五一】彼れをとは果を指す。

【五二】無因とは諸法は因無くして生ずとなす無因論。

【五三】不平等の因とは諸法は造物主たる自在天より生ずとなすをいふ。

【五四】此の增益と損減の解釋は世親釋の方更に簡明なり參照。

【五五】此の一段は前に增益と損減を定義して無に於て有と爲すを增益とし、有に於て無と爲すを損減となすと言へるに照應し、之を遍計所執の無と、依地、圓成の有に配して說明せるなり。

ことを見れば、卽ち吠世師等の論をして眞に是れ佛語ならしむるには非ず。先の「聲聞乘に於て曾て說くを見ずとの」答は他の是の如きの妨難を容るるが故に、後に通じて言はく、「謂はく此の十處は是れ最も能く大菩提の性を引く」等と。[四五]亦は覺、亦は大の故に大菩提と名く。或は大性を覺するが故に大菩提と名く。此の大菩提は智斷の殊勝を以て自相と爲し、說の如く煩惱と所知との障を斷ず、彼の斷に由るが故に[四六]無垢[四七]無罣礙の智を獲得す。是の如きの[四八]四種を總じて菩提と名く。「是れ最も能く引く」とは、謂はく此の十處は是れ能得の性なり、六句義或は[四九]最勝等に非らず、是の故に彼の論は眞の佛語に非ず。「是れ善く成立す」とは、謂はく是の如き十處は[五〇]正量に隨ふ所なるが故なり。廣くは當に決擇すべきが如し。「隨順す」と言ふは、是れ能く對向し、是れ能く隨ふの義なり。「違ふこと無し」と言ふは、彼の過無きが故に、六句義等の如き邪智に非ず。或は聲聞乘には過失有るが故に佛果と相違す。「此の中の二頌」とは、謂はく已說及び當說の義を頌す。「此の說は此の餘に見るも見えず」とは、謂はく此の十處の殊勝語の說は、此の大乘に於て處々に說くを見るも、餘の小乘に於ては曾つて說くを見ずとなり。

〔十義次第章　第二〕

論曰　復次に云何が是の如く次第して此の十處を說くや。謂はく諸の菩薩は諸法の因に於て要ず先に善くし已つて、方に緣起に於て應に善巧を得べし。次いで後に、緣所生の諸法に於て應に其の相を善くすべし。善く能く增益と損減との二邊の過を遠離せんが故なり。次いで後に是の如く善く修する菩薩は應に正しく善く取る所の相に通達し、諸障より心をして解脫を得しむべし。次いで後に、所知の相に通達し已つて、先の加行位に六波羅蜜多を證得せるに由るが故に、應に更に增上の意樂を成滿すべし。淸淨なることを得んが故なり。次いで後に淸淨の意樂の所攝の六波羅蜜多を十地の中に於て分分に差別して應に勤めて修習すべし。謂はく三無數の大劫を經るを要す。次いで後に三の

【四五】覺は菩提(Bodhi)の譯語此に大菩提の語義を釋す。
【四六】無垢とは煩惱障を斷ずるが故なり。
【四七】無罣礙とは所知障を斷ずるが故なり。
【四八】、四種とは前の二障と二智とをいふ、勝論の六句義には此の能得の性無しとの意なり。
【四九】最勝とは數論の自性のこと後に詳釋せり。
【五〇】正量とは正しき知識の標準となるべきものゝ義なり。

變化するを變化身と名く。此れ[三九]增上力の顯現する所、卽ち智の差別なり。謂はく此に由るが故に他の論を摧伏し、諸の菩薩と共に法樂を受けて、斷絕有ること無く、[四〇]初業の諸の菩薩衆は諸の聲聞等の應に作すべき所の事を成辦す。譬へば[四一]眼識の諸色を了受するが如し。彼れ若し無ければ此も亦應に無かるべし。此れ則ち殊勝なり、此の殊勝の故に語も亦殊勝なり。「此に說く所の十處に由る」とは、謂はく此れと及び餘の總ての大乘に於てとの義なり。「處」とは是れ事の義なり。「聲聞乘に異る」とは、彼れに於て說かざるが故に。「又最勝なることを顯はす」とは、佛果の道を究竟して宣說するが故なり。「世尊は但菩薩の爲にのみ宣說す」とは、此の中、應に菩薩は但菩薩の爲に宣說すと言ふべし。[四二]佛の現見に由りて佛に開許せられて宣說するが故に、世尊の說と名く。[四三]十地等の如し。是の故に先に「薄伽梵の前にて」と說けり。

論曰 復次に云何が此の十相の殊勝と殊勝なる如來語とに由るが故に、大乘は眞に是れ佛語なることとを顯はし。聲聞乘は是れ大乘の性なることを遮するや。此の十處は聲聞乘に於ては曾て說くを見ず、唯大乘の中にのみ處々に說くを見るに由る。謂はく此の十處は是れ最も能く大菩提の性を引き。是れ善く成立し隨順し、違ふこと無く、能く一切智智を證得するが爲なり。此の中に二頌あり、

所知の依と及び所知の相と　彼に入る因果と彼の修の異と
三學と彼の果の斷と及び智とは　最上乘の攝にして是れ殊勝なり。
此の說は此の餘に見るも見えず　此れ最勝の菩提の因なるに由る
故に大乘は眞の佛語なりと許す　十處を說くに由るが故に殊勝なり。

釋曰 「復次に云何が此に由る」等とは、猶未だ信解せざるが故に此の難を設く。何を以ての故に聲聞乘の中に於て[四四]六句義等は曾て未だ說くことを見ざるも、吠世師等の論の中に、處々に說く

【三九】增上力とは佛の大智大悲をいふ。
【四〇】初業の菩薩衆とは初地に入れる菩薩をいふ。
【四一】眼根なければ眼識起りて諸色を見ること無きが如く、自性身無ければ變化身無しといふ意なり。
【四二】佛の現前に於て佛の聽許を受けて菩薩は法を說くが故にとの意なり。
【四三】十地等とは十地經の如き金剛藏菩薩が佛の加被力を受けて說けるが故に事實は菩薩の說なるも之を佛說といふ如しとの意。
【四四】六句義とは實、德、業、同、異、和合、の六範疇をいふ、吠世師、具さには吠世師迦(Vaiśeṣika)、印度六派哲學の一にして勝論と譯す、前に擧げたる六句の範疇に依りて其の教理を組織する唯物論的多元論なり。

學と爲す。此の增上戒は卽ち是れ殊勝なり、此の殊勝の故に語も亦殊勝なり。二に「增上心學」、謂はく心に依止して正・勤修學す。是の故に說いて增上心學と名く。此の性は、卽ち是れ虛空藏等の諸の三摩地なり。等とは餘の賢護等の三摩地王を等取す。又增上心學の中に於て言はく、

卽ち諸の三摩地を　　大師は說いて心と爲す
心に由りて彩畫するが故に　　所作の事業の如し、と。

三に「增上慧學」、謂はく慧に依止して正勤學修す、是の故に說いて增上慧學と名く。此の性は卽ち是れ無分別智なり。一切の戲論分別を對治す。此の中、加行の無分別智は根本の依止なり、卽ち此の根本無分別智は後得の依止なり。是の如きの依止は次に說く所に非ず。是の如き三種の戒定慧學は是れ道の體性なり。彼の果に二種あり、一には斷、二には智なり。此れ殊勝なるが故に、語も亦殊勝なり。「彼の果の斷」とは、彼の諸學の果を名けて彼の果と名く。彼の果は卽ち斷なるを彼の果斷と名く。此の性は卽ち是れ客障の離繫・眞如・解脫・無住涅槃なり。彼の寂靜を見るが故に、生死卽ち涅槃なり。卽ち[三七]彼を緣と爲して而かも染著無ければ、無餘依の般涅槃界に非ず。是の故に無住は此れ卽ち殊勝なるが故に語も亦殊勝なり。彼の果の智とは、彼の諸學の果を名けて彼の果と爲す。彼の果は卽ち智なるを彼の果智と名く。此の性は卽ち是れ三種の佛身なり。一には自性身、卽ち是れ無垢、無罣礙の智、是れ法身の義なり。今此れと彼の無分別智とは何の差別有りや。此の如き二種には有らゆる分別は俱に行ぜざるが故に、彼に對治有れば當に所作有るべし。此は是れ彼の果なれば所作已に辦ず。是の如く差別せり。二には受用身、卽ち後得智なり、卽ち此の智の殊勝の力に由るが故に諸の殊勝なる大菩薩衆と共に不共なる微妙の法樂を受く。是の如き受用の事を成辦するが故に受用身と名く。若し是の如き[三八]外の清淨智無ければ、菩薩の作す所の所餘の資糧は應に圓滿せざるべし。三には變化身、卽ち是れ後得智の差別なり。卽ち能く

【三七】彼れとは生死を指す。

【三八】外のとは外に向つて作用するの意なるべし。

尊の言は[二六]一切の處に隨轉す。「所知の相」とは、所知の自性なり。是れ所相の故に、[二七]業運に依りて說くに多く[二八]魯茶を置き、所知・所斷・所證等の故に。或は[二九]具運に依れば、遍計所執は相に所相無きを以て、無性を表はすが故に、圓成實性は是れ其の共相なり。依他起性は是れ其の自相なり。我、有情・義・識は展轉して別異なるが故に。[三〇]地界等の如し、其の[三一]堅等を以て能表の相と爲す、異性無しと雖も而かも說いて相と爲す。又[三二]大士夫の相を宣說するが如し。經部等の師の[三三]生等の諸相は此の因緣に由る。或は所知は即ち相なり。或は所知の相なるが故に所知相と名く。異性無しと說くが故に、異に異性無きが故に、[三四]其の所應の如く、此れも亦是の如し。「入所知相」とは、謂はく此れ能く應に知るべき所の相に入るなり。或は是れ所知相の能入なり。「入」とは、謂はく[三五]現觀して所知の相即ち唯識性に入るなり。此れ即ち殊勝なり。この殊勝の故に語も亦殊勝なり。「彼の入因果」とは、謂はく唯識性を說いて彼に入る勝解行の地と名く。加行を修する時は、世間の未淨の波羅蜜多を彼に入る因と名け、已に證入する時は、即ち出世間の波羅蜜多なり。清淨なる增上の意樂の攝なるが故に、彼に入る果と名く。彼に入る因果は即ち是れ殊勝なり、此の殊勝の故に語も亦殊勝なり。「彼の因果の修の差別」とは、謂はく即ち唯識性の因果なり。此を數修するが故に說いて名けて修と爲す。分分同じからざるが故に差別と名く。彼に入る因果の修の差別の性は即ち是れ十地なり。此れ即ち殊勝なり、此の殊勝の故に語も亦殊勝なり。即ち諸地の波羅蜜多の修の差別の中に於て、後を攝取せんが爲に復勤めて修學す、即ち此れを依と爲して三學を安立す。一に「增上戒學」、謂はく戒に依止して正勤修學す、是の故に說いて增上戒學と名く。即ち諸地の中の菩薩の律儀にして、諸惡を遠離し、有情を饒益し、一切の善を攝する三種の淨戒なり。受くる所の尸羅は過去の已生と[三六]住等との身等の諸業を防護し、調御者の如く極めて善く調攝す、故に律儀と名く。是の如く即ち增上の尸羅に依りて修學し正行するが故に名けて

【二六】諸佛世尊はといふ語は十相の殊勝の一一にかゝる語なりとの意。

【二七】業運とは梵語の業格即ち目的格にして、知の目的格としての相を所知といふと釋す。

【二八】魯茶、大聲と釋す、文法上の後接字をいふ。

【二九】具運とは梵語の作具及び能作者を詮はす語格なり、此には所相としての阿賴耶識を知の動詞の具格として解釋して、三性に配す。

【三〇】地界等とは地水火風の四大をいふ。

【三一】堅等とは四大の特相としての堅、濕、煖、動なり。

【三二】大士夫の相とは佛陀の三十二の相を說く、偽として無相の相を示す。

【三三】生等とは有爲の法の相としての生住異滅の四相のこと。

【三四】所應の如くとは所知の異相を說くも異性無きが故に所知即相の前句に應じ、所知の異相に異性無きが故に所知の相といふ後の句に應ず。

【三五】現觀とは眞如を緣ずる見道の智。

【三六】住等とは現在に住する三業、等とは未來の未生の三業を等取す。

提を引發するを以ての故なり。此の十相は是れ殊勝なるに由るが故に、彼の語も殊勝なり。是の故に說いて言く、「十相の殊勝と殊勝の語有り」と。「佛世尊」とは、染汚・不染汚の二の癡睡盡くるが故に、一切の所知に於て智開發する義の故に、說いて名けて佛と爲す。士夫の寤るが如く、蓮華の開くが如し。說いて言へる有るが如し、寤寤開發の義、有時業の佛界なりと。是の如き等なり。

論曰　復次に云何が能く顯はすや。此の所說に由る十處は、聲聞乘に於て曾て說きしことを見ず。唯大乘の中に處々に說くを見るのみ。謂はく阿賴耶識を說いて所知依の體と名け、三種の自性、(卽ち)一には依他起の自性、二には遍計所執の自性、三には圓成實の自性を說いて所知相の體と名け、唯識性を說いて入所知相の體と名け、六波羅蜜多を說いて彼に入る因果の體と名け、菩薩の十地を說いて彼の因果の修差別の體と名け、菩薩の律儀を說いて、此の中の增上戒の體と名け、首楞伽摩・虛空藏等の諸の三摩地を說いて此の中の增上心の體と名け、無分別智を說いて此の中の增上慧の體と名け、無住涅槃を說いて彼の果斷の體と名け、三種の佛身(卽ち)一には自性身、二には受用身、三には變化身を說いて、彼の果智の體と名く。此に說く所の十處に由りて、大乘は聲聞乘に異ることを顯はし、又最勝なることを顯はす。世尊は但菩薩の爲にのみ宣說す。是の故に應に知るべし、但大乘に依る諸佛世尊にのみ十の行相の殊勝と殊勝の語有り。

釋曰、應に知るべき所の故に「所知」と名く。「依」とは謂はく所依なり。此の所依の聲は能依の雜染と淸淨との諸の有爲法を簡取して無爲を取らず。彼には、所依の義有ること無きに由るが故なり。所依とは卽ち是れ阿賴耶識なり。是れ彼の因なるが故に、能く彼れを引くが故に、[二五]其の所應の如し。若し爾らば、所知は卽ち所知依なり。異熟識は是れ所知の性なるに由るが故に相違せず。此の所知依は卽ち是れ殊勝なり、此れ殊勝なるが故に語も亦殊勝なり。卽ち前に說く所の諸佛世

【二五】所應の如しとは因なるが故にとは前の雜染に應じ、引くが故にとは淸淨に應ずること。

と名け、說いて名けて空と爲すが如し。或は卽ち彼の心は菩提を求めんが爲に志有り、能有り、故に菩薩と名く。「大乘の體大を顯はさんが爲の故に」とは、甚深高廣にして無上なるが故に大なり、體の聲は卽ち自性の作用を說く、世に說いて言ふが如し、火は煖を體と爲し、毒は害を體と爲すと。此の體は大なるが故に說いて體大と名く。「顯はす」とは他の未だ了ぜざる所を開示するなり。「爲」とは欲するなり。

論曰 謂はく大乘に依るに、諸佛世尊に十相の殊勝と、殊勝の語有り。一には所知依の殊勝と殊勝の語、二には所知相の殊勝と殊勝の語、三には入所知相の殊勝と殊勝の語、四には彼に入る因果の殊勝と殊勝の語、五には彼の因果を修の差別の殊勝と殊勝の語、六には卽ち是の如き修の差別の中に於ける增上戒の殊勝と殊勝の語、七には卽ち此の中に於ける增上心の殊勝と殊勝の語、八には卽ち此の中に於ける增上慧の殊勝と殊勝の語、九には彼の果斷の殊勝と殊勝の語、十には彼の果智の殊勝と殊勝の語なり。此に說く所の諸佛世尊の契經の諸句に由りて大乘は眞に是れ佛語なることを顯はす。

釋曰 「謂はく」の聲は、卽ち是れ說く所の十の勝處の義を略標す。「大乘に依れば」とは、所爲所說は、聲聞乘に非ず亦世間に非ざればなり。復大乘を擧げて決定の義と爲す。所依は卽ち此れ餘に非らざることを顯はす。世間に依れば、餘相に由るを以ての故に佛語に異る。頌に言へる有るが如し、諦語にして忿無く、少しく施すも悕求せずと、是の如き等なり。若し聲聞に依れば餘相に由るが故に大乘に異る。頌に言へる有るが如し、諸行は無常にして生滅有る法なり、と。是の如き等なり。是の故に重ねて大乘の[二三]應理を擧ぐ。「十有り」等とは數を以て數の殊勝なる佛語を顯はし、論體を安立す。「相」とは[二四]種なり。卽ち此れ展轉差別して雜無し。故に殊勝と名く。或は復彼の聲聞等の法に望め極めて懸遠なるが故なり。又增上の故に名けて殊勝と爲す。能く大菩

【二三】應理とは道理に相應する正義の意なり。
【二四】種とは種類の義。

現するを以て體性と爲す。若し爾らば云何が菩薩は能く說くや。聞者の識に非らず、彼れ能く說くが故に。彼れは[一二]增上にして生するが故に是の說を作す。譬へば天等の增上の力の故に夢中に於て論呪等を得せしむるが如し。若し識を離るれば、佛は云何が諸の契經の句を說かん。語を自性と爲すは且らく理に應ぜず。[一三]一一の字に由りて能く義を詮顯するは理に應ぜざるが故に。次第にして生じ、俱時に住せず、聚集無きが故に。是の如きは彼の自性を得ず、語に轉有ること無きが故に理に應ぜず。又字の轉すること無くして少名の能く詮すること有るに非ず、故に諸の契經を名けて自性と爲すことも亦理に應ぜず。是の故に決定して所說の經の如きは、自性理に應ず。此の說く所の阿毘達磨大乘經の中に於て、[一四]薄伽梵とは諸魔を破するが故に。能く四種の大魔怨を破するが故に薄伽梵と名く。四種の魔とは一には煩惱魔、二には蘊魔、三には天魔、四には死魔なり。空三摩地に依りて能く煩惱魔の一切の麁重を破し、轉依の相に住し、無量の善根隨順して證得す。或は復精進の慧力に依止して能く[一五]蘊魔を破し、[一六]慈等の持に依りて能く[一七]天魔を破し、[一八]神足を修するに依りて能く死魔を破す。能く是の如き四の大魔を破するが故に薄伽梵と名く。又[一九]自在等の功德と相應す、是の故に佛を說いて薄伽梵と名く。所以は何ん、當に宣說すべき佛世尊なるを以ての故なり。彼の「前に」於てとは佛の開許を顯はす。廣く流通するに堪へ、親しく大師に對して異言無きが故なり。[二〇]十地經の如し。「已に能く善く大乘に入る」とは、或は德迹に依り、或は共に了知す、謂く彼れ已に能く大乘に入ると。或は卽ち此に於て已に極善にして入るが故に、已に能く善く大乘に入ると名く。此れ已に諸の陀羅尼、辯才の功德を得て、大乘の義に於て能く持し能く闡することを顯はす。故に此の義に依りて是の如きの名を說く。「菩薩」と言ふは[二一]菩提薩埵を所緣の境と爲すが故に菩薩と名け、弘誓の語に依りて菩薩の[二二]聲を立つ。亦餘處を見るに所緣の境を用つて其の名を說く、不淨等を所緣の境と爲す二の三摩地を說いて不淨

り、他は非直の說、又契經中の長行を直說とし偈頌を非直說ともいふ。

【一二】增上にして生ずと前の難に答へて菩薩の說法する理由を示し、佛の大悲大智を增上力として菩薩の識上に敎相を生ずとの意。

【一三】以下、語を敎の自性となす說を破す。

【一四】薄伽梵(Bhagavat)は世尊と譯す。

【一五】蘊魔とは五蘊より生ずる種々の苦惱をいふ。

【一六】慈悲喜捨の四梵住。

【一七】天魔とは自在天魔のことにして、欲界第六天の魔王の人の善事を修するを妨害するをいふ。

【一八】神足とは五通の一にして身如意通又は神境智證通ともいふ、自身の出沒變現に自在なる通力をいふ。

【一九】自在等の功德とは本論の第十卷に佛身を說く所に解說せり。

【二〇】十地經は金剛藏菩薩が佛の加被力を承けて佛前に十地を說くが故に之を例示す。

【二一】菩提薩埵(Bodhisattva)。

【二二】聲とは聲字卽ち名のこと。

攝大乘論釋

無性菩薩造
唐三藏法師玄奘奉詔譯

卷の第一

總標綱要分第一

大覺の諸の如來と、無上の正法と　眞の聖衆とに稽首したてまつる
自他を利する法を久しく住せしめんが爲に　故に我れ攝大乘を略釋す。

〔無等聖教章　第一〕

論曰　阿毘達磨大乘經の中に薄伽梵の前にて、已に能く善く大乘に入れる菩薩は、大乘の體大を顯はさんが爲の故に說けり。

釋曰　十義を以て大乘の所有の要義を總攝せんと欲す。彼の義は、能く此の論の體性を顯はす。[一]是れ聖教なるが故に、此れを用つて門と爲して言を開發す。「阿毘達磨大乘經等」とは[二]擇法の因なるが故に、或は[三]共に了るが故に、「阿毘達磨」の想を標幟と爲す。「大乘經」の言は[四]餘處に簡別す。若し略釋すれば[五]亦は乘、亦は大なるが故に大乘と名け、或は[六]大性に乘するが故に大乘と名く。因果大なるが故に、[七]業は運を具するが故なり。果とは十地を謂ふ。若し、廣釋すれば[八]七種の大性と共に相應するが故に、謂はく菩提分・波羅蜜多・學持の相等なり。[九]貫穿縫綴の故に名けて經と爲す。此の中、即ち是れ隨つて[一〇]八時に墮する聞者の識上の[一一]直と非直との說の、聚集して顯

【一】此の句は先づ聖教を擧げて論の發端となすとの意なり。
【二】擇法とは智慧のこと。
【三】共に了るとは大小乘共に許す所なりとの意。
【四】餘處とは小乘をいふ。
【五】これ大と乘とは同一體なりとなす持業釋なり。
【六】これ大性の乘なりとなす依主釋なり。
【七】業とは作用の義、運は運載の義なり。
【八】七種の大性とは一に境大性、二に行大性、三に智大性、四に精進大性、五に方便善巧大性、六に證得大性七に果大性なり。
【九】以下經の字義を釋し、敎體を論ず、蓋し無性論師は佛は說法せず、從つて一切の敎說は聞者の識上に顯現せる文義の相を以て敎體となすと立つ、本釋第四卷、參照。
【一〇】八時とは晝夜八時の佛說法の時をいふ、或は八時に華嚴經の八會を說く八轉聲に配して釋し八轉八時ともいふ、但し義淨は梵音一瑟吒（[illegible]）として、之を樂欲と釋せり、集成篇第二卷に此の說を評取せり。
【一一】直と非直の說とは直說とは佛の直說の意にして十二分敎について云へば契經に當

つれば、是の如きの證得は恒に因を成ぜざるが故に。又此の因を斷つは道理に應ぜず。謂はく諸の菩薩は[八一]悲願心に纒ひ、諸の有情に於て愍むこと一子の如く、諸の有情の類は大牢獄に處して具さに艱辛を受く。是の故に菩薩は諸の有情の利益安樂に於て、若くは是の心を作さく、[八二]餘は既に能く作す、我れ當に作さざるべしとは道理に應ぜず、と。恒に是の心を作さく、餘は此の事に於て若くは作し(若しくは)作さざるも、我は定んで當に作すべし、と。是の故に應に是の如きの因を斷ずべからず。

論曰 阿毘達磨大乘經の中の攝大乘品を、我れ阿僧伽略釋し究竟す。

釋曰 正しく大乘に趣くに無量の殊勝なるを制造す。論者の軌範たる世親略釋し究竟す。

【八一】隋譯に「大悲心に在り」となす。

【八二】餘は既に云云とは衆生自ら能く發心修行す我の關する所にあらずと放任するの意。

さらしむるが故なり。此の中に二頌有り、

所作究竟し　　涅槃を樂はざるを捨て[七六]
諸佛を輕毀するを離れ　　深く渇仰を生じ
內に自ら正勤を發し　　極めて速かに成熟せんが爲なるに由り
故に佛の化身を許すも　　而も畢竟して住するに非ず。

釋曰　是の如き六因の[七七]直說及び頌は、佛の化身の畢竟して住するに非ざることを證するなり。其の文了じ易きが故に煩しく釋せず。

論曰　諸佛の法身は無始の時より來、無別無量なり。應に得んが爲に更に功用を作すべからず。此の中に頌有り、

佛の得は無別無量にして因なり。　　有情若し勤功用を捨つれば
證得は恒時に因を成ぜず　　是の如きの因を斷ずることは理に應ぜず。

釋曰　此の中に難有り、若し佛の法身は無始の時より來、無別無量にして、證得の因を作さば、能く有情の諸の利樂の事を辦ぜん。佛果を證せんが爲に應に更に正勤の功用を作すべからず。此の難を釋せんが爲に頌を以て顯示す。諸佛の證得は無始の時より來、無別無量なり。若し是の有情佛果を求めんが爲に、精進の因を捨つれば[七八]此の難有るべし。諸佛の證得は佛果を得るに於て、無始の時より來[七九]因を成ぜざるが故に。然も佛の證得は無始の時より來、無別無量にして恒に有情の與に佛果を得る勤精進の因と作るが故に、難に應ぜず。[八〇]諸佛の法身は無始の時より來、無別無量にして證得の因を作す。佛果を證せんが爲に、應に更に正勤の功用を作すべからず。是の故に諸佛は法身を證得す。是れ有情は佛果を求めんが爲に精進の因を捨つるに非ず。又佛の證得は無始の時より來、無別無量にして、佛果を求むる勤精進の因と作る。若し諸の有情は勤功用を捨

[七六]　此の句も前の長行に應じて隋譯には「彼の寂滅の欲を轉じ」となし、陳譯には「涅槃を樂ふことを除かんが爲に」となせり。

[七七]　直說とは長行（散文）を指す。

[七八]　諸佛證得して有情を利樂するが故に有情自らは發心修行して精進努力するを要せずとの難をいふ。

[七九]　因を成ぜずとは有情の精進なくして佛果を得ること無きが故に、諸佛の證得は因とならずとなり。

[八〇]　此の一段の趣旨は諸佛の證得の無別無量なるを因とし、更に自ら精進努力すべし。佛の證得は常に絕待の因となるものに非ず、而も又因にあらずと爲すも理に應ぜず、證得と正勤と相應し自他相資して證果の因となることを明かす、陳譯には正因と方便因とに分つて之を解說せり、參照。

有情を利樂し勤めて正行を修せしめんと。若し始めに成佛し已つて便ち般涅槃すれば、卽ち修する所の願行は空くして果有ること無し。此の非理に由りて是れ變化身にして自性身に非ず。

論曰[七二]佛の受用身と及び變化身とは既に是れ無常なり。云何が經に「如來の身は常なり」と說くや。此の二の所依の法身は常なるが故に。又等流身及び變化身は、恒に受用して休廢すること無きを以ての故に、數々現化して永へに絕えざるが故なり。常に樂は受くる(といふ)が如く、常に食を施す(といふ)が如く、如來の身の常なることも應に知るべし亦爾なり。

釋曰 經に如來は其の身常住なりと說くも、佛の受用身及び變化身は皆是れ無常なり。云何が身常なるや。故に次に二身の常の義を成立す。謂はく此の二身は法身に依りて住す。法身常なるが故に、亦說いて常なりと爲す。又受用身は受用して廢すること無きが故に、說いて常と爲す。變化身と共に恒に等覺般涅槃等を現じ、相續して斷ぜざるが故に、亦常なりと名く。復譬喩を以て此の二身は是れ常住の義なることを顯はす。猶世間の常に樂を受くと言ふが如き、受くる所の樂は唯無間なるのみに非ずと雖も、而も說いて此を「常に樂を受く」と言ふことを得。又世間の常に食を施すと言ふが如き、此の施食は恒に間斷無きに非ず。而も說いて此を「常に施食す」と言ふことを得るなり。應に知るべし二身の常の義も亦爾なり。

論曰 六因に由るが故に、諸佛世尊の現ずる所の化身は畢竟して住するに非ず。一には所作究竟し、有情を成熟し已つて解脫するが故に。二には[七三]涅槃を樂はざることを捨離せしめんが爲に、如來の常住の身を求めしめんが爲の故に。三には諸佛を輕毀することを捨離せしめんが爲に、甚深なる正法の敎を悟らしめんが故に。四には[七四]佛に於て深く渴仰を生ぜしめんが爲に數見る者の厭怠を生ずることを恐るゝが故に。五には自身に於て勤めて精進を發さしめん(が爲に)正說する者は得べきこと難きを知るが故に。六には諸の有情を極めて速かに成熟せんが爲に、自ら精進して[七五]軛を捨て

【七二】前段の終に在る頌偈の後の長行より續いて此の一段の論本は陳譯には更に後段に在り、參照。

【七三】此の句は隋譯には「涅槃を樂欲する意を轉じて、常住の佛身を求めしめんが爲の故に」とあり、陳譯には「若し已に解脫を得て般涅槃を求めば、彼をして般涅槃の意を捨てゝ常住の佛身を得んことを求めしめんが爲の故に」とあり、共に廻小向大の意を說くも、本譯の意通じ難し、故に普寂は恐くは梵本の錯なるかと評せるも、次の偈文も亦今と同じく、殊に無性釋は此の釋文に由りて解說し如來の入涅槃の意を顯はすとなせり、參照。

【七四】此の句は隋譯には「渴仰の意を生ぜしめんが爲に、若し數々見るものは無厭足を生ずるが故に」となし、陳譯には「衆生をして佛身に於て渴仰の心を起し、數々見て厭足すること無からしめんが爲の故に」となし、兩譯同意趣なるも、本譯は其意異る。

【七五】軛を捨てずとは隋譯にては重軛を捨てずとあり、衆生濟度の重任を捨てずとの意。

を受くるは、是れ變化身にして自性身に非ず。又諸の菩薩は久遠より來、常に宿住を憶ひ、書算等に於て正知すること能はざるは道理に應ぜず。但諸の有情を調伏せんが爲の故に、化して此の事を爲す。又諸の菩薩は三無數劫に、福慧を勤修して、惡說、善說、邪の苦行の事を正知すること能はず、最後身に於て菩提を證する時、何ぞ能く頓に悟るや。此の道理に由りて、是れ變化身にして自性身に非ず。又諸の菩薩は百拘胝の諸の贍部洲を捨てゝ、但一處に於てのみ等正覺を成じ正法輪を轉ずるは道理に應ぜず。若し變化身は一切處に遍く同時に現化すれば正しき道理に應ず。故に變化身にして自性身に非ず。若し諸の異部は是の如きの執を作さく、佛は唯一處にて眞に等覺を證す。餘方には化を現じて佛事を施作するなり、と。若し爾らば何が故に但覩史多天に住してのみ眞に等覺を證し、遍く一切の四大洲渚に化身を示現して佛事を施作すと許さゞるや。又一切の四大洲の中に於て等覺を現ぜざることは、[六九]教無く理無きが故に不應の說なり。[七〇]此の佛土の中に、四洲渚の成佛を現ぜざる有り。若し有るが說いて縱ひ是の事有りと言ふも、便ち契經に違ふが故に、經の中に說く、二の如來倶時に出現すること無しと。應に知るべし、此の經は、轉輪王に同じく、輪王は二並びに出づること無しと說けるが如きは。[七一]一四洲に依る、一佛土には非ず。二の如來の倶時に出現すること無きも、當に知るべし亦爾なり。此の中の意は一四大洲を說いて一世界と名く。今復頌を以て諸佛の等覺を化現することを顯示す。「佛の微細なる化身」等とは、此の中の義を說く。若し爾の時に於て佛現して覩史多天に安住し、彼より沒して母胎に入る等を示す。卽ち彼の時に於て、尊者舍利子等の無量の眷屬を化作し、亦入胎出生等の事を現ず。是の如き變化の眷屬を安立するは、當に知るべし、一切種の覺の殊勝なる佛事を顯はさんが爲なり。今當に如來の畢竟して般涅槃に入ることは道理に應ぜざることを顯示すべし。謂はく一切の有情を化度せんが爲に、先に大願を發し、及び大行を修し、常に自ら誓つて言はく、我れ當に一切の

【六九】聖教に據る所なく、理論の證明もなしとの意。
【七〇】此の句は隋譯には「一佛剎の中に於て隨つて一の四洲中に於て正覺を證せず」と文意解し易し。
【七一】此の句は隋譯には「此れ一の四洲の中に並び出づること無きを說く、一の佛剎には非ず」と意義明了なり。

耶識を轉じて自性身を得。若し受用身卽ち自性身ならば、諸の轉識を轉ずれば復何の身を得るや。此の非理に由るが故に受用身は自性身に非ず。此の六因の不應理に由るが故に、二は一を成ぜず。

論曰 何に因りて變化身は卽ち自性身に非ざるや。八因に由るが故なり。謂はく諸の菩薩は久遠より來、不退定を得れば、覩史多及び人中に於て生ずることは道理に應ぜず。又諸の菩薩は久遠より來、常に[六四]宿住を憶せるに（而も）書・算數・印・工巧論の中、及び[六五]欲塵を受用する行の中に於て、正知すること能はざるは道理に應ぜず。又諸の菩薩は久遠より來、已に惡說善說の法教を知れば、外道の所に往くことは道理に應ぜず。又諸の菩薩は久遠より來、已に能く善く三乘の正道を知れば、邪の苦行を修することは道理に應ぜず。又諸の菩薩は百拘胝の諸の贍部洲を捨てて、但一處に於て等正覺を成じ正法輪を轉ずることは道理に應ぜず。[六六]若し等正覺を成ずるを示現することを離れて、唯化身を以て所餘の處に於て佛事を施作すれば、卽ち應に但覩史多天に於てのみ等正覺を成ずべし。何ぞ遍く一切の贍部洲の中に同時に佛の出づることを施設せざるや。既に施設せず、敎無く理無し。多くの化（身）有りと雖も、而も彼の二の如來世に出現すること無しとの言に違はず。一の四洲に世界を攝するに由るが故に、二輪王の同じく世に出でざるが如し。此の中に頌有り、

佛の微細なる化身は　多く處胎平等なり
一切種の　等覺を成ずることを顯はさんが爲に而も[六七]轉ず。

一切の有情を利樂せんと欲するが爲に、發願し修行して大菩提を證す。畢竟して涅槃するは道理に應ぜず。願行果無く過失を成ずるが故なり。

釋曰 今當に佛の變化身は卽ち自性身なることは正理に應ぜざることを顯示すべし。八因に由るが故に。此の中、最初の理に應ぜざるは、謂はく諸の菩薩は久遠より來、已に無量劫に不退定を得たり。尙應に覩史多天にも生ずべからず、況んや人中に於てをや。然るに此の世間に現じて生

【六四】 宿住智の力にて過去無量世に修習せし効現はれて諸事を正知し能くすべしとの意なり。

【六五】 欲塵を受用すとは五欲の境を受用するの意にして、歌舞飲食等をいふ。

【六六】 此の句は隋譯には「若し是の如く正等覺を證する方便を顯示することを離れて、其の餘は皆化身を以て佛事を作せば、則ち應に兜率天の中に於て正覺を證すべし」となせり。

【六七】 轉ずとは隋譯には「受生を現ず」となし、陳譯には「世間に於て示現す」となせり、其の意味に解すべし。

【六八】 此の一段は樹下成道の釋尊に準じて變化身を說きて自性身に非ることを明かす、釋文に意の盡くさゞる所あり、陳譯釋論を參照せば解し易かるべし。

故に」とは、佛は一切の煩惱、所知障を解脫するに由るが故に、此の意趣に依り說いて諸佛は畢竟して涅槃すと言ふ。「所作竟り無きが故に」とは、佛は普く一切の有情に於て未成熟の者は成熟せしめんと欲し、已成熟の者は解脫せしめんと欲するに由りて、是の應に作すべき所の、此の事は究竟の期有ること無し。故に佛は畢竟して涅槃に入らず。若し此れに異らば、應に聲聞の畢竟して涅槃するが如くなるべく、是れ則ち本願應に空くして果無かるべし。

論曰　何が故に受用身は即ち自性身に非ざるや。六因に由るが故なり。一には色身見るべきが故に、二には無量の佛の衆會の差別見るべきが故に、三には勝解に隨つて見るは、自性を不定に見るべきが故に、四には別々に見るは自性を變動して見るべきが故に、五には菩薩聲聞及び諸天等の種種の衆會に間雜して見るべきが故に。六には阿頼耶識と諸轉識の轉依は非理なること見るべきが故に。佛の受用身は即ち自性身なることは道理に應ぜず。

釋曰　今當に佛の受用身は即ち自性身なることは正理に應ぜざることを顯示すべし。「色身見るべきが故に」とは、佛の受用身は色身見るべきも、佛の法身には非ず。此の非理に由るが故に受用身は即ち法身に非ず。又受用身には佛の衆會の差別の得べき有るも、法身には是の如き差別有ること無し。此の非理に由るが故に受用身は自性身に非ず。又受用身は勝解に隨つて見る。契經に說けるが如く、「或は佛身を見るに唯黃色のみ有り。或は佛身を見るに唯青色のみ有り」と。是の如く廣說せり。[六二] 若し受用身は即ち自性身ならば、此の自性身は應に不決定の體なるべし。不決定を自性身と名くることは正理に應ぜず。此の非理に由るが故に受用身は自性身に非ず。又受用身は、[六三] 一類の有情先に別異を見、即ち此の後時に復別異を見るも、佛の法身の自性は變動するに非ず。此の非理に由るが故に受用身は自性身に非ず。又受用身は諸天等の種々の衆會に常に相ひ間雜する有るも、自性身は此の間雜有るに非ず。此の非理に由るが故に受用身は自性身に非ず。又阿頼

【六二】　此の句は隋譯に「受用身には是の如き等の體相の不定有り、若し自性身の體性に不定有りと言はゞ則ち道理に應せず」と。文意甚だ明了なり。相と性に分ちて相の差別不定を以て、性の差別に推究して二身の不同を示せり、本文不決定の意は是に由りて解すべし。

【六三】　此の句は人の見る時に隨つて色相を異にするの意なり。

次第に轉ずるは理に非ず　　　故に多佛有ることを成ず。

釋曰　今當に此の因緣に由ることを顯示すべし。應に知るべし、諸佛は法身を同じくすと雖も、而も或は一を成じ或は復多を成ず。應に知るべし一とは法界同じきが故なり。諸佛は皆同じく法界を體と爲す。法界一なるが故に、應に一佛なることを知るべし。又一佛とは、一時に一世界の中に於て二佛の現ずること無きを以ての故に、一佛なることを知る。又伽他の中に諸佛は或は一或は多なることを顯示す。「一界の中に二無く」とは、此の句は唯一佛のみ有ることを顯示す。世界の中には二佛の倶時に出現すること有ること無し。是の故に說いて唯一佛のみ有りと言ふ。餘句は諸佛の多有ることを顯示す。「同時に無量のもの圓かにす」とは、無量の菩薩は同一時の中に資糧圓滿す。若し諸の菩薩の福智の資糧は同時に圓滿するも、成佛を得ざれば、是の如き資糧は應に空しくして果無かるべし。衆多の菩薩は資糧を修集して同時に圓滿す。是の故に應に知るべし、一時に多佛あり。「次第に轉ずることは理に非ず」とは、次第に轉じて成佛するの義有ること無し。若し諸の菩薩は資糧を修する時、次第前後を觀待して成滿するならば、佛を得べき時も前後次第せん。然も諸の菩薩は資糧を修する時に次第前後を待たずして成滿するが故に、佛を得る時も亦次第前後に成ずるの義無し。是の故に同時に衆多の佛有り。

論曰　云何が應に法身の中に於て佛は畢竟して涅槃に入るに非ず。亦畢竟して涅槃に入らざるに非ざることを知るべきや。此の中に頌有り、

一切の障を脫するが故に　　所作竟り無きが故に
佛は畢竟して涅槃し　　畢竟して涅槃せず。

釋曰、餘部有り、諸佛は畢竟して涅槃すること有る無しと說き、復別部の聲聞乘の人有り、諸佛は畢竟して涅槃すること有りと說く。故に此の頌の中に二の意趣を顯はす。「一切の障を脫するが

く。「無我等しきが故に」とは、謂はく聲聞等には補特伽羅の我は皆有ること無し。無我に由るが故に。[五八]此れは是れ聲聞、此れは是れ菩薩と（云はば）道理に應ぜず。此の無我の平等なる意趣に由るが故に一乘と說く。「解脫等しきが故に」とは、謂はく聲聞等は煩惱障に於て同じく解脫を得るが故に一乘と說く。世尊の言へるが如く、[五九]解脫と解脫とに差別有ること無し。「性同じからざるが故に」とは、種性差別するが故に、不定性の諸の聲聞等も亦當に成佛すべきを以てなり。此の意趣に由るが故に一乘と說く。「二の意樂を得るが故に」とは、二種の意樂を得るが故なり。一には攝取平等の意樂なり。此に由りて一切の有情を攝取して言はく、彼れは卽ち是れ我。我は卽ち是れ彼れなりと。是の如く取り已つて自ら既に成佛し、彼も亦成佛せしむ。此の意趣に由るが故に一乘と說く。二には法性平等の意樂なり。謂はく諸の聲聞は法華會上にて佛の授記を蒙り、佛の法性と平等なる意樂を得たり。未だ法身を得ざるも、是の如き平等の意樂を得るに由りて、是の思惟を作さく、諸佛の法性は卽ち我が法性なり、と。復別義有り、謂はく[六〇]彼の衆中に諸の菩薩有り、彼と名同じくして佛の授記を蒙る。此の法如の平等なる意樂に由るが故に一乘と說く。「化の故に」と言ふは、謂はく[六一]佛は化して聲聞乘等と作る。世尊の言へるが如し。「我れ往昔を憶ふに、無量百返、聲聞乘に依りて般涅槃せり」と。此の意趣に由るが故に一乘と說く。聲聞乘を以て化する所の有情は、此を見るに由るが故に般涅槃を得。故に此の化を現ず。「究竟の故に」とは、唯此の一乘を最も究竟と爲す。此れを過ぎて更に餘の勝乘無きが故なり。聲聞乘等には餘の勝乘有り、所謂佛乘なり。此の意趣に由りて諸佛世尊は一乘を宣說す。

論曰　是の如く諸佛は同一の法身にして、而も佛に多有ることは、何に緣つて見るべきや。此の中に頌有り、

一界の中に二無く　同時に無量のもの圓かにす

【五八】聲聞の無我と菩薩の無我と別異なるもの非ずとの意。

【五九】聲聞の解脫と菩薩の解脫といふが如く解脫に差別なしとの意。

【六〇】隋譯に「彼の大衆の中に於て諸の菩薩有り、諸の聲聞と同名にして授記して涅槃を得」とあり、尙ほ陳譯參照。

【六一】佛は化身を現じて聲聞等となること。

ることを許す。「世間の事別なるが故に、業の異るを許す」とは、謂はく諸の世間には商賈の事の別。農を營む事の別、此等の事務の差別有るが故に、業に異り有ることを許す。「世間の性の別なるが故に業の異るを許す」とは、性とは意趣を謂ふ。意趣別なるが故に業に異り有ることを許す。「世間の行の別なるが故に業の異るを許す」とは、作行の業に差別有るに由るが故に業に異り有ることを許す。諸佛の作業は皆無功用なり。一切の因等の差別力無し。是の故に導師には業の異り有るに非ず。

論曰　若し此の功德の圓滿と相應すれば、諸佛の法身は聲聞獨覺乘と共にせず。何の意趣を以て、佛は一乘を說くや。此の中に二頌有り、

　一類を引攝し、及び　　所餘を任持せんが爲に
　不定種性に由りて　　[五五]諸佛は一乘を說く。
　法と無我と解脫と　　等しきが故に性同じからざると
　二の意樂を得ると、化と　　究竟と(の故に)一乘と說く。

釋曰　此の中の二頌は、諸佛の一乘を說く意趣を辯ず。「一類を引攝する爲に」とは、謂はく不定種性の[五六]諸の聲聞等を引攝して大乘に趣かしめんが爲なり。云何が當に不定種性の諸の聲聞等をして、皆大乘に由りて般涅槃せしむべきや。「及び所餘を任持す」とは、謂はく[五七]不定種性の諸の菩薩衆を任持して大乘に任せしめんが爲なり。云何が當に不定種性の諸の菩薩衆をして、大乘を捨てず、聲聞乘にて般涅槃すること勿からしむべきや。此の義の爲の故に佛は一乘を說く。不定等の句義に由りて已に法と無我と解脫とを說き、乃至廣說せり。此の中、復別の意趣の力に由りて唯一乘を說く。何の別の意趣なりや。謂はく「法等しきが故に」等なり。「法等しきが故に」とは、法とは謂はく眞如にして、諸の聲聞等の同じく歸趣する所なり。趣く所平等なるが故に一乘と說

【五五】此の句を陳譯には「定性に一乘を說く」となし、定性の菩薩をも加へたり、然も他の諸譯には定性の菩薩は除いて不定性のみを擧ぐ、蓋し此には一乘を說く特別の意趣を明かしたるが爲なるべし。
【五六】不定種性の聲聞と緣覺とは小乘根性を脫して大乘に進むべき素質あるが故に一乘を說いて誘導す。
【五七】不定種性の菩薩は大乘の行者なりと雖も大乘の根性未だ決定せざる爲に二乘に退墮する恐あり、故に一乘を說いて之を策勵す。

の有情の災橫を救濟するを業と爲す。暫く見る時に於ても便ち能く盲聾狂等の諸の災橫を救濟するが故なり。二には惡趣を救濟するを業と爲す。諸の有情を拔いて不善處より出し善處に置くが故なり。三には非方便を救濟するを業と爲す。諸の外道をして非方便を捨てゝ解脫の行を求めしめ、如來の聖敎の中に置くが故なり。四には薩迦耶を救濟するを業と爲す。能く三界を超ゆる道を授與するが故なり。五には乘を救濟するを業と爲す。餘乘に趣かんと欲する菩薩と及び不定種性の諸の聲聞等とを拯拔し、安處して、大乘の行を修せしむるが故なり。此の五業に於て、應に知るべし、諸佛の業用は平等なり。此の中に頌有り、

因と依と事と性と行と　別なるが故に業の異るを許す
[五〇]世間の此の力の別なること　無きが故に導師には非ず。

釋曰　應に知るべし、「是の如き諸佛の法界は一切の時に於て能く五業を作す」とは、謂はく佛の法身は恒に五業を作すなり。「一切の有情の災橫を救濟するを業と爲す」等とは、謂はく盲聾等暫くも佛を見たてまつる時は便ち[五一]眼等を得るなり。「惡趣を救濟するを業と爲す」等とは、謂はく惡處を拔いて善處に置くを惡趣を救ふと名く。[五二]「薩迦耶を救濟するを業と爲す」等とは、謂はく世間の爲に能く三界を超出する聖道を說く。卽ち[五三]三界を說いて薩迦耶と爲す。所餘の二句は其の義知るべし。此の五業に於て、應に知るべし諸佛の諸業は平等なり。此の義の中に於て復一頌を說く。謂ゆる「因と依と」等なり。是の因緣に由りて、一切の如來の諸業は平等にして、一切の世間の業は不平等なり。一伽他を以て總略して世間の因を顯示す。[五四]「別なるが故に業の異ることを許す」とは、謂はく諸の世間は別の因に由るが故に那落迦に生じ。別の因によりて天に生じ、別の因によりて乃至餓鬼に生る。因の別なるに由るが故に、業に異り有ることを許す。「世間の依別なるが故に　業の異ることを許す」とは、依とは身體を謂ふ。依別なるに由るが故に業に異り有

【五〇】此の頌句は本釋論の意に由つて國譯したるも辭句甚だ難澁なり、隋譯には「世間に此の異り有るも、導師には彼の別無し」とありて文穩當にして解し易し、本文の「導師には非ず」とは前に「別なるが故に業の異るを許す」とあるに對して導師には之を許さずと否定せるものにして、導師卽ち佛には業の異りなく平等なりとの意なり。

【五一】眼等を得とは盲者は眼を得、聾者も聽を得等なり。

【五二】薩迦耶(Satkāya)は有身見と譯し、我見のこと。

【五三】我見に依りて三界に繫縛せらるゝが故なり。

【五四】以下頌文初句の世間の因と依と事と性と行との別によつて業の異ることを示す。

るが故に、此の二種の善根より起る所、卽ち此の善根を因の圓滿と名く。次に一句有り、果の圓滿を顯はす。謂はく淨佛土は極めて自在なる淨識を以て相と爲す。次に一句有り、主の圓滿を顯はす。次に一句有り、輔翼の圓滿を顯はす。次に一句有り、眷屬の圓滿を顯はす。前に已に龍を擧げ、今此に復[四九]莫呼洛伽を擧ぐるは、大蟒を攝せんが爲なり。次に一句有り、住持の圓滿を顯はす。卽ち是れ飮食なり。次に一句有り、事業の圓滿を顯はす、謂はく此の食を食し已つて諸の衆生の一切の義利を辦ずるなり。次に一句有り、攝益の圓滿を顯はす。淨土の中に於ては諸の煩惱を離る、諸苦無きが故に。次に一句有り、無畏の圓滿を顯はす。若し處として怨れ無ければ卽ち怖畏無し。怨れとは四魔を謂ふ。此の淨土の中には諸の煩惱魔、蘊魔、死魔及び天魔は悉く皆有ること無きを以て、是の故に畏れ無し。次に一句有り、住處の圓滿を顯はす。次に一句有り、路の圓滿を顯はす。此の淨佛土は何の路に由りて入るや。謂はく大乘の中の聞思修の慧は其の次第の如く大なる念と慧と行とにして遊入の路と爲る。次に一句有り、乘の圓滿を顯はす。奢摩他毘鉢舍那に乘じて遊趣するが故に。次に一句有り、門の圓滿を顯はす。謂はく此の淨土は何の門に由つて入るや。謂はく大乘の中、大空、無相、無願の解脫を所入の門と爲す。次に一句有り、依持の圓滿を顯はす。大地等の風輪に依りて住するが如く、此の淨佛土は何の依持する所なるや。無量の功德衆の莊嚴する所、大紅蓮華の建立する所なり。「是の如き清淨の佛土を受用するに、一向に清淨にして妙なり」とは、謂はく淨土の中には不淨糞穢等の事有ること無きなり。「一向に安樂なり」とは、謂はく淨土の中には唯樂受のみ有りて、苦受有ること無く、無記受も無し。「一向に無罪なり」とは、謂はく淨土の中には不善有ること無く亦無記も無し。「一向に自在なり」とは、謂はく淨土の中には外緣を待たずして一切の欲する所、自心に隨ふが故なり。

論曰　復次に應に知るべし、是の如き諸佛の法界は、一切の時に於て能く五業を作す。一には一切

【四九】莫呼洛伽（Mahoraga）は大蟒又は大腹行と譯す。

し、勝れたる出世間の善根の起す所にして、最極自在の淨識を相と爲し、如來の都する所、諸の大菩薩衆の雲集する所、無量の天・龍・藥叉・健達縛・阿素洛・掲路荼・緊捺洛・莫呼洛伽・人・非人等の常に翼從する所にして、廣大の法味、喜樂に持せられ、諸の衆生に一切の義利を作し、一切の煩惱災橫を蠲除し、衆魔を遠離し、諸の莊嚴を過ぎたる如來の莊嚴の所依の處にして、大なる念慧行を以て遊路と爲し、大止妙觀を以て所乘と爲し、大なる空、無相、無願の解脫を所入の門と爲し、無量の功德衆の莊嚴する所、大寶華王の建立する所の大宮殿の中に住す。是の如く清淨なる佛土は顯色の圓滿、形色の圓滿、分量の圓滿、方所の圓滿、因の圓滿、果の圓滿、主の圓滿、輔翼の圓滿、眷屬の圓滿、住持の圓滿、事業の圓滿、攝益の圓滿、無畏の圓滿、住處の圓滿、路の圓滿、乘の圓滿、門の圓滿、依持の圓滿を現示せり。

復次に是の如き清淨なる佛土を受用するに、一向に淨妙なり。一向に安樂なり。一向に無罪なり。一向に自在なり。

釋曰 [四四]菩薩藏百千頌經の序品の中に清淨の佛土を說けるが如し。此の淨佛土の顯示するは何等の殊勝の功德なりや。謂はく初の二句は淨佛土の顯色圓滿を顯はす。「七寶」と言ふは、一には金、二には銀、三には瑠璃、四には[四五]牟娑洛寶、五には[四六]遏濕摩揭婆寶、此れを擧ぐるは、應に知るべし、卽ち[四七]末囉羯多等の寶を擧ぐるなり。六には赤眞珠寶なり。此の赤眞珠は赤蟲の中より出で。一切の寶の中にて最も殊勝と爲す。七には[四八]羯雞怛諾迦寶なり。「大光明を放ちて普く一切無邊の世界を照す」とは、謂はく次前に說く七寶の放つ所の諸の大光明なり。此の上の二句は皆同じく顯色の圓滿を顯示す。次に一句有り、形色の圓滿を顯はす。次に一句有り、分量の圓滿を顯はす。次に一句有り、方所の圓滿を顯はす。次に一句有り、因の圓滿を顯はす。此れ何の所因ぞ、謂はく出世間の無分別智と及び後得智となり。此の後得智を說いて名けて勝と爲す、此れ後得な

【四四】隋譯には「百千偈修羅菩薩藏緣起の中」にいひ、魏譯には「佛の十萬偈修多羅菩薩藏の序分の中」といへり。陳譯釋論には菩薩藏中の淨土經の一種とし或は又華嚴經の中の淨土の相を廣說する文なりといへり、然るに今の經文は佛地經序品の說にして十八圓滿に依つて釋するは佛地論の說なり。

【四五】牟娑洛。具さには牟娑洛揭婆(Musāragalva)は車渠と譯す。

【四六】遏濕摩揭婆(Aśmagarbha)。赤色寶又は碼瑙と譯す。

【四七】末囉羯多(Mārakata)。綠色寶と譯す。

【四八】羯雞怛諾迦(Karketana)は玫瑰と譯す、火齊珠なり。

は作業決定、二には異熟を受くる決定なり。當に知るべし、此の中に說いて決定と名く。諸佛は此の二の決定の中に於て自在有ること無し。頑愚等の身を〔四〇〕異熟障の決定と名け、當に那落迦等に墮すべきを、異熟を受くる決定と名く。應に知るべし、此の中に二種差別せり。「如來の身は常なり。眞如は無間に垢を解脫するが故なり」とは、謂はく眞如の理は〔四一〕世間に一切の障垢を解脫し、法身を成ずることを顯はす。是の故に如來は其の身常住なり。「如來は大富樂を受く」とは、應に知るべし、如來の清淨の佛土を大富樂と名く。「如來は能く大事を成ず」とは、謂はく諸の如來は等正覺般涅槃等を現じ、大義利を成じて、「已に成熟する者は解脫を得しめ、未だ成熟せざる者は其をして成熟せしむる」なり。餘の念佛を修することは其の義了じ易し。復二頌を以て是の如き七種の念佛を顯釋す。此の頌の中に於て、諸佛の七種の圓滿を宣說して念佛を修せしむ。謂はく諸の菩薩は初めに如來の〔四二〕自心に隨屬する圓滿を念じ、次に如來の其の身常住なる圓滿を念じ、次に如來の清善を具足する圓滿を念ず。卽ち是れ最勝無罪なり。次に如來の無功用の圓滿を念ず、謂はく佛事を作すに無功用なるが故なり。次に如來の大法樂を施す圓滿を念ず。應に知るべし、卽ち清淨の佛土に於て大法樂を受くるなり。次に如來の諸の染汚を離るゝ圓滿を念ず、卽ち是れ〔四三〕遍く行きて依止する所無し、若し依る所有りて遍行すれば卽ち苦難有り、依る所無くして遍行するに由るが故に、佛は常に苦無く染を離れて遍行す。後に如來の平等にして多く利する圓滿を念ず、卽ち是れ佛の能く大事を成ずることを念ず、諸の有情を成熟し解脫せしむるが故なり。

論曰 復次に諸佛の清淨なる佛土の相を云何が應に知るべきや。菩薩藏百千契經の序品の中に說けるが如し。謂はく薄伽梵は最勝の光曜ある七寶にて莊嚴せられて大光明を放ち。普く一切無邊の世界を照らし。無量の方所を妙飾し間列して周圓際り無く。其の量測り難く。三界所行の處を超過

〔四〇〕四惡趣の異熟の果報を受くべく決定せること。

〔四一〕無間とは無間位卽ち金剛心をいふ。

〔四二〕自心に隨屬するとは外緣をからざることを云ふ、此の句は第一の一切の法に於て自在に轉ずといふに應ず。以下順次に前の七種に相應せしめて解すべし。

〔四三〕遍く行くとは此の句は第六の「世間に生在するも一切の世法は染むること能はず」といふに應ずるものなれば遍く世間に行きて同事化益するをいふ。

するが故なり。四には、如來は功用有ること無しと。應に此の念を修すべし。功用を作さずして、一切の佛事は休息無きが故なり。五には、如來は大富樂を受くと。應に此の念を修すべし。清淨なる佛土は大富樂の故なり。六には、如來は諸の染汚を離ると。應に此の念を修すべし。世間に生在するも一切の世法は染むること能はざるが故なり。七には、如來は能く大事を成ずと。應に此の念を修すべし。等覺般涅槃等を示現して、一切の有情の未だ成熟せざる者は能く成熟せしめ、已に成熟せる者は解脫せしむるが故なり。此の中二頌有り、

圓滿は自心に屬すると　常住と淸淨を具すると
無功用と能く　有情に大法樂を施すと
遍行して依止無きと　平等に多生を利するとにして
〔三九〕一切の佛を智者は　應に一切の念を修すべし。

釋曰　今當に若し諸の菩薩は佛の法身を念ずるには、七種の念に由りて應に其の念を修すべきことを顯示すべし。「一切の法に於て自在に轉ずることを得」とは、神通を得るに由りて、一切法に於て自在に轉じ、諸の如來は一切の世界に於て無礙の神通を得るを以て、聲聞等の猶障礙有るが如くに非ざるが故なり。若し諸の如來は一切法に於て自在に轉ずれば、何が故に一切の有情の類は涅槃を得ざるや。故に今の一頌は此の因に由りて諸の有情の類は究竟涅槃を證得すること能はざるを顯はす。「有情界に周遍するも、障を具し而も因を闕く」とは、謂はく諸の有情には業等の障有り、名けて障を具すと爲す。障を具するに由るが故に、無量の佛、世に出現すと雖も、彼をして般涅槃を得しむること能はざるなり。諸佛は彼れに於て自在有ること無し。若し諸の有情は涅槃法無ければ、名けて因を闕くと爲す。此の意は、彼れに涅槃の因無く種性無きが故に、諸佛は彼れに於て自在有ること無しと說くなり。「二種決定して轉じ」とは、決定に二種有り、一に

〔三九〕次の二句を隋譯に「一切に一切の佛を、智八は是の如く念ず」となす。

の諸の煩惱を留むるを以ての故に、聲聞の如く速かに般涅槃せず、究竟して諸の煩惱の盡くるに至ることを得。「佛の一切智を證す」とは、[三五]煩惱の盡くる時、一切智を得るなり。

論曰

煩惱は覺分を成じ　　生死は涅槃と爲り
大方便を具するが故に　　諸佛は不思議なり。

釋曰　此の頌は不可思議甚深を顯示す。謂はく諸の菩薩は[三六]大方便を具し、[三七]煩惱の集諦轉じて覺分を成じ、生死の苦諦は卽ち涅槃と爲る。是の如く一切の諸佛の聖教は、前に說く所の如き、三因緣の故に不可思議なり。謂はく[三八]自內證の故に等なり。

論曰　應に知るべし、是の如く說く所の甚深に十二種有り。謂はく生住業住の甚深。安立數業の甚深。現等覺の甚深、離欲の甚深、斷蘊の甚深、成熟の甚深、顯現の甚深、等覺と涅槃とを示現する甚深、住甚深、自體を顯示する甚深、煩惱を斷ずる甚深、不可思議の甚深なり。

釋曰　此の十二種は皆覺了し難きが故に甚深と名く。一一の別相は、前に已に說けるが如し。

論曰　若し諸の菩薩は佛の法身を念ずるには、幾種の念に由りて、應に此の念を修すべきや。略して菩薩の佛の法身を念ずることを說かば、七種の念に由りて應に此の念を修すべし。一には、諸佛は一切の法に於て自在に轉ずることを得と、應に此の念を修すべし。一切の世界に於て無礙通を得るが故なり。此の中に頌有り、

有情界に周遍するも　　障を具し而も因を闕き
二種決定して轉ずれば　　諸佛には自在無し。

二には、如來は其の身常住なりと。應に此の念を修すべし。眞如は無間に垢を解脫するが故なり。三には、如來は最勝無罪なりと。應に此の念を修すべし。一切の煩惱と及び所知の障を並びに離繫

【三五】煩惱の盡くる時とは煩惱の習氣まで斷盡して清淨となる時の意。

【三六】大方便を具すとは陳譯の釋論に因るに、因位にて、悲智の二を具し、果位にては三身を具するをいふ。

【三七】煩惱卽ち集諦あるが故に之を對治する助道の法卽ち道諦を成し、生死の苦諦は道諦に由りて其まゝ涅槃卽ち苦滅諦となる、此の句は含蓄深し。

【三八】此の句は隋譯には「唯自の證知等にして思量の境界に非ず」となせり。

四種の梵住に住するなり。「最勝なる自體にして住す」とは、謂はく是の如き最勝なる自體に由りて、最勝なる住に住するなり。此れ諸佛は、諸住の中に於て最勝なる自體の諸住に安住することを顯はす。

論曰

佛は一切處に行ずるも　　亦一處にも行ぜず
一切に於て身を現ずるも　　六根の所行に非ず。

釋曰　此の頌は自體の甚深を顯示す。「佛は一切處に行ずるも亦一處にも行ぜず」とは、謂はく後得智は善、不善、無記等の中に於て分別して轉ずるも、無分別智は一處にも行ぜず。第二義は謂はく變化身は一切處に行ずるも[二八]其の餘の二身は一處にも行ぜず。「一切に於て身を現ず」とは、即ち變化身は遍く一切の處々に於て見るべしとなり。[二九]「六根の所行に非ず」とは、即ち變化身は彼の那落迦等を化せんと欲するが爲に、彼の生を現ずるも、那落迦等に生を受くる有情は、化身を見る時、[三〇]實の如く見ず、了知すること能はず、但謂へらく即ち是れ那落迦等なり、と。是の故に化身は決定して彼の那落迦等の六根の所行に非ず。

論曰

煩惱を伏するも滅せず　　毒の呪に害せらるが如し
惑を留め惑の盡くるに至りて　　佛の一切智を證す。

釋曰　此の頌は煩惱を斷ずる甚深を顯示す。「煩惱を伏するも滅せず。毒の呪に害せらるゝが如し」とは、菩薩の位の中、煩惱の纒を[三一]伏するも、未だ[三二]煩惱を滅せず。隨眠有るが故なり。[三三]譬へば衆毒の呪力に害せられて、體猶ほ在りと雖も而も害を爲さざるが如し。煩惱も亦爾なり。智了知するが故に。體猶ほ在りと雖も而も害を爲さず。[三四]「惑を留め惑の盡くるに至りて」とは、隨眠

【二八】其の餘の二身とは自性受用の二身なり。
【二九】六根の所行とは隋譯には六根の境界となし、陳譯には六根の境となせり、所行とは六根の對境の意なり。
【三〇】實の如く云云とは化身の實體を見ること能はずの意。
【三一】伏すとは煩惱の現行力を伏壓して之を制すること。
【三二】煩惱を滅せずとは煩惱の根元を斷滅せずとの意。
【三三】譬の意は毒を受くるも呪術の力にて之を制すれば其の毒の體は滅せざるも其の効力は抑壓せられて害を及ばざるが如しとなり。
【三四】此の句の意は隨眠の煩惱を留めて斷ぜざるが故に其の力にて生死に往來し、菩薩の助道法を修して究極の證果を得となり。

と雖も、然も一切に遍く佛事を施作す。契經應頌等の法を說くに由る。譬へば日光の世間に遍滿するが如く、諸の佛事を作して有情を成熟す。

論曰

或は等正覺を現じ　　或は涅槃すること火の如し
此れ未だ曾て非有ならず　　諸佛の身は常なるが故に。

釋曰　此の頌は等覺と涅槃とを示現する甚深を顯示す。「或は等正覺を現じ、或は涅槃すること火の如し」とは、謂は　諸の如來は或は成佛を現じ、或は涅槃を現ず。其の事は火の如く、或る時は燒然し或る時は息滅す。諸佛も亦爾なり。或は未熟の諸の有情の類に於て般涅槃を現じ、或は已に熟する諸の有情の類に於て佛果を成ずることを現ず。彼をして解脫を得しめんと欲するが爲の故なり。譬へば一の火性にして差別無きが如く、法身も亦爾なり、應に知るべし唯一のみなり。餘の半頌の文は其の義了じ易し。

論曰

佛は非聖法と　　人趣及び惡趣と
非梵行の法との中に於て　　最勝なる自體にして住す。

釋曰　此の頌は住甚深を顯示す。[二五]佛は非聖法の中。人趣惡趣の中。非梵行の法の中に於て、最勝なる自體にして住するに由る。最勝にして住すとは、聖住等に由りて安住するが故なり。此の中、聖住とは空等の住を謂ひ、天住とは諸の靜慮の住を謂ひ、梵住とは慈等の無量の住を謂ふ。非聖法とは謂はく不善法なり。佛は其の中に於て[二六]空等の住に住す。此の空等は、聖の住する所なるに由るが故に、名けて聖住と爲す。人趣及び惡趣とは、謂はく彼の有情を緣じて諸の靜慮に住するなり。住する所の靜慮を名けて天住と爲す。非梵行の法とは、謂はく彼の法に於て[二七]慈悲等の

[二五] 此の頌の意は非聖法に於て聖法に住し、人趣惡趣に於て天住に住し、非梵行法に於て梵行にするを最勝なる自體にて最勝に住すといふ。
[二六] 空等とは無相無願を等取す。
[二七] 慈悲喜捨の四無量をいふ。

てずして而も善く寂す」とは、謂はく圓成實の蘊を棄捨せず、卽ち是れ妙善なる涅槃の體なるが故なり。

論曰

諸佛の事相ひ雜はるは　猶大海の水の如し
我れ已に現に當に作すべし、と　他を利するに是の思無し。

釋曰　此の頌は成熟甚深を顯示す。[二三]「諸佛の事相ひ雜はる」とは、謂はく諸の如來の有情を成熟する一切の事業は悉皆平等なり。其の喩云何ん。「猶大海の水の如し」とは、譬へば大海は衆流の入る所にして、其の水相ひ雜はり、魚鼈等の同じく受用する所と爲るが如し。諸佛も亦爾なり。同じく法界に入り、所作の事業和合して二無く、等しく有情を成熟する受用と爲る。「我已に現に當に作すべし、と」とは、[二四]三時の中に於て隨つて一時に作すなり。「他を利するに是の思無し」とは、是の思を作さず、「我れ他を利することに於て已に現に當に作すべし、と。然も無功用にして能く一切の諸の有情を利益し安樂にするの事を作す。譬へば世間の末尼、天の樂の如し。

論曰

衆生の罪にて現ぜず　月の破器に於けるが如し
諸の世間に遍滿するは　法光の日の如くなるに由る。

釋曰　此の頌は顯現甚深を顯示す。若し諸の世間に諸佛を見ずして、而も諸佛は其の身常住なりと說かば、佛身は旣に常なり、何の故に見ざるや。「衆生の罪にて現ぜず、月の破器に於けるが如し」とは、破器の中には水住することを得ず、水住せざるが故に月は則ち現ぜざるが如く、是の如く有情の身中に、奢摩他の水有ること無ければ、佛月は現ぜず。水は等持に喩ふ、體清潤なるが故なり。「諸の世間に遍滿するは、法光の日の如くなるに由る」とは、謂はく今世間に佛現ぜず

【二三】此の句は隋譯には「諸佛は同事業なり」となせり。

【二四】三時の中とは過去と現在と未來となり、頌に已に、現に、當にとは三時を顯はす、隨つて一時とは其の中何れかの一時との意。

は有に非ざるが故なり。[一八]「一切の覺は無に非ず」とは、假名の理に由りて、一切の佛は等覺を現ずと説くが故なり。云何が佛は等正覺を現ずることを知るや。謂はく一一の念に無量の佛あるが故に。此れ卽ち一一の念の中に、無量の佛有りて等正覺を現ずることを顯示す。「有、非有の所顯なり」とは、此れ眞如は是れ有、非有にして、諸佛は是れ此の眞如の所顯なることを顯はす。

論曰

染に非ず、染を離るるに非ず　　[一九]欲に由つて出離を得

欲は無欲なりと了知すれば　　欲の法性に悟入す。

釋曰　此の頌は離欲甚深を顯示す。「染に非ず染を離るるに非ず」とは、貪欲無きが故に、說いて染に非ずと名く。染無きを以ての故に、染を離るることも亦無し。所以は何ん。貪染若し有らば染を離るること有るべし。染既に是れ無なるが故に染を離るることも無し。「欲に由つて出離を得」とは、[二〇]貪の纏を伏斷して、[二一]貪の隨眠を留むるに由るが故に、究竟の[二二]出離を得。若し隨眠を留めざれば、應に聲聞等の般涅槃に入ると同じかるべきが故に。「欲は無欲なりと了知すれば、欲の法性に悟入す」とは、遍計所執の貪欲と貪欲無き性とを了知すれば、卽ち能く欲法の眞如に悟入すとなり。

論曰

諸佛は諸蘊を過ぎて　　諸蘊の中に安住す

彼れと一にも異にも非ず　　捨てずして而も善く寂す。

釋曰　此の頌は斷蘊甚深を顯示す。「諸佛は諸蘊を過ぎて、諸蘊の中に安住す」とは、謂はく諸の如來は色等の五種の取蘊を超過し、無所得の法性蘊の中に住す。「彼れと一にも異にも非ず」とは、已に遍計所執の諸蘊を捨つると雖も、而も彼れと異に非ず、卽ち彼の法性に安住するを以ての故なり。亦復一ならず、若し是れ一ならば、遍計所執は應に法性と同じく淸淨の境を成ずべし。「捨

【一八】前句に所覺の人法は有に非ざることを明し、此の句は所覺無しと雖も能覺の體を假名に由りて覺者となすことを明かす。

【一九】此の句は隋譯には「而も亦欲と倶なり」となせり、此に欲とは欲の隨眠なり。

【二〇】貪の纏とは貪欲の煩惱の現行のこと。

【二一】貪の隨眠とは煩惱の潛在力をいふ。

【二二】出離とは解脫のこと、惑を留めて生死に往來し、佛行を修するが故に究竟の解脫を得。

が故なり。復十因に由りて、應に知るべし、諸佛は實に食する所無くして而も食を受くることを現ず。一には食を以て住持する身を示現するが故に、二には諸の有情をして福を増長せしむるが故に、三には同法[11]有ることを示現せんと欲するが爲の故に、四には正しき受用[12]を隨つて學ばしめんが爲の故に、五には廉儉の行を隨つて學ばしめんが爲の故に、六には精進行を發起せしめんが爲の故に、七には諸の善根を成熟せしめんが爲の故に、八には自身に染著無きを顯はさんが爲の故に、九には恭敬の業を助け任持せしめんが爲の故に、十には本願[13]の生を圓滿せんと欲するが爲の故なり。

論曰、

無異にして亦無量なり　　無數量なるも一業なり
不堅業と堅業とにして　　諸佛は三身を具す。

釋曰　此の頌は安立と數と業との甚深を顯示す。「無異にして亦無量なり」とは、安立甚深を顯す。諸佛の法身は無差別の故に、說いて無異と名く。[14]無量の依止にして等覺を現ずるが故に、說いて無量と名く。「無數量なるも一業なり」とは、數の甚深を顯す。佛は無量なりと雖も而も同一の業[15]なり。是の故に甚深なり。[16]「不堅業と堅業とにして諸佛は三身を具す」とは、謂はく諸の如來は三身と相應す。其の受用身の事業は堅住にして、其の變化身の業は不堅住なり。是の如き事業を名けて甚深と爲す。

論曰、

[17]等覺を現ずるも有に非ず　　一切の覺は無に非ず
一一の念は無量にして　　有非有の所顯なり。

釋曰　此の頌は等覺を現ずるの甚深を顯示す。「等覺を現ずるも有に非ず」とは、補特伽羅と法と

は本昔相應の意と見るべきか。或は來は昔の錯誤なるか。

【一一】同法とは衆生に同じて人間に生を受け同じく食を取ること。

【一二】正しき受用云云とは食を正しく受用することを佛に隨つて學得せしむとの意なり、陳譯釋論には「弟子をして如法に四種の命緣を受用することを學ばしめんと欲するが故に」となせり。

【一三】本願に依つて衆生濟度の爲に受けたる生を圓滿せんとの意なり。

【一四】無量の身は此の法身に依止して佛道を成ずるの意。

【一五】同一の業とは化他の事業をいふ。

【一六】此の句は隋譯には「不動及び動業にして、諸佛に三身具はる」となし、魏譯には「不見及び見業にして、諸佛の三身成ず」となし、釋論に異解あり、異譯參照。

【一七】此の頌は隋譯には「有ること無しと證するは正覺なり、一切のもの覺せざるには非ず、念念に量るべからず、有非有の所顯なり」となせり、陳譯釋論及び無性釋に詳解せり、參照。

爲し。未だ上地の諸の煩惱を離れざるが故に、說いて不淨と名く。是の故に淨不淨の依止と名く。是の如き依止は觸と意思と識食とに由りて住す。其の段食を除く。三には一向に淨なるものの依止して住する食。謂はく段等の四食は、[二]聲聞等をして淸淨に依止して住することを得しむるが故なり。四には唯示現し依止して住する食、謂はく卽ち四食なり。諸佛示現して之を受けて住することを得。是の故に諸佛の食なり。此の第四の示現して住する食は、能施の諸の有情の類をして、淨信を因と爲して福德を增長せしめんが爲に、食を現して受くと雖も食する事を作さず。[三]如來の食する時諸天は受け取りて施す、[四]佛の意許は、諸餘の有情は、此の因に由るが故に、彼の有情の類は速かに菩提を證すとなり。[五]是の如きの一切を、應に知るべし、總じて說いて一の甚深と爲す。又十因に由りて、應に知るべし諸佛の生は無生の相なり。一には愚癡と不同の法なるが故に、二には差別と不同の法なる故に、三には攝受に於て自在を得るが故に、四には住持に於て自在を得るが故に、五には[六]棄捨に於て自在を得るが故に、六には無二の相なるが故に、七には唯光影に似たるのみなるが故に、八には幻化に同じきが故に。九には無住に住するが故に、十には[七]大事を成ずるが故なり。復十因に由りて、應に知るべし、如來は生死及び涅槃に住せず。一には[八]遍知に非ざるが故に、二には永斷に非ざるが故に、三には[九]修習に非ざるが故に、四には非有の性なることを知るが故に、五には無所得無分別の故に、六には遠離の心なるが故に、七には心の證得なるが故に、八には平等心の故に、九には事不可得の故に、十には證得すべきが故なり。復十因に由りて、應に知るべし諸佛の無功用の事は成立することを得。一には妙に斷離するが故に、二には所依無きが故に、三には所作無功用なるが故に、四には作者無功用なるが故に、五には作業無功用なるが故に、六には所有無くして無功用なるが故に、七には[一〇]本來無差別なるが故に、八には所作已に辦ずるが故に、九には所作未だ辦ぜざるが故に、十には修習を純熟して一切法の中に自在を得る

【二】　これ阿羅漢等の食をいふ。
【三】　此の句は隋譯に「復有るが說いて言はく、諸佛の食する時、諸天接取して餘の衆生に施す、此の因緣を以て彼の衆生をして當に菩提を得しむべきが故に」となせり、文意解し易し。
【四】　意許とは言語には表現せざるも意中に思ひ定めたること。
【五】　此の句は隋譯に「此等の一偈は同一の甚深なり」となせり、文意更に簡明なり。
【六】　棄捨とは生を捨てゝ涅槃に入ること。
【七】　大事を成ずとは一切の有情を敎化すること。
【八】　此の句は隋譯に「非知の故に」といひ、陳譯には「永く離るゝ所に非ざるが故に」とあり、而して第二句を「滅不盡の故に」となせり。
【九】　修習に非らずとは涅槃は修習して得らるべきものに非ず本來寂滅なりの意。
【一〇】　此の句は解し難し、隋譯には「本昔無差別の故に」とあり、陳譯には「宿願の疾利に由るが故に」となせり、此の兩譯を照合して考ふるに、宿願に依りて今佛事を爲すが故に、願に應じて速疾に現成すゝの意なるべし、無差別と

卷の第十

彼果智分第十一の餘

論曰　復次に諸佛の法身は甚深なり、最も甚深なり。此の甚深の相は云何が見るべきや。此の中多頌有り。

釋曰　大乘の中に於て、諸佛の法身の、甚深の相の如きを、今當に顯示すべし。十二頌を以て、十二の甚深の相を顯示す。

論曰

佛は無生を生と爲し　亦無住を住と爲す
諸事無功用にして　第四の食を食と爲す。

釋曰　此の中の一頌は、生と住と業と住との甚深を顯示す。「佛は無生を生と爲す」とは、生の甚深を顯はす。諸の如來は業煩惱無きも、諸の凡愚の造作する所の生に同じきを以ての故に、無生と名く。然も此れと相違する生有り、其の相了じ難ければ生甚深と名く。「亦無住を住と爲す」とは、住甚深を顯はす。無住涅槃を以て住處と爲す。是の如き涅槃を住甚深と名く。「諸事無功用にして」とは、業の甚深を顯はす。諸の如來の無功用の業は一切等しきを以ての故に、業甚深と名く。「第四の食を食と爲す」とは、住甚深を顯はす。佛の食する所は、是れ不清淨依止住等の四種の食の中、第四の食なるを以ての故なり。四種の食とは、一には不清淨の依止して住する食。謂はく段等の四食なり。欲纏の有情をして不淨に依止して住することを得しむるが故に。二には淨不淨の依止して住する食、謂はく觸等の三食なり。色無色纏の有情をして淨不淨の依止して住することを得しむるが故に。此の依止は、已に下地の諸の煩惱を離るるに由るが故に、說いて名けて淨と

【一】段等の四食とは段食、觸食、思食、識食なり。

はす。諸の有情の中にて此れ最上なるが故なり。「諸の有情を解脱せしむ」とは、此れ其の業を顯はす。能く倒無きを以て諸の有情をして解脫を得しむるが故なり。「無盡無等の德と相應す」とは此れ相應を顯はす。其の無盡無等の功德と共に相應するが故なり。「世間に現じて見るべし」とは此れ變化身(へんけしん)を說く。「及び衆會に見るべし」とは、此れ受用身を說く。「見るに非ざるは人天等なり」とは、此れ自性身を說く。諸の人天等は皆見ること能はざればなり。此れ佛身の三種の差別を說いて名けて轉と爲すことを顯はす。

[四六] 遍く一切に行住し　圓智の事に非ざる無く
一切時に遍く　實義を知る者に歸禮す。

[四七] 諸の有情を利樂する　所作は時を過たず
所作常に虛無く　忘失無きに歸禮す。

[四八] 晝夜常に六返して　一切の世間を觀じ
大悲と相應する　利樂の意に歸禮す。

[四九] 行に由り及び證に由り　智に由り及び業に由りて
一切の二乘に於て　最勝なる者に歸禮す。

[五〇] 三身に由りて　相を具する大菩提を得るに至り
一切處の他の疑を　皆能く斷ずるに歸禮す。[五一]

諸佛の法身は是の如き等の功德と相應す。復所餘の自性と因と果と業と相應と轉との功德と相應す。是の故に應に、諸佛の法身の無上の功德を知るべし。此の中二頌有り、

尊は成實の勝義にして　一切地より皆出で
諸の衆生の上に至り　諸の有情を解脫せしむ。
無盡無等の德と　相應して世間
及び衆會に現じて見るべし　見るに非ざるは人天等なり。

釋曰　諸佛の法身は此に說く所の四無量等の功德と相應す。復其の餘の自性と因と果と業と相應と轉との功德と相應す。「尊は成實の勝義にして」とは、此れ諸佛の法身の自性を顯はす。諸佛は皆成實の勝義なる、淸淨の眞如を以て自性と爲すが故なり。「一切地より皆出づ」とは、此れ其の因を顯はす。一切地を修して成佛を得るが故なり。「諸の衆生の上に至る」とは、此れ其の果を顯

ざること。
【四六】次の一頌は習氣を拔除することを明かす。
【四七】次の一頌は無忘失法を明かす。
【四八】次の一頌は大悲を明かす。
【四九】次の一頌は十八の不共佛法を示す。
【五〇】次の一頌は一切の相妙智を明かす。
【五一】隋陳兩譯には更に一頌を加ふ。且らく陳譯に依るに「畏無く過失無く、濁無く住處無く、諸法に於て動無く、戲論無きに歸命す」と、陳譯參照。

[三四] 一切の障を解脱せる　牟尼は世間に勝れ
智は所知に周遍し　心解脱せるに歸禮す。
[三五] 能く諸の有情の　一切の惑を滅して餘す無く
煩惱を害し[三六] 染有るも　常に哀愍するに歸禮す。
[三七] 無功用にして著無く　無礙にして常に寂定
一切の問難に於て　能く解釋するに歸禮す。
[三八、三九] 所依と能依との　所說と言と及び智との
能說とに於て無礙の慧にて　常に善く說くに歸禮す。
[四〇] 彼の諸の有情の爲に　故らに現じて言と行と
往と來と及び出離とを知りて　善く敎ふる者に歸禮す。
[四一] 諸の衆生は尊を見て　皆審かに善士なりと知り
暫く見て便ち深く信ずる　開導の者に歸禮す。
[四二] 攝受と任持と捨と　現化と及び變易と
等持と智と自在にして　隨つて證得するに歸禮す。
[四三] 方便と歸依と淨と　及び大乘の出離と
此に於て衆生を誑かす　魔を摧く者に歸禮す。
[四四] 能く智と及び斷と　出離と能障礙とを說きて
自他を利し餘の　外道の伏するに非ざるに歸禮す。
[四五] 衆に處して能く說を伏し　二の雜染を遠離し
護無く妄失無く　衆を攝御するに歸禮す。

【三四】次の一頌は解脱、勝處、遍處を顯はす。
【三五】次の一頌は無諍を顯はす。
【三六】衆生に染有るも之を捨てずとの意。
【三七】次の一頌は願智を明かす。
【三八】次の一頌は四無礙解を明かす。
【三九】所依とは諸の敎法卽ち契經等の十二部敎なり、能依とは其の所詮の義をいふ、此の二を所說となし、言智の二を能說となす。
【四〇】次の一頌は六神通を明かす。
【四一】次の一頌は諸相と隨好とを明かす。
【四二】次の一頌は四の一切相清淨を示す、卽ち所依清淨、所緣清淨、心清淨、智清淨なり。
【四三】次の一頌は十力を明かす。
【四四】次の一頌は四無所畏を明かす。
【四五】次の一頌は三不護と三念住を示す、障諦は之を二頌となす、參照。三不護とは身口意の三業の過失を離れたること、三念住とは衆生の信受するも喜ばず、信受せざるも憂へず、又或る者は信受し、或る者は信受せざるも喜憂せ

由りて能く一切の有情の心をして喜ばしむる智の自在を證得するが故なり。「拔濟に由る」とは、謂はく拔濟の佛法に由りて法身を攝持す。「一切の災横過失を拔濟することを轉じて」等とは、謂はく世間には王家等の逼惱の事起ること有り、親友の力、財寶の力等に由りて而も能く拔濟するが如し。此を轉ずるに由るが故に、一切の有情の一切の災横過失を拔濟するの智を證得す。故に此の智の力に由りて能く一切の災横過失を除く。

論曰　諸佛の法身は當に異有りと言ふべきや、當に異無しと言ふべきや。依止と、意樂と、業とに別無きが故に、當に異無しと言ふべし。無量の依身等覺を現ずるが故に、當に異有りと言ふべし。佛の法身を說くが如く、受用身も亦爾なり。意樂及び業に差別無きが故に、當に異無しと言ふべし。依止の無差別に由らざるが故に、無量の依止は差別して轉ずるが故に。應に知るべし、變化身も受用身の說の如し。

釋曰　「無量の依止は差別して轉ずるが故に」とは、謂はく受用身の無量の依止は差別して轉ずるなり。是の故に、但意樂と及び業との差別無きに由るが故に、當に異無しと言ふべし。依身は事別なれば當に異有りと言ふべし。此の中、「意樂に差別無し」とは、應に知るべし、皆一切の有情を利益し安樂にせんが爲なり。「業に別無し」とは、應に知るべし、皆同じく等正覺、般涅槃等を現ずる種々の作業なればなり。

論曰[三二]　應に知るべし、法身は幾くの德と相應する、謂はく最も清淨なる四無量・解脫・勝處・遍處・無諍・願智・四無礙解・六神通・三十二の大士相、八十の隨好、四の一切相清淨・十力・四無畏・三不護・三念住・拔除習氣・無忘失法・大悲・十八の不共佛法、一切相の妙智等の功德と相應す。此の中多頌有り、

[三三]諸の有情を憐愍し　和合と遠離と
常に捨てざると利樂との　四の意樂を起すに歸禮す。

【三二】次の一段の長行及び偈頌に法身の德を明かす、本譯の釋論には解釋なしと雖、陳譯には偈頌の一一を解說せり、更に無性釋に於ては長行偈頌共に詳細に解釋せり、參照。今は且らく無性釋に依りて脚註せり。

【三三】此の一頌は慈悲喜捨の四無量心を顯はす。

取するなり。

論曰　應に知るべし、法身は幾くの佛法に由りて攝持せらるゝや。略して六種に由る。一には清淨に由る、謂はく阿賴耶識を轉じて法身を得るが故なり。二には異熟に由る、謂はく色根を轉じて異熟智を得るが故なり。三には安住に由る、謂はく欲行等の住を轉じて無量智の住を得るが故なり。四には自在に由る、謂はく種々の攝受の業の自在を轉じて、一切の世界の無礙の神通智の自在を得るが故なり。五には言說に由る、謂はく一切の見聞・覺知・言說・戲論を轉じて、一切の有情の心をして喜ばしむる辯說智の自在を得るが故なり。六には拔濟に由る、謂はく一切の災橫、過失を拔濟することを轉じて、一切の有情の一切の災橫過失を拔濟する智を得るが故なり。應に知るべし、法身は此に說く所の六種の佛法に由りて攝持せらる。

釋曰　是の佛法に由りて法身を攝持することを、今當に顯示すべし。「清淨に由る」とは、謂はく清淨の佛法に由りて法身を攝持す。是の如く法身の清淨を證得するは何の法を轉ずるに由るや。「謂はく阿賴耶識を轉じて法身を得るが故に」とは、謂はく彼の阿賴耶識を轉滅して、法身の清淨を得。卽ち法身の清淨を說いて清淨と名く。「異熟に由る」とは、謂はく異熟の佛法に由りて法身を攝持するなり。「色根を轉ず」とは、謂はく眼等の色根を轉ずるなり[三〇]「異熟智を得るが故に」とは、謂はく彼を轉ずるが故に異熟智を得るなり。「安住に由る」とは、謂はく安住の佛法に由り法身を攝持す。「欲行等の住を轉ず」とは、謂はく世間の欲行等の[三一]住を轉じて佛法の住を得。「無量智の住を得るが故に」とは、謂はく此に由るが故に種々の住に住す。「自在に由る」とは、謂はく世間の利に殉じ農を務むる種々の事業の自在を轉じて、一切の世界の無礙神通の智の自在を得るが故なり。「言說に由る」とは、謂はく言說の佛法に由りて法身を攝持す。「一切の見聞・覺知・言說戲論を轉ずる」等とは、謂はく世間の見聞・覺知・言說戲論を轉じて、見聞覺知の自在を得。此に

【三〇】異熟とは異熟の果報にして五根等の肉體をいふ、此には五識の所依たる五根を轉じて智を得るが故に異熟といふ、異熟は因位の名なるも、且らく昔時の五根に依りて異熟の名を假設す、無性釋參照。

【三一】隋譯には住を樂となし「欲行等の樂を轉ず」といふ。蓋し安住の意を取りて樂と譯せるものならん。

欲する者は、應に須らく此に於て勤求し、正しく證すべしとなり。第二の伽他は此の五喜を顯はす。「能の無量なると及び事の成ずると法味と義と德と倶に圓滿なるとに由る」とは、應に知るべし、此の中、[二六]「能の無量」とは、法身に依止して、衆多の佛有りて等正覺を成ずれば、一切の功能は悉く皆平等なるが故に、能無量なり。是の如き能の無量を見るに由るが故に、深く歡喜を生ず。「及び事成ず」とは、謂はく一如來の所作として、諸の有情を利樂する事は、卽ち一切の如來の所作に等し。佛多きに由るが故に事も亦無量なり。是の故に「及び」と言ふ。[二七]此を見るに由りて深く歡喜を生ず。「法味に由る」とは、契經、[二八]應頌等の法に勝れたる滋味有ることを見るに由りて、深く歡喜を生ず。「義と德と倶に圓滿なる」とは、謂はく義の圓滿と及び德の圓滿となり。應に知るべし、此の中、思念する所に隨つて有らゆる諸事は具足せざるとに無きを「義の圓滿」と名け。十力・無畏・不共法等の具足せざること無きを「德の圓滿」と名く。「喜の最勝にして過失無きを得」とは、此の喜は三界の喜を超過するが故に、名けて「最勝」と爲し。永へに煩惱と幷に習氣とを斷ずるが故に、「過失無し」と名く。「諸佛は常に盡くること無しと見るが故に」とは、謂はく諸の如來は次前に說く四種の最勝にして過失無き喜は、生死の際を窮めて常に盡くること有る無く、無餘依の大涅槃界に至るも亦盡くること無きを見るが故に、殊勝の喜を生ず。是の故に世尊は五喜を證得す。聲聞等には非ず。「種々の受用身の依止に由る」等とは、謂はく佛の法身は受用身の與に所依止と爲る。何が故に復是の如き依止を須ゆるや。但諸の菩薩を成熟せんが爲の故なり。若し此を離るれば已に大地に入れる諸の菩薩衆も應に成熟せざるべきに由る。「種々の變化身の依止に由る」等とは、謂はく佛の法身は變化身の與に所依止と爲る。何が故に復是の如き依止を須ゆるや。多く聲聞等を成熟せんが爲の故なり。若し此を離るれば、下劣なる信解の諸の聲聞等は應に成熟せざるべきに由る。[二九]「多く爲め」と言ふは、應に知るべし、勝解行地の諸の菩薩衆をも攝

【二六】能とは隋譯に堪能となせり、釋にいふが如く功能の意なり。

【二七】此の釋に依れば「能の無量なると及び事の成ずる」との偈句の意は「能の無量と及び事成の無量」の意に解すべきなれば、寧ろ隋譯に「堪能と事の成ずるとは量有ること無し」となすが允當なり。

【二八】應頌とは祇夜(geyn)の譯語にして重頌ともいふ、此には十二分經の初の二を擧げて餘を略せるなり。

【二九】論本に「多く聲聞……の爲め」と大約數を擧げたるは、此の中には勝解行地の菩薩をも攝するが故なりとの意。

先に眞の法界に通達せる時、諸の有情の平等心等を得たり。應に知るべし、此の中に究竟清淨なり。「妙觀察智」とは、謂はく[二三]藏主の如く、其の欲する所の如く、何等かの陀羅尼門、三摩地門なるに隨つて、作意し思惟すれば、卽ち自在無礙の智轉ずることを得るなり。「成所作智」とは、謂はく能く覩史多天宮より沒し、乃至涅槃を示現する種々の佛事に皆自在を得るなり。

論曰　復次に法身は幾種の處に由りて應に依止すること知るべきや。略して三處に由る。一には種種の佛住の依止に由る。此の中に二頌有り。

　諸佛は五性の喜を證得す　　皆等しく自界を證するに由るが故なり
　喜を離るるは都て此れを證せざるに由る　　故に喜を求むる者は應に等しく證すべし。
　能の無量なると及び事の成ずると。　　法味と、義と德と倶に圓滿なるとに由り
　喜の最勝にして過失無きを得　　諸佛は常に盡くること無きを見るが故なり。

二には種々の受用身の依止に由る。但諸の菩薩を成熟せんが爲の故なり。三には種々の變化身の依止に由る、多く聲聞等を成熟せんが爲の故なり。

釋曰　應に知るべし、法身は幾くの法の依止なるや。略して三種有り、廣說すれば無量なり。「種々の佛住の依止に由る」とは、謂はく佛は[二四]聖住と天住と及び梵住とに安住するが故に、種々と言ふ。法身は此の諸住の所依と爲る。是の故に說いて佛住の依止と名く。或は謂はく、[二五]何ぞ諸佛は涅槃することを用ふるや。聲聞等と諸の如來との解脫は等しきを以ての故に、と。諸佛の解脫の殊勝を顯はさんが爲に二の伽他を說く。「諸佛は五性の喜を證得す、皆等しく自界を證するに由るが故なり」とは、謂はく諸の如來の得る所の五喜は、法界を證するに由る。「喜を離るるは都て此を證せざるに由る」とは、謂はく聲聞等の五種の喜を離るるは、都て此の眞の法界を證せざるに由る。「故に喜を求むる者は、應に等しく證すべし」とは、是の故に此の如きの喜を求めんと

【二三】此の句の意は譬へば、倉庫の主が其の中の物を何時にても自由に得らるゝが如く、諸の法門に於て欲するに隨つて時と法とを問はず之を得らるゝ如き智をいふ。隋譯に「典庫の者の如く、陀羅尼門、三摩提門に於て、何の時に於て、何の法をと作意し思惟するに隨つて、彼の中に於て智行無礙なるが故に」とありて意義一層明了なり。

【二四】聖住等は無性釋に解釋せり。參照。

【二五】此の間は次の頌句を釋せんが爲に假設せるなり、文意稍解し難し、隋譯には「諸佛は何ぞ化身を現することを須ゆるや、諸の聲聞は此を證せざる以ての故に五喜を離る」と頌意を明かせり、陳譯參照。

衆を引攝すると、白法を引攝するとの自在に由る。行蘊の依を轉ずるに由るが故なり。五には圓鏡と、平等と、觀察と、成所作との智の自在に由る。識蘊の依を轉ずるに由るが故なり。

釋曰 [18]今次に應に法身の自在を顯はすべし。色等の五蘊の依を轉ずるに由るが故に、五の自在を得。此の中、色蘊の依を轉ずるに由るが故に、佛土を示現する自在を證得す。此に由りて金銀等の寶の淨妙なる佛國を示現し、亦其の欲する所に隨ひて自身を示現する自在を得。此に由りて大集會の中に、諸の有情の勝解の樂ふ所に隨ひて種々の色身を示現し、又樂ふ所に隨ひて能く種々の相好を現ずること自在なり。又無邊の音聲を現ずること自在なり。又[19]無見頂相を現ずること自在なり。受蘊の依を轉ずるに由るが故に、[20]無罪なる無量廣大の樂住に住する自在を得とは、謂はく自在を得て、能く無罪なる無量廣大の樂住に住するなり。應に知るべし。此の中、衆多に由るが故に說いて「無量」と名け、普く一切の三界の樂を超ゆるが故に、說いて「廣大の樂住の自在」と名く。想蘊の依を轉ずるに由るが故に、名身と句身と文身とに於て攝說する自在を得とは、能取の相なるを以ての故に、名けて想と爲す。名身等に由りて能く其の相を取る。染の想蘊を轉じて還つて是の如きの清淨の想蘊を得るなり。行蘊の依を轉ずるに由るが故に、現化と變易と大衆を引攝するとの自在を得とは、應に知るべし、此の中、其の欲する所に隨つて所作を示現するが故に、現化と名く。地等を改め轉じて金等を成ぜしむるが故に、變易と名く。意の樂ふ所の如く、能く天龍[21]藥叉等の衆を引くを、應に知るべし、說いて大衆を引攝すと名く。意の樂ふ所に隨つて諸の白法を引いて現在前せしむるを、應に知るべし、說いて白法を引攝すと名く。識蘊の依を轉ずるに由るが故に、大圓鏡智と平等性智と妙觀察智と成所作智とを得とは、此の中、「大圓鏡智」とは、謂はく忘失すること無き法にして、所知の境界は、現前せずと雖も亦能く記了す、[22]善く書論を習誦する者は先より明かなるが如し。「平等性智」とは謂はく

【一八】此の一段の釋文は論本の如く五蘊を轉して四智を得ること明かせり、但無性釋に於ては尙外に一般の解釋の如く、八識を轉じて四智を得ることを說く、參照。

【一九】無見頂相とは其の頂を見ること能はざる如き廣大の佛身をいふ。

【二〇】無罪とは煩惱なきこと、隋譯には「譏嫌無き」といひ、陳譯には「失無き」といへり。

【二一】藥叉(Yakṣa)は夜叉にして鬼神のこと。

【二二】善く書論を習誦せる者は現に其の書に對せずと雖も已に明かなるが如しの意なり。

の事は竟るの期無きが故に」。以て今の時に於ても猶無邊に應に作すべき所の事有り。一切の有情は未だ涅槃せざるが故なり。是の因緣に由りて應に知るべし、如來は常住を相と爲す。是の如く說き已つて、應に諸佛の不可思議なることを知るべし。是の因緣に由りて不可思議なることを今當に顯示すべし。

論曰　五には不可思議を相と爲す。謂はく眞如淸淨にして自の內證なるが故に、世間の喩の能く喩ふるもの有ること無きが故に、諸の尋思の所行の處に非ざるが故なり。

釋曰　「自の內證なるが故に」とは、謂はく[一五]諸の如來は自ら內に證する所にして、此れ眞如自らの內證に由るが故なり。諸の尋思に思議せらるゝ處に非ず、諸の世間に於ては、亦此れと相ひ似たる譬喩の、喩へて知らしむべきもの無し。

論曰　復次に云何が是の如き法身を最初に證得するや。謂はく總相の大乘の法境を緣ずる無分別智と及び後得智とを、[一六]五相にして善く修し、一切の地に於て、善く資糧を集め、金剛喩定にて、微細にして破し難き障を破滅するが故に、此の定の無間に一切の障を離る。故に轉依を得。

釋曰　今次に應に法身を證得することを說くべし。[一七]「最初より證得す」とは、此の法身は生起する所に非ざることを顯はす。體無爲なるが故なり。若し生起する所ならば應に是れ無常なるべし。「金剛喩定」とは、此の三摩地は譬へば金剛の如く、能く微細にして破し難き障を破するが故なり。「故に轉依を得」とは、金剛喩の三摩地に由るが故に、能く轉依を證し、法身を逮得するなり。

論曰　復次に法身は幾くの自在に由りて自在を得るや。略して五種に由る。一には佛土と、自身と、相好と、無邊の音聲と、無見頂相との自在に由る。色蘊の依を轉ずるに由るが故なり。二には無罪なる無量廣大の樂住の自在に由る、受蘊の依を轉ずるに由るが故なり。三には一切の名身と、句身と、文身とを辯說する自在に由る、想蘊の依を轉ずるに由るが故なり。四には現化と、變易と、大

【一五】此の句は隋譯釋論には「諸佛は自ら彼の體を證するが故に、彼の體は唯自證のみに由るが故に」となせり、彼の體とは此に云ふ眞如なり。

【一六】五相とは修行位の五相にして前の修差別の章に說けり。

【一七】最初より證得すとは釋文に示すが如く、時に約して初起をいふにあらず法身の體に約して無爲なるが故に無始法爾の證得なることを示す、陳譯釋論參照。

らざるが故に、中に於て別の依無し」とは、謂はく世間[一三]に於ては、我執の力の故に別の依身有るも、此の中には我執は都て有ること無きが故に、別の依身無し。若し所依の身に差別有ること無ければ、云何にして多佛有りと許すことを得るや。「前の能證の別に隨ふ、故に異り有ることを施設す」とは、多くの依身に由りて各證得する所なるが故に差別有り。此の義を顯はさんが爲に、復伽他を說く。「種姓異るが故に」とは、謂はく諸の菩薩の種姓の差別には多種有るが故なり。「虛に非ざるが故に」とは、種姓異るが故に加行も亦異る。加行異るが故に資糧の圓滿も亦多種有り、是の因緣に由りて、若し唯一佛のみならば餘の者の資糧は應に虛無の果なるべし。「圓滿の故に」とは、諸佛は具さに一切の有情の利益等の事を作す。謂はく正しく三乘等に安立す。[一四]若し如來は有情を安じて佛乘に置かずと執すれば、所作の佛事も應に圓滿せざるべし。此の道理に由りて應に多佛を許すべし。「初無きが故に」とは、彼の生死流轉に初無きが如く、諸佛も亦爾なり。若し唯一有るのみならば、卽ち應に初有るべし。是の故に一ならず。「無垢の依には別無し」とは、佛は無垢の法界を依と爲すに由りて差別無きが故に。多種有ること無し。「故に、一に非ず多に非ず」とは、此の道理に由りて諸佛は一多の相に非ざることを顯示す。

論曰　四には常住を相と爲す。謂はく眞如清淨の相なるが故に、本願の引く所なるが故に、應に作すべき所の事は竟るの期無きが故なり。

釋曰　三の因緣に由りて常住の相を顯はす。「眞如清淨の相なるが故に」とは、清淨の眞如は體是れ常住なり、成佛を顯はすが故に、應に知るべし、如來は常住を相と爲す。「本願の引く所の故に」とは、謂はく昔願を發して常に一切有情の利樂を作さんとす。證する所の佛身は此の願の引く所なり。此の本願は空しくして果無きに非ざるに由り、應に知るべし、如來は常住を相と爲す。若し如來の所作なる、一切の有情の利樂は已に究竟すと謂はば、此の義然らず。「應に作すべき所

【一三】隋譯には「世の中に於ては我取の力の故に、身に差別有るも、法身の中に於ては我取有ること無き故に差別無し」とあり、今の釋文よりは解し易し。

【一四】此の句は一佛のみと執すれば佛自らの外に他の佛有ること許されざるが故に、他の者を佛乘に置いて佛と成すといふこと無し、然らば佛の化他の事業は圓滿せざるべしの義なり、隋譯には「若し諸佛は唯佛乘のみを以て衆生を安立すれば所作の佛事に具足せず」とあり、釋意今と異りて三乘を說くことを理由となせり。

能く他心等の事を了知するなり。是に由り說いて「五通の所攝」と言ふ。「智の自在と法の自在とは般若波羅蜜多の圓滿するに由るが故に」とは、謂はく遍く一切の[六]爾炎を了知するを「智の自在」と名け、其の欲する所の如く、能く正しく契經等の法を安立するを「法の自在」と名く。[七]又慧の力に由りて蘊等の一切法の體を安立するを「智の自在」と名け。此の後に得る所の一切の種智を「法の自在」と名く。

論曰 三には無二を相と爲す、謂はく有無の二無きを相と爲す。一切の法には所有無きに由るが故に、空所顯の相は是れ實有なるが故に、有爲と無爲との二無きを相と爲す。業煩惱の爲す所に非ざるに由るが故に、自在に有爲の相を示現するが故に、異性と一性と二無きを相と爲す。一切の佛の所依は差別無きに由るが故に、無量に相續して等覺を現ずるが故なり。此の中に二頌有り、

我執は有ならざるが故に　中に於て別の依無し
[八]前の能證の別に隨ふ　故に異り有ることを[九]施設す。
種性の異るは虛に非ず　圓滿にして初め無きが故に
無垢の依には別無し　故に一に非ず多に非ず。

釋曰 「有無の二無きを相と爲す」とは、謂はく一切法の遍計所執性の相は、有に非ざるが故に、有相に非ず。空の顯示する所の圓成實性は、其の體は實に有なるが故に、無相に非ず。「有爲と無爲との二無きを相と爲す」とは、是れ有爲の自性に非ず、無爲の自性に非ざる義なり。業煩惱の所生に非ざるが故に、有爲の相に非ず。[一〇]有爲の中に於て、大自在を得て、[一一]數々示現するを有爲の相と名く。此の意趣に由りて無爲の相に非ず。「異性と一性との二無きを相と爲す」とは、所依の法身は差別無きが故に、是れ異相に非ず。無量の依止の證得する所なるが故に、是れ一相に非ず。[一二]倶一は無なる故に、無二の相と名く。復伽他を以て是の如きの義を顯はす。我執は有な

【六】爾炎(Jñeya)。智境、智母等と譯し、智を生ずる對境をいふ。
【七】隋陳兩譯釋論には次の釋のみありて前の釋を缺ぐ。
【八】此の二句は諸譯不同、隋譯には「前後次第に證す、假りに名けて差別を說く」となし、陳譯には「前の多依の證の如く、假に名けて不一と說く」となし、魏譯には「是れ彼の本願の故に、分別して名を立つることを得」となせり。
【九】施設すとは前二句に示すが如く體性一なるに、而も別異の相を立つるが故に施設すといふ、假に立つるの義なり。
【一〇】世間に現して攝化自在の示現なればなり。
【一一】數々は隋譯に「處處に」といふ。
【一二】倶に一とはいづれかの一方の意、隋譯には「此の二の中に於て偏へに說くべからざるが故に」となせり。

るに隨ひて幾の時を齊りて住し、便ち能く意の如く己身を示現するなり。「心の自在」とは、謂はく生死の中にも能く染汚無きなり。「衆具の自在」とは、謂はく食等の十種の衆具に於て、其の欲する所に隨ひて、意の如く能く得るなり。頌に言へる有るが如し、

諸の菩薩の思惟は　　若くは淨若しは不淨なる
一切を美妙と成すは　　皆意の自在に由る。

應に知るべし、是の如き三種の自在は皆布施波羅蜜多の圓滿を因と爲すに由る。「業の自在と生の自在とは戒波羅蜜多の圓滿するに由るが故に」とは、謂はく此れ能く彼の能生の因と及び所生の果とを攝するが故なり。應に知るべし、此の中「業の自在」とは、身と語との業の、自在に轉ずるに由りて、欲する所に隨つて生ずる業現前するが故なり。「生の自在」とは、應に知るべし、生に於て自在に轉じ、諸趣等に於て其の欲する所に隨ひて生を攝受するが故なり。此の道理に由りて、尸羅を修すれば、其の業因に於ても、及び生果に於ても皆自在を得ることを顯はす。「勝解の自在は忍波羅蜜多の圓滿するに由るが故に」とは、謂はく諸法をして皆心に隨つて轉じて勝解に隨逐せしめ、勝解する所の如く一切の事を成ず。欲する所に隨ひて地等を轉變して金等を成ぜしめ、水等を轉變して火等を成ぜしむるが如く、忍を修する時は、諸の有情の意の所樂に隨つて轉ずるを以ての故に、一切の法に於て皆心に隨つて轉ずることを獲得せしむ。「願の自在は精進波羅蜜多の圓滿するに由るが故に」とは、謂はく精進を修して一切の所作を皆能く究竟するが故に、思ふ所の事を一切皆成ず。應に知るべし、昔精進を修する時に在りて、作す所の事に隨つて皆能く究竟し、中[五]に懈廢すること無し。此を因と爲すに由りて、今願ふ所に隨ひて意の如く皆成ず。「神力の自在とは五通の所攝にして、靜慮波羅蜜多の圓滿するに由るが故に」とは、謂はく靜慮に由りて心に堪能有り、種々の神通の所作を引發す。但此に由りて空を淩ぎて往來するのみに非ず、亦

【五】中には中途の意、懈廢とは怠懈し又は全く廢止すること。

能く他心等の事を了知するなり。是に由り說いて「五通の所攝」と言ふ。「智の自在と法の自在とは般若波羅蜜多の圓滿するに由るが故に」とは、謂はく遍く一切の[六]爾炎を了知するを「智の自在」と名け、其の欲する所の如く、能く正しく契經等の法を安立するを「法の自在」と名く。[七]又慧の力に由りて蘊等の一切法の體を安立するを「智の自在」と名け。此の後に得る所の一切の種智を「法の自在」と名く。

論曰 三には無二を相と爲す、謂はく有無の二無きを相と爲す。一切の法には所有無きに由るが故に、空所顯の相は是れ實有なるが故に、有爲と無爲との二無きを相と爲す。業煩惱の爲す所に非ざるに由るが故に、自在に有爲の相を示現するが故に、異性と一性と二無きを相と爲す。一切の佛の所依は差別無きに由るが故に、無量に相續して等覺を現ずるが故なり。此の中に二頌有り、

我執は有ならざるが故に　中に於て別の依無し
[八]前の能證の別に隨ふ　故に異り有ることを[九]施設す。
種性の異るは虛に非ず　圓滿にして初め無きが故に
無垢の依には別無し　故に一に非ず多に非ず。

釋曰 「有無の二無きを相と爲す」とは、謂はく一切法の遍計所執性の相は、有に非ざるが故に、有相に非ず。空の顯示する所の圓成實性は、其の體は實に有なるが故に、無相に非ず。「有爲と無爲との二無きを相と爲す」とは、是れ有爲の自性に非ず、無爲の自性に非ざる義なり。業煩惱の所生に非ざるが故に、有爲の相に非ず。[一〇]有爲の中に於て、大自在を得て、[一一]數々示現するを有爲の相と名く。此の意趣に由りて無爲の相に非ず。「異性と一性との二無きを相と爲す」とは、所依の法身は差別無きが故に、是れ異相に非ず。無量の依止の證得する所なるが故に、是れ一相に非ず。[一二]倶一は無なる故に、無二の相と名く。復伽他を以て是の如きの義を顯はす。我執は有な

【六】爾炎(Jñeya)、智境、智母等と譯し、智を生ずる對境をいふ。
【七】隋陳兩譯釋論には次の釋のみありて前の釋を缺ぐ。
【八】此の二句は諸譯不同、隋譯には「前後次第に證す、假りに名けて差別を說く」となし、陳譯には「前の多依の證の如く、假に名けて不一と說く」となし、魏譯には「是れ彼の本願の故に、分別して名を立つることを得」となせり。
【九】施設すとは前二句に示すが如く體性一なるに、而も別異の相を立つるが故に施設すといふ、假に立つるの義なり。
【一〇】世間に現して攝化自在の示現なればなり。
【一一】數々は隋譯に「處處に」といふ。
【一二】倶に一とはいづれかの一方の意、隋譯には「此の二の中に於て偏へに說くべからざるが故に」となせり。

に由りて生死に於て捨つるに非ず捨てざるに非ず」等とは、諸有の生死は卽ち是れ涅槃なり、是の故に捨てず。卽ち是れ別に捨つべきの義有ること無し。卽ち其の中に於て無性を見るが故なり。諸の雜染を離るるを「捨てざるに非ず」と名く。旣に是の如きを得れば「亦卽ち涅槃に於て得るに非ず、得ざるに非ざるなり」。生死を離れて外に別の涅槃として證得すべきもの無きが故に、「得るに非ず」と名く。復其の中に於て寂靜を見るが故に、性として別なるもの無しと雖も、而も涅槃を證す。是を「得ざるに非ず」と名く。

彼果智分第十一の一

論曰　是の如く已に彼の果斷の殊勝なることを說けり。彼の果智の殊勝なるは云何が見るべきや。謂はく三種の佛身に由りて應に彼の果智の殊勝なることを知るべし。一には自性身に由る、二には受用身に由る、三には變化身に由る。此の中、自性身とは、謂はく諸の如來の法身なり。一切の法の自在に轉ずる所依止なるが故に。[一]受用身とは、謂はく法身に依り、種々なる諸佛の衆會に顯はる所にして、清淨なる佛土にて、大乘の法樂を所受と爲すが故に。變化身とは、亦法身に依り、覩史多天宮より現沒して、生を受け、欲を受け、城を踰えて出家し、外道の所に往きて諸の苦行を修し、大菩提を證し、大法輪を轉じ、大涅槃に入るが故なり。

釋曰　今當に果智の殊勝なるを解說すべし。此れ諸佛の三身の所顯に由る。「自性身」とは、謂はく諸の法界より流るる所の法樂にして、大自在に轉ずる所依止なり。「受用身」とは、謂はく卽ち前に說く所の法身に依り、種々の諸佛の衆會に顯はるる所にして、諸の淸淨の佛國土の中に於て一切の法界より流るる所の大乘經等の種々の法樂を受用する所依止なり。復餘義有り、謂はく是れ清淨なる佛土を受用する所依止にして、又是れ大乘の法樂を受用するの所依止なり。「變化

【一】此の一節は隋譯に「受用身とは此れ諸佛の種々の大集輪を顯はす、法身を依止と爲し、淸淨なる佛刹の中にて、大乘法の果報を受用するが故に」となせり。

諸の菩薩は妄を捨てて　一向に眞實を顯はす、
應に知るべし顯と不顯とは　眞義と非眞義とにして
轉依するは卽ち解脫なり　[9]欲するに隨ひ自在に行ず、
生死と涅槃とに於て　若し平等智を起さば
爾の時此に由りて　生死卽ち涅槃なりと證す、
是に由りて生死に於て　捨つるに非ず捨てざるに非ず
亦卽ち涅槃に於て　得るに非ず得ざるに非ず。

釋曰　轉依を顯はさんが爲の故に多頌を說く。諸の凡夫の如きは、無明に由るが故に眞實を覆障し、一切種の有らゆる虛妄を顯はす。是の聖者の如きは、無明を斷ずるが故に虛妄を捨離し、一切種の有らゆる眞實を顯はす。此の道理に由りて、「應に知るべし、顯と不顯とは眞義と非眞義となり」とは、遍計所執は非眞にして轉ぜず。圓成實相は眞義にして轉ずるが故なり。「轉依する」と言ふは、此れ卽ち此の位の中に於て轉依して眞義現行し、非眞實の義現行せざるが故なり。「卽ち解脫なり」とは、卽ち此の轉依は解脫と相應するなり。「欲するに隨ひて自在に行ず」とは、謂はく此の解脫は其の欲する所に隨ひて自在に行じ、[10]聲聞の得る所の解脫の猶首を斬るが如く、畢竟して般涅槃に安住するが如きに非ざるが故なり。「生死と涅槃とに於て若し平等智を起さば」等とは、謂はく生死に於て及び涅槃に於て平等の智を起す、此の二種は別の性無きに由るが故に卽ち此の時に於て(といふ)は是れ「爾の時」の義なり。又此の二種は云何が平等なりや。諸の雜染を以て名けて生死と爲し、雜染法に卽する無我の性を名けて涅槃と爲す。菩薩は諸法の無我に通達して平等の智を生じ、彼の諸法は皆無自性なることを見る。諸有の生死は卽ち是れ涅槃なり。[11]其の中に於て極寂靜卽ち涅槃を見るを以ての故なり。若し是の如く知らば復何の得る所ぞ。「是

【九】此の句は隋譯には「解脫如意と名く」となし、陳譯には「解脫は意の如くなるが故に」となせり。

【一〇】此の句は聲聞の灰身滅智と異りて、今の解脫は方便善巧の智に依りて意のまゝに世間に出でゝ自在に利生の行をなすの意。

【一一】其の中とは生死の中の意。

習に住するに由るが故に」とは、謂はく勝解行の地に住して、聞熏習の力を安立するが故に、此の轉依を得となり。「及び慚羞有るに由る等」とは、此の位の中に於て、若し煩惱現行すれば卽ち深く羞恥し、或は少分現行し或は全く現行せず。「通達轉」とは、謂はく[四]地に入る時に得る所の轉依なり。「眞實と非眞實とに於て」等とは、謂はく此の轉依は[五]乃至六地までに、或時は眞實の顯現する因と爲り、[六]或時は出觀して非眞實の顯現する因と爲る。「修習轉とは、謂はく猶障有り」とは、所知障に由りて說いて障有りと名く。「一切の相顯現せず」等とは、謂はく此の轉依は乃至十地までにして、一切の有相は復顯現せず。唯無相眞實の顯現する有るのみなり。「果圓滿轉とは謂はく永へに障無し」とは、一切の障無きに由りて說いて無障と名く。[七]「一切の相顯現せず」とは一切の障無きが故なり。「最も淸淨なる眞實のみ顯現す」とは、卽ち此に由るが故なり。「一切の相に於て自在を得」とは、此を依と爲して相に自在を得るに由りて、其の欲する所に隨ひて有情を利益す。「下劣轉とは、謂はく聲聞等なり」。等とは獨覺を等取す。唯能く一の空無我に通達するのみにして、他を利すること能はざるが故に、是れ下劣なり。「廣大轉とは、謂はく諸の菩薩等」とは、並に二空無我に通達して此の中に安住し、諸の雜染を捨て生死を捨てず、兼ねて自他を利するに由るが故に、是れ廣大なり。「下劣轉に住するに何の過失有りや」等とは、有情を顧みず、菩薩の法を越え、下劣乘と同じ、是を過失と爲す。「廣大轉に住するに何の功德有りや」等とは、自の轉依を以て所依止と爲し、一切の法に於て自在を得るが故に、一切趣に於て一切同分の身を示現し、[八]最勝の生及び三乘の中に於て、種々に調伏する方便巧智にて、化する所の難調の有情を安立す。是を功德と爲す。此の中の意は世間の富貴を取りて最勝の生と爲す。

論曰　此の中多頌有り。

諸の凡夫は眞を覆ひて　一向に虛妄を顯はし

【四】地に入るとは十地位に入ること。

【五】乃至六地とは初地より六地に至る間なり。

【六】或時云云とは此の觀に入る時は眞智顯現するも、觀を出づる時は散心に歸るが故に虛妄顯現すとなり。

【七】一切の相とは一切の差別の相なり。

【八】最勝の生云云とは世間の果報としては最勝の生を得しめ、世出間の果報としては三乘道に依りて敎化して證果を得しむるの意。隋譯には「世間の果報及び三乘の中」となし、陳譯には「世間の富樂に於て及び三乘に於て」となせり、安立すとは最勝の生と三乘の中とは安立するの意。

謂はく此の轉依に住する時は、煩惱を容れず生死を捨てず、是れ此の轉依の相なり。何者か生死なりや。謂はく依他起の雜染性の分なり。何者か涅槃なりや。謂はく依他起の清淨性の分なり。何者か依止なりや。謂はく二分に通ずる所依の自性なり。何者か轉依なりや。謂はく卽ち此の性の對治生ずる時、雜染分を捨てゝ清淨分を得るなり。

論曰　又此の轉依に略して六種有り。一には損力益能轉、謂はく勝解力の聞熏習に住するに由るが故に、及び羞恥有りて諸の煩惱をして少分現行し、(或は)現行せざらしむるに由るが故なり。二には通達轉、謂はく諸の菩薩は已に大地に入り、眞實、非眞實に於て顯現し[一]顯現せずして現前に住するが故に、乃至六地までなり。三には修習轉、謂はく猶障有りて一切の相は顯現せず。眞實のみ顯現するが故に。乃至十地までなり。四には果圓滿轉、謂はく永へに障無く、一切の相顯現せずして、最も清淨なる眞實のみ顯現し、一切の相に於て自在を得るが故に。五には下劣轉、謂はく聲聞等は唯能く補特伽羅の空無我性に通達するのみにて、一向に生死に背き、一向に生死を捨つるが故に。六には廣大轉、謂はく諸の菩薩は兼ねて法空無我性に通達して、卽ち[二]生死に於て見て寂靜と爲すが故に、雜染を斷ずと雖も而も捨てざるが故なり。若し諸の菩薩は下劣轉に住すれば何の過失有りや。一切の有情の利益安樂の事を顧みざるが故に、[三]一切の菩薩の法に違越するが故に、下劣乘と解脫を同じくするが故に、是れを過失と爲す。若し諸の菩薩は廣大轉に住すれば何の功德有りや。生死の法の中にて自の轉依を以て所依止と爲し、自在を得るが故に、一切の趣に於て一切の有情の身を示現し最勝なる生と及び三乘の中とに於て、種々の調伏する方便善巧にて化する所の諸の有情を安立するが故に。是れを功德と爲す。

釋曰　又此の轉依に略して六種有り。「損力益能轉」とは、謂はく阿賴耶識の中の煩惱の熏習力を損減するが故に、彼の對治の功能を增益するが故に、此の轉依を得るなり。「謂はく勝解力の聞熏

【一】「顯現せず」の一語は他の譯になし、且らく隋譯に見るに「眞實と不眞實と顯現して前に在るが故に」とある、蓋し非眞實の顯現する時は眞實は自ら隱るゝが故に、意義に於て異ることなし、釋文參照。

【二】此の句は隋譯に「生死は卽ち是れ寂靜なりと見る」となせり。

【三】此の二句は隋譯に「菩薩の法は應に下乘を超過すべきに、其の解脫を同うす、此は是れ過失なり」とありて前句を理由としての歸結となせるが故に文頗る允當なり、釋論亦之に準ず、但し隋譯には此の句の釋文を缺く。

順せしめ、彼を富貴にして厭離を生ぜざること勿らしめん、と。此の道理に由りて自在を得と雖も財位を施さゞるなり。「彼の有情は若し財位を施せば、即ち爲に不善の法の因を積集すと見るが故に」とは、謂はく復餘の補特伽羅有り、菩薩彼れを見るに、[二九]乃至貧窮なるも常に諸の不善法を積集せず、是の思惟を作さく、寧ろ彼を貧窮にして諸惡を造らさらしめ、彼をして富貴にして諸の不善を集むること勿らしめん、と。此の道理に由りて自在を得と雖も財位を施さゞるなり。「彼の有情は若し財位を施せば、即ち餘の無量の有情を損惱する因を作すと見るが故に」とは、謂はく復餘の補特伽羅有り、菩薩彼れを見るに、大財位を得れば即ち無量の有情を苦惱す。是の思惟を作さく、寧ろ彼をして一身に獨り貧賤を受けしめ、彼を富貴にして其の餘の無量の有情を損惱すること勿らしめんと。此の道理に由りて自在を得と雖も財位を施さゞるなり。此の義を顯はさんが爲に復伽他を說く、謂はく有情に業障有るを見るが故に、善を生ずることを障ふるが故に。厭を現前するが故に、惡を積集するが故に、他を損惱するが故に、菩薩の彼に財位を施すことを[三〇]感ぜず。是の故に現に匱乏の有情有り。此れ略して義を顯はす。餘の廣きことは了じ易し。

果斷分第十

論曰　是の如く已に增上慧の殊勝なることを說けり。彼の果の斷の殊勝なることは云何が見るべきや。斷とは、謂はく菩薩の無住涅槃にして、雜染を捨てゝ生死を捨てず、二の所依止の轉依を以て相と爲す。此の中、生死とは謂はく依他起性の雜染分なり。涅槃とは、謂はく依他起性の清淨分なり。二の所依止とは、謂はく二分に通ずる依他起性なり。轉依とは、謂はく即ち依他起性の對治の起る時、雜染分を轉捨して清淨分を轉得するなり。

釋曰　「無住涅槃にして、雜染を捨て、生死を捨てず、二の所依止の轉依を以て相と爲す」とは、

【二九】乃至とは疾病、災害等の種々の不幸を乃至す。

【三〇】感ぜずとは感得せずの意。

せば善法を生ずることを障ふることを見るが故に、彼の有情は、若し財位乏しければ厭離現前することを見るが故に。彼の有情は、若し財位を施せば即ち爲に不善の法の因を積集することを見るが故に。彼の有情は、若し財位を施せば即ち餘の無量の有情を損惱する因を作すことを見るが故に。是の故に現に諸の有情は財位を匱乏すること有るを見るなり。此の中に頌有り、

業と障と現前と　　積集と損惱とを見るが故に
現に諸の有情は　　菩薩の施を感ぜざる有り。

釋曰　此の中には、是の因緣に由りて菩薩は財位自在を得と雖も、大悲を具足して而も有情に財位を施與せざることを顯示す。「彼の有情は諸の財位に於て重き業障有ること見るが故に」とは、謂はく諸の有情には菩薩の神力を障ふる惡業有り、彼の惡業に由りて菩薩の無障礙の智を障礙す。此を見るに由るが故に、[二六]堪能有りと雖も、(また)彼れ匱乏すと雖も而も便ち棄捨す。此の中、應に餓鬼と江の喩を引くべし。江に水有り、飮むことを障ふる者無し、然も諸の餓鬼は自の業の過に由りて飮むことを得る能はざるが如し、此も亦是の如し。江は菩薩に喩へ、財位は水に喩へ、鬼は有情に喩ふ。彼の餓鬼は江の中の淨水を飮用すべからざる如く、是の如く有情も菩薩の財位を受用すべからず。「彼の有情は若し財位を施せば善法を生ずることを障ふるを見るが故に」とは、謂はく復餘の補特伽羅有り、業障無しと雖も、菩薩彼れを見るに[二七]相續の中に於て當に善法を生ずべし。若し財位を施せば、富樂を受くるが故に彼の善を生ずることを障ふ。是の思惟を作さく、寧ろ彼をして貧賤に順じて善法を生せしめ、彼を富貴にして善法を生ずることを障ふる勿らしめんと。此の道理に由りて自在を得と雖も財位を施さゞるなり。「彼の有情は若し財位乏しければ厭離現前することを見るが故に」とは、謂はく復餘の補特伽羅有り、菩薩彼れを見るに、貧賤に由るが故に[二八]厭離を現前す、是の思惟を作さく、寧ろ彼を貧賤にして厭離を現前し善法に隨

[二六] 堪能有とは菩薩に施與する能力ありとの意。

[二七] 相續の中とは現生の相續する間との意。

[二八] 厭離とは生死を厭ひ離れんと欲する求道の心なり、

諸の大悲を體と爲し　　五相の勝智に由りて
[二〇]世と出世との滿の中にて　　此を最も高遠なりと說く。

釋曰　此の中には、聲聞等の智と菩薩の智との五相の差別を顯示す。「無分別の差別」とは、謂はく聲聞等は蘊等を緣じて分別識を生ずるも、菩薩の智は蘊等を分別するに非ず。「少分に非ざる差別」とは、謂はく三種の少分の性に非ざることを顯はす。一には達する所の眞如は少分の性に非ず。二には所知の境界は少分の性に非ず。三には度する所の有情は少分の性に非ず。達する所の眞如は少分の性に非ずとは、謂はく、菩薩の智は具足して補特伽羅と法との無我の性に通達するも。聲聞等の智は眞如に入る時、能く補特伽羅の無我の性に通達するのみなり。所知の境界は少分の性に非ずとは、謂はく菩薩の智は普く一切の所知の境を緣じて生ずるも、聲聞等の智は、唯[二一]苦等の諸諦のみを緣じて生ず。度する所の有情は少分の性に非ずとは、謂はく菩薩の智は普く一切の有情を度脫せしめんが爲に、勤めて菩提に趣かんとするも、聲聞等の智は唯自利のみを求む。「無住の差別」とは、謂はく菩薩の智は正しく無住涅槃に安住せんが爲なるも。聲聞等は非ず、是の故に差別す。「畢竟の差別」とは、謂はく聲聞等は無餘依涅槃界の中に於て一切を滅盡するも、菩薩は此の涅槃界の中に於て功德無盡なり、是の故に差別す。「無上の差別」とは、謂はく聲聞等の上には大乘有るも、其の菩薩乘には復上有ること無し、是の故に差別す。此の義を顯はさんが爲に一伽他を說く。「世と出世との滿の中」とは、謂はく色と無色界との世間の滿の中に於てと、及び聲聞乘等の出世の滿の中に於てとなり。

論曰　[二二]若し諸の菩薩は、是の如きの增上の尸羅と、增上の[二三]質多と、增上の般若とを成就して、功德圓滿すれば諸の[二四]財位に於て大自在を得るに、何が故に[二五]現に諸の有情は財位を匱乏すること有るを見るや。彼の有情は、諸の財位に於て重き業障有るを見るが故に。彼の有情は、若し財位を施

【二〇】此の二句は諸譯同じからず、隋譯には「世出世の果報は、當に知るべし遠しと爲さず」となし、陳譯には「世出世の富樂は、此を說いて遠しと爲さず」とあり、而して陳譯釋論に由るに「此の果は意の如く得易きが故に遠しと爲さず」といへり、魏譯亦これと同意にして「世間出世の勢に、久しからずして當に現することを得べし」となせり、獨り此の譯のみは世出世の滿にて之を最も高遠なりといひ、其の讚勝の意を異にせり、前の論本の趣旨より歸結すれば本譯最も適切なり、陳譯參照、滿の中とは釋文なきも至極圓滿の果といふ意なるべし。
【二一】苦等とは苦集滅道の四聖諦のこと。
【二二】此の一段は陳譯と比較するに趣意異らずと雖、文に長短あり、參照。
【二三】質多(citta)は心と譯す。
【二四】財位とは資財と地位。
【二五】現にとは現實にはの意。

を知らしめんと欲するが爲の故に、彼の文を顯示す。「外道の我執する處を遠離す」とは、謂はく外道の如きは般若の中に住して我々所を執し、是の如きの念を作さく、「我能く般若に住す、般若は是れ我所なり」と。菩薩は爾らず。是の如き諸の外道の輩の我執する處を遠離するが故に。應に知るべし說いて非處と相應して般若波羅蜜多に安住すと名く。「未だ眞如を見ざる菩薩の分別する處を遠離す」とは、謂はく未だ眞如を見ざる菩薩の如きは、無分別の般若波羅蜜多の中に於て、此は是れ般若波羅蜜多なりと分別す。菩薩は是の如き分別を遠離す。應に知るべし說いて非處と相應して般若波羅蜜多に安住すと名く。「生死と涅槃との二邊の處を遠離す」とは、謂はく、世間の如きは生死に安住し、諸の聲聞等は涅槃に安住す。菩薩は爾らずして二邊を遠離す。應に知るべし說いて非處と相應して般若波羅蜜多に安住すと名く。「唯煩惱障を斷ずるのみにて、喜足を生ずる處を遠離す」とは、聲聞等の如きは、唯煩惱障を斷ずるのみにて便ち喜足を生ず。菩薩は爾らず。此の意趣に由りて應に知るべし、說いて非處と相應して般若波羅蜜多に安住すと名く。「有情の利益安樂を顧みず無餘依般涅槃界に於て般涅槃す」。菩薩は爾らず、聲聞の住する所の處に住せず。應に知るべし說いて非處と相應して般若波羅蜜多に安住すと名く。

論曰　聲聞等の智と菩薩の智とは何の差別有りや。五種の相に由りて應に差別を知るべし。一には無分別の差別に由る。謂はく蘊等の法に於て分別無きが故なり。二には少分に非ざる差別に由る、謂はく眞如に通達すると、一切種の所知の境界に入ると、普く一切の有情を度脫せんが爲なるとに於て、少分に非ざるが故なり。三には無住の差別に由る、謂はく無住涅槃を所住と爲すが故なり。四には畢竟の差別に由る、謂はく無餘依涅槃界の中にて斷盡すること無きが故なり。五には無上の差別に由る、謂はく此の上に於て餘乘の此より勝過するもの有ること無きが故なり。此の中に頌有り。

を得る菩薩」とは、已に自在を證得したる菩薩を謂ふ。「勝解の力に由るが故に」とは、願樂の力に由るなり。「欲するが如く地等を成ず」とは、謂はく地等をして金等の相を成ぜしむるは欲するに隨ひて皆成ずとなり。「定を得る者も亦爾なり」とは、餘の聲聞等を謂ひ、「簡擇を成就せる者」とは、已に毘鉢舍那を成滿せるを謂ひ、「智有り」と言ふは、諸の菩薩を謂ひ、「定を得る者」とは、三摩地を得るなり。「一切法を思惟して、[一三]義の如く皆顯現す」とは、謂はく菩薩等の定慧成滿して心を內に攝し、[一二]經等の法義を思惟するが如く如く、是の如く是の如く皆顯現するを得るなり。若し佛を念ずる時は、思念する所に隨ひて彼々の法の中に佛の義を顯現す。色受等を思ふも、應に知るべし亦爾なり。「無分別智行ずれば、諸義は皆現ぜず」とは、謂はく無分別智正しく現行する時は、一切の境の義は皆顯現せず。「當に知るべし義有ること無し」とは、謂はく前に說ける種種の道理に由りて、當に知るべし境の義は實に所有無しとなり。其の識も境の如く亦無きことを顯はさんと欲するが故に、「此に由りて亦識も無し」と言ふ。[一四]所識の境義既に所有無し、此に由りて應に知るべし、[一五]能識も亦無し。此の義は前の所知相の中に分明に已に顯はせるが如し。

論曰　[一六]般若波羅蜜多と無分別智とは差別有ること無し。「菩薩は般若波羅蜜多に安住し、[一七]非處と相應して能く所餘の波羅蜜多に於て修習し圓滿す」と、說けるが如し。云何が名けて非處と相應して修習し圓滿すと爲すや。謂はく五種の處を遠離するに由るが故なり。一には外道の我執の處を遠離するが故に、二には未だ眞如を見ざる菩薩の分別する處を遠離するが故に。三には生死と涅槃との二邊の處を遠離するが故に。四には唯煩惱障を斷ずるのみにて喜足を生ずる處を遠離するが故に。五には有情の利益安樂を顧みず、無餘依涅槃界に住する處を遠離するが故なり。

釋曰　無分別智は卽ち是れ般若波羅蜜多なり。[一八]彼の經の中に、「諸の菩薩は般若波羅蜜多に安住し、非處と相應して能く[一九]所餘の波羅蜜多に於て修習し圓滿す」と說けるに由りて是の如きの義

【一二】經等の法義とは聖敎の文字と義理とを思惟すること。
【一三】如く如くとは次に之を承けて是の如く是の如くと重ねたるが故に是に照應して如く如くと繰返していへるなり。
【一四】所識とは識知せらるもの丶意にして卽ち所緣の境なり。
【一五】能識とは識知する者の意にして能緣の心識なり。
【一六】此の一段は般若卽ち無分別智なること明かし、菩薩は此の般若に依りて、外道小乘の徒が誤認して般若となす處に於て餘の五波羅蜜を修して之を圓滿することを顯はす。
【一七】非處とは般若に非らざるを般若と誤認する個處の意。相應すとは其の非處に依りて、との意、隋魏兩譯には非處を不住と譯せり、蓋し住すべからざる所に住するが故なり。
【一八】彼の經とは陳譯には般若波羅蜜經といひ、魏譯には大品經と明示せり。
【一九】所餘とは般若を除く餘の五波羅蜜をいふ。

自在を得たる菩薩は　　勝解の力に由るが故に
欲するが如く地等を成ず　　定を得る者も亦爾なり。
簡擇を成就せる者と　　智有ると定を得る者とは
一切の法を思惟して　　義の如く皆顯現す。
無分別の智行ずれば　　諸義は皆現ぜず
當に知るべし義有ること無し　　此に由りて亦識も無し。

釋曰「鬼と傍生と人と天と各其の所應に隨ひて」等とは、謂はく傍生に於ては水有る處と見るを、餓鬼は是を陸地の高原と見る。人に於ては糞穢有る處と見らるゝを、猪等の傍生は見て淨妙にして居るべき室宅と爲す。人に於ては淨妙なる飮食と見らるゝを、諸天は見て臭穢不淨と爲す。是の如く衆生は等しき事の中に於て、心に異なることを見るが故に、應に知るべし、境の義は眞實の有に非ず。若し義にして實に無ならば、識も應に境無かるべきや。無境の識有り、去來を縁ずるが如く、夢像を縁ずるが如く、鏡等及び三摩地の所行の影像を縁ずるが如きなり。此の義を顯はさんが爲に一伽他を說く。謂はく「過去に於て」等なり。此の中前半は後半に由りて釋す。其の次第の如く應に其の相を知るべし。別の實境無きに由り、是の故に說いて「無境の識有り」と言ふ。自ら變せるを境と爲すに由り、是の故に說いて「境相は成就す」と言ふ。即ち是れ自ら心の影像を縁ずる義なり。謂はく去來と夢像と二影とを縁ずとは、次第に境相の成就することを安立す。「若し義にして義の性を成ずれば、無分別智無し」とは、若し義にして實に義の自性有らば、是れ則ち應に無分別智無かるべし。[二] 若し無分別智無しと雖もと謂はゞ當に何の失か有るべきや。「此れ若し無ければ、佛果を證得すること理に應ぜず」とは、若し汝無分別智を撥無すれば、是れ則ち應に佛果を證得すべからざるが故に、應に決定して是の如き無分別智有ることを許すべし。「自在

【二】此の句は「若二雖無無分別智一」とありて、雖の一字通し難し、隋譯には明かに「汝若し無分別智無しと言はゞ」となせり此の譯文は寧ろ次の本釋にも相應す。

ゆ。是に由りて名言は宣說すること能はず、諸の世間の智は了知すること能はず。(五)(故に戲論無しといふ)

論曰　後得の無分別智に五種有り、謂はく通達と隨念と安立と和合と如意との思擇の差別の故に。

釋曰　此の後得智の五種の差別とは、一には通達の思擇、二には隨念の思擇、三には安立の思擇四には和合の思擇、五には如意の思擇なり。此の中、通達の思擇とは、謂はく通達する時是の如く思擇す。「我已に通達す」と。此の中、(六)思擇とは意は覺察を取る。隨念の思擇とは、謂はく、(七)此れより出でて憶念に隨つて言く、「我已に無分別性に通達せり」と。安立の思擇とは、謂はく他の爲に此の通達の事を說くなり。和合の思擇とは、謂はく(八)總てを緣する智にて一切の法は皆同一の相なりと觀じ、此の智に由るが故に進趣し轉依す、或は轉依し已つて重ねて此の智を起す。如意の思擇とは、謂はく思ふ所に隨ひて一切意の如し。此の思擇に由りて能く地等を變じて金等を成ぜしむ。如意を得んが爲に此の思擇を起す。是の故に說いて如意の思擇と名く。說いて言へること有るが如し、「思擇に由るが故に便ち如意を得」と。已に無分別智を成立すと雖も、猶未だ成立の因緣を宣說せず。是の故に復多頌を說いて(これを)顯示す。

論曰　復多頌有り、是の如きの無分別智を成立す。

鬼と傍生と人と天と　各其の所應に隨つて
事を等しくして心異るが故に　(九)義は眞實に非ずと許すべし。
過去の事等と　夢像と(一〇)二影との中に於て
所緣は實に非ずと雖も　而も境相は成就す。
若し義にして義の性を成ずれば　無分別の智無し
此れ若し無ければ佛果を　證得すること理に應ぜず。

【五】隋譯の意に依りて此の語を補ふ。

【六】隋譯には思擇を顯示と譯し之を定義して「顯示とは謂く決定し、知るが故に」と、今の覺察の義に相當す、陳譯參照。

【七】隋譯に「若し定より出で已つて憶念して言はく」となす。

【八】隋譯に「一切の法を以て一摶相と爲し、總相攀緣の智」となす。

【九】此の句は隋譯には「故に義の成ぜざることを知る」となし、陳譯には「彼の境界の成することを許す」となし、魏譯には「諸塵の義を成することを得」となせり。其の意は種々に見られたる對境は見らるゝ如きものにあらざれば、見られたる者の相は眞實の相にあらず、又見る者より云へば各自の所見の相有りと許すべしとなり。

【一〇】二影とは釋文に見るが如く、鏡像と定中所現の諸相となり、隋譯には「幷に餘の二影像」とあり。

卷の第九

増上慧學分第九の餘

論曰 此の中、加行の無分別智に三種有り、謂はく因緣と引發と數習とより生ずる差別の故に。

釋曰 此の中、加行の無分別智の三種の差別とは、或は種性の力に由り、或は前生の引發力に由り、或は現在の數習の力に由りて生ずるを得るが故なり。或は種性の力に由るとは、種性を因と爲して生ずることを得るが故なり。前生の引發力とは、前生の中の數習を因と爲すに由りて生ずることを得るが故なり。現在の數習の力とは現在に生ずる[一]士用力を因と爲すに由りて生ずることを得るが故なり。

論曰 根本の無分別智にも亦三種有り、謂はく喜足と無顚倒と無戲論との無分別の差別の故に。

釋曰 此の中、「喜足の無分別」とは、應に知るべし、已に聞思の究竟に到りて、喜足に由るが故に、復分別せざるが故に、喜足の無分別智と名く。謂はく諸の菩薩は異生地に住して、若し聞思の覺慧の究竟を得れば、便ち喜足を生じ、是の念を作して言く、凡そ聞思する所極まりて此に至ると。是の義を以ての故に說いて喜足の無分別智と名く。復餘義有り、應に知るべし、世間にも亦喜足の無分別智有り、謂はく諸の有情は[二]第一の有に至りて見て涅槃と爲し、便ち喜足を生じ是の念を作して言く、此を過ぐれば更ち應に至るべき所の處無きが故にと、(これを)喜足の無分別智と名く。「無顚倒の無分別」とは、謂はく聲聞等なり。應に知るべし、彼等は眞如に通達して[三]無常等の四の無倒の智を得て、[四]常等の四の顚倒の分別無ければ、無顚倒の無分別智と名く。「無戲論の無分別」とは、謂はく諸の菩薩なり。應に知るべし、菩薩は一切の法に於て乃し菩提に至るまで皆戲論無し。應に知るべし、此の智の證する所の眞如は、名言の路を過ぎ世智の境を超

【一】士用力とは人の修行努力の意。

【二】第一の有とは色界の第四の色究竟天をいふ、或は之を有頂天とも稱す、隋譯には「若し有頂の處を得れば見て涅槃と爲す」とあり。

【三】無常等の四とは無常、苦、空、無我なり。

【四】常等の四とは常、樂、我、淨なり、即ち四念處觀のこと。

顯示せんと欲するが爲に、復頌を說いて言く、

論曰

　應に知るべし一切の法は　本性無分別なり
　所分別無きが故に　無分別の智無し。

釋曰 「應に知るべし一切の法は本性無分別なり」とは、是れ一切の法は本來自性に分別の義無し。何を以ての故に、「所分別無きが故に」此れ即ち所分別の事は所有無きが故に、諸法の本性は分別有ること無きを顯示するなり。若し所分別に所有無きが故に、諸法の本性に分別無ければ、何が故に本來一切の有情は解脫を得ざるや。此の問に答へて言はく「無分別の智無し」と。[三九]此れ彼を顯はす、無分別智無ければ、一切の法は本來自性に分別有ること無しと雖も、而も解脫せず、若し諸法の無分別の理に於て、眞證する智生じて、諸法の無分別の性を現見すれば即ち解脫を得。此れ未だ生ぜざるが故に未だ解脫を得ず。眞證の智とは、應に知るべし即ち是れ無分別智なり。今當に此の三智の差別を顯はすべし。

〔三九〕此れ彼を顯はすとは隋譯に「即ち此の句を以て解脫を得ざることを顯示す」といふ。

に此の無分別智の有する所の甚深を顯はすべし。此の智は依他起性を縁ずと爲すや。分別の事の轉ずるは餘境を縁ずと爲すや。若し爾らば何の失ありや。若し分別を縁ずれば無分別の性は應に成ずるを得ざるべし。若し餘境を縁ずれば、餘境は定んで無し。云何が縁ずることを得るや。

論曰

此れに非ず餘に非ず　智に非ずして而も是れ智なり
境と異り有ること無ければ　智は無分別を成ず。

釋曰「此れに非ず餘に非ず」とは、此の智は分別を縁じて境と爲さず、無分別の故なり。餘境を縁ぜず、卽ち依他を縁ず、諸の分別の法は眞如法性を境界と爲すが故なり。法と法性とは若くは一、若くは異なりと說くべからざるが故に。此れ根本無分別智は分別を縁ぜず、亦餘を縁ぜずと說くなり。又此の根本無分別智は智と爲すや、非(智)と爲すや。若し爾らば何の失ありや。若し是れ智ならば、云何が是れ智にして而も是れ無分別なるや。若し非智ならば、云何が說いて無分別智と爲すや。此の問に答へて言く、「智に非ずして而も是れ智なり」と。此れ根本無分別智は定んで是れ智なるに非ざることを顯はす。加行の分別智の中に於ては此れ生ぜざるを以ての故なり。亦非智に非ず。加行の分別智の因より而も生ずることを得るを以ての故なり。復別義有り、「此れに非ず餘に非ず智に非ずして、而も是れ智なり」とは、此の分別に於て轉ずるに非ざるを以ての故に說いて非智と名く。餘に非ずとは、卽ち分別の法性に於て轉ずるを以ての故に而も亦是れ智なり。前後の二句互に相ひ解釋す。「境と異り有ること無ければ、智は無分別を成ず」とは、加行の無分別智の、其の所取と能取との性の轉ずること有るが如きに非ざるを無分別と名く。所取の境と無差別に轉じて平等、平等なるを無分別と名く。此の智は所取と能取との二種の性の中に住せず。薄伽梵の、餘の契經の中に、「一切の法は皆分別無し」と說けるが如し。無分別の義を

人の正しく目を閉づるが如きは　是れ無分別智にして
卽ち彼れ復目を開く　後得智も亦爾なり。
應に知るべし、虛空の如くなるは　是れ無分別智にして
中に於て色像を現ず　後得智も亦爾なり。

釋曰　初頌は二智の差別を顯示す、其の相知るべし。「虛空の如し」とは、譬へば虛空の周遍して染無く、能分別に非ず、所分別に非ざるが如く、是の如く根本の無分別智も、應に知るべし亦爾なり。一切の法に遍せる一味の空性なるが故に、周遍と名く。一切の諸法の染する能はざる所なるが故に染無しと名く。自ら分別無し、是の故に說いて能分別に非ずと名け。亦他の分別の行相と爲らず、是の故に說いて所分別に非ずと名く。是の如く應に知るべし。無分別智は譬へば虛空の如し。色像を現ずるとは、譬へば空中に現ずる所の色像の如く、是れ分別すべし。是の如く後得の無分別智も、應に知るべし亦爾なり。是れ所分別にして亦能分別なり。若し是の如き無分別智を以て、修して佛果を成ずれば、旣に[三六]功用作意の分別を離る。云何が能く諸の有情を利益し安樂にする事を成ずるや。

論曰

末尼と天の樂との如く　思ふこと無くして自の事を成ず
種々の佛事を成ずるに　常に思を離るることも亦爾なり。

釋曰　分別を離れて所作の事を成ずるが如きを、此の頌の中に於て末尼[三七]と天の樂[三八]との譬喩にて顯示す。如意珠は分別無しと雖も、而も能く諸の有情の意に隨つて所樂の事を成辦するが如く。又天の樂は擊奏者無くして、彼の處に生ずる有情の意樂に隨つて、種々の聲を出すが如し。是の如く應に知るべし、諸佛菩薩の無分別智は、分別を離ると雖も而も能く種々の事業を成辦す。次に當

し、此に法と義との二智の如く見ゆるは陳譯に「前の一は無境、後の二は有境、謂く法及義なり」と釋し、次に二智の相異を顯はす。

【三六】　隋譯には「衆生を分別することを離る」となす。

【三七】　末尼（maṇi）は如意寶珠のこと。

【三八】　天の樂とは忉利天の善法聖の前に在る太鼓のこと。

二六 五の義を受けんことを求むるが如く　　五の正しく義を受けたるが如く
二七 末那の義を受けたるが如し　　三智の譬是の如し。
二八 未だ論を解せざると　　論を求むると法と義とを受くるとの如し
次第に三智に譬ふ　　應に知るべし加行等なり。

釋曰 此の中、三智は其の譬喩の如し。應に差別を知るべし、譬へば啞人の境の義を受けんこととを求むるも言說すること能はざるが如し。是の如く加行無分別智も、應に知るべし。亦爾なり。譬へば啞人の正しく境の義を受くるも寂として言說無きが如し。是の如く根本の無分別智も、應に知るべし、亦爾なり。非啞の人の境の義を受け已るが如く、已に其の受けたる所の如く而も言說を起す。是の如く後得の無分別智も、應に知るべし亦爾なり。二九 此の中の意は、能作の文字を取りて、名けて三〇 言說と爲す。愚の頌の中の如きは、了別する所無きを說いて名けて愚と爲す。前の啞の喩の如く、應に正しく三智の差別を安立すべし。五の頌の中の如き、三一 五とは謂はく眼等の五の無分別なり。應に知るべし、此の中の求受と正受とは、俱に無分別なり。三二 加行と根本との眞如の義に於ける差別も亦爾なり。三三 意は義を受け亦能く分別するが如く、是の如く後得も亦能く義を受け亦能く分別す。是の如く三智は前の啞の喩の如く差別を安立す。論頌の中に於て、未だ論を解せずして、論に於て解せんことを求むるが如く、是の如く加行の無分別智も、應に知るべし亦爾なり。論を溫習して但法を受くるが如く、是の如く根本の無分別智も、應に知るべし亦爾なり。此の中、法とは、三四 意は文字を取る。論を解する者の如きは、法に於ても義に於ても皆能く領受するなり。是の如く後得の無分別智も、應に知るべし亦爾なり。「次第」の言は三五 三智の法と義とに於て領受する差別に似たるを顯示す。次に當に根本と後得との譬喩の差別を顯示すべし。

論曰

【二六】五とは前五識なり。
【二七】末那は隋譯には譯して意識となせり、此には前五識に對して意識を擧げたるものにして第七末那識にはあらず。
【二八】此の二句は、隋譯には陳譯には「非五」となせり、「未だ解を求めざる如く、法及び義を知るが如し」となせるも釋論に相應するは陳譯にして「未だ識らずして解を求むるが如く、讀んで正しく法を受くるが如く、解して法と義とを受くるが如し」とあり、今も其の意に解すべし。
【二九】意とは意趣の義。
【三〇】言說とは言說の內容にあらずして表現する文字をいふ。
【三一】眼等の五とは眼識等の前五識の無分別なりとなり。
【三二】加行は眞如を受けんと求むるもの、根本は正に受けたる者なればなり。
【三三】意とは頌の末那の譯語にして此には意識の義なり義を受くるとは義は對境のこと、受くとは受用すると、即ち意識は境を受け且つ之を分別すといふ意味なり。
【三四】此に法といふ意味は、論の能詮の文字をいふ、普通の意味の法に非ずとの意なり。
【三五】三智を異本には二智となすも頌文の意は三智なるべ

ち諸悪の染せざることを顯示す。此の中、根本の無分別智の無染なる勝利は、其の譬云何ん。

論曰
虚空の如く染無し　是れ無分別智にして
一切の障を解脱し　得と成辦とに相應す。

釋曰 何より解脱するや。謂はく一切の障を解脱するなり。何に由りて解脱するや。謂はく成辦と相應するなり。是の如き解脱は、諸地に於て唯得と相應し、成辦と相應するを以て因と爲すに由るが故なり。此れ即ち無分別智は能く諸障を治することを顯示す。此の中、後得の無分別智の無染なる勝利は、其の譬云何ん。

論曰
虚空の如く染無し　是れ無分別智にして
常に世間に行くも　世法に染せらるるに非す。

釋曰 此の智力に由りて諸の有情の諸の利樂の事を觀ずるが故に、彼の世間に往いて生を受けんと思ひ、既に生を受け已るも、一切の世法の染する能はざる所なり。世法に八有り、〔二〇〕一には利。二には衰、三には譽、四には毀、五には稱、六には譏、七には苦、八には樂なり。無分別智より生ずる所なるが故に、〔二一〕此の智も亦無分別の名を得。今當に此の三智の差別を顯すべし。

論曰
〔二二〕瘂の義を受けんことを求むるが如く　瘂の正しく義を受けたるが如く
〔二三〕非瘂の義を受けたるが如し　〔二四〕三智の譬是の如し。
〔二五〕愚の義を受けんことを求むるが如く　愚の正しく義を受けたるが如く
非愚の義を受けたるが如く　三智の譬是の如し。

〔二〇〕隋譯には「得利、不得利、好名、惡名、毀、讚、苦、樂」といふ。
〔二一〕此の智とは後得智のこと。
〔二二〕義は隋陳兩譯共に塵と譯せり、對境の義なれば塵といふが解し易し。
〔二三〕非瘂は瘂にあらざる人の意。
〔二四〕三智とは前説の加行、根本、後得の三智にして次第の如く喩を見るべし。
〔二五〕愚とは愚人のことにして、了別する力なきものをいふ。

と名く。是の故に菩薩は無數劫を經て乃ち涅槃を證し、爾所の時に由りて方に究竟に到る。[一七]無分別智は誰か究竟を爲すや。而も次前には次第に獲得することを說けり。

論曰

諸の菩薩は究竟じて　　清淨の三身を得
是れ無分別智にして　　最上の自在を得るなり。

釋曰「清淨の三身を得」とは、是れ如來の淨き三身を得る義なり。「清淨」と言ふは、謂はく初地の中には唯三身を得るのみ。第十地に至りて乃ち善く清淨なり。「最上の自在を得」とは、無分別智は唯清淨の三身を證得するのみを以て究竟と爲すに非ず、而も復十種の自在を獲得す。此れ後に說くが如く、應に其の相を知るべし。無分別智に何の勝利有りや。此の中、三種の無分別智あり、一には加行の無分別智、二には根本の無分別智、三には後得の無分別智なり。此の中、加行の無分別智とは、謂はく諸の菩薩は初め他より無分別の理を聞き。次に未だ自ら此の理を見ること能はずと雖も、而も勝解を生ず。次に此の勝解を所依止と爲し方便して無分別の理を推尋す。是を加行の無分別智と名く。此に由りて能く無分別智を生ず、是の故に亦無分別の名を得。是の如き加行の無分別智の無染なる勝利は其譬云何ん。

論曰

虛空の如く染無し　　是れ無分別智にして
[一八]種々の極重の惡と　　唯信じ勝解するとに由る。

釋曰　彼れ染することを能はざるを顯示せんと欲するが爲の故に、說いて種々の極重の惡と言ひ、染することを能はざるの因を顯示せんと欲する爲の故に說いて、[一九]「唯信じ勝解するに由る」と言ふ。唯無分別の理を信樂するのみに由りて勝解を起すが故なり。能く種々の惡趣を對治するは、此れ卽

【一七】此の句は前段には無分別智の次第の獲得のみを說いて未だ其の究極を說かざるが故に、次に其の究極を問ふとの意を示す。

【一八】此の二句は加行の無分別智は能く惡道の業を對治するを其の功德となすことを顯はす。

【一九】唯信し勝解すといふは加行道なるが故なり。

論曰

諸の菩薩の異熟は　　佛の二會の中に於てす
是れ無分別智の　　加行と證得とに由る。〔一五〕

釋曰「佛の二會の中に於て」とは、謂はく受用身〔一六〕の會の中と及び變化身の會の中となり。若し無分別の加行の轉ずる時は、變化身の會中に於て生を受けて異熟果を受く。若し已に無分別智を證得すれば、受用身の會中に於て生を受けて異熟果を受く。此の義を顯はさんが爲の故に復、「加行と證得とに由る」と説けり。無分別智は誰の等流と爲すや。

論曰

諸の菩薩の等流は　　後後の生の中に於て
是れ無分別智にして　　自體轉增勝す。

釋曰「諸の菩薩の等流は、後々の生の中に於て」とは、次前に説ける二身の大會の、後々の生の中に於てとなり。是れ無分別智にして、自體轉增勝す」とは、即ち彼の修する所の無分別智は、展轉して增勝す。應に知るべし、即ち是れ彼の等流果なり。無分別智の出離は云何ん。

論曰

諸の菩薩の出離して　　得と成辦と相應するは
是れ無分別智にして　　應に知るべし、十地に於てす。と

釋曰「諸の菩薩の出離」とは進趣究竟の故に出離と名く。即ち是れ大涅槃に進趣する義なり。「得と成辦と相應するは是れ無分別智にして」とは、初に此の智を獲るを「得と相應す」と名け。次後の無量百千の大劫には成辦と相應するなり。「應に知るべし、十地に於てす」とは、謂はく初地より乃至第十まで是の如く次第す。此の智は初地には唯名けて得と爲し。爾後の多時には乃ち成辦

〔一五〕加行と證得とに由るとは無分別智の加行と證得とに由りて異れる異熟の報を受くるの意、隋譯には方便と正得といふ。
〔一六〕受用身變化身とは後に釋論に出づ。

立するや。故に復說いて言く、「彼の能詮を離れて智は所詮に於て轉ずること非ず」と。若し能詮の名を了ぜざれば所詮の義に於て覺知起らざるに由るが故に、一切法は皆不可言なり。若し要ず能詮の名を待つて所詮の義に於て覺知の起ること有りと言はば、此を遮せんが爲の故に復是の言を說く、[一三]「詮に非らず不同なるが故に」と。能詮の名と所詮の義とは互に相ひ稱はざるを以て、各異相なるが故に、能詮と所詮とは皆不可說なり。此の因に由るが故に一切法は皆不可言なりと說く。無分別智は何の任持する所なるや。

論曰

諸の菩薩の任持は　是れ無分別智にして
後に得る所の諸行を　進趣し增長せんが爲なり。

釋曰　無分別の後に得る所の智に由りて、菩薩の行を得、此の行は即ち無分別智に依る。「進趣し增長せんが爲なり」とは、是の如き諸の菩薩の行をして增長を得しめんが爲の故に、無分別智は是れ彼の任持なり。此の智は復何を以て助伴と爲すや。

論曰

諸の菩薩の助伴を　說いて二種の道と爲す
是れ無分別智の　五の到彼岸の性なり。

釋曰　二種の道とは、一には資糧道。二には依止道なり。資糧道とは、謂はく施と戒と忍と及び精進波羅蜜多となり。依止道とは、即ち是れ靜慮波羅蜜多なり。前に說ける所の波羅蜜多の生ずる所の諸善に由り、及び靜慮波羅蜜多に依りて、無分別智は即ち生長することを得。此の智を慧波羅蜜多と名く。[一四]乃至未だ佛果を得ざるより已來、無分別智は何の處所に於て異熟果を感ずるや。

【一三】「詮に非らず不同なるが故に」の頌句は、隋譯には「言說不同なるが故に」とあり、陳譯には「言に於て不同なるが故に」とあり、又藏譯には「說相違するを以ての故に」とありて、此の意明了なり。且らく隋譯の釋文に見るに「能說の名と所說の義と不同なるを以て、名と義と各別體なるが故に、偈に一切不可說と言へり」とありて本釋と一致す。又玄奘譯の無性釋を見るに、今の頌句を解して「謂はく相異るが故に實の能詮に非ず云云」とあり、是に由れば詮に非ずといふは實の能詮に非ずと解するが如し。

【一四】乃至云云とは無分別智を得てより未だ佛果に到らざる以前にはの意なり。

名く。斷滅なりと取すること勿からしめんが故に此の言を說く。又所緣に於ける所作の行相は次の頌に當に顯すべし。

論曰

諸の菩薩の行相は　復所緣の中に於ては
是れ無分別智にして　彼の所知は無相なり。

釋曰　菩薩の行相は所緣の中に於て現ずる所の無相なり。謂はく卽ち此の智は眞如の中に於て平等なり。[一〇]平等に生起せる無異無相の相を以つて行相と爲す。眼の色を取りて靑等の相を見るが如し。此の靑等は色と異り有るに非ず。此れも亦是の如し、智と眞如と異れる行相無し。卽ち此の中に於て疑難を釋せんが爲に、復二頌を說く、

論曰

相應は自性の義なり　所分別は餘に非ず
字展轉して相應する　是を相應の義と謂ふ
彼の能詮を離れて　智は所詮に於て轉ずるに非ず
詮に非らず、不同なるが故に　一切は不可言なり。

釋曰　若し一切法皆不可言ならば復何等を以て所分別と爲すや。此を釋せんが爲の故に是の如きの言を說く。「相應は自性の義なり、所分別は餘に非ず」とは、謂はく卽ち相應を自性の義と爲す、是れ所分別は此を離るるに非ざるが故に、「餘に非ず」と言ふ。此れ云何が成ずるや。重ねて成立せんが爲に復是の言を說く。「字展轉して相應する、是を相應の義と謂ふ」とは、謂はく別々の字相續宣傳して以て其の義を成ず。是れ相應の義なり。[一一]斫芻と言ふが如し。[一二]二字斷ぜざれば說いて眼の義を成ず。是れ相應の義を所分別と爲すなり。又一切法は皆不可言なることは何に因りて成

【一〇】所緣の眞如と能緣の智と平等に生起して、眞如と智と一體にして異り無く、二の別相無きを平等の相といふ意なり。

【一一】斫芻（caksu）は眼の梵音。

【一二】二字相離れずして一語をなすが故に眼を成ずとの意、

論曰

諸の菩薩の所依は　非心にして而も是れ心なり
是れ無分別智にして　思義の種類に非ず。

釋曰　是の如く説く所の無分別智は、當に心に依ると言ふべきや、非心に依ると爲すべきや、若し心に依ると言はば、能く思量するが故に説いて名けて心と爲す。心に依りて轉じて(而も)是れ無分別ならば道理に應ぜず。若し非心に依らば則ち智を成ぜず。是の如き二種の過失を避けんが爲の故に此の頌を説く。此の智の所依を名けて心と爲さず、不思の義なるが故なり。亦非心にも非ず、心の所引なるが故なり。此の生ずる所依は是れ心の種類なれば、亦名けて心と爲す。彼に因りて生ずることは次の頌に當に顯すべし。

論曰

諸の菩薩の因緣は　有言の聞熏習と
是れ無分別智にして　及び如理の作意となり。

釋曰　「諸の菩薩の因緣」とは、謂はく此の智の因なり。「有言の聞熏習」とは、謂はく他の音に由りて正しく聞いて熏習せるなり。「及び[七]如理の作意なり」とは、謂はく此の熏習を因と爲す[八]意を、如理なる作意と言ふ。無分別智は此に因りて生ず。復何の所緣なるかは次の頌に當に顯すべし。

論曰

諸の菩薩の所緣は　不可言の法性なり
是れ無分別智にして　無我性の眞如なり。

釋曰　「不可言の法性」とは、謂はく遍計所執の自性に由りては一切の諸法は皆言ふ可からず。何等をか名けて不可言の性と爲すや。謂はく無我性の顯はす所の眞如なり。遍計所執の補特伽羅と及び一切の法とは皆無自性なるを無我性と名く。即ち[九]此の無性の顯はす所の有性を說いて眞如と

【七】如理の作意とは隋陳兩譯には正思惟と譯せり。
【八】意とは思惟の義、隋譯には「此の熏習を因と爲して思惟の意言を生ず」とせり。
【九】此の句を隋譯には「此の無體の體を名けて眞如と爲す」と言ふ。

に知るべし是を無分別智と名く。

釋曰　且らく應に先に無分別智の有する所の自性を說くべし。此の中、體相を說いて自性と名く、謂はく諸の菩薩の無分別智は五種の相を離るるを以て自性と爲す。五相を離るるとは、若し無作意是れ無分別智ならば、睡・醉・悶等は應に無分別智を成ずべし。若し有[四]尋有伺地を過ぎたるは是れ無分別智ならば、第二の靜慮已上の諸地は應に無分別智を成ずべし。若し是の如くならば世間にて應に無分別智を得べし。若し想受滅等の位の中に心心法の轉ぜざるは、是れ無分別智ならば、滅定等の位には心有ること無きが故に、智應に成ぜざるべし。[五]若し色の自性の如きは、是れ無分別智ならば、彼の諸色の頑鈍無思なるが如く、此の智も應に頑鈍無思を成ずべし。復餘の義有り、若し色性の如くならば智應に成ずべからず。若し眞義に於て異の計度轉ずれば、無分別智は應に分別有るべし。謂はく分別して此は是れ眞義なりと言へばなり。若し智にして、是の如き五相を遠離し、眞義に於て轉じ、眞義の中に於て異に計度せざれば、此は是れ眞義の無分別智なり。是の如きの相有り、[六]眞義を緣ずる時、譬へば眼識の如く異に計度せず。此は是れ其の義なり。

論曰　所說の如き無分別智を成立する相の中に於て、復多頌を說く、

釋曰　上に說く所の無分別智を、略して成立する中に於て、廣く多頌を說くなり。

論曰

諸の菩薩の自性は　五種の相を遠離す
是れ無分別智にして　眞を異計せず。

釋曰　此の初頌に由りて上に說く所の無分別智の初の自性の義を顯はす。是の如く已に此の智の自性を說けり。彼に依りて轉ずることは次の頌に當に說くべし。

論曰

【四】有尋有伺地とは定心中に尋伺共にあるをいふ、即ち色界初禪天の定なり、其より有無尋有伺となり、第二禪以後には無尋無伺となる。

【五】隋譯には「智體の性は色の如くならば」とあり。

【六】此の句は隋譯には「眞實の義を緣ずる時、眼識の色を緣ずるが如く、種々の相無し、此は是れ其の義なり」とあり、眼識の色を緣ずるには分別なく對境の有りのまゝを緣ずるが故なり。

情を成熟し、神通等の種々の方便を發して諸の有情を引いて正法に入らしむるが故なり。又此の力に由りて能く善く一切の佛土を清淨にし、心は自在を得、欲する(所)に隨ひて能く金銀等の寶の諸の佛土を成ずるが故なり。又此の力に由りて能く正しく一切の佛法を修集す。是れ三摩地の作業の差別なり。

增上慧學分第九の一

論曰 是の如く已に增上心の殊勝なるを說けり。增上慧の殊勝なることは云何が見るべきや。謂はく無分別智の、若しくは自性。若しくは所依。若しくは因緣。若しくは所緣。若しくは行相。若しくは任持。若しくは助伴。若しくは異熟。若しくは等流。若しくは出離。若しくは究竟に至る。若しくは加行と無分別と後得との勝利。若しくは差別。若しくは無分別と後得との譬喩。若しくは無功用の作事。若しくは甚深となり。應に知るべし、無分別智を增上慧の殊勝と名く。

釋曰 今正しく增上の慧を說く時至れり。此の中の意は、無分別智を說いて增上慧と名く。此に復三種あり。一には加行の無分別智、謂はく尋思の慧なり。二には根本の無分別智、謂はく正證の慧なり。三には後得の無分別智、謂はく起用の慧なり。此の中、[一]悕求の慧は是れ第一の增上慧、內證の慧は是れ第二の增上慧、攝持の慧は是れ第三の增上慧なり。今且らく無分別智を成立するは、唯此の智は因果に通ずるに由るが故なり。其の尋思の智は是れ此の智の因にして、其の後得智は是れ此の智の果なり。此を成ずるは兼ねて餘の二を成ずる所以なり。

論曰 [二]此の中、無分別智は五種の相を離るるを以て自性と爲す。一には無作意を離るるが故に、二には有尋有伺の地を過ぎたるを離るるが故に、三には想受の滅したる寂靜を離るるが故に、四には色の自性を離るるが故に、五には[三]眞義に於ける異の計度を離るるが故に、此の五相を離るるを、應

【一】悕求とは無分別智を得んことを欲求するの意。

【二】以下前段に標する所の自性より甚深に至る十九義を釋す。

【三】此の句は隋譯には「眞實の義を計度する種々の相を離るゝが故に」となせり。

論曰　[三〇]甚深の佛法とは、云何が名けて甚深の佛性と爲すや。此の中、應に釋すべし。謂はく常住の法は是れ諸佛の法なり、其の法身は是れ常住なるを以ての故に。又斷滅の法は是れ諸佛の法なり、一切の障は永へに斷滅するを以ての故に。又生起の法は是れ諸佛の法なり、變化身は現じて生起するを以ての故に。又有所得の法は是れ諸佛の法なり、八萬四千の諸の有情の行と及び彼の對治とは皆得べきが故に。又有貪の法は是れ諸佛の法なり、自ら誓つて有貪の有情を攝受して已の體と爲すが故に。又有瞋の法は是れ諸佛の法なり、又有癡の法は是れ諸佛の法なり、又有異生の法は是れ諸佛の法なることも、[三一]應に知るべし亦爾なり。又無染の法は是れ諸佛の法なり、成滿せる眞如は一切の障垢も染むること能はざるが故に。又無汚の法は是れ諸佛の法なり、世間に生在するも諸の世間の法は汚すこと能はざるが故に。是の故に說いて甚深の佛法と名く。

釋曰　復餘處の契經に說いて言へる有り。謂はく「常住の法は是れ諸佛の法なり」と、乃至廣說す、又「無汚の法は是れ諸佛の法なり」と。此の中の意趣を今當に顯示すべし。謂はく佛の法身の體は是れ常住なるが故に、此の法を說いて常住の法と爲す。斷滅の法とは、有らゆる障垢は悉く皆斷滅す。此の義に由るが故に、卽ち此の法を說いて斷滅の法と爲す。「有所得の法は是れ佛法なり」とは、有情の諸行の八萬四千と及び彼の對治とは皆得べき有るが故に、此の法を說いて有所得と名く。「無染の法」とは、淸淨の眞如は一切の障垢も染むること能はざる所なるが故に、此の法を說いて無染の法と名く。餘の義は了じ易ければ、煩はしく重ねて釋すること無し。

論曰　[三二]又能く引發して到彼岸を修し、有情を成熟し、佛國土を淨むるは、諸佛の法なるが故に、應に知るべし、亦是れ菩薩の等持の作業の差別なり。

釋曰　前に未だ說かざる所の作業の差別にて、今此の中に於て復菩薩の等持の作業を顯はす。謂はく諸の菩薩は三摩地に依りて能く一切の波羅蜜多を修し、又此の定に依りて能く善く一切の有

【三〇】此の一段は甚深の佛法に就て密語を釋す。

【三一】瞋、癡、及び異生性のものも平等觀に依りて已體と爲すが故に皆佛法なることは前の有貪のものと同じ。

【三二】本章の初に六種の差別を擧ぐる中の第六作業の差別を說く。

何が菩薩は其の施無盡なるや」、とは。謂はく諸の菩薩は涅槃に住せずして常に惠施を行ず。此の中、無盡の意は涅槃を取る。聲聞の涅槃に住するに同じからざるが故に其の施は無盡なり。

論曰[二五] 云何が能く殺生するや、若しくは衆生の生死流轉を斷ず。云何が與へざるを取るや、若しくは諸の有情は、與ふる者有ること無きに自然に攝取す。云何が欲邪行なるや、若しくは諸の欲に於て是れ邪なることを了知して正行を修す。云何が能く妄語するや、若しくは妄の中に於て能く說いて妄と爲す。云何が貝戍尼なるや、若しくは能く常に最勝の空住に居る。云何が波魯師なるや、若しくは善く所知の彼岸に安住す。云何が綺間語なるや、若しくは正しく法の品類の差別を說く。[二六]云何が能く貪欲なるや、若しくは數々自ら無上の靜慮を證得せんと欲すること有り。云何が能く瞋恚なるや、若しくは其の心に於て能く正しく一切の煩惱を憎害す。云何が能く邪見なるや、若しくは一切の處に遍行する邪性を皆如實に見る。

釋曰 經の中に、「苾芻よ我は是れ能く殺生す」等と說けるが如きは、[二七]此の中に彼の說く所の意趣を顯はす。「云何が欲邪行なるや」とは、謂はく諸欲は皆是れ其の邪なることを知りて正行を修するなり。「云何が貝戍尼なるや」とは、此の[二八]貝戍尼は、顯には離間語に目け、密には常勝空を詮す。貝は勝を表し、戍は空を表し。尼は常を表す。今は密義を取れば答と相應す。是の故に答へて言く、「若しくは能く常に最勝の空住に居る」と。「云何が波魯師なるや」とは、此の[二九]波魯師は、顯には麁惡語に目け、密には彼岸に住することを詮す。波は彼岸を表し、魯師は住を表す。今は密義を取れば答と相應す。是の故に答へて言く、「若しくは善く所知の彼岸に安住す」と。是れ所知の彼岸に到りて住するの義なり。「云何が能く邪見なりや」等とは、謂はく色等の中、如實に遍行の邪性を觀見するなり。卽ち是れ彼の依他起の中に於て、如實に遍計所執は是れ邪性の義なることを觀見す。十不善業道の文の中に於て餘の義は了じ易し。

【二五】 前段は六度の行に就て密語を釋し、此の段は十惡業に就て密語を釋す。

【二六】 此の句は隋譯には「云何が非分の貪を成ずることを得るや、若しくは無上の禪定に於て數習し自ら得しむるが故に」となせり。

【二七】 此の句は論本の殺生の二義に照して表面は生命を斷つ意なるも(前句)裏面の密意は生死輪廻を斷つ意なり、後の諸句も之に例して論本の後句は密意を示すものと知るべし。

【二八】 貝戍尼(Paiśuni)。

【二九】 波魯師(Pārusi)。

施の中に於て自在に轉ぜず。云何が菩薩は其の施無盡なるや、若しくは諸の菩薩は無盡に住せず。布施に於けるが如く、[17]戒を初と爲し、慧を後と爲し、其の所應に隨つて當に知るべし、亦爾なり。

釋曰 「云何が菩薩は能く惠施を行ずるや等」とは、謂はく諸の菩薩は一切有情を攝して自體と爲す。是の故に彼の施は卽ち是れ己施なり、是れ此の意趣なり。「云何が菩薩は樂うて惠施を行ずるや等」とは、謂はく諸の菩薩は味著等の施を修行せんことを樂はず、但菩薩の淨施を修行せんと樂ふ。味著と言ふは意によりて說けば貪染なり。[18]或は餘處に有りては來求施と名く。「云何が菩薩は惠施の中に於て深く信解を生ずるや」等とは、謂はく諸の菩薩は自ら施心を得て惠施を行じ、他の緣を藉らざるなり。「云何が菩薩は施に於て策勵するや等」とは、謂はく諸の菩薩の性は自ら能く施す、慳恪を斷ぜるが故なり。他の策を待たず亦自ら策せず、任運に能く施す、是れ此の意趣なり。「云何が菩薩は施に於て耽樂するや等」とは、謂はく諸の菩薩は常に施を行ずるが故に、暫時の施無く、一切を施すが故に、少しく施す所無しとなり。「云何が菩薩は其の施廣大なるや等」とは、謂はく諸の菩薩は定に依りて施を行ず、卽ち是れ欲を離れて而かも施を行ずる義なり。[19]「婆洛」と言ふは顯には堅實に目け、密には流散を詮す。[20]今は密義を取りて流散の想を離るとなす、定に依りて施を行ずるが故に廣大を成ず。「云何が菩薩は其の施淸淨なるや等」とは、謂はく諸の菩薩は慳足を拔除して惠施を行ず。[21]「殟波陀」とは、顯には生起に目け、[22]密には拔足を詮す。波陀を足と名け、殟を名けて拔と爲す。[23]今は密義を取りて、慳足を拔除し、面を傾覆せしめて惠施を行ず。是の故に說いて「殟波陀慳」と名く。「云何が菩薩は其の施究竟なりや」等とは、謂はく諸の菩薩は究竟の無餘涅槃に住すること聲聞等の如くならず。是の故に究竟して常に能く施を行ず。「云何が菩薩は其の施自在なりや」等とは、謂はく諸の菩薩は施等の障をして自在を得ざらしめて惠施を行ず、[24]所治の障をして自在ならざらしむるが故に、施は自在を得るなり。「云

【一七】 戒を初とし乃至後の慧に至るまでとの意、卽ち六度の初の施を擧げて餘を略するの意なり。

【一八】 隋譯に味著の施を「有所得の施」と譯し、更に之を釋して「雜相及び著相、是を有所得と名く、是の故に經に「雜相著相の布施有り」と說くと、更に陳譯參照。

【一九】 婆洛(Sāra)。

【二〇】 此の句は隋譯には「若し秘密の義を取れば、名けて不亂と爲す、此れ定心の施及び貪欲を破する施を顯はさんが爲なり」とあり、顯にはとは文の表面ではの意。

【二一】 密にはとは文に含蓄する深意ではの意。

【二二】 殟波陀、陳譯には嗢波提(Utpatti)。

【二三】 此の句は隋譯には「若し秘密の義を取れば名けて拔根となす、謂はく慳根を拔出すれば、慳首を廻して下に在り、拔根は上に在るに由るが故に生起と名く」とあり、陳譯には其の意更に簡明なり、參照。

【二四】 所治の障の作用が自在ならば施を自由に行ずること能はざるも、障若し不自在ならば施は自在なり、故に不自在とは施の障に約していひ、自在とは施行に約していふ。

に。八には隨覺難行、諸の如來の說く所の甚深なる[一四]秘密の言辭に於て、能く隨つて覺するが故に。九には不離不染難行、生死を捨てず而も染まざるが故に。十には加行難行、[一五]能く諸佛の安住を修して一切の障礙を解脫し、生死の際を窮め、功用を作さずして、常に一切有情の一切の義利の行を起すが故なり。

釋曰　說の如く菩薩は諸の難行を修す。此の中、何等をか名けて「難行」と爲すや。一切の難行は十種の顯はす所たり。中に於て「不離不染の難行」とは、棄捨せざるが故に名けて不離と爲す。謂はく生死に於て全く捨離せず亦染汚せざるは、此れ甚だ難しと爲す。餘の九の難行は其の義了じ易し。

論曰　復次に隨覺難行の中、佛の何等の祕密の言詞に於て、彼の諸の菩薩は能く隨つて覺了するや。謂はく經に言へるが如し。

釋曰　秘密の言詞の意趣を顯はさんが爲の故に、此の問を爲す。「經に言へるが如し」とは、總じて前の問に答ふるなり。後に當に別釋すべし。

論曰　云何が菩薩は能く惠施を行ずるや、若しくは諸の菩薩は少しも施す所無く、然も十方無量の世界に於て廣く惠施を行ず。云何が菩薩は樂うて惠施を行ずるや、若しくは諸の菩薩は一切施に於て都て欲樂すること無し。云何が菩薩は惠施の中に於て深く信解を生ずるや。若しくは諸の菩薩は如來を信ぜずして而も布施を行ず。云何か菩薩は施に於て策勵するや、若しくは諸の菩薩は惠施の中に於て自ら策勵せず。云何が菩薩は施に於て耽樂するや、[一六]若しくは諸の菩薩は暫時有り、少しく施す所有ること無し。云何が菩薩は其の施廣大なりや。若しくは諸の菩薩は惠施の中に於て娑洛の想を離る。云何が菩薩は其の施淸淨なるや、若しくは諸の菩薩は殟波陀慳なり。云何が菩薩は其の施究竟なるや、若しくは諸の菩薩は究竟に住せず。云何が菩薩は其の施自在なるや、若しくは諸の菩薩は惠

[一四] 秘密の言辭を陳譯には「不了義の經」と譯せり。

[一五] 隋譯には「諸佛は一切の障礙解脫の中に於て住し」となせり、陳譯も亦同じ。

[一六] 此の論本は若諸菩薩無有暫時少有所施とありて文甚だ難澁なり、釋文に依れば暫時有ること無く、少しく施す所有ること無しといふ二意を含むものと解すべし。隋譯には「一時に一物を布施すること有る無し」とありて意義明了なり、陳譯は更に簡明に「若くは菩薩は布施する時無きや」となせり。

が故に「振動」と名け。即ち彼れ熾然なるが故に「熾然」と名く。「遍滿」と言ふは、應に知るべし即ち是れ光明普く照すなり。「顯示」と言ふは、此の威力に由りて所能無き餘の有情類をして、欻然として能く無量の世界を見、及び其の餘の佛菩薩等を見せしむるなり。「轉變」と言ふは、應に知るべし、一切の[六]地等を轉變して水等を成ぜしむるなり。「往來」と言ふは、謂はく一刹那に普く能く無量の世界を往還するなり。「卷舒」と言ふは、謂はく十方無量の世界を卷いて一[七]極微に入るゝも、極微を增さず、一極微を舒べて十方無量の世界を包むも、世界減ぜざるなり。「一切の色像を皆身中に入るゝ」とは、謂はく身中に無量なる種々の一切の事業を現ずるなり。「往く所類を同じくす」とは、謂はく三十三天に往詣するが如く、色像言音彼れと同類なり、彼を化せんが爲の故に、一切處に往くも亦復是の如し。[八]「顯」とは顯現なり、「隱」とは隱藏なり。「所作自在」とは、魔王を變じて佛身等と作すが如し。「他の神通を伏す」とは、謂はく能く一切の神通を映蔽するなり。請問者に於て施すに辯才を以てするが故に「辯を施す」と名け、聽聞者に於て[九]念を施し、[一〇]樂を施して定を得しむるが故に、「念と樂とを施す」と名く。「大光明を放つ」とは、遠く他方の世界に住する菩薩を召集せんと欲するが爲なり。「是の如きの大神通を引發す」とは、前に說く所の大なる神通を引くが故なり。是の如きは一切の聲聞には無き所、是の故に殊勝なり。

論曰　又能く諸の難行を攝する十難行を引發するが故なり。十難行とは、一には自誓難行、無上菩提の願を誓受するが故に。二には不退難行、[一一]生死の衆苦も退くること能はざるが故に。三には不背難行、一切の有情、邪行を行ずと雖も而も棄てざるが故に。四には現前難行、[一二]怨ある有情の所にも現じて、一切の饒益の事を作すが故に。五には不染難行、世間に生在するも世法の爲に染汚せられざるが故に。六には勝解難行、[一三]大乘の中に於て未だ了る能はずと雖も、然も一切の廣大にして甚深なるに於て信解を生ずるが故に。七には通達難行、具さに能く補特伽羅と法との無我に通達するが故

【六】地等云云は地水火風の四大を自在に轉變すとの意なり。

【七】極微とは物質を分析して最小微に至れるもの。

【八】顯隱とは菩薩の一切處に隱顯自在なりとの意。

【九】念とは憶念の力、是に由りて聽く所の法を念持す、陳譯の釋文に依れば宿命を憶念し邪見の人を反省せしむる意に解せり、參照。

【一〇】樂とは定を得て心樂しむこと。

【一一】隋譯には「一生死の苦の中に於て退轉せざるが故に」とありて、本文に依れば生死の衆苦も菩薩行を退轉せしむること能はずとの意、陳譯も亦同意なり、參照。

【一二】隋譯には「若し諸の衆生菩薩を觸惱するも」とあり、怨み有る有情といふよりは穩當なり。

【一三】此の句は陳譯には「無底の大乘を行して能く廣大甚深の義を信樂するが故に」とありて本譯と其の義を異にせり。

論曰　所緣の差別とは、謂はく大乘の法を所緣と爲すが故なり。

釋曰　「謂はく大乘の法を所緣と爲す」とは、諸の菩薩の定は大乘を緣ず。[二]聲聞の定には非らず。

論曰　種々の差別とは、謂はく大乘光明。集福定王。賢守、健行等の三摩地は種々無量なるが故なり。

釋曰　「大乘光明。集福定王等」とは、是の如き等の[三]諸の三摩地の種々の差別は、唯大乘にのみ有りて聲聞乘等には一種も亦無きことを顯はす。

論曰　對治の差別とは、謂はく一切法の總相を緣ずる智は楔を以て楔を出すの道理にて、阿賴耶識の中の一切障の麁重を遣るが故なり。

釋曰　總法を緣ずる智は一切の障礙を對治して而して住す。細楔を以て麁楔を除去するが如く、本識の中に住する諸の雜染法の熏習せる種子を說いて、名けて麁と爲し、諸の對治の道は能く彼を除くが故に[四]是れ微細の義なり。

論曰　堪能の差別とは、謂はく靜慮の樂に住し、其の欲する所に隨ひて生を受くるが故なり。

釋曰　[五]堪能有るに由りて靜慮の樂に住し、諸の有情を饒益すること有る處に隨ひて、即ち彼に往きて生ずるも靜慮を退かず。諸の聲聞等には是の如きの事無し。

論曰　引發の差別とは、謂はく能く一切世界の無礙の神通を引發するが故なり。

釋曰　此の靜慮に由りて神通を引發し、一切の世界は皆障礙すること無し。

論曰　作業の差別とは、謂はく能く振動し、熾燃し、遍滿し、顯示し、轉變し、往來し、卷舒し、一切の色像を皆身中に入れ。往く所は類を同じくし、或は顯はれ或は隱れ、所作自在にして、他の神通を伏し、辯と念と樂とを施し、大光明を放つ、是の如き大神通を引發するが故なり。

釋曰　「作業の差別」とは、謂はく神通を發す所作の事業なり。此の中、能く一切の世界を動ずる

【二】聲聞の定は然らずとの意、隋譯には「一大乘の法を以て所緣と爲し、聲聞等(の法)には非ず」とあり。

【三】此に例示せる三摩地の義解は陳譯に委說せり、參照。

【四】對治の道を細楔となすの意なり。

【五】堪能とは功用又は能力の意、陳譯に依るに論本の前句は現在に約し後句は未來に約して說けり。

多く其の福を生ず。多福に由るが故に疾かに無上正等菩提を證す。是の如き等の戒を最も甚深と爲す。「又諸の菩薩は[一五]變化の身語の二業を現起す。當に知るべし、亦是れ甚深なる尸羅なり。」此の道理に由りて、或は國王と作りて、現じて種々の有情を惱ます事を作し、有情を毘奈耶の中に安立す。自體を變化するを名けて變化と爲す。此の中、應に無厭足王の善財童子を化導する等の事を說くべし。「又種々諸の本生の事を現ず」とは、[一六]毘濕婆安呾羅等の諸の本生の事の如し。此の中、菩薩は其の男女を以て婆羅門に施す、皆是れ變化なり。「諸の餘の有情を逼惱することを示行して、眞實には諸の餘の有情を攝受す」とは、謂はく諸の菩薩は終いに[一七]餘の實の有情を逼惱せず、其の餘の實の有情を攝受するが故なり。是の如きを亦甚深の殊勝と名く。

論曰　此の略して四種の殊勝を說くに由りて、應に知るべし、菩薩の尸羅と律儀とを最も殊勝と爲す。是の如き差別は菩薩の學處なり。應に知るべし、復無量の差別有り。[一八]毘奈耶瞿沙方廣契經の中に說けるが如し。

釋曰　是の如き四種は略して差別を說けるなり。毘奈耶瞿沙經の中に於ては廣說して、復百千の差別有り。

增上心學分第八

論曰　是の如く已に增上戒の殊勝なることを說けり。增上心の殊勝なることを云何が見るべきや。略して六種の差別に由る。應に知るべし、一には所緣の差別に由るが故に。二には種々の差別に由るが故に。三には對治の差別に由るが故に。四には堪能の差別に由るが故に。五には引發の差別に由るが故に。六には作業の差別に由るが故なり。

釋曰　[一]增上心學の殊勝を顯さんが爲に、此の問答を作す。

【一五】身語の二業とは變化には意業なきが故に身語の二業に限る。

【一六】毘濕婆安呾羅（Viśvāntara）多能と譯す、蘇達多太子のこと。

【一七】逼惱する有情は自體の變化にして是に由りて他の眞實の有情を攝受し利益すとの意なり。

【一八】毘奈耶瞿沙(Vinayakośa)律藏と譯す、律の集大成なり、隋譯には毘奈耶瞿沙十萬偈經とある、支那に傳譯せられず、眞諦三藏は之を將來せんとして途中之を失ふ、と。

【一】戒は定を依止とし、定に依りて戒を成するが故に次に殊勝の戒の依つて起る定の勝れたることを顯はす、故に增上心學と稱す。

量の福德を攝受する廣大」とは、謂はく諸の菩薩は無量の福德の資糧を攝受す、聲聞には非ざるが故なり。「一切有情の利益安樂の意樂を攝受する廣大」とは、謂はく[一〇]諸の有情に於て勸めて善を修せしむるを「利益の意樂」と名け。[一一]若し卽ち此の補特伽羅に於て、彼の善に由りて當に勝果を得べきことを願はゞ「安樂の意樂」と名く。「無上正等菩提を建立する廣大」とは、謂はく諸の菩薩は此の尸羅に由りて無上正等菩提を建立す。聲聞には非ざるが故なり。

論曰 甚深の殊勝とは、謂はく諸の菩薩は是の品類の方便善巧に由りて、殺生等の十種の作業を行ずるも、而も罪有ること無く、無量の福を生じて速かに無上正等菩提を證す。又諸の菩薩は變化の身語の兩業を現行す。應に知るべし、亦是れ甚深なる尸羅なり。此の因緣に由りて、或は國王と作りて種々の有情を惱ます事を示行し、有情を[一二]毘奈耶の中に安立す。又種々の諸の本生の事を現じて、諸の餘の有情を逼惱することを示行し、眞實には諸の餘の有情を攝受す。(此れ)[一三]先に他の心をして深く淨信を生ぜしめ、後に轉じて成熟せしむるなり。是を菩薩の學する所の尸羅の甚深の殊勝と名く。

釋曰 甚深の殊勝の中、「謂はく諸の菩薩は是の品類の方便善巧に由りて」とは、此の中には、是の如き菩薩の是の如き方便善巧の功能を顯示するなり。謂はく諸の菩薩は若し是の如く知らんに、[一四]是の如き品類の補特伽羅は此の不善無間等の事に於て、將に加行を起さんとす、と。他心智を以て彼の心を了知するに餘の方便にては能く彼の業を轉ぜしむること無く、如實に彼が此の業に由りて定んで善趣を退き、定んで惡趣に往くことを了知し、是の如く知り已つて是の如きの心を生ずらく、我れ此の業を作さば當に惡趣に墮すべしとも、我れ寧ろ自ら往いて必ず當に彼を脫せしむべし。彼れの現在に於て少苦を加ふと雖も、彼れの未來をして多く安樂を受けしめん、と。是の故に菩薩は、譬へば良醫の如く、饒益の心を以て復之れを殺すと雖も、而も少しの罪も無く、

【一〇】利益の意樂とは現在に善に處し惡を離れしむるをいひ、安樂の意樂とは其の善の未來の果報に及ぶをいふ。
【一一】此の句は隋譯に「此人此の善を以ての故に、若し果時に於て當に福報を得べしとせば此を安樂の意と名く」となし、其意更に明了なり。
【一二】毘奈耶 Vinaya は律と譯す。
【一三】變化の方便を現して先づ人をして菩薩を信任せしむとの意。
【一四】此の句は隋譯には「此の人は是の如き不善を以て、無間地獄と相應す」と。

不犯なる有り。菩薩には犯なるも、聲聞には不犯なる有り。菩薩は身語心の戒を具有するも、聲聞は唯身語の二戒有るのみ。是の故に菩薩は心にも亦犯有れど、諸の聲聞には非ず。要を以て之を言はゞ、一切の、有情を饒益する無罪なる身語意の業は、菩薩には一切皆應に現行すべく、皆應に修學すべし。是の如きを應に知るべし、說いて名けて共不共の殊勝と爲す。

釋曰　共不共の中「一切の性罪」とは、謂はく殺生等にして、說いて名けて共に相似すと爲す。[五]遮罪とは、謂はく生地を掘り、生草を斷ずる等にして、說いて不共と名く。「此の學處に於て」とは、後の學處を謂ふ。「聲聞には犯なるも菩薩には不犯なる有り」とは、[六]雨安居にも有情を益するを觀ずれば輒ち經行して宿するが如し。「菩薩には犯なるも聲聞には不犯なる有り」とは、謂はく[七]益有りと觀ずるも而も故らに行かざるなり。「是の故に菩薩は心にも亦犯有り、諸の聲聞には非ず」とは、謂はく唯內に[八]欲等の尋思を起すも、菩薩には犯を成ずれども、聲聞等には(犯に)非ず、となり。「一切の、有情を饒益する無罪なる身語意の業は、菩薩には一切皆應に現行すべく、皆應に修學すべし」とは、謂はく能く饒益して而も罪有ること無き、是の如きの三業は、菩薩は應に修すべし。或は饒益すと雖も而も罪無きに非ず、[九]女等の非法の物を以て他人に授與するが如きなり。此の事を遮せんが爲の故に「無罪なる」と說けり。

論曰　廣大の殊勝とは、復四種の廣大に由るが故に、一には種々無量の學處の廣大なるに由るが故に。二には無量の福德を攝受すること廣大なるに由るが故に。三には一切の有情の利益安樂の意樂を攝受すること廣大なるに由るが故に。四には無上正等菩提を建立すること廣大なるに由るが故なり。

釋曰　「種々無量の學處の廣大」とは、謂はく諸の菩薩の修する所の學處は亦是れ種々なり、亦是れ無量なり。此に由りて彼の一切の有情に於て成熟の事と及び攝受の事とを作すが故なり。「無

【五】遮罪とは陳譯には「制罪所立の戒」となせり、臨機に禁制せらるる戒にして其の目的に隨つて開遮自由なるものをいふ、次の例に依りて知るべし。

【六】雨安居中は遊行を禁じられたるも、他を利益すること有れば敢て其の禁制を守らずして遊行し他に宿すとの意なり、經行とは此處にては遊行に同じ。

【七】前の如き場合に故意に遊行せざるは利他を目的とする菩薩には犯となるも、自利本位の聲聞には不犯なり。

【八】欲等の尋思とは貪欲、瞋害等の未だ行爲に現はれざる心中の思慮決意をいふ。

【九】女等の非法云云、隋譯には女色等となす、陳譯に譬を擧げて示せり、參照。

卷の第八

増上戒學分第七

論曰　是の如く已に因果の修の差別を說けり。此の中、増上戒の殊勝なるは云何が見るべきや。菩薩地の　〔一〕正受菩薩律儀の中に說けるが如し。復次に應に知るべし、略して四種の殊勝に由るが故に、此れ殊勝なり。一には差別の殊勝に由る、二には共不共の學處の殊勝に由る、三には廣大の殊勝に由る、四には甚深の殊勝に由る。

釋曰　〔二〕此の中の問答は諸の菩薩の學する所の尸羅を攝す。聲聞等に於て大差別有るが故に殊勝と名く。又此の増上戒等の三學は、卽ち前に說く所の波羅蜜多の自性に攝せらる。何の故に別に立つるや。先に說く所の波羅蜜多の別義に於て建立することを、今當に顯示すべし。展轉して相ひ因たる性を顯はさんが爲の故に、三學を別立す。謂はく尸羅に依りて靜慮を發生し、復靜慮に依りて般若を發生すればなり。

論曰　差別の殊勝とは、謂はく菩薩の戒に三品の別有り、一には　〔三〕律儀戒、二には攝善法戒、三には饒益有情戒なり。此の中、律儀戒は、應に知るべし、〔四〕二戒を建立する義の故なり。攝善法戒は、應に知るべし、一切の佛法を修集することを建立する義の故なり。饒益有情戒は、應に知るべし、一切の有情を成就することを建立す義の故なり。

釋曰　差別の殊勝とは、謂はく聲聞等には唯一種の律儀戒のみ有りて、攝善法戒と及び饒益有情戒とは無し。菩薩は三を具す、是の故に殊勝なり。

論曰　共不共の學處の殊勝とは、謂はく諸の菩薩は一切の性罪は現行せざるが故に聲聞と共に相似す。遮罪は現行すること有るが故に彼れと不共なり。此の學處に於て聲聞には犯なるも、菩薩には

【一】菩薩地の中に菩薩の律儀を說けるものとして陳譯には十地經と地持論とを擧げ、無性釋には地持論の尸羅波羅蜜多品を擧ぐ。

【二】陳譯には此の一段の釋文は全く今と異りて、戒の廣釋として十一種の義を擧ぐ、但し隋譯は此の釋と同じ。

【三】律儀戒は隋譯には守護戒とし陳譯には攝正護戒となせり。

【四】二戒を建立云云とは之を根本として他の二戒を建立すとの義なり。

修行圓滿するなり。是の如く唯一の補特伽羅なるも位の差別するが故に、五種を建立す。譬へば〔六一〕預流一來不還の如し。説の如く三無數大劫を經て佛の菩提を得ば、無始の生死にて數施等を修し數、諸佛に値ふは、何れの時に齊るや。最初に修する三無數劫と名くるが故に、伽他を以て此の問を顯釋す。「清淨と增上との力」とは、謂はく善根力と及び大願力となり。〔六二〕善根力に由りて、應に知るべし、所治も降伏すること能はず。大願力に由りて、應に知るべし、常に諸の善知識に値ふ。「堅固心の昇進す」とは、謂はく牢固の心を發して增進行を起すなり。牢固の心とは、應に知るべし、發せし所の大菩提心にして、諸の惡友の力も能く捨てしめざるなり。增進行とは、應に知るべし、現在及び生々の中に善法常に增して、終いに退滅すること無きなり。餘の義は了じ易し、煩はしく重ねて釋すること無し。

〔六一〕預流等は小乘の行位なる四果の差別をいふ、これ一人の行者の修行の昇進に應ずる位の區別なれば、之を例として前說を證す。

〔六二〕此の句は隋譯に「中に於て善根力とは散亂等も破壞すること能はず、應に知るべし」と、陳譯も亦同意なり。

與に法樂を受用することを爲し、及び一切の有情を成熟することを爲す。「是の如きの法門は是れ到彼岸藏の所攝なり」とは、此の中、一切の大乘の敎法は皆通說して到彼岸藏と名く。是の如く引く所の十地の法門は、是れ彼の藏の攝にして聲聞藏に非ず。彼の攝に由るが故に、一切地の中に皆一切の波羅蜜多を修す。是の如く諸地は遍く一切の諸の佛國土に於て、一切の諸佛同じく宣說する所なり。是の故に最勝なり。[五四]此の法門は是れ最勝なるに由るが故に、最初の時に最勝の處に於て說く。此の處は高廣、殊妙、堅牢なるが故に、最勝と名く。

〔修時章第五〕

論曰 復次に凡そ幾時を經て諸地を修行し圓滿することを得べきや。五の補特伽羅有りて、三無數の大劫を經。謂はく勝解行の補特伽羅は、初の無數大劫を經て、修行圓滿す。清淨增上の意樂行の補特伽羅と及び有相行、無相行の補特伽羅とは、前の六地と及び第七地とに於て第二の無數大劫を經て修行圓滿す。卽ち此の無功用行の補特伽羅は此より已上第十地に至り、第三の無數大劫を經て修行圓滿す。此の中に頌有り。

[五五]清淨と增上との力にて　　堅固心の昇進するを
菩薩の初修の　　無數の三大劫と名く。

釋曰 「五の補特伽羅有り、[五六]三無數大劫を經」とは、謂はく勝れたる解行の補特伽羅は、[五七]解行地の中に於て初の無數大劫を經て修行圓滿す。既に圓滿し已つて眞如に通達するが故に、清淨增上の意樂行の補特伽羅を成ず。[五八]此の清淨增上の意樂行は十地の中に遍く、此の、六地に在るを有相行[五九]の補特伽羅と名け、第七地に在るを[六〇]無相有功用行の補特伽羅と名く。此れ第二の無數大劫を經て修行圓滿す。第八地に入りて無功用行の補特伽羅と名く。此に無功用の行は猶未だ成滿せず、若くは第九、第十地の中に至りて無功用の行を方に成滿することを得。此れ第三の無數大劫を經て

【五四】此の解釋は十地經の解釋に依る、十地經は華嚴經の一品として佛成道の最初に菩提道場にて說けるが故に最初の時、最勝の處の說といふ、高廣、殊妙等は華嚴經の說なり。

【五五】此の頌は隋譯に「淨妙と勝上の力にて、牢固心轉た勝る、菩薩の三僧祇を說いて正修行と名く」と。

【五六】三阿僧祇を行位に配する異說等に就ては陳譯釋論に委說せり、參照。

【五七】解行地とは十信より十迴向に至る十地以外の修行位をいふ、此の位には未だ無分別智を得されば眞如を證せず、故に解行地と稱す、隋譯には信行地といひ、陳譯には願行地といふ。

【五八】清淨增上の意樂行とは初地に入りて眞如を知見せる行者をいふ、隨つて十地の初後に通ずる名稱なれば十地の中に遍しといふ、而も修行の進轉に應じて其の知見に相違あるが故に有相行等の別名を生ず。

【五九】有相行とは六地以前は所觀の境は有相なるが故なり。

【六〇】無相有功用とは第七に至れば所觀の境は無相となるも、能觀の心には功用あるが故なり。

多を說かば、卽ち此の處に於ては方便善巧等の四波羅蜜多は其の中に攝在す。若し是の處に於て[四九]十種の波羅蜜多を宣說すれば、[四九]此の中唯無分別智のみを說いて名けて般若波羅蜜多と爲し、其の餘の方便善巧等の四波羅蜜多は後得智に攝す。是の故に、後の四種の地の中に於て、餘の四種の波羅蜜多を修す。「方便善巧波羅蜜多」とは、謂はく後の四の中先づ第一に說く。「諸の有情と共に」とは、謂はく此の善を以て諸の有情と共にし、共有する所の如くなるを今當に顯示すべし。謂はく此の善を以て無上正等菩提を願求するは、諸の有情の一切の義利を作し、要ず菩提を證せしめて、此の意方に遂ぐ。是の故に若し是の如きの思惟有らば、所有の善根を皆悉く無上菩提に迴向して、諸の有情の一切の義利を作す。是の如きを名けて「諸の有情と共にす」と爲す。方便善巧とは般若と及び大悲とを顯示す、謂はく前の六波羅蜜多の集むる所の善根を以て諸の有情と共にするは、此れ大悲に由る。迴して無上正等菩提を求めて、帝釋等の富樂の果を求めざるは、[五〇]了知に由るが故に煩惱を起さず、此れ卽ち般若なり。又方便善巧を具足するに由りて生死を捨てず、而も染汚無し。是の故に說いて方便善巧波羅蜜多と名く。「謂はく種々の微妙なる大願を發し、當來の波羅蜜多の殊勝なる衆緣を引攝す」とは、此れ願波羅蜜多の所作の事業を顯示す。此の願は卽ち是れ波羅蜜多なり。是の故に願波羅蜜多と名く。「當來」と言ふは、謂はく當來の爲なり。此れは是れ所爲にして[五一]第七轉聲、(卽ち)當來の爲の故に種々の願を發すたり。餘の契經に二種の力有り、謂はく思擇力と及び修習力となりと說けり。若し未だ修習力を有せざる者なりと雖も、[五二]思擇力に由り精進して波羅蜜多を修習するが故に、此の波羅蜜多に由りて[五三]無間に現行すと說く。此れ力波羅蜜多の所作の事業を顯示するなり。「謂はく前の六波羅蜜多に由りて妙智を成立し、法樂を受用し、有情を成熟す」とは、謂はく般若波羅蜜多の無分別智の自性等に由るが故に、是の如き後得の妙智を成立す。復此の智に由りて前の六波羅蜜多を成立す。此に由りて自ら同法の者と

【四九】　十波羅蜜を說く時は般若には無分別智(正體智)のみを攝し、後得智は後の四波羅蜜に攝す。

【五〇】　了知に由るとは菩提を求むる大智に由るの意。

【五一】　所爲にして第七轉聲とは梵語の格を示すものにして所爲を示す爲格は第七格に當るが故なり轉聲とは格により て語尾の轉化あるが故に格のことを轉聲と稱す。

【五二】　思擇力とは諸法の是非得失を簡擇する慧の力なり。

【五三】　無間に現行云云とは此の思擇力に由りて障惑を對治するが故に六度の行は不斷に相續して現行すとの意。

滿」と名け、第十一の佛地の法身を說いて「成辦」と名くるなり。一切の因の中にて、佛地に生ずる者を最も殊勝と爲す。是の故に說いて「能く正しく後々の勝因を攝受す」と言ふ。

論曰 增勝に由るが故に、十地の中に別に修する十種の波羅蜜多を說く。前の六地に於て修する所の六種の波羅蜜多は、先に已に說けるが如し。後の四地の中に修する所の四とは、一には方便善巧波羅蜜多なり、謂はく前の六波羅蜜多の集むる所の善根を以て、諸の有情と共に迴して無上正等菩提を求むるが故に。二には願波羅蜜多なり、謂はく種々の微妙なる大願を發して、當來の波羅蜜多の殊勝なる衆緣を引攝するが故に。三には力波羅蜜多なり、謂はく思擇と修習との二力に由りて、前の六種の波羅蜜多をして世間に現行せしむるが故に。四には智波羅蜜多なり、謂はく前の六波羅蜜多に由りて、妙智を成立し法樂を受用して有情を成熟するが故に。又此の四種の波羅蜜多は應に知るべし。般若波羅蜜多の無分別智と後得智との攝なり。又一切地の中に於て、一切の波羅蜜多を修習せざるに非ず。是の如きの法門は是れ波羅蜜多藏の所攝なり。

釋曰 「增勝に由るが故に、十地の中に別に修する十種の波羅蜜多を說く」とは、謂はく[四六]十地の中に是の如きの說を作さく、初地は布施波羅蜜多[四七]を最も增勝と爲し、其の餘の一切の波羅蜜多は修習せざるに非ず、力に隨ひ分に隨ふ。乃至第十地は智波羅蜜多を最も增勝と爲す、其の餘の一切の波羅蜜多は修習せざるに非ず、力に隨ひ分に隨ふと。是の故に說いて言く「增勝に由るが故に、十地の中に別に修する十種の波羅蜜多を說く」と。若し總相を說かば、一切地の中に皆一切の波羅蜜多を修す。「前の六地に於て修する所の六種の波羅蜜多は先に已に說けるが如し」とは、次第に別に修する十種の波羅蜜多を顯示するなり。[四八]次前の經の如きは、先に布施波羅蜜多を說き、最後に智波羅蜜多を說けり。今此の論の中には、先に說く所少しく具足せざるが如し。謂はく後の四地に修する所の四種の波羅蜜多は、先に未だ說かざる所なり。若し是處に於て唯六種の波羅蜜

【四六】 十地の中とは十地經の中の意。

【四七】 增勝に由るとは地地に皆十度あるも其の中最も增勝なるものを擧げて十地に配當して特別に修せしめ、其の餘は行者の力に應じて分に隨ひて之を修すとの意なり。

【四八】 十地經を指す。

〔修相章第四〕

論曰　此の諸地を修することは云何が見るべきや。謂はく諸の菩薩は地地の中に於て、奢摩他[三八]、毘鉢舍那[三九]を修するに、五(種の)相の修に由る。何等をか五と爲すや。謂はく集總修。無相修。無功用修。熾盛修。無喜足修なり。是の如きの五修は諸の菩薩をして五果を成辦せしむ。謂はく念々の中に一切の麁重の依止を消融し。種々の想を離れ、法苑の樂を得。能く正しく周遍せる無量にして分限の相無き大法の光明を了知し。淸淨分に順じて分別する所無く無相現行し、爲に法身をして圓滿し成辦せしめ。能く正しく後々の勝因を攝受す。

釋曰　一一の地に五相の修有るが如きを今當に顯示すべし。奢摩他、毘鉢舍那を修するに皆五相に由りて並びに修習することを得るなり。謂ゆる「念々の中に一切の麁重の依止を消融す」とは、謂はく煩惱障及び所知障の無始の時より來、熏習せる種子を說いて麁重と名け、此の二障の聚は[四〇]總法を緣する止觀の智力に由りて、念々に消融す。此の中の意は障聚の[四一]破壞を取るが故に消融と名く。或は羸損せしむるが故に消融と名く。「種々の想を離れて法苑の樂を得」とは、契經等の法[四二]は種々の性に住す、[四三]是の如き種々の性の想を遠離すれば、即ち是れ法苑の樂を證得するなり。中に於て居るべきが故に名けて苑と爲す。[四四]復餘義有り、[四五]隨所に受と尋伺との法の中に於て、麁顯の領納觀察を起さず、但止觀の憶念の光明に由りて、微細なる領納觀察を起すとなり。「能く正しく周遍し無量にして分限の相無き大法の光明を了知す」とは、謂はく正しく十方無邊の分限の相無きに了達するなり。善く文字を習誦するが如き光明を法の光明と名く。「淸淨分に順じて分別する所無き無相現行す」とは、謂はく事を成辦する諸の相應法を、「淨分に順じて分別する所無き無相現行す」と名く。「事を成辦す」と名く。「法身をして圓滿し成辦せしめんが爲に、能く正しく後々の勝因を攝受す」とは、謂はく第十地の法身を說いて「圓

【三八】奢摩他(Śamatha)は止又は寂靜と譯す、心の散亂を靜めて一境に住せしむるをいふ。

【三九】毘鉢舍那(Vipaśyanā)は觀と譯す、正慧を以て事理を觀察すること。

【四〇】總法を緣ずとは無相の眞如を緣ずること。

【四一】破壞云云とは對治すべき惑障は之を滅し、然らざるものは其の力を減損すとの意なり。

【四二】種々の性に住すとは所化の衆生の根性等に應じて種々の教法あり、或は前後相違して疑惑を生ず、此の故に無相に住して其の差別の執を離るゝなり。

【四三】隋譯には「法の中に種々の想を離るれば、法樂中に於て樂を得、餘の樂を謂ふには非ず、此の中樂とは謂はく內樂なるが故に」となせり。

【四四】以下別の解釋を出す、陳譯には之を缺く。

【四五】隨所の云云とは所に隨って或は受或は尋或は伺、いづれにてもといふ意なり。

達を應に修して合せしむべし、能く合し難きを合して相應せしむるが故に極難勝と名く。何が故に六地を名けて現前と爲すや。謂はく此の地の中には緣起の智に住し、此の智力の無分別に由りて最勝なる般若波羅蜜多に住し、而も現前することを得、一切法の無染無淨なるを悟る。第七地に於ては當に有行[三二]を成ずべし。第八地の中には當に無行[三三]を成ずべし。何が故に七地を名けて遠行と爲すや。謂はく此の地の中には功用の行に於て究竟に至ることを得。[三四]一切の相は動搖すること能はずと雖も、而も[三五]無相に於て猶有行と名く。何が故に八地を名けて不動と爲すや。此の地の中には有ゆる諸相と及び一切の行とは皆動ずること能はざるに由り、無分別智は任運にして流行す。何が故に九地を名けて善慧と爲すや。此の地の中には無礙[三六]の解智を說いて名けて慧と爲すに由る。此の慧は妙善なるが故に善慧と名く。何が故に十地を名けて法雲と爲すや。此の地の中に有する所の總じて一切法を緣ずる智は、譬へば大雲の如く、陀羅尼門三摩地門は猶淨水の如くなるに由る。此の智の藏する所は雲の水を含むが如く。又大雲の能く虛空を覆ふが如し。是の如く總じて一切法を緣ずる智は普く能く諸の廣大の障を覆滅す。「又法身に於て能く圓滿す」とは、大雲の起りて虛空に周遍するが如く、是の如く此の智は諸の菩薩の所依の法身に於て悉く能く周遍す。此の中には圓滿の意を周遍と說く。

〔得相章第三〕

論曰　此の諸地を得ることは云何が見るべきや。四種の相に由る。一には勝解を得、謂はく諸地に深く信解することを得るが故に。二には正行を得、謂はく諸地と相應する十種[三七]の正法の行を得るが故に。三には通達を得、謂はく初地に於て法界に達する時、遍く能く一切の地に通達するが故に。四には成滿を得、謂はく諸地を修して究竟に到るが故なり。

釋曰　「成滿を得」とは、應に知るべし、爾の時諸地を修習し已つて究竟に至る。

【三二】有行とは有功用の行。

【三三】無行とは無功用の行。

【三四】此の釋文にては遠行の意明了ならず、陳譯には之に次いで「加行の功用心の中に於て最も後邊に在るが故に遠行と稱す」と論本を釋せり。

【三五】專一に無相を止むるが故に無相といふ相を執するが故に猶有相の行といふ、陳譯には「無相及び一切相に於て、功用を作す心及び惑は動ずること能はざるが故に」となし、更に細釋せり。

【三六】四無礙智のこと。

【三七】十種の正法の行とは陳譯釋論に十七地論の說を引いて之を擧ぐ、尙此の一段は釋文甚だ簡なるも陳譯には細釋せり、參照。

る所なるに由るが故に。大法光明の依止する所なるが故なり。何が故に四地を説いて焔慧と名くるや。諸の菩提分法は一切の障を焚滅するに由るが故なり。何が故に五地を極難勝と名くるや。眞諦の智と世間の智とは更互に相違す、此の合し難きを合して相應せしむるに由るが故なり。何が故に六地を説いて現前と名くるや。緣起の智を所依止と爲し、能く般若波羅蜜多をして現在前せしむるに由るが故なり。何が故に七地を説いて遠行と名くるや。功用の行の最後の邊に至るが故なり。何が故に八地を説いて不動と名くるや。一切の相と有功用の行とは動ずること能はざるに由るが故なり。何が故に九地を説いて善慧と名くるや。最勝無礙の智を得るに由るが故なり。何が故に十地を説いて法雲と名くるや。總じて一切の法を緣ずる智を得、一切の陀羅尼門、三摩地門を含藏すること、譬へば大雲の如く、能く空の如き廣大なる障をも覆ふに由るが故なり。又法身に於て能く圓滿するが故なり。

釋曰　何が故に初地を名けて極喜と爲すや。此の時に於て初めて能く自他を俱に利するを辨ずる勝れたる堪能を得るに由るが故なり。諸の聲聞等は眞の現觀する時、唯能く自利を辨ずる堪能を得るのみにて、他利を得ざるが故に、彼は是の如き歡喜を生ずるも諸の菩薩に同じからず。何が故に二地を名けて離垢と爲すや。此の地の中には性戒[二六]成就するに由る。初地の如く思擇して戒を護るに非ずして、性戒を成ずるが故に、諸の犯戒の垢は已に極めて遠く離る。何が故に三地を名けて發光と爲すや。此の地の中には三摩地[二七]と三摩鉢底[二八]とは常に相ひ離れず、退轉すること無きに由るが故に、大乘の法に於て能く光明と作る。何が故に四地を名けて焔慧と爲すや。此の地の中には最勝の菩提分法に安住するに由る。此に住するに由るが故に、能く一切の根本煩惱[二九]と及び隨煩惱とを燒きて皆灰燼と爲すなり。何が故に五地を極難勝と名くるや。此の地の中には眞諦[三〇]の智は是れ無分別なりと知り、諸の世間の工論[三一]等の智は是れ有分別なりと知るに由る。此の二の相

行を行じ、所入成立するを地と爲す、初地に於て一切に通達すと雖も然も諸地を成立するが故に」とある、更に陳譯の釋文には通別の二を分ち、門行を修するが故に十地差別すと爲せり。

【二五】　隋譯には梵名に依りて三摩地、三摩鉢底とし本釋論も亦梵名を出せり。

【二六】　性戒とは犯と護とに關せざる自性清淨の戒なり。

【二七】　三摩地(Samādhi)は普通には三昧と稱す、定又は正受、等持等と譯す。

【二八】　三摩鉢底(Samāpatti)は定の特殊の名にして論本には等至と釋せり。

【二九】　根本煩惱とは貪瞋痴等の如き根本となる煩惱をいふ。

【三〇】　眞諦の智とは出世間の眞智、即ち解脱に導く聖智なり。

【三一】　工論等とは學藝技術等の世俗の智をいふ。

謂はく此の中に於て本より雜染無し、性染無きが故なり。既に雜染無ければ即ち清淨も無し。若し是の如く知らば六地に入ることを得。「種々の法に差別無き義」とは、謂はく此の中に於て契經等の法に種々の差別を安立すること有りと雖も、(二一)而も異り有ること無し。若し是の如く知らば七地に入ることを得。「不增不減の義」とは、謂はく此の中に於て雜染の滅する時、而も減有ること無く、清淨の增す時、而も增すこと有ること無し。「相自在の依止の義」とは、謂はく此の法界は是れ相自在の依止する所なり、諸相の中に於て而も自在を得るを相自在と名く、欲する所の相に隨ひて即ち現前するが故なり。「土自在の依止の義」とは、謂はく此の法界は是れ土自在の依止する所なり、現ずる所の土に於て自在を得るを土自在と名く、土をして金等の寶を成ぜしめんと欲すれば、意に隨つて成ずるが如き故なり。若し是の如く知らば八地に入ることを得。「智自在の依止の義」とは、謂はく此の法界は辯を礙ふること無き智自在の所依なり。若し是の如く知らば九地に入ることを得。(二二)「業自在等の依止の義」とは、謂はく此の法界は是れ身等の業自在の所依なり、及び(二三)陀羅尼、三摩地門の自在の所依なり。若し是の如く知らば十地に入ることを得。「是の如き無明は聲聞等に於ては染汙に非ず」とは、彼は諸地に入ることを欲せざるに由るが故なり。初地の中に於て已に能く一切の諸地に通達す。何の故に次第に復諸地を立つるや。此の難を釋せんに、(二四)初地の中にて一切地に達すと雖も　然も此に住するに由りて安住を得。此の住する力に由りて諸地を建立するなり。

〔立名章 第二〕

論曰 復次に何が故に初地を說いて極喜と名くるや。此に由りて最初に、能く自他の義利を成辦する勝れたる功能を得るが故なり。何が故に二地を說いて離垢と名くるや。極めて犯戒の垢を遠離するに由るが故なり。何が故に三地を說いて發光と名くるや。退轉すること無き等持、(二五)等至の依止す

は「遠去現行微細故」とありて陳譯の釋と同意に解釋し得らる、然るに今の釋は本より身に隨逐して起る倶生のものと解すべし。

〔一四〕下乘の涅槃とは生死の過惡を怖れて專ら之を捨てんと欲すること。

〔一五〕麁相の現行とは染淨の麁相を執して無相に住する能はざるをいふ。

〔一六〕細相の現行とは未だ諸行の相續相を離るゝこと能はず、流轉の生に執するをいふ。

〔一七〕作行とは作意力に依りて爲す行をいふ。

〔一八〕不作とは無作の意にして無功用の行をいふ。

〔一九〕北洲の人云云、北拘盧州の人を指す、此の洲は須彌四洲中最も上勝にして人壽千歲、衣食自然に具はる故に人に我所取なしといふ。

〔二〇〕諸佛は眞如の所顯なれば相續すと雖其の體異り無し。

〔二一〕種々の法を安立施設するも同一味なるが故なり。

〔二二〕業自在とは衆生化益の爲に三身三業を現すると自在の意なり。

〔二三〕陀羅尼云云とは佛の一切の法藏に意の如く通達すること。

〔二四〕此の答は意明了を缺く、隋譯には「所行に隨つて彼の

復次に應に知るべし、是の如き無明は聲聞等に於ては染汚に非ず、諸の菩薩に於て是れ染汙なり。

釋曰[七]彼の因果に依りて修位差別す、故に問答して言ふ。「云何が十相の所知の法界なりや」と、謂はく「初地の中には遍行の義に由る」より乃至「第十地の中には業の自在依止の義と陀羅尼門、三摩地門自在依止の義とに由る」までの、十種の相に由りて法界は知るべきが故に、「十相の所知の法界」と名く。謂はく地々の中に、各一相の所知の法界有り、無明の力に由りて了知すること能はず。是の如きの無明を對治せんと欲するが爲の故に、十地を立つ。又所治の障に其の十種有るが故に十地を立つ。何等をか名けて所治の十障と爲すや。一には[八]異生性、二には諸の有情に於ける身等の邪行。三には遲鈍の性、聞思修に於て忘失すること有り。四には[九]微細の煩惱現行して、身見等と倶に生ず。[一〇]此れ[一一]最も下品に攝するが故に、[一二]不作意の縁なるが故に、[一三]遠く隨つて現行するが故に、應に知るべし是れ微細なることを。五には[一四]下乘に於ける般涅槃。六には[一五]麁相の現行、七[一六]には細相の現行。八には無相に於ける[一七]作行。九には有情を饒益する事に於ける[一八]不作の行。十には諸法の中に於て未だ自在を得ず。「遍行の義」とは、謂はく此の法界は一切行に遍く、少法として無我に非ざること無きを以ての故なり。若し是の如く知らば初地に入ることを得。「最勝の義」とは、謂はく此の法界は一切の法の中にて最も殊勝と爲す。若し是の如く知らば二地に入ることを得。「勝流の義」とは、謂はく大乘經なり、此れより流るる所を最も殊勝と爲す。若し是の如く知らば三地に入ることを得。「無攝受の義」とは、謂はく此の中に於て我所を計すること無く、我所を攝すること無く、[一九]北洲の人の如く繫屬有ること無し、此の法界に於て、若し證を得る時は、其の中に都て我所有りと謂ふこと無し。若し是の如く知らば四地に入ることを得。[二〇]「相續無差別の義」とは、謂はく此の中に於て體異り有ること無く、眼等の如きも諸の有情に隨つて相續差別して各々異り有るに非ず。若し是の如く知らば五地に入ることを得。「雜染と淸淨と無き義」とは、

【七】此の一段の釋も陳譯には更に詳細を盡くす。

【八】異生性とは凡夫性のことにして我法二執を有する有情をいふ。

【九】微細の煩惱とは法執分別の種子を體となす。

【一〇】次の三句は微細の理由を擧ぐ。

【一一】最下品とは菩薩の心を染汚すること能はざるが故に微細といふ。

【一二】不作意の緣とは分別起にあらずして倶生起なるが故に微細といふ、然るに陳譯には「思惟に隨つて起るが故に」となし、正思惟と相應して起り、菩薩の一切智を障ふと解せり、又隋譯にも「意念の所緣なるが故に」となせり、されば今の釋の不作意とは其の義を異にせず。

【一三】遠く隨つて現行すとは陳譯には「已に本の所行に隨順する事を遠離するが故に」として之を解釋せり。隋譯に

彼修差別分第六

〔對治章　第一〕

論曰　是の如く已に彼に入る因果を說けり。彼を修する差別は云何が見るべきや。菩薩の十地に由る。何等をか十と爲すや。一には極喜地[1]、二には離垢地[2]、三には發光地[3]、四には焰慧地[4]、五には極難勝地[5]、六には現前地、七には遠行地、八には不動地、九には善慧地、十には法雲地なり。是の如きの諸地を安立して十と爲すことは云何が見るべきや。十種の無明の所治の障を對治せんと欲するが爲の故なり。所以は何ん。十相の所知の法界に於て、十の無明の所治の障の住する有るを以てなり。云何が十相の所治の法界なりや。謂はく初地の中には遍行の義に由る、第二地の中には最勝の義に由る、第三地の中には勝流の義に由る、第四地の中には無攝受の義に由る、第五地の中には相續無差別の義に由る、第六地の中には雜染と清淨と無き義に由る、第七地の中には種々の法の無差別の義に由る、第八地の中には不增不減の義と、[6]相自在依止の義と土自在依止の義とに由る、第九地の中には智の自在依止の義に由る、第十地の中には業の自在依止の義と陀羅尼門、三摩地門の自在依止の義とに由る。此の中に三頌有り、

遍行と最勝との義と　及び勝流の義と
是の如き無攝の義と　相續無別の義と、
雜染と淨と無き義と　種々無別の義と
不增不減の義と　四の自在依の義と、
法界の中に十の　不染汚の無明有り
此の所治の障を治す　故に十地を安立す。

【一】極喜地は他の諸譯には歡喜地となす。
【二】離垢地は陳譯には無垢地となす。
【三】發光地は隋譯は照明地とし、陳譯は明焰地となす。
【四】焰慧地は隋譯は焰地となし、陳譯は燒然地となす。
【五】極難勝地は他の諸譯は難勝地となす。
【六】隋陳兩譯には相自在依止と土自在依止の二義を第九地の初めに入れ第八地は不增不減の一義となす、但し釋論には本釋と同じく第八地に於て解釋せり。

生は皆是れ無常なり、波羅蜜多の果は無常に非ず、「乃至妙菩提の座に安坐す」と說くに由るが故に。又彼の勝れたる生は、唯能く自らを利するも他を利すること能はず、彼れ常に能く現して有情に義利を作することを說かざるに由る。波羅蜜多の得る所の勝果は、「常に能く現して一切の有情に一切の義利を作す」是の如きを名けて、諸の到彼岸は無罪等の勝果の義利を得と爲す。

〔互顯章　第十一〕

論曰　是の如き六種の波羅蜜多の互に相ひ決擇することを云何が見るべきや。世尊は、此の一切の六種の波羅蜜多に於て、或は有る處所には[26]施の聲を以て說き、或は有る處所には戒の聲を以て說き、或は有る處所には忍の聲を以て說き、或は有る處所には勤の聲を以て說き、或は有る處所には定の聲を以て說き、或は有る處所には慧の聲を以て說く。是の如き所說に何の意趣有りや。謂はく[27]一切の波羅蜜多の加行を修する中に於て、皆一切の波羅蜜多有りて、互に相ひ助成す。是の如きの意趣なり。

釋曰　三百頌の般若波羅蜜多等の[28]經の中に於て、本、一の波羅蜜多を說かんが爲に乃ち一切の波羅蜜多を說く。是の如き說に於て何の意趣有りや。一を修する時に於て一切相ひ助く。應に知るべし此の中に、是の意趣有り。謂はく施を修する時、身語を防護す、此れ戒波羅蜜多有りて相ひ助成するに由る。[29]乃至、施の因果を了知するは、此れ慧波羅蜜多有りて相ひ助成するに由る。其の餘の相ひ助くることも應の如く當に知るべし。

論曰　此の中に一[30]嗢拕南頌有り、曰く

數と相と及び次第と　訓辭と修と差別と
攝と所治と功德と　互に決擇するとを應に知るべし。

釋曰　次第に前を頌す、其の文了じ易し。

【二六】施の聲、聲は隋陳兩譯には名となせり、即ち施波羅蜜の名に依りてすべての波羅蜜を說くの意なり餘も亦例して知るべし。

【二七】此の句は隋譯に「諸波羅蜜の中に、一波羅蜜を修する時、諸餘の波羅蜜は皆來りて助成す」とあり意義一層明了なり。

【二八】般若經の度攝品を指す。

【二九】乃至して。此には中間を略したるも陳譯には之を委說せり、參照。

【三〇】嗢拕南は偈頌のこと、前に已に註せり。

するの義を云何が見るべきやと問ふなり。「此に由りて能く一切の善法を攝す」とは、應に知るべし、此の波羅蜜多は能く具足して一切の善法を攝するに由りて、彼れも亦能く波羅蜜多を攝するなり。應に知るべし。此の中、「一切の善法」とは、即ち是れ一切の菩提分法なり。[一七]「是れ其の相なるが故に」とは、是れ般若の相なり。「是れ隨順なるが故に」とは、應に知るべし、即ち是れ[一八]信輕安等なり。「是れ[一九]等流なるが故に」とは、謂はく六神通及び十力等の諸の餘の功德なり。

〔對治章　第九〕

論曰　是の如き所治に諸の雜染を攝することを云何が見るべきや。是れ此の相なるが故に、是れ此の因なるが故に、是れ此の果なるが故なり。

釋曰　到彼岸に諸の白法を攝することは前に已に顯示せるが如し。此の所對治も亦一切諸の雜染の法を攝することを今當に顯示すべし。「是れ此の相なるが故に」とは、是れ貪等の相なり。「是れ此の因なるが故に」とは、是れ慳等の因にして、謂ゆる不信及び邪見等なり。「是れ此の果なるが故に」とは、謂はく慳、犯戒、忿等の諸果なり。

〔功德章　第十〕

論曰　是の如き六種の波羅蜜多の得る所の[二〇]勝利は云何が見るべきや。謂はく諸の菩薩は生死に流轉するも[二一]富貴の攝なるが故に、[二二]大生の攝なるが故に、大明大屬の所攝なるが故に、廣大の事業の加行の成就する所攝なるが故に、諸の惱害無く、性塵垢薄きの所攝なるが故に、善く一切の[二三]工論明處を知るの所攝なるが故に、勝れたる生にして罪無く、乃至妙菩提の座に安坐して常に能く現じて一切の有情に一切の義利を作す。是を勝利と名く。

釋曰　[二四]今當に波羅蜜多の得る所の勝利を顯說すべし。「勝れたる生にして罪無し」とは、外道の、勝れたる生を得と雖も、而も有罪と名くるが如きに非ずとなり。[二五]雜染汚の故に。又彼の勝れたる

【一七】　相とは體相の義、隋譯には「彼の體相の故に」とあり、陳譯には「彼の性となすを以ての故に」とある。
【一八】　信、輕安等は善の心所法なれば波羅蜜に隨順せるものといふ。
【一九】　等流とは波羅蜜より等流せる果なり。
【二〇】　勝利とは釋文に在るが如く勝果の義利、即ち果報の他に勝れたることを顯はす。
【二一】　富貴の攝なりとは富貴にして自在なりの意、帝釋梵天等に生を受くることをいふ。
【二二】　大生とは人間界に於ける勝上の果報を顯はす。
【二三】　工論明處とは隋譯に「一切の工巧等の明處論」とあり、五明の中工巧明の一を擧げて他を等取したるもの、故に諸科の學術の意に解すべし。
【二四】　此の一段の釋に陳譯及び無性釋には六勝を六度の因行に配して示せり。
【二五】　此の句は外道の勝生の有罪なる理由を示す。

此の中の三精進の體の解釋する所なり。「被甲精進」に由るが故に最初に勢有り、「加行精進」に由るが故に加行時に於て能く精勤有り「怯弱無く退轉無く喜足無き精進」に由るが故に其の次第の如く、此の後の時に於て勇有り、堅猛にして、善軛を捨てざるなり。故に此の三に由りて彼の五句を釋す。所以は何ん。或は最初に無上正等菩提を求めんが爲に勢力有りと雖も、而も加行時に策勵する能はざること有るが故に、勤有りと說く。復勤心有りと雖も或は怯弱なり、彼を對治せんが爲の故に勇有りと說く。勇有るに由るが故に心に退屈無し、應に知るべし怯弱は卽ち是れ退屈心なり。怯むこと無しと雖も生死の苦に逢はば心或は退轉せん、此に由りて求むる所の佛果を退失す。彼を對治せんが爲に退轉無しと立つ。退轉無しとは卽ち是れ堅猛なり、故に退轉無しとは堅猛を顯示す。堅猛に由るが故に苦に逢ふも退かず。有るは苦に逢ふて能く退轉せずと雖も、而も少善を得て便ち喜足を生ず、此に由りて無上菩提を證せず。是の故に次に須らく喜足無しと說くべし。是れ少しも喜足を生ずることを得ざる義なり。此れ卽ち善軛を捨てざることを顯示す。是の義に由るが故に三の精進を說く。三靜慮の中「安住靜慮」とは、此に由りて能く現法樂住に安んずるなり。「引發靜慮」とは、此に由りて六種の神通を引發するなり。「所作の事を成する靜慮」とは、謂はく此に依るが故に所作の有情を利する事を成立す、是の故に說いて所作の事を成ずと名く。此の義に由るが故に靜慮に三有るなり。慧體を安立するに三種有る中、其の義了じ易し。

〔攝章　第八〕

論曰　是の如き相攝を云何が見るべきや。此に由りて能く一切の善法を攝す。是れ其の相なるが故に、是れ隨順なるが故に、是れ等流なるが故なり。

釋曰　「是の如き相攝を云何が見るべきや」とは、此れ是の如き波羅蜜多と諸の善法と互に相攝

〔一四〕彼を滅するも能く異熟の功能を與ふ、或は彼の惡趣に往く力を對治すとなり。

〔差別章第七〕

論曰 此の諸の波羅蜜多の差別は云何が見るべきや。應に知るべし、一一に各三品有り。施の三品とは、一には法施、二には財施、三には無畏施なり。戒の三品とは、一には律儀戒、二には攝善法戒、三には饒益有情戒なり。忍の三品とは、一には怨害に耐ふる忍、二には苦を安受する忍、三には法を諦察する忍なり。精進の三品とは、一には被甲精進、二には加行精進、三には怯弱無く退轉無く喜足無き精進なり。靜慮の三品とは、一には安住靜慮、二には引發靜慮、三には所作の事を成ずる靜慮なり。慧の三品とは、一には無分別加行の慧、二には無分別の慧、三には無分別後得の慧なり。

釋曰 此の波羅蜜多の品の差別を宣說する中に於て體性に各三の差別を顯示す。此の中、何が故に法施等の三種の差別を說くや。謂はく「法施」に由るが故に他の善根を資け、「財施」に由るが故に他身を資益し、〔一五〕「無畏施」に由るが故に他心を資益す。是の因緣を以ての故に三施を說く。三種の戒の中、「律儀戒」とは、是れ依持の戒にして、其の餘の二の戒を建立せんと欲するが爲に、是の故に安立す。所以は何ん、律儀に住する者は便ち能く「攝善法戒」を建立し、此に由りて一切の佛法を修集して大菩提を證す。復能く「益有情戒」を建立し、此に由るが故に能く有情を成熟す。三種の忍の中、「怨害に耐ふる忍」とは、能く他の作す所の怨害を忍受するなり。有情を饒益する事を勤修する時、此の忍の力に由りて生死の苦に遭ふも退轉せず。「苦を安受する忍」とは、能く正しく遭ふ所の衆苦を忍受するなり。此の忍の力に由りて生死の中に於て衆苦を受くと雖も退轉せず。「法を諦察する忍」とは、能く諸法を審諦し觀察するに堪ふるなり。此の忍の力に由りて次前に說く所の二忍を建立す。三の精進の中、其の體の差別は、即ち薄伽梵の契經の中に說けるが如し。〔一六〕「勢有り、勤有り、勇有り、堅猛にして、善軛を捨てず」と。彼の經の五句は即ち是れ

【一四】彼を滅するも云云の釋は言簡にして解し難し、彼とは惡業障なり、障を滅するも倘異熟の果を得るは菩薩の願力に依る生死なり、隋譯には稍明了に釋して「善の樂欲に由るが故に、無力にして能く果報を與ふるが故に」といふ、此に無力とは業障に與果の力無きをいふ、倘陳譯參照。

【一五】無畏施とは外より逼らるゝ一切の恐怖を除かしむること。

【一六】隋譯には「是勢力、是精進、是堪能、是堅牢超越、是不捨重軛」とあり。

たる異熟を得しむ、是を菩薩の大志の意樂と名く。又諸の菩薩は復是の如き六の到彼岸の集むる所の善根を以て、諸の有情と共に迴して無上正等菩提を求む、是を菩薩の純善の意樂と名く。是の如く菩薩は、此の六種の意樂に攝する所の愛重の作意を修す。又諸の菩薩は、餘の菩薩の六種の意樂の修習と相應する無量の善根に於て深心に隨喜す。是の如くして菩薩は、此の六種の意樂に攝する所の隨喜の意樂を修す。又諸の菩薩は、深心に欣樂して一切有情の六種の意樂に攝する所の六種の到彼岸を修し、亦自身も此の六種の到彼岸の修と恒に相ひ離れず。乃至、妙菩提の座に安坐せんことを願ふ。是の如くして菩薩は此の六種の意樂に攝する所の欣樂の作意を修す。若し此の菩薩の六種の意樂に攝する所の作意の修を聞き已つて、但當に能く一念の信心を起すもの有るも尙當に無量の福聚を發生し、諸の惡業障も亦當に消滅すべし。[二二]何に況んや菩薩をや。

釋曰　五種の修の中「現起加行の修」とは、謂はく現起の加行に於て修するなり。「所作の事を成ずる修」とは、謂はく諸の如來は法身に安住し、無功用の所作有りて佛事し常に休息無し、其の六種の波羅蜜多に於て現行無しと雖も、然も諸の有情を攝益せんが爲の故に、恒常に現行して所作の事を成ず。「爾所の時に於ける一一の[二三]刹那」とは、假使は三無數劫の量を以て一刹那と爲し、是の如き刹那の積集せる時量なり。「乃至菩提より爾所の時を經る一一の刹那に假使頓に一切の身命を捨つ等」は其の義了じ易し。應に本文に隨ふべし。此の如く次第に積集せる時量より乃し菩提に至るまで爾所の時を經る一一の刹那に、假令、一の戒等の心を起さんが爲にも、三千大千世界の中に滿てる熾火に處在し、恒に一切の資生の衆具に乏しとは、此の言は住處の艱難と資緣の乏少とを顯示するなり。此の中、意樂に厭足有ること無しとは當に知るべし、卽ち是れ廣大の意樂なり。卽ち此の長時に恒に間斷無しとは、當に知るべし、卽ち是れ長時の意樂なり。長とは久しきなり。餘の義は了じ易し。「諸の惡業障も亦當に消滅すべし」とは、此の中の意を說かば、

【二二】此の句は陳譯には「若し人但聞くすら尙無量無邊の福德を得、何に況んや菩薩は盡く能く修行するをや」と其の意明了なり。

【二三】刹那の解釋に就ては陳譯及び無性釋を參照せよ。

に於て忿怒の過失の爲に惱まされず、他の苦を生ぜざるが故に安隱を得るなり。

〔修習章第六〕

論曰 云何が應に是の如き波羅蜜多を修習することを知るべきや。應に知るべし、此の修に略して五種有り、一には現起加行の修、二には勝解の修、三には作意の修、四には方便善巧の修、五には所作の事を成ずる修なり。此の中、四修は前に已に說けるが如し。「所作の事を成ずる修」とは、謂はく諸の如來は任運に佛事して休息有ること無く、其の圓滿なる波羅蜜多に於て復更に六到彼岸を修習するなり。又「作意の修」とは、謂はく六種の意樂に攝する所の愛重、隨喜、欣樂の作意を修するなり。（六種の意樂とは）一には廣大の意樂、二には長時の意樂、三には歡喜の意樂、四には荷恩の意樂、五には大志の意樂、六には純善の意樂なり。若し諸の菩薩は、乃至若干の無數大劫に、無上正等菩提を現證し、爾所の時を經る一一の刹那に假使頓に一切の身命を捨て、及び殑伽河沙に等しき世界を以て七寶を盛滿して如來に奉施し、乃至妙菩提の座に安坐するも、是の如き菩薩の布施の意樂は猶厭足無し。爾所の時を經る一一の刹那に、假使三千大千世界に中に熾火を滿じ、四威儀に於て常に一切の資生の衆具に乏しきも、戒、忍、精進、靜慮、般若の心は恒に現行し、乃至妙菩提の座に安坐するも、是の如き菩薩の有する所の戒、忍、精進、靜慮、般若の意樂は猶厭足すること無し。是を菩薩の廣大の意樂と名く。又諸の菩薩は即ち此の中に於て厭くこと無き意樂にして、乃至妙菩提の座に安坐して常に間息無し、是を菩薩の長時の意樂と名く。又諸の菩薩は其の六種の波羅蜜多を以て有情を饒益し、此の所作に由りて深く歡喜を生じ、益を蒙る有情の及ぶこと能はざる所なり、是を菩薩の歡喜の意樂と名く。又諸の菩薩は其の六種の波羅蜜多を以て有情を饒益し、彼れは已に於て大恩德有りと見るも、自身は彼れに於て恩有りと見ず、是を菩薩の荷恩の意樂と名く。又諸の菩薩は即ち是の如き六の到彼岸の集むる所の善根を以て、深心に一切の有情に迴施し、可愛の勝果

【一】菩薩の歡喜の念は其の教益を受けたる有情の歡喜の情よりも更に深大なりとの意。

論曰　何の因緣の故に、是の如く六種の波羅蜜多を此の次第に說くや。謂はく前の波羅蜜多は隨順して後の波羅蜜多を生ずるが故なり。

釋曰　是の如き六種の波羅蜜多は前は後を生ずるに依りて此の次第を說く。

〔次第章　第四〕

論曰　復次に此の諸の波羅蜜多は名言を訓釋するに云何が見るべきや。諸の世間と聲聞と獨覺との施等の善根に於て、最も殊勝と爲し能く彼岸に到る。是の故に通じて波羅蜜多と稱す。又能く慳恪と貧窮とを破裂し、及び能く廣大の財位と、福德の資糧とを引得するが故に名けて施と爲す。又能く惡戒と惡趣とを息滅し、及び能く善趣と[八]等持とを取得するが故に名けて戒と爲す。又能く忿怒と怨讎とを滅盡し、及び能く善く自他の安隱に住するが故に、名けて忍と爲す。又能く有らゆる懈怠と惡と不善との法を遠離し、及び能く無量の善法を出生し其をして增長せしむるが故に精進と名く。又能く有ゆる散動を消除し、及び能く內心の安住を引得するが故に靜慮と名く。又能く一切の見趣と諸の邪惡の慧とを除遣し、及び[九]能く眞實に品別に法を知るが故に名けて慧と爲す。

〔立名章　第五〕

釋曰　今當に名言を訓釋することを顯示すべし。且らく總名を釋せん。此の一切は能く彼岸に到るに由り、是の故に說いて[一〇]波羅蜜多と名く。諸の世間、聲聞、獨覺の施等の彼岸を超ゆ、是の故に通じて波羅蜜多と名く。次に別名を釋せん。因時に於て慳を破して惠み施するを以て、果時に能く一切の貧窮を裂き、及び果時に於て大財位と廣福の資糧とを引くが故に、名けて施と爲す。又因時に於て諸の惡戒を息むるを以て、果時に能く一切の惡趣を滅し、及び未來に於て能く善趣を取り、現在世に於て能く等持を得るが故に、名けて戒と爲す。是の如く一切の波羅蜜多の言詞を訓釋することは、應の如く當に說くべし。「及び能く善く自他の安隱に住す」とは、謂はく自身

【八】　等持とは定の異名。

【九】　隋譯に「眞如の法及び種類の法を知ることを得るが故に」といひ、陳譯には「能く眞相を緣じ、其品類に隨って一切法を知る」といへり。

【一〇】　波羅蜜多(Pāramitā)到彼岸と譯す又は意を取りて單に度といふ。

善巧の最勝に由る、謂はく無分別智に攝受せらるゝが故に。五には迴向の最勝に由る、謂はく無上正等菩提に迴向するが故に。六には淸淨の最勝に由る、謂はく煩惱と所知との二障は無障にして集起する所なるが故に。若し施は是れ波羅蜜多なりや、設くは波羅蜜多は是れ施なりや。施にして波羅蜜多に非ざる有り。應に四句を作るべし、其の施に於けるが如く、是の如く餘の波羅蜜多に於ても亦四句を作ること應の如く當に知るべし。

釋曰 何等の相を以て施等は波羅蜜多と名くることを得るや。諸の世間及び聲聞等も亦施等有るに由り、是の故に決定して應に其の相を說くべし。謂はく六の最勝を施等の相と爲す。所依の最勝とは、謂はく菩提心を所依止と爲すなり。[四]事の最勝とは、謂はく[五]一として內外の事に於て具足して現行するもの有ること無し、唯菩薩のみ有りて能く具さに現行す。處の最勝とは、謂はく一切の有情を利益し安樂するを以て處と爲す。方便善巧の最勝とは、謂はく[六]三輪淸淨是なり。此の中に取る所は方便善巧なり、施物と施者と受者との三は分別無きに由るが故に。是の如く無分別智に攝せらるる施等を波羅蜜多と名くることを得。「迴向の最勝」とは、謂はく施等を以て無上正等菩提を迴求するなり。「淸淨の最勝」とは、謂はく佛果に至れば、施等方に淨なればなり。爾の時、煩惱と所知との二種の障礙の集起する所を解脫するが故に。「若し施は是れ波羅蜜多なりや、設くは波羅蜜多は是れ施なりや」とは、是れ問なり。答の中に於て、施にして波羅蜜多に非ざる有り」とは、六種の最勝を離れて布施を行ずるを謂ひ、「波羅蜜多にして施に非ざる有り」とは、六種の最勝に攝せらるる戒等を謂ふ。[七]「亦は施亦は波羅蜜多なる有り」とは、六種の最勝に攝せらるる布施なり。「施に非ず波羅蜜多に非ざるもの有り」とは、六種の最勝を離れて戒等を行ずるを謂ふ。是の如く一切處に四句を作ること應に知るべし。

【四】事の最勝とは陳譯には「品類無等」となす。

【五】一としては一人としての意。

【六】三輪淸淨とは次に擧ぐる施物と施者と受者の三に於いていづれも貪着を離れたる施をいふ。

【七】此の句以下三句は論本に無きも問の意に應じて施と波羅蜜とに就て四句分別を示し、餘の波羅密に就ても亦然りと例示す、但し陳譯論本には施の四句を出す。

に攝受す。戒波羅蜜多に由るが故に、諸の有情に於て能く毀害せず。忍波羅蜜多に由るが故に、毀害に遭ふと雖も而も能く忍受す。精進波羅蜜多に由るが故に、能く助けて彼の應に作すべき所を經營し、卽ち是の如きの攝利の因緣に由りて、諸の有情をして成熟する事に於て堪任する所有らしむ。此より已後、心未だ定まらざる者には、其をして定を得しめ、心已に定まる者には、解脫を得しめ、開悟する時に於て、彼れ成熟することを得。是の如く隨順して一切の有情を成熟す。唯六の數を立つることは應に是の如く知るべし。

釋曰　所治の障を對治することを成立する中、「失壞の因とは、謂はく邪惡の慧なり」とは、顚倒して執取するを邪惡の慧と名く、諸の外道の如く邪惡の慧に由りて失壞するが故なり。餘の義知るべし。「諸の佛法の所依處を證す」とは、謂はく一切の佛法の因を證するが故なり。此の第二の成立の因緣に由りて、波羅蜜多は其の數唯六にして增さず減らざるなり。「此の不散動を依止と爲すが故に、如實に等しく諸法の眞義を覺る」とは、靜慮波羅蜜多に依止して、能く般若波羅蜜多を起して、如實に等しく諸法の眞義を覺するなり。餘の義は知る可し。第三の、數を成立する因緣の中、「隨順して諸の有情を成熟す」とは、謂はく隨順して一切有情の類を成熟せんが爲なり。故に唯六の數を立てて增さず減せず。「其の心未だ定まらざれば定を得しむ」とは、謂はく靜慮波羅蜜多を得るなり。心已に定を得れば解脫せしむ」とは、謂はく般若波羅蜜多を得るなり。「開悟する時に於て彼れ成熟することを得」とは、謂はく教授の時彼をして成熟せしむるなり。

〔相章第三〕

論曰　此の六種の相は云何が見るべきや。六種の最勝なるに由るが故に。一には所依の最勝に由る、謂はく菩提心を所依と爲すが故に。二には事の最勝に由る、謂はく具足して現行するが故に。三には處の最勝に由る、謂はく一切の有情を利益し安樂にする事を依處と爲すが故に。四には方便

の瑞相を次に當に顯示すべし。「前と及び此の法流に皆諸佛を見ることを得」とは、前とは謂はく意樂淸淨位の前なり。此とは、謂はく意樂淸淨位の中なり。皆佛を見ることを得るは是れ其の瑞相なり。「法流」と言ふは謂はく定位の中なり。意樂の勝利を次に當に顯示すべし。「菩提の近きを了知す、得難きこと無きを以ての故に」とは、謂はく此の位の中に於て、菩提の近く得らるるを見るなり。彼れ能く勝れたる方便を得るが故に、得ること難しと爲さず。此の三頌の中にて、淸淨なる增上意樂には、是の如きの資糧、是の如きの堪忍、是の如きの所緣、是の如きの作意、是の如きの自體、是の如きの瑞相、是の如き勝利有ることを顯示す。此の三頌に由りて淸淨なる增上意樂の有らゆる體相を成立せり。

〔成立六數章　第二〕

論曰　何の因緣の故に波羅蜜多は唯六數のみ有りや。所治の障を對治することを成立するが故に。諸の佛法の所依處を證するが故に。隨順して諸の有情を成熟するが故なり。發趣せざる因を對治せんと欲するが爲の故に。施と戒との波羅蜜多を立つ。發趣せざる因とは、謂はく財位に著すると及び室家に著するとなり。對治せんと欲するが爲に已に發趣すと雖も、復退還する因の故に、忍と進との波羅蜜多を立つ。退還する因とは、謂はく生死に處して有情の違犯より生ずる所の衆苦と、及び長時に於ける善品の加行より生ずる所の疲怠となり。對治せんと欲するが爲に、已に發趣し復退還せずと雖も、而も失壞の因の故に定と慧との波羅蜜多を立つ。失壞の因とは、謂はく諸の散動と及び邪惡の慧となり。是の如く所治の障を對治することを成立するが故に、唯六の數を立つ。又前の四波羅蜜多は是れ不散動の因なり。次の一波羅蜜多は不散動を成就す。此の不散動の依止と爲るが故に、如實に等しく諸法の眞義を覺りて、便ち能く一切の佛法を證得するなり。是の如く諸佛の法の所依處を證するが故に、唯六の數を立つ。施波羅蜜多に由るが故に、諸の有情に於て能く正

已に白法を圓滿し　及び利疾の忍を得て
菩薩は自乘の　甚深廣大の教に於て。
等しく唯分別のみなりと覺りて　無分別智を得
希求と勝解と淨なり　故に意樂清淨なり。
前及び此の法流に　皆諸佛を見ることを得
菩提の近きを了知す　得難きこと無きを以ての故に。

此の三頌に由りて總じて清淨なる增上意樂を顯はす。[一]七種の相有り、謂はく資糧の故に、堪忍の故に、所緣の故に。作意の故に。自體の故に。瑞相の故に。勝利の故に。其の次第の如く諸句の伽他は應に顯示せることを知るべし。

釋曰　是の如き清淨なる增上意樂には、何等の相有りて而も能く彼の波羅蜜多を攝するや。此の問に答へんが爲に、次に三頌を說いて其の相を顯示す。「已に[二]白法を圓滿す」とは、謂はく先に彼の勝れたる解行地に於て、善く資糧を備ふるが故に、此の中に於て白法を圓滿す。「及び利疾の忍を得」とは、忍に三品有り。謂はく軟、中、上なり。此の中、最上を利疾の忍と名く。是の所緣に由りて清淨を得ることを次に當に顯示すべし。「菩薩は自乘の甚深廣大の教に於て」とは、謂はく大乘に於けるを「自乘に於て」と名く。此の中、無量なる甚深廣大の事を宣說するが故に、法無我の性を甚深の事と名け、虛空藏等の諸の三摩地を廣大の事と名く。是の作意に由りて清淨を得ることを次に當に顯示すべし。「等しく唯分別のみなることを覺りて無分別智を得」とは、謂はく若し一切諸法は唯[三]分別のみ有ることを覺知すれば、即ち能く無分別智を獲得す。意樂の自體を次に當に顯示すべし。「希求と勝解と淨なり、故に意樂清淨なり」とは、欲と及び勝解と倶に清淨なるが故に意樂清淨なり。應に知るべし、此の中、欲を希求と名け、信を勝解と名く。意樂

【一】無性釋論には八種の相となし作意の故にの次に對治の故にの句を加ふ。

【二】白法とは雜染を離れたる清淨の法の意なり。

【三】分別とは心識の緣慮作用をいふ、此の句は唯識の理を證することを顯はす。

巻の第七

彼入因果分第五

〔因果位章　第一〕

論曰　是の如く已に入所知の相を說けり。彼に入る因果を云何が見るべきや。謂はく施と戒と忍と精進と靜慮と般若との六種の波羅蜜多に由る。云何が六波羅蜜多に由りて唯識に入ることを得るや。復云何が六波羅蜜多は彼に入る果を成ずるや。謂はく此の菩薩は財位に著せず、尸羅を犯さず、苦に於て動ずること無く、修に於て懈ること無く、是の如き等の散動の因の中に於て、現行せざる時は、心一境を專にし、便ち能く理の如く諸法を簡擇して唯識に入ることを得。菩薩は六波羅蜜多に依りて唯識に入り已つて、六種の淸淨なる增上意樂に攝する所の波羅蜜多を證得す。是の故に此に於て設ひ六種の波羅蜜多を現起する加行を離るるも、聖教に於て勝解を得るに由るが故に、及び愛重と隨喜と欣樂との諸の作意に由るが故に、恒常に無間に相應し方便して、六種の波羅蜜多を修習して速かに圓滿することを得るなり。

釋曰　若し爾の時に於て唯識に入ることを得れば、卽ち是の時に於て淸淨なる增上意樂の波羅蜜多を證得す。「現起する加行」とは、謂はく波羅蜜多を現行する加行なり。「聖教に由りて勝解を得」とは謂はく卽ち此の波羅蜜多と相應する聖教に於て、極めて甚深なりと雖も而も能く信解するなり。「愛重の作意」とは、謂はく卽ち彼れに於て勝れたる功德を見て深く愛味を生ずるなり。「欣樂の作意」とは、謂はく已に最勝の彼岸に到れる諸佛の所得の淸淨なる意樂の如く、我れ及び彼の一切の有情も亦當に證得すべきを願ふなり。

論曰　此の中に三頌有り、

の功德海の岸に趣くなり。是の如きの五頌は義を惣略すれば、謂はく第一頌は資糧道を顯はし、第二の初半は加行道を顯はし、後半と第三は見道を顯はし、第四の一頌は修道を顯はし、第五の一頌は究竟道を顯はす。

る」とは、謂はく諸義は唯意言を因と爲すことを了知するなり。「若し諸義は唯是れ言のみなりと知れば、即ち彼に似て唯心なりとの理に住す」とは、謂はく若し義に似たる顯現は唯是れ意言のみなりと了知すれば、即ち義に似て唯心なりとの正理に住するなり。「便ち能く眞の法界を現證す、是の故に二相を悉く蠲除す」とは、謂はく此によりて後に眞如を現證し、永く所取と能取との二相を離るとなり。現證に入るが如きは次に當に顯示すべし。「體は心を離れて別の物無きを知り、此に由りて即ち心は有に非ざるを會す」とは、體は心を離れて所縁の義無きを知る、彼れ有ること無きが故に、即ち能縁の心も亦有に非ざることを會するなり。「智者は二は皆無なりと了達す」とは、謂はく諸の菩薩は此の二は悉く皆是れ無なることを了達するなり。「等しく二の無なる眞の法界に住す」とは、謂はく平等に義を離れ心を離れたる眞實の法界に住するなり。「周遍して平等なるに常に順行す」とは、平等の中に於て隨順して行じ、契經等の一切の諸法は猶虚空の如しと觀ず、性平等なるが故なり。內外の諸法をば皆是の如く觀ずるが故に「周遍」と名く。常とは時の恒なり。「依の[八八]榛梗の如き過失の聚を滅するは、大良藥の衆毒を消すが如し」とは、滅とは除滅を謂ひ、依とは所依を謂ふ。即ち所依の中の雜染の法の因は極めて了り難きが故に、溪谷の林の榛梗に入り難きが如し。「過失の聚」とは是れ雜染の法にして熏習の自性なり。「佛の說きたまふ妙法は善く成立して[八九]慧を幷に根と法界との中に安ず」とは、謂はく佛の敎は善く其の慧を安じて眞如の中に及び能く彼を緣ずる根本心の中に置くに由る。根本心とは謂はく如來の有ゆる正敎を緣じて總じて一相と爲す、應に知るべし即ち是れ無分別の心なり。[九〇]「念趣は唯分別のみなることを了知す」とは、謂はく彼れ根本心に安住し已つて、正敎を說かんが爲に後得智に由りて諸の義趣を念じ、此の念趣は唯是れ分別のみなることを知るなり。「勇猛にして疾く德海の岸に歸す」とは、謂はく諸の菩薩は無分別智と及び後得智の巧方便とに由るが故に、速かに佛果

【八八】 榛梗とはいばら等の亂生せる叢林をいふ、此の句は隋譯には「所依の稠密罪想の聚」とあり、陳譯には「染依の稠密過聚の性」とある。釋に云ふが如く煩惱雜染に依止せることの知り難きは密林に入り難きが如きに喩へたるなり。

【八九】 此の句は諸譯區々にして意義稍明了を缺く、隋譯には「安心有根法界中」とあり、釋に依れば「心を有根法界の中に安んず」との意なるが如し、又陳譯には「安心有根於法界」とあり、釋には「此の有根の心を法界の中に安住す」とありて、今の釋とは異る、同じく玄奘譯の論本に依る無性釋の解する所は此の釋とは同じからずと雖も意義甚だ明了なり。

【九〇】 念趣は隋譯は念行とし、陳譯は憶念となす、後得智の中に憶念する所の義趣の意なり。

福德と智慧との二の資糧を　菩薩は善く備へて邊際無し
法に於て思量して善く決し已る　故に義趣は唯言の類のみなりと了る。
若し諸義は唯是れ言のみなりと知れば　卽ち彼れに似て唯心なりとの理に住し
便ち能く眞の法界を現證す　是の故に二相を悉く蠲除す。
體は心を離れて別の物無きを知り　此に由りて卽ち心は有に非ざることを會す
智者は二は皆無なりと了達し　等しく二の無なる眞の法界に住す。
慧者は無分別智の力にて　周遍して平等なるに常に順行し
依の榛梗の(如き)過失の聚を滅するは　大良藥の衆毒を消すが如し。
佛の說きたまふ妙法は善く成立して　慧を幷に根と法界との中に安じ
念趣は唯分別のみなることを了知し　勇猛にして疾く德海の岸に歸す。

釋曰　復現觀の伽他有り、經莊嚴論に說けるが如し。其の中解し難きを此に於て顯示す。「福德と智慧との二の資糧を、菩薩は善く備へて邊際無し」とは、資糧に二種有り、一には福德の資糧、二には智慧の資糧なり。謂はく[八三]施等の三波羅蜜多は是れ福德の資糧なり。第六の般若波羅蜜多は是れ智慧の資糧なり。精進波羅蜜多は二の資糧の攝なり。何を以ての故に、若し智慧の爲に精進を行ずれば是れ智慧の資糧にして、若し福德の爲に精進を行ずれば是れ福德の資糧なればなり。是の如く靜慮波羅蜜多も亦二種に通ず、若し[八四]無量を緣じて靜慮を修すれば是れ福德の資糧なり、[八五]餘は是れ智慧の資糧なり。是の如きの資糧は是れ誰が所有ぞ。謂はく諸の菩薩なり。「長遠に度し難きを「邊際無し」と名く。「無邊」といふ語は邊有ること無きに非ず、但多きを以ての故に無邊の稱を得るが如く、[八六]此も亦是の如し。「法に於て思量して善く決し已る」とは、必ず定に由りて後、諸法を思惟し方に善く決定す、餘の所能に非ざるが故なり。[八七]「義趣は唯言の類のみなりと了

【八三】布施、持戒、忍辱の三なり。
【八四】無量を緣して云云とは慈悲喜捨の四無量を緣じて靜定を修すれば、衆生を其の對境となすが故に福德に攝す。
【八五】餘とは生法二空等を緣ずる時なり。
【八六】今此處の無邊も數量の多きを顯はす語なり。
【八七】義趣とは他の諸譯には義類となす。

於て三性に悟入するなり。名事互に客と爲ると觀見するが故に、即ち是れ遍計所執性に悟入す。二種本より義有ること無く、唯分別の量有るのみ、唯名の自性差別の假立有るのみと觀見するが故に、即ち是れ依他起性に悟入す。[七八]亦此の分別をも觀見せざるが故に、即ち是れ圓成實性に悟入す。是の如きを名けて三性に悟入すと爲す。

論曰　復教授の二頌有り、[七九]分別瑜伽論に說けるが如し、

菩薩は定位に於て　影は唯是れ心のみと觀じ
義の想既に滅除し　審かに唯自想のみと觀ず。
是の如くして內心に住すれば　所取は有に非ざるを知り、
次に能取も亦無し(と知り)　[八〇]後に無所得に觸る。

釋曰　眞觀に入らんが爲に授くるに正教を以てし、此の義の中に於て、其の二頌を說く。「菩薩は定位に依りて影は唯是れ心のみと觀ず」とは、謂はく法に似、義に似たる影像は、唯是れ其の心のみと觀ずるなり。誰か能く觀ずるや、謂はく菩薩なり。何の位に在りてや。定の位に於てなり。[八一]「義の想既に滅除して、審かに唯自想のみを觀ず」とは、謂はく此の位の中に義の想は既に遣り、審かに法に似、義に似たる想は唯是れ自心のみと觀ずるなり。「是の如くして內心に住す」とは、自心を攝して無義に住するが如きは、即ち是れ心をして內心に住せしむるなり。「所取は有に非ざるを知る」とは、謂はく所取の義には所有無きことを了るなり。「次に能取も亦無し(と知り)」とは、所取の義既に是れ有に非ざるに由るが故に、能取の心の能取の性も亦成ずることを得ずとなり。「後に所得無に觸る」とは、謂はく此より後に眞如を觸證す。此の眞如は無所得なるに由るが故に無所得と名く。

論曰　復別に五の現觀の伽他有り、[八二]大乘經莊嚴論に說けるが如し、

【七八】前に能緣分別の識を許し名の自性差別を假立したるも、更に進んで其の能緣の分別識をも見ざれば圓成實性に入るなり。

【七九】分別瑜伽論は隋譯には觀行差別論と譯せり。

【八〇】此の句は隋譯には「故に無所得を證す」となす。

【八一】義の想とは心外に境有りとの想念をいふ。

【八二】現流の本にては第二眞實品の偈に相當するも五言の偈となせり。

に。十には生を受くる差別に由る、常に諸佛の大集會の中に於て生を攝受するが故に。十一には果の差別に由る、十力、無畏、不共の佛法の無量の功德の果を成滿するが故に。

釋曰 [七二]「涅槃の差別に由る」とは、菩薩の現觀は無住の大般涅槃を攝受するも、聲聞は爾らざるを以てなり。「清淨の差別に由る」とは、菩薩の現觀は永く煩惱及び諸の習氣を斷じて能く佛土を淨むるも、聲聞は爾らざるを以てなり。

論曰 此の中に二頌有り、

名と事と互に客と爲る　其の性を應に尋思すべし
二に於ても亦當に推すべし　唯量と及び唯假とのみ、
實智は無義にして　唯分別の三有るのみと觀ず
彼れ無きが故に此れ無し　是れ卽ち[七三]三性に入る。

釋曰 將に眞觀に入らんとするが故に二頌を說く。「名と事と互に客と爲る、其の性を應に尋思すべし」とは、謂はく名は[七四]事に於て客と爲り、事は名に於て客と爲る、[七五]彼の體に稱ふに非ざるが故なり。定に由りて觀ずるが故に「尋思す」と名く。「二に於ても亦當に推すべし、唯量と及び唯假とのみ」とは、應に義の自性差別も並びに無にして、唯、[七六]識量のみ有り、唯自性差別の假立のみ有りと推尋すべしとなり。「實智」と言ふは應に知るべし。卽ち是れ如實の遍智なり。謂はく四種の尋思を因と爲すに由りて發生する四種の如實の遍智なり。言ふ所の、「無義にして唯分別の三有るのみと觀ず」とは、謂はく[七七]義に於て本より所有無く、唯三種の虛妄分別のみ有りと觀ず。謂はく名の分別と自性の分別と、差別の分別となり。「彼れ無きが故に此れ無し」とは、謂はく義無きが故に分別も亦無し、何を以ての故に、若し所分別の義有らば能緣の分別も有るべし、義に所有無きに由るが故に、當に知るべし、分別も亦無し。「是れ卽ち三性に入る」とは、謂はく此の中に

[七二] 此の一段の釋文は極めて簡に過ぐ、陳譯及び無性釋には細說あり、參照せよ。

[七三] 三性は隋陳兩譯共に三無性となす。

[七四] 事とは名に依つて表はさるゝ事相なり、前には義といへり。

[七五] 名と事とは互に客となりて各別に相離れたるは名と事と一體にあらざるが故なり、隋譯に「各別の相なるが故に」といふ。

[七六] 量とは識の分別緣慮の作用故に識量といふ。

[七七] 名と事との自性と差別は所有無く假の施設なりとの意。

が成ずるや。謂はく[六二]外の無の中に於て已に決定せる者は、[六三]能取無きに於ても亦深く愛樂す。應に知るべし、[六四]利なる順忍の轉ずる時に於てなり。「是れ現觀の邊」とは、謂はく現觀の時の義なり。

論曰 是くの如くして菩薩は已に地に入り已に[六五]見道を得、已に唯識に入れり。修道の中に於て云何が修行するや。所說の如く安立する十地の一切の經を攝して皆現前する中に於て、總法を縁ずる出世の後得の止觀の智に由るが故に、無量百千[六六]倶胝那庾多劫を經て數修習するが故に、而も轉依を得て、三種の佛身を證得せんと欲するが爲に、精勤し修行す。

釋曰 「所說の如く安立する十地に於て」とは、謂はく[六七]隨說して安立する菩薩の十種の地の中に於てとなり。「總法を縁ずるに由り」とは、謂はく[六八]總相を縁じて分別して縁ずるに非ず。「出世」と言ふは無分別智なり、後得は即ち是れ[六九]能成立の智なり。此れ應に唯是れ世間と說くべからず、世間に於て未だ積習せざるに由るが故に。亦應に唯出世間と說くべからず、世間に隨つて現前するに由るが故に。是の因緣に由りて[七〇]定說すべからず。「而も轉依を得」とは[七一]總を縁ずる智に由るが故に轉依を得。「三種の佛身を證得せんと欲するが爲に精勤修行す」とは、謂はく我當に三種の佛身を證すべきが故に勤めて修行す。

論曰 聲聞の現觀と菩薩の現觀とには何の差別有りや。謂はく菩薩の現觀と聲聞との異は十一種の差別に由る。應に知るべし、一には所縁の差別に由る、大乘の法を以て所縁と爲すが故に。二には資持の差別に由る、大なる福と智との二種の資糧を以て資持と爲すが故に。三には通達の差別に由る、能く補特伽羅と法との無我に通達するを以ての故に。四には涅槃の差別に由る、無住の大涅槃を攝受するが故に。五には地の差別に由る、十地に依りて出離するが故に。六と七とは清淨の差別に由る、煩惱と習とを斷じ、佛土を淨むるが故に。八には自他に於て平等心を得る差別に由る、有情を成熟する加行は休息すること無きが故に。九には生の差別に由る、如來の家に生まるゝが故

は無なりと觀ずる唯識の觀智に於て下品の愛樂を起すとは此の智に對する欲求の念の微弱なるをいふ。隋譯には「無塵の中に於ける薄少の樂欲」といふ。以下之に準じて解すべし。

【六二】外の無とは外境無の意、決定せる者とは決定せる智を得たる者の意なり。

【六三】能取無とは外境を縁取する內識も亦無の意。

【六四】利とは智の作用の猛利なること。

【六五】見道とは無漏の正智初めて眞理を照す時をいふ、初地の入心に在り。

【六六】倶胝那庾多(Koti nayuta) 倶胝は普通には千萬と譯し、那庾多又那由多は億と譯す。

【六七】隨說して云云。十地經の如きに隨つて說くとの意。

【六八】總相を縁ずとは一一の相を各別に縁せずして全體を一相として其の通相を縁ずること、即ち眞如を縁ずるなり。

【六九】能成立の智とは差別の諸法を能く成立する智の義。

【七〇】定說すべからずとは後得智は世間智とも出世間說とも一定して說く能はずとの意。

【七一】總を縁ずる云云とは總相を縁ずる無分別智に依りて識を轉じて智となすの意。

るは、即ち彼の種子は是れ所緣の相なることを顯示せんと欲するが爲なり。是の如く說き已りて、彼の種子の因と果とを倶に斷ずるを顯はす。若し無分別智にて、一切の障を斷じて佛法を證得すれば、此の後得智は復何の所用ぞや。[五二]無分別智は諸の因果の法を宣說する能はず、無分別なるが故に。是の因緣に由りて後得智を須ひ有らゆる諸の因果の法を宣說して常に顚倒無し。譬へば幻師の所幻の事に於けるが如し。「一切の阿賴耶識の所生」とは、阿賴耶識を因と爲すを謂ふ。「一切の了別と相との中」とは、謂はく識を因と爲す見相分の中なり。後得智に由りて幻等の如くに見及び宣說する時には皆顚倒無し。[五三]

論曰　此の唯識性に悟入する時に於て四種の三摩地有り、是れ四種の[五四]順決擇分の依止なり。云何が應に知るべきや。應に知るべし四尋思に由る。下品の無義の忍の中に於て[五五]明得三摩地有り、是れ煖の順決擇分の依止なり。上品の無義の忍の中に於て[五六]明增三摩地有り、是れ頂の順決擇分の依止なり。復四種の如實遍知に由りて已に唯識に入り、無義の中に於て已に決定を得、[五七]眞義の一分に入る三摩地有り、是れ諦の順忍の依止なり。此より無間に唯識の想を伏する無間三摩地有り、是れ[五八]世第一法の依止なり。應に知るべし、是の如きの諸の三摩地は是れ[五九]現觀の邊なり。

釋曰　一切處に於て眞觀に入る時には、皆四種の順決擇分有り。故に此の中に於ても亦應に顯示すべし。「是れ順決擇分の依止」とは、謂はく決擇分の因として所依止の義なり。「下品の無義の[六〇]忍の中に於て明得三摩地有り」とは、謂はく[六一]無義の中に於て下品の愛樂を起す。其の明の名を以て下品の無義の智を顯はし、三摩地の名は此の無義の智の所依止の定を顯はす。「上品の無義の忍の中に於て」とは、謂はく無義の中に於て上品の愛樂を起す。「明增三摩地有り」とは、謂はく明の名を以て上品の無義の智を顯はし、三摩地の名は此の無義の智の所依止の定を顯はす。「諦の順忍の依止」とは、法無我の理を諦と名け。此の忍、彼れに順ずるを諦の順忍と名く。此れ云何

【五二】以下は後得智の用を示す、即ち無分別智は自證究竟の智なれば言慮を絕するも利他に出づる時は說法利生す、これ後得智なり。
【五三】此の一段は無性釋に細釋あり。
【五四】順決擇分とは此の段に說く所の煖、頂、忍、世第一の四位をいふ、蓋し眞實決擇分に順ずる義なり、又無漏智起りて眞理を知見する見道に近づく準備行なるが故に加行位ともいふ。
【五五】明得三摩地とは唯識觀の慧日漸く明かならんとする意を顯はす。
【五六】明增三摩地とは前の唯識觀漸次進み智明轉た盛なる意を顯はす。
【五七】眞義とは所取を空とするのみならず能取をも空となし、境も識も空なりと知るをいふ。
【五八】世第一法とはこれより無間に見道に入るが故に凡夫位の究竟なりとの意。
【五九】現觀の邊とは隋譯には正位の邊といひ、陳譯には是れ菩薩の非安立諦觀に入る前方便なりといふ、即ち加行位のことなり。
【六〇】忍とは認可の義にして智用の決定せるに名く。
【六一】無義の中云云とは外境

入り、善く法界に達し、如來の家に生じ、一切の有情と平等なる心性を得、一切の菩薩と平等なる心性を得、一切の佛と平等なる心性を得、此を即ち名けて菩薩の見道と爲す。

釋曰 「如來の家に生ず」とは、此に由りて能く諸佛の種性をして斷絶無からしむるが故なり。「一切の有情と平等なる心性を得」とは、我れ自身に般涅槃せんと欲するが如く、一切の有情も亦是の如しと、是の思を作すに由るが故なり。「一切の菩薩と平等なる心性を得」とは、菩薩と等しき意樂を得るに由るが故なり。「一切の佛と平等なる心性を得」とは、此の位の中にて佛の法身を得、此を證得するに由るが故に、一切の佛と平等なる心性を得。[四七] 又「一切の有情と平等なる心性を得」とは、謂はく自他の平等性なることを證するが故に、自身に於て衆苦を盡さんと欲するが如く、他に於ても亦爾なり。「一切の菩薩と平等なる心性を得」とは謂はく一切の菩薩と意樂と加行とは皆平等なるが故なり。「一切の佛と平等なる心性を得」とは、彼の法界と已の法界と差別無きを觀るが故なり。

論曰 復次に何の義の爲の故に唯識性に入るや。總法を緣ずる出世の止觀の智に由るが故に。此の後得の種々の相識の智に由るが故に、[四八] 及び相の阿賴耶識の諸相の種子を斷ぜんが爲に、能く法身に觸るゝ種子を長ぜんが爲に、[四九] 所依を轉ぜんが爲に、一切の佛法を證得せんと欲するが爲に、一切智智を證得せんと欲するが爲に、唯識性に入るなり。又後得智は一切の阿賴耶識の生ずる所の一切の了別と相との中に於て、幻等の性の如く、倒に轉ずること無きを見るなり。是の故に菩薩は、譬へば幻師の所幻の事に於けるが如く、諸相の中及び因果を說くに於て常に顚倒無し。

釋曰[五〇] 「總法を緣ずる出世の止觀の智に由るが故に」とは、謂はく止觀所顯の智に由るが故なり。「及び相の阿賴耶識の諸相の種子を斷ぜんが爲に」とは、此の中、「及び相の」とは是れ及び因の義なり。阿賴耶識の中に於ける諸の雜染の法の種子を「阿賴耶識の諸相の種子」と名く。[五一] 復相を擧ぐ

【四七】 以下は別義を出す。

【四八】 及び相の阿賴耶識云云は隋譯には「有因相の阿黎耶識の一切の因相種子」となし、陳譯には「共本の阿黎耶識の中の一切の有因の諸法の種子」となす。次の釋論に「及び相」とは「及び因」の義なりとあれば因相としての阿賴耶識を指すものと見るべし、陳譯釋論及び無性釋を參照せよ。

【四九】 所依云云とは所依の識を轉じて智となすこと。

【五〇】 總法とは眞如のこと。

【五一】 復相を擧ぐる云云は此に諸相の種子といふ相の語に依りて能熏の果相を示すとなり、故に次に種子の因と果とを俱に斷ずといふ。

く。是の如くして圓成實性に悟入す。

論曰　此の中に頌有り、

法と補特伽羅と　　法と義と略と廣と性と
不淨と淨と究竟とは　　名の所行の差別なり。

釋曰　前に說く所の如く一切の義の無分別の名に住すとは、何等をか名と爲し、幾くの品類の義ありや。此の問に答へんが爲に、頌を以て名と類との差別を顯示す。此の中、法の名とは謂はく色受、眼耳等なり。補特伽羅の名とは、謂はく佛及び[四〇]隨信行等なり。又法の名とは、契經等を謂ひ、義の名とは此の法に依る義を謂ふ。略の名とは、有情等を謂ひ、廣の名とは、彼の一一の各別の[四一]能詮を謂ふ。性の名とは諸字の本母を謂ひ、不淨の名とは諸の[四二]異生を謂ひ、淨の名とは有學等を謂ひ、究竟の名とは一切の法の總相の所緣を謂ふ。是れ諸の菩薩の所緣の名類にして、略して十種有り。一には法の名、謂はく眼等なり。二には補特伽羅の名、謂はく我等なり。三には法の名、謂はく十二分敎なり。四には義の名、謂はく此の十二分敎の所詮の諸義なり。五には略の名、謂はく一切法、(有)爲、無爲等なり、六には廣の名、謂はく色受等及び虛空等なり。七には性の名、謂はく[四三]阿字を初めと爲し訶字を後と爲す。八には不淨の名、謂はく諸の異生なり。九には淨の名、謂はく諸の[四四]諦を見るものなり。十には究竟の名、謂はく一切法の總相の所緣なり。卽ち是れ二智の所緣の境界なり。謂はく出世の智と及び後得智とは一切法の眞如實際を以て所緣と爲すが故に、[四五]一切法の種々の相別を以て所緣と爲すが故に、十地等の如し。[四六]此の中の意は、一切の義の總相を緣ずる智の所緣の境界を取る。是の如き品類は是れ諸の菩薩の名の所行の別なり。

論曰　是の如く菩薩は唯識性に悟入するが故に、所知の相に悟入す。此に悟入するが故に、極喜地に

【四〇】隨信行とは修行の階位に於ける最初のものを擧げて、例示す。
【四一】能詮とは名字のこと、有情の中に各別の名あるをいふ。
【四二】異生とは舊譯には凡夫といふ。
【四三】梵語の字母の初と後とを擧げ中間を略す、卽ち三十七の字母をいふ。
【四四】諦を見るものとは眞諦の理を知見するもの、卽ち聖者をいふ。
【四五】十地等の如しとは十地の觀法の中には地地各別の法を所緣となすが故なり。
【四六】此の中の意とは本文の趣意はとの義。

す。「一時に現して種々の相と義とに似て生起するが故に」とは、謂はく種々の[三六]名、句、文の相に似て生起するが故に、及び[三七]種々の此を依止とする義に似て生起するが故にとなり。此の中、繩の喩は三種の自性に悟入することを顯示す。「實に非ざる六相の義を伏除する時」とは、謂はく六相の義を遣滅する時に於てとなり。此の中、遣滅を名けて伏除と爲す。

論曰　是の如く菩薩は意言の似の義相に悟入するが故に、遍計所執性に悟入す。唯識に悟入するが故に、依他起性に悟入す。云何が圓成實性に悟入するや。若し已に意言の聞法熏習の種類の唯識の想を滅除すれば、爾の時菩薩は已に義想を遣りて、一切の似義は生ずることを得べき無きが故に、似の唯識も亦生ずることを得ず。是の因緣に由りて、一切の義の無分別の名に住し、[三八]法界の中に於て便ち現見と相應して住することを得。爾の時菩薩は平等平等なる所緣、能緣の無分別智を已に生起するを得。此に由りて菩薩は已に圓成實性に悟入すと名く。

釋曰　「意言の似の義相に悟入するが故に遍計所執性に悟入す」とは、謂はく諸の義は唯是れ遍計分別の所作のみなることを知る。是に由るが故に遍計所執の自性に悟入すと言ふ。「唯識に悟入するが故に、依他起性に悟入す」とは、[三九]其の唯識を擧ぐるも即ち意言を取る。一切は唯意言の性のみなることを了知し、此に由りて依他起性に悟入す。「一切の似義は生ずることを得べき無し」とは、謂はく是の如き品類の實義は、其れに似て生ずべき無きが故にとなり。「似の唯識も亦生ずることを得ず」とは、謂はく唯識の相も亦起ることを得ず。何を以ての故に、識有る時は即ち義有りと計するが故なり。是より已後は眞如を現證す。此の現證の位は宣說すべからず。內の自證なるが故なり。「爾の時菩薩は平等平等なる所緣能緣の無分別智を已に生起するを得」とは、所緣とは眞如を謂ひ、能緣とは眞智を謂ふ。此の二は平等たり。譬へば虛空の如し。即ち是れ所取能取の二種の性の義に住せず、所取、能取を分別せざるに由る。是の故に說いて無分別智と名

【三六】名、句、文の相とは文字語句のことにして教說に於ける能詮の言教、論本に所謂文をいふ。

【三七】此の句は名字を所依として表現せらるゝ意義即ち所詮の義理をいふ、隋譯には「彼亦名を依とする所目の義に似て種々の相生ずるが故に」となす。

【三八】眞如法界を證得して現住するの意、隋譯には「正しく法界を證し相應して住す」となし、陳譯には「證得を得て眞如法界に住す」となせり。

【三九】唯識に悟入すといひて「唯識」の語を擧ぐるも、此には唯識の意言の意味に取るべしとなり。

釋曰 [二八] 是の如く悟入することを今當に顯示すべし。「四の尋思に由る」とは、謂はく名と義との自性等とに由るとの文の顯說する所なり。「及び四種の如實遍智に由る」とは、謂はく名と事との自性と差別とに由りて假立する」等の文の顯說する所なり。如實の遍智の若くは名、若くは事の自性差別は、皆是れ假立にして、中に於て實の義は皆得べからず。是の故に說いて「是の如く皆同じく得べからざるが故に」と言ふ。[二九] 又先に若くは名若くは義の自性と差別とは、唯是れ假立なることを推求し、後には如實に是の如きは眞實に皆得べからずと知る。推求する時に於ては名けて尋思と爲す。若し如實に得べからざるを知る時は、卽ち四種の如實の遍智と名く。

論曰 此の唯識性の中に悟入するに於て、何の所に悟入するや。如何が悟入するや。唯識性と相見の二性と及び種々の性とに入る。若くは名若くは義と自性差別と假の自性差別の義と是の如き [三〇] 六種は義皆無きが故に、所取、能取の性現前するが故に、一時に現じて種々の相と義とに似て生起するが故なり。闇中の繩は顯現しては蛇に似るが如し。譬へば繩の上の蛇は眞實に非ざるが如し、有ること無きを以ての故なり。若し已に彼の義無きことを了知すれば、[三一] 蛇覺は滅すと雖も繩覺は猶在り。[三二] 若し微細なる品類を以て分析すれば此れ又虛妄なり。[三三] 色香味觸を其の相と爲すが故に。[三四] 此の覺を依と爲せば繩覺も當に滅すべし。是の如く彼の文に似、義に似たる六相の意言に於て、實に非ざる六相の義を伏除する時、唯識性の覺も猶蛇覺の如く亦當に除遣すべし。圓成實の自性の覺に由るが故なり。

釋曰 今此の中に於ては悟入する所と及び悟入の譬とを問ふ。「唯識性」とは唯識のみ有る性なり。「相見の二性」とは有相有見の識を顯示す。因に似、建立する所に似て顯現するが故に名けて相と爲す。「種々なる性」とは、唯是れ一の識の顯現なるも有に似たる種々なる相生ず。速疾に非ざるが故に別々にして現ず。此の唯識性の中に悟入するに於て、[三五] 是の如きの三種を悟入する所と爲

【二八】 此の一段は陳譯には修行の階位に配して唯識觀を委說せり、又名と義に就ても細釋あり、參照。

【二九】 此の一段に四尋思と四如實智の區別を明かせり、後に說く順決擇分の四位の中、煖頂の二位は四尋思の初と後、忍と世第一法の二位は四如實智の初と後とに當る。

【三〇】 六種の義とは名と名の自性と差別と及び義と義の自性と差別となり。

【三一】 蛇覺とは蛇の知覺の義、繩覺といふも亦爾り。

【三二】 繩を其の構成要素に微細に分析すれば繩の相なし、故に虛妄なりといふ。

【三三】 色香味觸は繩を造る要素なり。

【三四】 此の覺とは色等の繩の要素を知覺すること。

【三五】 以上の三種の說は論本の何の所に悟入するやの問に答へ、次の喩說は如何か悟入するやに答ふ。

し安立する一切の相の中に於て、作意する所無く、分別する所無きに由る」とは、謂はく加行して無分別智の轉ずる時、理の如く作意して一切の定心に住し、諸相の作意分別を皆斷ず。「分別を斷ずるが故に」とは、謂はく[二三]現前の色等の現住すると及び[二四]骨鎖等の、定の安立する所の一切の所緣の諸の境界の相に於て、皆作意せず、分別する所無く、無分別の方便に由りて能く入る。若し異の分別ならば終いに入ること能はず。「現前に自然に住し」等の頌は、唯最後の所斷の義を顯はすのみ。

論曰 何に由つて云何にして悟入することを得るや。

釋曰 此に由りて是の如く悟入することを顯はさんが爲の故に、此の問を爲す。

論曰 聞熏習の種類に由る、如理の作意に攝する所の、法に似、義に似たる[二五]有見の意言なり。

釋曰 此に由りて悟入することを今當に顯示すべし。此の中「聞熏習の種類に由る」とは、謂はく聞熏習を因と爲すに由る、卽ち前に說く所の悟入は、大乘の熏習等を任持して生ずる所なるが故なり。應に知るべし、是れ圓成實の自性に攝する所なり。

論曰 四の尋思に由る。謂はく名と義と自性と差別とにて假立せる尋思に由り。及び四種の如實遍智に由る、謂はく名と事と自性と差別とにて假立せる如實の遍知に由る。是の如きは皆同じく得べからざるが故に。諸の菩薩は是の如く如實に唯識に入らんが爲に勤修し加行するを以て、卽ち文に似、義に似たる意言に於て、文と名とは唯是れ意言のみなりと推求し、此の文と名とに依る義も亦唯意言のみなることを推求し、[二六]名と義との[二七]自性と差別とは唯是れ假立のみなることを推求す。若し時に唯意言のみ有ることを證得すれば、爾の時、若くは名、若くは義の、自性と差別とは皆是れ假立なることを證知す。自性と差別とには義の相無きが故に同じく得可からず。四尋思に由り、及び四種の如實の遍智に由りて、此の文に似、義に似たる意言に於て、便ち能く唯識のみ有る性に悟入す。

【二三】散心に於ては心外に現前に住する諸法あり。

【二四】骨鎖等とは定心中に於ける所觀の對境なり、骨鎖觀とは不淨觀の一にして身相の貪着を離れんが爲に身の白骨となれる相を觀念すること。

【二五】有見の意言といひて有相を擧げざるは、此の觀法は內識を緣じて外境を去るが故なり。

【二六】名とは能詮の名字、義とは所詮の意義なり。

【二七】自性と差別とは名に就て云へば名字の詮表するものゝ自體を自性といひ、其の者の屬性を詮表する名字を差別といふ、名の表はす意義の上に於ても亦同じく自性と差別あることは名に準じて知るべし。

想處を得るの義なり。「勝善は永へに斷ずるに由り、圓滿すること云何が無からんや」とは、是れ永へに障を斷ずるに由りて勝善を成じたれば、佛果を圓滿すること云何が義無からんとなり。

論曰　聲聞獨覺の作意を離るゝに由りて作意を斷ずるが故に。大乘の諸の疑に於て疑を離るゝに由りて、以て能く永く異慧と疑とを斷ずるが故に、所聞所思の法の中の我、我所の執を離るゝに由りて、法執を斷ずるが故に。現前に現住し安立する一切の相の中に於て、作意する所無く分別する所無きに由りて、分別を斷ずるが故に。此の中に頌有り、

現前に自然に住し　安立する一切の相を
智者は分別せざれば　最上の菩提を得。

釋曰　今當に四處を斷除することを顯示すべし。「作意を斷ずるが故に」とは、謂はく聲聞等の諸の作意を斷ずるが故なり。「以て能く永く異慧と疑とを斷ずるが故に」とは、謂はく大乘の甚深廣大に於て能く永く異慧と及び疑とを斷除するなり。此の中、異慧とは謂はく鄙惡なる慧にして理に於て動搖す。疑とは猶預なり。「大乘の諸の疑に於て疑を離るゝに由りて」とは、謂はく大乘に於ては法相の〔一九〕三自性の教を安立す、謂はく、若し諸法は皆無自性にして生無く滅無く、本來寂靜にして自性涅槃なりと說かば、諸の是の如き等は〔二〇〕永無の異門にして遍計所執の自性に依りて說く。若し諸法は幻、陽炎、夢相。光影、影像、谷響、水月、變化の如しと說かば、諸の是の如き等は虛妄の異門にして依他起の自性に依りて說く。若し諸法は眞如。實際、無相、勝義、法界、空性なりと說かば、諸の是の如き等は眞實の異門にして圓成實の自性に依りて說くなり。此の一切に於て異慧と及び疑とは永く復轉ずること無し。「所聞所思の法の中の〔二一〕我我所の執を離るゝに由り」とは、此の中の意は、〔二二〕法執を斷除することを說く。「法執を斷ずるが故に」とは、乃至所聞所思の法の中にて我我所を執すれば、終いに彼れに於て如實に悟入せざればなり。「現前に現住

〔一八〕異慧とは隋譯には邪意となす、釋論に之を釋して「誹撥の意及び心動搖す」といへり。
〔一九〕前に說ける遍、依、圓の三性をいふ。
〔二〇〕永無とは本來無なるをいふ、隋譯に「一切法の無所有門」となす。
〔二一〕我我所に就ては陳譯に細釋あり。
〔二二〕我我所の執を離るゝといふも我執は已に斷じたるを以て此には唯法執のみを斷ずることを說く。

らずして波羅蜜多は當に圓滿することを得べし、此の圓滿の故に佛の菩提を證すと。後、當に第三の心を練磨することを顯示すべし。「有障の善」とは、謂はく世間の善に由りて其の善を成ずるなり。此の有障の善も尙命終る時は卽ち可愛の一切を自體に圓滿して生ず。況んや我れ今は無障の善に由りて其の善を成ず。當に佛の無上菩提を成ずべからずとは、是の處有ること無かるべし、と。

論曰　此の中に頌有り、

人趣の諸の有情は　處も數も皆無量にして
念々に等覺を證す　故に應に退屈すべからず。
諸の淨心の意樂にて　能く施等を修行す
此の勝者は已に得たり　故に能く施等を修す。
善者は死する時に於て　樂ひに隨つて自ら滿ずることを得
勝善は永へに斷ずるに由り　圓滿すること云何が無からん。

釋曰　復伽他を以て是の如きの義を顯はす。「故に應に退屈すべからず」とは、上の因緣に由りて[一五]其の心を策持し、怯弱ならざらしむればなり。謂ゆる是の心を生ずらく、我れ無上菩提を證する能はずと。「諸の淨心」とは、是れ不善や無記の心の義に非ず、謂はく或は人有り其の散亂せる無記の心を以て施等を行ず。是の如く外道は不善心を以て施等を行ず。若し無上正等菩提を求むれば、是れ最勝の善なるが故に淨心と名く。此の勝者は已に得たり、故に。「能く施等を修す」とは、最勝の菩薩を名けて勝者と爲す。此の意樂を菩薩は已に得たり、是の故に能く施等の諸度を修す。[一六]卽ち是れ已に能く慳等を斷ずる所治の心を得たる義なり。等とは始め尸羅より乃至般若波羅蜜多を取る。「善者は死する時に於て、樂ひに隨つて自ら滿ずることを得」とは、是れ[一七]乃至非想非々

【一五】此の句の練磨心の義を倂せるなり。
【一六】取るとは等取するの義。
【一七】乃至云云とは凡夫にして世の善を修すれば、色無色の天上界に生を受くることを得、無色界最高の天を擧げて前を乃至す。更に二乘の得果に就ては陳書に之を釋せり。

ん、諸の菩薩は無上正等菩提は最勝、甚深、廣大にして證得すべきこと難しと聞くを以て、心に便ち[八]退屈す。此を對治せんが故に第一の心を練磨することを修す。諸の菩薩は修行する所の波羅蜜多は最勝、甚深、廣大にして證得すべきこと難きを聞いて心に便ち退屈す。此を對治せんが故に第二の心を練磨することを修す。「此の意樂に由りて能く施等の波羅蜜多を行ず」とは、此の中、意樂とは信及び欲を謂ふ。菩薩は[九]諸の波羅蜜多の眞實有の性、功德を具ふる性、堪能有る性に於て深く信解を生ず、是を名けて信と爲す。深く信解し已つて修行せんと樂欲す、是を名けて欲と爲す。菩薩は既に是の如き信と欲とを得て自性の意樂に少しく[一〇]功力を用ひて、六種の波羅蜜多を修習すれば當に圓滿することを得べし。又諸の菩薩は佛の甚深廣大なる言敎に於て、思議し決擇し善巧に轉ずる時、是の如く思量すらく、是の如きの無上正等菩提は證得すべきこと難く、[一一]一念の心を隔てて方に證得すべしと。心に便ち退屈す。此を對治せんが故に第三の心を練磨することを修す。「我に妙善有り」とは、我に一切の十種の地の中の妙善を積集したる福智の資粮有りとなり。「障礙無き善」とは、謂はく金剛喩定は能く[一二]骨に在る麁重微細にして極めて破し難き障を破す、此の定の無間に一切の障を離繫せる[一三]轉依を得。[一四]「云何ぞ爾の時に當に一切の圓滿を獲得すべからざらん」とは、此の中の意は、障に於て離繫せるは彼の命の終る時に似て、一切種智は彼の體の如く圓滿せんと說くなり。又此の中に於て、三種の心を練磨するは、謂はく諸の菩薩は善根缺くること無く善根力に持せらる、此の力に由るが故に、則ち能く三種にて其の心を練磨して、心に退屈無し。初に當に第一の心を練磨することを顯示すべし。謂はく人趣の中の無量の世界の無量の有情は、刹那刹那に能く無上正等菩提を證す。云何が我れ今獨り能く證せざらん、と。次に當に第二の心を練磨することを顯示すべし。謂はく諸の菩薩は是の思惟を作さく、我が此の意樂は諸の障礙を離れ、波羅蜜多には慳等の障礙皆有ること無きが故に、功用に由

【八】退屈とは己の力の及ばざらんことを恐れ、卑屈の心を起して退却するの意。

【九】信の三義に就ては陳譯に細釋あり。

【一〇】功力とは意志の努力なり。

【一一】隋譯には「一刹那の心斷じ已つて乃ち得」となす、これ即ち金剛心の無間に一切の障を斷じ盡くすことなり。

【一二】骨に在る云云とは煩惱の麁細に依つて皮肉心、又皮膚骨に分つ、陳譯第四卷參照。

【一三】轉依とは煩惱の心識を轉じて菩提の智を得ること、委しくは後に釋せり。

【一四】此の句は一切の煩惱を斷盡せるは一期の生の終る時に似たれば、世間の有障の善を修しても死後は勝妙の果報を圓滿するが如く、一切種智を圓滿して成佛することを得べしとの意を顯はす。

通達す。修道の中に於て是の如く悟入することを今當に顯示すべし、「「一切の障を治するが故に」とは、謂はく此の意言は法に非ず、義に非ず、所取に非ず、能取に非ず、と觀ずる時、便ち能く一切の障を對治するが故なり。究竟道の中にて是の如く悟入することを今當に顯示すべし。「一切の障を離るるが故に」とは、謂はく善く淸淨なる妙智の位の中には、最も微細なる障も亦有ること無きが故なり。

論曰　何に由りて能く入るや。善根力に任持せらるるに由るが故なり、謂はゆる三種の相にて心を練磨するが故に、四處を斷ずるが故に、法義の境を緣じて止觀し、恆常に慇重に加行して放逸無きが故なり。

釋曰　此に由りて能く入ることを今當に顯示すべし。何に由りて能く入るや。「善根力に任持せらるるに由るが故に、謂はゆる三種の相にて心を練磨するが故に、乃至恆常に慇重に加行して放逸無きが故なり」とは、謂はく是の如き[五]所說の八句に於て、善く順して相應するを「善根力に任持せらるるが故に」と名く。「恆常に」と言ふは、無間に修するが故に、「慇重に」と言ふは恭敬して修するが故なり。若し是の如き品類に於て造修すれば、卽ち是の如きに於て能く放逸無し。

論曰　無量の諸の世界の無量の[六]人有情は刹那刹那に無上正等菩提を證覺す。是を第一の其の心を練磨すと爲す。此の意樂に由りて能く施等の波羅蜜多を行じ、我れ已に是の如きの意樂を獲得せり、我れ此に由るが故に少しく功力を用ひて施等の波羅密多を修習すれば、當に圓滿することを得べしと、是を第二の其の心を練磨すと名く。若し諸の有障の善を成就するもの有らば、命終る時に於て卽便ち可愛の一切を自體に圓滿して生ず。我れに妙善と障礙無き善と有り、云何ぞ爾の時に當に一切の圓滿を獲得すべからざらんや、と。是を第三の其の心を練磨すと名く。

釋曰　此の中、三種の退屈心を對治するが故に、唯三種の心を[七]練磨することを修す。所以は何

【五】八句は論本所說は開いて八句となる、以下之を釋せり、倘陳譯には八處として一一之を指示せり、參照。

【六】人の有情とは人間界の有情の意、隋陳兩譯には「人道の有情」となす。

【七】練磨とは無性釋に「心を策擧して其をして猛利ならしめ、退屈を對治す」と解せり。

過せるなり。「已に一向に決定せる勝解を得」とは、謂はく大乘の所得の勝解に於て、諸の惡友の能く動壞する所に非ず、卽ち[一]無間に說く所の三因に由りて、「已に善く諸の善根を積集するが故に、」乃ち名けて「善く福智の資糧を備へたる菩薩」と爲すことを得。又卽ち是の如き福智の資糧は云何が漸次にして圓滿することを得るや。謂はく因の力に由り、善友の力に由り、作意の力に由り、依持の力に由る。此の中の[二]兩句は卽ち是れ二力なれば數の如く應に知るべし。作意の力とは、卽ち是れ一向に決定せる勝解なり。此れ大乘の熏習を用て因と爲し、佛に事ふるを緣と爲して、一向に決定せる勝解有るを以て、能く正行を修し、正行を修するが故に善根を積集す。是の如きを名けて作意の力に由りて善く福智の二種の資糧を修すと爲す。此れ漸次に善く福智の二の資糧を修するに由るが故に能く[三]大地に入る。是の如きを名けて依持の力に由ると爲す。

論曰　何の處にか能く入る。謂はく卽ち彼の有見の似法似義の意言に於て、大乘の法相の等しく生起する所の勝解行地、見道、修道、究竟道の中なり。一切の法に於て唯識性の有ることを聞くに隨つて勝解するが故に、理の如く通達するが故に、一切の障を治するが故に、一切の障を離るるが故に。

釋曰　是の如き類に入り、及び行相に入ることを今當に顯示すべし。[四]意地の尋思を說いて「意言」と名く。是の如きの意言は大乘の法を以て因と爲して生ず。此の中、意言の差別を顯示す。「大乘の法相の等しく生ずる所」とは是れ此の敎法を緣と爲して生ずる義なり。或は有るは、勝解行地に於て能く悟入すと名く。但一切の諸法は唯識性のみ有りと聽聞するのみに由りて、深く信解を生ずるが故に、能く入ると名く。見道の中に於て、是の如く悟入することを今當に顯示すべし、「理の如く通達するが故に」とは、謂はく意言に於て理の如く通達するなり。云何が此に於て理の如く通達するや、謂はく此の意言は法に非ず、義に非ず、所取に非ず、能取に非ず、と是の如く

【一】無間に說くとは次前に說ける文を指す。卽ち多聞熏習と、諸佛に逢事することゝ、善根を積集することゝを三因と爲す。
【二】隋譯は「中に於て前二句を二力と爲す、其の數の如く應に知るべし」となす。されば此の中兩句とは論本の前二句が其のまゝ因力と善友力とを釋せるものとして、次に後の二力のみを解釋せり。
【三】大地に入るとは十地の位に入ること、故に隋譯及び無性釋には初地に入るとなす。
【四】意地の尋思とは名義等に依る意識の思惟分別をいふ。

卷の第六

入所知相分第四

論曰 是の如く已に所知の相を說けり。所知相に入ることは云何が應に見るべきや。多聞熏習の所依にして阿賴耶識の所攝には非ず。阿賴耶識の種子を成ずるが如く。如理なる作意の所攝にして、法に似、義に似て生じ、所取の事に似たる有見の意言なり。

釋曰 能く是の如き種類の應に知るべき所の相に悟入するが如きを、今當に顯說すべし。「所知の相に入る」とは、謂はく能く所知の境に悟入する義なり。「多聞熏習の所依」とは、謂はく大乘法の熏ずる所の自體なり。「阿賴耶識の所攝に非ず」とは、謂はく能く阿賴耶識を對治するが故なり。「阿賴耶識の種子を成ずるが如く」とは、謂はく阿賴耶識は一切の雜染法の因と爲るが如く、此れ一切の淸淨の法の因と爲ることも亦爾り。「如理なる作意の所攝」とは、謂はく如理なる作意を自性と爲す。「法に似、義に似て生ず」とは、謂はく法と義との相に似て生起する時なり。「所取の事に似る」とは、色等の義に似るを謂ひ。「有見」とは見に似るを謂ふ。此れ卽ち相と見とを有する識を成立す。

論曰 此の中誰か能く應に知るべき所の相に悟入するや。大乘の多聞熏習相續して、已に無量の諸佛の世に出現するに逢事することを得、已に一向に決定する勝解を得て、已に善く諸の善根を積集するが故に、善く福智の資糧を備へたる菩薩なり。

釋曰 是の如きの品類と、此の如きの方便とにて能く悟入することを、今當に顯示すべし。「大乘の多聞熏習相續す」とは、聲聞等の有する所の多聞熏習の相續に簡ぶ。「已に無量の諸佛の世に出現するに逢事するを得」とは、已に現前に諸佛の世間に出現せるに逢事するを得ること數量を超

釋曰　此の伽他の中、卽ち前の所說の義を顯示(けんじ)せんが爲に、是の如きの言を說く。

此の加行を修し以て果に趣向する因を増長せんが爲なり。「加行を成滿する業」とは、即ち是れ「[九二]持戒と破戒とに於て善友として無二なるが故に」乃至「善友に親近するが故に」。謂はく後の六句は此の八句を釋するなり。若し[九三]習近有れば是の如きの加行は速かに成滿することを得ん。「慇重の心を以て[九四]阿練若に住するが故に」とは、此の處に住するに由りて「惡の尋思を離るゝ」なり。「世の雜事」とは謂はく歌舞等なり。「成滿する業」とは、即ち是れ「恆に四梵住を修治するが故に」「常に五神通に遊戯するが故に、依趣智の故」に、謂はく後の三句は此の三句を釋す。此れ成滿の業の有する所の相狀なり。「大威力」とは、謂はく六神通なり、[九五]「依趣智の故に」とは、謂はく智に依趣して識に依趣せず、内智より生ずるが故なり。此の内智に由りて現見と相應して法に安住するなり。「彼を安立する業」とは、即ち是れ「正行に住する」等なり、謂はく後の四句は此の四句を釋す。利益安樂を増上する意樂に由るが故に、有情の利益安樂を安立す。「衆を御する功德の故に」とは、破戒に於ても亦棄捨せず安立して擯けず、不善を出でしめ善に住せしむるに由る。「決定して疑無く教授し教誡するが故に」とは、能く一向に彼に教勅を與へ、自ら說き已つて還つて復說いて、我が言は善ならずと言ふに非ざるに由る。是の因緣に因りて其の言威肅なり。「財法を一に攝するが故に」とは、[九六]言誠諦にして法を以て攝取し、衣服等の財も還是の如く施すに由る。「雜染の心無きが故に」とは、善く大菩提心を攝受して有情を饒益し、自ら求めて[九七]給使と爲さんと欲するに非ざるに由るが故なり。[九八]云何が有情をして此の善に由るが故に速かに無上正等菩提を證せしめんと、此の如く一切の有情を攝受するなり。

論曰　(頌に)說けるが如し、

最初の句に由るが故に　句の別は德の種類なり
最初の句に由るが故に　句の別は義の差別なり。

【九一】乃至とは此の間に五句を略せり。
【九二】持戒と破戒とを論せず之に親近して其の教を受くるが故に善友として無二なりと云ふ、無二とは隔ての無いこと。
【九三】習近とは善友に親近して教を習ふこと。
【九四】阿練若、(araṇya)無性釋に之を釋して「聚落を遠離すること倶盧舍を過ぐるを阿練若と名く」とあり、寂靜の處をいふ。
【九五】依趣智とは隋譯には隨智の行となし、陳譯には「智慧に依りて行ず」となせり。
【九六】隋譯に「誠實に彼等に告げて言ふ」となし、陳譯に「此の人實語を以て、眞實の道理に依つて法を說く」となす。
【九七】給使と爲すとは供養を爲さしむること。
【九八】此の句は大菩提心を首となすこと釋す。

にして勝れたる意樂の故に」、有情の邪行を行ずるを以ての故に、菩薩の利益、安樂を增上する意業の堅固の心を動壞せず。[七八]「染を求むること無き業」とは、卽ち是れ「假の憐愍に非ざるが故に」「親と非親とに於て平等なる心の故に」、「永く善友と作りて乃至涅槃を後邊と爲すが故に」、謂はく後の三句は此の三句を釋するなり。[七九]利養恭敬等の因の爲に諸の有情の利益安樂を作すに非ず、是の故に說いて染を求むること無き業と名く。利益安樂を增上する意樂は云何が知るべき、謂はく[八〇]「相ひ稱ふ語身の業に由る」とは、卽ち是れ量に應じて語るが故に、笑を含んで先づ言ふが故に」、此の二句の中、量に應じて語ると及び先づ言ふとは是れ語業なり、笑を含むは是れ身業なり、量に應じて語るとは唯法の語言を作すなり、笑を含むとは舒顏にて往來し饒益の事を作すなり。「樂に於ても苦に於ても無二の中に於ても平等なる業」とは、卽ち是れ「無限の大悲の故に」、無限の悲とは三苦を愍むが故なり、苦有る有情に於ては其の[八一]苦苦を愍み、樂有る有情に於ては其の[八二]壞苦を愍み、不苦不樂の有情に於ては其の[八三]行苦を愍む、不苦不樂の故に無二と名く。「下劣無き業」とは、卽ち是れ[八四]「受くる所の事に於て退弱無きが故に」、謂はく自ら輕んじて我は當に佛果を得べきこと能はずと云はざる此等の如き類なり。「退轉無き業」とは、卽ち是れ「厭倦の意無きが故に」謂はく勤めて精進して成佛の因を修して心に厭倦無きなり。「攝方便の業」とは、卽ち是れ「義を聞いて厭くこと無きが故に」、謂はく多聞に由りて[八五]善巧の智を成じ、有情を饒益するなり。[八六]「所治を厭惡する業」とは、卽ち是れ「自ら作れる罪に於て深く過を見るが故に」、「他の作れる罪に於て瞋らずして誨ゆるが故に」、此の方便に由りて乃ち能く如實に有情を調伏す。[八七]「無間に作意する業」とは卽ち是れ[八八]「一切の威儀の中に於て恆に菩提心を修治するが故に」是の如きの句義は[八九]所行清淨契經に廣く說けるが如し。「勝進行の業」とは、卽ち是れ[九〇]「異熟を悕はずして施を行ずるが故、に」[九一]乃至「四攝事の攝方便に由るが故」に、謂はく卽ち前の利益安樂を增上する意樂に依りて、

【七八】此の句に隋譯には「求むる所無き業」となし、陳譯には、「求欲無き業」となす。
【七九】利養恭敬等を求めんが爲に有情を利樂するを染繫といふ、これ無きが故に染を求むること無しといふ。
【八〇】相ひ稱ふとは理に稱ふ語業と身業となり。
【八一】苦苦とは苦事の起ることに依る苦惱。
【八二】壞苦とは樂事の去ることに依りて生ずる苦惱。
【八三】行苦、とは世の無常なるより生ずる苦惱。
【八四】受くる所の大乘の敎法なり。
【八五】善巧の智とは化他の方便智なり、故に攝方便の業といふ。
【八六】所治とは對治せらるべき貪瞋等をいふ、卽ち次に云へる自作及び他作の罪惡なり。
【八七】無間に作意すとは間斷なく思惟すること。
【八八】一切の威儀とは行住坐臥、すべての起居動作をいふ。
【八九】經名にして、隋譯には淨行修多羅といひ、陳譯には威儀淸淨品といふ、更に無性釋には所行淸淨契經として一頌を擧げたり。
【九〇】異熟とは異熟の果報の義にして、次生に勝れたる生を受くること。

二には無間に作意する業、十三には勝進行の業、此に七句の差別有り、應に知るべし、謂はく六波羅蜜多の正しき加行なるが故に、及び四攝事の正しき加行なるが故なり。十四には加行を成滿する業、此に六句の差別有り、應に知るべし、謂はく善士に親近するが故に、正法を聽聞するが故に、阿練若に住するが故に、惡の尋思を離るるが故に、(七七)作意の功德の故に、此に復二句の差別有り、應に知るべし、助伴の功德の故に、此に復二句の差別有り、應に知るべし。十五には成滿する業、此に三句の差別有り、應に知るべし、謂はく無量淸淨なるが故に、大威力を得るが故に、證得する功德の故に。十六には彼を安立する業、此に四句の差別有り、應に知るべし、謂はく衆を御する功德の故に、決定して疑無く敎授し敎誡するが故に、財法を一に攝するが故に、雜染の心無きが故に、是の如きの諸句は、應に知るべし、皆是れ初句の差別なり。

釋曰　義處に由る中、「一切の有情に於て利益安樂を增上する意樂を起すが故に」とは、此の句義は十六業の餘句に由りて顯示す。何等の業に由りて利益安樂を增上する意業を顯示するや。謂はく「展轉して加行する業」とは、卽ち是れ「一切の智智に入らしむるが故に」、謂はく諸の有情をして一切智智に入らしめ、展轉して化導するなり。譬へば一燈傳へて千燈を然すが如し。此れ卽ち利益安樂を增上する意樂を顯示す。是の如く一切の所余の句の中にも、皆應に利益安樂を增上する意樂に配屬すべし。「顚倒無き業」とは、卽ち是れ「自ら我れ今何の假智なるかを知るが故に」、謂はく利益安樂を增上する意樂有りと雖も、仍ほ是れ顚倒す。利益安樂を增上する意樂を發起する有りて、飮酒等を勸むるが如し。若し正智有れば、如實に自ら知りて方に能く量に稱ひて有情を敎導す、增上慢に非ず、如實に知らされば饒益の心を起すも他に勸むるに不饒益の事を作さしむ。「他の請を待たずして自然に加行する業」とは、卽ち是れ「慢を摧伏するが故に」謂はく憍慢心を摧伏するに由るが故に、勸請を待たずして自ら說法を爲す。「勤壞せざる業」とは、卽ち是れ「堅牢

【七七】作意の功德とは隋陳兩譯には正思惟の功德となす、卽ち二乘を捨てゝ大乘を求むること。

を後邊と爲すが故に、量に應じて語るが故に、笑を含んで先づ言ふが故に、[六七]無限の大悲の故に、[六八]受くる所の事に於て退弱すること無きが故に、厭倦の意無きが故に、義を聞いて厭くこと無きが故に、自ら作れる罪に於て深く過を見るが故に、他の作れる罪に於に瞋らずして誨ゆるが故に、一切の威儀の中に於て恆に菩提心を修治するが故に、[六九]異熟を悕はずして施を行ずるが故に、一切の有趣に依らずして戒を受持するが故に、諸の有情に於て恚礙有ること無くして忍を行ずるが故に、一切の善法を攝受せんと欲するが爲に勤めて精進するが故に、無色界を捨てて靜慮を修するが故に、方便と相應して般若を修するが故に、四攝事の攝方便に由るが故に、持戒破戒に於て善友として無二なるが故に、慇重の心を以て正法を聽聞するが故に、慇重の心を以て[七〇]阿練若に住するが故に、世の雜事に於て愛樂せざるが故に、下劣乘に於て曾て欣樂せざるが故に、[七一]大乘の中に於て深く功德を見るが故に、惡友を遠離するが故に、善友に親近するが故に、恆に[七二]四梵住を修治するが故に、常に[七三]五神通に遊戯するが故に、[七四]智に依趣するが故に、正行に住し(若しくは)正行に住せざる諸の有情の類に於て棄捨せざるが故に、言決定するが故に、[七五]諦實を重んずるが故に、大菩提心を恆に首と爲すが故に、是の如きの諸句は、應に知るべし、皆是れ初句の差別にして謂ゆる一切の有情に於て利益安樂を增上する意樂を起す。此の利益安樂を增上する意樂の句に十六の業の差別有り。應に知るべし。此の中十六の業とは、一には展轉して加行する業、二には顚倒無き業、三には他の請を待たずして自然に加行する業、四には動壞せざる業、五には染を求むること無き業、此に三句の差別有り、應に知るべし、謂はく染繫無きが故に、恩非恩に於て愛恚無きが故に、生生の中に於て恆に隨轉するが故に。六には相ひ稱ふ語と身との業、此に二句の差別有り、應に知るべし。七には樂に於ても苦に於ても無二の中に於ても平等なる業、八には下劣無き業、九には退轉すること無き業、十には[七六]攝方便の業、十一には所治を厭惡する業、此に二句の差別有り、應に知るべし。十

【六七】隋譯には「重擔を荷負して退屈すること無きが故に」となす。

【六八】受くる所の事は隋譯には「作す所の事」となす。

【六九】異熟は他の諸譯には果報又は報となす。

【七〇】阿練若 (araṇya) 修行に適する閑靜なる處をいふ。

【七一】陳譯には「大乘敎に於て實の功德を觀ず」となす。

【七二】四梵住とは慈悲喜捨の四無量心をいふ。

【七三】五神通とは天眼、天耳、他心、宿住、如意の五神通。

【七四】隋譯には隨智の行となし、陳譯には「智慧の行に依る」となす。

【七五】諦實とは眞諦又は眞實の義。

【七六】攝方便とは衆生を攝化する方便の意。

きの法は如來の妙智を生ずることを知る。「凡そ現ずる所の身は分別すべからず」とは、卽ち是れ「其の[六三]勝解の如く云現する功德」なり。「一切の菩薩等の求むる所の智」とは、卽ち是れ「無量の所依として有情を調伏する加行の功德」なり、謂はく無量の菩薩の所依として能く諸の有情を調伏する事を作す、此れ諸佛は已に自他の平等を得たれば、更に此の智を求むるに非ず、唯諸佛のみ已に是の如き勝れたる調伏の事を作すこと有り。「佛の無二を得て勝れたる彼岸に住す」とは、卽ち是れ平等の法身の波羅蜜多を成滿する功德」なり、謂はく無二の法身を平等の法身と名く、卽ち是の如き無二の法身に於て善く清淨なる波羅蜜多を得るなり。「相ひ間雜せざる如來の解脫妙智を究竟し」とは、謂はく雜無き如來の智の中に於て勝解究竟するなり、此の中、勝解を名けて解脫と爲す、卽ち是れ「其の勝解に隨ひて[六四]差別を示現する功德」なり。「中邊無き佛地の平等を證す」とは、卽ち是れ三種の佛身の方處に分限無き功德」なり、謂はく佛の法身は爾所の方處を分限すべからず、受用(身)變化(身)も亦爾所の世界を說くべらさるなり。「法界を極む」とは、謂はく清淨の法界を極むるなり、是れを法界を極むと名く。卽ち是れ生死の際を窮め常に現して一切の有情を利益し安樂にする功德」なり。「虛空の性を盡くす」とは、卽ち是れ「無盡の功德」なり、謂はく佛智の盡くること無きは虛空の如くなるが故なり。[六五]「未來際を窮む」とは、卽ち是れ究竟の功德等なり。等と言ふは此の佛智は究竟して未來際を窮め間斷有ること無ければなり。是の故に名けて最も淸淨なる覺と爲す。

論曰 復次に「義處に由る」とは、若し諸の菩薩は三十二法を成就すれば乃ち菩薩と名くと說けるが如し。謂はく一切の有情に於て利益安樂を增上する意樂を起すが故なり。一切智智に入らしむるが故に、自ら[六六]我今何の假智なるかを知るが故に、慢を摧伏するが故に、堅牢なる勝れたる意樂の故に、假の憐愍に非ざるが故に、親と非親とに於て平等の心なるが故に、永く善友と作りて乃至涅槃

功德」となす、陳譯脚註參照。

【六三】無量の衆生の勝解に隨つて佛身を示現するの意。

【六四】差別の佛土の意。

【六五】此の一句は他の諸譯論本に無し、隨つて次の釋論の文も隋陳兩譯に見えず。

【六六】此の句は隋譯に「我れ何の價なるかを知るが故に」とあり、更に陳譯を參照せよ。

て二現行せずと名く。即ち是れ[五五]所知に於て一向に障り無く轉ずる功德なり。[五六]聲聞獨覺の智の、亦障有り亦障無きが如きに非ざるが故に。「無相の法に趣く」とは、謂はく淸淨なる眞如を無相の法と名く、趣とは謂はく趣入なり、即ち是れ「有無に於て二相無き眞如の最勝淸淨なるに能く入る功德なり。謂はく此の眞如は是れ有相に非ず、諸法の無性を相と爲すを以ての故に、亦無相に非ず、自相有るが故に、此の無相なる眞如の最勝淸淨なるに、能く入るとは最勝なるに能く入るが故に、淸淨なるに能く入るが故なり。[五七]「佛の住に住す」とは、佛の住する所の無所住の處に住するを謂ふ、即ち是れ「無功用に佛事し休息せずして住する功德」なり、謂はく此の住の中に常に佛事を作して休息有ること無きなり。「一切の佛の平等性を逮得す」とは、即ち是れ「法身の中の[五八]所依と意樂と作業とに於て差別無き功德」なり。「無障の處に到る」とは即ち是れ「一切の障を對治することを修する功德」なり、謂はく一切時に常に覺慧を修して一切の障を對治するが故なり。[五九]「轉ずべからざる法」とは、即ち是れ一切の外道を降伏する功德」なり。「所行礙ふる無し」とは、即ち是れ「世間に生在するも世法の爲に礙へられざる功德」なり、謂はく世間に生じて世間の所行の處を行ずと雖も、[六〇]利等の世間の八法の爲に染汚せられざるが故なり。「其の安立する所思議すべからず」とは、即ち是れ「正法を安立する功德」なり、契經等の正法は無量不可思議なるに由り、諸の愚夫の能く解する所に非ざるが故に、此に由るが故に「最も淸淨なる覺」と名く。此の「最も淸淨なる覺」の句は[六一]句句の中に於て皆遍く相應す。「三世の平等の法性に遊ぶ」とは、即ち是れ[六二]「授記の功德」なり。「其の身は一切の世界に流布す」とは、即ち是れ「一切の世界に於て受用變化身を示現する功德」なり。「一切法の智に於て疑滯無し」とは、即ち是れ「疑を斷ずるの功德」なり。「一切の行に於て大覺を成就す」とは、即ち是れ「種々の行に入らしむる功德」なり。「諸法の智に於て疑惑有ること無し」とは、即ち是れ「當來に法の妙智を生ずる功德」なり、謂はく當來是の如

【五五】所知に於てとは煩惱障は二乘已に之を斷ずる故敢て之を言はずして所知障のみを擧ぐ。

【五六】聲聞獨覺の二乘の智には所知障有りて煩惱障無きが故にかく言ふ。

【五七】陳譯には此の句は「功用に由らず、如來の事を捨てず」とありて無住涅槃を佛住として釋せり。

【五八】法身の所依とは平等の法性、意樂とは衆生を利益せんとの意願、作業とは變化身を現して利他の事業を作すこと、陳譯釋論には之を法、應、化の三身に配釋せり。

【五九】轉は動轉の義――陳譯には此の句を「破すべからず、對轉無き法」と譯し翻轉對破すべからざる法なれば外道を降伏する正法の意となる。

【六〇】利等とは利、衰、毀、譽、稱、譏、苦、樂の八法なり或は之を八風ともいふ、世人の心を動搖せしむるが故なり。

【六一】句句の中云云、とは「最も淸淨なる覺」といふ句を解說する爲に二十一德を擧ぐるものなれば、此の句は各句に通じて適應すべしとの意なり。

【六二】此の句は陳譯には「四種の善巧にて他の問に答ふる

或は其の義を攝す。

論曰「德處に由る」とは、謂はく佛の功德を說いて最も清淨なる覺とし、二現行せず、無相の法に趣き、佛の住に住し、一切の佛の平等性を逮得し、無障の處に到り、轉ずべからざる法にして、所行礙ふる無く、其の安立する所、思議すべからず、三世平等の法性に遊び、其の身は一切の世界に流布し、一切の法に於て智に疑滯無く、一切の行に於て大覺を成就し、諸法の智に於て疑惑有ること無く、凡そ現ずる所の身は分別すべからず、一切の菩薩等の求むる所の智なり、佛の無二を得て勝れたる彼岸に住し、[五〇]相ひ間雜せざる如來の解脫妙智を究竟し、中邊無き佛地の平等を證し、法界を極め、虛空性を盡くし、未來際を窮むと(いふ)。[五一]最も清淨なる覺とは、應に知るべし、此の句をば所餘の句に由りて分別し顯示するなり。是の如くして乃ち法性を善說することを成ず。「最も清淨なる覺」とは、謂はく佛世尊の最も清淨なる覺なり。應に知るべし、是れ佛の二十一種の功德の所攝なり。謂はく所知に於て一向に障り無く轉ずる功德、有無に於て二相無き眞如の最勝清淨なるに能く入る功德、無功用にして佛事し休息せずして住する功德、法身の中の所依と意樂と作業とに於て差別無き功德、一切の障を對治することを修する功德、一切の外道を降伏する功德、世間に生在するも世法の爲に礙へられざる功德、正法を安立する功德、授記する功德、一切の世界に於て受用と變化との身を示現する功德、疑を斷ずる功德、種々の行に入らしむる功德、當來に法の妙智を生ずる功德、[五二]其の勝解の如く示現する功德、無量の所依にて有情を調伏する加行の功德、平等の法身の波羅蜜多を成滿する功德、其の勝解に隨つて差別の佛土を示現する功德、三種の佛身の方處に分限無き功德、生死の際を窮め常に現じて一切の有情を利益し安樂にする功德、無盡の功德等なり。

[五三]**釋曰** 此の中、[五四]「二現行せず」とは、二の現行は此の中に於て有ること無きを謂ふ。是の故に說い

【五〇】相ひ間雜せざるとは無差別の義なり。
【五一】以下は前文を釋す。
【五二】此の句は陳譯には「衆生の意に隨つて顯現する功德」となす。
【五三】此の一段の釋文は特に陳譯及び無性釋を參照せよ。
【五四】二現行せずとは煩惱所知の二障は倶に現行せずとの意。

るが故に。此の轉ずる時に於て、若し彼を得れば卽ち此れを得ず、若し此を得れば卽ち彼を得ず。(頌に)說けるが如し。

依他には所執無く　成實は中に於て有り
故に得と及び不得と　其の中に二は平等なり。

釋曰 「彼の轉識の相法は相有り、見有る識を自性と爲す」とは、謂はく彼の識は有相と有見とを其の體と爲すを以てなり。又卽ち彼の相に其の三種有り、「依處を相と爲す」とは、謂はく依他起の相なり、此の說く所の三種の自性に由りて彼の相を顯示す。伽他の中に於て卽ち此の義を顯はす。「有相有見に從ひ、應に彼の三相を知るべし」とは、釋に顯示せるが如し。「此の二種の非有と有と、非得と及び得と未だ(眞を)見ざると、已に眞を見るとは同時なり」とは、遍計所執及び圓成實を名けて二種と爲す。是の如き二種は第一は非有、第二は是れ有なり。「未だ眞を見ず」とは、遍計所執を得れば圓成實を得ざるなり。「已に眞を見る」とは、卽ち此の刹那に圓成實を得れば遍計所執を得ざるなり。伽他の中に於て卽ち此の義を顯はして「依他に所執無し」等と謂へり。「平等」とは、一刹那を謂ひ、「其の中」とは、謂はく依他起の中なり。「二」とは、謂はく未だ眞を見ざる者と及び已に眞を見たる者となり。「故に」とは、是れ此の因に由るの義なり。謂はく[四七]依他起の中に於て遍計所執は無なるに由るが故に、及び圓成實は有なるに由るが故にとなり。又諸の愚夫は顚倒して執するが故に是の如きの見轉じ。若し諸の聖者ならば、正見に由るが故に是の如きの見轉ず。

論曰 [四八]語義を說くとは、謂はく先に初句を說きて、後に餘句を以て分別し顯示するなり。或は德處に由り、或は義處に由る。

釋曰 「語義を說くに由る」とは、[四九]造る所の釋の如し、今當に顯示すべし。或は其の德を攝し、

【四七】依他の中に遍計は無にして圓成實は有り、凡夫は未だ眞を見ざるが故に有無顚倒して執して遍計は有、圓成實は無との見を起すも、聖者は已に眞を見るが故に、正見に住して遍計は無、圓成實は有なりとの見を起すとの意なり。

【四八】語義を說くとは隋譯には「言教中の義を解釋す」となし、陳譯には「廣く所說の諸義を成立することを解す」とある。

【四九】論本に解釋するが如しとの意なり。

是れ常等なりと謂ふを名けて顚倒と爲し、無常等に於て無常等なりと謂ふは是れ能顚倒なり。是れ此の中に於て善く安住するの義なり。「極煩惱に惱まさる」とは、精進劬勞を名けて煩惱と爲す、衆生の爲の故に長時に劬勞精進して惱まさるるなり。〔四三〕誦に、「生死に處して久しく惱むは但大悲に由る」と言へる有るが如し。是の如き等は「最上の菩提を得」とは、其の義了じ易し。

論曰　若し大乘法の釋を造らんと欲するもの有らば、略して三相に由りて應に其の釋を造るべし。一には緣起を說くことに由り、二には緣によりて生ずる所の法相を說くことに由り、三には語義を說くに由るべし。

釋曰　此の三相に由りて其の所應に隨つて應に一切の大乘法の釋を造るべし。

論曰　此の中、緣起を說くとは(頌に)說けるが如し、

言熏習より生ずる所の　諸法は此れ彼に依る
異熟と轉識とは　更互に緣と爲りて生ず。

釋曰　〔四四〕「言熏習より生ずる所の諸法」とは、外の分別の熏習は阿賴耶識の中に在るに由りて、此の熏習を以て因と爲して一切の法を生ず、卽ち是れ轉識の自性なり。「此れ彼よりす」とは、此の分別熏習は彼の諸法を以て因と爲す。此れ卽ち阿賴耶識と彼の轉識と更互に因と爲ることを顯示す。

論曰　復次に彼の轉識の相法は相有り、見有る識を自性と爲す。又彼は〔四五〕依處を以て相と爲し、遍計所執を相と爲し、〔四六〕法性を相と爲す。此に由りて三自性の相を顯示す。頌に說けるが如し、

有相、有見に從ひ　應に彼の三相を知るべし。

復次に云何が應に彼の相を釋すべきや。謂はく遍計所執の相は依他起相の中に於ては實に所有無し。圓成實の相は中に於て實に有り。此の二種の非有と有と、非得と得と、未だ(眞を)見ざると已に眞を見るとは、同時なるに由る。謂はく依他起の自性の中に於て遍計所執無きが故に、圓成實有

【四三】誦とは隋譯に「經說」とあり陳譯には羅睺羅法師言と明かに人の名を出せり。

【四四】言熏習とは言說による名言熏習なり。

【四五】依處とは所依處の義、隋譯には住持とし陳譯には依止となせり、卽ち依他性の義。

【四六】法性とは法の體性の義、隋陳兩譯には法爾となせり、卽ち圓成實の義。

を顯はす。是れ昇進の因にして、唯名を誦するのみにて、便ち無上正等菩提に於て已に決定することを得るには非らず。説いて言へる有るが如し、一の金錢に由りて千の金錢を得るは、豈に一日に於てならんや。意は別時に在り。一の金錢は是れ千を得る因なるに由るが故に此の説を作す。此も亦是の如し、唯發願するのみに由りて便ち極樂世界に往生するを得とは、當に知るべし亦爾なり。「別義意趣」の中、「大乘の法に於て方に能く義を解す」とは、謂はく三種の自性の義理に於て、自ら其の相を證するなり。若し但名言の義に隨ふは是れ佛意なりと解了すれば、愚夫も此に於て亦應に解了すべし。故に知る、此の中「義を解す」と言ふは〔四一〕(その)意證解に在り。(これ)要す過去にて多佛に逢事せるに由るなり。「補特伽羅の意樂の意趣」とは、謂はく一りの爲に先には布施を讃し、後には還つて毀呰するが如し。此の中の意は、先には慳悋多ければ爲に布施を讃し、後には施を行ずることをのみ樂へば還つて復毀呰して勝行を修せしむ。若し此の意無ければ一の施の中に於て、先には讃し、後には毀するは則ち相違を成ず。此の意有るに由りて讃するも毀るも理に應ず。尸羅等に於ても當に知るべし、亦爾なり。「一分修」とは世間の修を謂ふ。「入らしむる祕密」とは、謂はく若し是の處に世俗諦の理に依りて、補特伽羅及び一切法の自性と差別と有りと説くは、有情をして佛の聖教に入らしめんが爲なり。是の故に説いて入らしむる祕密と名く。「相の祕密」とは、謂はく諸法の相を宣説する中に於て三自性を説く。「對治の祕密」とは、謂はく是の處に於て有情の諸行の對治を宣説す。有情の煩惱行を對治することを安立せんと欲するが爲の故なり。「轉變の祕密」とは、謂はく是の處に於て餘を説くを以て、義の諸言、諸字は轉じて餘の義を顯す。〔四二〕伽他の中に於て、不堅を覺るを堅と爲す」とは、不堅とは定を謂ふ、剛强ならず、馳散し、調し難きに由るが故に不堅と名く。即ち此の中に於て尊重の覺を起す、覺を名けて堅と爲す。「善く顚倒に住す」とは、是れ顚倒と能顚倒の中に於て善く安住するの義なり。無常等に於て

〔四一〕其の趣意は言語の意を解するにあらずして之を證得するに在り故に別義といふ。

〔四二〕頌文の解釋は無性釋及び陳譯を參照せば更に明了なるべし。

觀正等覺者と名くと。二には別時意趣、謂はく說いて言ふが如し。若し多寶如來の名を誦する者は、便ち無上正等菩提に於て已に決定することを得と。又說いて言ふが如し、唯發願するのみに由りて、便ち極樂世界に往生することを得と。三には別義意趣、謂はく說いて言ふが如し、若し已に爾所の殑伽河沙等の佛に逢事すれば、大乘の法に於て方に能く義を解せんと。四には[三四]補特伽羅の意樂の意趣、謂はく一の補特伽羅の爲に先には布施を讃し、後には還つて毀呰するが如し。布施に於けるが如く、是の如く[三五]尸羅及び[三六]一分修も當に知るべし亦爾なり。是の如きを名けて四種の意趣と爲す。四の祕密とは、一には入らしむる祕密、謂はく聲聞乘の中、或は大乘の中にて世俗諦の理に依りて補特伽羅有り、及び諸法の自性の差別有りと說く。二には相の祕密、謂はく[三七]是の處に於て諸法の相を說いて三自性を顯はす。三には對治の祕密、謂はく是の處に於て行對治は八萬四千なることを說く。四には[三八]轉變の祕密、謂はく是の處に於て其の別義なるを以て、諸言、諸字は卽ち別義を顯はす。頌に言へる有るが如し。

不堅を覺るを堅と爲し　善く顚倒に住し
極煩惱に惱まされて　最上の菩提を得。

釋曰。[三九]意趣と祕密とに差別有るは、謂はく佛世尊は先に此の事を緣じ、後に他の爲に說く、是を意趣と名く。此の決定に由りて聖教に入らしむる是を[四〇]祕密と名く。「平等意趣」とは、謂はく人有り相似の法を取りて是の如きの言を說くが如し、彼は卽ち是れ我れなりと。世尊も亦爾なり、平等の法身は置いて心中に在れば、說いて言はく、我昔曾て彼に等しと。彼の昔時の毘鉢尸佛は卽ち是れ今日の釋迦牟尼なるに非ざるも、平等の義の起す所の意趣に依りて是の如きの說を爲す。「別時意趣」とは、謂はく此の意趣は嬾惰なる者をして、彼々の因に由りて彼々の法に於て精勤修習せしめ、彼々の善根をして皆增長することを得しむ。此の中の意趣は多寶如來の名を誦するの因

【三四】 補特伽羅 (pudgala) は譯して人といふ、隋譯には隨念意となし、陳譯には衆生樂欲意となせり。

【三五】 尸羅 (śīla) は戒、六度の中の布施と戒を擧げて例示す。

【三六】 一分修とは他の諸譯には餘修となす、世間の修の意にして、前に出世行として六度を擧げ、次に世俗一般の行も亦爾りと示す。

【三七】 此の處とは他の諸譯に依れば隨所とあり、其の意味に見るべし。

【三八】 轉變とは隋陳兩譯には「翻」と譯せり、蓋し釋文に見る如く一語多義の語を用ふることなれば、義の轉變又は意味の反翻を示すものなり。

【三九】 意趣と秘密の意義の相違を明かす一段の文は隋陳兩譯にては四意を說く一段の文の終に在り。

【四〇】 秘密とは隋譯には「合義」、陳譯には「依」、魏譯には「密語」と譯せり。

ざるに由るが故に非法に非ず、法に非ず非法に非ざるを以ての故に無二の義を說く。「一分に依る」とは、謂く一邊に依るなり。「開顯す」とは說示するなり。「或は有、或は非有」とは、或は是れ有性或は是れ無性となり。「二分に依りて說いて言へば、有に非ず非有に非ず」とは、依他起の二分の性を具するを取りて說いて有に非ず非有に非ずと爲す。「顯現するが如く有に非ず」とは、現に得る所の如く是の如く有ならずとなり。「是の故に說いて無と爲す」とは、此の義に由るが故に之れを說いて無と爲すとなり。「是の如く顯現するに由りて」とは、唯有に似たる相貌の顯現するに由りてとなり。「是の故に說いて有と爲す」とは、即ち此の義に由りて之れを說いて有と爲す。一切法の無自性なる意を說くことを今當に顯示すべし。「自然の無」とは、一切法は衆緣を離れては自然に性有ること無きに由りて、是を一種の無自性の意と名く。「自體の無」とは、法滅し已れば復更に生ぜざるに由るが故に無自性なり。此も復一種の無自性の意なり、「自性は堅住せず」とは、法纔かに生ずる一刹那の後は、力能く住すること無きに由るが故に無自性なり。是の如き諸法の無自性なる理は聲聞と共なり。「執取するが如く有ならず、故に自性無しと許す」とは、此の無自性は聲聞と共ならず。愚夫の取る所の如きは遍計所執の自性なるを以て是の如く有ならず。此の意に由るが故に、大乘の理に依りて一切法は皆無自性なりと說く。「無性に由るが故に成ず」とは一切法は無自性なるに由るが故に[二八]生も滅も無し等は皆成就することを得。所以は何ん、無自性に由るが故に生有ること無く、生無きに由るが故に亦滅有ること無し、生滅無きが故に本來寂靜なり。本來寂靜の故に自性は涅槃なり。「後の所依止」とは、[二九]是れ後々は此に因つて有の義を得となり。

[三〇]「四意四祕章　第四」

論曰　復四種の[三一]意趣と、四種の祕密と有り。一切の佛の言なり、應に隨つて決了すべし。四の意趣とは、一には平等意趣、謂はく說いて言ふが如し、我れ昔曾て彼の時に於て[三二]彼の分は即ち[三三]勝

【二八】生も滅も無し等とは後の本寂靜等を等取す。
【二九】後の諸句は此の無自性を所依として成立すとの意なるも、隋陳兩譯の如く順次に前句は後句の依止となるといふが今の釋文にも親しきが如し。
【三〇】隋譯には四意四合章となす、蓋し四祕密を四合するが故なり。
【三一】意趣と祕密とは隋譯には意と合義と譯し、陳譯には意と依と譯せり。その意義は釋文に解せり。
【三二】彼の分とは昔時に於ける我といふ程の義なり。
【三三】勝觀正等覺者とは毘婆尸佛(Vipaśyin)の譯語。

一切法は常に非ず、無常に非ず、と說けり。何の密意に依つて是の如きの說を作すや。謂はく依他起の自性は圓成實性の分に由れば是れ常なり、遍計所執性の分に由れば是れ無常なり、彼の二分に由れば常に非ず、無常に非ず。此の密意に依りて是の如き說を作す。常と無常と無二との如く、是の如く苦と樂と無二と、淨と不淨と無二と、空と不空と無二と、我と無我と無二と、寂靜と不寂靜と無二と、有自性と無自性と無二と、生と不生と無二と、滅と不滅と無二と、本來寂靜と本來寂靜に非ずと無二と、自性涅槃と自性涅槃に非ずと無二と、生死と涅槃と無二とも亦爾なり。是の如き等の差別は一切の諸佛の密意の語言にして、三自性に由りて應に隨つて決了すべきこと。前に說ける常無常等の門の如くなるべし。此の中に多くの頌有り、

法は實には有ならざるが如く　現じて一種に非ざるが如く[二六]
法に非ず非法に非ず　故に無二の義を說く。
一分に依りて開顯すれば　或は有り或は非有なり
二分に依りて說いて言へば　有に非ず非有に非ず。
顯現するが如く有なるに非ず　是の故に說いて無と爲す
是の如く顯現するに由りて　是の故に說いて有と爲す。
自然と自體とに無にして　自性堅住せず
執取するが如く有ならざるが故に　自性無しと許す。
無性に由るが故に成じ　後後の所依止となり
生も滅も無く本より寂として　自性般涅槃なり。

釋曰　伽他の義の中にて「法は實には有ならざるが如く、現じて一種に非ざるが如く」とは、其の次第の如く非法、非非法の因緣を釋す。實に有ならざるに由るが故に非法なり、現じて一種に非

【二六】此の句は隋譯には「而も無量の種を現ず」となせり。

【二七】此の句は隋陳兩譯共に「前は後の依止と爲る」とある、此の方が意味明了なり釋文を見よ。

彼の二分なりと。何の密意に依りて是の如き說を作せるや。依他起の自性の中に於て、遍計所執の自性は是れ雜染分にして、圓成實の自性は是れ清淨分なり、卽ち依他起は是れ彼の二分なり。此の密意に依りて是の如き說を作す。此の義の中に於て何の喩を以て顯はすや。金の土藏を以て喩と爲して顯示す。譬へば世間の金の土藏の中に三法の得べきが如し。一には地界、二には土、三には金なり。地界の中に於て土は實に有なるに非ざるも而も現に得べく、金は是れ實に有なるも而も得べからず。火にて燒鍊する時は、土相は現せずして金相顯現す。又此の地界は土の顯現する時は虛妄にして顯現し、金の顯現する時は眞實にして顯現す、是の故に地界は是れ彼の二分なり。識も亦是の如し、無分別智の火の未だ燒かざる時は、此の識の中に於て所有の虛妄なる遍計所執の自性顯現し、所有の眞實なる圓成實の自性は顯現せず。此の識若し無分別智の火の爲に燒かるる時は、此の識の中に於て所有の眞實なる圓成實の自性は顯現し、所有の虛妄なる遍計所執の自性は顯現せず。是の故に此の虛妄の[二一]分別識なる依他起の自性には、彼の二分有ること、金の土藏の中に有する所の地界の如し。

釋曰　阿毗達磨大乘經の中に、此の密意に由りて三法有りと說けり。一には雜染分、遍計所執の自性を謂ふ、是れ雜染なるが故なり。二には清淨分、謂く圓成實の自性を謂ふ、是れ清淨なるが故なり。三には彼の二分、依他起の自性を謂ふ、彼の二に通ずるが故なり。此の義を顯はさんが爲に、[二二]金の土藏を以て其の譬喩と爲す。此の中、藏とは是れ彼の[二三]種子なり、[二四]地界と言ふは是れ堅硬の性なり、土と金とは是れ[二五]所造の色なり。此の喩の中に於て三法は得べし。謂はく此の藏の中に先の時は土の相貌の顯現する有り、後の時は金の相方に乃ち得べし、金の相の後に方に得べきことを顯さんが爲に、火の燒鍊の後に得べしと說けり。故に金は眞實に有り。

論曰　世尊は有る處には一切法は常なりと說き、有る處には一切法は無常なりと說き、有る處には

【二一】分別識なる依他起の自性といふを隋譯には明了に「分別識の體たる依他起性」となし、陳譯には「分別性の識卽ち依他性」となせり。

【二二】金の土藏とは金を含藏せる土塊。

【二三】種子とは土中に藏せられたる金の分子にて未だ其の金相顯現せざるが故に種子といふ、此の學派に所謂の種子の義に非ず。

【二四】地界とは要素としての物質なれば堅硬の性といふ、大地のことに非ず。

【二五】所造の色とは要素としての地界に造られたる色法の義にして形相ある物體をいふ。

の受用の差別を起すことを顯はす。影像の喩を說くは、身業の果を除かんが爲なり。善不善の身業を緣と爲して餘色の影像の生起すること有るを顯はす。谷響の喩を說くは語業の果を除かんが爲なり。語業の因は語業の果を感ずること猶谷の響の如きを顯はす。意業に三種あり、一には[一六]非等引地、二には等引地、三には聞種類なり。光影の喩を說くは非等引地の諸の意業の果を除かんが爲なり。此の意業の所得の諸果は猶光影の如くなることを顯はす。[一七]水月の喩を說くは等引地の諸の意業の果を除かんが爲なり、等引地の諸の意業の果は猶水月の如くなることを顯はす。變化の喩を說くは聞種類の意業を除かんが爲なり。聞種類とは卽ち是れ聞思の熏習する所なり。此れ卽ち聞種類の意の差別して轉ずること猶變化の如くなることを顯示す。

論曰　世尊は何の密意に依つて[一八]梵問經の中に於て如來は生死を得ず、涅槃を得ず、と說きしや。依他起の自性の中に於ては、遍計所執の自性と及び圓成實の自性とに依りて生死と涅槃とに差別無しとの密意なり。何を以ての故に、卽ち此の依他起の自性は遍計所執分に由りて生死を成じ、圓成實分に由りて涅槃を成ずるが故なり。

釋曰　是の如き三種の自性の相法は[一九]所說の契經に悉く皆隨順することを、今當に顯示すべし。「世尊は何の密意に依りて梵問經の中に於て如來は生死を得ず涅槃を得ずと說きしや」とは問なり。「依他起の自性の中に於ては、遍計所執の自性と及び圓成實の自性とに依りて生死と涅槃とに差別無しとの密意なり」とは答なり。次に當に廣く釋すべし。依他起の自性は定んで生死に非ず、圓成實分に由りて涅槃を成ずるが故に。亦定んで涅槃に非ず、遍計所執分に由りて生死を成ずるが故なり。是の故に定んで一性と說くべからず。此の自性に由りて若し一分を得るも餘分に異らず。[二〇]此の意趣に依りて彼の經の中に於て、如來は生死を得ず涅槃を得ずと說けり。

論曰　阿毗達磨大乘經の中に薄伽梵說けり、法に三種有り、一には雜染分、二には淸淨分、三には

【一六】陳譯には非等引地を欲界散動の業とし、等引地を寂靜地として之を修慧となし、聞種類を聞思の二慧となせり。

【一七】隋譯に此に水月の喩を用ふる理由を釋して「實には所有無きも、然も靜心中に於ては種々の果の顯現する有り」といふ、陳譯參照。

【一八】隋譯には梵天問經、陳譯には婆羅門問經、魏譯には梵王經となす。

【一九】所說は佛の所說の意。

【二〇】此の意趣といふを隋譯に釋して「世尊は依他中の偏一無き性を見たまひて」といふ。

得べきもの有るが如し、多種の光影の得べきもの有りと雖も、而も光影の義は實には所有無し。識も亦是の如く、種々の義無きも而も種々の義の現に得べき有り。此に於て復疑ふらく、若し義有ること無ければ、無量の品類の戲論と言說とは云何が而も轉ずるやと。此の疑を除かんが爲に谷響の喩を說いて依他起を顯はす。譬へば谷響には義有ること無しと雖も、而も現に得べきが如く、戲論言說も亦復是の如し、實の義無しと雖も而も現に得べし。此に於て復疑ふらく、若し義有ること無ければ、云何が世間の定の心心法には義の得べき有りや。定心は能く實の如く知り、實の如く見ると說くに由るが故にと。此の疑を除かんが爲に水月の喩を說いて依他起を顯はす。譬へば水月は其の義實には無きも、水の潤滑、澄淸の性に由るが故に、而も現に得べきが如し。定心も亦爾なり、所緣の境の義は實には有ること無しと雖も、而も現に得べし、水は其の定に喩ふ、是れ潤滑澄淸の性なるを以ての故なり。此に於て復疑ふらく、若し有情は義として實に所有無ければ、云何が眞を證せる諸の菩薩等は、彼の利樂を作す覺慧を先と爲して、彼々の趣中に自體を攝受するやと。此の疑を除かんが爲に變化の喩を說いて依他起を顯はす。譬へば變化は實には義有ること無きも、化者の力に由りて一切の事を成し、變化に非ずしては義得べからざるが如し。應に知るべし、此の中にも亦復是の如く、受くる所の自體には其の義無しと雖も、而も能く一切の有情の利益安樂を作し、受くる所の自體は義現に得べき有り。[一四] 復別義世尊の意有りて、幻等の八喩を說くことを今當に顯示すべし。此の中、幻の喩は眼等の六種の內處を除かんが爲に、應に知るべし、眼等の六處を顯示せり。譬へば幻象は實には有るに非ずと雖も、而も現に得べきが如し。陽炎の喩を說くは器世間を除かんが爲なり。[一五] 彼の大に由るが故なり。陽炎の中に於ては實に水有ること無きも、動搖の力の故に水の得べきに似たり。所夢の喩を說くは色等の受用する所の境を除かんが爲なり。夢みる所の色等の如きは實には無なるも、而も能く因と爲りて愛非愛

【一四】此の句は隋譯には「復次に何の意の爲の故に世尊は幻等の八喩を說きたまひしや」といひ、陳譯には「更に別義有り、今當に佛意を說くべし」とある。

【一五】彼の大とは器世間の廣大なるをいふ、隋譯に「體寬大なるを以てなり」とあり。

何が義無きに而も【一〇】實に諸の三摩地所行の境を取りて轉ずること有りやと、此の疑を除かんが爲に水月の喩を説く。云何が義無きに諸の菩薩は無顚倒の心にて有情の諸の利樂の事を辦ぜんが爲の故に受生を思ふこと有りやと、此の疑を除かんが爲に變化の喩を説く。

釋曰 此の義の爲の故に依他起に於て幻等の喩を説くことを、今當に顯示すべし。此の中、「虚妄の疑」とは、謂はく虚妄なる依他起性に於ける有らゆる諸疑なり。此の疑を除かんが爲に幻等の喩を説いて依他起を顯はす。若し實に義無ければ、云何が境を成ずるやと。此の疑を治せんが爲に幻事の喩を説いて依他起を顯はす。譬へば【一一】幻像は實の義無しと雖も、而も境界を成ずるが如く、義も亦是の如し。他のもの復疑を生ずらく、若し義有ること無ければ即ち所緣無し、諸の心心法は云何が而も轉ずるやと。此の疑を除かんが爲に陽炎の喩を説いて依他起を顯はす。此の中陽焰は心心法に譬へ、水は義に喩ふ。譬へば陽炎に動搖有るが故に義有ること無しと雖も、而も水の覺を生ずるが如し。諸の心心法も亦復是の如く、動搖に由るが故に義有ること無しと雖も、而も義の覺を生ず。是の諸の愚夫は此に於て復疑ふらく、若し義有ること無ければ、諸の愛非愛の受用の差別は云何が得べきやと。此の疑を除かんが爲に所夢の喩を説いて依他起を顯はす。夢の中に於ては實の義無しと雖も、而も種々の愛と非愛との受用の差別は現前して得べきを見るが如し。此も亦是の如し。此に於て復疑ふらく、淨不淨の業の義既に實に無ならば、愛非愛の果の義は云何が起るやと。此の疑を除かんが爲に【一二】影像の喩を説いて依他起を顯はす。譬へば影像は實には義有ること無きも、即ち【一三】本質に於て影像の覺を起し。然も影像の義は別に得べきもの無きが如し、此も亦是の如し、應に知るべし、愛と非愛とは眞實の果の義無しと雖も、而も現に得べし。此に於て復疑ふらく、若し義有ること無ければ、云何が種々の識の轉ずること有るを得るやと。此の疑を除かんが爲に光影の喩を説いて依他起を顯はす。影を弄ぶ者には其の種々の光影の

【一〇】陳譯に「云何んが眞實の法を緣ずる定心の境界を成ずるや」となす。

【一一】幻像とは幻術者の現はす種々の形像をいふ。

【一二】影像とは鏡面に映る影像のこと。

【一三】本質とは影像の生ずる所依となるものをいふ、隋譯に「自面に於て有像の智生ず」といふ。

す。「此を得る道の清淨」とは、能く此の眞如を得る聖道は卽ち是れ清淨なるを謂ふ。謂ゆる[四]念住等の菩提分法及び一切の波羅蜜多なり。「此れを生ずる境の清淨」とは、此の能證の菩提分法を生ずる所緣の境界なり。此を生ずる境界は卽ち是れ清淨なるが故に、此を生ずる境の清淨と名く、卽ち契經等の[五]十二分敎なり。何を以ての故に、若し此の聖敎にして是れ遍計所執ならば、應に雜染の因を成ずべし。若し是れ依他起ならば、應に虛妄を成ずべし。最淨の法界より[六]等流せる性なるが故に是れ虛妄に非ず。旣に二の自性を離るるが故に圓成實を成ず。又此の四種は大乘の中に於て隨つて一種を說く、應に知るべし、是れ圓成實性なりと說く。中に於て初の二は變異有ること無く圓成實の故に圓成實と名く。後の二種は顚倒有ること無く、圓成實の故に圓成實と名く。後の伽他の中に具さに此の義を頌す。「幻等は生を說く」とは、謂はく依他起を此の中にては[七]生と名く。若し是の處に於て、一切法は譬へば幻事乃至變化の如しと說けは、應に知るべし、此れ依他起性を說くなり。「無と說くは計所執なり」とは、若し是の處に於て色有ること無しと說き乃至一切諸法無しと說くは、應に知るべし、此れ遍計所執性を說くなり。

論曰 復次に何の緣にて經の所說の如く、依他起の自性に於て幻等の喩を說くや。依他起の自性に於て他の虛妄の疑を除かんが爲の故なり。他のもの復云何が依他起の自性に於て虛妄の疑有りや。他のもの此に於て是の如きの疑有るに由る。云何が實に義有ること無きに而も[八]所行の境界を成ずるやと。此の疑を除かんが爲に幻事の喩を說く。云何が義無きに心心法轉ずるやと、此の疑を除かんが爲に陽炎の喩を說く。云何が義無きに愛非愛の受用の差別有りやと、此の疑を除かんが爲に[九]所夢の喩を說く。云何が義無きに淨不淨の業と愛非愛の果とは差別して生ずるやと。此の疑を除かんが爲に影像の喩を說く。云何が義無きに種々の識轉ずるやと、此の疑を除かんが爲に光影の喩を說く。云何が義無きに種々の戲論言說は而も轉ずるや、と。此の疑を除かんが爲に谷響の喩を說く。云

【四】四念住とは身、受、心、法の四法を不淨、苦、無我、無常と觀ずる觀法をいふ、等とは四念住を初として三十七品の助道法をいふ。

【五】十二分敎とは主として文學的立場より一切の聖敎を十二種に分類總括せるもの。

【六】等流とは性質を等しうして流出せるものゝ意。

【七】生とは因緣に依つて生じたるものゝ義にして此には生滅するものゝ意なり。

【八】所行は他の譯本に無く、唯境界とのみあり、此には心識の作用することを所行といふ、卽ち心識の働きかける對境の意なり。

【九】所夢とは夢みる所の諸相なり。

有るに由りて清淨有るが故なり。若し二俱に無ければ則ち一切種も皆所有無けん。今當に此れ都て有ること無きに非ざることを顯はすべし。雜染と清淨とを謗するの過有るが故に、雜染と清淨とは既に現に得べきが故に。此の二性は俱に有ならざるに非ず。若し執して無なりと爲せば、則ち現に雜染と清淨と有ることを撥して所有無しと言ふなり。

論曰 諸佛世尊は大乘の中に於て方廣敎を說けり。彼の敎の中に言く、云何が應に遍計所執の自性を知るべきや。應に知るべし、異門には所有無しと說けり。云何か應に依他起の自性を知るべきや。應に知るべし、譬へば幻・燄・夢像・光影・谷響・水月・變化の如しと。云何が應に圓成實の自性を知るべきや。應に知るべし、四の清淨法なりと、宜說せるを。何等をか名けて四の清淨法と爲すや。一には自性清淨、謂はく眞如・空・實際・無相・勝義・法界なり。二には離垢清淨、謂はく卽ち此れ一切の障垢を離れたるなり。三には此れを得る道の清淨、謂はく一切の菩提分法・波羅蜜多等なり。四には此れを生ずる境の清淨、謂はく諸の大乘妙正の法敎なり。此の法敎の清淨なる緣に由るが故に、遍計所執の自性に非ず。最淨の法界より等流せる性なるが故に、依他起の自性に非ず、是の如きの四法に一切の清淨法を總攝し盡す。此の中に二頌有り、

幻等は生を說き、　無と說くは計所執なり
若くは四の清淨を說いて　是を圓成實と謂ふ、
自性と離垢と　清淨の道と所緣とにして
一切の清淨なる法は　皆四相の所攝なり。

釋曰 「自性清淨」とは、此の自性は本來清淨なるを謂ふ、卽ち是れ眞如の自性、實有にして一切の有情の平等の共相なり。此れ有るに由るが故に一切法に如來藏有りと說く。「離垢清淨」とは、卽ち此の眞如は煩惱所知障の垢を遠離するなり。卽ち是の如き清淨なる眞如に由りて諸佛を顯成

體を成ずべし。一義にして多體ならば則ち相違を成ず。是の故に兩性若し同一の相ならば則ち第二の相違の過失を成ず。又名は決定せず。一の[二]瞿聲を以て九義に於て轉ず、若し名と義とは同一の相なりと執すれば多義相違す。應に同一體ならば則ち第三の相違の過失を成ずべし。[三]牛等は一相に非ざるも義は同一の性なりと執するに由るが故なり。初の一伽他には重ねて此の義を顯はせり。中に於て「成ず」とは依他起と遍計所執とは一に非ざる義を顯はすことを成ず。「法は無にして而も得べく」等とは、此の一伽他は幻等の喩を以て弟子を開悟す。弟子に二の相違の疑問有り、云何が法無きに而も現に得べきや。云何が染無きに而も清淨有りやとなり。此の中兩喩にて此の疑問を釋す。「幻等の如し」とは、譬へば幻像は眞實には所有無きも而も現に得べきが如し、應に知るべし、此の中の義も亦是の如く、現に得べしと雖も而も實有には非ず。「虛空に似たり」とは、譬へば虛空は雲等の能く染汚する所に非ずして、性清淨なるが故なりと雖も、而も彼を離るる時說いて清淨と名くるが如し。當に知るべし、諸法も亦復是の如く、實には染無くして性清淨なるが故なりと雖も、然も客障垢の滅離を得る時說いて清淨と名くるなり。

論曰　復次に何の故に顯現する所の如きは實には所有無きに、而も依他起の自性は一切に一切は都て所有無きに非ずや。此れ若し無ければ圓成實の自性も亦所有無し、此れ若し無ければ則ち一切も皆無し。若し依他起及び圓成實の自性有ること無ければ、應に染淨有ること無き過失を成ずべし。既に現に雜染と清淨とを得べし、是の故に應に一切は皆無なるべからず。此の中に頌有り、

若し依他起無ければ　圓成實も亦無く
一切種若し無ければ　恒時に染淨無けん。

釋曰　若し依他起の得べき所の如く、是の如く有ならず、既に爾らば何ぞ一切に一切は都て所有無きにあらずや。此れ若し無ければ圓成實性も亦應に有ること無かるべし、何を以ての故に。雜染

【二】瞿聲とは瞿といふ名聲字に九義ありとの意、九義とは方、獸、地、光、言、金剛實、眼、天、水、をいふ。
【三】牛は瞿の一意義なり宿譯に「無量の別相の義を以て皆牛等の一體を成するが故に」となせり。

巻の第五

所知相分第三の二

〔分別章　第三の餘〕

論曰　復次に云何が依他起の自性の如く、遍計所執の自性は顯現するも、而も體に稱ふに非ざることを知るを得るや。名の前に覺無きに由りて稱體なること相違するが故に、名に衆多有るに由りて多體なること相違するが故に、名は決定せざるに由りて、雜體なること相違するが故なり。此の中に二頌有り、

名の前に覺無きと　多名と不決定とに由りて
稱體と多體と　雜體の相違を成ずるが故に、
法は無にして而も得べく　無染にして而も淨有り
應に知るべし幻等の如く　亦復虛空に似たり。

釋曰　依他起の自性の如く遍計所執分は顯現して得べしと雖も、而も彼の體に稱ふに非ず。此の義を顯さんが爲の故に、「名の前に覺無きに由りて稱體なること相違するが故に」等と說く。若し依他起と遍計所執とが同一の相ならば、應に名を待たずして義に於て[一]覺轉ぜん。瓶有りと執するが如し。若し瓶の名を離るれば、瓶の義の中に於て瓶の覺有ること無し。若し此の瓶の名と彼の瓶の義と同一の相ならば、瓶の覺は應に轉ずべし。一相に非ざるを以て是の故に轉ぜず。此の名と義とに由りて、若し體相稱へば則ち相違を成ず。此の中の安立は名を依他起と爲し、義を遍計所執と爲す。依他起は名の勢力に由りて所遍計を成ずるを以ての故なり。又一義に於て衆多の名有り、若し名と義と同一相ならば、義も應に名の如く亦多種有るべし。若し爾らば此の義は應に多

【一】覺轉ぜんとは知覺起るべしとの意。

「色は空を離れず」と言ふ、何を以ての故に、此の二若し異らば、法と法性とも亦應に異り有るべし。若し異性有らば道理に應ぜず、無常の法と無常の性との如し。若し遍計所執の自性を取れば、色は卽ち是れ空、空は卽ち是れ色なり、何を以ての故に、遍計所執の色は所有無く、卽ち是れ空性なり、此の空性は卽ち是れ彼の無所有なり、依他起と圓成實との如きに非ざれば一なりと說くべからず。「自性散動」とは、此の散動を對治せんが爲の故に、卽ち彼の經に言はく、「舍利子よ、此れ但名のみ有り、之を謂ひて色と爲す」と、何を以ての故に、色の自性は所有無きが故なり。「差別散動」とは、此の散動を對治せんが爲の故に、卽ち彼の經に言はく、「自性には生も無く滅も無く染も無く淨も無し。生ずれば卽ち染有り、滅すれば卽ち淨有り。生滅無きが故に染も無く淨も無し」と、[五八]是の如き諸句に是の如きの義有り。「名の如く義を取る散動」とは、謂はく其の名の如く義に於て散動するなり、此の散動を對治せんが爲の故に、卽ち彼の經に言はく、「客名を假立して別々に法に於て分別を起す」と、「別々」と言ふは別々の名を謂ふ。「義の如く名を取る散動」とは、義の如く名に於て散動を起すなり、此の散動を對治せんが爲の故に、卽ち彼の經に言はく、「客名を假立して隨つて言說を起し、義に非ざる自性に是の如き名有り」と。此の十の散動を對治せんが爲の故に。般若波羅蜜多を說く。此の說を因と爲すに由りて[五九]無分別智を生ず。

論曰[六〇]　若し異門に由れば依他起の自性に三の自性有り、云何が三の自性は無差別を成ぜざる。若し異門に由りて依他起を成ずれば、卽ち此に由りて遍計所執と及び圓成實とを成ぜず。若し異門に由りて遍計所執を成ずれば、卽ち此に由りて依他起と及び圓成實とを成ぜず。若し異門に由りて圓成實を成ずれば、卽ち此に由りて依他起と及び遍計所執とを成ぜず。

釋曰　此の義は前の道理の如く解釋せよ。

【五八】此の句は隋譯には「此等の諸句は其の義是の如し」となす。

【五九】無分別智とは後に詳しき論釋あり。

【六〇】此の一段の論本の文は陳譯に依れば意義更に明了なり、參照。

二には正法の類を聞く。此に復二種あり、法に於て分別す、謂はく正法の類を聞いて或は善とし、或は不善となす。非正法の類を聞くも亦是の如く釋す。「不如理分別」とは、諸の外道及び彼の弟子の、非正法の類を聞いて因と爲して分別するを謂ふ。「執著分別」とは、不如理なる作意を因と爲し、我見に依止して、六十二の諸の惡見趣と相應する分別を起すを謂ふ、經に廣く說けるが如し。「散動分別」とは、諸の菩薩の、後に說く所の如き十種の分別を謂ふ。

論曰　一には無相散動、二には有相散動、三には增益散動、四には損減散動、五には一性散動、六には異性散動、七には自性散動、八には差別散動、九には名の如く義を取る散動、十には義の如く名を取る散動なり。此の十種の散動を對治せんが爲に、一切の般若波羅蜜多の中に無分別智を說く。是の如きの所治、能治は、應に知るべし、具さに般若波羅蜜多の義を攝す。[五七]

釋曰　此の中、「無相散動」とは、謂はく此の散動は卽ち其の無を以て所緣の相と爲す、此の散動を對治せんが爲の故に、般若波羅蜜多經には「實に菩薩有り」と言ふ、實に有りと言ふは菩薩には實に空體有ることを顯示す、空は卽ち是れ體の故に、空體と名く。「有相散動」とは、謂はく此の散動は卽ち其の有を以て所緣の相と爲す、此の散動を對治せんが爲の故に、卽ち彼の經に「菩薩有るを見ず」と言ふ、此の經の意は菩薩を見ざることを說く、遍計所執及び依他起を以て體と爲せばなり。「增益散動」とは、此の散動を對治せんが爲の故に、卽ち彼の經に「色の自性は空なり」と言ふ、遍計所執の色の自性は空なるに由るが故なり。「損減散動」とは、此の散動を對治せんが爲の故に、卽ち彼の經に「空に由らざるが故に」と言ふ、謂はく法性の色性は空ならざるが故なり。「一性散動」とは此の散動を對治せんが爲の故に、卽ち彼の經に「色は空にして色に非ず」と言ふ、何を以ての故に、若し依他起と圓成實と是れ一性ならば、此の依他起は應に圓成實の如く是れ清淨の境なるべければなり。「異性散動」とは、此の散動を對治せんが爲の故に、卽ち彼の經に

【五七】 此の論本の文に續いて陳兩譯には般若經の文を引用せり。本譯には經文を出さずと雖も釋論には經文を引證して解釋せるを見れば本來論本に出でたるものなるべし。無性の釋論には釋論の文の初めに經文を擧げたれば之を參照して本釋論の文を解すべし。

の如き有らゆる變異なり。六には他引分別、謂はく非正法の類を聞き及び正法の類を聞いて分別するなり。七には不如理分別、謂はく諸の外道は非正法の類を聞いて分別するなり。八には如理分別、謂はく正法の中にて正法の類を聞いて分別するなり。九には執著分別、[五五]謂はく不如理なる作意の類なり、薩迦耶見を本と爲し、六十二見趣と相應する分別なり。十には散動分別、謂はく諸の菩薩の十種の分別なり。

釋曰　「一切の分別を總攝するに略して十種有り」とは、是れ總標を擧ぐ。後に當に別釋すべし。「根本分別」とは、阿賴耶識を謂ふ、是れ諸の分別の本根にして、自體も亦是れ分別なり。「緣相分別」とは、色等の識を謂ふ。所緣の相の爲に起す所の分別なり。「顯相分別」とは、眼識等幷に所依の識を謂ふ、彼の所緣の境に似たる相を顯現して起す所の分別なり、所分別或は能分別有るが故に分別と名く。「緣相變異分別」とは、卽ち緣相の有らゆる變異を謂ふ、此の緣相の變異を緣ずる分別なるが故に緣相變異分別と名く、「謂はく老等の變異」とは、身中の[五六]大種の衰朽改易するを老變異分別と名く、此の故に說いて緣相變異分別と名く、「等」とは、病死變異を等取す。「樂受等の變異」も亦爾なり、樂受に由りて身體改易するを謂ふ、「等」とは苦及び不苦不樂を等取す。「貪等の變異」も亦爾なり、「等」とは、瞋癡を等取す。「逼害、時節の代謝等の變異」も亦爾なり、身變異して所緣の境と爲り起す所の分別なり、「逼害」とは殺縛等を謂ひ、「時節の代謝」とは寒時等の時節の改易するを謂ふ。「捺落迦等の諸趣の變異」とは、傍生及び餓鬼趣を等取す。「及び欲界等の諸界の變異」も亦爾なり。等とは色、無色界を等取す。「顯相變異分別」とは、眼識等顯現して彼の所緣の境に似たる相の有らゆる變異を謂ふ。此の顯相變異を緣して分別す、此も亦前に說く所の老等の種々の變異の如く。此れ亦老等の位の中に於て變異して起るに由るが故なり。「他引分別」とは、他の敎に由りて起す所の分別を謂ふ。此に復二種あり、一には非正法の類を聞く、

【五五】隋譯には「謂はく正思惟の因緣にて身見を根本と爲し六十二見處と相應する分別なり」とあり。

【五六】大種とは地水火風の四大要素をいふ。

に、二には清淨圓成實の故に、此に由るが故に圓成實性を成ず。

釋曰 「雜染と清淨との性成ぜざるが故に」とは、卽ち是の如き依他起性を若し遍計する時は卽ち雜染を成じ、無分別の時は卽ち清淨を成ずるに由り、[四九]二分に由るが故に一性は成ぜず、是の故に說いて依他起性と名く。「自性の遍計執の故に」とは、眼等に於て遍く計執して眼等の[五〇]自性と爲すが如し。「差別の遍計執の故に」とは、卽ち彼の眼等の自性に於て遍く計執して常、無常等の無量の差別を爲すが如し。「自性圓成實の故に」とは、[五一]有垢の眞如を謂ひ、「清淨圓成實の故に」とは無垢の眞如を謂ふ。

論曰 復次に遍計に四種有り、一には自性遍計、二には差別遍計、三には有覺遍計、四には無覺遍計なり。[五二]有覺とは名言を善くするを謂ひ、無覺とは名言を善くせざるを謂ふ。是の如くして遍計に復五種有り、一には名に依つて義の自性を遍計す、謂はく是の如き名に是の如き義有りと。二には義に依つて名の自性を遍計す、謂はく是の如き義に是の如き名有りと。三には名に依りて名の自性を遍計す、謂はく遍く未了の義の名を計度するなり。四には義に依りて義の自性を遍計す、謂はく遍く未了の名の義を計度するなり。五には[五三]二に依り二の自性を遍計す、謂はく遍く此の名、此の義は是の如き體性なりと計度するなり。

釋曰 [五四]「名言を善くす」とは、名言を解するを謂ひ、「名言を善くせず」とは、牛羊等の、分別有りと雖も、然も文字に於て解了すること能はざるを謂ふ。

論曰 復次に一切の分別を總攝するに略して十種有り。一には根本分別、謂はく阿賴耶識なり。二には緣相分別、謂はく色等の識なり。三には顯相分別、謂はく眼識等幷に所依の識なり。四には緣相變異分別、謂はく老等の變異、樂受等の變異、貪等の變異、逼害時節の代謝等の變異、捺落迦等の諸趣の變異、及び欲界等の諸界の變異なり。五には顯相變異分別、謂はく卽ち前に說く所の變異

【四九】 此の句は隋譯には更に明了に「此の二分の中に於て一分のみは成就せざるが故に」となせり。

【五〇】 自性とは此の處にては自體の義、次の差別とはこれに對して屬性をいふ。

【五一】 有垢とは在纏位のこと。

【五二】 此の隋譯には「有覺とは善く言說を知る衆生を謂ひ、無覺とは善く言說を知らざる衆生を謂ふ」となせり。

【五三】 二とは名と義とをいふ。

【五四】 此の一段の釋論は甚だ簡に失するも陳譯釋論には委細に解說せり。參照。

如く語の因たる[四五]尋に由りて語言を發す。「見聞等の四種の言說に由つて言說を起す」とは、語の說く所の[四六]見聞覺知の四種の言說の如く餘の言說を與ふ。「無義の中に於て增益して有と爲す」とは、言說する所の如く、無義の中に於て義有りと執するが故なり。

論曰　復次に此の三自性は異ると爲すや、異らずと爲すや。應に異るに非ず、異らざるに非ずと言ふべし。謂はく依他起の自性は[四七]異門に由るが故に依他起を成じ、卽ち此の自性は異門に由るが故に遍計所執を成じ、卽ち此の自性は異門に由るが故に圓成實を成ず。何の異門に由つて此の依他起は依他起を成ずるや、他の熏習の種子に依つて起るが故なり。何の異門に由つて卽ち此の自性は遍計所執を成ずるや、是れ遍計の所緣の相なるに由るが故に、又是れ遍計に遍計せらるゝが故なり。何の異門に由つて卽ち此の自性は圓成實を成ずるや、所遍計の如く畢竟じて是の如く有ならざるが故なり。[四八]

釋曰　「是れ遍計の所緣の相に由るが故に」とは、謂はく彼の意識を名けて遍計と爲し、此を所取所緣の境性と爲して能く遍計を生ず。是の故に亦遍計所執と名く。「又是れ遍計と所遍計の故に」とは、卽ち彼の意識を名けて遍計と爲し、彼の相貌を緣じて所取の境と爲すを所遍計と爲す。此の義に由るが故に依他性も亦遍計所執の自性と名く。「所遍計の如く」とは、彼の意識の遍計所執の如しとなり。「畢竟じて是の如く有ならざるが故に」とは、所遍計の上の遍計所執は畢竟じて無たるが故にとなり。此の義に由るが故に卽ち此の自性は圓成實を成ず。

論曰　此の三自性に各幾種有りや。謂はく依他起に略して二種有り、一には他の熏習する種子に依つて生起するが故に、二には他の雜染と淸淨との性は成ぜざるに依るが故に、此の二種の依他の別に由るが故に依他起と名く。遍計所執にも亦二種有り、一には自性の遍計執の故に、二には差別の遍計執の故に、此に由るが故に遍計所執と名く。圓成實性にも亦二種有り、一には自性圓成實の故

【四五】尋とは心所の一にして語を發する前に尋求思量する心作用をいふ、舊譯には覺觀となす、卽ち尋伺なり。

【四六】隋譯に「見聞覺知等の四種の流布共に相ひ流布し云云」といふ。

【四七】異門に由るとは隋譯には「別の道理の故に」となす。

【四八】此の論本の終に隋陳兩譯に尙一の問答あり、且らく隋譯に依るに「何の別の道理にて、一の識體に於て一切の種々の識體の相貌を爲すや。阿梨耶識の識體は彼の餘の生起識の種々の相貌と爲る。應に知るべし、彼の緣相生起するが爲の故に」とあり、更に陳譯を參照せよ。

釋曰 「是れ遍計所執の永く相有ること無し」とは、謂はく遍計所執の自性は性無きを性と爲す。「云何が」と「何の故に」等とは、前の依他起の中に已に說けるが如し。「變異無き性に由るが故に」とは、虚誑無き性を謂ふ。[四三]虚誑ならざる性の如し。「又清淨なる所緣の性に由るが故に。一切の善法の最勝の性なるが故に、最勝の義に由りて圓成實と名く」とは、謂はく清淨なる所緣の性に由るが故に。最勝の性なるが故に、圓成實と名くとなり。

論曰 復次に能遍計有り、所遍計有りて、遍計所執の自性乃ち成ず。此の中何者が能遍計、何者が所遍計、何者が遍計所執の自性なりや。當に知るべし、意識は是れ能遍計たり、分別有るが故に、所以は何ん、此の意識は自の名言熏習を用つて種子と爲し、及び一切の識の名言熏習を用つて種子と爲すに由る。是の故に意識は無邊の行相分別して轉じ、普く一切に於て分別計度するが故に、遍計と名く。又依他起の自性を所遍計と名く。又若し此の相に由りて依他起の自性をして所遍計を成せしむれば、此の中是を遍計所執の自性と名く。此の相に由るとは是れ此の如き義なり。復次に云何が遍計し、能く遍く計度するや。何の境界を緣じ、何の相貌を取り、何に由つて執着し、何に由つて語を起し、何に由つて言說し、何の所を增益するや。謂はく名を緣じて境と爲し、依他起の自性の中に於て彼の相貌を取り、見に由つて執著し、尋に由つて語を起し、見聞等の四種の言說に由つて言說を起し、無義の中に於て增益して有と爲す。此に由つて遍計し能く計度す。

釋曰 「復次に云何が遍計し能く遍く計度するや」とは、謂はく意識を能遍計と名け、依他起性を所遍計と名け、此の品類に由りて能く遍く計度することを顯示せんと欲するが爲の故なり。又[四四]「名を緣じて境等と爲し、依他起の自性の中に於て彼の相貌を取る」と說くは、謂はく卽ち此の依他起の中に於て眼等の名に由りて彼の相貌を取り、彼の相を取るに由りて能遍計度 。「見に由つて執著す」とは、所取の相の如く是の如く執著するなり。「尋に由つて語を起す」とは、執著する所の

【四三】此の句は隋譯には「誠實の臣の如し」となし、陳譯には「世間に說く眞實の友の如し」となせり、いづれとも此の句は事例を擧げたるものと解すべし。

【四四】此の句は隋譯には「論云」となして引用せる文となせり。

起るが故に依他起と名く。生ずる刹那の後には功能有ること無く、自然に住するが故に依他起と名く。

釋曰　「實には唯識のみ有りて似義の顯現するの所依止なり」とは、謂はく實には義無く。唯其の識のみ有りて、彼の似義の顯現する與に因と爲る。卽ち此の唯識を依他起と名く。「云何が依他起を成ずるや」とは、自の攝受を問ひ、「何の因緣の故に依他起と名くるや」とは[四〇]他の說を爲すことを問ふ。自の因より生じ。生じ已つて能く暫時も安住すること無きを依他起と名く。[四一]自の攝受に應じ亦他の說を爲す。

論曰　若し遍計所執の自性は依他起に依りて實には所有無く義に似て顯現するならば、云何が遍計所執を成じ、何の因緣の故に遍計所執と名くるや。無量なる行相は、意識の遍計し顚倒して生ずる相なるが故に、遍計所執と名く。自相は實に無なるも唯遍計の所執のみ得べき有り、是の故に說いて遍計所執と名く。

釋曰、「依他起に依る」とは、謂はく唯識に依るなり。「實には所有無し」とは、實には自體無きなり。「義に似て顯現す」とは、唯似義の顯現の得べき有るのみ。[四二]「云何」と「何の故」等とは、次前に說けるが如し。「無量の行相」とは、謂ゆる一切の境界の行相なり。「意識の遍計」とは、謂はく卽ち意識を說いて遍計と名く。「顚倒して生ずる相」とは、謂はく是れ能く生ぜし虛妄顚倒の所緣の境相なり。「自相は實に無なり」とは、彼の體無きなり。「唯遍計の所執の得べき有るのみ」とは、唯亂識の所執の得べき有るのみとなり。

論曰　若し圓成實の自性は、是れ遍計所執の永く相有ること無きならは、云何が圓成實を成じ、何の因緣の故に圓成實と名くるや。變異無き性に由るが故に圓成實と名く。又淸淨なる所緣の性に由るが故に、一切の善法の最勝の性なるが故に、最勝の義に由りて圓成實と名く。

【四〇】 他の說を爲すとは依他起の他の義を釋す、何故に說いて他と爲すやとなり。

【四一】 此の句は隋譯には「卽ち此の自攝を說いて名けて他と爲すが故に、依他と名く」となし、陳譯には「他に約して說くに由るが故に依他と名く」となせり。

【四二】 此の句は隋譯には「何の因緣にて說いて分別性と名くるやとは、後に次第に說くが如し」となせり。

一切の菩薩にして靜慮を得たる者は、勝解力に隨つて諸義顯現す。二には奢摩他を得て法觀を修する者は、纔かに作意する時に諸義顯現す。三には已に無分別智を得たる者は、無分別智現在前する時に一切の諸義は皆顯現せず。此の所説の三種の勝智の隨轉する妙智と、及び前の所説の三種の因緣とに由り、諸義の無義なる道理成就す。[三七]

釋曰「相違識相智」とは、謂はく能く相違する者の識の所緣の義相を了知するなり。「所緣無き識の現に得べき智」とは、謂はく現に有ることを見れば所緣無しと雖も、而も識の生ずるを得るなり。過去等の如し。「應に功用を離るゝも顚倒すること無かるべき智」とは、謂はく若し是の如き義は顯現する所の如く、卽ち是れ實有ならば、對治を起すことを離れて、顚倒無き智は任運に應に成ずべきを能く了知するなり。「三種の勝智の隨轉する妙智」とは、謂はく三種の勝智の、境に隨つて轉ずる義を能く了知するなり。「心の自在を得」とは、心の調順を得て堪能する所有るなり。「靜慮を得たる者」とは、謂はく諸の聲聞及び獨覺等は已に靜慮を得たり。「勝解力に隨つて諸義顯現す」とは、謂はく[三八]若し地に其の水を成ぜんことを願樂せば、意の如く則ち成ず、火等も亦爾なり。「奢摩他を得」とは、三摩地を得るなり。「法觀を修す」とは、契經等に於て策勤觀察するなり。「纔かに作意する時諸義顯現す」とは、[三九]一義に隨ひ作意するが如く如く是の如く是の如く非一の品類の境相顯現す。「無分別智現在前する時、一切の諸義は皆顯現せず」とは、若し顯現する義の如く卽ち是の如く實有ならば、應に無分別智有ることを得ざるべし。無分別智若し是れ實有ならば、決定して應に諸義皆無なりと許すべし。

〔**分別章　第三の初**〕

論曰　若し依他起の自性は實には唯識のみ有りて、似義の顯現する所依止ならば、云何が依他起を成じ、何の因緣の故に依他起と名くるや。自の熏習せる種子より生ずる所にして、他の緣に依つて

【三七】此の論本の文の終に隋譯には「此の義の中に應に六偈を說くべし、後に增上慧學勝相の中に於て說く、謂はく地獄・畜生・人等なり」とあり、陳譯も亦同じ、參照。

【三八】隋譯に云はく「若し地界をして水を成ぜしめんと欲すれば、念ふが故に卽ち成ず」と。

【三九】隋譯にいはく、「一義の中に於て隨つて種々に作意すれば、則ち種々の相顯現するが故に」と。

身は皆是れ意處なることは、聖の所說なるに由るが故に。是の故に唯意識のみ有ることを知るを得。

論曰　若し處に阿賴耶識を安立して義識と爲せば、應に知るべし、此の中餘の一切の識は是れ其の相識なり。若くは意識の識及び所依止は是れ其の見識なり。彼の相識に由る。是れ此の見識の生ずる緣相なるが故に。似義現ずる時能く見識の生ずる依止事と作る。是の如きを名けて諸識を安立して唯識の性を成ずと爲す。

釋曰　阿賴耶識に於ても亦相見の二識を安立することを得、謂はく阿賴耶識は彼の意識及び所依止を以て其の見識と爲し、眼等の諸識を其の相識と爲す。一切の法は皆是れ識なるを以ての故なり。「彼の相識に由る」とは、謂はく眼等の諸識なり。「是れ此の見識の生ずる緣相なるが故に」とは、是れ見の生ずる因なり。所緣の性に由りて見の生ずる因と名く。「似義現ずる時能く見識の生ずる依止事と作る」とは、能く彼に於て見るが故に見識と名く。卽ち此の見識は義に似て現ずる時、彼の諸の相識は意の見識の與に能く相續して不斷に住する因と作る。是の故に說いて「生ずる依止事」と名く。

論曰　[三五]諸義は現前に分明に顯現せるに、而も是れ有なるに非ずとは云何が知るべきや。世尊の言へるが如し、若し諸の菩薩は、四法を成就すれば能く隨つて一切唯識のみにして都て義有ること無きに悟入せんと。一には相違識相の智を成就す、餓鬼、傍生及び諸天人の如く、同じく一事に於て彼の所識に差別有るを見るが故に。二には[三六]所緣無き識を現に得べき智を成就す、過去、未來(及び)夢影の緣の中に所得有るが如き故に。三には應に功用を離るゝも顚倒すること無かるべき智を成就す、有義の中の能く義を緣ずる識の如く、應に顚倒すること無く、功用に由らずして智の眞實なるべきが故に。四には三種の勝智の隨轉する妙智を成就す、何等をか三と爲す、一には心の自在を得、

【三五】諸義云云とは外境は現前に顯現せり何ぞ其の有に非ざるを知るやとの意なり。

【三六】隋譯に「無境界の識の生ずることを知る、過去、未來及び夢影等の如し」といふ。

受して起る。「餘の色根の身に依止するが如し」とは、餘の眼等の有色の諸根の身に依止するが如しとなり。此の諸根は身に依止するに由るが故に、自の所依に於て能く損益を起す、意識も亦爾なり、身に依止するが故に、應に知るべし、身に於て能く變異を作す。復別義有り、謂はく身根の身に依止するが如く、若し外縁有りて所觸、現前すれば、身根に便ち所觸に似たる相起る、卽ち此の起る時は、自の依身に於て能く損益を作す。意識も亦爾なり、身に依止するが故に、彼の所觸に似たる影像の生ずる時、所依の身に於て能く損益を作す。

論曰　此の中に頌有り、

若くは遠行し獨行し　　無身にして窟に寢ね
此の調し難きの心を調するを　　我れは眞の梵志たりと說く。

釋曰　彼の諸の菩薩は[三〇]此の義を成ぜんが爲に[三一]阿笈摩の伽他を引いて證と爲す。「若くは遠行し」とは能く一切の所緣の境を緣ずるが故に。「獨行し」と言ふは[三二]第二無きが故に。「無身」と言ふは身を遠離するが故に。「窟に寢る」とは[三三]身窟の中に於て居止するが故に、「此れを調す」と言ふは作すこと自在なるが故に、「調し難きの心」とは性暴惡なるが故なり。

論曰　又經に言へるが如し、是の如き五根の所行の境界を意は各能く受け、意は彼の依と爲る。

釋曰　復餘教を引いて此の義を證成す。「是の如き五根の所行の境界を意は各能く受く」とは、諸根の所行を名けて「境界」と爲す。是の如き境界を意は各能く受くるは、悉く能く一切の法を分別するが故なり。一一各々能く領受するが故に、「各能く受く」と名く。「意は彼の依と爲る」とは、是れ彼の諸根の能生の因なるが故に、[三四]意散亂すれば彼れ生ぜざるを以ての故なり。

論曰、又所說の如く、十二處の中には、六識身を說いて皆意處と名く。

釋曰、復聖教有りて能く此の義を證す。謂はく六識身を皆說いて意と名け、餘識の名無し。六識

[三〇] 此の義とは唯一意識のみ有りて別に五識なしとの說を指す。
[三一] 陳譯には法足經といふ。
[三二] 第二無しとは一意識の外に餘の識なしとなり。
[三三] 識の身內に在るをいふ。
[三四] 散亂すとは別の緣あるをいふ、隋譯に「若し意に別の緣有れば眼等は生ぜず」となせり。

入り、及び種々に入ることを說くは、皆唯識に入るの因を成立せんが爲なり。[二六]餘の義は相ひ似たり。

論曰　又此の中に於て一類の師有りて說かく、一の意識のみ、彼々の依轉じて、彼々の名を得、意思業を身語業と名くるが如し、と。

釋曰　一類の菩薩は唯一の意識の體のみ有らしめんと欲し、彼れ復[二七]次第に安立することを顯示す。「意思業を身語業と名くるが如し」とは、一の意思が、身門に於て轉ずれば身業の名を得、語門に於て轉ずれば語業の名を得るも、然も是れ意業なるが如し。意識も亦爾なり。復是れ一なりと雖も、眼に依つて轉ずる時は眼識の名を得、是の如く乃至身に依つて轉ずる時は身識の名を得るも、意識を離れて別に餘識有るに非ず。唯別に阿賴耶識有るを除く。

論曰　又一切の所依に於て轉ずる時、種々なる相に似て二の影像轉ず、謂はく唯似義の影像と及び分別の影像となり。又一切處にも亦所觸の影像に似て轉ず、有色界の中には卽ち此の意識は身に依止するが故に、餘の色根の身に依止するが如し。

釋曰、或は有るが難じて言く、眼等の諸根は分別有ること無し、是の故に意識は彼に依つて轉ずる時應に分別無かるべし、染汚の意は雜染の依と爲りて、雜染をして轉ぜしむるが如し。此れも亦應に爾るべしと。故に次に解して言く「又一切の所依に於て轉ずる時、種々の相に似たる二の影像轉ず、謂はく[二八]唯義の影像と、及び分別の影像となり」と。此の中、一切の所依とは眼等の所依を謂ふ。「種々の相に似たる二の影像轉ず」とは、謂はく唯似義の影像と及び分別の影像となりとの二句は解釋なり、此の二句に由りて唯一の識なるも一分には唯義の影像顯現し、第二には此の義を分別する相生ず、と說く。是の故に前說に過失有ること無し。「又一切處にも亦[二九]所觸の影像に似て生ず」とは、謂はく有色處は定位の中に於て五識無き時は、色身の中に在りて內に領

【二六】此の句は隋譯には「餘の義は前所說の如し」となせり。

【二七】次第に安立すとは次第に生起して種々の名を安立すとの意。

【二八】論本には似義とあり、似の字を脫せるか。

【二九】所觸云云とは隋陳兩譯には「似觸」となせり、身識の對境たる觸卽ち觸覺の似境なり。

て相と爲し、眼識の識を以て見と爲し、乃至身識の識を以て見と爲す。[19]若し意識ならば一切の、[20]眼を最初と爲し法を最後と爲す諸識を以て相と爲し、意識の識を以て見と爲す。此の意識に分別有るに由るが故に、一切の識に似て生起するが故に。此の中に頌有り、

唯識と二と種々とに　　觀者の意は能く入り
唯心に悟入するに由りて　　彼をも亦能く伏離す。

釋曰　此の中の長行及び頌は三種の相に由つて唯識を成立することを顯示す。長行の中に於て、「唯識に由る」とは、唯識のみ有るが故に、一切の諸識も皆唯識のみ有り、所識の義には所有無きに由るが故なり。「二性に由る」とは、一の識に於て相と見とを安立するに由る、卽ち此の一識の一分は相と成り、第二は見と成る。眼等の諸識は卽ち二性に於て種種を安立す。謂はく一の識の上に其の所應の如く、一分は變して種々の[21]相に似て生じ、第二は變じて種々の[22]能取に似る。若し意識に就かば卽ち「一切の眼を最初と爲し法を最後と爲す、諸識を以て相と爲し、意識の識を見と爲す」。此の意識に由りて遍く分別するが故に、一切の識に似て生起するが故なり。又三の中に於て唯意識に就てのみ以て種々と爲す、所取の境界決定せざるが故なり。[23]其の餘の諸識は境界決定し、又分別無し。意識は分別するが故に、唯此に於てのみ第三の種々の相見を安立す。是の故に此の意識に於て具足して唯識を安立す。伽他の中に於て、「能く唯識に入る」とは、所取の義永く有ること無きに悟入するが故なり。「能く二に入る」とは、此の識に相見有ることに悟入するが故なり。「能く種々に入る」とは、此の識は種々の相に似て生起することに悟入するが故なり。觀者の意とは諸の瑜伽師の有する所の意趣なり。問ふ、何に於て悟入するや。答ふ、「唯心に悟入するに由りて彼をも亦能く伏離す」。若し能く唯其の心のみ有りて都て義有ること無しと悟入すれば、是れ則ち[24]彼に於ても亦能く[25]伏離す。既に所取の義無し、何ぞ能取の心有らんや。二性に

【一九】若し以下は第三の種々に由るを解す。
【二〇】眼耳鼻舌身の識と意の對境たる法識となり。
【二一】相とは客觀の對象としての相分。
【二二】能取とは主觀の作用としての見分。
【二三】眼耳等の五識は其の對境は色聲等に決定し且つ此の五識自體には分別作用無しとの意。
【二四】彼れとは唯心といふを指す。
【二五】伏離とは隋譯には滅離となせり、蓋し伏すと離るとは唯識觀の淺深に依る相違を示す。

とは、彼の因性と爲るなり。若し彼の諸識は是の如く轉ずることを離れては、[16]非義の中に於て義を起する心倒は應に有るを得ざるべし。「此れ若し無ければ」とは、若くは煩惱障の諸の雜染の法、若くは所知障の諸の雜染の法は應に有るを得ざるべし。此の頌の中に於て是の如きの義を顯はす。亂相と亂體とを其の次第の如く許して色識及び非色識と爲す。此の中「亂相」とは卽ち是れ亂の因にして色識を體と爲す、「亂體」とは卽ち是れ諸の無色の識なり。色識の亂因若し有ること無ければ、非色識の果も亦應に有ること無かるべしとなり。

〔差別章第二〕

論曰　何の故に、身、身者、受者の識と所受識と能受識とは一切の身の中に於て俱有し和合して轉ずるや。能く圓滿して生ずる受用の所顯なるが故なり。何の故に說の如く世等の諸識は差別して轉ずるや。無始の時より來、生死流轉して斷絕すること無きが故に、諸の有情界は無數量なるが故に、諸の器世界は無數量なるが故に、諸の所作の事は展轉して言說すること無數量なるが故に、各別に攝取し受用する差別も無數量なるが故に、諸の愛非愛の業果の異熟の受用する差別も無數量なるが故に、受くる所の死生の種々の差別も無數量なるが故なり。

釋曰　自身をして圓滿に受用せしめんが爲の故に、身、身者、受者の三識は、一切の身の中に彼れ一時に俱有し和合することを許す。一時に轉ずるが故に說いて「俱有」と名く。「所顯なるが故なり」とは是れ彼の因性なり。

論曰　復次に云何が是の如き諸識を安立して唯識性を成ずるや。略して三相に由る。一には唯識に由る、義有ること無きが故に。二には二性に由る、[17]有相、[18]有見の二の識は別なるが故に。三には種々に由る、種々なる行相にして生起するが故なり。所以は何ん、此の一切の識は義有ること無きが故に唯識を成ずるを得。相と見と有るが故に二種を成ずるを得。若し眼等の識ならば色等の識を以

【一六】隋譯には「非義を義と爲す顚倒の心」となせり。

【一七】有相とは所緣の對境。

【一八】有見とは能緣の識作用。

は串習に由るが故に、境謝往すと雖も、纔かに作意する時は昔の如く生ず、と。此れも亦爾らば、聞思の兩慧の境は既に謝往して現に體有ること無し、無體の中に於て若し更に生ずる時は、但識の影現じて彼に似て生ずるが故に。聞思の慧は謝往したる曾て受けし所の境を緣ぜず。是の故に唯識なることは此に由りて彌々彰かなり。所取の義無きの理も亦成就す。

論曰　是の如く已に種々の諸識は夢等の喩の如しと說けり。卽ち此の中に於て眼識等の識は唯識なることを成ずべし。眼等の識には既に是れ色有り、亦唯識のみ有ることを云何が見るべきや。此も亦前の如く教と及び理とに由る。

釋曰　眼識等の識に皆色有るに非ざれば、唯識なることを成ずべし、眼等の諸識には既に是れ色有り、云何が唯識なるや。「此も亦前の如く教と及び理とに由る」とは、此の眼等の識は前に引く所の理と教との顯示するが如く、亦唯識を成ず。

論曰　若し此の諸識も亦體是れ識ならば、何の故に乃ち色性に似て顯現するや。一類にして堅住し、相續して轉じ、顚倒等の諸の雜染の法の與に依處と爲るが故なり。若し爾らざれば非義の中に於て義を起す顚倒は應に有ることを得ざるべし。此れ若し無ければ、煩惱所知の二障の雜染も應に有ることを得ざるべし。此れ若し無ければ諸の淸淨の法も亦應に有ること無かるべし。是の故に諸識は應に是の如く轉ずべし。此の中に頌有り、

　　亂相と及び亂體とを　　應に許して色識と
　及び非色識と爲すべし　　[一五]若し無なれば餘も亦無し。

釋曰　「一類にして堅住し、相續して轉ず」とは、相似に由るが故に名けて一類と爲す、多時に住するが故に說いて堅住と名く、諸の有色の識は相似して多時に相續して轉ずるなり。「顚倒」等とは、卽ち是等は諸の雜染の法を取りて煩惱障及び所知障の與に因性と爲るが故なり。「依處と爲る」

【一五】此の句は隋譯に「前のもの無なれば後も亦無し」となせり。

如きの影像の顯現する有り。[一〇]質を緣と爲して還つて本質を見て、而かも我れ今影像を見ると謂ひ、及び質を離れて別に所見の影像有りて顯現すと謂ふが如し。此の心も亦爾なり、是の如く生ずる時、相ひ似て異れる所見の影現ずと。即ち此の敎に由りて理も亦顯現す。所以は何ん、定心の中に於て觀見する所に隨つて諸の[一一]靑瘀等の所知の影像には、一切別の靑瘀等の事無く、但自心を見るのみ。此の道理に由りて、菩薩は其の一切の識の中に於て應に比知すべし。皆唯識のみ有りて境界有ることと無しと。又是の如き靑瘀等の中に於ては憶持識に非ず、所緣の境は現前に住することを見るが故なり。聞思より成る所の二の憶持識も亦過去を所緣と爲すを以ての故に、所現の影像は唯識を成ずることを得。此の[一二]比量に由りて菩薩は未だ眞智の覺を得ずと雖も、唯識の中に於て應に比知す可し。

釋曰　此の唯識のみ有ることは敎に顯示せるに由る。[一三]十地經に言へるが如く、是の如き三界は皆唯心のみ有りとの故にと。解深密經の中に「我れ識の所緣は唯識の所現なりと說くが故なり」とは、謂はく識の所緣は唯識の所現にして別の境無しとの義なり。復識を擧ぐるは、我が所說の定識の所行も唯識の所現にして、別に體有ること無きを顯はす。「然れば即ち此の心の是の如く生ずる時には」とは、即ち此に由りて[一四]品類の生ずる時を謂ふ。「相い似て異れる所見の影現ず」とは、謂はく定の所行の相似は識を離れて別に所取有りて分明に顯現するなり。「又是の如き靑瘀等の中に於ては憶持識に非ず、所緣の境は現前に住することを見るが故なり」とは、謂はく靑瘀等は是れ三摩地の所行の影像にして、憶持識に非ず。此れ即ち彼の方處に在らざるに由りて、昔に受けし所の如く還是の如く憶するも、此の住することは現前に分明に見るが故なり。彼の憶持識の所見は暗昧なるも、此の現前に住する所見は分明なり。若し有るが復謂へらく、聞思の慧の如き

【一〇】此の間に本經には「善男子よ、善く瑩ける淸淨の鏡面に依つて」の句あり、今之を脫せる爲に意義解し難し、隋譯には「譬へば面に因つて影を見るが如し、言はく我れ影を見ると、謂はく見る所の影は自の面と異る、彼の心も亦爾なり」となせり、更に陳譯參照。

【一一】靑瘀等とは顏色を形容せるもの、瘀とは血色の惡しきをいふ、陳譯には「靑黃」となせり、骨鎖觀に於ける所現の相なり。

【一二】比量とは比論によつて推理すること。

【一三】十地經は華嚴經中の十地品の別行にして世親の釋論有り、唯識學派の所依の經の一に數へらる。

【一四】品類云云とは心の對象となる種々の差別の相をいふ。

而も無我は有り。

論曰　此の中、身と身者と受者との識は、應に知るべし、即ち是れ眼等の六の內界なり。彼の所受の識は應に知るべし即ち是れ色等の六外界なり。彼の能受の識は應に知るべし、即ち是れ眼等の六識界なり。其の餘の諸識は應に知るべし是れ此の諸識の差別なり。又此の諸識は皆唯識のみ有りて都て義無きが故に。此の中何を以て喩と爲して顯示するや。應に知るべし夢等を喩と爲して顯示す。謂はく夢中には都て其の義無く、獨り唯識のみ有るが如し。種種の色聲香味觸、舍、林、地、山など義に似て影現すと雖も而も此の中に於ては都て義有ること無し。此の喩の顯はすに由りて、應に隨つて了知すべし。一切の時と處とに皆唯識のみ有りと。此等の言に由りて、應に知るべし。復幻誑、鹿愛、翳眩等の喩有り。若し覺時に於ても一切の時處に皆夢等の如く唯識のみ有らば、夢より覺めて、便ち夢中には皆唯識のみ有りと覺るが如く、覺時にも何故に是の如く轉ぜざるや。眞智の覺する時も亦是の如く轉ず、夢中に在りては此の覺轉ぜざるも、夢より覺むる時は此の覺乃ち轉ずるが如く、是の如く未だ眞智の覺を得ざる時は、此の覺轉ぜず、眞智の覺を得れば此の覺乃ち轉ず。其の未だ眞智の覺を得ざる者有らば、唯識の中に於て云何が比知せんや。敎及び理に由つて應に比知すべし。此の中、敎とは十地經に薄伽梵の說けるが如く、是の如き三界は皆唯心のみ有りと。又薄伽梵は解深密經[八]にも亦是の如く說けり、謂はく彼の經の中に、慈氏菩薩、世尊に問うて言はく、諸の[九]三摩地の所行の影像は、彼と此の心と當に異有りと言ふべきや、當に異無しと言ふべきやと。佛、慈氏に告げたまはく、當に異無しと言ふべし。何を以ての故に、彼の影像は唯是れ識のみなるに由るが故に。我れ識の所緣は唯識の所現なりと說くが故なりと。世尊よ、若し三摩地所行の影像は即ち此の心と異有ること無ければ、云何が此の心は還つて此の心を取るや。慈氏よ、少法として能く少法を取るもの有ること無し。然れば即ち此の心の是の如く生ずる時には、即ち是の

【七】鹿愛とは渴したる鹿の水を求めて陽焰を追ふこと。

【八】解深密經は唯識學派の所依の本經なり、今は玄奘の譯本に依る分別瑜伽中の文を出す、而も經文とは多少字句の不同あり。

【九】本經には毘鉢舍那三摩地とあり。

所の名言熏習の差別を用つて因と爲す。「自他差別識」とは[五]依止の差別を謂ふ、此れ前に說く我見熏習の差別を用つて因と爲す。「善趣惡趣の死生識」とは生死の趣の種々の差別を謂ふ。此れ前に說く有支熏習の差別の種子に由る。「此の諸識に由る」とは、卽ち次前に說く所の諸識に由るなり。「一切の界趣の雜染に攝せらる」とは、謂はく[六]三界五趣の雜染に墮するは是れ彼の自性なるが故に「攝せらる」と名く。「依他起相」とは、謂はく依他起を體と爲して、虛妄の分別は皆顯現するを得るなり。「此の如き諸識は皆是れ虛妄の分別の攝する所にして、唯識のみを性と爲す」とは、謂はく此の諸識は皆是れ虛妄分別の自性なるが故に「攝する所」と名く。「是れ所有無く眞實に非ざる義の顯現する所依なり」とは、謂はく所有無く眞實に非ざる義の顯現する所因なり。眞實に非るが故に「所有無し」と名け。執する所の我の如きは所有無きが故に「眞實に非ず」と名く。「義」とは所取なり、卽ち彼の我は實に所有無くして我に似て顯現するを謂ふ。「所依」と言ふは顯現の所依にして、是れ所因の義なり。此れを卽ち名けて依他起相と爲す。

論曰　此の中何者か遍計所執相なりや。謂はく義無くして唯識のみ有る中に於て、義に似て顯現するなり。

釋曰　「義無きに於て」とは、所取無きを謂ふ、實には我無きが如し。「唯識のみ有る中」とは、謂はく實の義無くして義に似たる識の中なり。唯我に似て識の中に顯現するが如し。「義に似て顯現す」とは、所取の義に似たる相貌顯現するなり。實には我無きに我に似て顯現するが如し。

論曰　此の中何者か圓成實相なりや。謂はく卽ち彼の依他起相に於て義に似たる相永へに有ること無きに由る性なり。

釋曰　所有無く眞實に非ざる義の顯現する因の中に於て、實には有ること無くして義に似たる相の現ずること永へに有ること無きに由る性なり。我に似たる相の如きは永へに是れ無しと雖も、

【五】自他の差別をなすは我見に基づくが故なり。

【六】三界五趣とは欲、色、無色の三界と、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間の五趣なり。

卷の第四

所知相分第三の一

〔相章第一〕

論曰 已に所知の依を說けり。所知の相は復云何が應に見るべきや。此に略して三種有り、[一]一には依他起相、二には遍計所執相、三には圓成實相なり。

釋曰 所知の相に依りて是の如きの言を說く、「略して」とは[二]要なり。

論曰 此の中何者が依他起相なりや。謂はく阿賴耶識を種子と爲す虛妄の分別に攝する所の諸識なり。此れ復云何ん、謂はく身と身者と受者との識と、彼の所受の識と、彼の能受の識と、世識と、數識と、處識と、言說識と、自他差別識と、善趣惡趣の死生識となり。此の中、若し身と身者と受者との識と彼の所受の識と彼の能受の識と、世識と、數識と、處識と、言說識とは、此れ名言熏習の種子に由る。若し自他差別識ならば此れ我見熏習の種子に由る。若し善趣惡趣の死生識ならば此れ有支熏習の種子に由る。此の諸識に由りて一切の界趣の雜染に攝せらるる依他起相の虛妄の分別は皆顯現することを得。此の如き諸識は皆是れ虛妄なる分別の攝する所にして、唯識のみを性と爲す。是れ所有無く眞實に非ざる義の顯現する所依なり。是の如きを名けて依他起相と爲す。

釋曰 「虛妄なる分別に攝する所の諸識なり」とは、謂はく此の諸識は虛妄の分別を以て自性と爲す、「謂はく身と身者と受者との識」とは、身とは眼等の[三]五界を謂ひ、身者とは染汚の意を謂ひ、能受者とは意界を謂ふ。「彼の所受の識」とは、[四]色等の六外界を謂ひ、「彼の能受の識」とは、六識界を謂ふ。「世識」とは生死相續して斷えざる性を謂ひ、「數識」とは算計の性を謂ひ、「處識」とは器世間を謂ひ、「言說識」とは見聞覺知の四種の言說を謂ふ。是の如き諸識は皆所知依の中に說く

【一】隋譯には「依他相、分別相、成就相」となし、陳譯には依他性相、分別性相、眞實性相」となし、魏譯には「他性相、妄想分別相、成就相」となせり。
【二】要とは要略の義。
【三】五界とは眼耳鼻舌身の五根をいふ、今は十八界に依るが故に界と稱す。
【四】色等の六外界とは色聲香味觸法をいふ。

の差別の中に已に說けるが如し。「無始の時より來、種々の戲論より流轉せる種子の故に」とは、謂はく無始の時より來、言說の因を共にするが故なり。若し是の如き阿賴耶識無ければ、新に起る名言熏習の生起することは應に成ずることを得ざるべし。何を以ての故に、若し舊の熏習無ければ今の名言も亦無きが故に、若し世間に於て本來無ければ、本無くして今有ることは道理に應ぜず。「譬喩の相」とは所作の幻等の因に由るが故に、[九八]象等の顚倒の緣相有ることを得るが如し。阿賴耶識も亦復是の如し、所說の譬喩相なる、不實の遍計の種子に由るが故に、顚倒の緣相有り。此れ若し無ければ顚倒の緣相も應に成ずるを得ざるべし。

論曰　何の因緣の故に、善不善の法は能く異熟を感ずるや。其の異熟の果は無覆無記なればなり。異熟果は無覆無記なるに由りて、善・不善と互に相違せず。善と不善とは互に相違するが故に、若し異熟果にして善不善の性ならば、雜染と還滅とは應に成ずるを得ざるべし、是の故に異熟識は唯無覆無記なるのみ。

[九九]**釋曰**　「無覆無記」とは、此の中染無きを說いて無覆と名く、即ち無染の無記を無覆無記と名く。色界に生ずる煩惱不善を說いて無記と爲すが如きに非ず。「若し異熟果が善不善の性ならば、雜染と還滅とは應に成ずることを得なるべし」とは、善よりは更に善を生じ、不善よりは更に不善を生ずるを以ての故に、則ち生死流轉して邊際有ること無し、[一〇〇]流轉の雜染は有漏善に通ずるが故なり。

べし、との意を補ふて見るべし。

【九八】象等とは幻焰、夢等の所現の相をいふ。象は像にして影像の義なり。

【九九】これ有覆無記を簡ぶ。

【一〇〇】此の句は前に善よりは更に善を生ずといへるを釋したるものにして、有漏の善は流轉の因たる雜染に攝せらるゝが故にとの意なり。

釋曰 [九三]此の中、若し阿賴耶識が一切有情の共なる器世間の因體と爲れば、卽ち是れ無受生の種子なり。若し阿賴耶識が不共なる各別の色等の諸處の因體と爲れば、卽ち是れ有受生の種子なり。若し是の如き品類の共相なる阿賴耶識を離るれば、一切有情の共に受用する因なる諸の器世間は應に成ずるを得ず、是の如く若し第二の不共なる阿賴耶識を離るれば、有情世間も亦應に成ぜざるべし。此に由りて[九四]應に木石等の如くに生ずべし。

論曰 復麁重の相と及び輕安の相と有り、麁重の相とは、謂はく煩惱、隨煩惱の種子たり。輕安の相とは謂はく有漏の善法の種子なり。此れ若し無ければ、所感の異熟に[九五]堪能する所無きと、堪能する所有るとの所依の差別は應に成ずるを得ざるべし。復有受盡の相と、無受盡の相と有り、[九六]有受盡の相とは謂はく已に異熟果を成熟せる善不善の種子なり、無受盡の相とは謂はく名言熏習の種子なり。無始の時より來、種々の戲論より流轉せる種子なるが故に。此れ若し無ければ[九七]已に作り、已に作れる善惡の二業の與果を受け盡くすこと應に成ずるを得ざるべし。又新に名言熏習の生起することは應に成ずるを得ざるべし。復譬喩の相有り。謂はく此の阿賴耶識は幻焰夢翳を譬喩と爲すが故に、此れ若し無ければ、不實なる遍計の種子に由るが故に、顚倒する緣相は應に成ずるを得ざるべし。復具足の相と不具足の相と有り、謂はく諸の具縛の者を具足の相と名け、世間の欲を離るる者を損減の相と名け、有學の聲聞及び諸の菩薩を一分永拔の相と名け、阿羅漢、獨覺及び諸の如來を煩惱障を全く永く拔く相及び煩惱所知障を全く永く拔く相と名く。其の所應の如し。此れ若し無ければ是の如く次第に雜染還滅することは應に成ずるを得ざるべし。

釋曰 「麁重の相」とは所依の中に堪能無き性を謂ひ、「輕安の相」とは、所依の中に堪能有る性を謂ふ。若し有受盡の相たる阿賴耶識無ければ、數々已に作れる善惡の二業の與果を受け盡くすことは應に成ずることを得ざるべし。「無受盡の相とは謂はく名言熏習の種子なり」とは、名言熏習

なりとの意。

【九二】 清淨なる佛土云云とは此の不淨に充たざれる穢土も佛の淨土なるは佛が之を淸淨と見るに由る。所謂、心淨なれば國土淨なりの意なり。

【九三】 此の一段の釋論は簡に失して論本の意を盡くさず、然るに無性釋及び陳譯には之を細釋したるを以て其の意に由りて論本に脚註せり、委しくは他の譯を參照せよ。

【九四】 此の句は隋譯には「卽ち枯木の知覺する所無きが如し」とし陳譯には「木石等の覺無く受無きが如し」となせり、但し陳譯の釋文は本釋論と趣旨異る所あり對檢せよ。

【九五】 堪能する所無しとは惑業の種子の所感の異熟の果體には修行進展の能力なく、善根の種子の所感には此の能力ありとの意。

【九六】 有受盡とは種子の功能を受用し盡くして餘すなきをいふ、善不善の過去の業種子は異熟の報を感招すれば餘す所なしとの意。

【九七】 已に作り已に作れると繰り返していへるは數々作れるの意を顯はす、但し陳魏兩譯には「作不作」となせり、受け盡くすことを得ざれば惑業の種子はいつまでも殘留して解脫を成ずることを得ざる

中の我執の所緣は應に成ずることを得ざるべし。

釋曰「緣相の差別」とは、謂はく此の阿頼耶識は卽ち是れ染汚の意の中の能依たる我見、我執の緣相なり。若し此の緣相たる阿頼耶識の差別無ければ、染汚の意の中の薩迦耶見を因と爲す我執は、此の所緣の境は應に成ずることを得ざるべし。當に知るべし此は則ち是れ等流果なり。

論曰　此の中相貌の差別とは、謂はく卽ち此の識に共相有り不共相有り、無受生の種子の相、有受生の種子の相等なり。

釋曰「相貌の差別」とは、多くの品類有り、謂はく此の中に於て共相有り不共相有り、無受生の種子の相、有受生の種子の相等なり」とは、是れ略して標擧し、後に當に廣く釋すべし。

論曰　[八三]共相とは器世間の種子を謂ひ、[八四]不共相とは各別の內處の種子を謂ふ。共相とは卽ち是れ無受生の種子。不共相とは卽ち是れ[八五]有受生の種子なり。[八六]對治の生ずる時は唯不共相のみ對治せられて滅し、共相は他の分別の爲に持せられ、[八七]但清淨なることを見るのみ。[八八]瑜伽師は一物の中に於て種々の勝解と、種々の所見とを皆成立することを得るが如し。此の中に二頌あり、

斷じ難く遍く知り難きを　應に知るべし[八九]共結と名く
[九〇]瑜伽者は心異り　外相大なるに由るが故に、
[九一]淨者は滅せずと雖も　而も中に於て淨なることを見る
[九一]又清淨なる佛土は　佛の清淨なりと見るに由る。

復別頌有り、前に引く所に對して種々の勝解と種々の所見とを皆成立することを得。

諸の瑜伽師は一物に於て、　種々の勝解各同じからず
種々の所見も皆成ずることを得　故に知る所取は唯、識有るのみと。

此れ若し無ければ諸の器世間と、有情世間との生起する差別は應に成ずることを得ざるべし。

【八三】共相とはすべての者の共通して受用するもの、卽ち山川國土の如き器世間をいふ。
【八四】不共相とは各自特有に受用し得べきもの卽ち身體、五官の如き內處をいふ、內處とは外器世間に對して自己の眼根等をいふ、此に內外とは自他に約していふ。
【八五】有受生とは感覺知覺の有るものをいふ。
【八六】對治生じて修行の進むは只自己の惑障のみなれば不共相のみといふ、蓋し一人得道して他人解脫するといふ事なきが故なり。
【八七】但清淨なることを見るとは自らは清淨ならざるも他の得道者の對境として清淨なりとの意。
【八八】瑜伽師とは瑜伽yogin卽ち觀行を修する人の意。
【八九】共結とは一人のみの惑障にあらずして共相の上の惑なれば斷じ難く遍知し難しといふ。
【九〇】次の二句は前二句の理由を釋す、而し前句は主觀の觀行の心別異なるに由るとし、次の句は客觀の世界の廣大なるに由るとなせり。
【九一】淨者は云云とは觀行者の心清淨となれる者は他に持せらるゝ分別は之を滅せずと雖も、自己の見る世界に清淨

四には相貌の差別なり。

釋曰 [八〇]是の如く已に阿賴耶識を成立せり。今當に此の品類の差別を顯はすべし。三種の熏習の差別の中に於て、「名言熏習の差別」とは、謂はく眼の名言の熏習は、異熟識の中に在りて眼の生ずる因と爲り、異熟して眼を生ず、彼より生ずる時彼を用つて因と爲すを還つて說いて眼と名く。是の如く耳等の一切の名言の差別も亦爾なり。「我見熏習の差別」とは、染汚の意の薩迦耶見の力に由るが故に、阿賴耶識の中に於て我執の熏習生ず、此を因と爲すに由りて謂ゆる自を我と爲し、我に異るを他と爲し、各々差別有り。「有支熏習の差別」とは、善・不善・不動行の力に由るが故に、諸趣の中に於て流轉し差別す。此の三は後の所知相の初めに當に廣く分別すべきが如し。

論曰 此の中、引發の差別とは、新に熏習を起すを謂ふ。此れ若し無ければ行が識に緣と爲り、取が有に緣と爲ることは應に成ずることを得ざるべし。

釋曰 [八一]引發の差別とは謂はく能く品類を引發する差別なり。「新に熏習を起すを謂ふ」とは、彼の最も先に起る所の熏習を謂ふ。若し此の能引の阿賴耶識の差別無ければ、諸行生滅し熏習して識を成し、取の攝受に由りて有を生じて現前するも、此の所作の有は應に成ずることを得ざるべし。能く後生、有るが故に名けて有と爲す、[八二]此に說く所の取は或は善不善にして是れ串習の果なり。

論曰 此の中異熟の差別とは、謂はく行と有とを緣と爲して、諸趣の中に於て異熟差別す、此れ若し無ければ則ち種子無し。後有の諸法の生ずること應に成ぜざるべし。

釋曰「異熟の差別」とは、謂はく行と有と緣と爲りて、諸趣の中に於て引かるる異熟なり。若し此の所引の阿賴耶識の差別無ければ、則ち因有ること無し、後有の諸法、眼等の色根、此等の異熟の生ずることは應に成ぜざるべし。當に知るべし、此は則ち是れ異熟の果なり。

論曰 此の中、緣相の差別とは、謂はく卽ち意中の我執の緣相なり。此れ若し無ければ染汚の意の

【八〇】以上阿賴耶識有ることを論證し終つて、以下其の差別を明かす。

【八一】引發の差別とは本識有りて新に熏習を起すにあらざれば、業能く果を引き、惑能く業を潤して、後有を引生する差別は成せずとの意なり。

【八二】此の句は隋譯には「此の有は卽ち是れ善不善の取の數習なり」となせり、又陳譯の文も今と少しく異る、參照せよ。

對治と相應する善の意識に於てとの義なり。「五識を遠離す」とは、此れ眼等の五識を遠離するを謂ふ。「餘無し」と言ふは、善の有漏雜染の意識無きなり、已に「淨心」を擧げ、復「餘無し」と擧ぐるは、善の有漏識を遮遣せんと欲するが爲なり。「心の轉依を云何が作すべき」と言ふは、若し汝阿頼耶識有りて一切雜染の種子と作るべきを信ずれば、種子無きの義を心の轉依と名けんも、若し爾らされば云何が當に作すべき。若し對治の生ずるを名けて轉依と爲さば、此れ理に應ぜず。何を以ての故に、「若し對治の轉依ならば斷に非ざるが故に成ぜず」。雜染の永へに斷ぜらるるが故に轉依と名く。能對治は卽ち是れ永く斷ぜられしものに非ず。此れ但是の永斷の因なるに由るが故なり。若し必ず爾らば便ち果と因と差別無きの過に至らん。果は是れ永斷なり、說いて涅槃と名く、因は是れ對治なり、說いて聖道と名く。若し對治卽ち是れ永斷ならば、應に果因一體の過に至るべし。纔かに對治を生ずれば應に卽ち涅槃なるべし。「種無く或は體無きを、若し許して轉依と爲さば」とは、若し轉識に於て無種子と作し、或は卽ち無體なるを許して轉依と爲さば、「彼の二の無は無きが故に轉依は理に應ぜず」。雜染の轉識は此の定位の中に有ることを得ざるが故なり。亦種子を無と作らしむべきもの無し、[七九]二の無からしむべきもの無くして而も轉依と名くるは道理に應ぜず。若し決定して阿頼耶識有らば、雜染の轉識は此の定位の中に有ることを得ずと雖も、而も彼の種子の一切は住して阿頼耶識に在り、能く其の無種無體と作るべし。汝の轉依は道理に應ぜざるに由るが故に、應に阿頼耶識有りと信ずべし。

〔差別章　第十七〕

論曰　復次に此の阿頼耶識の差別云何ん。略して說かば應に知るべし、或は三種、或は四種なり。此の中三種とは謂はく三種の熏習の差別の故なり。一には名言熏習の差別、二には我見熏習の差別、三には有支熏習の差別なり。四種とは、一には引發の差別、二には異熟の差別、三には緣相の差別、

【七九】二の無云云とは所依の種子無く、能依の意識も無なれば依を轉ずるの義なしとの意。

に已に說けるが如し。又無色や無想天より沒し、滅定等より出づるには道理に應ぜず。又阿羅漢の後心成ぜず、唯等無間緣有ることを容すべきのみ。

釋曰　[七八]「若し復有るが執すらく、色心は無間に是れ諸法の種子を生ず」とは、謂はく若し有るが執すらく、前剎那の色は能く種子と爲りて後剎那の色は彼に因つて生ず。前識と後識とを相ひ望むるも亦爾なりと、此れ前に已に破せり。又無色より沒して色復生ずる時、色久しく斷滅す、何ぞ種子有らんや。無想天より沒し、或は復滅定等より出でて、心復生ずる時、心久しく斷滅す。何ぞ心の因有らんや。若し是の如くならば、諸の阿羅漢は終いに無餘涅槃を得べからず、色心の兩因永く盡くること無きが故たり。前剎那の色を後の色に望め、前剎那の識を後の識に望むるは、應に知るべし、等無間緣有りと容すも、因緣有ること無し。

論曰　是の如く若し一切種子の異熟の果識を離れては雜染と淸淨とは皆成ずることを得ず。是の故に前に說く所の相の如き阿賴耶識は決定して是れ有ることを成就す。

釋曰　前に說く所の無量の道理に由り、是の故に阿賴耶識は決定して是れ有ることを成就す。

論曰　此の中三頌あり、

菩薩は淨心に於て　五識を遠離して
餘無し、心の轉依をば　云何が汝當に作すべきや
若し對治の轉依ならば　斷に非ざるが故に成ぜず
果と因と差別無し　永へに斷ずるに於て過を成ず、
種無く或は體無きを　若し許して轉依と爲さば
彼の二の無は無きが故に　轉依は理に應ぜず。

釋曰　轉識に住して轉依の成ぜざる如きを三頌に顯示す。「菩薩は淨心に於て」とは、是れ出世の

【七八】以下色心の無間に種子を生ずといふ說を破す。

ぞ此の中に其の觸を生ぜざる、既に其の觸有り、受等の心法何ぞ生ぜざるを得ん、是の如くなれば滅定は應に成ずることを得ざるべし。諸の心心法は皆滅せざるが故に。又若し有るが執すらく、此の定は是れ善なるは、心の所引たる定前の方便に由る、能引の善心力に引かるるが故に、定中の善心は無貪等の善根と相應するに非ず。又三の和合に、若し堪能有らば亦能く受を生ぜんも、若し三の和合に堪能有ること無ければ、唯其の觸を生ずるのみ、是の故に定の中に善心有りと雖も、無貪等の善根と相應するに非ず、亦受等も無しと。此の義然らず。方便の善心は既に無貪等の善根と相應す、此の所引より等流せる果の心は何故に爾らざるや。又所依より能依を拔除するは理に應ぜざるが故に、心と心法とは無始より已來、一切時に於て互に相ひ離れず、今能依を拔きて所依を離れしむるは必ず得べからず。何を以ての故に、「譬喩有るが故に」、謂はく世間に於て生より壞に至るまで一切時に於て互に相ひ離れず。道理として能依を拔除して所依を離れしむること有ること無し、譬へば大種と所造の色との如し。道理として其の所造をして能造より離れしむること有ること無し、心法も亦爾なり。其をして所依の心を離れしむべからず。是の故に此の無心定の中に於て、心法有ること無くして、但善心のみ有ることは道理に應ぜず。若し有るが復謂はく、今能依を拔き所依を離れしむるは理に應ぜずと雖も、然も想及び受は能く此の定を障ふ。方便の中に於て彼を厭患するが故に、唯二のみは行ぜず、餘法は爾らず、亦現行することを得んと。これ道理に應ぜず、何を以ての故に、「非遍行の如きは此に有らざるが故に」。[十六]非遍行は此の中に滅すべきも、二は是れ[十七]遍行なるが故に滅すべからず、遍行若し滅すれば心も亦隨つて滅せん、別の因無きが故なり。是の故に此の中に心有りと言はば、是れ異熟識にして定んで意識に非ず。

論曰　若し復有るが執すらく、色心は世間に是れ諸法の種子を生ずと。此れ成ずることを得ず、前

【十六】非遍行とは遍行にあらざる他の別境等の心所をいふ。
【十七】遍行とは凡そ心識作用の起る時必ず隨つて生起する心所のこと、即ち作意・觸・受・想・思の五をいふ、今の受と想との二は此の中に在るが故に遍行といふ。

すれば、等流果の時にも亦相應有るが故に、理に應ぜず。[六九]又理に應ぜざることは「譬喩有るが故に」、謂はく世尊は諸の身行滅し、諸の語行滅し、諸の意行滅すと說けり。此の中、身行とは入出の息を謂ひ、其の語行とは尋と伺とを謂ひ、其の意行とは思想等を謂ふ。尋伺滅すれば語は必ず起らざるが如く、意も亦是の如し、若し意行滅すれば亦應に起らざるべし、若し汝の意に謂へらく、身行滅して定の中に安住せる身は[七〇]在りて滅せざるが如く、意も亦是の如く、意行滅すと雖も、應に在りて滅せざるべしとせば、此れ亦然らず、何を以ての故に、「非遍行の如きは此に有らざるが故に」。世尊の說けるが如し、身行を離れて外に身の住する因有り、謂ゆる飲食・命根・識等なり、と。此に由りて入息出息無しと雖も、而も身は安住す。意は卽ち爾らず、意行を離れて外に更に別の因の心を持して住せしむるもの無し、此に由りて應に意識無きに至るべし。故に無心定と名く。果熟の果識は此の中に有るが故に、世尊は識は身を離れずと說けり。卽ち此の識の一切種子より、後に出定する時に轉識還つて生ずるが故に、定んで阿賴耶識有ることを知るべし。

論曰　[七一]又此の定の中には、意識に由るが故に、執して心有りとすれば、此の心は是れ善不善無記皆成ずることを得ざるが故に、理に應ぜず。

釋曰　已に廣く滅定に心有ることを廢立せり。今當に略して[七二]第二頌の義を顯すべし。若し有るが阿賴耶識を除かんと欲して、意識を以ての故に滅定に心有りとすれば「此の心は是れ善・不善・無記皆成ずることを得ざるが故に、理に應ぜず」。何を以ての故に、此の滅定は是れ善性なるに由るが故に、且らく不善に非ず。無記も亦爾り、[七三]威儀・[七四]工巧・[七五]變化の無記は定んで有ることを得ず。若し此は是れ異熟無記なりと說かば、理卽ち應に阿賴耶識に至るべし。此を除いて更に第五の無記無ければなり。又此の定の中、心若し是れ善ならば、應に無貪等の善根と相應し染汚の意滅して唯善心のみ在るべし。爾の時、善心と所依と所緣とは皆悉く是れ有りて三事和合す。云何

【六九】第十一の過失を擧ぐ。

【七〇】在りては存在しての意。

【七一】此の一段の論本の文は他の譯に見えず、而も釋論は前の段に續いて此の一段の文を出せり。但し隋陳兩譯には此の釋論の文の後半に在る能依所依の釋を前に出し四威儀の釋を後とせり、思ふに此の一段の釋論は前段の論本の再釋より續いて其の後の部分を釋したるものなることは此の段の釋が遍行非遍行を以て終れるより見て明かなり。且つ他釋に論本に缺けたるに拘らず、これと同意義の釋文の存する所より察するに、本譯論本の文も釋文の轉入にあらざるかを思はしむ。

【七二】第二頌の義とは恐くは誤寫なるべし。

【七三】威儀無記とは起居動作の上の無記なるもの。

【七四】工巧無記とは工藝技術の上の無記のもの。

【七五】變化無記とは神通變化の上の無記のもの。

餘心有るべからず、必ず應に觸得べしとの過有るべきが故に。餘定に住するが如く決して疑有ること無し。謂はく餘定の中にて善根と相應する餘識の轉ずる時には決定して[五六]觸有り、定の生ずる所の[五七]輕安を以て相と爲す、或は樂受に順じ、或は非苦樂受に隨順する有り、此の觸を緣と爲して或は樂受を生じ、或は復非苦樂受を生ず。何を以ての故に、[五八]「餘の三摩地に於て此の功能有るが故に」、餘定の中に於て此の二觸は[五九]二受を生ずるに於て必ず功能有るを見る(如く)、此も亦應に爾るべし、障因無きが故なり。[六〇]觸を緣と爲す受は此の中應に至るべし。然も理に應ぜず。何を以ての故に[六一]「應に唯想のみを滅する過失有るべきが故に」。若し此の觸を緣と爲して受を生ずることを許さば、此の定の中に於ては唯應に想のみを滅すべし。然も應に許すべからず。想受倶に滅することは聖の所說なるが故なり。又此の定の中に、若し餘識有りて必ず其の觸と倶に相應する有らば、此れ理に應ぜず。何を以ての故に、若し觸有らば[六二]「應に其の思信等の善根の現行する過有るべきが故に」、若し其の識と觸と相應して轉ずること有らば、必ず此と倶に生ずる思等有り、聖の所說なるが故に、此の中應に思の現行すること有るに至るべし。若し此の定の中に[六三]思の現行して[六四]造作する善心有らば、必ず[六五]信等の善根の現行すること有らん、然も許すべからず。若し前に說く所の如き種々の過失と及び阿笈摩と相違する過失とを避けんと欲し、[六六]但諸の心法を厭離するに由るが故に唯心法のみを拔き、此の定の中に於ては唯心のみ有りて心法有ること無しと立つるもの有らば此れ亦然らず、何を以ての故に、[六七]「彼の能依を拔いて所依を離れしむるは、理に應ぜざるが故に」、所依は是れ心、能依は是れ心法なり、所依と能依、心と心法とは無始の生死より來更互に相ひ離れず。此れ相ひ引くに由る。是の故に定は應に、無貪等の善根と相應すべし。若し此の定及び定の方便は無貪等の善根と相違するが故に、定の中に於ては善根轉ぜず、唯善心のみ轉ずと言はば、此れ餘處に於て都て未だ曾て[六八]見ず。若し因の時に於て彼の法と相應

ば善根(善の行爲)あるべし、善根あらば想も受も亦これ有るべし、然らば所對治の心卽ち受想有らば能對治の定は無しとなり。

【五六】第六の過失を擧ぐ。觸とは觸の心所にして根境識の和合を義となす、其の結果として苦樂等の感覺卽ち受を生ず。

【五七】輕安とは定中に身心の輕快を覺ゆるをいふ。

【五八】第七の過失を擧ぐ。

【五九】二受とは樂受と非苦非樂の捨受をいふ。

【六〇】此の句は隋譯に「若し爾らば觸は受に緣たり、則ち此の義は成せざるに至らん」となせり。

【六一】次に第八の過失。

【六二】次に第九の過失。

【六三】思とは思惟又意思の作用をいふ。

【六四】造作は思の作用なるが故なり。

【六五】信等とは信、精進等の善の心所をいふ。

【六六】諸の心法とは前に擧げし所の觸受想思をいふ。

【六七】第十の過失を擧ぐ。

【六八】此の道理を見ずの意。

に、[四一]餘の心法の想受の如きも亦爾なり、倶に應に滅せざるべし、然も此の滅定は[四二]倶滅の所顯なり、是の故に應に定成ずべからざるに至るべし。若し唯阿賴耶識有るのみと立つれば、則ち此の過無し。[四三]靜住を求むる者は、[四四]彼の怨たる餘の心心法を治せんが爲の故に此の定を生ず。[四五]不明了の性たる阿賴耶識を對治せんが爲めならず。又[四六]此の定の內に餘心有ること無し、何を以ての故に、「所緣と行相とは得べからざるが故に」、諸の心、心法の相續して斷ぜざるには必ず所緣と行相とを遠離せず、此の滅定の中に、若し心有らば、亦應に所緣と行相とを離れざるべし。然も此の二種倶に得べからず、是の故に此の定には餘心有ること無し。若し唯阿賴耶識有るのみと立つれば此の妨難無し。執受は所依の所顯なるが故なり。[四七]又此の定の中に若し轉識有らば、此の識には必ず善等の差別有り、謂はく或は是れ善、或は是れ不善、或は是れ無記なり。然らば此の中の識は且らく是れ善に非ず、「應に善根と相應するの過有るべきが故に」。此れ則ち相違す。亦此の識は是れ自性善なるに非らず。此れ善根と相應することを離れては善性を成ぜざるに由るが故なり。[四八]定心は是れ善性なりと立つるに由るが故にといはゞ、欲せざる所の、無貪等の善根と相應するに至らん。此れ應に許すべからず。餘の善心と差別無きが故に、遍く[四九]一切處に應に此の過を成ずべし。[五〇]又此の中に於て亦不善無記有ることを得ず。「不善と無記とは理に應ぜざるが故に」、[五一]欲を離るる時に於て諸の不善根は皆永く斷じたるが故に、不善を成ぜず。亦無記にも非ず、[五二]此の定は善なるが故なり。[五三]又此の心は是れ善なりと立つべからず。「應に想受の現行するの過有るべきが故に」、若し善根を離るれば善心有らず、是の故に應に善根の現行するに至るべし。此の定の中に善根の現行すること有るが如く、想受も亦爾なり、應に現行するに至るべし。別の因無きが故に。然も理に應ぜず。[五四]所治現行する時には能治無きが故なり。譬へば貪等の正しく現行する時には不淨觀等は決定して有ること無きが如し。[五五]又此の定中に阿賴耶識を離れて

【四一】心所法の如きも亦想あれば必ず受ありとなり。
【四二】倶滅の所顯とは滅定は心心所倶に滅したる所に顯はるゝ定なりとなり。
【四三】靜住とは定に住すること。
【四四】彼の怨とは定の障礙となるものゝ意なり。
【四五】不明了の性とは善にも非ず惡にもあらざる無記性のものをいふ。
【四六】以下第二の過失を擧ぐ。
【四七】次に第三の過失を擧ぐ。
【四八】此の句は若し前の難を避けんが爲に定心是れ善性なりと立てんか、然らば其は無貪等の善根とも相應すといふ自己の欲せざる歸結に到達すべしとの意。
【四九】一切の善心の起る處には同一の過失あるべし、即ち此の定に善心あらば滅心定の義は立たざるべし。
【五〇】次に第四の過失を擧ぐ。
【五一】已にこれ滅盡定なれば遠く欲界の欲を離れたれば其時に不善は皆斷せられたりとの意なり。
【五二】前の定の中に善心を許すとは異りて滅心定自體の善なることは大小乘の許す所なり。
【五三】次に第五の過失を擧ぐ。
【五四】此の句の意は善心あら

〔順道理章　第十六〕

論曰　又滅定に入るも識は身を離れずとは。聖の所說なるが故なり。此の中、異熟識は應に身を離れざることを成ずべし、此を治せんが爲に滅定は生ずるに非ざるが故なり。

釋曰　滅定に引入するも識は離れずとの言は、定んで阿賴耶識有ることを成ぜんが爲なり。世尊の、識は身を離れずと說けるは、異熟識を除いて餘は成ずることを得ず。滅定の生ずるは轉識を對治するを以ての故に、此の定を觀じて極寂靜と爲せばなり。

論曰　又定を出でて此の識復生ずるに非ず、異熟識は既に間斷し已つて、結の相續を離るれば重ねて生ずること無きに由るが故なり。

釋曰　若し定を出でて此の識還へり生ずと執し、此の意に由るが故に識は身を離れずとせば、此れ理に應ぜず。定より出づるも識は復生ぜざるを以てなり。異熟果の識は既に間斷し已らば、結相續は更に餘生に託することを離れては重ねて生ずること無きが故なり。

論曰　又若くは有るが執すらく、意識あるを以ての故に滅定に心有り、と。此の心成ぜず、[三七]定應に成ずべからざるが故に、[三八]所緣と行相とは得べからざるが故に、應に善根と相應する過有るべきが故に、不善と無記とは理に應ぜざるが故に、應に想受の現行する過有るべきが故に、觸得べきが故に、三摩地に於いて功能有るが故に、應に唯想のみを滅する過失有るべきが故に、應に其の思信等の善根の現行する過有るべきが故に、彼の能依を拔いて所依を離れしむることは理に應ぜざるが故に、譬喩有るが故に、非遍行の如きは、此に有らざるが故に。

釋曰　「又若し有るが執すらく意識を以ての故に滅定に心有りと、此の心成せず」とは、若し有るが前說の自相の阿賴耶識を離れんと欲して、餘の轉識を以て滅定に心有りとすれば、此れ理に應ぜず。何を以ての故に、[三九]「定成ずべからざるが故に」、未だ曾て[四〇]心の心法を離るるを見ざるが故

【三七】滅定とは意識を滅する定なればなり。

【三八】此の意識の客觀の對象と其の主觀の認識作用とは不可得なり。

【三九】以下十一箇の理由を擧げて滅盡定中に心有りと立つるの過失を明かす、これ其の第一なり、但し陳釋論には次第を數示して十の過失となせり。參照。

【四〇】心法とは受想等の心所法なり、心有れば必ず心所法あり。

ち異熟の果識及び一切の種子は種子無くして轉じ、一切の種は永へに斷ず。

釋曰 「已に能く諸の煩惱の纒を對治す」とは、謂はく是れ能く增上の貪等の現に起り轉ずる因を斷ずるなり。「已に能く諸の嶮惡の趣を對治す」とは、謂はく若し能く諸の煩惱の纒を斷ずれば、卽ち能く諸の嶮惡の趣を對治す。「已に一切の有らゆる惡業の朽壞對治と作る」とは、謂はく若し[三五]順後受業有りて應に惡業に墮すべしと雖も、而も能く彼が爲に朽壞の因と作る。要を擧げて之を言はば、此の聞熏習は能く一切の過去未來現在の惡業を治するなり。「又能く一切の諸佛菩薩に隨順し逢事す」とは、謂はく是れ當來に善友に逢事し自身に因を得るなり。「是れ世間なりと雖も、應に知るべし初修業の菩薩の得る所も亦法身の攝なり」とは、謂はく諸の異生の菩薩を「初修業の菩薩」と名く、亦是れ法身の種子なるが故に「亦法身の攝なり」と說く。「聲聞獨覺の得る所は唯解脫身のみの攝なり」とは、謂はく聲聞等の正聞熏習は唯是れ解脫の因にして唯解脫身を得るのみにて、法身を得ざるが故なり。

論曰 復次に云何が猶水と乳との如く、非阿賴耶識と阿賴耶識と同處に倶に轉じて、而も阿賴耶識の一切種は盡きて、非阿賴耶識の一切種は增すや。譬へば水と鵝の飮む所の乳とに於けるが如し。又世間の欲を離るることを得る時に、非等引地の熏習は漸く減じ、其の等引地の熏習は漸く增して轉依を得るが如し。

釋曰 非阿賴耶識と阿賴耶識と同處に倶に轉ずと雖も、而も阿賴耶識盡くるも非阿賴耶識は在ることを、還つて卽ち前の水乳の和合するも、[三六]鵝に飮まるる時は乳盡きて水在るの譬喩を以つて顯示す。又世間の欲を離るるを得る時、阿賴耶識の中に於て非等引地の煩惱の熏習は漸く減じ、其の等引地の善法の熏習は漸く增して、轉依を得るが如し。此の中の轉依も當に知るべし、亦爾なり。

【三五】順後受業とは過去の業因にして現世に生果せず次生以後に報いらるゝものをいふ。

【三六】隋譯に「鵝は水中の乳を飮み、乳盡くるも水在るが如し」となす。

とは、謂はく(二九)隨つて一の相續の轉ずる處に在るなり。「異熟識の中に寄在して彼と和合して倶に轉ずること猶水乳の如し」とは、此の聞熏習と異熟識と性同じからずと雖も、識の中に寄ること猶水乳の和合して倶に轉ずるが如しとなり。「然も阿賴耶識に非ず」等とは、復和合して一性に似て轉ずと雖も、然も卽ち是れ阿賴耶識に非ず、是れ能く阿賴耶識を對治する種子の性なるが故なり。

論曰　此の中、下品の熏習に依りて中品の熏習を成じ。中品の熏習に依りて上品の熏習を成ず、聞思修に依りて(三一)多分に修作して相應することを得るが故に、

釋曰　此の中、下中上品とは、應に知るべし、(三二)聞思修の成ずる所の慧に依りて説く。彼の(三三)一一に三種有るに由るが故なり。復別義有り。聞の成ずる所の慧は是れ下品なり、思の成ずる所の慧は是れ中品なり、修の成ずる所の慧は是れ上品なり。「聞思修に依りて多分に修作して相應を得るが故に」とは、謂はく聞等に依りて數々猛利に修作するが故にとなり。又此の中に於て下品を因と爲して中品を成ずるを得、中品を因と爲して上品を成ずるを得。

論曰　又此の正聞熏習の種子の下中上品は、應に知るべし、亦是れ法身の種子にして阿賴耶識と相違し、阿賴耶識の所攝に非ず。是れ出世間の最淨なる法界より等流せる性なるが故に、是れ世間なりと雖も而も是れ出世の心の種子の性なり。又出世の心の未だ生ぜざる時なりと雖も、已に能く諸の煩惱の纏を對治し、已に能く諸の嶮惡の趣を對治し、已に一切の有らゆる惡業の朽壞對治と作る。又能く一切の諸佛菩薩に隨順し逢事す。是れ世間なりと雖も、應に知るべし、初修業の菩薩の得る所も亦法身の攝なり。聲聞獨覺の得る所は唯解脱身のみの攝なり。又此の熏習は阿賴耶識に非ず、是れ法身と解脱身との攝なればなり。熏習の下中上品の次第に漸く增すが(三四)如く如く、是の如く是の如く異熟の果識は次第に漸く減ず。卽ち所依を轉ずるなり。既に一切種の所依を轉じ已れば、卽

【三〇】何れの趣生に在るもそれ〴〵の生に隨つて異熟識の中に在りとの意。

【三一】多分とは數々習すること。

【三二】聞慧を下品とし、思慧を中品とし、修慧を上品となすの意。

【三三】三慧の一一に復下中上の三等ありとなり。

【三四】熏習の次第に增すに隨つて反對に異熟識は漸次に減ずる漸次次第の意を顯はして如く如く、是の如く是の如くと繰返したるなり蓋し是れ原文に忠實なる直譯體なるべし。

釋曰 「云何が」等とは、謂はく異熟識は是れ所治の因なり、能治の因と爲ることは道理に應ぜず、「又出世の心は昔より未だ曾て習せず」とは、謂はく先に未だ生ぜざるが故なり。「彼の熏習は決定して應に無かるべし」とは、此の因に由るが故に、彼の出世の心は熏習有ること無きは、決定して疑ひ無しとなり。最も清淨なる法界より等流せる正聞熏習の種子の生ずる所なり」とは、法界は聲聞等に異ることを顯はさんが爲に「最も清淨なる」と言ふ。佛世尊の證する所の法界は、永く煩惱と所知との障を斷ずるに由るが故に、最も清淨なる法界より流るる所の經等の教法を、「最も清淨なる法界より等流す」と名く。無倒に是の如き經等を聽聞するが故に「正聞」と名く。此の正聞に由りて起る所の熏習を名けて「熏習」と爲す。或は復正聞は即ち是れ熏習なり、是の故に說いて正聞熏習と名く。即ち此の熏習は相續して阿賴耶識に住在し、因と爲りて能く出世間の心を起す。是の故に說いて言く、最も清淨なる法界より流るる所の正聞熏習の種子の生ずる所なりと。

論曰 此の聞熏習は是れ阿賴耶識の自性なりと爲すや、阿賴耶識の自性に非ずと爲すや。若し是れ阿賴耶識の自性ならば、云何が是れ彼の對治の種子となるや。若し阿賴耶識の自性に非ずとせば、此の聞熏習の種子の所依は云何が見るべきや、[二七]乃し諸佛の菩提を證得するに至るまで[二八]此の聞熏習は隨つて一種の所依の轉ずる處に在り、異熟識の中に寄生して彼と和合して倶に轉ず。猶水乳の如し。然も阿賴耶識に非ず、是れ彼の對治の種子の性なるが故に。

釋曰 此の間熏習は是れ阿賴耶識の自性なりと爲すや、阿賴耶識の自性に非ずと爲すや、若し爾らば何の過かある。若し是れ阿賴耶識の自性ならば、云何が即ち阿賴耶識の對治の種子と爲るや。若し阿賴耶識の自性に非ずとせば、此の聞熏習の種子は即ち應に別に所依有るべし。[二九]「乃至諸佛の菩提を證得するまで」とは、乃至諸佛の證する所の無上菩提を得るまでを謂ふ。「此の聞熏習」とは、即ち是れ最も清淨なる法界より等流せる正聞熏習なり。「隨つて一種の所依の轉ずる處に在り」

【二七】 乃至以下隋譯には「乃至佛の菩提位まで有する所の聞熏習は何の身中に在りや」とありて意義明了なり。

【二八】 以下は正しき答を出す、此の句は隋譯には簡明に「果報識と同相にして生ず」といへり。

【二九】 乃至云云とは菩提を證得する究竟位まで漸次に修行の進展する間の聞熏習の所依は何れに在りやとの意なり。

し、定んで體有ること無し。云何が復種子と爲りて能く後時に如理なる作意と相應する心を生ぜんや。又此の如理なる作意と相應するは是れ世間の心なり、彼の正見と相應するは是れ出世の心なり。曾て未だ時として倶に生じ倶に滅すること有らず。是の故に此の心は彼の所熏には非ず。既に熏ぜられず、彼の種子と爲ることは道理に應ぜず。是の故に出世の清淨は、若し一切種子の異熟の果識を離れては亦成ずることを得ず。此の中、聞熏習は彼の種子を攝受すること相應せざるが故なり。

釋曰　出世間の清淨の成ぜざる如きを今當に顯示すべし。此の「他の言音」と「如理なる作意」とは、謂はく言音と相應する作意なり。「意識も亦種々の散動する餘識の爲に間てらる」とは、是れ正見と相應する出世間の心は(餘の識に依りて)間隔せらるるの義なり。「若し如理なる作意と相應して生ずる時」とは、謂はく、彼の時に於てなり。「此の聞所熏の意識と、彼の熏習とは、久しく滅して過去し定んで體有ること無し」とは、謂はく長時を經て已に謝し隔越すれば決定して體無しとなり。「云何が復種子と爲りて能く後時に如理なる作意と相應する心を生ぜんや」とは、彼れ久しく滅して現に體有ること無ければ、因と爲ること能はざるを謂ふ。「此の中、聞熏習は彼の種子を攝受すること相應せざるが故に」とは、謂はく世間の意識の中に在るが故に、「此の中」と言ふ。「聞熏習」とは他の言音を正しく聞くことに依りて熏習するなり。「彼の種子を攝受す」とは、意識の中に在りて出世の清淨の種子を攝受するなり。「相應せざるが故に」とは、謂はく彼の計する所は理に應ぜざるが故に、云何が此は彼れより生ずと說くべけん。

論曰　復次に云何が一切種子の異熟の果識は雜染の因と爲り、復出世の能く彼を對治する淨心の種子と爲るや。又出世の心は昔より未だ曾て習せざるが故に、彼の熏習は決定して應に無かるべし。既に熏習無し、何の種より生ずるや。是の故に應に答ふべし、最も清淨なる法界より等流せる正聞熏習の種子の生ずる所なり、と。

【二六】彼の時とは後時に淨心の起る時をいふ。

卽ち欲纏の善心を以て欲纏の貪を離れんが爲の故に加行を勤修す。此の欲纏の加行心と色纏の心とは俱に生滅せざるが故に、彼の所熏に非ず。彼の種子と爲ることは道理に應ぜず。又色纏の心は過去の多生に餘心に間隔せられ、應に今の定心の種子と爲るべからず。[二一]唯有ること無きが故に、是の故に色纏の定心を成就する一切の種子の異熟果識は展轉傳來して今の因緣と爲り、加行の善心を增上緣と爲す。是の如く一切の離欲地の中にても應の如く當に知るべし。是の如く世間の清淨は若し一切の種子の異熟識を離れては理成ずることを得ず。

釋曰　世間の清淨の理の成ずることを得ざる如きを今當に顯示すべし。謂はく[二二]欲纏の貪を遠離せんが爲の故に、欲纏の善心を以て加行を修する時、卽す、此の欲纏の加行の善心は、未だ曾て彼の[二三]色纏の善心の熏習する所と爲らず、俱に生滅せざるが故に、今の色纏の心は應に種子無くして自然に生ずべし。[二四]又過去世の色纏の善心は多生に間てられ餘識に隔てられ、[二五]唯有ること無きが故に。已に過去せるが故に。今の定心の種子と爲ることを得ず。「展轉傳來して今の因緣と爲る」とは阿賴耶識は彼の種を持するが故に、今の色纏の心は自種より生ずるなり。加行の善心に功力無きに非ず、功行と言ふは但增上緣のみ、是れ因緣に非ず。彼の增上力に由りて此の色纏の心を生ず。是の如く色纏の貪等を遠離するを應の如く當に知るべし。

〔出世間淨章　第十五〕

論曰　云何が出世の清淨成ぜざるや。謂はく世尊は說けり、他の言音と及び內に各別に理の如く作意するとに依り、此を因と爲すに由りて正見生ずることを得と。此の他の言音と理の如く作意すとは、耳識に熏ずと爲すや、意識に熏ずと爲すや、兩ながら俱に熏ずと爲すや。若し彼の法に於て理の如く思惟せんに、爾の時耳識は且らく起ることを得ず、意識も亦種々の散動する餘識の爲に間てらる。若し如理なる作意と相應して生ずる時は、此の聞所熏の意識と彼の熏習とは久しく滅して過去

【二一】　唯とは他の諸譯いづれも「已に」となす。

【二二】　欲纏とは婬欲等に纏縛せられたる欲界のこと。

【二三】　色纏とは色(物質)に纏縛せられたる色界のこと、但し異本には纏を塵となし、市塵の義と解して界と同意となせり。

【二四】　次には若し又其は過去の色纏の善心なりと言はゞ其も亦不可なりと示す。

【二五】　唯有ること無しとは、現に全く存在せずとの意。

論曰　若し非想非非想處、無所有處に生じて、出世間の心現在前する時は、即ち應に二趣を悉く皆滅離すべし。此の出世の識は非想非非想處を以て所依の趣と爲さず、亦應に無所有處を以て所依の趣と爲すべからず、亦涅槃を所依の趣と爲すにも非ず。

釋曰　若し[一五]非想非非想處に生じ、或る時は彼の[一六]無所有處の出世間の心を起して現在前せしめんに、[一七]彼の處の心は極めて明利なるに由るが故に。又非想非非想處の心は闇鈍なるに由るが故に彼の處の極めて明利なる心に依止して出世の心を起し現在前せしむ。此の出世の心は應に彼の[一八]第一第二を以て所依趣と爲すべからず。彼の二地は皆世間なるに由るが故に。又餘地に生ずれば餘地の心を起して現在前するが故に。二の所依趣と倶なることは[一九]理に應ぜず。又即ち此の心は涅槃を所趣依と爲すべからず。[二〇]有餘依なるが故に。是の如き三種は所依趣と爲ること既に成ずることを得ず。若し阿賴耶識有ることを信ぜざれば、此の出世の心は何の所依趣なりや。

論曰　又將に沒せんとする時、善を造ると惡を造るとにより、或は下より、或は上より所依漸く冷ゆ。若し阿賴耶識有ることを信ぜざれば皆成ずることを得ず。是の故に若し一切種子の異熟識を離るれば、此の生の雜染も亦成ずるを得ず。

釋曰　將に命を捨てんとする時善を造ると惡を造るとによりて、或は下より或は上より、身分漸く冷え、以つて善を造る者は必定して上昇し、若くは惡を造る者は必定して下墜す。若し阿賴耶識有りて能執受と爲ることを許さざれば、云何ぞ所依漸く冷ゆること有るを得んや。阿賴耶識は能く執受するが故に或は下より、或は上より、其の次第の如く所捨の處に隨ひて身即ち冷ゆる有り。

〔世間淨章　第十四〕

論曰　云何が世間の淸淨成ぜざるや。謂はく未だ欲纏の貪を離れず、未だ色纏の心を得ざる者は、

【一五】非想非非想處と無色界の第四なり。
【一六】無所有處とは無色界の第三なり。
【一七】彼の處とは無所有處なり。
【一八】第一とは非想非非想處を指し第二とは無所有處を指す。
【一九】理に應ぜざることを陳譯に釋して「此の心は明了なるが故に第一道に依止せず、已に第二道を捨すれば、第二道も亦此の心の爲に依止と作ることを得ず」といへり。
【二〇】有餘依とは業報の果體を有するの意なり。

釋曰　是の如く已に非等引地の結生相續は、異熟識を離れて成ずることを得べからざるを說けり。等引地の如きも亦成ずることを得ざるを、今當に顯示すべし。謂はく此の處に於て染汚の識に由りて結生相續す。等引地に於ても非等引の染汚の意識に由りて結生相續す。「染汚」と言ふは、彼の地の煩惱に染汚せらる。彼の地の煩惱とは、謂はく定味[一二]を湌する等なり。此の染汚の心は不定地に在り、[一三]不定地に沒し、此より沒し已つて卽ち彼の地の心は云何が現前せん。既に現前せず、云何が當に結生相續するを得べきや。此の道理に由り、定んで應に阿賴耶識有りと許すべし。無始の時より來、恆に彼の地有りて此の心に熏習す。此の熏習に由りて、此の心現行す。此の心に由るが故に結生相續す。

論曰　復次に無色界に生ぜんに、若し一切の種子の異熟識を離るれば、染汚と善との心は應に種子無かるべし、染汚と善との心は應に依持無かるべし。

釋曰　「無色界に生ぜんに」とは、謂はく已に色を解脫せるなり。「染汚と善との心」とは、謂はく能愛味と及び三摩地となり。「應に種子無かるべし」とは、應に因無かるべきを謂ひ、「應に依持無かるべし」とは、應に依無かるべきを謂ふ。復別義有り。謂はく此の二心若し種子無ければ、何よりして生ずるや。若し依持無ければ、何に依りて轉ずるや。阿賴耶識の攝受する所なるが故に自種より生じ、所依と爲るが故に、此の能持をして相續して轉ぜしむ。

論曰　又卽ち彼に於て若し出世の心正に現在前すれば、餘の世間の心は皆滅盡するが故に、爾の時に便ち應に彼の趣を滅離すべし。

釋曰　卽ち彼の界に於て若し出世の心現在前する時、此を除く所餘は是れ世間の心なり。彼の世間心は爾の時皆滅す。是の如くして彼の趣は便ち應に永く斷ずべければ、[一四]功用に由らずして自然に無餘涅槃を證得せん。既に此の理無し。應に阿賴耶識を撥無すべからず。

【一二】定味を湌すとは色界に在りては不善心なく、禪定の樂に味着す、之を定地の染汚となす。
【一三】不定地とは欲界非等引地なり。
【一四】功用に由らずとは意志の努力を用ひて修行せずにとの意なり。

釋曰　「若し異熟識を離るれば」とは謂はく阿賴耶識を離るれば成ずるを得ざるが如きを、今當に顯示すべし。謂ゆる、世尊の言く、識は名色を緣とし、名色は識を緣とすと。此の中「識は名を緣とす」とは、謂はく[九]六識中の非色の四蘊なり。「識は色を緣とす」とは、謂はく羯邏藍なり。若し阿賴耶識有りと說かされば、何等をか名けて名色は識を緣とすと爲すや。名色に依りて、剎那に展轉するに由り、相似して相續し流轉して絕えざるなり。

論曰　若し異熟識を離るれば已に生ぜる有情の識食は成ぜず。何を以ての故に、六識の中に隨つて一識を取るも、三界の中に於て已に生ぜる有情は能く食事を作すこと得べからざるを以ての故なり。

釋曰　此の言は識食の成ぜざることを顯示す。世尊の說けるが如し、食に四種有り、一には段食、二には觸食、三には意思食、四には識食なりと。此の中、[一〇]段食とは是れ能く轉變す、轉變に由るが故に所依を饒益す。[一一]觸食とは是れ能く境を取る。暫く能く色等の境界を見るに由りて、便ち所依をして饒益し生ぜしむるが故なり。意思食とは是れ能く希望す、希望に由るが故に所依を饒益す、遠く水を見れば渴すと雖も死せざるが如し。識食とは是れ能く執受す。執受に由るが故に所依久しく住す。若し爾らざる者は應に死屍に同じく久しからずして爛壞すべし、是の故に應に識も亦是れ食なることを許すべし、能く所依を饒益する事を作すが故に。此の中、觸食は六識身に屬す。意思食は希望の意に屬す。何の別の識有りて說いて食と爲すべきや。又若し無心、睡眠・悶絕、滅定に入る等には六識身は滅す、誰か復餘の能く身を執受して爛壞せざらしむるもの有や。若し阿賴耶識を棄捨する有らば身は必ず爛壞せん。

論曰　若し此れより歿して等引地に於て正に生を受くる時、非等引の染汚の意識に由りて結生相續す、此の非等引の染汚の心は彼の地の攝する所なり。果熟識を離れて、餘の種子の體は定んで得べからず。

【九】六識中と有るは誤にして五蘊の中といふべきなり、此の句は隋譯には「名とは謂はく六識身なり、即ち說いて非色の四聚に名く」とありて明了なり、是に由つて案ずるに本譯に六識とあるは六識身の義にして次の非色の四蘊との間に脫字あるものか。

【一〇】段食とは量を分つて段々に攝取することを得る有形の食物なり、形を變して營養をなすが故に轉變す云云といふ。

【一一】觸食とは對境に接觸することに由りて生命を助長するもの、されば此に食といふは生命を發育助長せしむるに力あるものをいふ、觸とは此には觸覺をいふにあらず、五官に依つて對境を取りいれる、所謂感覺及び知覺をもいふ。

[六]生有を緣じて境と爲し、[七]中有に於て滅す。[八]「和合」と言ふは、識と赤白と安危を同一にするなり。若し和合識卽ち、是れ意識ならば、此に依り復所餘の意識を生ぜん。是れ則ち一時に二の意識轉ず。謂ゆる所依止の和合意識と、及び能依止の所餘の意識となり。又和合識は是れ意識の性なること道理に應ぜず。何を以ての故に、染汚に依るが故に。時として斷ずること無きが故なり。謂はく此の意識は貪等の煩惱に染汚せらる、意を所依止と爲して、生有の境を緣ずるが故なり。是れ染汚卽ち此の依と爲るを「染汚に依る」と名く。(而も)此の位の中に於て、所依は異熟にして染汚を容れず、是れ無記なるが故なり。此の和合識は常に間斷無し、業に任せて轉ずるが故なり。「意識の所緣は得べからざるが故に」とは、意識の所緣は明了に得べし、謂ゆる諸法なり。此の和合識は是の如きの明了なる所緣有ること無し、是の故に此の識は是れ意識の性なること道理に應ぜず。

論曰　復次に結生相續し已つて、若し異熟識を離るれば色根を執受することも亦得べからず。其の餘の諸識は各別の依なるが故に。堅住せざるが故に。是の諸の色根は應に識を離るべからず。

釋曰　「結生相續し已つて」とは、已に自體を得たるを謂ふ。「若し異熟識を離るれば」とは、阿賴耶識を離るゝを謂ふ。「其の餘の諸識は各別の依なるが故に。堅住せざるが故に」とは、謂はく餘の六識は各、處を別にするが故に。動轉し易き故に、且らく眼識は眼を別の依と爲すが知し。是の如く其の餘の耳等の諸識は耳等の色根を各別の依と爲す。此の道理に由りて、是の如き諸識は但應に自の所依の根を執受すべし。又此の諸識動轉し易きが故に、或は時に有ること無し。若し阿賴耶識を離るれば、爾の時には眼等の諸根は能く執受するもの無ければ、便ち應に爛壞すべし。

論曰　若し異熟識を離るれば、識と名色と更互に相ひ依り、譬へば蘆束の相ひ依りて轉ずるが如きは、此も亦成ぜず。

【六】生有とは次の生を指す。
【七】中有とは此の生滅して次の生を受くる中間の存在をいふ。
【八】和合とは初めて母胎に宿る時に識(生命)に父母の赤白の精液と和合して一體となること。

卷の第三

所知依分第二の三

〔生染章　第十三〕

論曰　云何が生の雜染成ぜずと爲すや。結相續の時相應せざるが故なり。

釋曰　若し阿賴耶識有ることを信ぜざれば、生の雜染の如きも亦成ずることを得ざるを、今當に顯示すべし。「結相續の時相應せざるが故に」[一]とは、謂はく自體[二]を得ること相應せざるが故なり。[三]

論曰　若し此の等引地に於て歿し已つて生ずる時、中有の位の意に染汚の意識を起すに依りて、結生相續すること有らば、此の染汚の意識は中有の中に於て滅し、母胎の中に於て識と羯邏藍[四]と更に相ひ和合せん。若し卽ち意識と彼れと和合すとすれば、旣に和合し已つて此の識に依止して母胎の中に於て意識の轉ずること有らん。若し爾らば卽ち應に二の意識有りて母胎の中に於て同時にして轉ずべし。又卽ち彼と和合する識は是れ意識の性なること道理に應ぜず、染汚に依るが故に、時として斷ずること無きが故に。意識の所緣得べからざるが故に。設ひ和合識は卽ち是れ意識なりとするも、此の和合の意識を卽ち是れ一切種子識と爲すや。此の識に依止して生ずる所の餘の意識を是れ一切種子識と爲すや。若し此の和合識是れ一切種子識ならば、卽ち是れ阿賴耶識なり。汝異名を以て立てゝ意識と爲すのみ。若し能依止の識是れ一切種子識ならば、是れ則ち所依の因識は一切種子識に非ずして、能依の果識は是れ一切種子識なること道理に應ぜず。是の故に此の和合識は是れ意識に非ず、但是れ異熟識なり。是れ一切種子識なることを成就す。

釋曰　「非等引地」[五]とは、卽ち是れ欲界なり。「歿す」とは、死するなり。「染汚の意識」とは、卽ち是れ煩惱と倶に行ずる意識なり。「結生相續す」とは、自體を攝受するを謂ふ。此の染汚の意識は

【一】結相續とは結生相續の義。

【二】自體とは此の生に滅して次の結生の生命自體をいふ。

【三】相應せずとは其の義成立せずの意。

【四】羯邏藍(Kalala)。凝滑と譯す、胎內五位の一にして受胎後七日間の位をいふ。釋文に赤白と安危を同一にすといふは此の位なり。

【五】非等引とは等引は定の別譯なれば非定の地卽ち散地の欲界なり。

や」と。「業は識に緣と爲ることは相應せざるが故に」とは、謂はく福、非福及び不動の行は生じ已つて謝滅せり。若し阿賴耶識有ることを信ぜざれば、當に何處に於てか熏習を安立すべき。六識身の如きは有らゆる熏習を任持すること能はざるは、煩惱雜染の事を說く中に於て、已に具さに此を顯示せり。「若し無ければ」とは、謂はく若し行が識に緣と爲ること有ること無ければとなり。「取の有に緣と爲ることも亦相應せず」とは、謂はく亦取が[七三]有に緣と爲ること有ること無ければ、此れ復何をか緣とせんや。謂はく前の[七四]諸行に熏習せられし識は、[七五]取の力に由るが故に熏習增長し轉じて有を成ずるが故なり。此の中、卽ち業は是れ雜染の性なれば「業雜染」と名く。或は業に依りて雜染有れば「業雜染」と名く。若し阿賴耶識有ることを信ぜざれば此の業雜染も亦成ずるを得ず。

【七三】有とは三有の有にして流轉の存在をいふ、故に此には異熟の果報としての識なり。
【七四】諸行とは此處には諸業の意なり。
【七五】取とは煩惱のこと。

釋曰　「染せらるゝ初識」とは、謂はく此の間に來りて最初に生ずる識なり。「此の識の生ずる時は應に種子無かるべし」とは、謂はく初めて生ずる識は應に無因にして生ずべし、「所依止」とは謂はく依止する所、「彼の熏習」とは煩惱の熏習なり。

論曰　復次に煩惱を對治する識若し已に生じ、一切世間の餘識已に滅すれば、爾の時若し阿頼耶識を離れては、所餘の煩惱及び隨煩惱の種子は此の對治の識の中に在ることは道理に應ぜず。此の對治の識は自性解脱なるが故に。餘の煩惱及び隨煩惱と倶に生滅せざるが故に。復後時に於て世間の識生ずるに、爾の時若し阿頼耶識を離れては、彼の諸の熏習及び所依止は久しく已に過去して現に體無きが故に。應に種子無くして而も更に生ずるを得べけんや。是の故に若し阿頼耶識を離れては煩惱雜染は皆成ずるを得ず。

釋曰　「煩惱を對治する識若し已に生じ、一切世間の餘識已に滅す」とは、六識の已に滅するを謂ふ。「所餘の煩惱及び隨煩惱の種子は、此の對治の識の中に在ることは道理に應ぜず」とは、謂はく對治識は後の世間の識の生起する因には非ず。「復後時に於て」とは、此の出世の心より後を謂ふ。「彼の熏習」とは、餘の煩惱及び隨煩惱の有ゆる熏習を謂ひ、「及び所依止」とは、所依の識を謂ふ。「應に種子無くして而も更に生ずるを得べけんや」とは、謂はく若し阿頼耶識有ること無ければ、彼應に無因にして而も更に生ずるを得べきやとなり。此の中、「煩惱」とは即ち是れ雜染なり。是の故に說いて「煩惱雜染」と名く。上の道理に由りて煩惱雜染は皆成ずることを得ず。

〔業染章　第十二〕

論曰　云何が業の雜染成ぜずと爲すや。行は識に緣と爲ることは相應せざるが故に、此れ若し無ければ取の有に緣と爲ることも亦相應せず。

釋曰　業雜染の因緣を成じ得ざることを辯ぜんが爲めの故に、次に問ふ。「云何が業雜染成ぜざる

無き因より眼識と彼の貪等と倶に生ずることは道理に應ぜず。「過去して現に體無き業より異熟果の生ずることは道理に應ぜざるが如し」とは、彼の果の生ずること道理に應せざるが如く、此も亦是の如く道理に應ぜずとなり。[七一]復有餘師は[七二]彼に體有りと執す。謂はく異論師は過去をして是れ實有の性ならしめんと欲す。然も過去は能詮も所詮も得べからず、所以は何ん 若し法是れ實有ならば云何が過去と名けん、是の故に彼より異熟果の生ずることは道理に應ぜず。熏習無きが故なり。「又此の眼識」とは、謂はく貪等と倶に生ずる眼識なり。「有ゆる熏習も亦成就せず」とは、謂はく彼の熏習すら尙成就せず、何に況んや彼より後時の眼識の 貪と倶に生ずることを而も當に成ずるを得べけんや。「然も此の熏習は貪の中に住せず」とは、謂はく眼識の熏習は貪欲の中に在りとは道理に應ぜず。何を以ての故に、彼の貪欲は眼識を依となすに由るが故に。堅住せざるが故なり。「亦所餘の識の中に住することを得ず」とは、謂はく此の熏習は耳等の識の中に在ることを得ず。何を以ての故に、「彼の諸識の所依は別なるを以ての故なり」。所依別なるに由りて決定して倶に生滅するの義有ること無し。謂はく眼識は眼に依り、耳識は耳に依る、是の如く乃至意識は末那に依る。所依遠きが故に所餘の熏習の所餘の處に在ることは道理に應ぜず。「亦復自體の中に住することを得ず」とは、謂はく此の眼識も亦復眼識に熏習することを得ず。二の眼識は倶時に起ること無きが故に、二無きを以ての故に決定して倶に生滅するの義有ること無し。此の道理に由りて、是の故に眼識は定んで貪等の煩惱及び隨煩惱の熏習する所と爲すべからず。亦眼識は眼識に熏ぜらるゝにも非ず。

論曰 復次に無想等の上の諸地より沒して此の間に來り生ぜんに、爾の時に煩惱及び隨煩惱に染せらるゝ初識あり。此の識の生ずる時は應に種子無かるべし。所依止及び彼の熏習は並に已に過去して現に體無きに由るが故に。

【七一】有餘師に隋陳兩譯には明かに毘婆沙師といへり、これ三世實有法體恒有を主張する説一切有部の説なり。
【七二】彼とは過去に落謝せる識を指す。

は業の雜染も若くは生の雜染も皆成ぜざるが故に。世間の淸淨も、出世の淸淨も亦成ぜざるが故に。

釋曰　是の如く已に阿賴耶識を安立する異門及び安立する相を說けり。今當に此の二は唯阿賴耶識にのみ在るは正しき道理に應じ、餘處に非ざることを顯示し、理を以て決擇すべし。

〔煩惱染章　第十一〕

論曰　云何が煩惱の雜染成ぜざるや。諸の煩惱及び隨煩惱の熏習の作す所の彼の種子の體は、六識身に於ては理に應ぜざるを以ての故なり。所以は何ん、若し眼識が貪等の煩惱及び隨煩惱と俱に生じ俱に滅し、此れ彼の熏に由りて種を成じ、餘には非ずと立つれば、卽ち此の眼識、若し已に謝滅すれば餘識の間つる所となり、是の如きは熏習も熏習の所依も皆得べからず。此れより先に滅して餘識に間てられ、現に體有ること無ければ、眼識と彼の貪等と俱に生ずることは道理に應ぜず。彼れ過去して現に體無きを以ての故に、過去して現に體無き業より異熟果の生ずる如きは道理に應ぜず。又此の眼識は貪等と俱に生ずとも、所有の熏習も亦成就せず。然も此の熏習は貪の中に住せず。彼の貪欲は是れ能依なるに由るが故に、堅住せざるが故に。亦所餘の識の中にも住することを得ず。彼の諸識とは所依別なるを以ての故に。又決定して俱に生滅すること無きが故に。亦復自體の中に住することを得ず。彼の自體は決定して俱に生滅すること有ること無きに由るが故に。是の故に眼識は貪等の煩惱及び隨煩惱に熏習せらるゝことは道理に應ぜず。又復此の識は識の所熏にも非ず。眼識に說くが如く、所餘の轉識も亦復是の如し。應の如く當に知るべし。

釋曰　此の中、「此れ」とは、卽ち此の眼識なり。「彼の熏に由る」とは、貪等の熏に由るなり。「種を成ず」と言ふは、因性を成ずるを謂ひ、「餘に非ず」と言ふは、耳識等に非ずとなり。「餘識の間はる所となる」とは耳等の識の間つる所となるなり。「是の如きの熏習」とは、貪等の熏習なり。「熏習の所依」とは卽ち眼識を謂ふ。「眼識と彼の貪等と俱に生ず」等とは、謂はく過去して現に體

釋曰　此の中、受用は是れ生起の義なり。受用の中に有るを受用者と名く。此の義を顯さんが爲の故に中邊分別論の頌を引いて阿笈摩と爲す。

論曰　是の如く二識は更互に緣と爲る、阿毘達磨大乘經の中に說ける伽他の如し。曰く、

諸法は識に於て藏せられ　　識は法に於ても亦爾なり
更互に果性と爲り　　亦當に因性と爲る。

釋曰　阿賴耶識と一切の法とは一切時に於て互に因果と爲り、展轉して相ひ生ず。若し此の時に於て阿賴耶識は諸法の因と爲れば、即ち爾の時に於て諸法は果と爲る。若し此の時に於て阿賴耶識は諸法の果と爲れば、即ち爾の時に於て諸法は因と爲る。

〔四緣章　第十〕

論曰　若し第一の緣起の中に於て是の如く二識互に因緣と爲らば、第二の緣起の中に於て復是れ何の緣ぞや。是れ增上緣なり。是の如き六識は幾くの緣より生ずる所なりや。增上と所緣と等無間緣となり。是の如き三種の緣起は、謂はく窮生死と愛非愛趣と及び能受用とは四緣を具有す。

釋曰　此の中、第一の緣起とは阿賴耶識の中の所有の習氣と彼の諸法と互に因緣と爲るを謂ひ、第二の緣起とは無明等を[六八]增上緣と爲すを謂ふ。無明等の增上の勢力に由りて行等生ずるが故なり。又六轉識を受用緣起と名く。三緣の生ずる所なり。謂はく眼識は眼を以て增上緣と爲し、色を以て[六九]所緣緣と爲し、[七〇]等無間緣は謂はく彼の無間に此の識生起するなり。所以は何ん、若し彼れ容受する處を與へざれば此れ生ぜざるが故に、餘識も亦爾なり。

論曰　是の如く已に阿賴耶識の異門及び相を安立せり。復云何が是の如きの異門と及び是の如きの相とは、決定して唯阿賴耶識のみに在りて轉識に非ざることを知るや。若し是の如く阿賴耶識を安立することを遠離すれば、雜染と淸淨とは皆成ずることを得ざるに由る。謂はく煩惱の雜染も、若く

【六八】增上緣とは外より其の生起を資くる力をいふ、例せば種子の發芽生長する爲に水分や肥料を要するが如し。
【六九】所緣緣とは所緣の對境ありて初め識生起するが故に所緣を緣となすといふ。
【七〇】等無間緣は前念の識滅して後念の識に其の處を與へざれば識生起せざるが故に前念の識を等無間緣となす。

は謂く[六一]彼の諸識は所依を別々にし、所緣を別々にし、作意を別々にす。復餘の義有り。別々の行相、一一に轉ずるが故なり。[六二]譬喩論師は前念をして後念に熏ぜしめんと欲す、彼を遮せんが爲の故に說いて「二念俱に有ることを得ず」と言ふ。二の刹那は一時に俱に生じ俱に滅する熏習の住すること有ること無きが故なり。若し此の識の種類は是の如く相應せずと雖も、然も同識の類は亦相ひ熏ずることを得と謂はば、是くの如きは餘に例するに應に過失と成すべし。謂はく餘種類の例も亦應に爾るべし。眼等の根は淨色の類を同うするを以て亦應に展轉して更互に相熏ずべしとは、此の意に說いて言はく、眼耳の兩根に同じく淨法有り、二淨展轉して應に互に相ひ熏ずべし、餘も亦是の如しと。然も汝は許す、淨法を同うすと雖も、異れる相續なるが故に相ひ熏ずることを得ずと。識も亦應に爾なり、識法を同うすと雖も何ぞ相ひ熏ずることを得ん。是の如く說く所の二種の種子、謂ゆる外及び內は應に知るべし、皆能生能引有り。此の中、外種は乃至果の熟するまでを能生の因と爲し、內種は乃至壽量の邊際までを能生の因と爲す。外種は能く枯れたる後の相續を引き、內種は能く喪びたる後の屍骸を引く。引く因に由るが故に多時に續いて住す。若し二の種子に唯生因のみ有らば、此の因既に壞すれば果は卽ち應に滅すべし、應に少時も相續して住するの義無かるべし。若し刹那に展轉して相續すと謂はゞ、前念を因と爲して後念隨轉す、是れ則ち後邊應に都て滅すべからず。此に由りて決定して應に引因有るべし。此の二の種子は譬へば弦を放つに、彎弓を因と爲し、箭は墮落せずして遠く至る所有るが如し。

論曰　復次に其の餘の轉識は普く一切の自體の諸趣に於て、應に知るべし、說いて能く受用する者と名く、中邊分別論の中に說ける伽他の如し、曰く

一には則ち[六三]緣識と名く　第二には[六四]受者と名く
[六五、六六]此の中能く受用すると　分別と[六七]推とは心法なり。

【六一】六識は識の作用一々皆異るとの意。
【六二】譬喩論師は陳譯に經部となせり。
【六三】緣識とは阿賴耶識をいふ、諸識生起の因緣なるが故なり。
【六四】受者は受用識又受識と名けられ、外境を受用する識卽ち轉識のことなり。
【六五】後の二句は諸譯不同、隋譯には「心法の所扶にして、此の受用を了別す」とあり、陳譯に「了受を分別と名け、起行等は心法なり」とある、而して陳譯には委細の釋文あれば參照せよ。
【六六】次の二句は受用の識作用を[illegible]別して說く。
【六七】推とは思、作意等の心所をいふ。

を得。「唯能く自果を引く」とは、謂はく自の種子は但自の果を引くのみ、阿賴耶識の種子は唯能く阿賴耶識を引生するが如く。稻穀等の唯能く稻穀等の果を引生するが如し。是の如きは且らく種の果の生ずるの義を顯はす。今當に更に熏習の異相を示すべし。「堅」とは堅住にして方に熏を受くべきなり。動ずる風の如きに非ず。所以は何ん、風性は疎動にして所有の熏氣を任持すること能はず、一[五六]踰膳那も彼の諸の熏氣は亦隨轉せず、[五七]占博迦油は能く香氣を持して百踰膳那にも彼の諸の香氣は亦能く隨轉す。「無記」と言ふは、是れ極香臭を記すべからざるの義なり。此の道理に由りて蒜は熏を受けず、極臭を以ての故に、極香を以ての故に、若し物の極香臭の記する所に非ざれば卽ち熏を受くべし。「可熏」と言ふは、謂はく應に熏を受くべきものには方に熏習すべし、熏を受けざるに非らず。金石等の如き、應に熏を受くべからざるを不可熏と名く。若し此の時に於て能く熏習を受くれば、卽ち爾の時に於て名けて可熏と爲す。[五八]熏ずべき物の如し。「能熏と相應す」とは、能熏と相應するを方に可熏と名く、相應せざるに非ず。當に知るべし、卽ち是れ無間に生ずるの義なり。「所熏」と言ふは阿賴耶識なり、上の四德を具して應に熏習を受くべきが故に、所熏と名く。轉識等には非ず。「此に異るに非ず」とは、謂はく若し此の阿賴耶識を離れては餘は所熏に非ず。是の故に所熏は卽ち此れに異るに非ず。「是を熏習の相と爲す」とは、謂はく阿賴耶識に刹那滅等有り、是れ熏習の相なり。刹那滅の故に。諸の轉識と時を俱にして有るが故に、乃至對治まで恒に隨つて轉ずるが故に、或は生死を窮むるまで恒に隨つて轉ずるが故に。定んで善等の與に因性と爲るが故に、福、非福、[五九]不動の行の緣を待つて善惡の趣に於て異類にして熟するが故に、是の如き等の義は轉識の中に於ては[六〇]一切の異法は皆應に成立すべし、是の故に唯此の阿賴耶識のみ是の如き等の勝德と相應して熏習を受くべし。「六識には相應すること無し」とは、謂はく彼の諸識には動轉有るが故なり。「三の差別相違す」と

【五六】踰膳那（Yajuna）普通には由旬といふ、三十里又は四十里なりといふ。

【五七】占博迦（Campaka）或は瞻婆、旃波迦等と音寫す、香氣ある金色の花にして、是より取りたる香油。

【五八】此の句は陷譯に「衣等の應に熏ぜらるゝべき物を謂ふ」とあり、前に金石に對し此にも實例を擧ぐべきなり、恐くは此の句の初に「衣等」の二字を脫したるものならん。

【五九】不動の行とは諸の禪定を修すること。

【六〇】一切の異法に於て云云とは諸の轉識は前述の諸條件を具せざるが故に異法となるの意これを次の句に更に釋せり。

[四七、四八]外には或は熏習無し　內種には非ず。應に知るべし、
[四九]聞等の熏習無くして　果の生ずることは道理に非ず
[五〇]作と不作とにて失と得との　過あるが故に相違を成ず、
外種は內を緣と爲し　彼の熏習を依とするに由る。

釋曰　是の如く已に阿賴耶識を說いて一切の眞實の種子と爲せり。復、彼の種子の體を顯示せんと欲して斯の五頌を說く。此の中、「外」とは稻穀等を謂ひ、「內」とは即ち是れ阿賴耶識なり。[五一]「不明了」とは外の種子は是れ無記の義なるを謂ふ。「二に於て」と言ふは、阿賴耶識は善不善の二性に於て明了に、通じて有記なるが故なり。復別義有り。謂はく雜染と淸淨とに於て明了なりと。「唯世俗」とは、謂はく外の種子は唯世俗に就いてのみ說いて種子と爲す。所以は何ん、彼も亦皆是れ阿賴耶識に變現せらるゝが故なり。「勝義」とは、即ち是れ阿賴耶識なり。所以は何ん、是れ一切法の眞の種子なるが故なり。應に知るべし。是の如きの一切の種子に復六義有り、「剎那滅」とは、謂はく二の種子は皆生ずる無間に定んで滅壞するが故なり。所以は何ん、應に[五二]常法を種子の體と爲すべからず。一切時に其の性は本の如くにして差別無きを以ての故なり。「俱有」と言ふは、謂はく過去にも非ず亦未來にも非ず。亦相離るゝにも非ざるを種子と爲すことを得。何を以ての故に、若し此の時に於て種子有れば即ち爾の時に於て果生ずるが故なり。「恒に隨つて轉ずると、應に知るべし」とは、[五三]阿賴耶識（の隨轉する）は乃至、[五四]治の生ずるまで、外法の種子は乃至根の住するまで、或は乃至[五五]（果）熟するまでを謂ふ。「決定」と言ふは、此の種子は各別に決定して一切に從はず、一切、生ずるを得るも、此の物の種より還此の物を生ずるを謂ふ。「衆緣を待つ」とは、謂はく此の種子は自の衆緣を待つて方に能く果を生ず、一切時に能く一切を生ずるに非らず。若し是の處、是の時に於て、自の衆緣に遇はゞ、即ち此の處此の時に於て自の果生ずることと

【四七】　以下、次の二頌は隋陳兩譯共に次の釋論の文の次に出づ、而も本譯及び隋譯には此の頌文の釋なし、陳釋參照。
【四八】　初の二句には外種子は熏習無くとも生じ、內種子は熏習に依らざれば生せずとの意を顯はす。
【四九】　次の二句は事例を擧ぐ、聞思修の熏習なくして、聞思修の果の生ずることなしとなり。
【五〇】　次の二句は若し熏習なくして生ずとすれば已作の事にも其の果を失ひ、未作の事には其の果を得べしといふ如き過失を生ずとなり。
【五一】　不明了とは、外種は其の性質として善にもあらず不善にもあらず不明了なりの意にして即ち無記なることを顯はす、是に由つて次の明」の意義も解し易し。
【五二】　常法とは轉變せざる常住の法の意。
【五三】　隋譯に由つて此の語を補ふ。
【五四】　治の生ずるまでとは對治道生じて一切の惑障を斷ずる以前はといふこと。
【五五】　根壞し又は果熟し終れば隨轉せずとの意、壞と熟とは種子の性質の相違に由る。

非愛緣起に於て解了せざるが故に、有我を執して作者受者と爲す。此の中、因とは謂はく阿賴耶識なり。諸法の熏習を中に於て持するが故に。果とは卽ち是れ阿賴耶識なり。卽ち彼の諸法に熏習せらるゝが故に。

論曰　又若し略して說かば、阿賴耶識は異熟識の一切の種子を用つて其の自性と爲し、能く三界の一切の自體と一切の趣等とを攝す。

釋曰　「阿賴耶識は異熟識の一切の種子を用つて自性と爲す」とは、謂はく[四三]自體異類にして熟することを得るが故に、諸法の種子は中に熏在するが故なり。「一切の趣等」とは、[四四]五趣等を謂ひ。「一切の自體」とは、趣趣の中の[四五]同分異分の種々の差別を謂ふ。

論曰　此の中に五頌あり。

[四六]外と內とは不なり明了なり　二に於て唯世俗なり
勝義なり諸の種子は　當に知るべし六種有り
剎那滅と、俱有と　恒に隨つて轉ずると應に知るべし
決定と、衆緣を待つと、　唯能く自果を引くとなり。
堅と、無記と、可熏と　能熏と相應すと、
所熏は此に異るに非ず、　是れを熏習の相と爲す。
六識には相應すること無し　三の差別相違し
二念俱有せず、　餘に類例すれば失を成ず。
此の外內の種子の　能く生引することを應に知るべし
枯喪するは能引に由り　任運に後に滅するが故なり。

内種は外種の如きに非ざることを顯はさんが爲に復二頌を說く。

【四三】識の自體は因と類を異にして成熟したる果報なり、これ卽ち善惡の業因に由る無記の果なればなり。
【四四】五趣とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間の五道をいふ。
【四五】同分とは五趣各人は人、畜生は畜生との如く相似の點あるを同分といひ、其の中各自に大小美醜等異る點あるを異分といふ。
【四六】此の句は諸譯の文字は多少異るも共に「外內不明了」となせり、頌文として文字を簡略したる爲め、頌句だけにては意義明了ならず、釋文に由るに此の句は「外は不明了なり內は明了なり」と「明了」を肯定と否定とに二度讀むべきものゝ如し。

緣起と名く、能く愛非愛の種々の自體を分別して因性と爲すに由るが故なり。

論曰　阿賴耶識の中に於て、若し第一の緣起に愚ならば、或は自性を因と爲すと分別するもの有り、或は[三六]宿作を因と爲すと分別するもの有り、或は[三七]自在變化を因と爲すと分別するもの有り。或は實我を因と爲すと分別するもの有り、或は無因無緣なりと分別するもの有り。若し第二の緣起に愚ならば、復[三八]我を作者と爲し、我を受者と爲すと分別するもの有り。譬へば衆多の生盲の士夫は未だ曾て象を見ざるに、復有るが象を以て說いて之を示すが如し。彼の諸の生盲は象の鼻に觸るゝもの有り、其の牙に觸るゝもの有り、其の耳に觸るゝもの有り、其の足に觸るゝもの有り、其の尾に觸るゝもの有り、脊梁に觸るるもの有り、[三九]諸の有に問うて言く、象は何の相を爲すやと。或は有るは說いて言はく、象は犂柄の如しと、或は杵の如しと說き、或は箕の如しと說き、或は臼の如しと說き、或は箒の如しと說き、或は有るは說いて象は石山の如しと言ふ。若し此の二の緣起を解了せざれば、無明の生盲も亦復是の如く、或は自性を因と爲すと計執する有り、或は宿作を因と爲すと計執する有り、或は自在を因と爲すと計執する有り、或は實我を因と爲すと計執する有り、或は無因無緣なりと計執する有り、或は我を作者と爲し我を受者と爲すと計執する有り。阿賴耶識の自性と因性と及び果性等は象の自性を了ぜざる所の如し。

[四〇]**釋曰**　「或は宿作を因と爲すと分別するもの有り」とは、謂はく彼は[四一]士用因有ることを許さざるが故に、邪執を成ず。此等を顯さんが爲に生盲の喩を說く。「無明の生盲」とは、謂はく無明に由るが故に生盲と成るなり。「阿賴耶識の自性と因性と及び果性等（を解了せざるは）象の自性を了ぜざる所の如し」とは、謂はく前に立つる所の此の識の自相を說いて自性と名け、立つる所の因相を說いて因性と名け、立つる所の果相を說いて果性と名く。無明の力に由りて此等を了ぜず。阿賴耶識の分別自性緣起に於て解了せざるが故に、[四二]自性等を執して諸法の因と爲す。第二の分別愛

【三六】宿作とは過去の業の力をいふ。

【三七】自在變化とは自在天諸法を造るとなす說。

【三八】我を作者云云とは常一主宰の我が有りて一切の作者即ち因であり、且つ其の報を受くる者なりといふこと。

【三九】此の句は隋陳兩譯共に「有人之に問ふ」となす。

【四〇】此の一段の釋は頗る簡略なるも、陳譯釋論には外道の異執を擧げて詳說せり、參照。

【四一】士用因とは人の力用を因と爲すもの、例へば家を造るに工人の作業を因となすが如し。

【四二】自性とは數論の冥性の義、等とは自在天其の他前說の異計を等取す。

に於ては復未だ異雜の得べきもの有らずと雖も、果の生じ染器現前し已つて後、便ち異雜の無量なる品類の諸法の顯現する有り。

釋曰　「云何が熏習には異無く雜無くして而も能く彼の異有り雜有る諸法の與に因と爲るや」とは譬喩を以て斯の道理を顯はさんと欲するが故に此の問を爲す。衆の纈具と纈[三三]に纈らるる衣の如く、之を纈ぶ時に當りては異雜の文像の見るべきもの無しと雖も、染器に入れて後に便ち異雜の文像の見るべき有り。阿賴耶識は染めらるる衣の如し。果の生ずるは卽ち染器なるが故に、「果の生ずる染器」と名く。「入る」とは卽ち是の緣に攝せらるるの義なり。熏習の時に於ては異雜無しと雖も、果の熟する位に至りて便ち非一なる品類の諸法の因性の顯現すること有るは、已に染まれる衣の如し。

〔緣起章　第九〕[三四]

論曰　是の如き緣起は大乘の中に於て極細甚深なり。又若し略して說かば二の緣起有り。一には分別自性緣起、二には分別愛非愛緣起なり。此の中、阿賴耶識に依止して諸法の生起する、是を分別自性緣起と名く。能く種々の自性を分別するを以て緣性と爲すが故なり。復十二支緣起有り。是を分別愛非愛緣起と名く。善趣と惡趣とに於いて能く愛非愛の種々の自體を分別するを以て緣性と爲すが故なり。

釋曰　「是の如き緣起は大乘の中に於て極細甚深なり」とは、[三五]異生の覺慧にては了知し難きが故に名けて「極細」と爲し、阿羅漢等は底を窮め難きが故に名けて「甚深」と爲す。「又略して說かば二の緣起有り」とは數を擧げ。「一には分別自性緣起、二には分別愛非愛緣起」とは名を列らぬ。「此の中阿賴耶識を依止とす」とは、謂はく阿賴耶識を因と爲して諸法生起す、是を分別自性緣起と名く。能く異類の自性を分別して因性と爲すに由るが故なり。若し無明等ならば是を分別愛非愛

【三三】纈とは布帛を結ひて之を染め文彩を出す、所謂絞り染めのこと。

【三四】緣起章は隋譯には緣生章となす。

【三五】異生とは凡夫のこと。

由るが故に說いて一切種子識と名く。

〔更互爲因果章　第七〕

論曰　復次に阿賴耶識と彼の雜染の諸法とは同時に更互に因と爲ることを云何が見るべきや。譬へば明燈の焰と炷とは生ずると燒くと同時にして更互なるが如し。又蘆束の互に相ひ依持して同時に倒れざるが如し。應に觀るべし、此の中の更互に因と爲る道理も亦爾なり。阿賴耶識は雜染の諸法の因と爲るが如く、雜染の諸法も亦阿賴耶識の因と爲る。唯是の如きに就てのみ因緣を安立す。所餘の因は得べからざるが故に。

釋曰　「復次に阿賴耶識と彼の雜染の諸法とは同時に更互に因と爲ることを云何が見るべきや」とは、喩を以て顯はさんと欲するが故に此の問を爲す。「譬へば明燈の焰と[三〇]炷とは生ずると燒くと同時にして更互なるが如し」とは、謂はく一刹那の燈炷を依と爲して燈焰を發生す、是れ則ち燈炷は焰の生ずる因と爲る、卽ち此の刹那の焰は復能く所依の燈炷を燒く、是れ則ち燈焰は炷の燒くる因と爲る。餘の喩も亦爾なり。是の如く俱有因有ることを顯示す。[三一]因は現在に住して卽ち果の生ずることを見るに由るが故なり。「阿賴耶識の雜染の諸法の因と爲るが如く」より乃至「所餘の因緣は得べからざるが故に」とは、此の言、阿賴耶識と雜染の法とは更互に因と爲ることを顯示す。卽ち是れ[三二]因緣なり。

〔因果別不別章　第八〕

論曰　云何が熏習には異無く雜無くして、而も能く彼の異有り雜有る諸法の與めに因と爲るや。衆の纈具と纈に纈らるゝ衣の如し。之を纈ぶ時に當りては、復未だ異雜にして非一なる品類の得べきもの有らずと雖も、染器に入れて後、爾の時には衣の上に便ち異雜にして非一なる品類の染色、絞絡せる文像の顯現する有り。阿賴耶識も亦復是の如し、異雜なる能熏の熏習する所なり。熏習の時

【三〇】炷とは燈心のこと、焰の生ずると燈心の燒けるとは同時なりの意。

【三一】此の句は俱有因の義を釋す。

【三二】此處に因緣とは廣義の因緣にあらずして最も親しき因果關係のみをいふ、卽ち四緣の中の因緣なり。

るが如く。阿賴耶識の熏習の道理も、當に知るべし亦爾なり。

釋曰　「彼の法と倶に生じ倶に滅するに依り此の中に能く彼を生ずる因性有り、是を所詮と謂ふ」とは、謂はく卽ち彼の雜染の諸法と倶に生じ倶に滅するに依りて、阿賴耶識に能く彼の諸法を生ずる因性有り、是れを熏習と名く。

〔不一不異章　第六〕

論曰　復次に阿賴耶識の中の諸の雜染品の法の種子は別異にして住すと爲すや、別異無しと爲すや。彼の種子は別の實物有るに非ず、此の中に於て住するも亦異らざるに非ず。然も阿賴耶識は是の如くして生じ、能く彼を生ずる功能差別有るを一切種子識と名く。

釋曰　阿賴耶識の中の雜染法の種子は[23]異と爲すや、不異と爲すや。若し爾らば何の失ぞ。若し異ること有らば彼の諸の種子は應に分々に別なるべし。阿賴耶識の[24]剎那滅の義も亦應に成ずべからず。別異有るが故に。善不善の熏習の力に由るが故に、種子は應に善不善の性を成ずべし。[25]然るに無記なりと許す。若し不異ならば云何が(種子の)多有るや。[26]此れ理に應ぜず。是の故に二說倶に過失有り。「彼の種子は別に實物有るに非ず。此の中に於て住するも亦異らざるに非ず、乃至一切種子識と名く」とは、前の所說の如き過失を避けんが爲の故に、[27]定んで異及び不異を取らず。「是の如くして生ず」とは、謂はく是の如き品類に由りて生ずとなり。「能く彼を生ずる功能差別有り」とは、謂はく能く雜染品の法を生ずる功能差別と相應する道理有り。彼を生ずる功能と相應するに由るが故に一切種子識と名く。此の義の中に於て[28]現の譬喩有り、大麥子の如し。自芽を生ずるに於て功能有るが故に種子の性有り。若し時陳久なるか、或は火と相應すれば、此の大麥は[29]果の功能を損壞す。爾の時には麥相は住して本の如しと雖も、勢力は壞するが故に種子の性無し。阿賴耶識も亦復是の如し。雜染の諸法を生ずる功能有り。此の功能と相應するに

〔二三〕これ阿賴耶識と種子とは同體なりや異體なりやと問ふ。

〔二四〕剎那滅の義は後に說けり。

〔二五〕種子には善不善ありて阿賴耶識は無記なり。

〔二六〕種子は雜多にして阿賴耶識は一なり。

〔二七〕異なりとも不異なりとも一方に決定すべからず、不一不異なりといふべしとなり。

〔二八〕現の譬喩とは現實に經驗する事例を擧ぐるなり。

〔二九〕果を生ずる功能の義。

一切の雜染品の法の有らゆる熏習を緣として能く彼を生ずる功能差別の識を自性と爲す。是の如き功能を顯示せんと欲するが爲の故に「種子を攝持して相應す」と說けり。謂ゆる一切の雜染品の法の有らゆる熏習に依りて、卽ち彼の法の與に能生の因と爲る。「攝持せる種子」とは、[13]功能差別なり。「相應す」とは[14]是れ修の義なり。是を此の識の「自相を安立す」と名く。「此の中の因相を安立す」とは、謂はく卽ち次前に說く所の品類の一切の種子なり。阿賴耶識は彼の雜染の品類の諸法の熏習に由りて成ずる所の功能差別を、彼の生ずる因と爲す。是を此の識の「因相を安立す」と名く。「此の中の果相を安立す」とは、謂はく卽ち彼の雜染品の法の無始よりの熏習に依りて、此の識續生して能く無始よりの熏習を攝持す。是を此の識の「果相を安立す」と名く。[15]此の中の自相は是れ一切の雜染品の法の無始よりの熏習に依りて、彼の生ずる因と爲り、種子を攝持する識を自性と爲す、[16]果性と因性との建立する所なり。此の中の因相は是れ彼の雜染の品類の諸法の熏習の成ずる所の功能差別にして彼の生ずる因と爲る。唯是れ因性のみの建立する所なり。此の中の果相は是れ雜染の品類の諸法の無始よりの熏習に依りて阿賴耶識は相續して生ず。唯是れ果性のみの建立する所なり。是れ三の差別なり。

〔熏習章第五〕

論曰　復次に何等をか名けて熏習と爲すや、[17]熏習は能詮なり、何をか所詮と爲すや、謂はく彼の法と倶に生じ倶に滅するに依り此の中に能く彼を生ずる因性有り、是を所詮と謂ふ。[18]苣藤の中に華の熏習有るが如し。苣藤と華と倶に生じ倶に滅す。是の諸の苣藤は能く彼の香を生ずる因を帶びて生ず。又[19]所立の[20]貪等を行ずる者の、貪等の熏習は彼の貪等と倶に生じ倶に滅するに依りて、此の心は彼の生ずる因を帶びて生ず。或は多聞の者の、多聞熏習は聞く[21]作意と倶に生じ倶に滅するに依りて、此の心は彼の[22]記する因を帶びて生ず。此の熏習は能く攝持するに由るが故に、持法者と名く

【一三】功能差別とは種子の意義にして、種々の果を生起する勢能の差別といふ意なり。
【一四】相應すとは修の義なりとは解し難し、隋譯には「彼の熏習と彼の勝能(功能)と能く合するが故に相應と名く」と云へり。
【一五】次の一段の釋義は隋陳兩譯に無し。
【一六】自相は果性と因性とを具有する識の自體なり。
【一七】熏習は能詮なりとは、熏習とは能詮の言語なり、是に由りて何の義を示すやと、其意義を問ふを次に所詮は何ぞやといふなり。
【一八】苣藤とは胡麻のこと、隋譯及魏譯には胡麻といひ、陳譯には麻といふ。
【一九】所立とは因明の用語にして成立せられたる義といふこと、此處では自他共に許す事を擧げて喩を示す。
【二〇】貪等云云とは貪欲等の煩惱の現行する者との意なり。
【二一】作意とは意志の義、卽ち開かんとする意志、隋譯には「思念」といふ。
【二二】記するとは所聞を記憶すること。

彼れ恒に阿頼耶識に於て我愛隨縛す。此の正法に於て無我を信解する者は我見を厭逆すと雖も、然も藏識に於て我愛隨縛す。是の故に阿頼耶識を安立して阿頼耶と名くるは最勝を成就す。

釋曰 「愚かならざる者」とは、謂はく諸の菩薩なり。彼の宣說する所の阿頼耶識の理は成立するが故なり。「惡趣の中」とは、謂はく餓鬼、傍生及び那落迦[九]の諸の惡趣の中なり。「一向に苦なる處」とは、謂はく一向に非愛業の果を受くる處なり。彼に於て時には樂受の生ずること有るは是れ[一〇]等流果の生なり。彼の受くる所の異熟果は唯是れ其の苦なるのみ。「第四靜慮以上には有ること無し」とは、卽ち[一一]第四靜慮及び上の諸地を謂ひ。「彼を具する有情」とは生の所得を謂ふ。「阿頼耶識は内我の性に攝す」とは、謂はく諸の衆生は此の識を攝取して内我の性と爲す。「苦蘊を離るることを求む」とは、苦受を離るることを求むるなり。「然も藏識に於て我愛隨縛す」とは、阿頼耶識に於て我を執して愛を起し隨縛して離れざるを謂ふ。

〔相章第四〕

論曰 是の如く已に阿頼耶識を安立する異門を說けり。此の相を安立することを云何が見るべきや。此の相を安立するに略して三種有り。一には自相を安立し、二には因相を安立し、三には果相を安立す。此の中、阿頼耶識の自相を安立すとは、謂はく一切の雜染品の法の所有の熏習に依りて彼の生ずる因と爲る、能く種子を攝持して相應するに由る。此の中の、阿頼耶識の因相を安立すとは、謂はく卽ち是の如きの一切の種子たる阿頼耶識は、一切時に於て彼の雜染の品類の諸法の現前する與に因と爲る。此の中、阿頼耶識の果相を安立すとは、謂はく卽ち彼の雜染品の法の無始の時より來、有する所の熏習に依りて阿頼耶識は相續して生ずるなり。

釋曰 是の如く已に阿頼耶識を安立する異門を說けるも、異門を說くは卽ち其の相を了ずるに非ず、是の故に次に此の識の自性と因性と果性とを說く。「此の中の[一二]自相を安立す」とは、謂はく

【九】那落迦(Naraka)又は奈落ともいふ、地獄のこと。

【一〇】等流果とは因と果と同類のものをいふ、地獄に於て時有りて樂を感ずるは前に然るべき同類の因ありしに由る、地獄の果報自體は徹底苦なりとの意。

【一一】第四靜慮とは色界第四禪天にして、及び上の諸地とは無色界の四天をいふ。

【一二】自相とは自性又は自體の意なり。

きを謂ふ。「阿賴耶識の中の彼の種には斷有るに非ず」とは、阿賴耶識の中の色心の熏習は、此を因と爲すに由りて、色心還有ることを謂ふ。

論曰　是の如く所知依は阿賴耶識を性と爲し、阿陀那識を性と爲し、心を性と爲し、阿賴耶を性と爲し、根本識を性と爲し、窮生死蘊を性と爲す等と說く。此の異門に由りて阿賴耶識は[八]大王路を成ず。

釋曰　「此の異門に由りて阿賴耶識は大王路を成ず」とは是れ極めて廣き義なり。

論曰　復一類有り、謂はく心意識は義一にして文異ると、是の義は成ぜず。意と識との兩義の差別得可し。當に知るべし、心の義も亦應に異り有るべし、復一類有り、謂はく薄伽梵の說く所の、衆生は阿賴耶を愛し乃至廣說す、此の中、五取蘊を說いて阿賴耶と名くと。有餘復謂はく貪と倶なる樂受を阿賴耶と名くと。有餘復謂はく薩迦耶見を阿賴耶と名くと。此等の諸師は敎及び證に由りて阿賴耶に愚なるが故に此の執を作せり。是の如く阿賴耶の名を安立するは、聲聞乘に隨ふも安立する道理は亦相應せず。若し愚かならざる者は阿賴耶識を取りて彼の說を安立す。阿賴耶の名は是の如く安立すれば則ち最勝と爲す。云何が最勝なる。若し五取蘊を阿賴耶と名くれば、惡趣の中の一向に苦なる處に生ずることは最も厭逆すべし。衆生は一向に愛樂を起さず。中に於て執藏することは道理に應ぜず。彼は常に速かに捨離せんことを求むるを以ての故なり。若し貪と倶なる樂受を阿賴耶と名くれば、第四靜慮以上には有ること無し、彼を具する有情は常に厭逆有り。中に於て執藏することも亦理に應ぜず。若し薩迦耶見を阿賴耶と名くれば、此の正法の中に於て無我を信解する者は恒に厭逆有り。中に於て執藏することも亦理に應ぜず。阿賴耶識は內我の性に攝す。惡趣の一向に苦なる處に生じて、苦蘊を離るることを求むと雖も、然も彼恒に阿賴耶識に於て我愛隨縛して、未だ嘗て離るることを求めず。第四靜慮以上に生じて、貪と倶なる樂に於て恒に厭逆有りと雖も、然も

【八】大王路とは陳譯の釋論に「此の衆名に由りて廣く本識を顯はす、是の故に見易きこと猶王路の如し」となし、更に細釋せり、參照。

卷の第二

所知依分第二の二

論曰 復次に聲聞乘の中にも、亦[一]異門の密意を以て已に阿賴耶識を說けり。彼の增壹阿笈摩に說くが如し。世間の衆生は　阿賴耶を愛し、阿賴耶を樂ひ、阿賴耶を欣び、阿賴耶を憙ぶ、と。是の如きの阿賴耶を斷ぜんが爲の故に、正法を說く時恭敬して耳に攝す。求解の心に住して法と隨法とを行す。如來出世して是の如き甚奇にして希有なる正法は世間に出現せり。聲聞乘の如來出現四德經[三]の中に於て、此の異門の密意に由りて已に阿賴耶識を顯せり。大衆部の阿笈摩の中に於ても亦異門の密意を以て此を說いて根本識と名く、樹の根に依るが如し。化地部の中にも亦異門の密意を以て此を說いて窮生死蘊と名く。有る處　有る時には色心の斷することを見るも、阿賴耶識の中の彼の種には斷有るに非ず。

釋曰 「世間の衆生は阿賴耶を愛す」とは、是れ總標の句なり。其の次第の如く、復餘句を以て[四]現在過去未來の三時に約就して別釋す。復別義有り、謂はく現在に於ては阿賴耶を愛し、過去時に於ては阿賴耶を樂ふ。先世に阿賴耶を樂ふに由るが故に、復今世に於て阿賴耶を欣ぶ。阿賴耶を樂ふに由り欣ぶに由るが故に、未來世に於ても阿賴耶を憙ぶ。[五]「法隨法行」とは、教の如く行ずるが故なり。大衆部の中には根本識と名く、「樹の根に依るが如し」とは、謂はく根本識は一切の識の根本の因と爲るが故に、譬へば樹の根は莖等の總ての因にして、若し其の根を離るれば莖等有ること無きが如し。阿賴耶識を根本識と名くることも當に知るべし亦爾なり。[六]化地部の中の異門には說いて　窮生死蘊と爲す。此の因を釋せんが爲に「有る處」等と說く。「有る處」と言ふは、無色界には諸色有ること無きを謂ふ、「有る時」と言ふは、無想等の諸定位の中には諸心有ること無

【一】異門の密意とは異門は觀察點を異せる見方にして、隋譯には「別の道理」とし陳譯には「別の名」となせり、密意とは本旨を隱密にして表面に現はさずとの意なり。

【二】此の句は諸譯に異同あり、隋譯には「衆生は阿黎耶を喜び、阿黎耶を樂ひ、阿黎耶を集め、阿黎耶を求む」とあり、陳譯亦異る。參照。

【三】隋譯には「如來出生四種可讚經」となし、陳譯には「如來出世四種功德經」となし、魏譯には「如來出益經」となせり、增一阿含の中に在り。

【四】樂ふは現在、欣ふは過去、喜ぶは未來なり。

【五】此の句は隋譯には「法を受け法に順す」となし、陳譯には「如來の正法及び似法を受行す」となせり。

【六】化地部とは小乘二十分派の一にして上座部より分立して、其の主張する所大衆部に接近せり。

【七】窮生死蘊とは生死を一貫する根本識をいふ。

が故なり。

釋曰　復名を釋せんと欲するが故に此の問を作す。「種々の法に由る」とは各別の品類の法に由るなり。「熏習する種子」とは功能差別の因なり。「積集する所なるが故に」とは、[五四]是れ極めて積聚し、一合相の義なり。

論曰　復次に何が故に聲聞乘の中には、此の心を阿賴耶識と名け、阿陀那識と名くと說かざるや。此れ深細なる境の所攝なるに由るが故なり。所以は何ん、諸の聲聞は一切の境に於て智處轉ぜざるに由る、是の故に彼に於ては此の說を離ると雖も、然も智成ずることを得て、解脫を成就するが故に、爲に說かず。若し諸の菩薩ならば定んで一切の境に於て智處轉ず。是の故に爲に說く。若し此の智を離るれば、一切智智を證得し易からず。

釋曰　「此れ深細なる境の所攝に由る」とは、謂はく此の境界は卽ち深細なるが故に深細の境と名く。此れ卽ち深細なる境界の中に攝して了知し難きが故なり。諸の聲聞は一切の境界の智を求むるが爲の故に正に勤めて修行するに非ず、唯正に自の義利のみを希求するが故に、彼は麁淺の苦等の正智に由りて便ち能く永く煩惱障を斷するが故なり。若し諸の菩薩ならば、自他を利せんが爲に、煩惱及び所知障を斷ぜんことを求めて正に勤めて修行す。是の故に爲に說く。

【五四】此の句は隋譯には「密合積聚して一摶相なるが故に」と釋せり、具體的に統一せられたる一體なりとの意。

耶識を俱有依と爲す。此の五同法は染汚の意を離れては決定して有ること無し。此れ自性無きの過失を顯はす。「訓辭にも、若し無ければ過失を成ず」とは、所緣の相を取つて思量するが故に、無間に滅する時にも能く境を取るが故に說いて名けて意と爲す。過去に已に滅して思量する所無ければ、云何が當に能く思量するの性有るべき。[四九]訓辭にも、無なるが故に大過失を成ず。「二定の別」とは、滅盡定の中には染汚の意無く、無想定の中には染汚の意有り。此れ若し無ければ是の如き二定の差別は應に無かるべし、大過失を成ず。又染汚の意若し有ること無ければ、無想身の中には應に我執無かるべし。異生の者の相續の中に於ては暫くも我執を離るゝに非ざるは應に正しき道理なるべし。是の如きの諸過を、染汚の意を離れては皆定んで應に得べきが故に。應に定んで染汚の意有りと許すべし。此の義を顯はさんが爲の故に、復說いて[五〇]「二有ること無し」等と言ふ。二とは即ち是れ不共無明と五の相似法となり。[五一]三の相違とは謂はく訓釋辭と、二定の差別と、無想の生の中にも我執恒に隨ふとなり。染汚の意を離れては是の如きの三事皆相違を成ず。「此れ無ければ一切處に我執有るべからず」とは、染汚の意を離れては一切種の善等の位の中に於て、我執恒に隨ふこと有るを得べからざるが故に。應に定んで染汚の意有りと許すべし。餘文了じ易し、復釋するを須ひず。

論曰　心體は第三に、若し阿賴耶識を離れては別に得べき無し。是の故に阿賴耶識を成就して以て心の體と爲す、此を種子と爲すに由りて意及び識轉ず。

釋曰　[五二]心の體は第三に若し阿賴耶識を離れては別に性有ること無し。此を因と爲すに由りて意及び轉識は皆生起することを得。見取の轉識は當に知るべし亦即ち第二の意を取る。所以は何ん、[五三]彼れ將に滅せんとする時意の名を得るが故なり。

論曰　何の因緣の故に亦說いて心と名くるや。種々の法に由りて、熏習する種子の積集する所なる

のことなり。
【四七】以下重ねて頌文に隨つて前義を釋す、隋陳兩譯共に此の再釋を缺く。
【四八】彼とは五識を指し、此とは第六意識を指す。
【四九】意の字義を釋するに當つても、染汚の意無ければ過失ありとの義なり。
【五〇】染汚の意若し無ならば不共無明と五同法の二なかるべしとの意。
【五一】三の相違とは次の三點に於て相違を成ずるの意。
【五二】識を第一とし、意を第二とし、今第三に心を說く。
【五三】彼れとは轉識を指す。

成ずべし。云何ぞ施等の心は善を成ずることを得ん。此の煩惱と恒に相應するが故に。若し意識と善法と倶に轉ずること有りと說かば、此れ即ち彼の煩惱と相應せん。是れ染の意識能治を引生す、道理に應ぜず。若し染汚の意と倶に轉じて善心有りと說かば、即ち此の善心は能治を引生し、[四〇]此れ生じて彼れ滅す、即ち過失無し。[四一]又五同法の故に、所以は何ん。譬へば眼等の五識は、必ず眼等の五根有りて[四二]倶有依と爲るが如く。是の如く意識も亦應に決定して倶有依有るべし。[四三]又訓釋詞の故に。所以は何ん。能く思量するが故に說いて名けて意と爲す。此の訓釋詞は、何の所依止なりや、彼の六識は[四四]無間の識の與に所依止と作るに非ずとは、應に正しき道理なるべし。已に謝滅するが故なり。[四五]又二定の別の故に。所以は何ん。若し定に染汚の意有りと說かば、無想定の中には此の意有りて[四六]餘定の中に無きが故に差別有り。若し此に異らば、二定の中に於て第六意識は並に行せざるが故に應に差別無かるべし。又無想の中の生には應に我執無かるべきが故に。所以は何ん、若し彼の位の中に染汚の意無ければ、彼の一期の生には應に我執無かるべし。若し爾らば聖の訶厭する所となるべからず。既に訶厭せらる、是の故に定んで知る彼に我執有り。又我執隨ふが故に、所以は何ん。施等の位の中にも亦決定して我執の隨ふこと有るが故に。此の我執隨ふことは、若し無明を離るれば道理に應ぜず。此の無明は所依止を離るるに非ず、此の所依止は染汚の意を離れては別體無きが故に。故に定んで應に染汚の意有りと許すべし。若し許さざれば上の過失有り。[四七]重ねて彼を顯はさんが故に四の伽他を說き、「若し不共無明等」と乃至廣說せり。此の中、「不共無明」とは、謂はく一切の善と不善と無記と煩惱、隨煩惱の位との中に於て、染汚の意と相應して倶に生ずる無明なり。彼れ若し無ければ大過失を成ず。常に苦等に於て障礙の智を生ず。是れ其の業用なり、此れ即ち業用無きの過失を顯はす。五同法とは、第六意識には五識身と相似の法有り、[四八]彼に五根有り、阿賴耶識を倶有依と爲す、此も亦染汚の意有り、阿賴

に無き所以はの意。

【三八】已に染汚の意識なれば餘の惑の現行相應せるものなれば、若し此處に不共無明有りとせば、其は不共にあらざるべしの意なり。

【三九】又若し此處に有りとすれば、此の意識は全然染汚性にして善心の起る餘地は全く無かるべしとの意なり。

【四〇】此に生じて彼れ滅すとは善心生じて染汚滅するの意なり。

【四一】次に五識と比較して染汚の意を成立す。

【四二】倶有依とは二以上の者が互に相依り相資けて同一の結果を生ずる時の同時依存の因果關係をいふ、識と根との如し、

【四三】訓釋詞云云とは意といふ名稱を釋して染汚の意を成立す、陳譯は意義甚だ明了なり、即ち「是の識は六識に隨つて前に已に滅せり、此の意の名は得べからず、了別することと能はず、體無きを以ての故に」といふ。

【四四】無間の識とは前念の六識をいふ、已に滅して體無きが故に所依とならずとの意。

【四五】次に二定の別に依つて染汚の意を成立す。

【四六】餘定とは隋陳兩譯共に「滅心定」となす、即ち滅盡定

又一切時に我執の現行することは現に得べきが故に。謂はく善、不善、無記の心の中なり。[26]若し爾らざれば唯不善心のみ彼と相應するが故に。我我所の煩惱現行すること有るは、善無記には非ず。是の故に若し[27]倶有現行を立てゝ、[28]相應現行に非ざれば此の過失無し。此の中に頌に曰く、

若し不共無明と　及び五同法と
訓詞と二定の別と　無ければ皆過失を成ず、
無想の生は應に　我執の轉ずること無ければ過を成ずべし
我執は恒に隨逐して　一切種に有ること無からん、
染の意を離れては　二有ること無く、三は相違を成ず、
此れ無ければ一切處に　我執は應に有るべからず、
眞義の心の當に生ずべきに　常に能く障礙と爲り
一切分に倶行するを　不共無明と謂ふ。

[29]此の意は染汙の故に[30]有覆無記性なり。四煩惱と常に共に相應す。色無色の二纏の煩惱の如く、是れ其の有覆無記性の攝なり。色無色の纏は奢摩他の攝藏する所と爲るが故に、此の意は一切時に微細に隨逐するが故に。

[31]**釋曰**　此の文は復餘の道理を以て染汙の意を成立す。何等をか名けて成立の道理と爲すや。謂はく此れ若し無ければ不共無明は卽ち有ることを得ず。[32]不共無明とは其の相云何ん、謂はく未だ[33]對治を生ぜざるとき能く眞智を障ふる愚なり。此れ（不共無明は）[34]五識に於ては理として相應せず。是の處は能く障と爲るべき無きが故に。[35]若し處として能治有れば、此の處には所治あればなり。[36]亦染汙の意識に在るを得ず。[37]此れ有るに非ざるは、[38]餘惑現行して（不共の）名成ぜざるが故なり。[39]若し此の煩惱は染汙の意識に在りと立つれば、卽ち應に畢竟して染汙の性を

【二六】我執は不善心のみならず善及び無記心にも有るが故に此義成立せず。
【二七】倶有現行とは餘惑と相應せずして意と倶なる我執。
【二八】相應現行とは不善と相應して起る我執。
【二九】次の一段の說には釋論を缺く、陳譯に細釋あり參照。
【三〇】有覆無記とは善不善にあらざるが故に無記なるも尙我執と相應するが故に有覆無記といふ。
【三一】此の一段の釋論は文簡にして論旨多端なれば解し難し、陳譯及び無性釋を參照せよ。
【三二】不共無明とは或は獨頭の無明又は獨行の無明と稱す。貪瞋等の煩惱と相應せす、單獨に生起して眞智を障ふる根本の無明をいふ。
【三三】對治を生ずとは對治道に依りて眞智を生ずること。
【三四】眼等の五官に依る五識自體には障となる義なしとの意なり。
【三五】此の句は前句の理由として能對治の智の生ずる所には必ず所對治の惑障あり、而も前五識には能治なきが故に所治も亦無しとの意なり。
【三六】次に不共無明は染汙の意識に在ることなきを明かす。
【三七】此の無明の染汙の意識

雜染の所依なり。識は復彼の第一の依に由りて生じ、第二の雜染は、境を了別する義の故に、等無間の義の故に、思量の義の故に、意に二種を成ず。

釋曰　「此を亦心と名く」とは阿賴耶識は卽ち是れ心の體なり。意と識との二義の差別を得べし。當に知るべし、心の義にも亦差別有り。[一七]此を顯示するが故なり。此の中、「與に[一八]等無間緣の[一九]因性と作る」とは、謂はく無間滅の識は意識の與に因と爲る。是れ第一の意なり。四の煩惱に由りて常に染汙せらる。是れ第二の意なり。此の中[二〇]「薩迦耶見」とは謂はく我を執する性なり。此の勢力に由りて便ち「我慢」を起し、我我所を恃みて自ら高擧し、實には無我なるに於て有我の貪を起すを名けて「我愛」と爲す。是の如き三種は無明を因と爲す。「無明」と言ふは、卽ち是れ無智なり。「識は復彼の第一の依と、第二の雜染とに由りて生ず」とは、謂はく無間滅の識を說いて名けて意と爲す。[二一]將に生ぜんとする識の與に容受の處所なるが故に、[二二]生の依と作る。第二の染汙の意は雜染の所依と爲る。[二三]善心の中に於ても亦我有りと執するを以ての故なり。「境を了別する義の故に、等無間の義の故に、思量の義の故に、意に二種を成ず」とは、謂はく此の中に於て境を取るの義に由り說いて名けて識　爲し、處を與ふるの義に由りて[二四]第一の意と名け、我等を執して雜染を成ずる義に由りて[二五]第二の意と名く。

論曰　復次に云何が染汙の意有ることを知るを得るや。謂はく、此れ若し無ければ不共無明は則ち有ることを得ず。過失を成ずるが故に。又五同法も亦有ることを得ず。過失を成ずるが故に。所以は何ん。五識身は必ず眼等の俱有依有るを以ての故なり。又訓釋詞も亦有ることを得ず。過失を成ずるが故に。謂はく無想定は染汙の意の所顯にして滅盡定には非ず。若し爾らざれば此の二種の定は應に差別無かるべし。又無想天の一期の生の中にも應に染汙無かるべし、過失を成ずるが故に。中に於て若しくは我執我慢無からん。

【一七】此を顯示すとは心實識の三の差別相を顯示すとなり。

【一八】等無間緣とは前念の識の滅するは後念の識の生ずる緣となるをいふ、隋陳兩譯共に次第緣となせり、蓋し識は次第生起にして二心同時に起ること能はざればなり。

【一九】論本には所依止の性と有るを義に依つて因性となせり。

【二〇】薩迦耶見(Sattvakāya)は譯して有身見或は單に身見といふ、五蘊の和合體を執して我となす、之を基本として次の我慢と我愛とを起す。

【二一】前念の識の滅する處に次の識生起するの意。

【二二】生の依とは後の識の生起する所依の意。

【二三】善心も有漏の間は我執を本として起るが故に、染汙の意を所依となす。

【二四】第一の意とは等無間緣の所依の意。

【二五】第二の意とは染汙依の意。

り。「一切の種子は瀑流の如し」とは次第に轉ずるが故に、一切の種子の刹那に展轉することは、瀑水の流の如く相續して轉ずるが故なり。「恐らくは彼れ分別して執して我と爲さん」とは、[一二]一の行相にして轉ずるが故に分別して執することを得べし。

論曰　何の緣にて此の識を亦復說いて阿陀那識と名くるや。一切の有色の根を執受するが故に。一切の自體の取る所依なるが故なり。所以は何ん、有色の諸根は此の執受に由りて失壞すること有る無く、壽を盡すまで隨つて轉ず。又相續して正しく結生する時に於て彼の生を取るが故に、自體を執受す。是の故に此の識を亦復說いて阿陀那識と名く。

釋曰　「一切の有色の諸根を執受するが故に」とは「所以は何ん、有色の諸根は此の執受に由りて壽を盡くすまで隨つて轉ず」と、此を用つて釋と爲す。謂はく眼等の有色の諸根は阿賴耶識の攝受する所なるに由るが故に、死身の[一三]青瘀等の位の如きに非ず。若し死の至る時には[一四]此を捨離するが故に、彼に卽便ち青瘀等の位有り。是の故に定んで知る、此の執受の故に[一五]乃し壽限に至るまで[一六]彼れ失壞せざることを。「一切の自體の取の所依なるが故に」とは「又相續して正しく結生する時に於て、彼の生を取るが故に自體を執受す」と、此を用つて釋と爲す。謂はく此の識は是れ相續識なるに由るが故に、相續して正しく結生する時に於て、能く生の一期の自體を攝受するも、亦此の識の攝受する所と爲す。阿賴耶識の中に一期の自體は熏習して住するに由るが故なり。彼の體起るが故に、說いて「彼の生」と名け。彼の生を受くるが故に「彼の生を取る」と名く。能取に由るが故に「自體を執受す」。是の義を以ての故に阿賴耶識を亦復說いて阿陀那識と名く。

論曰　此を亦心と名く。世尊の、心意識の三と說くが如し。此の中、意に二種有り。第一は與に等世間緣の所依止の性と作る。世間滅の識は能く意識の生ずる與に依止と作る。第二は染汚の意、四煩惱と恒に共に相應す。一は薩迦耶見、二は我慢、三は我愛、四は無明なり。此れは卽ち是れの識

【一二】種子識は同一の相にて流轉相續するが故に常一の觀を呈す、故に常一の我と執せらるとの意なり。

【一三】青瘀等とは死者の相をいふ。

【一四】此をとは阿賴耶識を指す。

【一五】生より死に至るまでの意。

【一六】彼れとは諸根を指す。

聲香味觸を緣と爲して耳鼻舌身識を生じ、耳鼻舌身識と倶に隨行して、同時同境に分別の意識有りて轉ず。廣慧よ、若し爾の時に於て一の眼識轉ずれば卽ち此の時に於て唯一の分別意識のみ有りて眼識と所行を同うして轉ず。若し爾の時に於て二三四五の諸識身轉ずるも、卽ち此の時に於て唯一の分別意識のみ有りて五識身と所行を同うして轉ず。廣慧よ、譬へば大瀑水の流るるに、若し一浪の生ずる緣の現前すること有らば、唯一浪のみ轉ず。若しくは二、若しくは多の浪の生ずる緣現前すれば、多の浪の轉ずること有り。然も此の瀑水の自類は恒に流れて斷ずること無く盡くること無きが如く。又善淨の鏡面の、若し一影の生ずる緣の現前すること有らば唯一影のみ起る。若くは二若くは多の影の生ずる緣現前すれば多の影の起ること有るも、此の鏡面は轉變して影と爲るに非ず。亦受用の滅盡すること得べき無きが如し。是の如く廣慧よ、瀑流に似たる阿陀那識を依止と爲し建立と爲すに由るが故に、若し爾の時に於て一眼識の生ずる緣の現前すること有れば、卽ち此の時に於て一眼識轉ず。若し爾の時に於て乃至五識身の生ずる緣の現前すること有れば卽ち此の時に於て五識身轉ず。廣慧よ、是の如く菩薩は法住智を依止と爲し建立と爲すに由るが故に、心意識の祕密に於て善巧なりと雖も、然も諸の如來は齊りて此の施設に於て、彼を心意識の一切の祕密に於て善巧なる菩薩とは爲さず。廣慧よ、若し諸の菩薩は內に於て各別に如實に阿陀那を見ず、阿陀那識を見ず、阿賴耶を見ず、阿賴耶識を、見ず積集を見ず、心を見ず。眼、色及び眼識を見ず、耳、聲及び耳識を見ず、鼻、香及び鼻識を見ず、舌、味及び舌識を見ず、身、觸及び身識を見ず。意、法及び意識を見ず、是れを勝義善巧の菩薩と名く。如來は彼を施設して勝義善巧の菩薩と爲す。廣慧よ、此に齊りて名けて心意識の一切の祕密に於て善巧なる菩薩と爲す。如來は此に齊りて彼を施設して、心意識の一切の祕密に於て善巧なる菩薩と爲す、と。此の伽他の中に重ねて彼の義を顯はす。「阿陀那識」とは所釋の異名なり、「甚だ深細」とは了知し難きが故な

一切の有生の雜染品の法は此に於て攝藏して果性と爲るが故に、又卽ち此の識は彼に於て攝藏して因性と爲るが故に、是の故に說いて阿賴耶識と名く。或は諸の有情は此の識を攝藏して自我と爲すが故に、是の故に說いて阿賴耶識と名く。

釋曰 今此の識の阿賴耶の名を訓す。「一切の有生」とは諸有の生類を皆有生と名く。「雜染品の法」とは是れ淸淨を遮するの義なり。中に於て轉ずるが故に名けて「攝藏」[7]と爲す、「或は諸の有情は此の識を攝藏して自我と爲す」とは是れ執取の義なり。

論曰 復次に此の識を亦[8]阿陀那識と名く。此の中の阿笈摩は解深密經に說けるが如し、

阿陀那識は甚だ深細にして、　一切の種子は瀑流の如し。
我れ凡愚に於て開演せず、　恐らくは彼れ分別して執して我と爲さんと。

釋曰 復、解深密經を引く、卽ち此の阿笈摩の中に、佛、廣慧菩薩摩訶薩に告げて曰く、廣慧よ、當に知るべし、六趣の生死に於て彼々の有情は彼々の有情衆の中に墮し、或は卵生に在り、或は胎生に在り、或は濕生に在り、或は化生に在りて[9]身分生起す。中に於て、[10]最初に一切種子の心識の成熟し、展轉し、和合し、增長し、廣大するは、二の執受に依る、一には有色の諸根及び所依の執受、二には相名、分別の言說、戲論の習氣の執受なり。有色界の中には二の執受を具す。無色界の中には二種を具せず。廣慧よ、此の識を亦阿陀那識と名く。何を以ての故に、此の識は身に於て隨逐し執持するに由るが故なり。亦阿賴耶識と名く、何を以ての故に、此の識は身に於て攝受し、藏隱し、[11]安危の義を同うするが故なり。亦名けて心と爲す、何を以ての故に、此の識に由りて色聲香味觸等は積集し滋長するが故なり。廣慧よ、阿陀那識を依止と爲し、建立と爲すが故に六識身轉ず。謂ゆる眼識と耳・鼻・舌・身・意識となり。此の中、識有り、眼及び色を緣と爲して眼識を生じ、眼識と俱に隨行して同時同境に分別の意識有りて轉ず。識有り、耳鼻舌身及び

【七】 攝藏とは隋譯には「依住」と譯し、陳譯には「隱藏」と譯せり。而して此の句を隋譯には「依住とは共に轉するが故なり」と釋せり。
【八】 阿陀那識(Ādāna)は執持識と譯す、此には阿賴耶識の異名として擧げらるゝも、學派に依つて異解あり。
【九】 身分とは身體のこと。
【一〇】 最初にとは初めて受生する時なり。
【一一】 安危云云とは苦樂安危等の運命を共にするの意。

無始時より來、界たり　　一切法は等しく依る
此に由りて諸趣有り　　及び涅槃を證得す。

釋曰　此の中に能く阿賴耶識は、其の體定んで是れ阿賴耶識なることを證す。阿笈摩[二]は謂ゆる薄伽梵、即ち[三]初めに說く所の阿毘達磨大乘經の中に是の如き頌を說けり。「界」とは謂はく因なり、是れ一切法の等しく依止する所なり。現見の世間には金鑛等に於て界の名を說くが故に、此は是れ因なるに由るが故に、一切法の等しく依止する所なり。因の體は即ち是れ所依止の義なり。「此に由りて有り」とは一切法の等しき所依に由りて有るなり。「諸趣」とは生死の中に於ける有らゆる諸趣なり。趣とは謂はく[四]異熟果なり。此の果に由るが故に、或は是れ頑愚瘖瘂の種類あり、或は勢力有りて能く善說、惡說の法義を了し、或は能く勝得し、[五]上勝に證得し、又は煩惱の依止する所の性と爲る。此に由るが故に猛利の煩惱、長時の煩惱有り。[六]是の如き四種の異熟の差別の依止する所なるが故に、堪能有ること無し。應に知るべし、此れに翻するを堪能有りと名く。唯諸趣のみ此に由りて有るに非ず、亦此に由るが故に涅槃を證得す、要ず雜染有るに由りて方に涅槃を得るが故なり。

論曰　即ち此の中に於て復頌を說いて曰く、

諸法を攝藏する　　一切種子の識なるに由る
故に阿賴耶と名く　　勝者に我れ開示す。

釋曰　已に阿笈摩を引いて阿賴耶識は是れ所知依の體なることを證し、復阿笈摩を引いて阿賴耶識を阿賴耶識と名くることを證す。此の頌の中に於ては第二句に由りて第一句を釋す、「勝者」とは即ち是れ諸の菩薩衆なり。

論曰　是の如く且らく阿笈摩を引いて證せり。復何の緣の故に此の識を說いて阿賴耶識と名くるや。

【二】阿笈摩(Agama)は普通は阿含と音寫す、此には廣義に聖教の意、即ち教證として擧ぐ。
【三】初めに說くとは本論の初をさす。
【四】異熟果とは善惡の業因に報いられたる無記の果體としての有情自體をいふ。
【五】上勝に證得すとは漸次に勝れたる上位の證得をなすこと。
【六】此の句は隋譯には「此等の四種の果報の中、勝者の身には堪能有り、此に翻する者には堪能無し」といひ、陳譯にも亦「是の果報等の四種の差別は依止勝れたりと名く、能く此に翻する四種を依止下劣と名く」とありて兩譯の意義に多少の相違あるも本譯に比するに全く反對となれり、堪能有りとは修行證果の能力を有するの義。

圓成實性を損減す。是の如きの二邊の過失を遠離するが故に善巧と名く。次に是の如きの所取の諸相に於て、唯識性に由りて應に正しく通達して障礙無きを得べし。次に隨順して唯識性に入るに於て、世俗の證する所の世間の六種の波羅蜜多は、勝義に由るが故に應に更に證得すべし。是れ應に修作すべき清淨なる增上意樂の攝する義なり。次に十地に於て分々に差別して應に勤めて修習すべし。謂ゆる三無數大劫を經るを要す。聲聞の極疾のもの〻三生に勤修し對治して、便ち證し解脫するが如きに非ず。次いで後に、即ち是の如きの修の中に於て增上戒等の菩薩の三學を應に圓滿せしむべし。最後に彼の學果の涅槃に於て、煩惱の永斷と及び無上正等菩提、三種の佛身とを應に現に等しく證すべし。故に十處を說くに是の如く次第す。

論曰　又此の說の中にて一切の大乘は皆究竟することを得。

釋曰　一切の大乘は此に齊りて究竟す。何を以ての故に、若し緣起を說かんと欲すれば即ち阿賴耶識の攝に入る、若し諸相を說かんと欲すれば即ち三自性の攝に入る。若し證得を說かんと欲すれば即ち唯識性の攝に入る。若し波羅蜜多を說かんと欲すれば即ち波羅蜜多の攝に入る。若し諸地を說かんと欲すれば即ち諸地の攝に入る。若し諸學を說かんと欲すれば即ち諸學の攝に入る。若し斷及び智を說かんと欲すれば即ち無住涅槃及び三種の佛身の攝に入る。是を齊りて名けて一切の佛語と爲す。是の故に但此の如きの次第を說く。

所知依分第二の一

〔衆名章　第三〕

論曰　此の中、最初に且らく所知依は即ち阿賴耶識なることを說く。世尊は何れの處にか阿賴耶識を說いて阿賴耶識と名けしや。謂はく、薄伽梵は阿毘達磨大乘經の[一]伽他の中に於て說けり。

【一】伽他(Gāthā)は又は偈といふ韻文よりなる頌文をいふ。

「能く一切智智を證得するが爲め」とは、謂はく一切法の中に於て無上にして無間なる一切の行相の智を發生するが故なり。「善く成立す」等に復餘義有り、謂ゆる「善く成立す」と「隨順す」と「違ふこと無し」とは展轉して標釋するなり。云何が善く成立するや。謂はく能く隨順するが故に。云何が能く隨順するや、謂はく[九六]違轉無きが故なり。

〔十義次第章　第二〕

論曰　復次に云何が是の如く次第して此の十處を說くや。謂はく諸の菩薩は諸法の因に於て要ず先に善くし已つて、方に緣起に於て應に善巧を得べし。次いで後に、緣所生の諸法に於て應に其の相を善くすべし。善く能く增益と損減との二邊の過を遠離せんが故なり。次いで後に是の如く善く修する菩薩は應に正しく[九七]善く取る所の相に通達し、諸障より心をして解脫することを得しむべし。次いで後に、所知の相に通達し已つて、先の加行位に六波羅蜜多を證得せるに由るが故に、應に更に增上の意樂を成滿すべし。淸淨なることを得るが故なり。次いで後に、淸淨の意樂の所攝の六波羅蜜多を、十地の中に於て分々に差別して應に勤めて修習すべし、謂はく三無數の大劫を經るを要す。次いで後に、[九八]三の菩薩の所學に於て應に圓滿せしむべし。既に圓滿し已つて彼の果の涅槃と及び無上正等菩提とを應に現に等しく證すべきが故に十處を說くに是の如く次第す。

釋曰　「云何が是の如く次第して說くや」とは問なり。「謂はく諸の菩薩は諸法の因に於て要ず先に善くし已る」より廣說し、乃至「彼の果の涅槃と及び無上正等菩提とを應に現に等しく證すべきが故に」とは答なり。要ず先に諸法の因を了知し已つて、後に緣起に於て方に善巧を得。必ず因有るが故に果生起することを得。[九九]自在等に非ず。此に由りて能く因果の兩智を得。次いで後に因の生ずる所の諸法に於て應に其の相を了るべし。何等をか相と爲すや。謂はく實には遍計所執有ること無きを、定んで執して有と爲すを、名けて增益と爲す、無を增益するが故に、實有の

【九五】此の句は隋譯に「亦諸善に隨順す」となし、陳譯には「善に隨順するが故に」とあるも、今の譯には不善とあり、此の譯文にては初後對立して相違あるも黑白の我見に依りて前は益し後は損するに非ざれば相違に非ずとの意なるべし、尙陳譯參照。

【九六】違轉とは相違して轉ずるの義にして前後相違せざること。

【九七】善く取る所の相とは隋譯に「善く攝持する相」とあり、陳譯には更に明了に「所緣の如實の諸相」となせり。

【九八】戒定慧三學のこと、即ち增上の戒と、增上の心と、增上の慧となり。

【九九】自在等云云とは自在天より生ずるにもあらず、又無因生にもあらずとの意。

とを顯はし。聲聞乘は是れ大乘の性なることを[八八]遮するや。此の十處は聲聞乘に於ては曾て說くを見ず、唯大乘の中にのみ處々に說くを見るに由る。謂はく此の十處は是れ最も能く大菩提の性を引き、是れ善く成立し隨順し、違ふこと無く、能く一切智智を證得するが爲なり。此の中に二頌あり。

所知の依と及び所知の相と、　彼に入る因果と彼の修の異なると、
三學と彼の果の斷と及び智とは　最上乘の攝にして是れ殊勝なり、
此の說は此の餘に見るも見えず　此れ最勝の菩提の因なるに由る
故に大乘は眞の佛語なりと[八九]許す。　十處を說くに由るが故に殊勝なり、

釋曰　此れ復云何んぞ、謂ゆる復此の所說の十處を顯はすや。是れ最も能く大菩提の性を引き、是れ善く成立し、隨順し、違ふこと無ければなり。「是れ最も能く大菩提の性を引く」とは、是れ大菩提の能引の因の義なり。「是れ善く成立す」とは、謂はく正理等の[九〇]量に由りて思擇して[九一]導師の所說の道相を見るが如し。「隨順す」と言ふは、謂はく證得せんが爲に勤めて修行する時、隨順して住するが故に。導師の所說の正道に隨ひ隨順して住するが如し。「違ふこと無し」と言ふは、謂はく諸地の中に障礙の因無きなり。導師の所說に隨へば、道中に、劫賊等の有らゆる障難無きが如し。或は復生死涅槃の二種互ひに相違せざるなり。[九二]復異門有り、「是れ最も能く大菩提の性を引く」とは、謂はく此れ能く戲論無き無分別智を引くが故なり。「是れ善く成立す」とは、謂はく[九三]四の理と相違せざるが故なり。「隨順す」と言ふは、謂はく[九四]三量と相違せざるが故なり。「違ふこと無し」と言ふは、先には隨順して後に相違するに非さるが故なり。頌に言へる有るが如し。

初めに愛悲を任持し、　[九五]後に不善に隨順するも
黑白の我見にて　益有り亦損有るに非ず。

かくの如く法と喩と相應するを同法の喩といふ。
【八六】大地に入るとは初地の位に入ること。
【八七】色を見るが如しとは眼根に依りて眼識を生じ、色を見ることに依りて認識作用の完了するが如しとなり。
【八八】遮すとは遮遣の義にして否認するの意なり。
【八九】許すとは因明の用語にして、論證の主題を立て〻反對者をも承認せしむるをいふ。
【九〇】量とは正教量といふが如く、知識の軌範となるものをいふ、此の句を隋譯には「三學の量の中に於て思量し觀察して、導師の道相を顯示するが如き故に」となせり。
【九一】導師云云は譬なれば導師は道案內者のことにして普通の如く佛を指すに非ず。
【九二】復異門有り以下は前に一般の解釋を施し、更に異說を擧ぐるなり、異門とは異れる觀察點より見たる說の意、隋陳兩譯には此の異門の解釋は次の一段の文の釋後に出で、今と前後せり。
【九三】四の理とは觀待道理、作用道理、證成道理、法爾道理の四なり、解深密經第五、及び瑜伽論第七十八等に出づ。
【九四】三量とは現量、比量、聖教量をいふ。

釋曰　「云何が能く顯はすや」とは、是れ何を緣とするやの義を問ふなり。「六波羅蜜多を說いて彼の入因果の體と名く」とは、謂はく唯識性に由りて三自性に入る時、世間の施等の波羅蜜多を淸淨の因と名く。能く出世間を引發するに由るが故なり。地に入りて已去は、卽ち彼の施等の波羅蜜多は出世間を成ずるを淸淨の果と名く。「菩薩の十地を說いて彼の因果の修差別の體と名く」とは、謂はく菩薩の十地は、是れ前に說きし所の波羅蜜多の因果二位の修の差別性なり。「無分別智を說いて、此の中の增上慧の體と名く」とは、若し諸の聲聞ならば、[八二]四顚倒の分別を離るゝを無分別と名け、若し諸の菩薩ならば、一切法の分別を離るゝを無分別と名く。二の無分別の差別是の如し。「無住涅槃を說いて彼の果斷の體と名く」とは、謂はく三學の果の故に彼の果と名く。彼の果は卽ち斷なれば彼の果斷と名く。此の性を名けて彼の果斷の體と爲す。卽ち是れ煩惱所知の二障の斷の義なり。「三種の佛身を說いて彼の果智の體と名く」とは、彼の三學の果なるが故に彼の果と名く。彼の果は卽ち智なれば彼の果智と名く。此の性を名けて彼の果智の體と爲す。此の中、若し自性身無ければ應に法身無かるべし。譬へば[八三]眼根の如し、若し法身無ければ應に受用身無かるべし。譬へば[八四]眼識の如し。應に知るべし此の中所依能依を[八五]同法の喩と爲す。若し受用身無ければ已に[八六]大地に入れる諸の菩薩衆には應に法樂を受用すること無かるべし。若し法樂を受用すること無ければ、菩提の資粮は應に圓滿せざるべし。譬へば[八七]一色を見るが如し。若し化身無ければ勝解行地の諸の菩薩衆と、諸の聲聞等の勝解の劣れる者との最初の發趣は皆應に有るべからず。是の故に決定して應に三身有るべし。「大乘は聲聞乘に異ることを顯はす」とは、聲聞乘の中に此れを說かざるが故なり。又「最勝を顯はす」とは、大乘の中にも此れ亦最勝なることを顯はす。

論曰　復次に云何が此の十相の殊勝と殊勝なる如來語とに由るが故に、大乘は眞に是れ佛語なること

【七六】戒律を護るが故に不善を作す心は全く起らずの意。

【七七】此の句は隋譯に「內觀の心なり、此の心卽ち是れ增上の學、謂はく三摩提なるが故に」とあり、心とは此には定に名く。

【七八】無分別智とは本論の終に細釋あり、參照。

【七九】最勝とは轉依の果斷は一切法に於て最も勝妙なるが故なり、品別とは轉依の品類差別をいふ。

【八〇】煩惱及び所知の二障は惑障の最勝の品別なればなり隋譯に「最勝と種類と自體、煩惱障智障を滅すとの故に」となせり、併陳譯參照。

【八一】首楞伽摩(Śūraṁgama)或は首楞嚴と音寫す、譯して健行又は一切事竟といひ、佛德の堅固にして能く壞するもの無きを表す。

【八二】四顚倒とは不淨、苦、無我、無常なる諸法の實相を知らずして淨、樂、我、常の四顚倒の見を起すをいふ。

【八三】眼根の如しとは眼根に依りて眼識の起るが如しとなり。

【八四】眼識の如しとは眼根有るが故に眼識有りとの意。

【八五】同法の喩とは根と識とは所依能依なるが如く、法身と自性身も亦所依能依なり、

即ち彼の因果の故に「彼の因果」と名く、即ち此の中に於て之を修する差別なり。「修」とは、謂はく、數習、即ち此の數習は諸地の中に於て展轉して殊勝なるが故なり。「差別」と名くるは即ち是れ十地なり。「即ち是の如き修の差別の中に於ける增上戒」とは、謂はく十地の中にては戒に依りて學ぶが故に增上戒と名く、即ち諸の菩薩の有する所の律儀は、[七六]諸の不善に於て復心を作すこと無し。「增上心」とは、謂はく[七七]內に在る心なり、或は即ち心に依りて學ぶが故に增上の心と名く、即ち諸の三摩地なり。「增上の慧」とは、謂はく證に趣く慧なるが故に增上の慧と名く。或は慧に依りて學ぶが故に增上の慧と名く。即ち是れ[七八]無分別智なり。「斷の殊勝」とは、謂はく[七九]最勝と品別と自ら內に[八〇]煩惱及び所知障を棄捨す、となり。即ち是れ無住涅槃なり。「智の殊勝と殊勝の語」とは、謂はく無障の智を「智の殊勝」と名く、彼の無分別智には所對治有り。今此の佛智は、已に一切の障及び隨眠を離る、是を彼の無分別智に於ける佛智の殊勝と名く。

論曰　復次に云何が能く顯はすや。此の所說に由る十處は聲聞乘に於て曾つて說きしことを見ず、唯大乘の中に處々に說くを見るのみ。謂はく阿賴耶識を說いて所知依の體と名け。三種の自性（即ち）一には依他起の自性。二には遍計所執の自性。三には圓成實の自性を說いて所知相の體と名け。唯識性を說いて入所知相の體と名け。六波羅蜜多を說いて彼に入る因果の體と名け、菩薩の十地を說いて彼の因果の修差別の體と名け。菩薩の律儀を說いて、此の中の增上戒の體と名け、[八一]首楞伽摩・虛空藏等の諸の三摩地を說いて此の中の增上心の體と名け、無分別智を說いて此の中の增上慧の體と名け。無住涅槃を說いて彼の果斷の體と名け。三種の佛身（即ち）一には自性身。二には受用身。三には變化身を說いて、彼の果智の體と名く。此に說く所の十處に由りて、大乘は聲聞乘に異ることを顯はし、又最勝なることを顯はす。世尊は但菩薩の爲にのみ宣說す、是の故に應に知るべし、但大乘に依る諸佛世尊にのみ十の行相の殊勝と殊勝の語有り。

しとなり。

【七〇】　恭敬し尊重する佛の前なるが故に異逆相違の言なしとの意。

【七一】　義因とは義理を表現して言語となるが故に義は因にして語は果なり、故に義因、語果といふ。

【七二】　三の自性とは後に說く所の遍、依、圓の三性をいふ。

【七三】　阿賴耶識（ālaya）は玄奘は主として藏識と譯し、眞諦は無沒識と譯せり、有情の根本の識體にして本論及び唯識論等は此の根本の識を解說する爲に造られたり。

【七四】　持業釋とは梵語の複合詞を解釋する六種の方法、即ち六離合釋の一にして、數語複合して一詞をなし共に同義を顯はす時、例せば硯石の如き、硯即石なるを持業釋といふ、今所知依の殊勝の如き、所知依の阿賴耶識即殊勝にて別義なきをいふ、釋論の此の一句を隋譯には「是の如き等略して義を釋せり、乃至智の勝相も亦爾なり」となし今と相違せり。

【七五】　此の句は隋譯には「若しくは所入及び能入、俱に入と名く、即是唯識なり」となし、陳譯には「能成入及び所成入は即ち是れ唯識なり」となせり。

所の「顯はす」とは、大乘實有の大體を開發するなり。「大乘に依る」とは、大乘に依止して所說を起すなり。「十相の殊勝の語有り」とは謂はく即ち彼の十種の殊勝の所と、殊勝の語とに由りて十相の殊勝と、殊勝語と名く。此の殊勝とは是れ差別せる義の兩つ互いに相待するを言ふ。此の義は彼よりも殊勝なりと言ふが如し。又最上の義、是れ殊勝の義なり。或は是れ異類なり、謂ゆる[七一]義因殊勝なるが故に語果も是れ殊勝なり。今當に此の十種の別相を說くべし。

論曰　一には所知依の殊勝と殊勝の語。二には所知相の殊勝と殊勝の語。三には入所知相の殊勝と殊勝の語。四には彼に入る因果の殊勝と殊勝の語。五には彼の因果の修の差別の殊勝と殊勝の語。六には即ち是の如き修の差別の中に於ける增上戒の殊勝と殊勝の語。七には即ち此の中に於ける增上心の殊勝と殊勝の語。八には即ち此の中に於ける增上慧の殊勝と殊勝の語。九には彼の果斷の殊勝と殊勝の語。十には彼の果智の殊勝と殊勝の語なり。此に說く所の諸佛世尊の契經の諸句に由りて、大乘は眞に是れ佛語なることを顯はす。

釋曰　此の中「所知依の殊勝と殊勝の語」とは、應に知るべき所の故に「所知」と名く、所謂、雜染と清淨との諸法にして、即ち三[七二]の自性なり。依とは是れ因の義。此の所知依は即ち是れ殊勝なるが故に、「所知依の殊勝」と名く。此の殊勝に由るが故に語も殊勝なり。此の依は即ち是れ[七三]阿賴耶識なり。是の如きは[七四]持業釋なり、乃至「彼の果智の殊勝」も亦爾なり、謂ゆる彼の果智は即ち是れ殊勝なるが故に彼の果智の殊勝等と名く。「所知相」とは是れ所知の自性の義なり。所知は即ち是れ相の故に所知相と名く。謂ゆる三自性なり。「入所知相」とは謂はく所知相に於て[七五]若くは能く入り、若くは正に入るは即ち唯識性なり。「彼に入る因果」とは謂はく能く彼に入るが故に「彼に入る」と名く、即ち是の唯識の理性に悟入するなり。「因」とは、謂はく加行時の世間の施等の波羅蜜多なり、「果」とは、謂はく通達時の出世の施等の波羅蜜多なり。「彼の因果の修差別」とは

提舍尼、突吉羅の五なり。

【六〇】　等起とは隋陳兩譯共に緣起と譯せり。

【六一】　意樂に由るとは意志の欲求するまゝ即ち自由意志に由りて戒律を受くるをいふ、隋譯には「淨心に由る」と譯せり。

【六二】　學等を授くとは百衆學の如き律の規定を受けて罰せらるゝこと。

【六三】　苾芻、苾芻尼、(Bhiksu, Bhiksunī) 比丘、比丘尼と同じ、僧尼のこと。

【六四】　不共の罪とは僧尼執れかの一方に限られたる罪過をいふ。

【六五】　殟柁南 (Udāna)、普通には無問自說と譯して十二部經の一なり、又義譯して集施頌のこと、此には後の義を取る、法殟柁南とは陳譯に四種の法嗢陀那とあれば諸行無常等の四法印の偈を指して云ふ、又は法印といふ、含蓄多き偈陳譯參照。

【六六】　諦とは四諦の理なり。

【六七】　補特伽羅 (Pudgala)。有情又は人と譯す、隋陳兩譯共に人となせり。

【六八】　所學の處とは戒律のこと、學處ともいふ。

【六九】　前段に經律論の三藏を釋して傍論に入りたるを以て、是より本文に還つて解釋すべ

[五五]諦・菩提分・解脫門等を說くが故なり。阿毗達磨を亦數法と名くるは、一一の法に於て數々言辭の[五六]自相、共相等の無量の差別を宣說し訓釋するが故なり。阿毗達磨を亦伏法と名くるは、此の具足せる[五七]論處所等に由りて能く他の論を勝伏するが故なり。阿毗達磨を亦通法と名くるは、此に由りて能く素怛纜の義を釋通するが故なり。[五八]犯罪の故に、等起の故に、還淨の故に、出離の故に、應に知るべし毗奈耶と名く。此の中、犯罪とは謂はく[五九]五衆罪なり。[六〇]等起とは謂はく無知の故に、放逸の故に、煩惱盛んなるが故に、尊敬せざるが故に、諸罪を犯すなり。還淨とは謂はく[六一]意樂に由り治罰に由らずして律儀を受くるが如きなり。出離とは七種有り。一には各々相ひ對して犯す所を說悔す。二には誓つて治罰を受く、謂ゆる[六二]學等を授くるなり。三には等しく妨害有れば先に學處を制し、後に異門に由りて還つて復開許す。四には別に更に止息す。謂ゆる僧和合して還つて所制を捨つ。五には轉依。謂ゆる[六三]苾芻、苾芻尼は男女の形を轉ずるが故に、[六四]不共の罪を捨つ。六には眞實觀に由る、謂ゆる殊勝なる法[六五]殟柁南の諸の行相の觀を作す。七には法爾得に由る、謂ゆる[六六]諦を見るに由り法爾として小隨小罪無きを得るなり。應に知るべし毗奈耶に復四義有り、一には[六七]補特伽羅の故に、世尊は彼に依りて[六八]所學の處を制す。二には制立の故に、謂ゆる彼の補特伽羅の犯す所の過を告白し已つて、大師は僧を集めて所學の處を制す。三には分別の故に、謂ゆる學處を制し已つて更に廣く先に略說せし所を解釋す。四には決擇の故に、謂ゆる此の中に於て犯す所の、云何が有罪にして、云何が無罪なるかを決判す。

[六九]今當に本文を釋すべし。「薄伽梵の前にて」とは、[七〇]所敬有るが故に、異言無きことを顯はす。「菩く大乘に入る」とは、是れ已に陀羅尼等の勝れたる功德の義を得たるに由り、已に此の諸の功德を得たるを顯はさんが故なり。義に於ても文に於ても、能く正しく任持し、能く正しく開示する。是の如きを菩薩と名く。何の義の爲の故に說くや。大乘の體大を顯はさんが爲の故に說く。言ふ

わたること、經とは普通に貫穿の義と訓釋するが故に此の釋あり。

【五一】 隋譯に「依とは處に依り、人に依り所爲に依るが故に說く」となせり、意義更に明了なり。

【五二】 密意に隨ふとは言敎の中に含まれたる佛の意趣をいふ、此には廣く敎理を意味す、隋譯には「義とは隨順して相續するが故に」とあり、陳譯には更に明了に「義とは所作の事の故に義と名く、道を生じ惑を滅するは是れ事なり」となせり。

【五三】 以下は論藏を釋す。

【五四】 無住涅槃とは煩惱、所知の二障を斷して得たる涅槃、大智に由るが故に生死に住せず、大悲に由るが故に涅槃に住せざるが故に無住又は不住涅槃といふ。

【五五】 諦とは四諦のこと菩提分とは三十七の菩提分法。

【五六】 自相とは其のものに限られたる特殊の意義にして、共相とは他と共通せる一般的の意義をいふ。

【五七】 論處所等とは因明の規定する論式等に由ること。

【五八】 以下は律藏を釋す。

【五九】 五衆罪は隋譯に五篇罪といふ、戒律の五篇の分類にして、波羅夷、僧殘、波逸提、

若し彼々の義の中に於て疑惑有れば、卽ち彼々の義を決定し宣說せんが爲の故なり。二邊の受用を對治せんが爲に毗奈耶藏を立つ。謂ゆる有罪の欲樂に著する邊の受用を遮[三八]するが故に、及び[三九]無罪の自ら苦まざる邊の受用を[四〇]開くが故なり。自見の取執を對治せんが爲に阿毗達磨藏を立つ。諸法の無倒の相を顯照するが故なり。又能く[四一]三學を說かんが故に素怛纜藏を立つ。能く增上戒と增上心とを成辦せんが故に毗奈耶藏を立つ。謂ゆる[四二]尸羅を具すれば卽ち悔等無く、漸次に能く三摩地を得るが故なり。能く增上慧を成辦せんが故に阿毗達磨藏を立つ、謂ゆる能く無倒の義を決擇するが故なり。又能く法と義とを說かんが故に素怛纜藏を立て、能く法と、義とを成滿せんが故に毗奈耶藏を立つ。謂ゆる煩惱を調伏せんが爲に勤めて修行する者は便ち此の二に於て能く通達するが故なり。能く法と義とに於て決擇善巧ならんが故に阿毗達磨藏を立つ。[四三]此の九緣に由りて三藏を立つることを許す。又此れ皆生死を解脫せんが爲なり。此れ復云何が能く解脫を得るや。熏と覺と寂と通との故に解脫を得。謂ゆる[四四]聞に由りて心に熏習するが故に、[四五]思に由りて覺悟するが故に。[四六]奢摩他を修するに由りて寂靜なるが故に。[四七]毗鉢舍那を證するに由りて通達するが故に、能く解脫を得るなり。又若し略說すれば此の素怛纜、毗奈耶、阿毗達磨藏に各四義有り。菩薩は此に於て若し具さに了知すれば、則ち能く一切智の性を證得し、聲聞は此に於て但一の[四八]伽他の義を解了するのみなりと雖も亦[四九]漏盡を得。云何が此の三に各四義有るや、謂はく能く[五〇]貫穿す。依の故に、相の故に。法の故に、義の故に素怛纜と名く。此の中、[五一]依とは是處に於て、此れに由りて、此れが爲に所說有るを謂ひ。相とは世俗諦の相、勝義諦の相を謂ひ、法とは蘊・界・處・緣起・諦・食・靜慮・無量・無色・解脫・勝處・遍處・菩提分・無礙解・無諍等を謂ひ。義とは[五二]密意に隨ふを謂ふ。[五三]對の故に、數の故に、伏の故に、通の故に、應に知るべし阿毗達磨と名く、謂はく阿毗達磨を亦對法と名くるは、此の法は[五四]無住涅槃に對向して、能く

滅等と譯す、律のこと。

【三七】阿毘達磨(Abhidharma)は對法、無比法、等と譯す、論部のこと。

【三八】遮とは有罪として禁ずる意。

【三九】隋譯に「無罪の過の受用を聽すが故に、自の疲苦の邊を遮す」とあり、尙ほ眞諦譯を參照せよ。

【四〇】開とは無罪として許す意なり。

【四一】三學とは戒定慧の三をいふ。

【四二】尸羅(Sīla)は戒と譯す。

【四三】此の九緣とは上述の九箇の理由をいふ。

【四四】聞に由るとは正教を聞くこと。

【四五】隋譯には「思に由るが故に修を知る」となす。

【四六】奢摩他(Śamatha)、寂靜止息、等と譯す、心の散亂妄動を止むること。

【四七】毘鉢舍那(Vipaśyanā)は觀と譯す、正しく諸法を觀照する定心、止と合して止觀といふ。

【四八】伽他(Gāthā)は諷頌と譯す、偈頌のこと。

【四九】漏盡とは諸の煩惱を斷盡して生死を受けざる羅漢果をいふ。

【五〇】貫穿すとは次の四義にかゝる、其の意が四義にゆき

論曰　阿毘達磨大乘經の中に、[三一]薄伽梵の前にて、已に能く善く大乘に入れる菩薩は、大乘の體大を顯はさんが爲の故に說けり。謂はく、大乘に依るに、諸佛世尊に十相の殊勝と、殊勝の語有り。

釋曰　何の義に依止し、何の所因に從りて是の說を作すや。廣博にして所知深大なる法性は、若し諸佛菩薩の威力を離れなば、誰が此の中に於て能く釋論を造らんや。復何の義に由りて此の論に於て初めて是の如きの事由を說くや。若し阿毘達磨大乘經の言を擧ぐることを離れては、則ち論は是れ聖敎なることを了知せず。此の義の爲の故なり。又經名を顯はさんが爲なり。十地經と言ふが如し。故に是の如く「阿毘達磨大乘經」の言を說く。復餘の義有り。彼の經は是れ聖敎なることを顯はさんが爲の故に、初めに是の如く「阿毘達磨大乘經」の言を說く。今此の論を造るに用ゆる事有るは、無知の者を開曉せんと欲するが爲の故に、法門の別名を顯さんが爲の故に、「阿毘達磨」を擧げ、通名を顯さんが爲の故に「經」の言を擧ぐ。聲聞の阿毘達磨に簡ばんが爲に復「大乘」を擧ぐ。今亦非聖の說く所の阿毘達磨有るに由る。現に人有り、自らの尋思の慧にて、「是れは佛說阿毘達磨なり、或は聲聞說なり、或は世智造なり」と謂ふが如し。又大乘素怛纜と言ふは、聲聞等と異ることを顯示せんと欲するが爲めなり。菩薩の藏攝を顯示せんと欲するが爲の故に、復[三二]其の阿毘達磨を擧ぐ。又[三三]藏攝とは謂はく[三四]自宗の素怛纜藏に入れ、現に自惑を滅す。毘奈耶藏は卽ち大乘の中には菩薩の煩惱なり、諸の菩薩は種種の分別を煩惱と爲すを以ての故に、最勝なる阿毘達磨に違はず、廣大にして甚深なるを其の相と爲すが故なり。此の中、三藏とは一には[三五]素怛纜藏、二には[三六]毘奈耶藏、三には[三七]阿毘達磨藏なり、是の如き三藏は下乘と上乘とに差別有るが故に、則ち二藏を成ず。一には聲聞藏。二には菩薩藏なり。此の三及び二は何に緣つて藏と名くるや、能く攝するに由るが故なり。謂ゆる一切の應に知るべき所の義を攝す。復何の緣に由りて三藏を建立するや。九種の緣に由る。謂ゆる疑惑を對治せんが爲に素怛纜藏を立つ。

ずの意。
【二五】　名は云云は無着といふ名は其の德に稱ふとなり。
【二六】　次の二偈は無着に敎を承け、今釋論を造ることを述べて歸敬頌の意を結ぶ。
【二七】　無盡の辯者とは師無着を指す。
【二八】　雨を乞ふ鳥とは雨鳩のこと、將に雨らんとする時鳩頻に鳴き、恰も雨を乞ふものの如し、故に乞雨鳥と稱す。今は師に就いて聞く所尙未だ充分ならずして更に師の敎を渴望する情を顯はせるなり。
【二九】　此の句は瑜伽論の如き廣大の論本を讀破し得ざる者の爲に簡決なる略釋を示すとの意なり。
【三〇】　廣決擇とは瑜伽論の攝決擇分を指す、陳譯には決定藏といふ。
【三一】　薄伽梵、又は婆伽婆(Bhagavat)といひ、世尊と譯す。
【三二】　其のとは大乘を指す。
【三三】　隋譯には「攝藏とは自の煩惱を調伏することを顯示するが故に、大乘の中に於ては是れ菩薩の煩惱なり、菩薩は分別を以て煩惱と爲すが故に」とありて其の意解し易し。
【三四】　自宗とは大乘をさす。
【三五】　素怛纜(Sūtra は)契經と譯す。
【三六】　毘奈耶(vinaya)は調伏、

世の無上の[一二]良福田と爲る。　[一三]復微少なる善を投ずと雖も
而も便ち廣大なること地空の如く、　慧者は斯に由りて解脫を得ん。
[一四]故に我れ至誠に身語思にて　頻りに無倒なる歸命禮を修す。
[一五]軌範の諸師は今滅少し、　眞法、正理は多く渾濁す、
皆、聰叡邪慢の人の　自らの[一六]尋思に依りて教證を失せるに由る。
[一七]我が師は此に於て[一八]前後に非ず、　聖者[一九]大慈尊に逢事し
[二〇]無動にして世間を出で　[二一]大法光を放つ[二二]三摩地に依止し、
妙法を闡揚して淸譽を流し　日の光を舒ぶるが如く十方に遍く
文光無垢にして最も甚深　諸の了義經に隨順する所、
廣大の句義は皆微妙にして　悉く綺飾を以て自ら莊嚴し
能く聰敏なる者をして[二三]融心して　諂ふ無く、憍る無く愛敬を生ぜしめ、
極めて通じ難き法にも慧の滯ること無く　[二四]利養稱譽の中に任せず
樂に於ても常に染著する心無し　故に[二五]名は決定して自德に稱ふ。
諸の賢聖の者は常に親近し　一切世間に知らざるもの無く、
無著の名稱は普く皆聞え、　功德顯然として同じく讃する所なり。
[二六、二七]無盡の辯者の等しく雨らす所の　甘露の文義、微妙の法を
多く彼に從つて聞くも自力微かにして　少しく受け[二八]猶雨を乞ふ鳥の如し、
[二九、三〇]廣決擇より少分を集め　言を以て攝大乘を略釋せん、
願くば此の作す所遍く　極大の文海を怖るる者を饒益せんことを。

〔無等聖敎章　第一〕

【一〇】　次の二偈は僧寶の德を頌す。
【一一】　此の句は前に擧げたる僧寶を佛の淸淨の德を修するものとして之を河に喩へたるなり。
【一二】　福田とは善根の生ずる所依となるをいふ。
【一三】　次の三句は僧寶を親近し供養する廣大の德を明かす。
【一四】　次の二句は正しく歸敬の意を表す、これ前の三寶の一一に通ずる結句なり。
【一五】　次の一偈は聖敎の頽廢せることを叙す。
【一六】　尋思とは尋求伺察の義にして思惟すること。
【一七】　以下は師承を述ぶ、即ち師の無着の德を讃歎す。
【一八】　前後に非ずとは前後不出世の大德なりの意。
【一九】　大慈尊とは彌勒菩薩のこと。
【二〇】　無動とは不退位にあること、世間を出づるとは聖者の位に在るの意。
【二一】　大法光を放つ云云とは無着は彌勒菩薩に師事して法光定に入るが故なり。
【二二】　三摩地(Samādhi)。等持と譯す、定の七名の一。
【二三】　融心とは隔執の情の融和すること。
【二四】　利養とは名利供養なり即ち名利等世間の欲望を有せ、

攝大乘論釋

世親菩薩造
唐三藏法師玄奘奉詔譯

卷の第一

總標綱要分第一

[一、二]諸の破すべき所知障の翳闇は、　[三]其の所有を盡くして所有の如くし、
諸法の眞俗[四]理影の中に、　妄執競ひて異見を興す。
[五]斯に永へに諸の分別を離れたる　無垢淸淨の智光明に由りて
最勝なる三菩提を獲得し、　惑障幷びに[六]習を斷じて常住し、
[七]能く無功用にして十方に於て、　諸の有情の意の樂ふ所に隨つて
殊勝にして極めて廣大なる　[八]三種の解脫等の方便を開示し、
無分別にして大悲有るに由りて、　生死と涅槃と、倶に住せず、
妙慧と巧方便とを攝するに由りて　究竟至極して自他を利す。
[九]是の如きの世尊の等しく覺る所、　等しく開示する所の微妙の法を、
若し能く此に於て善く修行すれば、　必ず寂然たる甘露の迹を獲ん、
誹謗(する者)は決定して底無く　甚久にして無能なる大苦海に沒せん。
[一〇]學無學の僧の道果に居るものと、　普く勝れたる一切の所餘の僧とは、
[一一]善逝の無垢なる功德の河、　眞實に中に於て沐浴すれば、

【一】此の偈文は世親菩薩の歸敬の頌にして、三寶に歸敬し、師承を受けて、此の釋論を造る因緣を叙す、中に於て初の八偈は三寶に歸命を表す、其の中、初の四偈は佛德を擧ぐ。

【二】初の一偈は佛出世の因由を叙す、此に智障のみを擧げて煩惱障を擧げざるは異義邪解を斥けんが爲の造論の趣旨に基くものなるべし。

【三】「其の所有を盡くして、所有の如くす」とは次の句の眞俗理影に照應し、所有を盡くすは即ち眞諦の理、所有の如くすとは俗諦差別の事相に當る、陳譯には之を如理如量と譯せり。

【四】理影とは平等の理體と差別の事相なり、差別の事は實性なき假現なるが故に鏡中の影像の如しとの意を表はして影といふ。

【五】此の一偈は佛の斷惑證果を叙す。

【六】習とは惑障の習氣のこと。

【七】次の二偈は大智大悲の二德を明かし、不住道に住して二利究竟することを叙す。

【八】三種の解脫とは空、無相、無願の三解脫門をいふ。

【九】次の一偈は法寶の德を頌す。

目次

することが許されず荏苒遲滯してゐたが、而かも今日之を上梓するを得るに至つたのは、全く同僚安田一雄君が自ら進んで本國譯台本の草稿製作を引き受け終始一貫して努力せられた賜である、特に記して氏の不休の勞作を深く感謝する次第である

昭和八年一月十五日

譯者　衞藤卽應　識

も論本には異譯が四本あり、世親釋には三譯有つて比較對校することを得、難解の點を通ずることが出來た、獨り無性釋に至つては註解は勿論、異譯もない、加ふに釋文は異說を擧げて詳釋し可成り深い處まで論及してゐるので、世親釋に比して釋論自體が甚だ難解である、それで唯識論述記及び其の末疏を出來得る限り廣く涉獵し、其の引用文を參酌して啓發することを得た點が少くない、而かも尙不用意に讀下して思はざる誤解なきやを惧るるものである、希くは識者の示敎を得て之を訂正することを得るならば啻に譯者の甚幸のみではない。

一、本論の開題は異譯對校の上比較を試みたい希望をもつてゐるから、後の眞諦譯の方に附することにした、異譯對校については本書世親釋に於て、主として隋譯の參考すべき點を脚註に擧げたのは、其が玄奘譯と大體に於て一致し而かも意義の通じ易き點があるからではあるが、更にそれ以上の理由は隋譯は本國譯に洩れてゐるからである、從つて他の諸譯も一樣に參照したのであるが、其は本國譯に於て必要に應じて對比することが出來るのであるから之を省略したまでである、尙ほ脚註に隋譯といふは隋の笈多三藏譯の世親の釋論、陳譯といふは陳の眞諦三藏の釋論を指すのである。尙ほ玄奘譯には世親釋にも無性釋にも章段を分つてゐないのであるが、便宜上、隋譯に依つて章を分ち括孤內に章名を出して置いた、更に眞諦譯には細分してあるから之を參照せられたし。

一、譯者は曾て敎理史の研究に興味をもつてゐた頃、同一の無著世親の敎系が一方では、玄奘以前の眞諦等の舊譯に依つて地論や攝論の學派となつて、所謂一乘敎に融合し、他方では玄奘の再譯に依つて所謂三乘敎としての唯論宗となつて發展した其の分岐點を明了にする爲に、最も多く且つ主要なるものとして兩系統に共通に依用せられてゐる攝大乘論を中心として研究に着手したのであるが、中途にして迫られたる事情に依つて研究の方針を一轉した爲に之を中止してゐた、然るに本國譯に關係して再び本論に心を惹かれ、敢て自ら揣らず、これが國譯を擔當することになつたが、其の間健康不勝の爲に事を專らに

攝大乘論國譯凡例

一、一切經國譯當初の計畫では眞諦譯と玄奘譯の二種の論本と及び世親の釋論とを國譯することになつてゐて、無性の釋論は除かれてゐたのであるが、慈恩の成唯識論述記には世親釋よりも寧ろ無性釋の方を重用視して、攝論に關係ある箇處には主として無性釋が引證せられてゐるので、爾來無性の釋論は唯識論研究の必須の參考書として唯識學者の常に引用する所となつた、加之、瑜伽學派の主要なる論部たる攝大乘論の註釋として、世親釋以外に傳つてゐる唯一のものとして教學史上閑過することの出來ないものであるから、之を本國譯から除外することは甚だ遺憾に思ふたので、編輯者の諒解を得て豫定を變更し、論本だけの國譯は之を省略して其の代りとして無性釋を譯出することにした、蓋し世親及び無性の釋論はいづれも論と釋と會本となつてゐるから敢て論本だけを別出するの必要を認めない、又釋論を離れて論本だけを見る場合は殆んど無いと思ふたからである。但此の次に譯出する眞諦譯に於ては論本の文が餘りに切り過ぎて、處に依ると一句一句が釋文に依つて隔てられてゐるので、一貫した論本として之を讀まんとするには少からず不便と難澁とを感ずるのであるが、これは無性釋譯出の代償として忍ばねばならぬ。

一、此の卷には玄奘譯の世親釋と無性釋とを收め、眞諦譯は更に一卷として後に譯出することになつた。此の三本の中で初の玄奘譯の世親釋を中心として始終を通して詳細なる脚註を施し、他の二本は新に出でたる特殊なる語句のみを註解して、餘は之に讓る方針を取つたから、いづれを讀む場合にも玄奘譯の世親釋を參照せられんことを望む。

一、本論は教學史上主要なる論部であり、其の傳譯後支那日本の教學に影響する所多大なるに拘らず、今日まで單行本として一度も出版せられてゐないのは寧ろ不思議に思はれる、且つ寡聞にして未だ其の加點本もこれ有るを知らない、然るに幸に

瑜伽部 八

衞藤即應譯

國譯一切經

大東出版社藏版